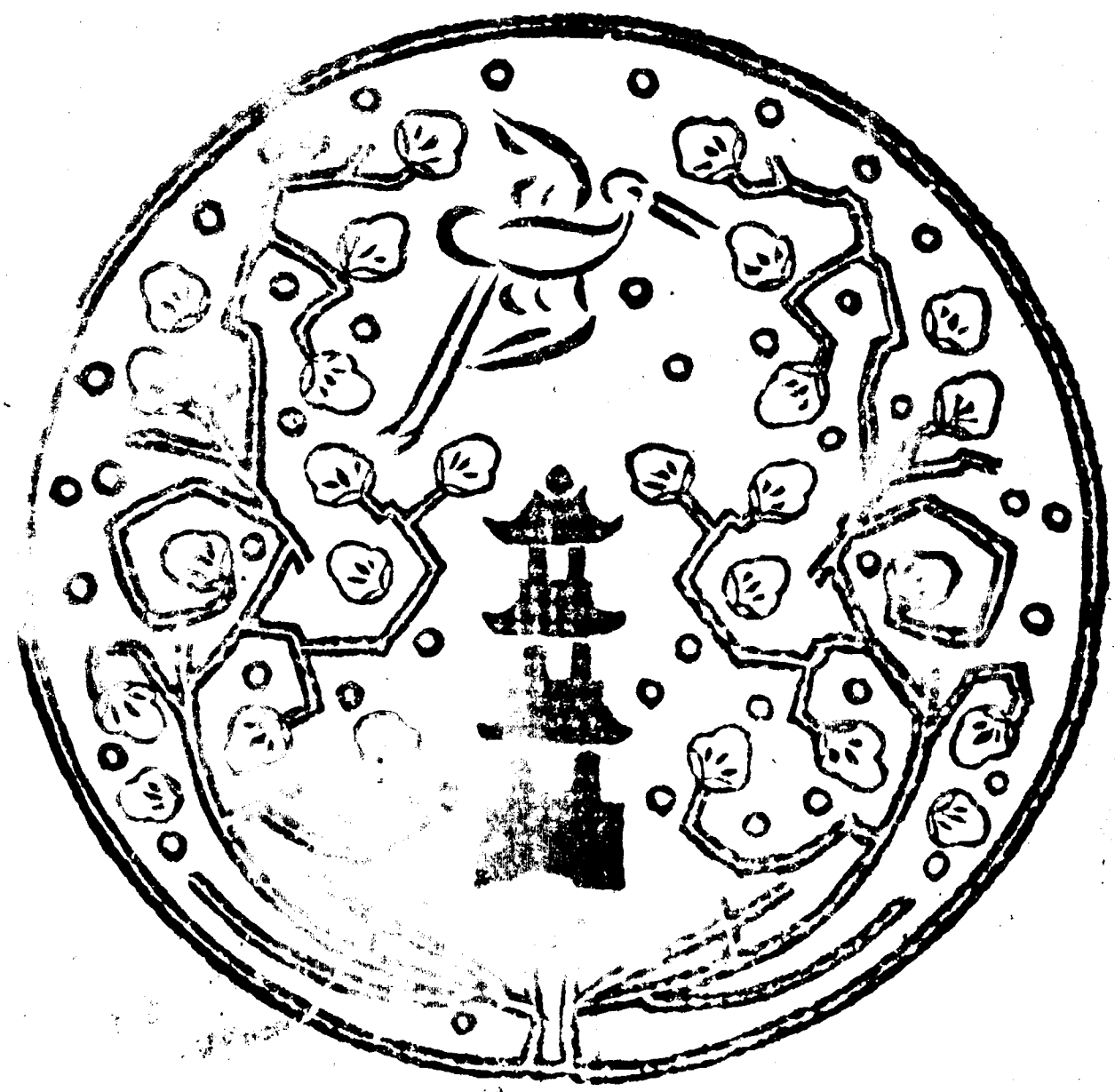


41.3.13

東 經 正 義
(卷下)

朝 鮮 問 題 講 演 集



自 山 究 社 藏 版
(鮮 滿 叢 書 才 五 卷)

049-6

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

8 JAPAN

080
929.1
K1.5

(2)

88
128
210

鮮滿叢書

第五卷

東經正義

細井肇譯解

朝鮮問題講演集

九月廿二日於神田青年會館
自由討究社主催

内鮮人の心性較覈 自由討究社長細井肇

講演 半島文化問題としての朝鮮 早稻田大學教授内ヶ崎作三郎

内容 世界の植民政策と朝鮮問題 代議 士永井柳太郎

誠なれば即ち明らかなり 代議 士島田三郎

細井肇譯解

東經正義
(下)

自由研究社藏版

東經正義下篇目次

第一章	歎道儒心急	一
第二章	筆法	七
第三章	八節	二
第四章	題書	二〇
第五章	咒文	二二
第六章	祝文	二四
第七章	和訣	二六
第八章	偶吟	二八
第九章	詠宵	三〇
第十章	絕句	三二
第十一章	座箴	三六
第十二章	訣	三八

東經正義下卷

第一章 歎道儒心急

降生四十年の春、道儒心急章を著した。それは當時、修道の儒が道味を知らず、常に急求の歎を有したので、一面これに示すと共に他面後世を戒めんが爲めであつた。此章は、内は四大節に分ち、又四大旨を有する。第一節は萬事如意で、道の字が其の主旨となり、第二節は同歸一理で、氣の字が其の主旨となり、第三節は自然有助で、心の字が其の主旨となり、第四節は好作仙縁で玄の字が其の主旨となつて居る。だから、萬事如意を知らうと思へば道の字について、同歸一理を知らうと思へば氣の字について、自然有助を知らうと思へば心の字について、好作仙縁を知らうと思へば玄の字について、夫れ／＼工夫を凝らすべきである。

山河大運。盡歸此道。

(註)。不億世界、山河の大運も悉く此の無極大道に歸する。

其源極深。其理甚遠。

(註)。其道の源を探らうとすれば深くして底無く、其道の理を究めやうとすれば遠くて限りが無い。

固我心柱。乃知道味。

(註)。我れみづから、我れの心柱を固めさへすれば、道の有味なることが知れる。

一念在茲。萬事如意。

(註)。一念道味あらば、萬事は意の如く受知することができる。

(疏)。太虚の間に昭々たる衆曜は、水、土の質ならざるはない。其の水、土が聚まつて山河をなして居るのであるから、これを不億世界といふ。今、不億世界の山河大運が悉く此の無極大道に歸して脱却したのであるから、其源を探らうと

すれば深くして底なく、其理を究めやうとすれば遠くて限りが無い。だから我れみづから我れの心柱を固め、然る後ち道味を知り、道味を知つて一念忘れざれば、萬事の知を如意に受ける。これは其心を守つた工である。

——(以上、章の第一節)——

消除渴氣。兒養淑氣。

(註)。舊染の渴氣を消除して、新化の淑氣を兒養する。(老子の貴接而不施も、孟子の勿助長も、みな、養氣の法である)

非徒心至。惟在正心。

(註)。但だこの心の至るのみではない、惟だ此の心定まるありて、正しくするにある。

隱々聰明。化出自然。

(註)。隠々たる聰明が内在して、不知不識の間に自然に化出する。

來頭百事。同歸一理。

(註)。來頭百般の事爲、永久に一理に同歸する。

(疏)。形は有生の舍、氣は有生の原である。身と氣とで、生を有しても、氣が身に化せざれば濁となる。(池水が停滯して濁となるやうなもの)だから、舊染の濁氣を消除し、新化の淑氣を兒養する。養氣の法は、但だ此心の至るのみではなく、此心の定まるあつて正しくするに在る。斯くすれば内在せる聰明が不知不識の間、自然に化出して一理に同歸する。(一たび氣化すれば永久に息まない)。これ其氣を正しくしたる工である。

——(以上、章の第二節)——

他人細過。勿論我心。

(註)。他人の瑣細な愆過は、心に懸けるな。

我心小慧。勿施於人。

(註)。我心の小發の智慧を、他人に及ぼすな。

如斯大道。勿誠小事。

(註)。無極の大道の前には、細小の事を誠としてはならぬ。

臨勳盡料。自然有助。

(註)。勳をなす毎に、上帝の功を料らば、自然に神明の助けがある。

(疏)。聖靈が入射して反射したのが心となる。だから、人は擧な同理の心を有し他理の心を有するものでない。他人の瑣細な愆過は我心に懸けてこれを論するやうなことをせず、我心の小發の智慧を他人に及ぼしてこれを施してはならぬ。無極の大道に至らんものは、細小の事を誠となすことなく、その勳を成せる時に臨むでも、上帝の功を思ひ盡さば、自然に神明の助けがある。これ其性に率ふの工である。

——(以上、章の第三節)——

風雲大手。隨其器局。

(註)。造化者の、呼んで風を生じ、捲いて雲を起す大手段は、其器に随つて出納し其局に従つて排鋪する。

玄機不露。勿爲心急。

(註)。玄妙の機は隠れて露はれぬが、心を急いでこれを求めるな。

功成他日。好作仙緣。

(註)。熱心に工夫を累めれば、他日おのづから擴徹大悟して能く靈界の眞縁を作る
ことができる。

(疏)。呼んで風を生じ、捲いて雲を起すは造化者の大手段である。大塊が大器をなすから、其器に随つて萬物を出し、太虚が大局をなすから、其局に従つて萬狀を排鋪する。人は其器を得て體魄をなし、人は其局を得て心基をなすものである。

然るに、玄妙の機は隠れて露はれぬ、吾人は心を急いでこれを求めてはならない。熱心に工夫を累めれば、他日おのづから擴徹大悟の域に達し、靈界の眞像を作ることができる。これは其教を受けた工である。――(以上、章の第四節)――

第二章 筆 法

庚申の年、道を得て以來、凡て靈符を書く時は、意思活潑、降筆の法これに従つて出でた。當時門徒の字畫を分かつた者も、命を承けて前書すれば、其字畫亦皆な神異ならざるはなかつた。そこで降生四十年春、筆法一章を著はした。蓋し、降靈の迹、在らざる處なく、明かならざる事ないが、特に降筆において著るしいものがある。筆法を以つて道法を明らかにしたのである。

而成於筆法。其理在於一心。

(註)。修め練つて降筆の法を成したが、其理は主一の心にある。

(疏)。筆法も道法も、修練して主一の心に至るので、其理は毫も異ならぬ。

象吾國之木局。數不失於三絕。

(註)。青邱寅木局の形に象どり、數を坤三絶の年に失はず。

(疏)。青邱は、尾、箕、分野、寅木の局に在る。庚申は西南坤宮三絶の數に在る。今、降筆の法は、此の青邱寅木局の形を象どつて生じ、數を坤三絶の年に失はずして得たものである。蓋し、作字はもとこれ象形であつて、木の曲なるものは必ず曲げ、直なるものは必らず直、然る後ち其法を成したものであるから、こゝに木局の形を象どつたのである。

生於斯。得於斯故。以爲先東方。

(註)。青邱の地に生じ庚申の年を得た、そこで東方を先とし西方を後ちとした。

(疏)。先に青邱の地に生じ、後ちに庚申の年に得たのであるから、道法は東方を先

にして西方を後ちにし、筆法は左を先にして右を後ちにした。(道法を以つて筆法を明らかにしたのである。)

愛人心之不同。無表裏於作制。

(註)。人心は其面の如く同じからざるは遺憾であるが、其呪を作り其文を制するに方つては、其間表裏も何も無い。

(疏)。受命得道以來、世人の心の不同を遺憾に思ひ、心界を洞開して其呪を作り其文を制した。道法に表裏の間隔なく筆法にも表裏の偏倚は無い。(こゝにも道法を以つて筆法を説いてある。)

安心正氣始畫、萬法在於一點。

(註)。其心を安閑にし其氣を正肅にして始めて畫すれば、萬畫の法皆な一點に在る。
(疏)。宇宙の間に一吾の微がある。一吾の微に一點の明がある。此の一點の明が宇宙に反照するのであるから、萬理皆な一點の明に従つて會來する。今、筆法は、

わが一點の明から出で、始めて一點を畫したのであるから、萬畫の法は又皆な此の一點の中から出で來たるのである。

前期柔於筆毫。磨墨數斗可也。

(註)。筆毫の柔らかなのを前以つて用意し、墨も數斗を磨つて豫備とするが能い。

(疏)。墨は潤筆の資である。徳は潤身の本である。其筆を潤はさうと思へば豫め多量の墨を磨つて置くやうに、身を潤はさうと思へば豫め多量の徳を修めねばならぬ。

擇紙厚而成字。法無違於大小。

(註)。紙は敦厚なのを擇ぶこと、法は字形の大小にかゝはらぬ。

(疏)。紙の敦厚なのが善く墨を受ける、だから神妙の筆法は其の字形に従つて成る。質の忠信なのが能く文を受ける、だから造化風雲の手段は其器に随つて成る。これは畢竟、肺腑を通じて志に違ふなく、大事小事の間に疑のあらざるものだ。

先始威而主正。形如泰山層巖。

(註)。先づ筆を下して畫を起す時は、威を以つて主とし、畫を成すに至つて、正を以つて主とすれば、起落露隱の氣象があつて字形は儼たる泰山の如きを致すであらう。

(疏)。筆法は先づ威を以つて始め、正を主として巖々たる高山の象を有すれば、書を學ぶ者は必らず皆な仰ぎ見る。道法は先づ魔を降じ、徳を主として巖々たる高山の象を有すれば、道を學ぶ者、仰ぎ見ざるはない。

第三章 八 節

降生四十年の冬、既に不然其然の歌を著はし、又、八節を以つて門人に和せしめた。其節に曰く

明の存する所を知らず
徳の存する所を知らず
命の存する所を知らず
道の存する所を知らず
誠の致す所を知らず
敬の爲す所を知らず
畏の爲す所を知らず
心の得失を知らず

である。當時和進する者多かつたが、合する所なかつたので、教祖みづから和して之れを示したものが前八節並びに後八節である。

不知明之所在。遠不求而修我。

(註)。明體の所在を知らぬならば、何も遠きに求めるには及ばぬ、われを修めよ。

(疏)。われは明體の所在である、われを捨て、遠きに求むるのは、明に背いて暗に向ふに外ならぬ。遠きに求めずしてわれを修めねばならぬ。

不知徳之所在。料吾身之化生。

(註)。明徳の所在を知らぬならば、それは身の化生であることを考へよ。

(疏)。身は明徳の所在である。化し生じてわが身を有するものである。明徳の所在を知らざる者は、わが身の化して生じたることを知らねばならぬ。

不知命之所在。顧吾心之明々。

(註)。明命の所在を知らぬならば、わが心の明を顧みて明らかなれ。

(疏)。心は明命の所在であるから、わが心の一點の明が、わが一線の命を成し、明にして又明に、恒に其明を存する。今、明命の所在を知らぬならば、必らずわが心の明を顧みて其明を存せねばならぬ。

不知道之所在。度吾信之一如。

(註)。明德の所在を知らぬならば、わが信の一如にして間なきを度れ。

(疏)。信は明德の所在である。わが身の化生が徳となるを知り、又、わが心の明々
が命となるを知つたのであるから、今、明道の所在を知らぬならば、必らず、
わが信の一如にして間なきを度らねばならぬ。(信は、修道の始條理である)

不知誠之所致。數吾心之不失。

(註)。誠の致す所を知らぬならば、わが心の不失——明體——を數へよ。

(疏)。誠は、人の道である。その誠を致さうと思へば工夫を積まねばならぬ。工夫
を積むのはわれの明體である。今、誠の致す所を知らぬならば、わが心の明體
を數へねばならぬ。

不知敬之所爲。暫不弛於慕仰。

(註)。みづから敬の爲す所を知らぬならば、暫くと雖も、われに存する明德を慕仰
することを弛めてはならぬ。

(疏)。敬は、必らずみづから敬することを先にする。故に、われみづからわれに存
する明德を慕仰すべきである。今、みづから敬の爲す所を知らぬならば、暫く
もわれに存する明德を慕仰することを弛めてはならぬ。

不知畏之所爲。念至公之無私。

(註)。みづから畏の爲す所を知らぬならば、われの至公無私なる明命に念を存せよ。

(疏)。畏は必らずみづから畏るゝことを先にする。故に、われみづからわれに存す
る明命を念ふべきである。今、みづから畏の爲す所を知らぬならば、われの至
公無私なる明命に念を存せねばならぬ。

不知心之得失。察用處之公私。

(註)。心が明道の得失を知らぬならば、公と私の用處を察せよ。

(疏)。心は、明道に依つておのづから存する。だから心を公に用ゆるものは明道を
得たもので、心を私に用ゆるものは明道を失つたものである。今、心が明道の

得失を知らぬならば、公と私の用處を察しねばならぬ。

蓋し、以上八節は、前八節に屬するもので、此中、上四節は、われに存する明體を求むるもの、下四節は、われに存する明體を修むるもの、是れ即ち下よりして上に達する工夫である。

不知明之所在。送余心於其地。

(註)。明體の本源の所在を知らぬならば、余の心を送つて明體の本源の所在するところに遡及せよ。

(疏)。宇宙の聖靈が明體の本源の所在である。靈が入射し、それが光りを返へして反照するの明がわれに在る。今、明體の本源の所在を知らぬならば、余の心を送つて明體の所在する地に溯及せしめねばならぬ。

以下三節は、みな、明體の本源が天に存するを示したものである。

不知德之所在。欲言浩而難言。

(註)。明德の本源の所在は、口で云はうとしても、浩々として言ひ難い。

(疏)。聖靈が明德本源の所在である。その徳を、斯世に植えて、化して生じて吾人ある。明德の本源の所在、浩々として一口には云ひ顯はせぬ。

不知命之所在。理杳然於授受

(註)。明命の本源の所在を知らぬならば、授と受の理は杳然たるものにある。

(疏)。聖靈が明命の本源の所在である。靈の入射は先天から授かつた明命で、心の反射は後天に受けたる明命である。今、明命の本源の所在を知らぬならば、授と受の理は杳然たるものになる。

不知道之所在。我爲我而非他。

(註)。明道の本源の所在を知らぬならば、われ、わが爲めにして他にあらざるものとなる。

(疏)。聖靈が明道の本源の所在であるから、わが明德は聖靈明道の中から出でたるもの、わが明命も、また、聖靈明道の中から出でたるものである。然らば、われ、わが爲めなる大本は、明道にあつて他の者にあらず。今若し明道の本源の所在を知らぬならば、われ、わが爲めなるものにして他にあらざるものとなる。

不知誠之所致。是自知而自怠

(註)。誠の致す所を知らぬならば、是れみづから、明體の本源の所在を知らながら、尙、或はみづから怠るものである。

(疏)。誠は天の道であるから、明體の本源が天にある。みづからその明體の本源の所在を知らながら、誠の致す所を知らぬとならば、是れみづから怠るものである。以下三節は誠について説いてある。

不知敬之所爲。恐吾心之寤寐。

(註)。敬天の所爲を知らぬならば、わが心、寤寐の間にも忘るゝあるかを恐れねば

ならぬ。

(疏)。われに存する明德の本源が天に在るのだから、われみづから天を敬して寤寐の間と雖も忘るゝあるかを恐れねばならぬ。

不知畏之所爲。立罪地而如罪。

(註)。畏の所爲を知らぬならば、罪なき地にありても有罪のやうに思はねばならぬ。
(疏)。われに存する明命の本源が天に在るのだから、われみづから天を畏れて罪なくも罪ある如くに畏れねばならぬ。

不知心之得失。在今思而昨非。

(註)。心の天に得て天に失ふを知らぬならば、昨非を悔ひて今是を思はねばならぬ。
(疏)。われに存する明道の本源が天にあるのだから、天に得るのもわれに在り、天に失ふのもわれにある。今、心の天に得て天に失ふを知らぬならば、昨非今是を思ふべきである。(これ乃ち道覺である)。

蓋し、以上が後八節である。此中上四節は、在天の明體を究め、下四節は在天の明體を想ふもの、即ち上よりして下に達するの工夫である。

第四章 題 書

降生四十年の冬、此の題書一章をものした。蓋し、當時の門徒中、仙痘（また道痘ともいふ）を病むものがあつた。この病一たび經過すれば、やがて渾身の濁氣を一掃し、幻骨脱胎して、仙家の洗髓者の如くなるを例とする。門徒、その端を知らず、頻りに來問するので、此の降書を題した。

得難求難。實是非難

（註）。人から得ないから得難く、人から求めないから求め難いと思ふが、人から得ないで之を得たり、人から求めないで之を求めたものは、實は難でも何でもない。

（疏）。福も徳も人から得やう、人から求めやうとするから難い。徳は天から得てわが心に有し、福も天から求めてわが身に有する以上、實は難でも何でもない。

心和氣和。以待春和。

（註）。わが心、わが氣が和らいで、天心の和するを待ち天氣の和するを待つ。

（疏）。人の心は天の心、人の氣は天の氣である。だから、みづから心を和らげ氣を和らげれば、天心和し天氣和すること、樂遊園の春光を待たずしておのづから至るやうなものだ。

第五章 呪 文

呪の義は至極天主を奉ずる大法である。其文は前後二句、合はせて二十一字である。前呪は天靈降臨の義となり（至氣今至四月米）後呪は上帝茲に在らせらるゝの義となる（侍天主令我長）

生無窮々々々事知。教祖の天賜を承けて以後常に此の呪文を誦した。だから當時弟子達がそれを先生呪文と稱したものである。此他に弟子呪文がある。前後二句合はせて二十一字である。前呪は特に降靈の願となり（至氣今至 願爲大降）後呪は特に忘れざるの詞となる。（侍天主造化定永 世不忘萬事知）凡て我が後學たるもの弟子呪文を誦するにおいて糸毫と雖も違つてはならぬ。

至氣今至四月來。

（註）。至氣とは渾元の一氣（渾元は濃厚なる貌）今至とは斯くて其氣が身に和するを知つたの謂。四月來とは天の時至れる恰かも四月であつたのを言ふ（降生三十七年庚申の四月をいふ）。

（疏）。太虛の間に充滿して缺くることなく、輪轉止まざるものが渾元の氣である。

渾元から分かれて諸氣（電磁等も亦渾元の中にある）となり、草木群動の物が化して形を成し、頼つて生活し、各々其性を得、各々其類を分かつ。今、言ふ所の至氣は即ち渾元中の最秀者（是れ乃ち淑氣）であつて、人の最秀の化生である。併し、能く至氣の至る

を感ずるのは、取りも直さず己れの誠力の致す所である。斯くてこそ大道の成功必らず其時あり、亦其人あると云へる。

侍天主令我長生、無窮無窮萬事知。

（註）。侍とは内に神靈あり外に氣化ありて能く靈と氣の離れざるを言ふ。主とは尊稱、即ち聖靈を指す。令我長生とは天がわれをして永久に其の精神を生活せしむるを言ふ。無窮無窮とは道體極まりなきが故に、其の進み進むこと、亦無窮にして無窮なるを言ふ。萬事知とは衆理、皆な會するを言ふ。

（疏）。字の大能妙を聖靈と言ひ、字の大勢力を元氣と言ひ、字の大體魄を元質と言ふ。質を以つて造り氣を以つて化するが、此の造と此の化が形なれど迹あり、一身の上に、外には氣化があり内には降話がある。是れは靈と氣との相違が相背かざる爲めである。無極の大圈は太虛にして、無極の正軋と是れ一身である。太虛から一身に入射するは天の授くる所以。一身から太虛に反射するは人

が受ける所以である。斯くて運啓き時至つて、其命を得たから、そこで、わが過去に溯り見ればわれは無窮であり、更に未來に推及して見てもわれは無窮である。して見れば萬惑おのづから罷み、衆理皆な集まると云はねばならぬ。

至氣今至願爲大降。

(註)。上篇論學文に詳述して置いた。

侍天主造化定永世不忘萬事知。

(註)。上篇論學文に詳述して置いた。

第六章 祝文

教祖が法を定め徳を布くとき、必らず入道の一人をして天の禮を奉行せしめて此の祝辭をとなへた。蓋し此の祝文の主旨は愚夫愚婦が蓋載の間に生じ光熱の下に居つ

て而かも靈鑑昭々として茲に存するを知らざる故、入道の時に此の祝辭を以つて天主聖靈に告げ、前過を懺悔し更に來果を修めて永侍を盟と爲し願ふ所を祝と爲したるものである。

生居朝鮮、忝處人倫、叩感天地蓋載之恩、荷蒙日月照臨之德、未曉歸眞之路、久沈苦海、心多忘失、今茲 聖世、道覺先生、懺悔從前之過、願隨一切之善、永侍不忘、道有心學、幾至修煉、今以吉朝良辰、淨潔道場、謹以清酌庶需、奉請尙 饗。

(註)。生居朝鮮とは其の祭を行ふ人の生居の地に隨ひ稱ふべきもの、忝處人倫とは人生の倫序に忝處するを言ふ。叩感天地蓋載之恩とは、天高くして掩ひ、地厚くして載せ、其間に在つて其の恩を叩感するを言ふ。荷蒙日月照臨之德とは日月の光熱が蒼空に臨照し其下に在つて其徳を蒙るを言ふ。未曉歸眞之路とは天主造化の眞跡を覺醒せざるを言ふ。久沈苦海とは人間の苦海に久しく沈み居たるを言ふ。心多忘失とは其の我れ我が爲めの大本を忘れて道の所在を知らざりし

を言ふ。今茲 聖世とは今、茲に天主聖靈が(聖靈は天主の心)降臨する聖世なるを言ふ。道覺先生とは道覺が先きに感じて生じたるを言ふ。懺悔従前之過とは従前の忘失の過を懺悔するを言ふ。願隨一切之善とは天主聖靈の一切の善に隨ふことを願ふを言ふ。永侍不忘とは永世、侍して忘れざることを言ふ。道有心學とは道が其の知の心學を言受けたることのあるを言ふ。幾至修煉とは修煉の境に至ることを庶幾するを言ふ。今以吉朝良辰とは今、祭を行ふ吉朝良辰なるを言ふ。淨潔道場とは道場を灑掃して淨潔なるを言ふ。謹以清酌庶需とは、謹んで清水の酌と庶羞の需とを以つてするを云ふ。奉請尙饗とは天主聖靈の饗せられんことを願ひ奉るを言ふ。

(疏)。此の祝辭の義は、吾人が斯に生じ斯に居して人生の倫序に忝處し、天地蓋載の恩に感ずることあり、又其の日月照臨の德を蒙むるも猶ほ天主造化の眞跡を悟らず、久しく人間の苦海に沈みて此の我れ我が爲めの大本を忘れて道の所在

を知らなかつたが、幸ひにも今此の天主降靈の聖世に大道の靈覺が先きに感じて以つて生じ、従前忘失の過を懺悔し、天主聖靈の一切の善に隨ふことを願ひ、永侍して忘れざるべく、且つ大道が知の心學を受けたることありて、惟だ修煉の地に至ることを希望して已まぬ。今、致祭の吉朝良辰、道場を淨潔し、謹んで清水の酌と庶羞の需を以つて天主聖靈の饗を奉請する。是れ永侍の重盟であつて、修道の定法である。

布德式に入道を願ふ者をして、先きに初學呪文爲天主願我情永世不忘萬事宜の十三字を誦せしめ、致祭の時に及んで此の祝辭を告げ、後ちには降靈呪文至氣今至願爲大降の八字呪を先誦し、次に侍天主造化定永世不忘萬事知を誦し、初學呪文はここに至つて停誦する。是れ道法の順序であり、この呪文は二十一字に限らるゝ。

第七章 和 訣

降生三十九年（壬戌）冬十一月九日、丈席を興海郡松谷里に移定した。此夜里中の冠童が齊會した。童子を召して書法を試みたが、一人も字を成し得るものはなかった。少頃して降話の教があり、『汝、しばらくこれを（書法を試みることを）止めよ、従つてまさに筆を賜ふべし』とて、天主が訣を降し、方々谷々行々盡と曰はれた。教祖これに和して水々山々箇々和と應へ、斯くして唱和數十聯句に至つた。これ即ち和訣である。蓋し、主天觀ともいふべきもの。

方々谷谷行行盡。水水山山箇箇知。

（註）。方々谷谷行行盡とは遠近淺深行かざる處なきを謂ふ。水水山山箇箇知とは方々谷谷知らざる所なきを言ふ。

（疏）。方々とは遠近である。谷谷とは淺深である。遠近淺深は六合である（上下四方を六合とふ）。六合の中に元氣が充滿して洽からざる處なく、方方に皆な山あり谷谷に皆な水あり。是れ其の衆質である。（水土は衆質の所在）衆質の上に聖靈照臨して宰らざる所ない。此の訣は即ち堪輿の成道である。（茫々堪輿を俯仰すれば無垠である）内句は聖靈が氣化の道を止めざる所以。外句は衆質が聖靈の徳を離れざる所以である。

松松栢栢青青立。枝枝葉葉萬萬節。

（註）。松松栢栢青青立とは林々鬱々の狀、枝枝葉葉萬萬節とは無窮の葉を横に生じ無窮の節を縦に生ずるを言ふ。

（疏）。松栢は、新葉開き舊葉落ちて鬱々として常に青きものである。だから人世の子子相承け族族相聚まるもの、松栢の茂げるやうだ。且つ萬物の生生相傳ふるはおのづから造化の心を得るものである。だから世界の林々鬱々なるもの各々羣分の形を有する。其の枝葉の横に生ずる所のは即ち族々相聚まるもの、

其の節の縦に生ずるものは即ち子子相承くるものである。此の訣は萬狀の繁茂を云つたもの、内句は氣化が萬狀を繁殖する所以、外句は萬狀の氣化移らざる所以を云つてある。

老鶴生子布天下。飛來飛去慕仰極。

(註)。老鶴生子布天下とは聖靈が此の衆生を生んで天下に布けるを謂ふ。飛來飛去慕仰極とは化來化去、其本移らざるを言ふ。

(疏)。宇宙聖靈が胚胎の母となり、此の衆生を生んで天下に布いた。そこで吾人が其の最靈を得て聖靈の系統となつたものである。且つ衆生の化來化去は皆な是れ靈界であるから、自然の慕仰あつて其本は移らない。此の訣は即ち靈系の繁殖ともいふべく、内句は聖靈が羣靈を化する所以、外句は衆生が永世を受知する所以を説いてある。

運兮運兮得否時云時云覺者。

(註)。運兮運兮得否とは其運あつて運兮運兮を得るや否やを謂ふ。時云時云覺者とは其時を知つて時云時云を悟るものなるを言ふ。

(疏)。宇の空間に循環息まざるもの、これを運と謂ふ。この運が世に在つて世運となり、身に在りて身運となる。世が其運を得て興り、身が其運を得て通する。しかし、運はおのづから來たるものであつて人の求めて得る所のものではない。且つ宙の古今迭代の休息なかりしものを時と謂ふ。春生秋落は草木の時である。寒蟄暖振は蟲蛇の時である。萬物は各々時を有するが、時の至ることあるは人の悟り難き所である。此の訣は即ち大道が運ありて時あるを云つたものである。内句は聖靈が降臨する所以、外句は生靈が返照する所以を説いてある。

鳳兮鳳兮賢者。河兮河兮聖人。

(註)。鳳兮鳳兮は賢者に對して河兮河兮は聖人に對して咏歎したものである。

(疏)。昔、鳳鳥が多かつた。黃帝の時、鳳が阿閼に巢を造り、虞舜の時鳳凰が來儀

し、西周の時鳳が岐山で鳴いたといふので、春秋の時に至り、孔子が鳳鳥至らすの歎を發した。此の鳳兮鳳兮なるものは賢人を得るは容易ならざるを云つたものである。又黃河の源は沮洳を爲し、沙淤が混流して常に黃濁なので黃河と稱するのであるが、それに懸けて、聖人の生は黃河の清の如しと云ふ。今、此の河兮河兮は聖人出づる容易ならざるを云つたものである。此の訣は運兮運兮得否の義であり、内句は運が人に遇ふ所以、外句は人が運を待つ所以を説いてある。

春宮桃李天天兮。志士男兒樂樂哉。

〔註〕。春宮桃李天天兮とは玄機の長春に物華の丰茸なるを謂ふ。志士男兒樂樂哉とは志士男兒が意を得て樂又樂なるを言ふ。

〔疏〕。玄機が萬物を化出して次第に開發するので桃樹は桃花を發し、李樹は李花を發して、物々形々が各々其類を傳へる。是れが玄機の長春である。今、志士男兒が玄機の春色を觀て自得する所あらば、安んぞ長樂を得ざらん。此の訣は

時云時云覺者の義。内句は時の至るを外句は其時の至るを知りたるを説いて居る。

萬壑千峯高高兮。一登二登小小吟。

〔註〕。萬壑千峯高々兮とは壑々轉深峯々轉尖の高々山を謂ふ。一登二登小小吟とは次第に登り登つて、次第に吟あるを言ふ。

〔疏〕。大道は山の壑々轉深峯々轉尖して其の高々の狀を成せるやうなものである。且つ修道は必らず登山の如く、一峯から二峯に登り二峯から三峯に登り、次第に登り登つて行く。其の一峯では一峯の眞境を吟じ、二峯では二峯の眞境を吟じ、峯壑重疊して千萬に至り遂に上頂に達する。此の訣は道法がおのづから順序を有するを云つたもの。内句は聖靈がおのづから巍々の狀を有する所以、外句は吾人が孜々の誠息まざる所以を説いたものである。

明明其運各各明。同同學味念念同。

(註)。明明其運各各明とは昭々の大運が各々其時あるを謂ふ。同同學味念念同とは一般の學味が一念茲に存するを言ふ。

(疏)。昭々たる大運は各々其時がある。鳳鳥至つて賢者出で、河水清うして聖人顯はる。一般の學味も又一念茲に存するが故に、春宮桃李はおのづから天々の態を有し萬壑千峯はおのづから高々の狀を具へ、春を賞するもの皆な樂々の意を有し登山するもの皆な小々の吟をなすのである。此の訣は人は各々運を異にするも、道味は相同じきを云つてある。内句は運は一なるも時により各々明らかなるを言ひ、外句は道味同じくとも知を受くる、たゞ一の聖靈に在るを説いて居る。

萬年技上花千朶。四海雲中月一鑑。

(註)。萬年枝上花千朶とは萬世長春の枝上に花の千朶を發したるを謂ふ。四海雲中月一鑑とは四海雲掩の中おのづから一鑑の月の存するを言ふ。

(疏)。萬年枝は花木の名で、千朶の花は其の技上に發するものであるから、つまり

玄機の長春が萬世一本から千態萬狀の繁華を現世に成せるを、指さしたものである。且つ宇内物質交錯の中、おのづから聖靈の照臨するあつて四海雲掩の中また、おのづから一鑑の月を存すると同じきものだといふのである。此の訣は聖靈造化は人の見難き所だといふ意。内句は聖靈造化中の人生觀で、外句は人生永世中の聖靈觀である。

登樓人如鶴背仙。泛舟馬若天上龍。

(註)。登樓人如鶴背仙とは、登樓人の空中にあること鶴背仙の空中にあるが如きを謂ふ。泛舟馬若天上龍とは泛舟馬の水中の天上に在ること天上龍の水上の天上に在るが如きを言ふ。

(疏)。登樓人は樓に登りて空に在り、鶴背仙は鶴に騎りて空に在る。空に在るは則ち一。且つ舟馬は水中の天上に在り、上龍は水上の天上に在る。天上に在るは則ち一、此の訣は、運を得て時を覺れば、人皆な聖賢となり得るの意。内句は、

聖靈の人世を喚醒したる所以、外句は覺者の靈界の運に隨ふ所以を説いたものである。

人無孔子意如同。書非萬卷志能大。

(註)。人無孔子意如同とは、人は孔子の感を有せずとも其の意に於いては異なるところなきを謂ふ。書非萬卷志能大とは書は多く有せずとも能く大道に志し得ることを言ふ。

(疏)。孔夫子の以前に孔子の如き人はなかつた。だから經に曰く『自生民以來未有盛於孔子』とある。以後に又孔子の如き人がないので、曰く『千五百年無孔子』とある。蓋し孔子は當時詩書、禮易、春秋の修正を試みた。書多からざるにあらざるも、唯だ天に禱るのみで人能く之れを知らなかつた。子曰く『丘之禱久矣』と。今、人同じからずとも意は同じである。三七字を用ゐて能く大道に志した。此の訣は後定の定數を云つたもの、内句は天主の成功は其人に遇ふにあ

り、外句は大道の成功は其の法を受くるにあると謂ふ意味を説いて居る。

——(以上、章の第一節)——

片片飛飛兮、紅花之紅耶。

(註)。片片飛飛兮とは落花の片々として飛ぶを謂ふ。紅花之紅耶とは紅花の花紅なるは花の紅なる爲めかを言ふ。

(疏)。花片は草木の英華である。氣發して榮え、氣收まつて落つる。且つ晝間見得るところの物色が暗夜に見ることのできぬのは何故か。蓋し、太陽の光線は萬物を照らし、萬物は其の光線を反射して色を成すのである。然らば、花紅なるものも、花の紅むとは云へぬ。此の訣は物色も亦受くる所がある。玄機は萬物を化生し、萬物は玄機から生を被むるの意を説いたものである。

枝枝發發兮綠樹之綠耶。

(註)。枝々發々兮とは、樹葉の枝々發々を謂ふ。綠樹之綠耶とは樹綠なるものは樹綠なる爲めかを言ふ。

(疏)。樹木の芳英は盡きても枝葉は繁茂する。此の時に當つては、千紅の紅なるもの悉く褪去して唯だ萬綠の綠あるのみ。且つ樹の綠をなすも亦是れ日光の反射である。然らば樹綠なるもの豈樹の綠なりと云ふべけんや。此の訣は物色おのづから變遷あり、玄機萬物を化育する所以と、物の玄機に育せらるる所以を説いたものである。

霏霏紛紛兮白雲之白耶。

(註)。霏霏紛紛兮とは雪雨の霏々紛々たるを謂ふ。白雪之白耶とは雪の白なるものは雪の白きが爲めなるかを言ふ。

(疏)。雪は雨氣の冷氣に遇つて凝結し、六角の花形を爲したる者である。蓋し、萬物はおのづから生長收藏の時を有する。太陽の萬物を照して千態萬狀の色を露

露出したる後ら其の色彩を收合する。(衆彩を收合して開放する者これを白といふ)此の時に當つて綠の

綠たるもの既に地を掃ひ、惟だ雪花の霏々紛々あるのみ。且つ雪の白きは日光の反射による色である。然らば雪の白なるものもこれを雪其のものの白なりとは云へぬ。此訣は、物色亦其本に歸るを云つたものである。玄機は萬物を開成する所以、物は玄機によりて成れる所以を説いたものである。

浩浩茫茫兮、清江之清耶。

(註)。浩浩茫茫とは江水の浩々茫々。清江之清耶とは江の清きもの江其のものの清きなりやの意。

(疏)。水は無色透明であるから其體は常に清い。蓋し雪は消えて水と爲り、水は聚まつて江と爲る。白が無色の理由は既に述べた。水の清きは色の空である。然らば江の清きを江其のものの清きと云ふことはできぬ。此訣は、物色は本と是れ空である。玄機は萬物を包藏するを以つて物は玄機に藏さるるものなりとの

意を述べたものである。

泛泛桂棹兮、波不興沙十里。

(註)。泛泛桂棹兮とは積水に泛々たる桂棹を謂ふ。波不興沙十里とは水波穩靜にして眺望沙十里に過ぎざるを言ふ。

(疏)。此の地球の大氣中に在るのは恰も桂棹の積水に泛べるが如きものである。且つ大氣流行の中にあつて地球は之に隨ふて浮んでは居るが、大氣の沖漠なると水波の興らざるが如き爲め、地球の其の中に在つて運轉せるを知らない。又、衆質を有する者、平沙の廣漠なるが如けれども、舟中の眺望は十里に過ぎない。従つて其の衆多を知らないで居る。此訣は世人の見る所はおのづから限界がある。一運の造る所以、世に前後彼此の還元の理あるを説いたものである。

路遊閒談兮、月山東風北時。

(註)。路遊閒談兮とは、西北に優遊して各所を尋問閒談したことを。月山東風北時と

は、月は山の東に在り風は北方より起る時の意。

(疏)。壬戌の年は、其の方向を以つて言へば西北に當る。天靈が西北に優遊して各所を尋問閒談した。且つ月は山の東に在つて其の光り先づ昇りて輝やく、聖靈の出現する以前、既に其の光明あることを見るべきである。風北方から來たつて一陽先づめぐる。至氣の至るや、其の形容し難きこと又これと同じである。此訣は、靈明の氣至つて古今に通ずる。今日の降話有るは靈感して氣化したる所以なりとの意。

泰山之峙峙兮、夫子登臨何時。

(註)。泰山之峙峙兮とは、泰山の氣象峙々たるを謂ふ。夫子登臨何時とは孔夫子の登臨果して何の時なりやの意。

(疏)。高きに登る者は、其の地位に隨つて眼界が擴大する。道高き地位は山高き氣象のやうなものである。孔夫子の東山に登つて魯を小なりとしたのは東山甚だ

高からざるも、魯國の地皆な其の下に在つて、俯瞰することができるからである。泰山に登つて天下を小なりとしたのは、泰山甚だ高く九州の地皆な其下に在つて俯瞰することができるからである。然し孔夫子の泰山の登臨は果して何の時であらうかとの意。此訣は先天の定數たるや、道體おのづから高く先天一太極の心集まつて大を成したを説いたものである。

清風之徐徐兮、五柳先生覺非。

(註)。清風之徐徐兮とは清風の吹來徐々たるを謂ふ。五柳先生覺非とは五柳先生の今は昨非を覺ゆの意。

(疏)。清風は氣の爽なるもの、爽氣は肺腑に通じて眞を養ふ。五柳先生(陶潛)は北牕清風に臥して今は昨非の覺を有したと傳へられる。果して然らば五柳先生は必らず得る所あり養ふ所あつて始めて然るを得たのである。此訣は善く淑氣を養ひ、無爲化の中に於いて氣化の感を有したるものをいふ。

清江之浩浩兮、蘇子與客風流。

(註)。清江之浩浩兮とは長江の無窮にして浩々たるを謂ふ。蘇子與客風流とは、蘇子、客と與に舟を浮べて赤壁の下に遊んだこと。

(疏)。光陰の流れて息まざるは長江の浩々無窮なるが如きものである。蘇子(蘇軾)は二客と與に舟を泛べて赤壁の下に遊んだ時、其賦に『客亦知夫水與月乎』『逝者——如斯而未嘗往也』『盈虛者如彼而卒莫消長也』と云ひ又『哀吾生之須臾』『羨長江之無窮』と云つて居る。然らば、蘇子赤壁の遊は一時の風流に托して其の平生の曠感を賦したるものである。此訣は善く色相を觀れば無盡藏中物質の理に通ずるものあるを説いたものである。

池塘之深深兮、是濂溪之所樂。

(註)。池塘之深深兮とは池塘深ふして底を見ざるをいひ、是濂溪之所樂とはこれ濂溪樂と爲す所以の意。

(疏)。濂溪の樂む所とは天を樂むことで人の水を樂むものと趣を異にする。朱晦菴は濂溪の樂道發源の處深しと云ひ、方塘詩を作つて其意を明らかにした。此訣は樂觀の心體が太極圈中に其の性理を得たるものなるを説いたものである。

綠竹之綠綠兮、爲君子之非俗。

(註)。綠竹之綠綠とは綠竹の常綠を謂ふ。爲君子之非俗とは君子は世俗に染まざるを言ふ。

(疏)。綠竹の葉勁くして霜雪も能く之を凋萎する能はざるが故に、樹中の君子と云はれる。君子の志固くして世俗も能く染汚する能はざるが故に人中の綠竹と呼ばれる。此訣は君子が俗を遠ざかるに非らずして、俗が君子から遠ざかるのである。萬古の風霜を閱し來たれば變せざるものは靈である、物質は變ずるものである。

青松之青青兮洗耳處士爲友。

(註)。青松之青青兮とは青松の四時常青を謂ふ。洗耳處士爲友とは洗耳處士の堪輿の友たるを言ふ。

(疏)。青松の幹高くして落々、而かも常春なるが故に百木の長者と云はれる。洗耳處士は古の許由のこと。或者曰く、堯將さに天下を許由に譲らむとしたら許由は潁川の水に耳を洗つたと云ふ。人中の洗耳處士と樹中の青松とは堪輿の友である。此訣は世の處士を嫌ふにあらず處士みづから世を厭ふのである。獨り萬世長春を保ちて露現せざるものは靈である。無極圈のいづれにか眞を尋ねべきであらう。

明月之明明兮、曰太白之所抱。

(註)。明月之明明兮とは水中明月之分明なるを謂ふ。曰太白之所抱とは太白の抱く所の意。

(疏)。水中には本來月體無く、水上の月光が反照したるものである。太白は(李白の

(字)水中の月を見て之を抱かんと欲して水に入つたといふ。蓋し、世界の状態は水中に月影有るが如きものだ。所謂色彩は月光の反射で、活動は元氣の反射である。又、所謂知覺なるものは聖靈の反射である。世人は單に其の反射の現状を見るのみで入射の本源を察することができぬ。是れ太白の抱く所といふべし。此訣は、世人は我の我たる大本を知らない。明の入射し又反射する所以は靈である。

耳得爲聲目色、盡是閒談古今。

(註)。耳得爲聲目色とは耳に得て聲となり目に寓して色となるを謂ふ。盡是閒談古今とは、古も今も、盡く是れ路遊閒談に外ならぬの意。

(疏)。聲は靜裏に起つて靜裏に歸るから、靜裏の天にはおのづから聲がある。且つ色は暗中に發して暗中に歸るから、暗中の天にはおのづから色がある。そしてこれが世人の耳に得て聲となり、目に寓して色となる。だから今に至る聖賢君

子達人隱士は、各々聞くところあり見るところあつたが、是れ無聲に聞き無色に見るにあらず。論談此に及べば、亦是れ閒中の一事である。此訣は世人が靈界の消息を知らず、乃ち其の恃むところは聲色である。先天の事理と後天の事理とは悉く聖靈降話の中に有るを説いたものである。

——(以上、章の第二節)——

萬里白雪紛紛兮、千山歸鳥飛飛絕。

(註)。萬里白雪紛紛兮とは萬里長空に白雪紛々たるを謂ひ、千山歸鳥飛飛絶とは千山の尋巢に歸鳥の飛々絶なるを謂ふ。

(疏)。宇宙は曠漠無際にして物質は雜錯分ち難い。是れ萬里長空に白雪紛々たるが如く上下を辨じない。且つ世界の有域は、千山の各々峙つが如く、生靈其間に出で、物色に蔽はれ其本を知らぬ。是れ雪中歸鳥の其巢を知らざるが如くで

ある。此訣は即ち世人が靈界の所在を知らざるをいふ。

東山欲登明明兮、西峯何事遮遮路。

(註)。東山欲登明明兮とは日月將さに東山に登らむとするとき其の明明たるを謂ふ。西峯何事遮遮路とは西峯は何事ぞ其の行路を遮ざり復た遮ざるやの意。

(疏)。東山は西山の對立である。欲登明々は、日月の將さに昇らんとする貌。蓋し靈光の照臨は世界において日月の光明が東山に登らんと欲する者の如くである。西峯は東峯の對立である。乃ち物質雜錯して靈光を掩蔽すること西峯の其の日月の行路を遮ざり復た遮ざるが如くである。此訣は物質の雜錯なること亦靈界と擇ばないのを説いたものである。

——(以上、章の第三節)——

第八章 偶 吟

偶吟は偶然の感想を吟じたもの。蓋し敎祖平日の所著多からざるにあらざるも爾來屢ば風霜を経て散失多く、惟だ幸に東經所載の幾篇及び龍潭詞(鮮文)幾篇のみ傳はつて居る。今茲に、其の偶吟諸篇を選擇綜合して一章と爲したもの、此章は主人觀である。

南辰圓滿北河回、大道如天脫却灰。

(註)。南辰圓滿北河回とは南斗の辰、圓滿成歲して北河を貫き回ぐるを言ふ。大道

如天脫却灰とは、雲を捲く青天に脫却灰の如きを言ふ。

(疏)。舊天文學の南辰は、南斗星(南斗六箇星は斗の如きもの)は二十八宿の一で、北河は銀河であ

る。南斗第六一箇星は銀河を貫入するもの(斗は河邊に在り、柄は河間に在る)、冬至に太陽が南斗に

在つて毎日左旋一周を爲し、太陽は斗星に及ばざること一度であるから三百六十五日三時餘に至つて更に南斗と與に相逢ふてこゝに一週と爲る。(天經の三百六十五度四

分度の一は太陽の右退一年の數に相當する) 即ち南辰の貫河拱北して旋轉圓滿一歲を遂成するものであ

る。宇宙の今日あるは、南辱の貫河幾千萬の劫灰たるを知らず。大道は今乃ち脱却した。是れ雪開いて天見はるゝ如きである。即ち吾道も已に許多の歲月を経て今乃ち不顯なるものとなつた。（教祖は海月先師を命じて北接道主と爲した。訓に曰く道北接に在り吾亦此れより北す。南辰貫河と大

道脱却の理數と亦共に見るべきである）

鏡投萬里眸先覺、月上三更意忽開。

（註）。鏡投萬里眸先覺とは惟一の明鑑が萬里を投來して眸先づ覺めたるを言ふ。月上三更意忽開とは寒空に圓魄が三更に上つて意忽ち開くを言ふ。

（疏）。天の明鑑を有すること、即ち其の眸子の直ちに千萬里の外に照り、且つ人の意思を有すること月の反照の如く、能く千萬事の多きを知るをいふ。此れ天靈の入射して心靈に反射するを云つたものである。

何人得雨能生活、一世從風任去來。

（註）。何人得雨能生活とは何人が其の化澤を得て能く生活するの意。一世從風任去

來とは、一世其の運回に従ふて去來するに任ずるかをいふ。

（疏）。吾人の生活は皆な聖靈入射反射の化澤であるが、其の化澤を得て能く其の精神を永久に體得生活する者は幾人も無い。且つ世とは其の生を有するものの謂であるが、其の氣運の循環に随ひ去來がある。此れ即ち人世と變遷して精神は永生なる所以である。

百疊塵埃吾欲滌、飄然騎馬向仙臺。

（註）。百疊塵埃吾欲滌とは百疊の塵埃に居つて將さに百疊の塵埃を出でんとするを謂ふ。飄然騎馬向仙臺とは遊魂の飄然羽化して仙臺に向ふを言ふ。

（疏）。大道は既に千萬劫の積灰を脱し、今、乃ち不顯なるが故に一身能く百疊の塵埃に出づる。且つ聖靈の群靈を化生すること恰かも老鶴の子鶴を生むが如くであるから、遊魂は飄然羽化して天靈の臺に向ふのである。此れ即ち心靈の天靈を慕仰するを説いたものである。

——（以上、章の第一節）——

清宵月明無他意、好笑好言古來風。

(註)。清宵月明無他意とは夜氣清く月影圓くして意思の一定なるを言ふ。好笑好言古來風とは惟だ是れ自古來今の靈風たるを言ふ。

(疏)。夜氣清しとは至氣の有化にして(孟子の所謂牛山の夜氣がそれである)、月影とは心月の反照、そこで意思が一定して、念ひ常に茲に在るをいふ。蓋し世界の進化は其の由來深遠である、今日に至り清明躬に在つて好笑好言を爲すこと惟だ是れ自古至今、不息の靈風と云はねばならぬ。此れ即ち主心觀である。

人生世間有何得、問道今日授與受。

(註)。人生世間有何得とは人生世間に抑も何の所得の意。問道今日授與受とは道の授受今日如何を借問するの意。

(疏)。自古至今の吾人は何の所得有つて世間に生まれたりや。是れ未だ知るべから

ざる所のもの、且つ道たるもの亦何方より授かり且つ受けたりや。是れ問題である。

有理其中姑未覺、志在賢門必我同。

(註)。有理其中姑未覺とは人と道との間に自から其理あれど未だ覺らずの意。志在賢門必我同とは賢哲の門にあるものは必らず皆な我と同じ思想を有するの意。

(疏)。人は如何にして人となり道は如何にして道と爲つたか。其中に必らず然らしむる所以の理があるけれど心容易に之を覺らない。自古至今賢哲の門に志ある者は必らず皆なさくらむと欲したけれど未だ覺ることなくて居る。

天生萬民道又生、各有氣象吾不知。

(註)。天生萬民道又生とは天は萬民を生じ又道を生じたるを云ふ。各有氣象吾不知とは民は民の氣象有り道は道の氣象を有するを吾は知らぬの意。

(疏)。民も道もおのづから然らしむ所以の理があるけれど世人は只だ天萬民を生じ

又道を生ずといふ。其の民は民の氣象あり道は道の氣象があるけれど吾は之を知らずに居る。此れ即ち道民に離れず、民みづから道に離るるものである。

通于肺腑無違志、大小事間疑不在。

(註)。通于肺腑無違志とは氣化が肺腑に通じ、志願して降話を受くるを言ふ。大小事間疑不在とは大小事の間に疑ふの餘地なき意。

(疏)。外に氣化の神有り、内に降話の教有ることは唯だ吾人所願の志に在るのみ。蓋し、道及び民は一に是れ靈界の事である。故に民の生は即ち道の生であつて民の氣象あるは即ち道の氣象あるものである。然らば則ち道及び民の間に(即ち大小事)復た何の疑も存しない。即ち道及び民は本より二致ではない。

馬上寒食非故地、欲歸吾家友昔事。

(註)。馬上寒食非故地とは馬上の寒食は客路であつて故郷の地ではないの意。欲歸吾家友昔事とは歸つて吾家友徳の昔事を見むと欲するを言ふ。

(疏)。馬上寒食は白駒の光陰である。だからわが心の人界に馳すること亦一過客の逆旅に外ならぬ。是れ靈界の本地ではない。蓋し、友とは其の徳を友とするもの、わが靈界に歸つて將さに友徳昔日の事を顧みむとす。此れ即ち人の明徳早くも先天の事に在るの謂である。

義與信兮又禮智、凡作吾君一會中。

(註)。義與信兮又禮智とは明徳の中、義と信とは又禮智なりの意。凡作吾君一會中とは吾君一會中の尋常の所作たるを言ふ。

(疏)。義、信、禮、智は人の四徳である。(人の四徳を包括すれば仁は其中に在る) 皆な靈界より出でたるものである。吾人は四徳の本源を知らずに、これを以つて一世尋常の所作と爲す。此れ即ち後學を忘却する所以である。

來人去人又何時、同坐間談願上才。

(註)。來人去人又何時とは來人去人又何を時を知るやの意。同坐間談願上才とは同

坐の人人は徒らに空談を以つて上才として居るの謂。

(疏)。吾君一會の來人去人、已に其の先天の明德を忘却せりとせば、又何ぞ後天の時あるを知らんや。是等は天主の聖世に同居して四德を空談しつゝ上才を希望するものである。宜しく勉強覺悟して守誠せよの意。

世來消息又不知、其然非然聞欲先。

(註)。世來消息又不知とは運の來復を知らずの意。其然非然聞欲先とは事理の其然と事理の非然とを聞かまほしの謂。

(疏)。世來消息とは運の來復である。しかし運の來復は容易に知るを得ぬ。其然とは事理のみづから信するもの、非然とは事理のみづから惑ふ所のもの、今天時を知らず又天運を知らず先づ其然非然を聞かむと欲するをいふ。此れ即ち誠を勉め運に隨ふて後ち始めて詳らかなるを致すの意を説いたもの。

雲捲西山諸益會、善不處辨名不秀。

(註)。雲捲西山諸益會とは雲西方に消えて諸益友の相會するを言ふ。善不處辨名不秀とは善能處辨、然して後ち名乃ち秀づるを言ふ。

(疏)。大塊の氣おのづから西より東に轉じ、世の幽雲も亦西方より來たる。されど運は循環して、雲開き天見ゆる此の時にあたりて、必らず友德の人亦論道の會あるべし。但し賢明なる諸君は此時善く能く處辨して後ち名始めて秀づるであらう。是れ坐して千歳の日を推すべきものである。此れ即ち誠を勉めて其の時宜に愜への意。

何來此地好相見、談且書之意益深。

(註)。何來此地好相見とは何方より此處に來たりて好意を以つて相見るとの意。談且書之意益深とは其の降話を談じ其の降書を書して意益深切なるを言ふ。

(疏)。路遊無事の客そもいづ方より此處に來たりて好意を以つて相見る。(靈は本より一定の方向なし、是れ亦主心觀)今や其の降話を談じ其の降書を書して意益深切である。此れ即ち其

の明辨の具を示したものである。

不是心泛久不此、又作他郷賢友看。

(註)、不是心泛久不此とは不是吾心、泛然として久しく談じ且つ書するを爲さざるを言ふ。又作他郷賢友看とは又他郷賢友の看たる所を作すを言ふ。

(疏)。降活を承くること有り、降書を受くること有れども、久しきに亘つて其降活を談せず其の降書を書せざるは是れわが心の泛然たるの致すところ且つ靈界は是れわが古郷にして世俗は是れ他郷である。故に又世俗賢友の看る所を作す。此れ即ち訓辭を制すること有る所以である。(書は言ひ盡さず、言は意を盡さず、たゞ後生の覺得を待つ)

鹿失秦庭吾何群、鳳鳴周室爾應知。

(註)。鹿失秦庭吾何群とは身の其の主を失したる鹿たるを言ふ。鳳鳴周室爾應知とは心の徳の鳳の歸するところを言ふ。

(疏)。先天の學は身をもつて本と爲すものであるが、今蒼生の身は其の主を失した

る鹿の如く、後天の學はもつて生と爲すものであるが、賢者の心、徳の鳳の歸するところと爲つた。此れ即ち其の先後天の定數を明らかにしたものである。

——(以上、章の第二節)——

不見天下聞九州、空使男兒心上遊。

(註)。不見天下聞九州とは未だ天下の地を見盡したることなく既に九州の地を聞き得たるあるを言ふ。空使男兒心上遊とは空しく男兒の魂をして、心上念ふところの地に遊ばしむるを言ふ。

(疏)。目は能く天下の地を遍見したることなくとも、耳に九州の地を聞きたることあるが故に、天下九州の地、随つて心上の觀念を爲したるもの、且つ魄の致す所、萬里江山を以つて臥遊するに足るべし。此れ即ち布徳天下の志を説いたものである。(人心觀)

聽流覺非洞庭湖、坐楊疑在岳陽樓。

(註)。聽流覺非洞庭湖とは氣流の消息を聽き其の洞庭湖にあらざるを知るを言ふ。

坐楊疑在岳陽樓とは靈座の岳陽樓に在するが如きを言ふ。

(疏)。昔岳陽樓は洞庭湖に在ることを聞いて、洞庭湖、岳陽樓は亦心上の觀と爲つたが、今に至り氣の消息に依り、水流を聽くが如く、氣圈の廣漠、洞庭湖の比に非らず。且つ靈座の氣圈に臨むこと岳陽樓の洞庭湖に臨むが如くである。此れ即ち天下九州の地遠きに非らざるを説いたものである。(道心觀)

吾心極思杳然間、疑隨太陽流照影。

(註)。吾心極思杳然間とは吾心の思想宇宙杳然の間に極至するを言ふ。疑隨太陽流照影とは遊魄の太陽氣化の光浪を隨ふことを言ふ。

(疏)。大塊上の衆生が得る所の氣化は、乃ち太陽氣化の光浪が來射して大塊も亦氣と成るものである。しかし此れは乃ち宇宙間杳然の事故を以つて、わが心の思

想が其の杳然の際に極至し(太陽は天體の氣化である大塊は地體の氣化である吾人は天地の氣化を得たる者である)遊魄が太陽の氣化の光浪に隨ひ天下に遍照するものである。此れ即ち宇宙間萬狀の自然の侍天

(主觀覺觀)である。

——(以上、章の第三節)——

第九章 詠 宵

宇宙聖靈は、蒼々自在して、事毎に涉らざるなく、事毎に命ならざるはない。其形有るが如けれど、吾人は其形を形狀し難く、其の聞く有るが如けれども吾人は其の聞くことを見はし難い。故に此世は夢中に在つて夢たるを知らぬに等しいと云ふのが詠宵の意義である。此れは主觀天ともいふべきものだ。

也差俗峨翻覆態。一生高明廣寒殿。

(註)。也羞俗峨翻覆態とは婦、娥が俗娥翻覆態を爲すを羞づるをいふ。一生高明廣寒殿とは一生高居して廣寒殿のいよ、光明なるを云ふ。

(疎)。明月は常に其の光を有するが世俗は其の態を翻覆する。曰く、古、嫦娥有り神仙と化して月宮に(即ち廣寒殿)入つた。と、此れ乃ち嫦娥の俗峨翻覆の態を羞づるものである。一生高居して廣寒殿に光明を放つは嫦娥の眞態である。これは聖靈の永生を指さし云つたものである。

此心惟有清風知。送白雲使藏玉面。

(註)。此心惟有清風知とは嫦娥の心唯だ清風之を知るの意。送白雲使藏玉面とは白雲を嘘き送りて玉面をかくすをいふ。

(疎)。嫦娥は俗娥の態を羞とする。俗娥焉んぞ嫦娥の態を知らん。惟だ清風ありて此の心を知るのみ。然るに嘘送白雲使藏玉面、嫦娥は本より此心あるを以つて清風の知るところとなる。此れ即ち氣質、靈を遮ざるの眞面にして亦聖靈の本

意と爲る所以。

——(以上、章の第二節)——

蓮花倒水魚爲蝶。月色入海雲亦地。

(註)。蓮花倒水魚爲蝶とは蓮花水中に倒影して水中の游魚が幻に戲蝶となるを言ふ。月色入海雲亦地とは海に入る月光は空中に返照し、翻つて空中の浮雲、地面の觀をなすを言ふ。

(疏)。魚は水中の動族で蝶は花上の飛蟲である。今、水中游魚が探花の戲爾に幻成するを見れば誰か能く此の人生の眞なる所以を知らむ。且つ雲は上に浮び地は下に在れど、今、空中の浮雲は月下の地面を翻成するを見れば誰か能く此の心の本能を知らむ。此れ即ち身と心の狀し難いのを云つたものである。

杜鵑花笑杜鵑啼。鳳凰臺役鳳凰遊。

(註)。杜鵑花笑鵑杜啼とは杜鵑花、花咲いて杜鵑啼くを言ふ。鳳凰臺役鳳凰遊とは鳳凰の臺適ま成つて鳳凰の來たり遊ぶを言ふ。

(疏)。花に杜鵑有り。鳥にも亦杜鵑有る。杜鵑花、花咲いて杜鵑鳥啼くは此れ杜鵑鳥の時運である。又、鳳凰臺が有つて鳳凰鳥がある。適ま鳳凰臺が出来上りて鳳凰の來たり遊ぶのは鳳凰の名實である。此れ即ち其の時有りて其の人有るをいふ。

白鷺渡江乘影去。皓月欲逝鞭雲飛。

(註)。白鷺渡江乘影去とは白鷺が清江を飛び過ぐるとき其の影に乗じて去るを言ふ。皓月欲逝鞭雲飛とは皓月の空中に行かむとする、其の片雲を鞭うちて飛ぶを云ふ。

(疏)。白鷺が水上の天に飛過して水中の天に白鷺の飛過するあるは、月の反逝にあらずして雲の飛走である。(雲、南に飛べば月は北に走ると同じである。) 此れ即ち靈氣質の進化である。

(宇宙の靈氣質人界の靈氣質に化して、靈の明と氣の化が質におい變遷する。)

魚變成龍潭有魚。風導林虎故從風。

(註)。魚變成龍潭有魚とに魚は變じて龍と成る、これ潭中に魚有るを言ふ。風導林虎故從風とは風の林中の虎を先導するを以つて虎の風に從ふを言ふ。

(疏)。魚は龍の元身である。魚も變じて龍と成る。だから潭中に魚有るやうに、宇宙の靈が生靈に化したのであるから宇宙に靈あるを自得すべきである。吾人の心が宇宙に反射しておのづから、心あるが如きを知るべし。 又、虎の行く所必らず風を生ずることあるを以つて風は虎を導き虎も亦風に從ふ。然らば至氣は靈を導き靈も亦氣に接するの理が明らかとなるであらう。此れ即ち靈の變化あり隱顯ある所以。

風來有迹去無迹。月前顧後每是前。

(註)。風來有迹去無迹とは風、來たる時迹有り、風、去る後には迹無きを言ふ。月前顧後每是前とは月の前に在つて後ろを顧みれば月復た在るを言ふ。

(疏)。風來たりて迹あり風去りて迹なし。氣至りて化あり氣去りて化なき所以を知るべきである。又、西月の前に在つて其の東を顧みれば則ち月は東にもどりて常に前になり、東月の前に在りて其の西を顧みれば月は西に復りて常に前となる。前世の靈は是れ後世の靈であつて、後世の靈は是れ其の前世の靈たるを知るべきである。此れ即ち氣は去來の期有り、靈は前後の別無きを謂つたものである。

烟遮去路踏無跡。雲加峯山尺不高。

(註)。烟遮去路踏無跡とは路は行々の跡おのづから有るも、烟遮ぎりて、其の跡露はれざるを言ふ。雲加峯山尺不高とは峯は高々おのづから有れども雲加はりて其の高さの測り難きを言ふ。

(疏)。靈の行路は昭々として迹おのづからあれども、物質の遮ざる所となり其跡露はれぬ。是れは、烟り去路を遮ぎりて踏んで迹なきと異なるない。且つ靈は

々の像を有すれども物質の加ふる所となつて其の高さを見はさぬ。是れ雲、峯上に加はりて其の高さを測り能はざると異なるない。此れ即ち質に由りて上下の別あれど靈は卑高の別なきを謂つたものである。

山在人多不曰仙。十爲皆丁未謂軍。

(註)。山在人多不曰仙とは、山の字に人扁を幾つも書いては仙の字の形にならぬを言ふ。十爲皆丁未謂軍とは十の字は四方皆な丁字の形ではあるが曾て軍卒の義に用ゐられてないの意。

(疏)。字義をもつて解けば一個の山に一人旁に在るものは仙の字となる。これによつても一個人に一個心有るを知るべきだ。字形を以つて看れば十字は四方皆な丁字と成るが曾て軍卒の義を謂ふにあらず。此に於いて人皆な同様の心を得ることも、尙其の主おのづから存するを知るべきである。(心は軍の如し、靈は將の如し) 此れ即ち人各々心有れども心主は惟一の意味を云つたものである。

月夜溪石去雲數。風庭花枝舞蝴蝶尺。

(註)。月夜溪石去雲數とは、月夜溪石に過去の浮雲の幾たびとなくもたらした明暗を數ふるを言ふ。風庭花枝舞蝴蝶尺とは風庭花枝に舞戲したる蝴蝶の且つ飛び且つ接したる尺を言ふ。

(疏)。世界の明暗は運數の來去に在る。是れは月夜溪石に過去の浮雲の明暗の數と異なるない。人身壽命の長短は聖靈の進化に在る。是れは風庭花枝に舞戲の戲蝶の且つ飛び且つ接したる尺と異なるない。此れ即ち世に運數有るが故に身に命數有るを謂つたものである。

人入房中風出外。舟行岸頭山來水。

(註)。人入房中風出外とは、人が房中に入れば房中にある風は房外に退出するを言ふ。舟行岸頭山來水とは舟が岸頭に行けば岸頭の山形水中に飛び來たるを言ふ。

(疏)。靈光が形骸の内に入射すること即ち人の房中に入るが如く、心神形骸の外に反射すること恰かも風の房外に出づるが如くである。且つ世界の大塊の上に在ること即ち諸山の岸頭に在るが如く、人生の化氣によりて進化すること即ち舟の積水に行くが如く、世界の變遷は即ち山影の水中に飛び來たることの如くである。此れ即ち靈の入射有るが故に心の反射有り、人の進化有るが故に世の變遷有るを謂つたものである。

——(以上、章の第二節)——

花屏自開春風來、竹籬輝踈秋月去。

(註)。花屏自開春風來とは花屏おのづから開いて春風の吹來を知るを言ふ。竹籬輝踈秋月去とは竹籬の輝踈によつて秋月の過去を知るを云ふ。

(疏)。五官は(耳、目、口、鼻、膚、)靈關の門戸である。其の五官のおのづからなる開きをも

つて至氣の至るを知る。是れ花屏おのづから開きて春風の吹來を知るが如くである。且つ形骸とは靈關の藩籬である。其の形骸の内に隠々たる聰明有るを以つて其の聖靈の照臨を知る、是れは竹籬輝疎にして秋月の過去を知ると同じではないか。此れ即ち至氣は無形なれども其の五官を以つて其の跡を感ずべく、聖靈は露出せざれども其の聰明を以つて其の光りを知るべきを謂つたものである。

影沈綠水衣無濕。鏡對佳人語不和。

(註)。影沈綠水衣無濕とは人影は綠水に沈めども水は人影の衣を濕ほすこと無きと言ふ。鏡對佳人語不和とは鏡に對する佳人は語有れど鏡裏佳人は之に和することなきと言ふ。(和は酬である)

(疏)。靈光は氣に在れど氣は靈光を滌せぬ。是れ人影は綠水に沈めども水は人影の衣を濕ほすこと無きが如きもの。(干支に在つて甲は綠となり子は水なる、故に吾道甲子の期ありと雖其光に翳さず故に於いて其の理と數とを見るべし)

且つ靈の降話有つて心に受知するところ有り、是れ鏡に對する佳人に語有れども鏡裏佳人の酬ゐざるが如きもの。(此れ其の理數は天にして人に非ざるを知るべし)、此れ即ち心を以つて靈を觀れば靈は水外の人の如く、靈を以つて心を觀れば心は鏡裏の人の如きを謂つたものである。

勿水脫乘美利龍。問門犯虎那無樹。

(註)。勿水脫乘美利龍とは、水に乗ずるの龍について云へば水から脫離せずして乗じたるは美にして利ある龍なりとの意。問門犯虎那無樹とは、虎の出入する門を問ひ、犯さうとしてもそこには樹があつて掩蔽するの意。

(疏)。水は龍あつて始めて美となり、龍は水に乗つて始めて利と爲る。故に水は其の乗る所を脫せざれば則ち美にして利ある龍と爲る。玆に於いて其の氣は靈に違はず、靈は氣の理と數に離れざるを見るべきである。(壬は水となり辰は龍となるが故に、吾道の壬辰の歲の動も此理此數此誠と興に見るべきである)、且つ虎は隱顯常ならざるが故に、虎穴を探りて之を犯かさむと

すれども樹有りて掩護する。茲に於いて其の心當さに慕靈して之を犯すべからず、身當さに護靈して當さに之れを露はすべからざる理と數とを見るべきだ（寅は虎となり甲は樹となるが故に靈界に犯して眞を問ふ）此れ即ち靈は龍の徳と虎の威有る（ここ當さに甲寅の歳に在りて此理此數と此誠を見るべし）所以を説いたものである。

——（以上、章の第三節）——

半月山頭梳、傾蓮水面扇。

（註）。半月山頭梳とは半月の山頭に在ること人の頭に在る梳の如きを言ふ。傾蓮水面扇とは傾蓮の水面を遮ぎること扇の人面を遮ぎるが如きを言ふ。

（疏）。聖靈の宇界に在るは見ることを得べからず、たゞ靈光の心界に入射するを自觀するのみ。是れ半月の山頭に在るが如くである。（月の體は圓なれども山頭に）且つ自身（出づるものは半分である）の形骸は其の自身の氣神を保護する。是れ傾蓮の水面を遮ぎるが如きである。

此れ即ち其心を守り其氣を正しうするの工である。

烟鎖池塘柳。燈增海棹鉤。

（註）。烟鎖池塘柳とは池塘の畔りに柳有り、柳の際に烟鎖さすを言ふ。燈增海棹鉤とは暗海を航進するに、棹鉤もて舟を行き、燈火其の明を増すを言ふ。（棹鉤は水底を探つて行舟するものこと）

（疏）。心は形を以つて自護し形は氣を以つて自存する。是れ塘畔に柳有り、柳際に烟鎖さすが如きもの。且つ茫々の際に思ひ入りて、鉤索の工に進んで己まざりせば其の一點の燭理の光りを増すこと、恰かも暗海を航進するに棹を以つて行舟し、鉤を以つて探索し、燈火其の明を増すが如きものである。此れ即ち其の性に率ふて其の教を受くるの工である。

——（以上、章の第四節）——

第十章 絶句

遺書の中に絶句と稱する三聯が有り、此の外に一聯の句が有り、散在して順序ないので、今茲に之を選んで諸絶句の下に附し、併せて一章と爲した。此の章は主人觀である。

河清鳳鳴孰能知。運自何方吾不知。

(註)。河清鳳鳴孰能知とは、天下の河皆な清く天下の鳳の皆な鳴くを孰れか能く知るを言ふ。運自何方吾不知とは運が何方より來たりしやわれ知らずの意。

(疏)。世人には必らず經驗といふものがあり、其の知あるに因つて、河清鳳鳴を以つて聖賢の驗と云ふ。若し河不清、鳳不鳴なるに、聖賢ありと云はゞ、人誰か之れを知らむ。今聖賢ありとせば、羣川凡雀皆な其の瑞となるであらう。且つ運は無始無終、循環息まぬ。世は其の運に當たりて興り、人は其の運に當たり

て生ずる。今、わが身の生此の運に當たることも、われみづから豫知し能はざる所以。此れ即ち聖賢の生るゝあるはわれの知る所にして、運の循環は天の知る所を謂つたものである。

平生受命千年運。聖德家承百世業。

(註)。平生受命千年運とは、平生、天道循環の運を受命せるを言ふ。聖德家承百世業とは靈系の家に靈界累世の德業を承けたるを言ふ。

(疏)。天道は循環する。大概千年に必らず一大進化の運が有る、今生きて此の運に當たりて其の明命を受け、且つ生靈が聖靈系統の家を爲して、今、靈界世々の德を承けた。此れ即ち其の運に當たりて其の命を受け其の德を修むるを謂つたものである。

龍潭水流四海源。龜岳春回一世花。

(註)。龍潭水流四海源とは龍潭の水流るるは四海の源たるを知るべしの意。龜岳春

回一世花とは龜岳に春めぐりて一世の花たるを知るべしの意。

(疏)。細流海に入りて海は能く大を成す。龍潭の水も以つて四海の源となるべく、且つ陽春岳にめぐれば岳おのづから色を生ず。龜岳の春以つて一世の花を驗すべし。此れ即ち龍潭淵源の四海の源と爲り、龜岳道法の一世の法と爲るを説いたものである。(龍潭は即ち龍湫である。龜岳は即ち龜尾山である。)

——(以上、章の第二節)——

道氣長存邪不入。世間衆人不同歸。

(註)。道氣長存邪不入とは、元神恒に守りて妖穢犯すことなきを言ふ。世間衆人不同歸とは世間衆人何故同じく歸せざるを言ふ。

(疏)。聖靈の心基に臨むや即ち靈座となり、形骸は即ち屋宇と爲り、五官は即ち門戸と爲つて門戸の元神を守り、以つて妖穢の侵すを禦ぐ。故に曰く、道氣長存

せば邪氣入る能はず。世間衆人は元神の在る所を知らず、妖穢に胥陷せられ、みづから疾病に罹るは憂ふべきことである。たゞわが靈界は福祿の無盡藏吉祥無時降である。一切衆生の顛倒迷茫たる者は何ぞ早く歸り來たらざる。此れ即ち道を受くる運に預れるを謂へるもの。(此の詩は庚申の正月立春日に題したものである)

——(以上、章の第二節)——

圖來三十七字。降盡世間魔。

(註)。圖來三十七字とは呪文の二十一字を圖來したるを言ふ。降盡世間魔とは世間の衆魔を降伏したるを言ふ。

(疏)。圖來は又印出とも言ふ。今靈符を心に印して字々を修煉し、神物に化成した。心基、かくのごとき神物のあるあり、氣正しき所には神必らず盛んに、神盛ん

なる所理必らず勝つ。然らば則ち世間の衆魔、何を憂ふべき。此れ即ち呪文の效の銘念の誠に在るを謂つたものである。（癸亥七月二十三日海月先師を命じて北海道を爲し仍て此詩を賜ふた）

——（以上、章の第三節）——

第十一章 座 箴

教祖、嘗つて此れを丈席左右の壁上に題して、居常翫味し、且つ門人をして恒に念を茲に在らしめ以つて一生の箴と爲さしめた。此の章は主人觀である。

吾道博而約。不用多言義。

（註）。吾道博而約とは、わが道の體至つて博く、わが道の用至つて約なるを言ふ。不用多言義とは、其の精義については多言するに及ばぬの意。

（疏）。無極の理と無窮の數は、皆なわが道に在る。吾道の體豈に博からずや。然し

道法の順次は惟だ二十一字に過ぎぬから吾道の用は至つて約である。且つ修道主要の精義おのづから存するから多言を用ゐるに及ばぬ。此れ即ち道博くして法約、義多くして言簡なる所以を謂つたものである。

別無他道理、誠敬信三字。

（註）。別無他道理とは他岐貳路の道理無きを言ふ。誠敬信三字とは誠、敬、信、三字が修道の至要たるを言ふ。

（疏）。修道の精義はたい其の人を矯め、其の才を養ひ、其の心を正しうするにある。豈に岐貳の端有らんや。且つ吾道は、心信爲誠而敬以誠であるから、誠敬信三字は修道の主要なるものである。此れ即ち入徳の要路を謂つたものである。

——（以上、章の第二節）——

這裏做工夫。透後方可知。

(註)。這裏做工夫とは三字の裏に工夫を凝らすを言ふ。透後方可知とは透得したる後ち方さに此の理を知るべきを言ふ。

(疏)。信はわが道の始條理と爲り、誠はわが道の終條理と爲る。敬して之に誠なるが故に、必らず誠敬信三子の裏に工夫を做せ。先づ信じ而して之を敬して誠に至ればおのづから透徹する所ありて受知の理を知ることができる。此れ即ち誠敬信の効果を謂つたものである。

不怕塵念起。惟恐覺來遲。

(註)。不怕塵念起とは、塵念の心界に起るを恐れざるを言ふ。惟恐覺來遲とは、惟だ靈界に覺むるの遲を恐るの意。

(疏)。怕るべきは塵念である。しかし塵念を怕れるのは塵念を忘れず、心界に起り易き塵念の起るのを怕れる。且つ降話は天に在り受知は誠に在るから、念常に

茲に在りて惟だ覺來の靈界に遅れるを恐れる。此れ即ち誠敬信の工夫を謂つたものである。

——(以上、章の第二節)——

第十二章 訣

此の訣は降生四十年(癸亥)元朝に降話を承けた。蓋し教祖が受命得道の後ち修めて更に之を練つた。自然の理あるが故に、恒に天靈茲に在りとして侍したのであるが、此に至りて又天靈の降話が有つたので、教祖の心は天靈に合して一となつた。是れ乃ち靈符授受の本意である。(靈符とは天に合するの信である。上帝、靈符の本意を授けて教祖をして天の徳を人に布かしめ今日に至りて復合して一となつた者である)

此の章は主天觀である。

問道今日何所知。意在新元癸亥年。

(註)。問道今日何所知とは問道の今日何の知る所有るやの意。意在新元癸亥年とは即ち天意の新元癸亥に在るを言ふ。

(疏)。人は無知である天は有知である。人乃ち其の知を受けて知を有する。今、道を天に問ふて其の知を受け、以つて知ありとは何事の謂ぞ。天意は新元癸亥の年に在りとはこれその知る所である。此れ即ち庚申四月五日の天意は癸亥元月元朝に在るを謂つたものである。

成功幾時又作時。莫爲恨脱其爲然。

(註)。成功幾時又作時とは、大道の成功已に多時、天又彰道の時期を作るもの。莫爲恨脱其爲然とは彰道の時期晩かりしを恨まず、必然なるを自信するの謂。

(疏)。天命を受け、大道に通するは、庚申の歳に在るが、今癸亥の年に至りて、又、彰道の時期を作り、其間相當の年處を経た。惟ふに天は彰道の運を預定して、將來の運を造り作したので、是れ其の必然なるを信する。其の時期の晩かりし

を恨む可からず。此れ即ち受道の時と彰道の時と、皆な天の豫定であることを謂つたものである。

時有其時恨奈何。新朝唱韻待好風。

(註)。時有其時恨奈何とは受道と彰道とは各々其時が有る。時の晩きは之を恨むも奈何せん。新朝唱韻待好風とは新朝に訣を唱へて、其の好運の來たるを待つべきを言ふ。

(疏)。物は春に發榮して秋に成實する。事は發端始まり成績に終る。故に既に受道の時あり又彰道の時ある所以、今、既に受道の靈風を過ぎ、又彰道の靈風を待つ。此れ即ち其運の循環に従ふを謂つたものである。

去歲西北靈友尋。後知吾家此日期。

(註)。去歲西北靈友尋とは前年壬戌、靈友の尋を謂ふ。後知吾家此日期とは靈界に此日の期會あるを豫知したるを言ふ。

(疏)。壬戌は方位に在りて西北と爲る、去歲西北は壬戌の年と爲り、其の所和訣の時は即ち靈友の尋である。去歲靈友の尋の時に必らず受知したることあつて靈界に此日の期會あるを預知した。此れ即ち後日の期會は必らず前日の天定に有るを謂つたものである。

春來消息應有知。地上神仙聞爲近。

(註)。春來消息應有知とは翌年甲子春の消息まさに知るべしの意。地上神仙聞爲近とは心靈の天靈に近づくを聞くを謂ふ。(近は附である)

(疏)。教祖が捐身彰教したのは甲子の春である。故に、靈、之を豫知して叮嚀之を告げた。心に受知したる所あつて知るを得た。心靈は本より是れ天靈の入射で今其の心靈が天靈に附するを聞くのである。此れ即ち靈符の相合するを謂つたものである。

此日此時靈友會。大道其中不知心。

(註)。此日此時靈友會とは元日元朝の靈友の會を謂ふ。大道其中不知心とは即ち天道昭々の中に何者か心と爲るを知らずの意。

(疏)。友とは同徳の稱。今、心靈も天靈に附すれば是れ其の一徳である。故に曰く、靈友と、且つ天道昭々の中に靈が入射して反射するから、常に兩様あれども、靈豈に二體有るべきや。今、入射、反射相合して一體と爲り、前日稱したる所の心の何者なりやを知らぬ。此れ即ち篤信の心が至誠の天に化したるものを謂つたのである。

燈明水上無嫌隙。柱似枯形力有餘。

(註)。燈明水上無嫌隙とは水上の燈光と水中の燈光とは間隙無きを謂ふ。柱似枯形力有餘とは靈關一柱枯形に似ると雖も、撐天の力おのづから餘りあるを謂ふ。

(疏)。靈とは燈の如く、光りあり。心とは水の如く鑑むることあるが故に、靈は心

と與に間なく、燈は水と與に隙が無い。且つ靈關一柱は百折屈せずして、撐天の力おのづから餘りありて、天下蒼生を庇ふことができる。此れ即ち道を天に受けて道を人に傳ふるものである。

降生四十年(癸亥)十一月、教祖が世の爲め陥いれられて京城に於いて逮捕せられ、翌年(甲子)正月、大邱に押還せられ、三月十日(即ち陽曆四月十六日である)殉道された。此の訣は歸天の時海月先師に遺したるものである。

——(以上、章の第二節)——

東經正義終

内鮮人の心性較覈

細井肇

半島文化問題としての朝鮮

内ヶ崎作三郎

世界の植民政策と朝鮮問題

永井柳太郎

誠なれば乃ち明らかなり

島田三郎

朝鮮問題講演會を開きたる所 以と其の經過並びに實狀

細井肇

自由討究社の使命は、夙に賛助員諸賢の熟知せらるゝが如く、決して化石したる朝鮮の古史古書を化石したるまゝ、諸賢の眼前に譯述するやうな、死滅したる事業ではない。我等同人は、衷に燃ゆるが如き血誠を抑えつゝ、白熱し切つた理性の命令に依つて古史古書の譯述に従つて居る。

古書を新眼に讀め——。此れ我等が平生の宿論である。我等は、文字に乏しきが故に、字句においては屢ば疑惑に逢着しても、之を心讀味讀することの熱力と勇氣とを保持つことを一言しても差支はあるまい。古典をひねくりまわし、故事を詮索して居る

間に、時代は施風の如くに轉回する。デ、ヴァレラも、ガンディーも、愛蘭の問題、印度の問題として眺めながら、其日／＼の當眼の生活に没頭して居ると、我等の子孫は、思ひ及ばざるデ、ヴァレラ、又はガンディーの出現に、苦難難澁するやうな後代が來たりはせぬか。來ねば結構である。お互ひに來たらざらんが爲めに、せめては、世界における前人の覆没したる轍跡を歩まざらんが爲めに、我等は日夜憂心休まぬのだ。命懸けで、此の問題の解決に苦慮して居るのだ。

一度や二度の講演會、又は二年や三年の刊行物で、朝鮮の問題が解決されるものと思ふほど、我等は賢明なる樂天家であり得ない。朝鮮問題の解決は百年の懸案である。殊に今日の内地人には正に百年の懸案である。若しあるがまゝの姿で萬事が推移するとするならば、決裂に次ぐに決裂の來たるであらうことを斷言する。鮮内民心安定の今日、不祥の言辭を弄する者となす勿れ。我等は憂心已ますしてこゝに此言をなすのである。我等は、一握の砂糖を海水に投じてその鹹味を除き去らうとする愚かし

き者の一人として、世人より合奏的冷罵を甘受する。乍併、天を突く高塔も一枚の煉瓦の累積を忽かせにして、果して實現せられ得るだらうか。我等は世間の合奏的冷罵を甘受しつゝ、敢て一枚の煉瓦を積むの勞働に服する一兵卒として、朝鮮問題講演會を去る九月二十二日午後六時から、神田青年會館に開催した。讀賣新聞社は本社此舉を後援して、貴重なる紙面の一部を割いて連日此の催ふしのあることを報導した。

定刻より廿分ほど前に、青年會館に到り見ると、既に階上階下滿員であり、開會を促す拍手が急霰のやうである。會場に入る前に、巡查が、私の身體を撫で回す。私ばかりでなく、入場者の總てが、これをやられたらしい。先づ、一種の不快感が胸を衝いた。會場は、讀賣新聞社の諸賢、白石、犬飼兩君、自由討究社印刷部の高木司郎君及びその同志諸君に依つて萬事遺漏なく整へられて居た。辯士室に入ると直ぐ、白石君から『今日は朝鮮人の惡口などをいふと、擲ぐり附けるとか云つて團體を組んで學生が來てる相です、錦町署からの注意ですから、身邊を御警戒になつて――』との耳語、

實は私は噴き出したかつた。が、たゞ笑つて『イヤ僕は思つてることだけは云ひます』と應へた。朝鮮人の惡口——故らに誰が其麼事をいふ奴がある。道理は道理、内鮮に依つて變る譯のものでない。合理に與みする。不合理に反對する。匹夫の志と雖も奪ふべからず、全地球の權力が一時に私を威嚇したところで、私は私の信念を枉げ能はぬ。不合理に對しては飽迄も搏つ、合理に對しては絶対に跪づく、其間、強弱も、大小も、貧富も何もない。恚う、新たに、心にさゝやいた。私は朝鮮人に同情もする又批難もする。夫れは同情すべき所以があつて同情し、批難すべき理由があつて批難する。私は、あるがまゝの私である。朝鮮の學生のみならず、如何なる階級の人々も、私を擲ぐらうが、殺さうが、夫れは任意である。私の血は、私の骨は、死んだ後ちまでも、あるがまゝの私である。

拍手が頻りに開會を促す。定刻十分前である。白石君が『少し早いが始めませうか』と云ふ。實は、この前、東洋協會の東洋事情講習會で講演をした時、完全に一人で三

時間しゃべり續けてまだ足りなかつた。そこで講演材料の三分の一を端折つた。殊に今夜は十一時までやるとしても四人では一人が一時間と十分か二十分である。『やり玉へ』と即下に答へ、開會の辭の終ると直ぐ壇に立つた。此前、普通選舉問題で、尾崎行雄先生、馬場孤蝶氏と共に此の壇に立つた時は、人がむれ返るほどで、人の上に人が揉み合つて人の波を搖つた。夫れに比すれば場内は整つて居るが満員である。私が壇に立つ少し前、これ以上入つては取締がつかぬ、満員札を掲げるやうと、頻りに讀賣社の人に錦町署の刑事らしいのが迫つて居た理由も讀めた。

講演筆記にある通り、支那苦力の話をする頃ほひから、朝鮮學生が騒ぎ出した。夫れが私に取つて何であらう。ナゼ聞かずに騒ぐのであるか、聞くのが辛いのであるか。私はこゝにも涙ぐましいほどの同情を朝鮮學生の上に注がざるを得ぬ。聞いて居玉へ、何をいふか分らぬうちに、苦力を汚い臭いと云つたからとて、自分の事のやうに騒ぎ立つその心根——それでは、内地人の鮮人同化と共に、朝鮮人自身の人格の完

成、即ち世界的に獨り歩きのできるのも前途遼遠である——の感なき能はなかつた。云ふべきことは云つた。但だ時間に制せられて大部分省いた。次回此種の講演會を開いた時、又は其他の方法で意見を公表しやう。

内ヶ崎君は實に見事な達辯である。苦勞人である。辯其儘の達人だと染々思つた。永井君は、熱を伴つた聲量に富む美辯で、満場を魅了した。島田先生は、我等がこゝに説くまでもない能辯である。たゞ私は、此夜、明治會館で一時間半も、田中正造翁追悼會で演説をされた先生を、青年會館へお連れする爲めに、内ヶ崎君の演説の終ると直ぐ自動車を驅つて明治會館に走り、疲れたる先生を御伴ひ申し、殊に最後の演壇にお立ちを願つたことを、衷心から感謝する次第である。十一時近く無事散會した。

こゝにお斷り申して置きたいのは、京城日報から速記者を特派し、朝鮮新聞、釜山日報から後ちに速記原稿を求め來たり、皆なその請に應じたことである。夫れは、一人でも多くの人に講演の主趣を傳へたい精神に外ならないが、その爲め賛助員諸賢中

既に新聞紙上でその論旨を読まれた方も尠くないと思ふ。但だ、新聞紙上では、編輯上の紙面の都合又は其他の事情で、或る部分を削除する場合が多い。仍て完全なる速記原稿を、餘録として掲げることにした。

内鮮人の心性較覈

自由討究社長 細 井 肇

自由討究社は初め大庭柯公君と私と二人で創設致しまして、其名の示すが如く極めて自由に諸多の問題を討究しやうと云ふことから、此前の總選舉の後、思想上より觀たる總選舉の結果と云ふ演題でこの青年會館に第一回の講演會を開いたことがございます。其後私は鮮滿各地へ參つて居りまして、殆ど東京に居ることが少く、概ね鮮滿に時間を費して居りました。又大庭君は最近露西亞の方に參つて居りますので、今日私はこゝに朝鮮問題に就て少しく感じて居ることを申し上げたいと存じます。

日韓が併合されて既に十二年であります。内鮮一家と云ふことを能く申すのでございますが、一家になる以前お互に其の血統或は性質と云ふことは十分の調査を経

べきでありました。結婚をするにしても相手方の血統を調べ、或は性質を調べ、或は親類縁者の關係を調べ、何う云ふ血統である、何う云ふ性質である、さうして相手方が非常に短氣で直ちに拳骨を食はせるやうな主人であつても、自分の仕へ方一つで溫和に一家をなして往けるであらう。若くは非常に陰謀に富み、若くは迷信深く、又甚だしく衰弱して居る婦人ではあるけれどもそれは本來の性質ではない。或一家の權力者の爲に虐げられて斯の如き状態にあるのでありますから、之を暖かなる心を以て抱き合ふならば必ず融合して行けるであらうと云ふ風に、先づ相手の缺點に同情して初めて茲に婚約が成立ち、結婚と云ふことが出来るのであらうと思ふのであります。さうして相手に善き點があるならば、其の美點を尊重して互に其の特長を助長して行く、そこで初めて和合と云ふことが起るのであります。然るに各自が缺點のある儘に進み行く時は其の結婚は非常に悲惨なものである。必ずや年ならずして其の間に不和の現象が起ります。丁度十年ほどに當る三年前に此の婦人は主人に對してお別れを致し

た、貴方と一緒に一家を持つて行くことは出来ないから離別して獨立したいと云ふことの運動が始まり、其後も極めて極端に爆裂彈の行使其他の方法に於て此の意思が斷續的に表明されて居るのであります。私は只今相手の缺點に同情し、又相手の美點を尊重せよと云ふことを申したのでありますけれども、夫より先に、爲さなければならぬ重大の事がある。それは何であるか己れ自身の人格の完成であります。相手の缺點に如何に同情をし又相手の美點を如何に尊重致しましても自分自身の人格を完成することなくして相手を見てばかり居つては無効である。自分の足下は眞ッ暗である。結婚のことを申した序でに少しく血統のことを申したいと思ひます。

本日御來會の諸君は皆青年の方々であります、乃で私は皆様に五十年前我々は抑も此宇宙に於て何の存在であつたかといふことを一寸考へて見て頂きたい、斯の如く生息し飲食し或は談論する所の生活其物の五十年前に於ける状態は何であつたか、是は最も平凡な最も明白な問題であります、我々は父母なくして今日あるを得たのではな

い。是だけは如何なる學者と雖も否定しない事實であらうと思ひます。此父母は父にも父母が入用であり、母にも父母が入用であつたのであります。一が二となり、二が四となり、四が八となり、八が十六となり、十六が三十二となり、段々末廣に擴がつて行くのであります。チエーソンと云ふ學者は各個人の血液中には少くとも一千年間に二千萬人の男女の血液を留存すると説いて居るのであります。學者が推算して人類の地球に生息するに至つたといふ五十萬年の大昔は暫く擱き、有史以來の三千年間を考へましても、今日六千萬人の血がなければ諸君は個々に現在の生を享けて、今日此場に御臨席になることもできない筈であります。俺の身體であるから俺は自殺しても構はぬと云ひ、俺が儲けた金だから俺が自由にすると云ふが、それは相成らぬ。六千萬の男女の血液それが即ち諸君の今日の生活である。此處にお集りの方全體は何億萬人の男女の血液を代表して居るか分らぬのであります。而して此等の祖先は俊寛の如き絶海の孤島に孤獨の生活をして居たのではない、其時代の種々なる關係——即ち其

時代の文化——に育ぐ、まれて、常に失敗を繰返しつつ、稀には成功もして、互ひに相寄り相扶けつゝ生活をして参つたのであります。殊に内鮮の關係の如き、歴史的にも地理的にも極めて密接であります、お互に憐うして暮して居る民族の間には眼にこそ見えぬ極めて緊密なる關係があるのであります。私はさう云ふ意味からして祖先の爲し來つた所の功罪も矢張り子孫の受くべきものであると考へる。即ち我々は進んで自分自身の人格を完成することが自分自身の人格の完成のみでなく、應て自己の血液の素である所の祖先並に祖先の宗家に對する忠孝であると考へる。忠義は君の爲に忠を竭すのみでなく、又親の爲に孝を盡すのみでなく、己れ自身を完成するのが忠であり孝であると考えます。又人類に取つても爲すべき道であると考えます。若し祖先の爲し來つたものが過つて居つたら之を改めなければならぬ。而して幾千萬の子孫の爲に向來過ちを再びせぬやうにしなければならぬのであります。今日私は内鮮の關係を見まするに遺憾な點が多々あるのでございます。故に少しく過去に溯つて

種々真相を研究して見たい、さうして今日朝鮮の方と一緒に握手をしたい、又内地人にも正しい道を歩んで戴きたい、此信念から出發してお話を致すのでありますが、過去を顧みますると、日本の朝鮮若くは支那に對して從來取り來つた所の態度には甚だ赤面すべき行ひが多かつたのであります。支那朝鮮の古史を繙きますと、倭寇と云ふ文字が屢々現はれて居ります。是は彼の元寇の亂に對する復讐であると申しませんが、若し果して元寇の亂に對する復讐であるならば、何故國を擧げて堂々と戦はなかつたか、倭寇は即ち海賊であります。海賊のことを支那の書物で何と云つて居るか、八幡大菩薩の旗を押立て、突然防備なき海濱に顯はれ婦女金品を劫略する、其の來るや火の如く去るや風の如く、兩手に劍を回し非常な早業を以て掠奪を行ふので孤蝶軍といふ別名を附して居る。そして又逃げ足が早い、日本の言葉に跡白波と云ふことがある、是は海賊のことであらうと考へる。誠に卑怯な話であります。突然備へなき所に現はれて婦女金品を奪ひ、さうして逸早く逃げて行く、眞に耻づべき行爲と云は

ねばならぬ。此の海賊の行爲に取りも直さず遣らすぶつたくりであります。此の遣らすぶつたくりの海賊なるものはなくなりましたが、朝鮮などへ參ると其の思想が隨所に現はれて居る。跡白浪式の内地人が澤山に居ります。随分外國の基督教の宣教師も朝鮮に這入つて居りますが、其の中には人格の上から如何にしい人物も尠くないのであります。併し、いづれも五十年計畫百年計畫で事を進める。佛蘭西チャーチの長老などは、大院君の基督教徒虐殺當時京城に居た僧正であります。虐殺が烈しくなつたので一室に立籠つて手足を伸ばすことが出來ない、深夜人が寢静まつてから闌外に出てて手足を伸ばすのが一番愉快であつたと云ふ。さうして竊に食事を攝つて約十年近く隠れて居たのであります。恚うした堅忍努力を経ましたが爲めに今日では抜くべからざる一の力を植え附けて了つた。何しろ五十年計畫百年計畫でありまするが故に、家を建てるにしても燐寸箱のやうな家は建てない。先づ庭には種々の野菜物を植え、建築物も永遠に保つものを建てる。さうして其處に住ふ以上は隣人と争つて居てはなら

ぬ、先づ隣人と親しむ、段々に押し及ぼして邑から面、面から郡と云ふ風に漸次親睦の範圍を加へて往く、彼等は文化も習慣も生活も悉く違つて居る外國へ來て獨自で立派な王國を建設して居るのであります。然るに日本人は何うである。總督以下凡ゆる行政の機關、又行政に當る人々、總ての社會の生活が内地と殆ど撰ばない朝鮮に參つて居りながら、地方に居る者は早く京城に出たい、京城に居る者は早く内地に歸りたい、何か一攫千金のボロイ事はないか、さうして掴み次第に逃げて歸る。明日あると云ふことを考へない、其日限りの遣らすぶつたくりの跡白浪式の行き方であります。是は外國に來て居る外國人の態度であると云ふことを朝鮮の方が評して居りましたが是は朝鮮の人なるが故に憚つて斯う申したのでありませう。私はモウ少し適切に露骨に申したい。夫れは敵國に侵入した掠奪者の心理と行爲であります。元來此の遣らすぶつたくりの傳統政策は佩刀政治家が久しく國を誤らしめたものであります。或は山東の簪が欲しい、西伯利の金時計が欲しい、遂にはバルチザンの虐殺を誘發した沿海

洲の漁獲が欲しい、絶えず物欲しい一種の思想を傳統して今日に至つたのであります。之を武力侵略主義と云ふ。それが今日漸く行詰りまして、初めて世論の前に正當なる審判を受けやうとして居るのであります。併ながら一方に翻つて考へますと、此武力侵略主義は何から來て居るか、それは軍閥と云ふものがさう云ふことを専門にする一の特種の機關であつて、普通の日本人は何等關知しないのであるか。或人は參謀本部のもう一つ背後の參謀本部は資本家であると申しましたが、實際日本の國は年々七八十萬の人口が殖えて行く。さうして現在の日本に於て物資の狀態は何うである。石炭は最早九州炭も北海炭も命脈は將に盡きんとして居る。泥炭粉炭の常盤炭の如きが値段が落ちないのは其の證據であります。山東が欲しいのは石炭が欲しいのである、炭礦が欲しいのである。又米はどうである。絶えず臭氣ある外米を輸入しなければ米食の習慣を繼續することができぬ。一時日米戦争と云ふやうなことが、新聞や顧客の間に唱へられたのでありますが、軍艦を動かす爲には重油と云ふものが要るので

あります。此の重油は日本に於ける一年の産額を八八艦隊で使ひますと、僅に二十四時間動いた後には無くなると云ふ憐れな有様である。而して之を外に求めんか、墨西哥邊から買はなければならぬ。敵に糧を頂戴して戦ふやうなものであります。丁度日本の國狀で申しますと、三疊敷に十人ばかり折重つて寝て居る貧乏長屋のやうなものである。マツチ箱のやうな借家が段々殖える所以である。根底に於て日本と云ふ國は國民の實生活の上から物資が不足である。國民の生活を安定ならしむる爲には如何すれば能いか。それは特に戦後において隨一に解決せねばならぬ重要切實なる問題でありました。近頃物價調節の聲を聞くのでありますが此根本に立脚せざる所の物價調節である。うごんの値段を下げたりバットの値段を下げたりした所が、決して國民の生活の根本問題が解決されるべきでない、文化的に經濟的に少くとも東洋一家の實を擧げない限りは、決して日本國民の安泰と云ふことはないであります。元來經濟的には國境と云ふものはございませぬ。皆様のお召になる洋服も或は英國の羊毛會社の物も

ありませう。或は米國佛蘭西獨逸のもありませう。皆様の召上つて居られる御飯も日本の米ばかりではない。經濟的に國境は無いのでございます。

元來國境と云ふことに就ては、我々は眞面目に考へなければならぬ。抑々昔羅馬法王が俺が國境を審判して遣ると云つて、机の上に地圖を置いて、此處から此方が西班牙、此處から此方を葡萄牙とせよ、それから後發見したものは各自の領有にせよと命令した。斯う云ふことが國土の初まりである。人文が今日の如く複雑を來さない、總ての關係が進まない内に諸方を略取したものが大きな屋臺を張つて居るのであります。残念なことには國土は我々のやうな借家住居をして居るもののやうにドコへでも移動をするといふ譯にはゆかぬ。國土が狭いからといつて擴げる譯には往かぬ、寒いからモウ少し暑い所へ持つて行かう、暑いからモウ少し涼しい所へ持つて行かうと云ふことも出来ない。先天的に定つた宿命であります。此の宿命を前提として、東洋と云ふものを一の町と見做して申しますならば、非常に大きな庭を持つて居るが一向に

手入をしないガランとした大きな家に居て、頻りに阿片を喫み賭博をやる、さうして借金ばかりして居る、目星しい家財は殆ど借金の抵當になつて居る阿片君と云ふのがあり、其の隣りには壁も落ち、畳も破れたあばら家に最早其日の糧もなく貧血し衰弱して長大な煙管で煙草を吸つて居るキセル君と云ふのがあり、其の隣りには三疊敷に十人折重さなる程の極めて狭い所に非常に性急な奴で直ぐに拳骨で擲ると云ふ拳骨君が居る、此の拳骨君だの煙管君だの阿片君が一の町内に動く事が出来ない運命に結び付いて、さうして仲能く仕やうと云ふ問題であります。先づこのまゝでは出来さうもない様に考へられます。私が南北支那を周遊しました時、武昌漢陽を通つて漢江の入口から旅館へ歸りたいと思つて車を呼ぶと、車は二三十臺列をなして居るが一人も之に應ずる者が無い、曰くお前達は車賃を拂はずにステッキで擲るではないか、お前のやうな者を乗せる者が糞でも食へと云ふ調子であります。仕方がないので高い馬車賃を出して旅館まで歸つたことがございます。何事でも腕力で解決しやうとする、此日

本人の思想、拳骨主義で果して何事が解決されるでありませう。唯今申す如く生活に必要な物資は欠乏して居る。それが擲り飛ばし蹴飛ばすことで解決が付けば極めて簡単であります、段々反對の結果を來し、解決は益々困難になつて、さうして今日行詰つて了つた。滿蒙利權回收といふやうなことが近く支那に民論の形式を取つて顯はせぬかと思はれるのでありますが、斯様な場合在外の或種の不平鮮人は或は之に策應しないとも限らぬ、撤兵後の心配は何であるかと云ふと、赤化よりも寧ろ不平鮮人の反抗であるらしい。是は有の儘の詐らざる事柄であらうと思ひます。是は皆物慾しやの傳統政策と、之を行ふに拳骨と銃劔を以てした當然の應報であります。

元來日本の様な人口が饒多であつて國土の狭い所の國家は率直に國民の生活を基礎としたる問題の解決を世界の面前に於て世界的に解決すべきである。人種差別の撤廢、黒人と白人の差別撤廢、さう云ふものを求めた所で何にもならぬ。我等は生活を合理的に解決する爲に寧ろ進んで世界の耕地の自由開放、少くも東洋に於ける耕地の自

由開放、斯う云ふ事を請求する必要がある。我々は少くとも東洋の耕地が自由に開放せられ、さうして生活を合理化したい。之を米國が若し承認しないと云ふならば、それは日本に窒息を強ゆる者であります。其時こそ我々は戦はなければならぬ。併し今まで率直な言を發して居らぬ。それは何故さう云ふ事を言はぬかと云へば、コソ／＼簪や金時計を狙つて居るからであります。簪や金時計は此方から遣つて宜しい、魂を攫む互に赤裸々に抱合する真情が顯はれる事を必要とするのであります。其間に拳骨も武力も要らない。日本は少くも只今申すやうに、東洋に於ける耕地の自由開放を眼目としなければならぬ。然るに日韓併合後凡そ十二年になりますが、未だに長白山と云ふ鐵門をピタリと閉してあります。元來安奉線や未設の吉會線の如きは潜戸か路次で、一の地方的鐵道である。此の門を打貫かなければならぬ、經濟的に此長白山を打抜くことは日本の爲すべき大なる使命であります。滿鐵へ聞き合えました所が、長白山を打抜くと云ふやうな計畫は持つて居らぬ。併し國境附近の鐵道線の測量をして居ないこと

はないが、それは一億圓も掛るし又非常の難工事である、到底駄目であると云ふ話である。蘇士の運河は今日ド、レセツプスの力で開通されて居る爲に世界の交通系統が非常に變更せられて人類の慶福を齎したのでありますが、ド、レセツプスの蘇士運河開鑿に比べれば、此の長白山を打抜く位のこととは、東洋を文化的に經濟的に一家となして親善の實を擧げやうとする上には何でもないことである。現在どう云ふ状態であるか、此の長白山に浴ふて流れる鴨綠江豆滿江から不平鮮人が入つて來るので、一里置き二里隔きに警官を配置して居る、それは事實である、夢ではないのであります。警官も人でありますが氷點下二十度三十度のこの國境に人垣を造つて居る、國境の延長は下關から黑磯までの距離がある。此間に人垣を造つたと云ふことを一寸考へて頂きたい。人垣を造つて不平鮮人の這入つて來るのを調べて居る。其爲にどれだけ國帑を費して居るか、そうした無用の費目を文化的經濟的使途に充用したならば長白山の開放は何でもないのであります。私は萬里の長城を見まして奏の始皇の雄大にし

て甚だ愚劣なる仕方驚いた一人ですが、萬里の長城にも増して今日の國境對策は實に愚劣である。此の長白山が閉されて居る爲に朝鮮の富は決して朝鮮を開發して居らぬ。朝鮮の富は逆流して悉く大阪へ集まる、鮮滿の開發を指導獎勵すべき所の特殊銀行若くは特殊會社の行金や資金は何に使はれて居るか、それは皆大阪に於ける所の投機業者に依つて濫費されて居るのであります。斯の如き政策、斯の如き行爲を以て過去十二年間に何事をやつたか、内地人が朝鮮へ移住して居るのは僅に三十五萬人でございます。是れは皆根本の精神が誤つて居るから、總てさう云ふやうな結果が枝となり葉となつて現はれて來て居るのである。私が京城に居ると内地から友人が尋ねて來て朝鮮は危険だと思つたが案外變りはないといふやうな事をいふ。さう云ふ思想が瀰蔓して居るのは何故である、一家の兄弟であり姉妹である所の人々に對して、内地人自身が斯の如き危惧の念を懷く所の根本は何である。是れは遣らすぶつたくりの拳骨主義が累を爲して居る。さうして今日行詰つたのであります。元來弱者に對し

て傲慢の態度を取り、拳骨を振り上げ足蹴にするのは極めて卑怯である。そして又少しく腕力の強い者には屈從する。朝鮮には大鹽平八郎も居なかつた、幡隨院長兵衛も居なかつた、木内宗吾も居なかつた。勿論朝鮮には封建制度の實現を見なかつたのでありますが、朝鮮の如き惡政に虐げられた國と民との中からは民衆の爲に氣を吐く所の人物が出なければならぬのにそれが無かつた。日本は幸ひにして斯の如き俠勇があつた。其の傳記を読みますと、其の行爲其の心術は、弱きを扶けて強きを挫く俠氣である。吾々は其の子孫である、強者の前に屈せざる態度は宜しいが、弱者に對して傲慢な態度を取るのはどう云ふ譯でありますか、若し朝鮮同化と云ふところが内地人の人格に同化せよと云ふ意味であるならば、同化は一部分に行はれて居る、其の典型は不平等鮮人であります。何故ならば今日の不平等鮮人は内地人の人格を其儘に取り入れて其の氣象が内地人の通りに同化して居るからであります。私は著述にも言論にも決して不平等鮮人といふ文字を用ひない。不逞と云ふが如き極度の惡罵は輕々しく申すべきでな

いと思ふ。朝鮮人の喧嘩を見て居ると、全く文字其儘喧ましき口の華であつて長き煙管を持ちながら兩方對立して頻に口論をする、激語を以てやつて居る。そして傍らに見て居る者に向つて公平な批判を求めて向ふの惡口を言ひ合ふのであります。決して手足を使はない。擲ぐり合ひは始まらない。其の鮮人が一度内地へ來ると非常に兇暴なものになる。去年の六月頃でありましたが、電車の車掌李判能は十六人の邦人を殺傷して居る。又最近池袋事件があつた。何か少しばかりのお湯の飛沫が掛つた、御免なさいと詫びたにも拘らず、何を此のヨボが生意氣だと云ふので事柄が大きくなつた。さうして巡査までが之に同じて非常に八釜しい問題が起つた。此事は朴春琴と云ふ友人から聞いたのでありますが、縷々其の實狀を語るを聞いて私は内地人の行爲を慨嘆せず居られなかつた。是は何であるか、朝鮮で喧嘩をして居れば口だけであるが、日本へ來れば拳骨を振り廻はす、是は姿見に映つた己れの姿である。切に内地人諸君の猛省を促す所以であります。

私は彼の三月騷擾の際に内地に居りましたが、十數年前朝鮮に居りまして、朝鮮の古書を讀む機會がありましたので、朝鮮の事に就ては萬事深甚な興味を以て觀て居りましたのみならず、私の朝鮮を去りました一の理由は、寺内伯の遣り方を見て、是は今に大變なことになると云ふことを感じ私は是を私の舊著文化史論の中に明白に書いて置きました。朝鮮問題の解決は一朝夕に出来るものではない、恐らく百年の懸案であります。私は或る意味から云つて寺内伯の手で朝鮮を追ひ出されたのでありますが、そうした因縁から三月騷擾に對しても、非常な注意を拂ひ、同時に一の期待を以つて居たのであります。夫れは朝鮮内地へ這入り込んで二十年も三十年も牧場や農園をやつて居る長老がある筈です夫等の長老が一度手を挙げれば熱狂して居る群集も鎮まつたといふやうな新聞の報導が何處か一ヶ所なりとありはしないかと思つて、眼を皿の如くして見て居つたのであります。然しながら不幸にして三月騷擾の鎮壓と云ふものはさう云ふ德望に依つて、若くは理解に依つて行はれたのではなかつたのであります。

日本人は加藤清正と云ふ強い軍人を有つて居つた。是れは朝鮮において泣く子も其の泣聲を止めると云ふ程強い人ですが、決して尊敬はされて居らぬ、威怖されて居るのであります。日本人の足跡は中古以後世界の諸所に印して居るのであります。海賊船などは西班牙まで遠征を試みて居ります。或は山田長政の如きは安南暹羅に赴いて居る。日本人の足跡の印したる所、日本人の追慕される一の事業若くは痕跡を止めた所が何處かにございませうか、或は文を以て、或は徳を以て、或は道を以て、何か其處に日本人の痕跡を残した箇所があれば伺ひたいのであります。拳骨で擲り付けた跡はある。其跡には呪咀、輕蔑、排斥の渦が卷いて居る。どんな辭書を見ても、排斥、呪咀、輕蔑を親善と書いてはあるまいと思ふのであります。我々は實際の生活上から觀ましても、亦道德の上から申しましても、文化ある國民として、今日まで取り來つた所のやらずぶつくりの傳統政策、斯う云ふものから離れなければならぬ。是は内地人に向つて切實に要求致します。

今度は御列席の朝鮮の方々のお耳の痛い事を少々申し上げねばならない。其の前に民族精神を形づくる上に種々重大な關係ある自然的要素と云ふものがあります。風土或は氣候、地理的關係、斯う云ふものが民族精神を形づくる上に關係がある。現に太陽と月の如き、太陽は人類の活動に月は睡眠に重大な關係があります。さう云ふ自然的要素と云ふものが非常に民族生活に關係があると考へます。曾て南北支那を周遊した時に香港から廣東に赴かうとして珠江を遡つたが、江の幅員が約三十哩、瀬戸内海の廣さでありまして一寸日本に見當らない。船が進むに従ひ兩方の岸が見えなくなつて殆ど水の中心に船が浮んで居る。それを一雨毎に箭の如き急流に變ずる日本の川と比較致しますと大陸と島國の相違が歴然と分るのであります。又京漢鐵道で漢口から北京に向ひましたが、其間約七百哩、山と云ふ山はない。所謂支那中原であります。さうして其の間に一本の道らしいものすらなかつた。之を島國の狀態に比較して見ると、甚しい相違がある。本年の夏などは暑さを感じまして、皆さんもお困りであつたらうと

考へます。殊に日本は氣溫が濕潤であるが爲に鬱陶しく蒸々する。大陸の空氣はドライでありますから、溫度は高いが體に感ずるのは爽快であります。暑さにしろ、寒さにしろ、凌ぎ好い。日本のはじめ／＼して何となく頭が重く鬱陶しい、元來梅雨期の前後が發狂者や自殺者の最も多い時であります。日本は東洋に於て一番自殺や發狂の多い國柄であります。さうして汗をかいてお湯に入る、即ち潔癖になるが、朝鮮支那の人はなか／＼お湯に入らない、今日は大分沐浴の習慣が付きましたが、十年ばかり前に友人が天津で家を建てる爲めに苦力を百人ほど頼んだ。所が臭いのみならず穢いから湯に入つたら何うかとすゝめた。丁度前に川が流れて居る、眞夏のことであるから彼所へ入つたら宜からうと云つて勧めたのであります。所が非常に震えて居る、何うした寒いのかと聞くと産れて初めて沐浴をやつたと云ふ(馬鹿云へと呼ぶ者あり)そして百人の中、八十人までは非常な熱が出て大騒ぎになり、日本人は俺達を殺すのだと數圓いて形勢が不穩になつたので、酒肴を與へて和解をしたといふ一場の笑話がある。

あります(場内騒然)それは諸君の如く清潔に生活して居る者とは違ふ、今私は空氣と沐浴の關係、沐浴と癖潔の關係を述べる爲めに十年前さう云ふことがあつたと云ふことを申上げたのであります(此時演説を妨碍すべく喧騒する者あり)大陸の方々は極めて度量廣大であります。日本人の如くせゝこましくない、極めて度量が廣い(笑聲起る)従つて人の言は十分之を最後まで聽くの雅量を持たねばならぬ(うまい／＼と呼ぶ者あり)此の地理的關係と云ふものが先刻申した如く一の動かざる宿命であります爲に、種々の困難が生ずる。

朝鮮は大陸と島國との間に介在して、絶えず支那から種々の朝貢を迫られ、日本からは拳骨を持つて行く。元時代には美人を十人宛元に送つて居つた。併しそれは宜くないと云つて元自身に廢して居ります。明に對しては臣従、清に對しては朝貢の禮を取つて居る、斯の如く隣接の大陸からは壓迫を加へられ、又日本からは倭寇が出掛けて行く、其の爲に國交は權謀術數に富んだものになつたのであります。如何にして

此の大陸の壓迫及島國の侵襲に應ずべきであるか、若し武力を以て之に對抗せんには非常な大事業であります、朝鮮は大陸と島國の間に挟まつた地理的關係の爲に國民の民族性が夥しく虐げられた。加之李朝に入つてから兩班の横暴は實に甚しかつた。是は實に我々の想像外である、一度權力を握つて政治を行ふ所の位地に立ちました以上は、絶対に無制限な掠奪を行つた。此の兩班の横暴は世界に類例の無い深刻なものであつた。實に朝鮮人はご同情に値する民族はないのであります。丁度併合當時でありましたが、イヴニングポストが朝鮮の状態を評した言葉があります。朝鮮人は迷信と貧血の爲に其の開發力が夥しく衰弱して居る。斯う云ふ評を下したのであります。李朝五百年の惡政の爲に人民は非常の壓迫を受け、生活上如何ばかり虐げられたことをごさいます。私は古史古書を繙きまして一種の感に打たれることが澤山ある中にも此處に持參した丙子日記であります。此の丙子日記には何う云ふことが書いてあるか、丁度明の末頃になつて愛親覺羅が滿洲に起つて來た。朝鮮は當時明國に臣従して居つた、

關係だつたのでありますから、明は朝鮮に向つて援兵を請ふたのであります。所が其時の王様は光海君でありました、丁度今から三百十數年前であります、光海君は何と云つて援兵を出したか、都元帥の姜弘立、副元帥の金景瑞に二萬の兵を授けて、愛親覺羅を挟み撃に仕やうとして朝鮮から兵を出したのでありますが、其の進發に際し總大將に向つて何と云つたか『明清の強弱を見て向背せよ、若し清太祖境に至らば密使を送り、朝鮮已むを得ずして兵を送るの意を傳へよ』との密旨を含めた。大將は何うして宜いか分らない、結局どうなつたかといふと遂に勢の強い清太祖に降參して、明軍を惱ました。當時廷臣等は皆其日其日の日和見政策に従つて去就曖昧、誠に卑劣なる心術を以て動いて居たが、其中にあつて此忘恩的對策の不可を説き、尊明主義を以て一貫せんことを高調したのは、王妃柳氏一人のみであつた。其後明軍稍々振ふと聞いて、今度は明に欺を通じて清に當つた。清は朝鮮の面従服背の心術を看破したので、光海君の後を承けた仁祖に對し、清の太祖は激怒して問罪の兵を八道に進め王を

江華島に逐ひ詰め、軍門に降らしめた。丁卯の亂とは即ち是れである。爾來朝鮮は表面恭順を装ひ、清に臣事したけれども、内心は依然として明と提携して居たので、再び太祖に攻め寄せられ、江都を陥没され、二王子を質として捕へられ、何の反抗なしに城下の辱を受くるに至つたのが、即ち丙子の亂である、是れが其の日記で閣議のことが皆書かれてある。此の一卷の書物を通じて見ますと、我々想像以外の事實が現はれて来る。段々清軍が押寄せて来て、愈々國家存亡の大危機に臨んだ時、都承旨鄭廣敬は老父避難の地賊に罹つたと聞いて、方寸錯亂、神魂已に散じ、職責を盡す能はず、と云つて退き、副校理尹集は和を主とする鳴吉を斬らんと敦圀いた程の主戦論者であつたが、祖父妻子兄弟の避難せる南陽に賊軍侵入せりと聞いて、是も亦、心神喪失、視聽迷錯正氣を失へるが如く、任務に堪へない、と解職を請ふて退去して了つた。更に此の大困難大時局を收拾すべき職責にある當時の總理大臣にして參謀總長を兼ねたる金瑬はどうであつたか、嬪宮は江都に難を避け、城壕の守りは稀薄を訴へ、戦費

糧餉に、仁祖は日夜懊惱苦慮せる時、瑬の私邸は軍官を以て警護し、彼の妻は駕轎に乗つて往來し、瑬の財は七十駄に積むほどであつたと云ふ。それから又懲惡錄によりますと、文祿の役に王様が逃げて平壤に落ち延びる途中、東坡と云ふ驛に於て護衛の士卒は饑渴の餘り、王様の食膳を食つて了つて、王様が到着した時には一物もなかつた。厨吏は恐れを爲して逃げ去つたと云ふことが書いてある。是は我々が想像し難いことであります。

朝鮮の人は忠義に對する感念は恐ろしく缺乏して居る。殆ど忠と云ふ念慮はない。即ち李王家に對する所の感念なども、内地人が考へるのとはまるきり違つた觀方を致して居る。李家の興廢は今日問題でない。只親孝行は内地人の宜しく模範とすべき特長を有つて居ります。是れは儒教の良き半面でありまして、食事の際にも親が箸を取らない内は決して食事は致しませぬ。さうして如何なる場合にも決して親に背いて居ないのであります。内地人は親であらうと、何であらうと楯を突く、さう云ふことは

朝鮮人を見ると、非常に野蠻な國民と見るのであります。朝鮮で極端な惡口がある、それは汝の母を姦したと云ふのであります。さう云ふことを言はれた時其の子供は殆ど死力を以て其の惡罵をした者にぶつかつて行くのであります。親孝行は誇るに足りますが、忠義の感念は我々の想像以外に冷淡なものである。李朝の存在と云ふことも、久しい間兩班が惡政を行つて絶對的掠奪の自由を承認する一の組合長であつた間だけ之を認めたのでありまして、其の李朝が今日何等の權力を持たないやうになつたと同時に、朝鮮人の頭から宗室の考は悉く去つて居るのであります。李朝の兩班が何事をしたか一々論じては居て長くなるから省きますが、東西に黨を立て、老論少論に分れ、其の間に種々の黨派が別れて政權を取り合ふ、一度政權を握れば自分の政敵を打殺す。一度に數十人の人間が殺されて居る。政敵に聊かも安息を與へたい。黨派は政友會憲政會のやうなものでありますが、黨と黨との争ひは激烈であり慘酷である。さうして其の争ひがさう云ふ事から起るかと思はれますと、一例を云へば趙光祖と云

ふ頭の良き士人がある。是れは王様の寵遇を得て居た、此の趙光祖を何うかして叩き落さなければならぬといふので、いろ／＼陰謀をめぐらし流言を放ち、最後に虫に樹皮を剥食さした、その文句は走肖爲王といふのでありましたが、其の爲め趙光祖は遂に斬に處せられた。其の黨羽も皆な除かれたのであります。中には誰某は不軌を圖らうとして居ると云ふ無名の一本の投書で大疑獄、大虐殺が起つて居ることを朝鮮人の書物の中に歴然と書いてあるのであります。其の競争の激烈なることと、又其仕方の慘忍なることは、殆ど類例なき仕方を以て行はれたのである。大院君の事業は先づ此黨派の争いを一掃しなければ朝鮮はさうにもならない。斯う云ふことに着眼して、儒生の根據として居る全道の書院を毀つたのであります。さうして南北兩派から將相各二人を任命しました。併ながら何百年に亘つた黨派の因襲は一朝に抜くことは出來ない。矢張り最後まで老論派の權力が優越であつて、全國に虎の如き暴威を揮つた。朝鮮にあつては失權は餓死である。權力に離れては生活の絶滅である。如何にし

ても政權を取らなければならないので、陰謀は盛んに行はれ、其の手段も恐るべき慘酷なやり方で政敵を陥れたのであります。斯くして政權を得たる兩班は如何なる政治を行つたかを考へると、實に身の毛が竦立つやうなことをやつて居る。

種々申上げると時間がかゝりますし最早や與へられたる刻限に迫つて居りますから簡短に其中の一例を申上げます。白骨に課税して居る。斯う云ふことがあります。お前は一朝戦争のある時には兵隊になるべき者であると、軍籍に名を録する。そして兵役免除税又は軍費ともいふべき性質の税金として布なら二匹、銀なら四兩を壯丁から徴發する。是れが壯丁ならば宜しいのであります。三歳位の小兒も矢張り軍籍に録して税金を取立てる。三歳の小兒ならまだ能いが懷妊して居て性の男とも女とも定まらぬものを兵役簿に録してやはり課税する。生ある者ならばまだ能いが死んで了つて跡方の無い者を種に二重三重に親類縁者から税金を取立つて居ります。牧民心書の著者は自分が康津で目撃した事實を恁う書いて居る。兒生れて三日にして軍籍に入る者がある。

税金の代りに牛を持つて行つた。小作人は牛が生命である。之を持つて行かれては第一稼ぐことが出来ぬ、無論食ふことが出来ない、民、刀を抜き自から其の陽莖を割いて曰く、我は斯う云ふものがあるから子供が出来て此の困危を受くと、妻は其の莖を持つて役人に訴へたのであります。血猶ほ淋々たり、且つ哭し且つ訴ふ、聞者之を拒む役人は其様なことは知らぬと空嘯いて居る。——といふ記事であります。大院君と閔妃の政治も、只人の頭をチョン斬る政治であつた。今日朝鮮の方が多數お見えであるが、御自身の國に嘗て斯様なことが行はれた居つたことは能く／＼考へらるべきであります。此程京城で種々の税源を調べた所が、京城の兩班が地方に澤山の土地を持つて居る。それが税源の重なるものであることが分つたのであります。それは舊韓國時代の人民から捲き上げた田地である、全道の目星しい所は悉く舊韓國時代の權力者であつた掠奪階級の兩班の所有になつて居るのであります。

猶ほ朝鮮の迷信其他に就て申上たいと考へて居りましたが、それは後日の機會に譲

ります。時間がないから只僅に申上げて置く。朝鮮を亡ぼしたものは朝鮮である。朝鮮の權力階級である。此の權力階級の惡政の爲に山も川も枯渇して、何事も衰弱して瀕死の状態であつた。獨立を提唱される方々も朝鮮には少くないが、手を放てば倒れ去る卓上の箸の如く、獨歩の能力なきものには獨力の資格が無いのであります。口舌の上に獨立は建設されぬ。それは紙もて作れる塔である。朝鮮は晩年斯る状態に置かれて居ましたので、打棄つて置いても、暴動を起して兩班を絶滅する社會革命の運動を起すべき機運に迫つて居たのであります。其の間際に革命の機運を轉換代行したのが日清日露の兩役であります。其時の政治家にして少しく識見に富むた者があるならば、此の社會的革命の機運に乗じて平民の味方となつて惡政を行つた兩班を膺懲すべきであつた。然るに併合後に行はれた政策はどうであつたか、惡政を行つた兩班に榮爵を與へ、さうして惡政に虐げられた平民、殊に西北人に向つて探偵を付けたのであります。此の西北人は李朝に對して深刻なる恨みを持つて居る、朝鮮人の元氣は西北人

が概ね占めて居る、極めて果斷なる氣性を有つて居るのであります。之に向つて何をしたかと云へば、併合後に於て悉く探偵を附した。此の探偵政策の爲に、朝鮮の元氣の代表ともいふべき西北人は或は浦潮に去り、或はペトログラードに去り、或は米國に去り、遂に世界に瀾蔓して了つたのであります。元來同化と云ふことは究極の理想であつて、政策ではないのであります。之を政策と考へる爲に澤山間違が出て來る。無暗に同化をせよと云つても同化は出來ませぬ。曾て英國のマコーレーが印度教育案を樹てました時非常な抱負を以て壯語しましたが、今日依然として印度人は印度人である。同化と云ふことは實現されるか知れませぬが、形に於て迫るべきものでなく心の中から自發的に融和した、つまり究極の理想であります。共存同榮は支那に對して説くに及ばぬ、又内鮮融和も鮮人に對して説くに及ばぬ、私が最初に申した如く内地人の人格の完成であります。元來他民族の同化は非常な難問題である。善惡何れにせよ數千年間に亘つて育成された民族の心性でありますから、如何なる大英雄が現はれても一夜に膚髪の色は變じ得られないと同じやうに、一氣に同化を追うが如きは亂暴至極

であります。朝鮮人が和服を着て居らうが、私達が朝鮮服を着けて居らうが、形の上はどうしても宜い。只精神に於て結合する所のものがなければならぬ。今日の總督政治を文化政策と申すのであります。文化政策は非常に賛成であるが、眞に文化政策の實を擧げやうとするならば今日の如き政策ではまだ及びもないのであります。我々は人類相愛の大義に則つて、世界に於ける人類の生活を合理的ならしむべき目的に向つて進まねばならぬ。東洋文明の保合映發は、東洋に家を爲し、東洋に國を爲す所の吾等亞細亞人の共通の使命である。この見地から或は朝鮮に東洋文化大學文藝大學といふやうなものを造り、世界の學者を招聘してさうして我々は東洋文明の保合映發の目的の下に一致し又最後にはこの大目的の遂行と共に同化したいと思ふのであります。それにはお互自分ばかりのことを考へず、内地人は内地人の缺點を悟り朝鮮人は朝鮮人の缺點を悟り、又朝鮮人を銃劍や警官の佩劍から開放して、我々民衆の中に移し、お互に相寄り相助けて人格を完成することに於て結合して行きたいと云ふことを申述ぶる次第であります。

半島文化問題としての朝鮮

早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎

一 半島文化の特色

今夕の講演會に私が出席するやうになりましたのは、細井肇君の勧誘に基いたのであります。私は二週間ほど前に初めて同君に逢つたのでありますが、同君が今より十數年前に書いた朝鮮文化史論と云ふ書物は、數年來私の書齋に飾つてあるのであります。私が持つて居る朝鮮に關する數十冊に過ぎない圖書の内に、多くの利益を私に與へた文献は朝鮮文化史論であります。同君はまた夫から昨年「鮮滿の經營」と云ふ大きな著述をされた。さて只今同君の講演中、大分批評の聲も囁しくあつたやうでありましたが、一體私の目から見るならば、細井君は朝鮮の方々の親友であると思ふのであり

ます。決して朝鮮の過去の失策や欠點を並べて快を貪らうと云ふ方ではないので、只演説の順序として多少歴史的事實の一面を述べたものであると思ふのであります。私は細井君の多くの著書を読んで同君の朝鮮に對する同情ある立場に好意を表しまして、今夕の講演會に出席することを承諾したのであります。

私は日本の大なる問題は、朝鮮問題、支那問題、露西亞問題であると考へます。然るに支那問題は、折々重大なる外交問題となつて現はれるが故に社會の耳目を聳かせます。又露西亞問題の如きは、現に長春會議を開いて居りますから、多大の注意を拂はれてゐます。然るに朝鮮問題は餘り多く日本の新聞に取扱はれない傾きがある。朝鮮人諸君に色々な不平がある、訴へたいことがあるとしまして、是が十分に新聞雜誌の反響がない、否あつても何處となく物足らぬと云ふ憾みがある。併ながら朝鮮問題は日本の政治的問題としても、或は文化の問題としても、甚だ重大なる問題でありますから、識者はいふ迄もなく、國民の重立ちたる人々は朝鮮に關する研究を積まな

ければならぬと云ふことは私の宿論であります。私も其の意味よりして多少朝鮮に注意を拂つて居りますけれども、研究する所極めて淺いのであります。昨年朝鮮を訪問致しましたが、一月足らずの旅行でございまして、十分に觀察することの出来なかつたのを甚だ遺憾とするのであります。不完全なる材料に基いてお話をすると云ふことは遠慮申上げて然るべきであります。私は文化史の立場から朝鮮を取り扱つて、諸君の御批評を求めたいと思ふのであります。一體世界の文化を大別しますれば、大陸文化、半島文化、島國文化となる。言ふまでもなく、日本は島國文化で、朝鮮は半島の文化である。島國の文化を背景とする我々日本人は半島の文化なるものを理會するには甚だしい困難を感じるのである。又朝鮮人諸君は自分自分が半島の文化の中に育まれ來つたものであるから、島國固有の文化を理會するに多少の面倒があるだらうと思ひます。我々島國人が、支那の如き露西亞の如き、或は獨逸奧地利の如き、或は佛蘭西の如き大陸文明を理會するには多少の困難がある。然るに我々は英國の文明を理會

するには割合に容易い。英國のは矢張り島國文化である。日本は島國であるけれど日本の中に亦多くの小半島がある。其の半島を考へて見ると、朝鮮の問題を解決するに幾らか便利を得るであらうと思ひます。例へば東海道に於て伊豆半島がある。伊豆「出づ」である。それからモウ少し西の方へゆくと、尾張の國に知多半島と云ふ細長い半島があります。それから紀伊國が半島と云ふ程ではないが、矢張り半島の形を爲して太平洋の中に出て居る。ズッと西南へ参りますと、肥前半島、即ち長崎を有する半島、それから日向大隅薩摩を合せたる九州の南方の半島があり、能登も亦半島である。さう云ふやうに見ると半島と云ふものは日本の文化史に於て特別な働きをして居るやうに思ふのであります。例へば薩摩がさう云ふ譯で維新の際に新日本を指導する一つの原動力になつたかと云へば、色々の理由はあるが、數百年來海外と貿易をやり、或は海外の事情に通じて居た。即ち富もあれば力もあつたのだ。單に薩南尙武の

氣象のためのみでなかつた。和蘭の文明を入れたのは肥前半島であります。伊豆の下田はアングロサクソンの文明を最近に取入れたのであります。即ち米國の船が最初下田に來たのである。戸田の港へはブーチャンと云ふ露西亞の船長が來て造船術を残して参りました。そこで韭山に江川坦南先生と云ふ有名な造船家兵術家が興りました。米國と露國の海軍の影響であります。この人が幕末の我が國の國防に多大なる貢獻をしたのであります。能登は沿海州、或は滿州朝鮮等の交通の衝に當つたのではあるまいか、折々能登へは對岸から船が來た形跡があります。日本と云ふ島國の中でさへも半島と云ふものは特別の使命を盡したものであります。

今度は世界の大半島を比べて見ると、誰でも最初に頭に浮ぶのは巴爾幹半島である、とりわけて希臘である。伊太利である。其次はイペリヤ半島である。即ち西班牙葡萄牙である。それから亞拉比亞が一種の半島である。半島と云ふには餘り大きい、あれも、海に圍まれたる陸で大きな半島である。其次は印度は大陸的半島である

が、矢張り半島である。夫から印度支那が半島である。次に山東海角が一種の半島、遼東半島、朝鮮半島、此等のものが世界の文化史に於て種々な働きをした半島であります。同じ半島でも私の考では朝鮮は特別の關係であつて、他に比類のない位地を占めた半島であると思ふのであります。希臘は御承知の通り地中海の中にある、地中海の文明は何處から起つたかと云へばナイル河畔から起つたのであります。ナイル河畔に埃及の文明が起り、或は同時にクリート島にも發生した。夫から多島海に入つて希臘文明、それにバビロンの文明とフェニシアの文明が影響を及ぼし、恐くは印度の文明も遠まはしの感化を與へて希臘の文明となり、アゼンス文明の花を開きました。かくて希臘の文明は其の絶頂に達した。元と希臘人は歐羅巴大陸から移動して來たのであります。アリアン人種に屬する様々な種族、バラゲス族やエオリア族が次ぎ／＼に前後して入つて來て、最後に紀元前十一世紀頃にドーリヤ族が南下して、エオリア族とイオニア族とを壓服した。イオニヤ種族は希臘の中央の東部や多島海に逃れた。そ

こでドーリヤ人がスバルタ文明を造つた。それに對抗してアゼンス文明が起り、それに對抗してセーベスも時めいた時代があり、稍々後れてマセドニアの文明が起つた。アレキサンダー大王はこの文明を以て西部亞細亞に臨みました。希臘は斯の如く澤山の種族に分れて居りましたが、外敵に當る時には一致した。さうして人種が一つで言語が一つであり、又宗教にも相違がありませんから、希臘は容易く聯合し得た。それで最強者を盟主として外敵に當つた。強敵波斯に勝ちて、遂に希臘の文化は地中海沿岸はいふ迄も無く遠く印度まで影響を及ぼすやうになつた。要するに希臘は人種的には北方より侵入を蒙つたが、文化的には出でて四方を征服したのである。又伊太利の文明は、羅馬人と云ふラテン民族が中心となつて發達した。羅馬文明が希臘の文明を取入れて大を爲し、さうして次第に大陸の野蠻民族を感化して阿弗利加歐羅巴亞細亞の間に基礎を樹てました。即ちローマも亦半島より出でて大陸經營を致しました。これは希臘と同じく、地中海といふ文化の根源地を背景としてゐるからであります。イベ

リア半島の文明は八世紀の初めに至つて、サラセン人の爲に大分征服された。半島が往々にして海外の攻撃を受ける場合あることの一例である。サラセンの勢ひは疾風の枯葉を捲くがごとく、戦つて勝たざるなく、攻めて陥らざるなしといふ勢であつた。西班牙人は一時は殆ど北方の山中に追込められて辛うじて餘喘を保ちました。西ゴート王國は滅亡したが、ガリラアのフランク人の奮闘によりて漸く勝ち誇つたサラセン人を撃退することが出来た。その後數世紀を経て新大陸發見の時代となつた。葡萄牙と西班牙とは東西に別れて世界的活動をする事になつた。その勢は物凄いもので、一時世界の海上權はその掌中に歸した。次に亞細亞の半島を研究すると、西の方から數へると、アラビヤ半島であります。それはセミチック人種の搖籃で、人種の流れは絶えずパレスタイン地方に注ぎ中世紀に至りてはサラセンの文化を興して北部アフリカを支配した。しかし今は回教その物を有して、その勢侮るべからざるものがあるが、アラビア自體は殆んど顧るに足らない。たゞ半島は被侵略者の位置に立つよりも侵略者を

養成したことを注意すべきである。印度の文明は中央亞細亞より西北の大山脈を越え來れるアリアン民族の建設したものである。其處に起つた文明は佛教によりて東洋諸國に普及した。しかし印度は進んで外部を征服することなく或時はサラセン人に、或時は蒙古人に、或時は歐洲人によりて征服せられた。印度は矢張大きな半島である。大陸的半島と稱すべきである。支那の文明は四五千年前から發達しはじめたもので、黄河沿岸より次第に揚子江流域に及んで、偉大なる文明の基礎が据えられて四周を壓して、天下を統一した積であつた。されば朝鮮半島は古代からこの壓迫を常に感じたのは無理もない、小さくして後れて發達した朝鮮文化が中國の文明に對して逆襲をすることは不可能であつて、むしろその文明は中國文明の模倣に過ぎないものになつたのは萬已むをえざることであつた。日本がもし上古時代に於てクレート島の如き文明を發達してゐたとすれば、支那に對して何等かの文化的影響を與へたであらうが、それは出來ぬ相談となつた。たゞ太平洋が大なる地中海の如きものとなつた、十九世紀の後半

に至りて、初めて日本の文化は大陸文化に感化を及ぼし得るやうになつた。かゝる事情があるので、朝鮮は半島でも希臘半島や伊太利半島と大に違ふ所が生ずるに至つたのであります。之に加ふるに、朝鮮のもう一つの困難は、その西北、沿海州、満州、蒙古の方面にかけて終始猛烈な人種が移動して來たと云ふことであります。

二 東亞に於ける人種移動の趨勢

中央亞細亞の高原に一大沙漠がある。これは土地の不可抗的な乾燥の結果として生じたものである。この沙漠に暴風が起るごとに、その周囲の部落は沙に埋もれる。よつて慄悍な人種は馬に乗つて他に移動せざるをえない。かくして中央亞細亞は古來勇猛なる人種を東亞に驅逐した。蒙古、滿洲の諸民族の發祥地はこの邊であらふ。是等の人種は次ぎ／＼に朝鮮をめがけて殺到した。その或ものは海峡を突破して、我國に渡來した。或は貊、或は濊、或は沃沮、或は扶餘その他の蒙古諸民族はこの大なる人種的波流の動搖を語るものに外ならない。わが日本民族は察するにアイヌ以前に數多の

先住民族あり、多分亞細亞大陸と土地の聯絡があつた時代に移動して來てゐたのであらふ。是等の先住諸民族をアイヌが征服したる所に蒙古系の人種が朝鮮を經由して渡來し、又南洋方面よりもインドネシア人種の渡來ありて混合化成して現在の民族を形成したものであらふ。朝鮮民族は大部分大陸系なれども、その東南地方はインドネシア人種の痕迹と認むべく、いづれにしても人種的には我が民族と大同小異である。我が國の上古史は神話と史實との混合を免れないが、朝鮮とは極めて密接なる關係を有することはいふ迄もない。或史家は日本の國家創成と大陸に於ける人種の移動が密接の關係があると考へてゐる。周の終りの頃に漢民族が非常に發展した爲に、北方の民族は段々驅逐せられて朝鮮へ移り、その波動が次第に我島國に及んだといふのである。又或學者は漢の武帝が朝鮮を征伐して、漢の四郡を遼東半島及西北朝鮮にかけて設立した。従つて南部朝鮮は壓迫を感じて次第に我が國の邊疆に動搖を生じ、結局國家建設の事業に刺激を與へたのでないかといふ説を附してゐる。武帝の朝鮮征伐は、紀元

前一〇八年で今より二千年以前であるから、我國家の創生時代と關係してみても面白い。或西洋の學者はまたインドネシア民族が大舉して南洋より北上したことが我が日本國家の成立と何等かの交渉があるのではないかと推測する。これは實に興味ある問題で、これが古物學や、人類學や、史蹟發掘事業の結果として、十分に解決せらるゝ時は我が國の上古史に一大光明が投せられるのである。要するに日本民族の大多數は朝鮮を經過して大陸より渡來したるものゝ子孫であると思つて差支はない。私は朝鮮の地圖を見る毎に感ずるはそれが丁度洋服姿の左腕を斜めに伸ばしてゐるによくも似てゐるといふ事である。胸と腕との縫目が鴨綠江で、左乳の邊が北京で、左肩は滿蒙である。此胸からも肩からも腕にゆくのは朝飯前のことである。されば箕子の子孫が遼東に建國し、衛滿に追はれたり、秦の亡人が逃れて來て、辰韓を造つたり、或は馬韓、辨韓と云ふ國が出来たり、西北人種が南下して百濟、高麗を建て、我が民族と多分同一種族に屬する新羅の建國ともなつた。兎に角朝鮮は地形上やむなく西北から始終壓迫され

て來た。漢以來唐の太守の遠征となり、元は五度入寇し、それで明の太祖の積極的外交政策が成功して朝鮮は愈々事大主義をとる事となつた。即ち尊明主義が確立した。清の太宗もまた朝鮮を征服した。しかも左腕の指先位の處に武勇にして大膽なる日本民族が雄視してゐるから、そして機會あらば襲ひ來んとする風があつたから、朝鮮は外交上至難の位置にあつた。かくして李朝の太祖の遺訓、「北には禮を失はざれ、南には信を失はざれ」といふことの有意義なることがわかる。

恐らくは朝鮮民族は古來強國の間に介在して西、北及び南からの強い壓迫を感じた實に氣の毒な位置にあつたものである。

三 島國日本の特徴

日本が今日まで國土の安全と獨立を維持しえたのは主として島國たるがためである。島國の環境は政治に、道德に、宗教に、文藝に一種特有のものを醗酵せしめた。ことに日本が高麗を東道の主人として襲ひ來つた元の大軍に打ち勝つたのは島國の自

然の應援によること少からざるを認めなければならぬ。徳川時代の末に歐米列國の干涉があつたが、之を切り抜けたのは二百數十年の鎖國を経たるに拘らず、島國人固有の海事思想が復活して早く強大なる海軍を創造したためである。日露戦争の終局の勝利は海上權を握りたる我が國の手に歸したのである。朝鮮は文祿の役には李舜臣の如き海軍の名將あつて、我が海軍を悩ましたものだが、鴨綠江を渡つて來る西及び北の勢力に對しては手を拱ねて傍觀するより外はなかつた。そこで我々は國家として仕合せなる歴史と境遇を感謝すると共に、殆んど祖先を同じうしてゐた朝鮮民族の數奇なる運命に對しては大に同情を寄せなければならぬ。

そこで日本と朝鮮とは先祖が同じであるならば、何故に仲が悪いか。この難問は解釋することは容易しい。一家の内でも兄弟喧嘩もあれば夫婦喧嘩もある、又本家別家が喧嘩することも珍しくない。一衣帶水を隔てゝ居ると競争をしなくなる、お互に領土を擴張したり、お互に利益を取りたいから競争になる。壹岐對馬の邊民は折々南朝

鮮を攻め、彼も亦我を打つたことは屢々であつた。朝鮮の立場から考へれば、朝鮮の文化は箕子以來支那から入つて居るから、漢民族には多大の敬意を表してゐた。我が國は應神の朝はじめて使を吳に派したのが支那との直接交通の最初である。又隋唐以後、我が國は直接支那と交通して留學生を送りて、制度文物や宗教や工藝を學ばしめたが、應神朝以後その時まで、この大陸文化を日本に紹介したものは朝鮮であつた。されば朝鮮は支那の文化に心酔してゐると正比例して、日本を野蠻だと思つてゐた。徳川時代に來朝した申維翰の海遊録によると日本酒は蠻酒であつて、日本船は蠻船と書いてある。日本の詩人墨客の文字の貧弱なるに對しては、輕蔑の態度をさへ現はしてゐる。詮するに日本人は戦争には強いが、文にかけてはまだまだ駄目であると言つた風である。ここに豊太閤の朝鮮征伐は大體失敗であつて、朝鮮人は明の援助に感謝して、尊明主義がますます明白となり、濃厚となつたが、征韓諸將が人心收攬の術に失敗して、排日的感情を強めることゝなつた。これは今日の朝鮮問題の解決を困難な

らしむる原因の一つである。

朝鮮はかくの如く、三方の勢力に環視せられてゐたから自立獨行は殆んど不可能であつた。若しアレキサンダー大王のやうな大英雄があらはれて外征を事としたならば一時は時めくことが出来たであらふが、地理上、その結果を永續することが不可能であつたであらふ。若しまた西北南の三勢力をうまく操縦して勢力均衡をはかつたならば一時小康をえたであらふが、文明の勢力は進まずしてかゝる平和的解決を許さなかつた。故に支那及び北方に對しては事大思想でゆき、日本に向つては何處までも排日感情で推し通し、あはよくば自立せんとする欲望が盛んであつたのは無理もない。若し我々もこの島國の代りに、朝鮮の位置にあつたとしたならば略々同一の事をやつたではなからうか、地理的恩恵を忘れて、朝鮮民族の不運に同情することを忘れてはならぬ。

四 日本と朝鮮との史的關係

神功皇后の三韓征伐のことについては朝鮮側の史料は甚だ貧弱だといふことである。しかし西南の豪族が南朝鮮と氣脈を通じて中央政府の威令を奉せざるが故に、將を獲んとすれば、先づ馬を射よといふ筆法で、この遠征を斷行されたことであらう。垂仁の朝までに任那府を置いたことが事實であれば仲哀天皇の以前に我が國の大陸政策が着手せられたと見なさなければならぬ。朝鮮には夙に儒教が入り、且つ佛教も傳はり居りしたため、神道文化以外の他の要素を有せなかつた我が國は朝鮮を通じて大陸文化の風に當つた次第であつた。先づ第一に儒教の渡來を記さなければならぬ。佛教が公然と我が國に傳へられたのは欽明天皇の御世なれども、九州の北部では餘ほご前から輸入せられてゐたことと思ふ。朝鮮經由の佛教は形式的佛教で、加持祈禱が主眼で、哲學的方面が顧みられなかつたが、之と共に百般の新工藝が輸入せられたことは大なる事件であつた。又神道文化に對する刺戟も著しいものがあつた。然るに我が國は島國の影響として外交には不慣で、大陸政策は失敗に終つた。其破綻は天智天皇の

時代にはあらはれた。それは新羅に金春秋といふ英雄があらはれて、唐の勢力を利用して、百濟と、高麗とを滅ぼした。唐はまた新羅をも併呑せんと企てたが、新羅には金庾信といふ名將がゐて用意をさく／＼怠りなかつたので、終にこの計劃を放棄した。そこで、新羅が獨立して了つた。日本の援兵は百濟を救はんとして却つて敗れた。そこで朝鮮の背後に新大帝國が聳えて見えたから、我が國は大に驚いて、朝鮮を放棄して壹岐、對馬や瀬戸内海の城壘までも修築して、國防工事に熱中した。この退嬰政策は我が民族の海外發展を阻碍したことは少からざるものがあつた。一時唐との交通も中止した位であつた。宋になりても商人や僧侶が往來したが、政府からの使節はゆかなかつた。

元は我が國の黄金に富むといふ評判——多分これは奈良の大佛が黄金を塗つたので支那までも評判になつたのであらう——を聞いて、侵略の野望を起し、當時朝鮮を統一してゐた高麗に迫つて案内役たらしめた。この計劃も大失敗に終つたが、我が國の

西南の武士は之を含んで、復讐の精神を起した。承久の亂以後、南北兩朝の争、應仁の亂を経て、天下は麻の如く亂れた。失意のものは國外に發展の地を見出さねばならなくなつた。しかも中央政府の命令は毫も行はれない。それに弘安の役の恨みがあるといふのだから青年血氣の勇あるものは朝鮮、遼東半島、楊子江沿岸までも荒しまはつた。これは有名な倭寇である。この記録はむしろ朝鮮や支那の方に多く保存されてある、殊に支那の稗史小説の類に多く記されてあるそうである。朝鮮を荒したものは對馬人が一番に多かつたといふことである。李朝の創立者李成桂が名をなしたのは倭寇を退治したゝめであつた。

豊太閤の朝鮮征伐は明と對等の貿易を希望して容れられなかつた爲めだともいひ元に對する腹癒せだともいはれるが、その結果はます／＼強い排日思想を扶植した。豊臣氏自ら二代にして滅びざるをえない犠牲を拂つた。明もまた自己保存のために大兵を朝鮮に送り、そのために國帑を空しうして清のために滅ぼさるゝに至つたといはれ

る。徳川家康は國際平和を維持して、民力を休養せしめんとして、朝鮮と和睦して、貿易を開いた。朝鮮は明を徳としたが、清を尊ばなかつたが、結局征服せられて清の正朔を奉ずるやうになつた。我が國では文祿の役以來の關係で朝鮮を勢力範圍のものだと思つてもゐたが、實際は清の屬國のやうな立場にあつたのである。明治の初年の征韓論はこんなことの思ひ出にも原因を有するであらふ。

近代に至りて、露西亞といふ新しい脅威が北方にあらはれて來た。我が國はまた維新以來の發達を基礎として手強い談判をしたから、朝鮮専ら清に頼りて國家の安全を計つた。大院君が天主教を迫害し、佛の海軍と戦つて、鎖國主義を斷行した。後閔族が勢力を振つた時、我國が開國を迫つたために、明治九年に日韓修交條規が成立した。清は朝鮮を屬邦と認め、日本は之を認めない。その後親日派と事大黨との對抗となり、終に日清戰爭を誘起した。かうして支那は已むなく半島から手をひいたが、露西亞が勢力を振つて傍若無人の態度をとつて、あはよくば朝鮮と滿洲とを併呑せんとしたの

で、終に日露戰爭となり、ヘーグ密使事件や伊藤博文の暗殺となつて、終に日韓合邦の結果となつた。私は日本と朝鮮との史的考察によりて、國民の歴史に地理の背景のいかに大なる勢力を及ぼすかを驚かざるを得ないのであります。

そこで歐羅巴を旅行して白耳義、和蘭、丁抹、瑞典、瑞西等のやうな小國を見ると、若し朝鮮が斯う云ふやうな境遇に置かれたならば、嘸かし幸福なことであつたと思ふ。然るに西北の野蠻人は文化の思想がないのであつて掠奪を事として随分亂暴なことをやつた。倭寇もまた海賊特有の亂暴なことをして朝鮮を窘めた。朝鮮も亦之に對して相應に酬ひたやうであります。日本は島國であるから退いて本元を守ることが出來たが、朝鮮は大陸の一端であるから進退谷りてのつびきならぬ境遇に陷ゐることが多かつた。随分と酷い目に逢つた。慘忍酷薄な態度を被つたが故に、朝鮮人同士の鬭争に於ても慘忍酷薄な氣が現はれることになつたと思ふ。是れは朝鮮の國民性が悪いのではない。朝鮮が種々の事情より歴史的にさう云ふ待遇を被つたが故に、どうし

ても安住の地を見出すことが出来ないから、自分自らを安んずる爲に何處までも敵を倒さなければならぬといふ悪い習慣が付いて、黨派の争ひの上にも惨忍酷薄な氣風が現はれることになつたと思ふ。そこで朝鮮の歴史を讀む毎に朝鮮國民に對して非常の同情を寄せざるを得ないのである。同時に日本のやうな島國は如何に仕合であるか、英國や日本のやうな國は如何に幸福なものであるか、斯様な幸福なる國土に産れた所の國民は朝鮮のやうな不幸なる國土に育つた民族に對して之を護り、之を助はり、之を助け、之を愛する義務と責任とがあると思ふのであります。

五 日本と朝鮮と協力せよ

寺内總督以來、日本が朝鮮に對して色々な善政もあつたらう。また失政もあつたらうと思ふ。又現に理想の政治が行はれて居ると思はぬのであります。しかし前に述べたごとく日本を開いたものは米國である、ペルリである。而して朝鮮を開いたものは日本である。此事は歴史上明白なる事實である。佛蘭西は宣教師が殺されたと云ふ

ので、軍艦を引張つて往つて、朝鮮を第二の安南の如くしやうと思つたが、此野心はまんまと失敗した。支那の兩晋南北朝時代までの文化は朝鮮を通じて日本に這入つた。隋唐の文明から直接我が國に入るになりましたが、隋唐以前の大陸文化は朝鮮が媒介となつて、其の文化を日本に齎らし來つたのでありますから、日本は永く朝鮮の恩を記憶しなければならぬ。然るに日本は朝鮮を開國に導いて幾分の恩返しをすると同時に、遂に併合したと云ふ結果になつたから、無論朝鮮人の内には此併合に反對して獨立したいと思ふ者のあるのは當然なことと思ふ。この希望の熾烈なることは中々なものであつて、身命を粉砕しても顧みざる青年が多い。その目的が直ちに實現するしないは別問題として、かゝる氣骨ある青年の多いことは朝鮮文化の將來に大に望みがあることを示すものである。しかし實際問題としては歴史的に國際的に、實力的に、公平に研究し、判斷しなければならぬ。凡て大事件を成就するには時機がある。大望ある者は忍耐して時機を待たねばならぬ。ただ焦心してあせつてはならぬ。

そこで我々日本人の立場として、朝鮮に對して何をするかと云へば、出来るだけの事を盡すより仕方がない。單に政府や總督府のみ依頼すべきで無く、國民の立場より朝鮮を助けてやるという考にならなければ駄目である。今日までの搾取方針を全然變更せねばならない。朝鮮人はどうするかと云へば、その歴史的、地理的事實を考究して、今日の結果ある所以を省察して、將來の新文化を建設するために、過去の弱點と欠點を除いて、新しい長所を發揮するに努めねばならぬ。さうしてお互に助け合ふより外に道はない。是れは平凡な事實であるけれども、夫より外に朝鮮問題を解決する途はないと思ひます。一兩年前の獨立運動は意義があつた。傲慢にして我儘なる或一部の日本人をして朝鮮決して侮るべからずと反省せしめ、又朝鮮の或一部の人々をして赤手空拳を揮つても大事は成就しえぬものであると悟得せしめたからである。今後は兩者共に眞劍になつて和衷協同の實を擧げたいものである。朝鮮の實力が十分となればこの問題は眞面目に平和的に取り扱はるゝ時が來ると思ふ。

そこで我々が日本政府及び朝鮮總督府に對する希望は、朝鮮に於て單に文化政策を唱ふるに止まらずして之を實行して貰ひたいことである。齋藤總督就任以來、制服を廢し帶劍を止めたのは誠に結構な事である。しかし鎮壓のために多大の資金を費した爲に文化政策の運用は思ふやうに出来ぬやうである。朝鮮に大學普通學校も高等普通學校も女子普通學校の如きも大に増加しなければならぬと思ふのであります。高等學校は明後年頃に開かるゝ由であるから、追付け朝鮮大學も開かるゝであらふ。しかし日本留學生米國留學生などの秀才はしばしば擧げて任用しなければなるまい。さうすると日本政府などには仕へないと云ふ志士もあらう、さう云ふ人もあつて差支ないしかし總督府としては英才の進路を開かねばならぬ。單に官廳のみでない、銀行、會社等に於ても出来る丈包容政策をとらねばならぬ。内地の官廳や會社などでも相當な才能ある朝鮮の秀才を採用し、力量を十分に伸ばさしむべきである。英國は嘗て反抗した南阿のスマッツ將軍を登用して戰時内閣へ列せしめたのみならず、首相ロイド・

ジョージ自身が昔し英國人によりて制服せられたことのあるウェールズ人ではないか。日本が大をなすためには朝鮮や臺灣の英才を包容しなければならない。又總督府が朝鮮に對して爲し得た又將來も爲し得る事業の一つは殖産工業の開発である。その方法に無理があつたり、日本流の突進的命令的態度があつたことは遺憾である。しかし總督府がこの方面に努力したとは當然である。之に反して歐米の宣教師諸君は朝鮮人の靈の友となつて傷める心を慰めて來た。このために多くの人物の犠牲と金錢とを捧げた。朝鮮のごとき安住の少ない國民に宗教的慰安を提供するは極めて重要な事である。此意味に於て我々は宣教師諸君の貢献を感謝する。しかし歐米の文明、ことに米國文明は精神文明の外に物質文明が非常なる勢ひで發達してゐる國である。されば物質的施設と精神的事業とは扞格すべきでない、お互に排斥する必要がない。然らば總督府が物質的貢献をなし、或は歐米の宣教師が心靈的貢献をしたと云ふことは、互に相倚り相助くべきものであつて、素より相互に非難攻撃すべきものではないと思ふ。

然るに其處に誤解がある、宣教師の方は熱心の餘り只だ靈を救へば宜いと云ふ、併ながら人間はパンのみにて生くることが出來ぬとひとしく靈のみでも生きることは出來ない。矢張り心靈に物質が伴はなければ、個人も民族も十分の發達が出來ぬ。總督府も今日宣教師を邪魔物と見ず、宣教師も總督府を厄介もの扱になくなつたやうで、これは喜ぶべきものであります。一步すすんで總督府が志士仁人の心を以て政治を行ひ、宣教師が最近の哲學や科學の進歩に伴ふことをえば大幸である。同時に朝鮮に於ける德育は主として人格主義に據るべきである。日本流をあまり通さぬがよい。内地でよいなら、それがすぐに朝鮮にあてはまるものでありません。

總督府はまた朝鮮の完全なる歴史を編輯する、立派な修史局を企てられたい。今日朝鮮の儒林には無職業で困つて居る人が多い。さう云ふ人々を遊ばして置くのは宜しくないから、日本の學者を協力させてやつたならばよろしいであらふ。總督府が土地調査をやつて朝鮮の立派な地圖を作つたことは一大貢獻である。若し朝鮮修史局が、人

類學、考古學、發掘學の結果を大成して朝鮮の上古史を完成した丈でも大功績であらふ。朝鮮には文献備考の如き立派な歴史や百科字書的なものはあるが、日本に關する史實の如きは殆んど顧みない、又事實に相違してゐる點もあるこの事である。又我が古代史の朝鮮に關係ある部分は桓武天皇の時に焼いて了つたと云ふことが神皇正統記に書いてあるといふことである。さう云ふやうな譯で、上古史の材料が兩方ない。神話と口碑や傳説が存在してゐる丈である。

されば新しき科學的方法を用ゐて朝鮮の歴史を公明正大に書き直すと云ふことが必要である。この修史局は朝鮮大學の成立の曉には文學部の附屬事業とするもよろしからふ。

序に朝鮮人には朝鮮史を教へなければならぬ。個人も民族も歴史を基礎とせねばならぬ。然るに總督府はこれ迄普通學校にも或は多分高等普通學校にも、朝鮮史を省いてゐたやうだ。これは思はざるも甚しいものである。朝鮮人をして朝鮮史を正當に選

解せしむるは朝鮮人にとりては當然の權利にして日本側にも損がないであらふ。學校で教へなくても、歴史を知る材料が多い。教へざれば却つて揣摩臆測を逞しうするから却つて有害であらう。しかし現總督府は教へることに方針を定めたらしいから、目下その教科書が編纂されてゐることと思ふ。出来るだけ公平の記述をしてもらひたい。日本の損になるやうなことを隠さず、正々堂々たる理想的の教科書であつてほしい。

又現在の西洋史の教科書に日本紀元を用ゐてゐるやうだが、これは餘計な事をしたものである。尤も大切な事件は括弧をして西洋紀元を入れてあるが、これは可笑しい。一體耶蘇紀元を用ゐるは世間一般の便利に従ふに外ならない。例へば紀元何世紀とかいへば世界史の大なる區劃がわかつて都合がよい。こんな事は小さい點であるが、西洋史の年代は西洋紀元を用ゐむしろ日本紀元を括弧の中に入れて然るべきであらふ。又朝鮮の諺文は言語學的に研究して餘程面白い。李朝學界一大貢獻である。よつて是非完全なる朝鮮語の字書を編纂すべきである。これも總督府の事業として澤山

の朝鮮の學者を任用すればよいと思ふ。日本の學者も之に参加すべきである。

要するに總督府は日鮮融合と文化政策を標榜してゐるのであるから、朝鮮をしてその固有の文化を發達せしむることを助け、この成長を妨ぐるごとき態度は引つこませて然るべきである。例へば朝鮮の婦人の服裝の如きは世界に於て最も美しき物の一つである。何を苦んで朝鮮の婦人に日本の服裝を強ふる必要があるか。但し色彩に關しては朝鮮人は支那人と同様にやゝ單調である。朝鮮は白色が主で、他に幾つかの原色を用ゐてゐる。間色はあまり用ゐない。日本は黒すんだ、濫い間色を用ゐる。この點は朝鮮婦人の服裝などに參考になる點であらふ。白色は多分太陽崇拜の色であらふ。一體朝鮮といふ名は朝日と縁があつて、日本といふ語とあまり違ひはない。しかし朝鮮には白色が多過ぎる。私は朝鮮の女子高等普通學校を參觀し、且つ講演した時に、教室や廊下の壁が白く、生徒は大部分白い服裝なので、あまりうつりがよくないから、當事者に對して、白壁の代りに水色の壁を用ゐるがよいではないかと建言した。

た。又壁には刺繡とか繪畫とかをかけて藝術的氣分を豊にするがよいではないかと申しました。

私は朝鮮の繪畫を多く見る機會がなかつたが、彫刻や建築には中々立派なものがある。さればこの方面に於ても將來有望であるに違ひない。朝鮮の古樂には中々立派なものがあるとの事で、これも保存したいと思ふ。私は朝鮮の一部の青年愛國者に相談したい。第一は實業について富を造ること、第二は現状と獨立といふやうに一かバチかといふやうな態度をとらずに選舉權にせよ何にせよ與へらるゝものは進んで取るといふ方針でありたい。一朝にしてその理想を達しかねるからといつて、失望するに及ぶまい。又總督府も一日も早く自治政の實を擧ぐるやうに朝鮮人民を指導しなければならぬ。朝鮮は過去に於て、幾多の英傑の士を出した。新羅の金春秋や金庾信や、高麗の鄭夢周や、李朝の李舜臣の如きいづれも英邁の士である。李朝の政治が腐敗して、東西兩黨や、老論少論の争ひとなり、世道と稱して、外戚をして政權を握らしめたこ

とが禍ひをなし、遂に人心を萎靡せしめ、外交に於ける事大主義は累を社稷に及ぼしたが、遺傳的に英傑の士の系統も存することであり、又兩班以外の中民や常民の奮發となり、殊に併合以來、反動的元氣が旺盛となつたから、將來、朝鮮文化の更に再び新なる光彩を放つ時が来るだらふと豫期する。

六 朝鮮文化の將來

私は世界の半島文化は大抵ゆき詰つてゐると考へます。たゞ問題は朝鮮半島である。これは大なる將來を有してゐます。何となれば、前に述べたやうな歴史的原因もあるが一つは日本文化といふ將來のあるものが、朝鮮文化に刺戟を與へてゐるからである。日本文化は未成品である。古い文化は纏まつた統一物であるが、新文化は今正に創造せられつゝあるので、一見甚だ混沌たるものである。しかし西に亞細亞大陸と歐洲大陸と聯絡し、東は新興の米國文化と呼應してゐるから日本の文化は一段の進歩をするに相違ない。日本は過去數十年は國防と軍備とを偏重した。或る程度までは歐米の壓

迫の結果として認めねばならない。しかし今や平和的文化事業を完成する使命を果すべき時となつた。最近の思想の傾向は著しく之を示してゐる。労働者の自覺、婦人の運動、皆これ民本主義的傾向のあらはれである。文學藝術哲學や宗教に對する憧憬も明かとなつた。今や東西古今の文化はこの島國の坩堝の中に會合し、沸騰しつゝある。何等かの結果が発生するに違ひない。朝鮮は好むも好まざるも、この文化に最も近い位置にある。嘗て日本が朝鮮文化の勢力を感じたやうに、こん度は朝鮮は日本文化の刺戟を受けなければならぬ。この時こそ日本は古代文化の恩人に對する報恩が出来るのである。これが現代の半島文化で朝鮮が特別な位置にある所以である。朝鮮は政治的に心の中に排日の感情を絶さずといへども、文化的關係はますます親密となるであらふ。そして日本と朝鮮と支那と提携して東亞文化の大運動が起るであらふ。

然るに日本の労働者と朝鮮の労働者の間に紛争の堪えず、いま／＼しい事の新聞に報道せらるゝは遺憾のことである。一體日本の労働者は朝鮮の労働者を弟分として面

倒をみなければならぬのである。文化の提携の前にかゝる紛擾を絶つことは日本側の責任であらふ。朝鮮人は歴史的に絶えず外國の壓迫を受けて來ました。しかし一面から顧みれば心靈上の覺醒を爲すべき材料は日本人より遙に富んで居ると思ふ、日本に於て何が故に大哲學家が現はれないのであるか、何の爲に大宗敎家が現はれないかと云ふと四面海を以て圍まれて國土があまりに安全であつたことも一つの原因であるまいか。朝鮮は不幸であるが、其の不幸を轉じて幸ひとする方面を心靈的方面に向けられて參りますならば、此の困難より、此壓迫より、此の誤解より、此の苦痛より偉大なる思想と信念と文學が湧いて起るではあるまいか。そして東洋の文化に貢獻するばかりでなく、世界人類の文化に貢獻する時代が來るのではないかと思ふのであります。猶太は小亞細亞の一小邦で強國の間に介在し、アッシリア、バビロン、ペルシャローマ、ギリシャ等が次ぎ／＼に之を壓迫した。國土は瘦せて、石山が多くて産物が少ない。國難相迫る時に豫言者が輩出して道德的大獅子吼をして終に稀世の宗教的天才

耶蘇が生まれた。その後首都エルサレムは落城して、國民は四方に散在して、今猶亡國者であるが猶太敎は存じ、その文化は存じ、或は政治に經濟に、音樂に宗教に文學に偉大なる貢獻をしてゐる。社會主義は猶太人カール・マルクスによりて中心人物を見出し、露亞西の革命に猶太人が大活動をした、音樂にてはメンデルゾンを出し哲學ではベルグソンを生んだではないか、苦める民族は必ず大なる使命がある。朝鮮の歴史的政治的苦痛には何等かの意義がなければならぬ。單にピストルや爆彈のみによつてこの苦痛の秘義を解決することが出來ぬ。敬虔と深望と大慮と大功名心とを以て目下の難境遇に處せられんことを朝鮮の識者に要求するのである。日本はこの惱める弟分の表情より尊い靈的のものを學ぶことを努めねばならぬ。(完)

世界の植民政策と朝鮮問題

衆議院議員 永井柳太郎

自由討究社が主催して朝鮮問題に對する講演會を開くことを特に悦ぶのであります。自由討究社の人々は政治の要諦を以て形を整へることではなく、心を治むるにありと云ふことを信条として、朝鮮問題を討究するにも、先づ朝鮮の民族心理學の研究に立脚せんとして居る人々でありまして、從來の朝鮮に對する我が政府が心を治むることをせずして、只形を整へ、人の行爲を取締ることのみ没頭して居る時に、夫れと正反對の立場から朝鮮問題の批判者が起つたと云ふことは、朝鮮統治上に於ける一大慶事と言はざるを得ないと思ふのであります。

朝鮮總督府警務局が昨年發表したものに據りますれば、南北滿州に於ける朝鮮人は約百二十萬に達し、其内露國の過激派と結托せる者少からずと云ふことであります。

殊に汪清縣一帶に於ける朝鮮人は自ら獨立軍政府を組織し士官學校を設け約五百の將校を養ひ、約六千の兵卒を訓練して居りますのみならず、其の使用して居る小銃の如きは明治三十八年式の歩兵銃であると云ふことであります。朝鮮總督府の解決に據ると、此三十八年式の歩兵銃は曾て我陸軍がチエツク軍に給與したものであるが、チエツク軍が之を過激派に賣渡し、過激派軍が更に之を朝鮮人に供給したものであつて、過激派と在滿朝鮮人との間に密接なる關係ある證據として頗る狼狽して居るのであります。随つて其の過激派と結托したる在滿朝鮮人が其の活動の範圍を朝鮮の國境内に及ぼさんことを恐れまして、今日は約二千の巡查を國境に配置して、其の出入を取締つて居るのであります。此の一事に據つて見ましても、我が總督府の或朝鮮人に對する統治の方針は専ら人の行爲を取締り、形を整へると云ふことに集中されて居ることが明白なのであります。諸君假令百萬の軍隊を以て朝鮮の國境に垣を設けられまして

も、朝鮮の國境内に於ける我が統治が正道を失して、朝鮮人の生活の安定を奪ひ、朝鮮人の人格の尊嚴を無視し、朝鮮人に結んで解けざる深き恨みを懷かするに至りますれば、過激思想は朝鮮の國內より勃發し來ること火を賭るよりも明かなりと言はなければならぬ。之に反して朝鮮の國內に於ける生活を安んじ、朝鮮人の人格の尊嚴を認識して其の上に政治及社會の改革を進めて參りますれば、假令朝鮮の國境に一兵を止めず、自由に之を世界に開放しても、決して朝鮮が赤化するの危険なしと思ふのであります。其の人の心を治むることを根本とせずして、只行爲を取締ることに没頭して居る所に、今日の新領土政策の失敗の根本が横はつて居ると思ふのであります。

植民政策の大家にアイルランドと云ふ人があります。アイルランドが書いて居りまする物の中に、英領西印度の總督が、一日々暮れて自分の官邸に歸り行かんとして、誤つて土人の馬鈴薯畠を踏み躪つたのであります。土人が現はれて來まして總督を捕へ、汝は何者ぞと詰問したのであります。總督は土人を威嚇しなければならぬと考

へて、傲然として、予は本島の總督なるぞと一喝したのであります。然るに土人は其の脅喝に屈せず、假令お前が總督を六倍した程のえらい者であつても、此の馬鈴薯畠が乃公の所有に變化は無い、此馬鈴薯畠を踏み躪つた以上は損害賠償を出せと要求した。此總督は尙ほ傲然として其處を通り過ぎんとしたので、土人は若い者を呼集めて其の總督を捕へて裁判所に運んだのであります。其時に英國の裁判官は極めて公明正大の人でありまして土人の要求を至當とし、總督に命じて損害賠償を爲さしめたのであります。總督は之を以て自分の威嚴を失墜するかと考へて其の職を去つたのであります。英國は一總督を失ひたれども、英領印度の人心を得たりと、アイルランドは極論して居るのである。新領土統治の根本精神は此の英國の裁判の如くなければならぬのでありまして、朝鮮に於きまして苟も公明正大の精神を蹂躪するならば、齋藤總督と雖も斷じて之を假藉せずと云ふ正義の精神を以て臨むにあらざれば、決して朝鮮は治まる時はないと信するのであります。

諸君、世界の植民政策は政治上から申しますと、大體に於て四つの變遷を経たのであります。第一期は御承知の通りコロンブスが亞米利加を發見し、ダスコラマーが印度に回航した以後十七世紀に至る頃でありまして、其の間に於きましては各國の政府の植民政策は専ら君主及貴族の財政上の慾望を充たすと云ふことが根本になつて居つたのであります。御承知の如く十七世紀の末年から、歐羅巴には十字軍や宗教戦争が頻に勃發致しまして、歐洲諸國の君主貴族の財政は非常に困難となり、何れも國庫の窮乏を感じて居つたのであります。そこで何等かの方法に依つて、其の君主や貴族の金庫に金銀を充すの必要があると考へた。是れが植民地を獲得し、之を統治する根本の原因となつたのでありまして、其の證據に十六世紀時代に開かれた各國の植民地は總て貴族の手に依つて開かれて居るのであります。彼等は植民地を獲得致しますると、出来るだけ其の植民地の現住民に金銀の採掘のみ命じたのであります。さうして其の植民地と外國との貿易は絶対に禁止致しまして植民的生活必需品を賣込むことは、本國の

御用商人の獨占と定めたのであります。そこで本國の御用商人は自分が欲するだけ高く生活必需品を植民地の土人に賣付けたのであります。植民地の土人は其品物が高過ぎるから買はずに置きたいと思ひましても、買はなければ他國からの輸入は嚴禁されて居る。自分等は鑛山の採掘以外の生産業を許されて居ない、買はなければ死ぬる外はないのでありますから、已むを得ず高價を忍んで其の本國の御用商人の手から生活必需品を買入れて、其の代價として自分が暗黒なる鑛山の中で日夜採掘しました貴金屬を提供したのであります。

斯の如くにして各國の政府は出来るだけ貴金屬を集めんと致しました結果、植民地の住民は到底獨立しなければ生存することが出来なくなつて來たのであります。本國に附屬して居れば自分の勞力を以て提供し得る限りの貴金屬を提供しても猶ほ自分の飢を充すに足るだけの生活必需品を得ることさへも出来なくなつたのである。彼等は甘んじて本國に盲従して死を待つか、敢然として本國より獨立して生を求むるか、其の

何れかの途に依らなければならないやうに押付けられて仕舞つたのである。茲に於きまして彼等は座して死ぬるよりは、乾坤一擲生を求むるに如かずと考へた。それが第一に勃發して亞米利加の獨立戦争となり、夫れより延いて世界各國に於ける植民地の謀叛となつたのでありまして、十八世紀に於ける植民地の謀叛は即ち此の第一期の植民地帯に於ける各國政府の主従主義、即ち植民地を獨占して暴利を貪ると云ふ誤より出る政策に對する反動に外ならなかつたのであります。茲に植民地の土人が座して死を待つか戰ふて生きるかと云ふことに悶えて居りました時に、恰も佛國に於きましてルソーの如き哲人が起つて、人間は産れながら平等である。總てのものは産れながら生存權を有つて居る。其の天賦の生存權を全うするが爲には、我等の産れながらの人格の麗はしさを抑制して居る所の政治上の束縛や、社會上の壓制を切放さなければならぬ。自然に歸れと云ふ叫びを擧げましたので、其の叫びを旗印として奮起したのであります。其の叫びだけでは決して革命は起らなかつたのであります。其の長

い間生死の境に置かれて、生きんか死んかと悶えて居つた、其の悶ゆる人々の悶えを代表したる哲人が自由に生きるの途を説きました故に、初めて茲に猛然たる革命の大運動が起つて來たのであります。學問だけで、哲理だけで決して人間は開放せらるるのではなく、獨立運動は起つて來るのではなく、それはさう云ふ獨立の運動とか、革命の争亂と云ふものは、人の生きんとする深刻なる威力を無視したる專制政治其物が點火して夫れが偶々學者や哲人の言葉や學理の如き油に燃え付いて大なる焔となるものであると云ふことを、我々は歴史に依つて精しく教えられて居るのであります。

そこで流石に歐洲諸國の君主や貴族も、植民地を開放しなければ革命の外はないと云ふことを覺りましたので、諸君も御承知の通り所謂自由貿易時代に到着して來たのであります。歐洲諸國の君主や貴族は出來る限り金銀を集めました、金銀は一個の貨物である商品である以上は、無暗に積上げれば其の價格は必ず下落することをアダム・スミスの如き經濟學者が指摘して參りましたのと、自分達の專制政治の反動として、

革命が起つて参りましたのと、此二つの教訓に依てつ植民地は之を壓制して搾り取るよりは自由に開放して人間として生きんとする儘に行かした方が眞に繁榮する。繁榮した隣人を以て居るものは之と貿易しても利益である。之と文化的に交際しても自己を向上せしむるに足ると云ふ結論に到着して來ましたので、彼のグラッドストーンの如き政治家は、公然と議會に於て加奈陀も濠洲も遂に獨立の時なかるべからずと公言するに至り、佛國の政治家ツルポーの如きも總ての植民地は恰も果實の如きものである。果實が熟すれば必ず其の枝を離るゝやうに、植民地も必ず本國を離るべしと豫言するに至つたのである。

斯の如くして植民政策の根本思想は一變し、植民地の土人は君主專制政治の柵内から開放され、初めて自由人として生きんとする望みを得たのであります。意外にも十九世紀の初めになりまして、諸君も御承知の通り、ルソー等のローマン主義の思想に反して、現實主義の思想が勃興して來まして、感情を尊ぶよりも、理智を尊ぶことの

の必要を論ずる風潮が起つて、其の結果御承知の通り科學が勃興し、科學の勃興した結果、機械工業が起り、機械工業が盛んになつた結果、資本主義が勃興して参りました。此の資本主義が勃興して参りますと同時に、資本家は自分の製造した物の販路を出来るだけ高い利息を拂ふ土地を求むるが爲に、再び植民地を渴望する思想が勃興して参りまして、世界の到る處で資本的帝國主義の競争が激烈を極め來たのであります。此の資本的帝國主義の激烈なる競争は當然到着せざるべからざる所に到着致まして彼の世界未曾有の大戦争となつて資本主義の帝國政策を行ふて居つた國々は自己の政策の犠牲となつて、勝ちたる者も敗けたる者も殆ど破産の状態に陥つたのである。是は自ら招ぐ所の禍でありましたが、此禍を受けたことに依つて植民政策に對する思想は四度變化して、今や資本的帝國主義は自己を滅ぼすのみならず、人をも滅ぼすものであると云ふ事が、明確に自覺せられまして、新に第四期の新植民政策に移らんとして居ります。

諸君も御記憶と存じますが、英國は資本的帝國主義の國として其の第一位に位して居つたのであります。然るに資本的帝國主義を行ふて居る國は、外に進めば他の國々と衝突する危険があるばかりでなく、假に其の衝突に於て勝利を得ることが出来ましても、自分自身は廳て内から滅びざるを得ざる危険性を有つて居るのであります。如何なる危険性かと申しますと、彼のベルツ、ケーベルニツヒが申しました通り金持の息子に碌な人間がない。勞働をしなくても親から生活の保證をされて居るやうな人間は、自己の天賦の能力を極度に使役する機會はないから、人間として與へられただけの生存の意義を盡さずして死んで行く最も憐れな動物と同じである。他國を征服して其の土地に資本を貸付けて、其の土地の土人に勞働させて其の勞働の膏血を搾り取つて、所謂其の利子だけで生活する習慣を有つて居る帝國主義の國は、丁度金持の息子と同じやうに、自分の天賦の能力を極度に使役する機會を失ふて自滅せざるを得ない。英國は半世紀前には人口の中の二割五分迄は英國に於ける主要なる製造業に従事して

居つたのであります。然るに次第々々に他國に金を貸付けて、其の利息で生活する風習が起りましてから、自ら製造業に従事する者が減少致しまして、今日では英國の人口の中で主要製造業に従事致して居るものは、全人口の一割五分に減じて仕舞つたのであります。さうして製造業に對する發明とか發見とか研究と云ふが如きことは、次第々々に獨逸や米國に凌駕せられまして、假令戦争がなくても今日の儘で推移して行きますれば、英國は經濟上の競争に於て到底米國にも獨逸にも勝つこと能はざる悲惨なる前途を有するの外なきに至つたのであります。

諸君此頃獨逸人は何と豪語して居るか、最近獨逸人が伯林から『改造』と云ふ雑誌を出して居る。獨逸語だけで出すのが本當であるのに、彼等は獨逸語だけで雑誌を發行せず、一の雑誌を五ヶ國の言葉で出して居ります。然うして獨逸人は其の冒頭に宣言して、我々は單に獨逸語のみを讀む者を相手にする時機でない、未だ獨逸を知らざる世界の人類を相手として生きなければならぬから、我々は特に五ヶ國の重なる言

葉を以て我々の思想を陳述すると云ふことを述べて居る。さうして其の雑誌の最初に傲然として曰く、世界に於て最も大なる前途を有するものは獨逸民族である。何故ならば聯合國は、今獨逸國から頻りに借金を取立て賠償金を取立て、居るが、彼等は一種の金貸である。金貸が債務者から金を取立てるやうに頻りに我等を誅求するが、金貸は決して債務者を破産させるものでない。債務者が破産しない程度に誅求すると云ふことが金貸の共通心理であるから、彼等金貸國が如何に強硬に獨逸に迫つても、彼等は獨逸を破産せしむる危険を有つて居ないことだけは明白である。故に獨逸は破産する危険なしと思惟して、安心して出来るだけ製産をして出来るだけ拂へば宜い。拂ひ盡した時には聯合國の國民は人から金を取つて生活して居つたのであるから、生産能力も發明力も研究力も到底獨逸に及ばない。金を拂ひ盡した時に獨逸人の生産能力は世界に冠たるものとなることは明白であるから、金を拂ひ盡した其の翌日に於て獨逸は世界第一の大生産國大智識國大強國となることは火を賭る如く明かであるから、

獨逸人よ落膽すること勿れ、世界人よ獨逸を侮ること勿れと叫んで居るのであります。實に斯の如き偉大なる抱負を以て彼等が今日の生活を建設致すのは、彼等が資本國ではなくなつた、勞働國となつたと云ふことが、其の根本の原因でありまして、聯合國殊に英國の如き國が一時は強大を以て天下に誇りましたけれども、今や何人も明日の英國を信する者なきに至りましたのは、彼等及彼等の祖先が過去に於て資本的帝國主義の大罪惡を犯したる因果應報なりと言はなければならぬ。斯の如くにして今や目醒めたる人類は、資本的帝國主義の思想から自己を突き放して、眞の勞働國民として生きんとする時代に入りつゝあるのであります。

そこで今後の植民政策は最早資本を以て他國の勞力を搾り取ることを許さない。本國の意思を以て他國に思ふ儘の奉納金を納めしむることを許さない。今後の植民政策の根本精神は總ての民族をして其の天賦の個性を遺憾なく發揮せしむるの自由と實境とを與へると云ふことを以て本國の使命と認むる所に、今後の植民政策根本精神があ

るのであります。彼の博物學者のヘッケルが言つたやうに、どんな大きな森林の中に往つても、一枚と雖も同じ葉はない。形は似て居るけれども、顯微鏡で見れば皆其の形を異にして居る。其様に總ての人間は形は似て居るけれども、皆其の容貌を見れば異なる如く獨得の個性を以て居る。其の個性を遺憾なく徹底せしむると云ふことが、政治家の任務であつて、夫れ以外に何等かの物を求むる政治家があるならば、夫れは虚榮である、罪惡であると言はなければならぬ。それは丁度個人が獨得の個性を以て此世に産れ來り、其の個性を完成することが人間の生存の眞意義でありますと同じやうに、總ての民族も亦各々獨得の民族個性を有つて居るのであります。其の民族個性を遺憾なく發揮せしむるが爲に必要な寰境を造ると云ふことが、植民政策の根本義でありまして其の寰境を立派に設備して其中で其民族が獨得の個性を遺憾なく發揮し得れば、植民政策の天職茲に盡きたるものと謂はなければならぬ。

昔羅馬時代に於て世界統一を夢みた政治家がありました。今日の世界に於ても……

二千年以上を經過した今日に於ても猶ほ世界統一を夢みて居る政治家のあることは實に驚くべきことであつて、人類は進化すと雖も、其の進化の遅々たるに驚かざるを得ない。併ながら世界を統一し、人の思想を統一するが如きことは言ふて行ひ能はざることである。諸君、我々が旅行に出まして自然の美に打たるのは何故であるか、即ち山川草木各々其の天賦の色彩を思ひ思ひに發揮し、其の自由に發揮したる自然の儘の色彩の内に言ふべからざる調和が存在して居るからである。又此處に樂器がありませんが、此樂器の音が只一ツのトーン何處を押しても同じトーンだけしか出ないなら音樂は成立しない。茲に幾多のキーがあつて之を押すに従つて、強弱幾多の音を發し、其の幾多の音の中に自ら調和の存在する所に音樂の妙味があると信するのであります。丁度其の如く總ての民族も、各々自由に開放せられて思ひ思ひに其の最高最大の使命を帯びて、自己の生活を改造して日々向上して往く所に、世界文明の調和の妙味が存するのであります。單なる一國の政府や或は特別なる資本家階級が自己の利益のみを

以て、此民族個性の自由發展を妨げんと致すものがありますれば、斯の如き政府や、斯の如き資本家の階級は天人共に許さざる罪惡を犯しつゝあるのであります。

茲に於きまして我が日本の朝鮮に對しまする新領土統治の根本方針も亦自ら明かであると思ひます。此朝鮮の民族個性を遺憾なく發揮せしむると云ふことが、新領土統治の根本政策であります以上は、どうしても其の精神を以て居ると云ふことが、形の上に現はれて來なければならぬと思ひます。何に依つて現はるべきかと云ふと、其の教育方針に現はれて來なければならぬのであります。第二は其の民族に如何なる程度の自治權を與へて居るか云ふことに依つて判斷し得るのであります。諸君、朝鮮に於ける教育のみならず、全體植民地に教育することが善いか惡いかと云ふことは、過去に於ける愚かなる政治家に依つて長い間研究された問題である。植民地の住民も人間である以上は、教育する必要あるは火を睹るよりも明かであつて多言を要さない。而して今日の日本は常に朝鮮の住民に教育を施すや否やばかりでなしに、自分の國の

女に教育を施すが善いか惡いかをまだ考へて居ない。婦人に教育を與へると婦人が反抗する危險があると云ふのが今の教育家の輿論である。併ながら婦人が如何に教育されても、男子の方に婦人から尊敬をされる丈けの人格と、婦人から反抗されない丈けの正義に自身が確立して居りますならば、婦人の向上は悦ぶべきであつて、決して哀しむべきでないと思ふ。それと同様に植民地の住民に教育を施すことが危險でないと云ふことは分り切つた話であるが、教育を施して植民地の住民の眼が明かとなつた場合に自己の祕密や不正が探知されはしないかと云ふことを恐れて居る。自ら公明正大天地に耻ぢざる政策を以て新領土に臨んで居るならば、新領土の人に大學教授等が出來たら同輩が出來たと云つて悦ばなければならぬ筈である。英國は印度に教育を施し過ぎて今叛亂が起きて居ると、英人自ら唱べて居るが、それは印度に教育を與へたから叛亂が起つたのではありませぬ。英國は印度に對し過去に於て偽善なる植民政策を行ふて居つて、今其の假面が暴露した爲に叛亂が起りつゝあるのである。事實を御

覽なさい、印度は有名なる棉の産地である。印度人は自ら製産する棉に加工して棉糸棉布の製造業を盛んに起したいと云ふ多年の希望を有つて居ります。然るに其の棉の産地である印度に於て棉糸棉布の製業が盛んになれば、英本國に於けるランクシャー、ヨークシャーの棉糸棉布業者が必ず壓迫を受けると云ふ危険を感じまして、此のランクシャー、ヨークシャーの棉糸棉布業者の意中を付度して、英國政府は口を自由貿易に名を藉りまして、印度の棉糸棉布業が十分發達しない幼稚な間にドン／＼英國の棉糸棉布を輸入して之を壓倒せしめつゝあるのであります。印度は少しばかり保護關稅をかければ直ちに棉糸棉布の事業は發育し得るに拘らず、自由貿易を名として斷じて此の關稅を許さない。此事は棉糸棉布に關係ある總ての印度人の憤慨措く能はざる所である。又さう云ふやうな製産業に従事せる人間に對しても、印度人と白色の英人との間に於ける差別的待遇の不可なることは、彼のケーヤハーデーでさへも國際を観ると公明でありまして、ケーヤハーデーは印度を視察してインデアと云ふ本を出して大に

英國人を戒めて居る。それは自分が汽車に乗つて居つた所が、其の汽車の中の大部分は英人であつたが、一人だけ印度の貴族が乗つて居つた。其の貴族は溫順しい人で他の人と話もしないで進行して居つたが、或停車場に着くと、俄に窓を開けて何人かを探して居る如く見えた。聽て窓の外に印度の若い者が、貴方は此車かと中に這入つて來た。さうして二人が腰をかけると、其處に居つた英人が立上つて其の若者に向ひ、貴様は何の爲に此車に乗つた。此車は白色人の車であると云つた、すると前から居つた貴族は是は私の息子であります、此處に待合せて居つて是から二人が或所に行くのであるから許して呉れと云つた。すると其の英人は全體お前一人だけでも入れて置いたのは特別のお情けである、我々は黒犬と共同生活は欲しない、此事を聞くと印度の貴族は黙つて其の息子の手を引いて汽車の外へ出て往つたが、其の沈黙の中に胸に燃ゆる焰は英國の礎を焼き盡して仕舞ふであらうと、ケーヤハーデーが戒めの言葉を言つて居る。斯の如く偽善なる植民政策を以て英國が印度に臨んで居るが故に、一度び印度人に教

育を興へ、人間たる自覺を興へたる時に勃然として其の反抗運動が起つて來たのでありますから、此印度に於ける叛亂は教育其の物の罪にあらずして英國の過てる偽善の植民政策其物の罪であると言はなければならぬ。故に教育を施すが爲に植民地が危険になることはないものでありまして、苟も植民地の住民、新領土の住民が人間である以上は我等と等しく向上すべき機會を興へることは當然我々の爲すべき義務であります。

今日朝鮮の教育を見ますと、千六百萬の人口があるのに小學校所謂普通學校と稱して居るもの數は僅に六百七十五しかありません。内地に於ける小學校の數は幾らかと申しますと、五千萬の人口に對し二萬五千六百の多數に達し、朝鮮に比ぶれば三十八倍の多きに達して居る。其の朝鮮の普通學校の中に學んで居る小學生は全國を通じて十五萬人に過ぎない。内地に於ては八百萬の多數に及んで居ります。又中學校を見ましても、内地の中學校は全體で約三百五十ありまして、之に學んで居る學生數は約十五萬人であります。朝鮮では此中學校に比すべき高等普通學校は、官私立を通

じて僅に十七である。而して其の十七の學校の在學生は全部合せて五千五百と云ふ數に過ぎませぬ。斯の如き狀態に置いて、果して朝鮮人の人格の向上を圖り朝鮮人をしめて眞に朝鮮の民族個性を遺憾なく發揮せしむることが出來ませうか、殊に小學中學のみでなく進んでは専門學校を起し、大學を起し、又内地の學校にも出入して日本人と共に研究し、共に思想の討議をするやうにならなければ、政府の所謂一視同仁の精神は徹底しない。只口に一視同仁を唱へても、教育に於て斯の如き差別的待遇をして居るやうなことでは如何に警官と軍人の力を以て壓迫して居りまして、朝鮮と内地の心の融和を望むの不可能なるは實に自然の勢ひと言はざるを得ないのである。

朝鮮人の要求は何處にある。朝鮮人の要求を立法の上に實現すると云ふことが、又民族個性を發揮する要件とならなければならぬ。日本人が如何に好意を以て朝鮮人の要求を理會せんと致しましても歴史を異にし過去の種々なる教育を異にして居る以上は、本當の朝鮮民族の心理を理會することは困難である。朝鮮人の要求は朝鮮人では

言はざるを眞に訴ふることは困難と思ひます。是れは内地に於ても其通り、諸君、近頃有馬頼寧伯を會頭とする同愛會と云ふものが、労働者の肉體の苦痛を味はう爲であると云つて、夏の炎天に日比谷で草刈を致しました。さうして草刈終つて實に労働の價值を知つたと新聞記者に告げたさうであります。併ながら諸君よ労働者の眞の苦痛は決して肉體労働其物の苦痛ではなくして、明日の生活の保證を有せざる心の不安其物である。家に歸れば遊んで居つても生活の保證を有する華族の連中が眞に労働者が如何に苦心慘憺たるかは分らない。故に此労働者の苦痛を知らんと欲する赤心がありますならば、労働階級自らをして其訴へんと欲する所を自由に訴へしむるだけの權利を與へなければならぬ。然るにも拘らず彼等貴族其他の特權階級は、彼等労働者をして其の苦痛を自由に訴へる權利を拒んで置きながら、自ら一日ばかり草刈をやつて見て労働の苦痛を解したと云ふ如きは自家撞着も甚しと言はざるを得ない。斯の如く朝鮮人の生活上の要求と政治上の理想も亦朝鮮人自らに依つて之を立法院に訴へしむる自由

を與へなければならぬ。然るに今日朝鮮にさう云ふ意味で設立されて居る機關は絶無であります。朝鮮總督府の人に云ふと、イヤ京城に中樞院と云ふものがある、又大正九年から府には府の協議會を置き、面には面の協議會を置いてある、代表者があつて訴ふる所を訴へ得るのでありますが、中樞院と云ふものは何も朝鮮の民衆の代表者でなく、諸君御承知の通り、彼の朝鮮貴族の仲間、高位高官の仲間から只だ政府が相當と認めた者を任命したに過ぎない。朝鮮の民衆に取りましては、今日の朝鮮貴族或は高位高官の人々は決して彼等の生活上の要求を代表する者とは認めて居ないのである。李朝其物と雖も數百年の惡政の結果、既に朝鮮人の間には不平不滿を懷いたのであります。本當に日本の政府當局に眼孔がありましたならば、彼の朝鮮を併合致しました當時に、其の惡政を幫助した政治家の如きものは、寧ろ之を抑へ付けて仕舞つて、其の所有して居つた莫大の土地は之を取上げて民衆の自由に開放する位の大改革をしなければならなかつたのである。然るに左様な事はなく、民衆と沒交渉なる者が中樞院の

議員であり、而もそれすら何も言ふことが出来ない。總督府が諮詢した場合意見を述べる、其の意見も採用するとせざるとは即ち總督の権限である。何等それに拘束はない、それから中樞院は御承知の如く、齋藤總督が最近になつて少し頻繁に召集することになりましたが、何等拘束力を有つて居ない。是れは中樞院の官制を御覧になれば直ぐ分る。府の協議會面の協議會に列なる者でも或者は總督府で制定した税金を一年五圓以上納める者が選舉することになつて居る。さうして其中から選舉された者が、十數名或は八名位しかない所もありますが、協議會に出て府尹の諮詢に答へ、面は面長の諮詢に答へるだけで、何等府尹面長を拘束する權利を有つて居ない。斯様な状態で朝鮮人の民族個性の發揮の爲に訴へんと欲する所を自由に訴へしむるだけの權利を與へたと思ふならば大變な誤りであります。

私はどうしても今日の朝鮮統治は根本に於て其方針を一變しなければ、朝鮮統治の困難は益々其の深さに入つて、若し病膏肓に入れば良醫と雖も猶之を醫する能はざら

んことを恐るるものである。今日朝鮮總督府では文化政策と云ふことを説いて居りますが、文化策なるものが私共の解する所と大に違つて居るのであります。憲兵を廢したと云つて居る、憲兵は大正八年十一月から廢したに違ひありません。憲兵は廢したが、それに代つて警視警部警部補巡查は内鮮で二萬人に達すると云ふ、其中約五千名は憲兵から職を轉じたのであります。武裝の如きも頗る嚴重を極めて彼等が民衆に對する態度は頗る傲慢なものである。斯の如くにして文化政策の實何れにあるか、我々の觀察にして誤りなしとすれば、人間の人格を尊重し其の人格の尊嚴は平等であると云ふ意識の下に、此意識と矛盾して居る總ての制度組織を根本より改革して往くことが、文化政策の根本でなければならぬ。政治は國內に對するものでも、亦國外に對するものでも、實に尊嚴な仕事であると思ひます。政治は世界に於ける道義の法廷に立つた時に其の認可を受けるに足るだけ常に正義の上に立つて居らなければならぬ。此の正義の上に立つて世界に於ける道義の法廷に於て審判を受けた時に認可せら

れて其前を通過し能ふ如くならざる政治は、種々なる動亂を伴ひ種々なる騒ぎを惹き起す性質を有つて居るのであります。國內に於ける政治も國外に於ける政治も私は今日の日本に於きましては、根本から道義の法廷に立つて認可を受くるに足るだけ十分なる正義の基礎の上に確立せしむる必要に達したと思ふのでありまして、此道義の法廷に立つて耻ることなき政治を起すと云ふことの爲めには、内地の改革を希望する者も朝鮮の改革を希望する者も、常に一身一體となつて、茲に新しき東洋文明を起すと云ふ大責任ありと信するものであります。

茲に私の信念を青年に訴ふべく此壇上に立つた次第であります。

誠なれば乃ち明なり

衆議院議員 島 田 三 郎

多數の御方の御來會でありまして、之に對して私が研究を積まざる趣味なきお話を致すのは苦痛であります。私はまだ一度も朝鮮の地を踏んだことがないので、其の土地の事情に暗いものでありますが、唯だ誠の心を懷き機に觸れて種々事情を承はつて窃に憂ふる所あり又望む所もあるのであります。それ故諸君と共に此朝鮮問題を研究する心を以て御意を得たいので、是れが斯うであるから斯うして間違ないと思ふ自負心は毫もないのであります。

日本の立場として朝鮮を如何にするかと云ふことの土臺の心が私には不案内なのであるが、朝鮮と日本とは合併した兩國の間柄であるから一種特別の關係を有つて居る

我は攻め取つた國ではない。彼は降服した國ではない、兩者合併した國であります。此の合併したといふ事實と名分とが明白で双方の希望の半ば以上は證明せらるべきであると思ひます。

然るに幾多の年を経たるに拘らず依然として不逞の鮮人云々と云ふやうな不祥な言辭を毎度聞くのは私は甚だ迷ひ且之を嫌ふ所であります。さうかと申して舊朝鮮に獨立の基礎が事實に確立して居つたら、併合と云ふことは起らなかつたのであらう。若し朝鮮の人に獨立の自信があり、獨立の事實が備つて居つて、日本と手を組んでお互に條約の上で一緒に仇を仇として之に對し利を利として之を守るだけの本統の基礎があつたなら、兩國が結約共動して相互の國家を自ら經營するに於て私共に異議はないのであります。併ながら其の事實が缺けて居つた爲に、双方合意の上で合併したのであるならば、合併した當時の條約を其の儘に實行すれば宜い。誠なれば明かなりで、お互に約束を守つて誠を以てやれば宜いではないか、古人が心誠に之を求むれば中

らずと雖も遠からず未だ子を養ふを學びて而る後に嫁ぐ者はあらずといふた。眞に此語の如く親が子を受するの心は誠實であるから、母として子を持てば其子を受する心の誠によつて子を育つる事が出来る娘が夫を持つ前から子を養ふの學科を修めて嫁入する者は無いと云ふたとは本當であると思ふ。此意味を以て私の不備なる説をお聞きになつて參考にならば幸ひであり、御批評下されば私を啓發すること大なりと思ふ。日本が海外に發展を望んだことは事實に相違ない、其方法はどうしたら宜いか、それは諸國に其例があるので、その例を見て海外に發展したいと云ふ希望を起したのである。その例とは如何なるものであるか、古昔の歴史は別として近世史のことを言つて見ますれば、西班牙、葡萄牙、和蘭、佛蘭西、英吉利の如き、それ〴〵領分を擴めて其國を大きくした。其の事實を見て日本人も國を大きくしたいと云ふ心を起したに相違ない、其の膨脹の程度と方法とは佛蘭西は和蘭と違ひ、英國は葡萄牙西班牙とは違ふ。葡萄牙の如き、西班牙の如き、一時は非常に發展したが後には共に失敗して居る。

西班牙の如きは其盛なるに當ては世界到る處に領分を持つて居つた。彼の菲律賓の如き三百年來の屬島であつたが近時遂に米國の領有に歸した。斯様な發展は日本國民として望む所ではない。葡萄牙も亦然り和蘭もそれほどないが印度と云ひ瓜哇とボルネオと云ひ甚だ振はぬのであります。さうして佛國は印度の方面にも加奈陀の方面にも領土を持つて居つたが英國と競争が出来ないで領土が減りました。先づ以て今までも自分の土地以外に發展して其目的を達して居るのは英吉利一國と云つても宜しい。米國之に次ぐのであります。何故に斯様に英國の領土が擴がつたかと云へば、屬國の文明が進んで來ればそれに自治を許し、利害を共にし、目的を共にし、將來の幸福を共にするので本屬の關係が繋がれて居るのである。それすらも一度法を誤れば民衆の恨みを買つて亞米利加合衆國を分離獨立せしめた、今又愛蘭が動搖して居ります。斯う考へて見ると屬國とか保護國とかが自治獨立を望むのは人情の自然の結果世界共通の事情であると云つても差支ないと思ふ。日本が如何なる經歷を踏んで來たにもせよ、

新に日本と一緒になつた民族に對しては大に注意を要する。先づ朝鮮に就て立言する前に臺灣に就て之を考案して見ませう。臺灣は征服したのではありませぬ、臺灣は支那の領分の如き關係にあつたのであります。それが日本と支那本國との關係の變化によつて日本に附隨して來たので、日臺の双方共に親むべき原因はあるが敵視すべき理由はない。然るに其の臺灣を支配すること二十七八年を経るけれども、まだ番兵を付けて置かなければ安心が出来ないと云ふ日本人の新領土を支配する不手際は歎息せざるを得ない。南アフリ加と英吉利との關係はどうである。クルーゲルがトランスヴァール大統領であつた時同地を征服したのであります。南阿の人種は和蘭民族であります。然るに今日に於ては血を流しても南アフリ加の領土が英國から離れやうとしなければ、公然と分離獨立を唱へる者もなく假令唱ふる者があるとするも同地の多數は耳を傾けない。歐洲の大戦は英吉利と獨逸——聯合諸國を別とし經濟上英吉利と獨逸との喧嘩である、歐洲戦争の當初獨逸では英國が直ちに戦争に参加するとは思はな

つた。それは諸屬地が熱心に本國の戦争を助けまい。特に愛蘭の如きは此機會に反亂を企つるであらう英國も是等の事を氣遣ふて容易に戰に参加しまいと思ふたのである。然るに此世界の大騒亂の時に當つてスマッツ將軍は遠く南阿より英國に入り來つて、今回の大戰に就て英國と植民地の間には良い變化が起るであらう、今までは相互の間不眞面目の傾きがあつたが、今回共同の大敵を受けたので此戰に依つて眞面目に結んだ緣故は戰塵が收まつた後にも更に親密になつて、英吉利の帝國は非常に充實固結するに違ひない。是は戰後に起る變化であるが、之によつて英帝國の基礎は益々鞏固となると想ふと、此スマッツ將軍は南亞戦争の當時多分佐官級の人であつたと思ふ。壯年の佐官級であつた。當時のスマッツは對英の強敵で英軍を惱ました人物であつたが、二十三年後の今日に於ても南阿を代表する英吉利の忠實の友となつた。是の如き變化は何によつて起つたか之に自治を許して其民族に相當の満足と與へてやつたから英國の人民であると云つて世界を旅行する、英國の領分の人民であると云つて利

益を得て居るからである。斯う考へて往つたらどうか、人種が近くて殆ど同人種であると云つても宜い臺灣に於ては二十七八年の領有後尙ほ島治の爲めに守備軍を置かなければ安心ならぬと云ふのは日本の政治が悪いからである。朝鮮はそれよりも更に甚しい、朝鮮の人が日本と離れて獨立をしなければ満足が出来ないと云ふ聲を絶たぬのは何事であるか、日本が誠實に考へて、朝鮮人を満足させるだけのことを行はないからである、之を行ふとが日本帝國の爲めに計りて根本的必要であるとを信ぜざるを得ない。

朝鮮に對して、植民地と云ふ名は不適當である。新領土と云ふか、新版圖と云ふか當然である。之に對して今日我日本の官吏は兢兢として用心をして居る。新版圖の人も表面は満足して日本と結合して居る様に見へても心の中には離れたいと云ふ念を絶たない者が少くない。丁度仲の悪い夫婦が同居して居るやうなものである。是れでは決して帝國の安全を保ち日本國が安心して居ることが出来ない、之に向つて大に考を廻らさなければならぬと思ふ。此憂に至つては心ある朝鮮の方も日本の方も或は悲觀的

ではないかと思ふ。私が此事に就て考ふるに、誠實に話し合つた通りに行へば宜い、併合の約束を守つて往けば互に其様に不安不平は起らぬ、約束と事實が違ふと云ふのでヤカマしいのではないか、さうかと云つて合意の併合である以上朝鮮人に強めて日本通りに萬端の事を變へると云ふのは無理である。古い習慣は容易には改りませぬ頼朝が奥州を征して秀衡の領分を取つて仕舞つて天下を總統したが、奥州には奥州の慣習があるからと云つて、其の慣習を重んじたので治まつた。又徳川家康が天下を一統した後も武田信玄の領分甲斐國には信玄以來の慣習は其儘に据置けと云つた。王政維新の時まで甲斐には甲州金と云ふ獨特の通貨があつた。是等有形の物質は一々慌て、統一しないでも、思想情操が合致して來れば自然に變化して來る。さう考へたら無理なことは止めて、其の許すべきは許し、是非ともやらなければならぬだけには心ある人の同意を得るやうに仕向けてやつたら宜からうと思ふ。更に日本の人の不勉強を咎めなければならぬ。異なつた民族が這入つて來たら其の本國の人は絶えず

勉強して之を懐けなければならぬ。商賣を盛んにする者は其の國の如何なる小さい部落へも這入つて其の部落の言葉を習はなければ本當の商賣は出來ない。況んや朝鮮の如き廣き新版圖を治めるには、或る務に當る日本人が朝鮮語を學んでやらねば其情想を理會するが出來ぬ。日本人はモウ些つと勵まなければならぬ。更に研究心が強くなければならぬ。朝鮮が今日までの高句麗の方の慣習と百濟新羅の慣習とはどう違つて居る、南韓北韓の違ひはどうだ、北韓人が勢力を失つて南韓人が北韓人をどう見たか、斯う云ふ類の歴史的事情も知つて居らなければならぬ。斯る根柢に觸れる智識を缺きて蠻境を克服したる態度を取りて教育を一定の尺度の下に入れて日本の國內に臨むが如く朝鮮のことも日本流儀にして仕舞はなければならぬと云ふ考が間違つて居ると思ふ。是れは獨逸流を學んで而かも不能力と不勉強なる日本の政治家の誤りである。新に得た版圖は武人でなければ總督になれないと云ふのが根柢の間違である。而かも新に有利なる田園でも買た如く之を占領するのは藩閥系統の武人に限るといふ

のは言語道斷である、武人は武人の専門があるから軍事には通じて居らうが、丁度我々が
大砲を扱ふことが出来ないやうに、大將が民政に精くないのは必然である、將軍でな
ければ總督になれないとやつたのが一番の間違で更に藩閥的武士を採用する事が情弊
である。英領カナダのモントリオはどうであるか、學校の中でも佛語を使つて居り表
には英國の國旗を出して居るが家の中で英佛の兩様の國旗を交々飾つても政府は之を
問はない。此の如く寛大で大膽であつてほしい。旗が怖しい様では仕方がない。朝鮮人
が朝鮮語を使ふのは當り前である、それを朝鮮語で會合するのは何かやるのではない
かと云ふやうな事は餘りに臆病である。探偵で廣版圖を治めその多數を悦服せしむる
ことは出来ない、もう少し大膽になつて、出来ないものは出来ないとして之を説服し、
向ふの人の言ふこと丈けを聞いて見て、道理があるならやつて見たらどうか、朝鮮の
人も獨立をすると云つて米國を頼つて居る者があるやうであるが、それでは獨立の基
礎がないのである。私は朝鮮の歴史に暗いと言ふだけはいふ、朝鮮の別名を鷄林と云

ふ。此の言葉は漢の武帝が鷄林郡を置いたからそう云ふのである。支那が朝鮮へ手を出
して朝鮮を捲き込み、唐の時代も其通り、元明清も其通り、次で日本と露西亞と取合
喧嘩が出来た。斯うなると朝鮮の人が自分の力で自分の地盤を衛るこの出来ないなら
論は無いが、露に倚らんとする鮮人もあり日本に頼うとする鮮人もありて終に其獨立
を失つた。自力で自國を獨立せしめなければ其目的を達することが出来ない、然らざれば
名を得て實なきよりも實を棄て、自治の形式で幸福を得るのが次善の方法ではないか
と思ふ。

日本人も朝鮮人が活動すると直に不逞と云ふ文字を使ふが是れは宜しくない。警察
官の探偵では分る話でない、腹に誠があつて正直であれば明白になる。往年伊藤博文
君が統監となつて朝鮮に往く時に、東京市内の重なる新聞記者を晚餐會に呼んで話し
た其辭に私は陛下の命を受けて統監となつて行く、私は朝鮮人の友達となることを心と
して行くのである。對支の戰の時に粗暴な日本人が多數入込んだ、對露の戰爭の時に

も色々我民族が我儘をやつたらう、日本人は新らしい版圖を持た訓練がないから随分粗暴なことをやつたらう。昔豊太閤が朝鮮を討つたと云ふやうなことを覚えて居るから征韓と云ふやうな思想を齎らす日本人が多からう、自分は被保護國へ陛下が統監をお遣しになる思召のある所を深く心に銘じて居る。故に今まで彼地に往つて居る者を教えなければならぬ。中には折角日本人が戦勝に乗じて朝鮮を威服したのに、弱い伊藤が來てはどんなことになるかも知れぬと反對する者もあらうが、私の言ふことを覚えて居て呉れ、私は同盟の國―被保護國の意味で朝鮮を待遇し日本人の仲間を教えるのが自分の務めである、自分の意思に同感であるならば此方針を助けて貰ひたいと云ふた。其の時私が年長者であつたから答辭を述べて、さぞ御心配であらう、私は徹頭徹尾同感である、若しさう云ふことがあつたら我々は特別に注意を加へ貴下の志を體認して其方針に違はぬ様盡力するであらうと申したが、伊藤君はさう云ふ意見であつた。然るに安重根の爲に哈爾濱の露と消えたのは、日本の不幸のみならず併せて朝鮮

の不幸であつたことを私は深く歎息する。彼の南阿の人はどうである、人種は和蘭人であるが、英帝國全部の堅固にあることを望んで居る、臺灣人も世界を旅行する時に臺灣人といふより日本人と云つた方が通りがよい様になり、日本の版圖に屬した方が幸福であつたならば異論はない筈である。新版圖を被征服地と考へて差別待遇を爲す日本人の心根が間違つて居る、新附の兄弟であると考へて平等に待遇し不公平我儘の動作を止めねばならぬ。ザエルサイユ會議で人種平等論を唱へ米國で歸化權拒否を非難する日本人が朝鮮臺灣で同種同邦の新版圖の住人を差別不公平に薄遇するとは不信極まる舉動と云はねばならぬ。此事は單に役人に忠告するのみで無い。政府に望むのみではない。在臺在鮮日本人全體に望むのである。併合が合意の併合であるならば、其の心を體して禮儀を失つてはならないと思ふ。併合が正き名分であつて又明治天皇の聖旨である。然るに斯う云ふことを聞きます。日本の役人は日本人には便利を與へるが、朝鮮人には便利を與へない。或る日本の有志者が此陋習を試験せんが爲めに朝鮮の服

を着て朝鮮人の眞似をして鐵道停車場へ往つたら容易に切符を賣つて呉れない、一番後とで呉れた。元々試めず積だから販つて來て今度は日本の服を着て往つたら適當の順番に賣つて呉れたと云ふ。萬事が斯様であるから朝鮮人が憤るのも無理はない。今度は朝鮮のことではないが、友人の中野正剛君が奉天で演説をした歸途、支那服を着て滿洲鐵道に乗つた所が、二人の日本陸軍士官が居て、俺と一緒に支那人を乗せるのは怪しからぬと車掌を責めて居る。中野君は俺は斯う云ふ者だ、同じ切符を買つて乗るのに何故支那服を着たものと一緒ではないか、同一の切符を買ふ者に對して日本支那の區別を望むは何事ぞと問ひ詰めた所、吃驚して詫をしたと云ふ事である、同じ切符を持つて乗るのに斯う云ふことを言ふと聞いた、又朝鮮の停車場で切符を賣る人も順に賣るべきであるのに、何故朝鮮服を着た者を跡廻しにするのであるか、斯う云ふ事が鮮人や支那人の不滿を買ふ一大原因となる。然るに朝鮮には探偵政治が行はれて人の秘密を探つて居るが、探偵で眞事實を知つたと思ふのは間違である。言

論の自由を一般に許し、言ひたいことを言はして、間違つたことがあつたら辯駁して是れは斯う云ふ譯があつて出來ないのである。斯くすれば宜いのであると、親愛の情誠實の心を以て臨んで行けば萬事穩かに解決する、今より溯ること五十五年維新の際に、薩州人とか長州人とか桑名人とか會津人とか仙臺人とか區別して居たが、同じ國の人であるのに斯う云ふことを言ふのが間違つて居る。人種の區別を言つたら、日本人の中には朝鮮人の子孫がある。又文學も支那の文字を使用して居る。私は朝鮮のことを精く知らぬが、大體のことを言へばさう思つて居るのであります。

獨逸人は勉強家であつて、學問のことに就き獨逸人は秀でて居るが此の獨逸人が新附の民を治むる政事の拙劣は驚くべきもので、波蘭を支配すること百餘年の長年月に渉るも少しも服従して居らぬ。之に反して英吉利の屬領若くは植民地は愛蘭を除いてクラウン・ランドと云ふか、フリー・コロニーと言ふか、種々の名義の相違はあるが、何と云つても構はぬ、恐らく如奈陀でも新西蘭でも英國から分離獨立して便利だとは

思はぬであらうと思ふ。私は朝鮮の人に直言する、不足があつたら懇ろに承はらうと思ふ。名は何でも實があつたら宜いではないか、朝鮮の人々も大概此邊で折合つたらどうです。日本人も併合と云ふなら本當に併合の心持を以てやつたら宜い。朝鮮人が少しばかり運動すると直に危険思想の徒の妄動と云ふ、役人の思想が健全で民衆の思想が不健全であると云つたら、日本中到處皆危険思想であらう。私は斯う思つて居る。今にして政府が悟らず民衆が悟らずに居れば治まるべきことも治まらない。今云ふ如きことにしたら朝鮮の人も折合が付くと思ふ。お互に親愛の心を以て協議すれば互に斯う云ふことに仕やうぢやないかと圓滿にやる事が出来る。古來支那朝鮮より入つて來て日本人になつた者が澤山ある、何故に昔の人は彼の如く馴染んで今の人は斯の如く折合が出来ないのであるか、昔日本よりも發達して居た朝鮮が日本に併合されなければならぬやうになつたのは同情に堪へぬが、併し兄弟であつたら互に譲ると云ふことが出来る、長上が譲つて往つたら治まるのである。伊藤統監の如きはさう云

ふ考があつた。それが安重根の爲にあゝ云ふことになつたのは、朝鮮の不幸であり又日本の不幸である。此不幸の變事があつて文吏ではいかぬと云ふので武人の總督が出來た譯であるが、武斷政治は全然いかぬ、尤も其後大分改まつたが、今日に於て速かに朝鮮に許すべきは言論の自由と集會の自由であります。下の人の言ふとを聞いてそれが善いとならば行ふが宜しい、悪ければ斯う云ふ譯であるから行へないと正直に話してやつたら宜いのであります。然るに朝鮮人が集會し論議するのは危険だと云ふのは言語道斷である。俄に言葉まで變へると云つて之を強ふるのは無理である。日本は古來朝鮮より種々の文物を輸入して居る。夫の國寶となつて居る奈良の法隆寺の建築の如き朝鮮人の建てたものである、此經歷に對しては相當の敬禮を與ふべきであらう之を武人が軍隊式に一二三四でやらうと思つてもさうはいかぬ。朝鮮を自分の島の如く考へるのは間違つて居る、是れは止めなければならぬと思ひます。

總て獨立は我力で獨立するものであつて、人の力に倚つて獨立するものではない。

朝鮮の人々もさう考へたら如何です。私が此處に立つて居るのも、道理に對する責任はあるが、日本人にも朝鮮人にも偏頗なる加擔をする義務は無いと思つて居る。眞實を語るのが私の義務と思つて居るから双方に對して、遠慮會釋なく言ふ故に日本人に改めなければならぬと云ふことを忠告して居るのである。日本人が南韓人を主にして北韓人を敵だと思ふのは確かに日本人の見方が悪い。故に善くなつたら一緒にやつたら宜いではないか、それで米國では朝鮮人を歸化させますかどうです、現在でさせませぬ、米國人の援助で無力の朝鮮が獨立し得るか出來ませぬ、カリフォルニアで日本人が米國人と一緒にならうと云つても一緒ににはなれない、日本の人が全人類に對する觀念を改めると云ふ事が是等の諸問題を解決する前提である。善良なる米國人は之に共鳴すると信ず、私の信念は此處に在る、改むべき要件は決して私利を思はないと云ふと、さうして朝鮮に自由を許して平等の觀念を懷き之を事業に施すのが根本の改革である、先づ大略さう云ふのが私の説であります。それが本當に行へば臺灣も朝鮮も

無事に治まつて行くを確信して居る。本當に日本人がやらないから朝鮮人に不足がある。彼の併合の約束通りにやつて居つたら今まで騒動はなかつたであらう。是だけのことを話したら朝鮮の人でも大抵折合が付くと確信する。唯至誠を以て交はる是れが要點である、誠なれば明なりで自然と眞正の見識が立派に立つて来る。日本の新領土に對する政策を深き過失の窠中に陥らぬ間に早く正道に還るのが必要と考へる。英國がグラットストーン氏の愛蘭自治案を早く實行したら今日の如き難局に遭遇しなかつたであらう。禍を未然に遏め得たであらう。愛蘭人が痛憤深慨の極度に陥つた後に自治權を與へようとしたが既に晚かつた、種々の混雜を引起すに至つた。早く自治制を布きて安全瓣を開たら獨立派が現在の如き憤怨を起さなかつたであらう。此一例は日本の朝鮮に於ける殷鑑に供すべきである。私は別の新案を提出する者でない、又提出する必要がある、日韓聯合の本旨を實行するに誠意なれと唱へんとする者である。明治天皇の聖旨を遵奉する事に忠實なれと日本國民に勸告せんとする者であります。

自由計究社新賛助員芳名錄 (大正十一年十月六日(降)至)

京畿道

(氏名イロハ順)
 今井猪之助殿
 井内總三郎殿
 尹東淳重殿
 伊橋菊吉殿
 坂左多松殿
 林永徹也殿
 富能維也殿
 沈能維也殿
 朝鮮總督府遞信局殿
 李錫主殿
 大杉源次郎殿
 近江清藏殿
 尾上千秋殿
 田中重恒殿
 島公立普通學校殿
 村松儉爾殿
 植木茂殿

牛島茂作殿
 桑原金右衛門殿
 山本壽雄殿
 丸山久吉殿
 松本久吉殿
 京畿道廳教育文庫殿
 京城滿鐵圖書館殿
 布施承野寬殿
 洪島承龍殿
 寺島安殿
 安俊學殿
 相良國衛殿
 佐々留之助殿
 西條留之助殿
 金田喜會殿
 宮田喜會殿
 葛川澤龜殿
 下川澤龜殿
 杉野鹿三郎殿

忠清南道

忠南道廳教育文庫殿
 忠清南道廳殿
 柳毅夫殿
 氏原將一殿
 鄭坂清松殿
 鄭吳相謨殿
 徐相奎殿
 石川嘉逸殿
 井野伴男殿
 忠北金融組合講讀會殿
 岡山榮久殿
 中山益次郎殿
 深澤秀之助殿
 吳澤完之助殿
 齋藤清治殿
 鈴木スミレ殿

全羅南道

川村榮松殿
 田中乾一殿
 山口德殿
 山州高等普通學校殿
 全羅南道廳殿
 石川健治殿
 李田竹二殿
 內田儀助殿
 山田儀助殿
 二村文次郎殿
 三宮尚二殿
 宮田和源殿
 清水和源殿
 鈴木桂兒殿
 鈴木桂兒殿

全羅北道

石川健治殿
 李田竹二殿
 內田儀助殿
 山田儀助殿
 二村文次郎殿
 三宮尚二殿
 宮田和源殿
 清水和源殿
 鈴木桂兒殿
 鈴木桂兒殿

(110)

慶尚南道

野上通榮
松尾健
松本清兵衛
安藤善兵衛

慶尚北道

尹基東
朴龍之
德然
李相範
李聖源
李善文
及野五
瀧川
永源
山代
永三
松波文
本定

黃海道

樋口義平
小鉢義則
五味義平
深江常吉

平安南道

井上忠一
二邊成
渡邊玉
玉澤一
黑澤一
安州郡廳
金州鎮

平安北道

馬場雄
西岡親
本田則

江原道

早川篤
新憲
李聖
林壽
太田靜
大西房
松本寅
福谷直
小多直

咸鏡南道

肱安早
森平五
森

咸鏡北道

朴泰
李會顯
瀧山顯

高須藤忠
山形直
雄基公立普通學校
廣田丸
滿州
吉倉保
染谷保
東京府市
上野啓
照井健
森田清

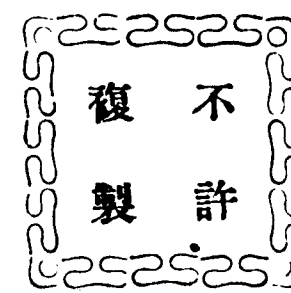
內地各府縣

岩瀬文庫殿
原平藏殿
渡邊純藏殿
和歌山縣立圖書館殿
金子家英殿
吉川卯吉殿
大山記念長岡市立尊文庫殿

永山時英
上田兵藏
古瀨圖書店殿
福岡縣立圖書館殿
私立吳橋文庫殿
三井工業學校殿
眞言宗高野山中學殿
下益城郡教育會圖書館殿
關內重雄殿

鮮滿叢書第五卷 附

大正十一年十月廿五日印刷
大正十一年十一月一日發行



編輯者 細井肇
發行者 高木司郎
印刷者 自由討究社印刷部
印刷所

鮮滿叢書第五卷 附
定價 金貳圓
自由討究社社員に限り一円

發行所
一手取次店

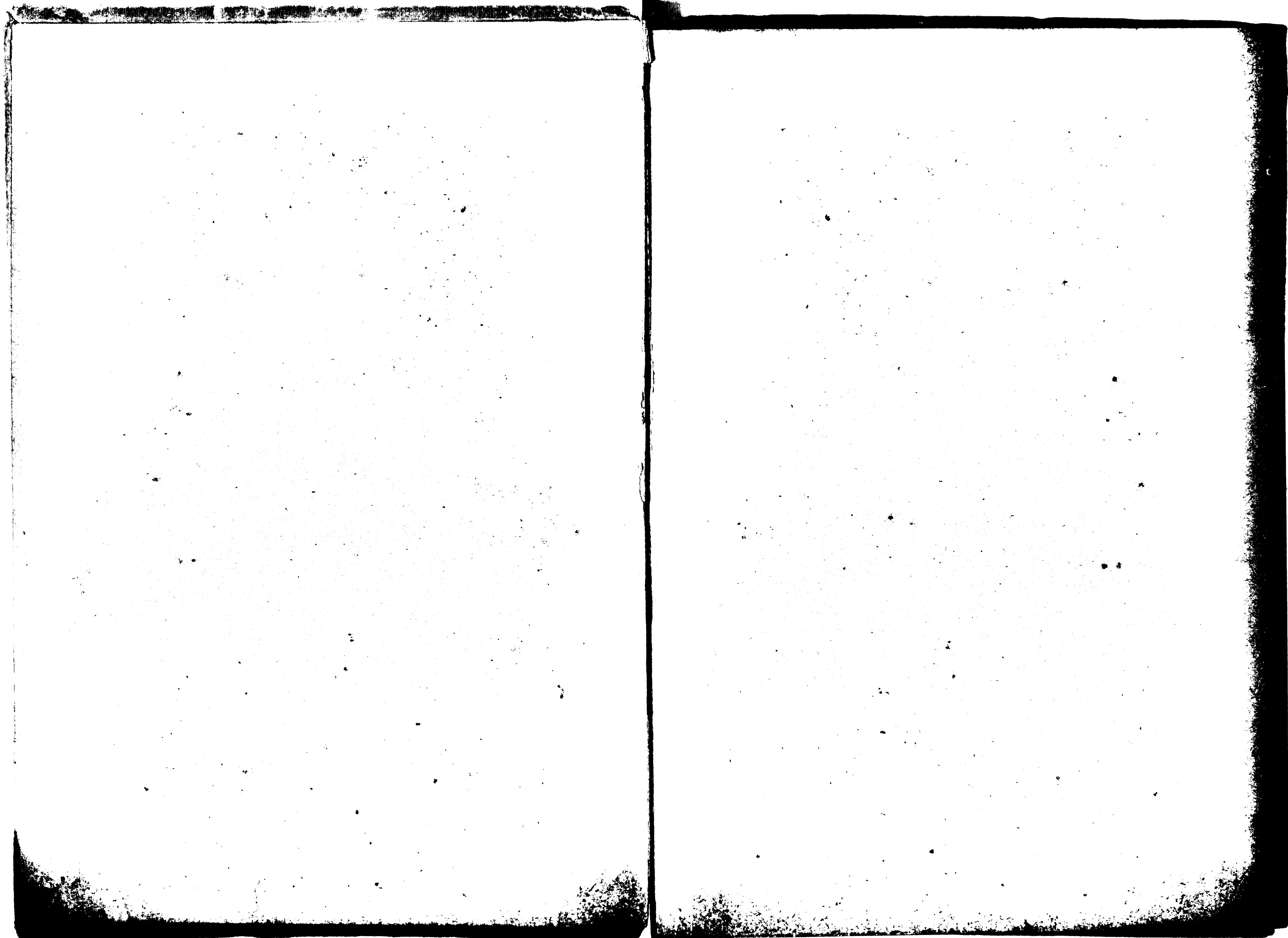
東京中區谷二九五
振替口座東京五六七二六
京 城 本 町 一 丁 目

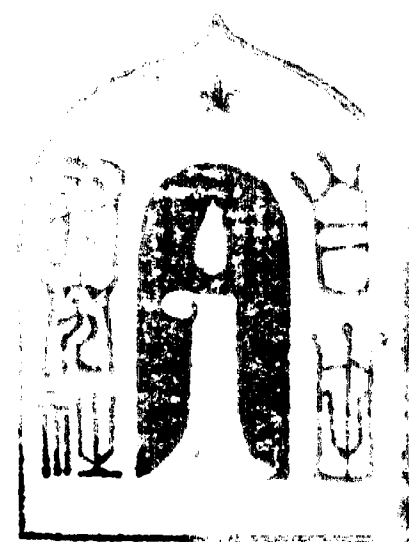
自由討究社
大阪屋號書店

御不用の書籍は何品に
依らず誠實に申受候

古本
買受 文光書店

京 城 本 町 二 丁 目
電話本局三三四八
振替京城三三七〇八





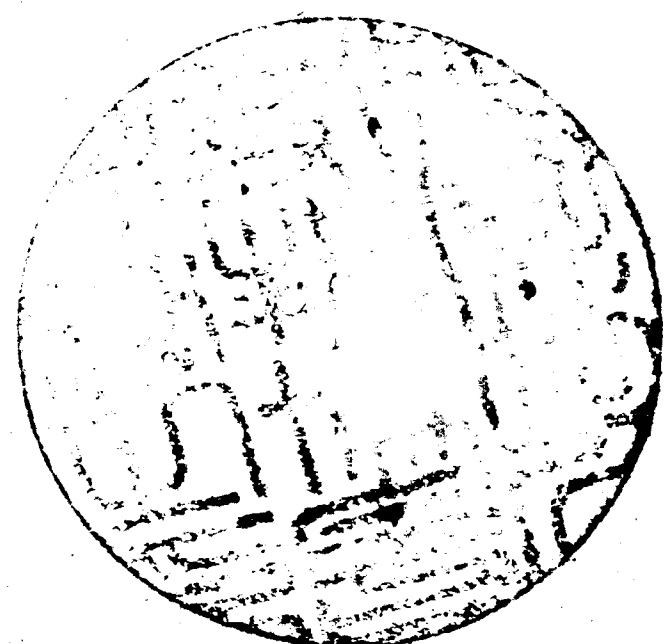
五拾錢

朝鮮同胞に告ぐ



049-9

001
390.1
72



001
72
390.1

白山青樹編

朝鮮同胞に告ぐ

京城大東亞社刊

序

我々朝鮮民衆は、今や母國人士の『大なる愛情と骨肉的信頼』の眞只中にあることを感じ幸福に思ふ次第であります。

聖戰以來、皇國の進運に此の貢獻と忠節を盡して來たとは云へ、その血の量、汗の量、物の量は内地人に比べ物の數ではなく、これに國民的義務を果たしたと、夢だに思はぬのに、母國人士は既に過分の期待と感謝を以つてする、ひそかに愧怍に堪えぬ處であります。

只これだけは強く云へます、今や半島は以前の半島に非ざるなり、大戰を契機に二千五百萬の同胞、擧つて立ち上り内地人との共同使命觀、共同生死觀の下に一切の生命財産を捧げて、この尊い戰さに臨んで居ることを。而して我が同胞の内、帝國榮へる時日本皇民なるを誇り、然らざる場合、退くが如き不忠の民一人も居らざることを。又而して昨日迄は清算と反

省の力弱く、その犠牲に於て、その努力に於て、缺くる處多々ありとするも、今日以後は我等必ず戦ふ皇國の爲め、兵、兵器、兵糧等歴史的に大なるものを捧げるに至るであらうことを。今や併合以來三十四年、舊政時代より繼承した『無智』と『貧窮』は次第に取除かれ民度大いに向上し、既に今年よりは我等の子弟、兵となり直接戦列に立つを得、二年後よりは幼少年、凡て學窓に集り國民教育を受くるに至る、かくして文武の兩資質を併せ備へたる半島民衆は、幾年かの後寸毫の區分、差別なき皇民となり切り、日本大帝國の建設に、亞細亞の再建、指導に十分力を致すでありませう、實に偉大なる世紀的夢の現實化であります。

この光榮の門出の日、我等はこの信書を母國人士より受く。その悉くが『信實と愛情』を以つて貰かれて居ます。凡てが半島同胞をいたわり、勵まし將來への幸福と繁榮を約束して居らる。我等はこの言葉を永遠に記憶、復誦しこの良き師、良き兄、良き友の期待に背くことなく、誠心精進することを今日の『お答へ』と致し度いのであります。

げに大戰は苛烈の度を加へ、祖國日本敵の總反攻に會ひ、今や一億共に死闘の構へを急ぐこの秋、この書半島同胞に送らる、誠に意味深長なるものを感じ嚴肅な氣持に打たれます、それ

丈けにこの書讀破には、數時間で足りようが、その生命、内鮮兩民衆地上に榮へる限り幾千年と續くであります。

昭和十九年四月一日全朝鮮へ徴兵検査實施の日

編者 白山青樹

目次

兵制問答……………	大政翼賛會總務	下村 宏……………(一)
大戰の現段階と半島同胞、光明への道……………	毎日新聞社長	奥村信太郎……………(四)
内鮮は一ツなり……………	前拓務大臣	永井柳太郎……………(九)
剣を握り、武勇の道へ進まれよ……………	陸軍大將	荒木貞夫……………(五)
帝國の構成分子への復古……………	讀賣報知顧問	武藤 貞一……………(七)
勝利への途の任務は一ツなり……………	改造社長	山本 實彦……………(六)
聖戰完勝の闘魂……………	慶應學會理事長	川岸文三郎……………(三)
半島民の心のありかた……………	京城日報社長	高宮 太平……………(七)
明治大帝の聖慮を理解せられよ……………	貴族院議員	徳富 蘇峰……………(八)
南方を健闘する朝鮮同胞を見て……………	前 總督	南 次郎……………(七)

戦時の義務と、戦後の榮光	朝鮮聯盟会長	簡牛凡夫(四)
戦時食糧増産に身魂を投ぜよ	衆議員議員	吉植庄亮(二六)
半島同胞と徴兵	貴族院議員	丸山鶴吉(二五)
歴史の大道を掴めよ	東京新聞顧問	御手洗辰雄(一九)
國家の干城となり、同じ戦列へ	大本營參謀	秋山中佐(三五)
内鮮の區別、秋毫無し	前内務大臣	水野鍊太郎(二四)
大詔は炳、進軍を待つ	日韓朝鮮事務局長	倉茂周藏(二五)
文化と血の繋りへ	日本文學報國會	河上徹太郎(二六)
朝鮮統治と徴兵	前學務局長	鹽原時三郎(二六)
朝鮮の詩人を迎へるの辭	日本文學報國會	佐藤春夫(二七)
『徴兵朝鮮』を輝かせよ	海軍大將	高橋三吉(二八)
徴兵制下の朝鮮婦人へ	詩人	人竹内てるよ(二八)
『朝鮮と戦力』を語る	協和會理事長	關屋貞三郎外(二八)
進歩する朝鮮	朝日新聞	鈴木文四郎(二四)

研究論文四編

新羅の『花郎制度』	辯論海軍教授	三品彰英(二三)
『聖地扶餘』の内鮮一體史實	扶餘	高島卯三郎(二四)
『高麗神社』と千年前の内鮮親和	東京	前田文夫(二七)
素戔鳴尊半島御開發の史蹟	春川	宮内幾太郎(二八)

朝鮮同胞に告ぐ



兵制問答

大正十三年
貴族院議員

下村 宏

答 問 解 答

ゾンバルト教授は歐洲人の足跡の及ぶところ沃野を變じて瘠土となすといつてゐるが、日本民族の足跡の至るところは瘠土を變じて沃野となすといつて何等憚るところはない。

朝鮮は併合當時の人口一千三百萬、今や其數を倍加してゐる。その間半島の教育に衛生殖産交通等々いかに文化が急激なる躍進をつゞけつゝあるか。之を英國の南阿印度などにくらべてあまりにも其相違が甚しい。まさに雲泥の差といつてよい。

・英米などの政策は差別觀に立ち我は平等觀に立つ。それは人種歴史地理あらゆる點に於て我皇道の特異性に本ついてゐるが。しかし全然渾然一體となるには少からぬ世紀を要する。

そう／＼簡単に手早く片付くものでない。

今やかね／＼大きな宿題であつた徴兵制が施行され良好なる成績をあげつゝある。内鮮一
つに融和さるべく／＼に大々的飛躍を遂げたのである。筆者は大正のはじめ臺灣に民政長官
をつとめてゐたが、當時臺灣でも早く兵制をといふ聲があつた。私は時期の問題であるが
まだ早しといつたのであつた。反問する者は内地でも徴兵忌避者があるではないかといつ
た。私はいつこの國にも刑法があり刑務處がある、徴兵令にも忌避者を罰する規定がある。
要は刑事の犯罪者、徴兵の忌避者の比率がどの程度にあるかといふ點にかゝると答へた。
今次徴兵の成績を見よ、何んといふ素晴らしい成果を示したか、誠に驚嘆すべきではない
かといつたのである。

大東亞戦は大東亞十億の民族が解放せらるべく始めてあり將來再び有り得ない機會に直
面してゐるのである。此の大東亞戦にはそこに數多くの副産物を生みつゝある。半島の徴兵
制はまさしくその一事例である、いつかは来るべきであるが、平時であれば來るとき遅く、
しかもその間幾多の曲折波瀾を招くと思ふ。それが快刀亂麻を斷つが如く一氣呵成にす

／＼と運ばれた。共に大に慶祝せずんばあるべからずである。今後さらに之につ／＼べく残
されたる道が開けて、一時も早く渾然たる一體に融和せらるゝ時を招來すべく、御互に戒心
し精進し努力をつゝけるばかりである。

大戦の現段階と半島同胞、光明への道

毎日新聞社長 奥村信太郎

朝鮮が内鮮一家の状態に復歸して、丁度今年で年を経みすること三十有四年である。

朝鮮統治の宏謨は半島二千餘萬の同胞をして悉く帝國の忠良なる臣民として 天皇陛下撫育の化を被らしめ、永へに深仁厚徳の惠澤に浴せしめ、下は初代の寺内總督が聖旨を奉じて統治の大綱を立ててから小磯現總督に至るこの間歴代の各總督は、よく世運に順應し、よく民意を尊重して行政の改革において、文化教育の興隆増進において、はたまた各種産業の發達伸展において、その他各般の施設に最善の努力を傾注し、一路繁榮朝鮮、道義朝鮮の確立に向つて邁進するとともに、他面國民がよく併合の大精神を體得し、施政當局の眞精神をよく

理解し、施政當局の指導の下に皇國臣民としての實をあげることに、ひたすら努力して來たのである。

殊に滿洲事變の勃發は朝鮮同胞の國民的自覺を著しく向上させ、ついで支那事變の發生は一層これに拍車をかけ銃後奉公の至誠はいよいよ昂揚されるに至つた。こゝにおいて内鮮一體の皇謨を扶翼し奉る朝鮮同胞の愛國的至情は、陸軍志願兵制度の施行となつて昭和十三年度から實施された。自來年々歳々、その成績は良好であつて、採用者數も、志願者數も驚くべき飛躍的增加を示し、昭和十七年度の如きは採用者數が〇〇〇名のところへ、これが志願者數が實に〇〇〇を突破するといふ驚異すべき多數に上つた。この一事は何を物語るか、如何に朝鮮同胞の間において愛國の至情押へがたく、われもくと志願を申出でたかを最も雄辯に物語つてをるものと思ふ。これら幾多志願兵の中には既に征戰に従ひ、陛下の忠良なる股肱として一死國に殉ずる赤誠を捧げ、中には赫々たる武勳を後世永く竹帛に垂れて、護國の華と散り、靖國の御社奥深く齋き祀らるゝ勇士も出た。

殊に陸軍上等兵金廣昌貞、陸軍兵長金城義輝、同山村東壽、同文岩龍雄四君のごときは志

願兵として出征〇〇部隊に属し、北支の第一線で勇戦奮闘大いに朝鮮特別志願兵の眞價を發揮し、壯烈鬼神を泣かしめる戦死をとげたがその烈々たる攻撃精神と武勳は上司の深く認むるところとなり、昨年二月十八日付をもつて朝鮮特別志願兵としての初の二階級特進の恩典に浴したほごで、誠に後進半島壯丁の鑑といふべきである。

今次大東亞戦争が勃發するや朝鮮同胞の愛國心はいやが上にも高まり、飽くまでも皇國臣民として、世界人類の仇敵米英を撃摧せんばやまずとの烈々たる氣魄が、朝鮮全島に横溢し、多年待望の徴兵制實施促進の機運は澎湃として漲つたのである。こゝにおいて政府では一昨年の五月八日の閣議において『朝鮮同胞に對し徴兵制を施行し、昭和十九年度よりこれを徵集し得る如く準備を進むること』に決定し、即日情報局から發表された。而してこれに伴ふ兵役法中改正法律案の二件、すなはち朝鮮における兵役法施行の法律案が昨年の議會を通過し、昨年八月一日から施行されることになつた次第で、朝鮮同胞が、別して元氣激勵たる學徒青年諸君が、多年待望してやまなかつた兵役法の恩恵に浴することとなり、本格的に無敵皇軍に参加し、大東亞戦争の眞只中に馳せ參じて、皇民現下至上の責務である、大東亞戦争完遂の聖業を分擔するに至つたことはこの上もない光榮であり、大いなる慶びといはねばならぬ。

今や戦局は日夜凄愴苛烈を極め、一刻寸時の儉安を許さず、皇國隆替の重大なる岐路にありといふことが出来る。内地の學徒青年は早くも驟然起つて召されて象牙の塔を出で、ペンを捨て、書物を擲つて勇躍その任につき、陸に、海に、空に挺身奮戦悠久の大義に生きんとしてをる。さぞかし諸君の後續を心から待望してをることと信じて疑はぬ。

翻つて朝鮮の教育制度を見るに施政以來一視同仁の聖旨に基づき、教育勅語の御主旨を奉體し、同胞をして洽く昭々たる皇化に浴せしめ、皇國臣民たるの本質を具有するを使命として、歴代の當局は時勢と民度に即應しつゝ萬全の策を施して來たのであるが、未だもつて半島の教育普及状態は満足すべきものではない。しかも大東亞建設の大業は今や日に月に驟々として進捗し、その中核體として朝鮮の負荷する使命は愈々重大を加へてきたために、皇國民の資質向上を期して昭和廿一年度から朝鮮半島に亘つて義務教育制度を實施せらるることになつたことは、さきに發布を見た徴兵制の實施とともに、朝鮮にとつては、正に畫期的の

二大施策であり、眞に道義朝鮮、繁榮朝鮮の確立をこゝに具現したものであつて、衷心吾人の欣快とするところである。

今や朝鮮は暗黒から光明に向ひ、禍亂から平和に向ひ、窮乏から豊饒に向ひ、事大主義から日本精神に向ひ、躍進につぐに躍進をもつてゐるのであつて、朝鮮同胞、わけて青年學徒諸君の前途は多幸なるとともに、今後にかせられたる責務は、また重且つ大なりといはねばならぬ。

希はくば自重加餐、皇國本來の使命を明に把握し、一日も速かに聖戰完遂の目的を達成して、上は 聖旨に副ひ奉るとともに、下は幾多護國の忠靈に對して應へねばならぬと思ふ。

朝鮮は一つなり

朝鮮總督府
大臣 齋藤實

永井柳太郎

世界の總人口は 約二十億と計算されてをります。その中米英兩國の人口は 植民地に於ける人口を除けば 本國人のみでは 合計一億七八千萬に過ぎないのであります。世界の總人口の十分の一に達しないのであります。然るに米英兩國の制壓せる領土は世界の土地の總面積五千萬方哩の中、二千萬方哩を超え、殆ど半ばに垂んたるものがあるのでございます。

これに反して亞細亞は人口十有二億に達し、世界の總人口の約六割を占むるに拘らず、亞細亞人の完全な領有に屬する土地は僅かに五百萬方哩に過ぎず、世界の土地の總面積の十分の

一を出でないのでございます。

かつてヒットラーはドイツの議會から叫んだことがあります。ドイツの人口の二分の一に過ぎざる英國がドイツの領土の六十倍に垂んとする土地を支配し、英國の人口の二倍を有するドイツが英國の領土の六十分の一に生活する外なきは果して正義なりやと叫んだのであります。私は今この壇上から世界の公議に問ふことが出来ると思ひます。世界の總人口の一割に達せざる米英兩國が世界の土地の半に足るものを制壓し、世界の人口の六割に達する亞細亞人が世界の土地の僅かに十分の一を領有するは果して正義なりやと言はざるを得ないのであります。(拍手)

随つて彼等米英人は廣大なる領土に贅澤なる生活を楽しむこと、我々の想像に超越したものであるのでございます。米國は一平方哩の人口僅かに四十人に過ぎません。若し夫れ太平洋岸の人口稀薄なる七州に至つては、平均一平方哩の人口は僅かに十四人であります。英國の領土のカナダに至つては一平方哩の人口は僅かに三人を超えず、今皇軍が壓迫しつつある滿洲に至つては一平方哩の人口は僅かに二人であります。随つて彼等は廣大な土地を壟斷し

贅澤な生活を營んでゐることは、實に亞細亞に於て見る能はざるものがあるのでございます。

かつて政府の命に依つて滿洲に派遣せられた出淵全權大使が歸朝して政府に報告致したことがあります。滿洲に於て上院議員のアランカーリーを訪問したところが、その邸宅の廣大なること驚くべし、門をはいつてから玄関まで一哩半、その構内に飼つてある羊の頭數は二萬頭に達したと言つてをります。而も彼等は我々亞細亞人に對しては何の罪科もない只顔の色が彼等の如く白くないといふ淺薄なる理由に依つて、その廣大なる土地に鋤を入れる自由を與へないのであります。米國のニューヨークから約三十哩距つたところにハリータウンといふ土地があります。そこには米國屈指の大富豪ロックフェラーの邸宅があります。このロックフェラーの邸宅に至つてはその廣大なこと驚くべし、門をはいつてから玄関まで余りに遠いので輕便鐵道を敷設してをります。(笑聲)所々に停車場があります。斯の如き廣大なる土地に生活しつゝ亞細亞人の入國に至つては、これを拒否してその鋤を入れるところの自由を與へないのであります。

彼等は斯の如き廣大な土地を壟斷して贅澤な生活を營んでをるに拘らず、我が亞細亞に對しては如何なることを主張するのでありますか、門戸開放、機會均等の原則を尊重せんことを要求してやまないであります。米英兩國の政府は幾度か日本政府に向つて要求を繰返したのであります。亞細亞は亞細亞人の亞細亞にあらず世界人類の爲に天の與へたる亞細亞なるが故に、世界人類に對し門戸を開放し、機會均等の主義の原則を尊重せよと迫つてやまないであります。諸君亞細亞が亞細亞人のみの亞細亞にあらず世界人類の爲に天の與へたる亞細亞であるから、門戸を開放し機會均等主義の原則を尊重せねばならんならば、彼米英兩國の領土も亦、米英人のみの領土にあらずして、世界人類の爲に天の與へたる領土であるから、同じく門戸を開放し、機會均等の原則を尊重すべきは當然の責任であると言はなければならん。彼等が米英兩國の領土を米英人の爲に閉鎖し、外國の商品に重税を課してその輸入を壓迫し、外國の移民はその入國を禁じて、米英の土地に鐵を入れることを拒むの特權がありまするならば、我々亞細亞人も亦亞細亞の廣大なる資源を開鎖し、この亞細亞の資源の上に亞細亞人自らの共存共榮の新天地を建設する自由あるは當然の權利であると言はなければ

なりません。米英人は廣大なる土地を壟斷し、而もその資源を開鎖し、苟も米英の商品と競争する性質を有する外國の商品には重税を課して輸入を妨げ、外國の移民に對しては苛酷な法律を以てその入國を禁ずるの權利があるけれども、亞細亞人のみは亞細亞の門戸を開放し、米英人が自由に入國してその資源を開發する自由を認むべしといふが如きことは、事實に於て米英人が世界を侵略するの特權を認めよといふのと同様であります、斯の如き暴言は國際正義の斷じて許さざるところであると言はなければならぬのであります。(拍手)諸君、彼等米英兩國はその僅かに残された亞細亞の資源に對しても飽くまでもこれを支配し、その資源を開發するの自由を獲得せんとして、あらゆる手段を盡して日本に迫り來つたのでございます。

諸君、前回の世界大戰の經驗とその後に於ける國際情勢に鑑みますると、原料、燃料、食糧の重要性を著しく加へられまして、原料、燃料、食糧の有無は或る程度まで戰爭の勝敗を決すると言ひ得る程重要性を加へ來つたのでございます。前回の世界大戰に於て米國は、ヨ-

ロツパに出兵し、サンミエールの戦に於てドイツの軍隊と相見えたのでありますが、僅か四時間の戦争に於て消費した弾薬の總量は驚くなれ日露戦争に於て二ケ年に垂んたる時期に於て日露兩國が消費した砲彈の總量に匹敵したのでございます。今回の世界大戦の劈頭に於て、一九三九年九月一日から同じく九月三日まで僅か三日間に亘つてドイツがポーランドを攻撃するために消費した弾薬の數量は驚くなれ前回の世界大戦でドイツがベルダンの要塞を攻撃するために四ヶ月と十日の間に於て消費した莫大なる弾薬の總量に匹敵したのでございます。斯の如く現在の戦争の要求は原料の必要を絶對的ならしめ、原料を保有せざるものは戦はざる先に屈服せざるを得ざる状態となつたのであります。同様に燃料の重要性も顯著になつて參りまして、今回の世界大戦の初期に於ける世界の需要してをった自動車の總數は四千五百萬臺に達し、前回世界大戦の當時に較べればまさに二十五倍の増加を示したのであります。随つて自動車の燃料であるガソリンを要求することに如何に多量であるかを想像することが出来るのであります。今回の大戦の初期に於て石油を燃料とする船舶の總噸數は約三千七百五十萬噸と計算せられ、前回の世界大戦當時に於ける石油を燃料とする船舶の總噸

數に比較して二十倍の増加を示したのでございます。其他飛行機も戦車も機械化部隊も燃料なくしては戦ふことが出来ないであります。油の有無は戦争の勝敗を決する重大な要素になつたのであります。我が國に於て昔から油斷大敵といふ字があります。我々の先祖は如何なる意味で油斷大敵といふ字を作つたか、語源は審かに致しませんが、兎に角油が斷れては大敵だといふことを表はしてをります。今日はこの文字の通り油が斷れては大敵だと言はざるを得ない状態になつたのであります。(ヒヤの聲あり)然るに我が亞細亞大陸は、この原料、燃料、食糧を生産する最大の大陸でありますから、我が亞細亞の大陸を侵略し、亞細亞の資源を制壓して、彼等が必要とする原料、燃料、食糧を確保せんとする運動は、米英兩國を通じて猛烈に勃興し來りまして、彼等は如何なる犠牲を拂つても亞細亞を制壓せんとする計畫を樹て、その亞細亞の制壓に對して最も妨害となるべき日本の存立そのものを打倒せんとする勢を以て、我が日本に迫り來り、門戸開放、機會均等の原則尊重を要求してやまないのでございます。

これに對して我が日本は米英兩國に對して何と答へたのでありますか、殊に一昨年の一

月十日に日本政府が米國政府に與へた答辦は、最も公明正大に日本の信念を吐露したのでございます。門戸開放、機會均等の原則が、眞に尊重すべき國際正義の要求であるならば、その原則は獨りアメリカのみに適用すべきものではない、全世界を擧げてその原則を尊重すべきである。米國が門戸開放、機會均等の原則を獨り亞細亞だけでなく全世界に通用することに同意するに於ては日本も亦喜んでこれを亞細亞に實現することを公約する。併、乍ら米國が門戸開放、機會均等の原則を獨り亞細亞のみに實現せんとして、世界の他の部分、殊に米英兩國の領土にこれを實現することを拒むに於ては、日本は斯の如き不正なる要求に同意する能はずといふことを聲明したのであります。その日本の公明正大なる通牒に接した米英兩國は、理論のみを以ては到底日本を屈服せしめることが出來ないといふことを自覺して、諸君が御記憶の通り、A B C Dの對日包圍陣を強化し、この四ヶ國の總力を動員して、我が日本を壓迫し、實力に依つて日本を屈服せしめんとする擧に出で來つたのであります。この米英兩國の脅迫に對しては、日本は最早や言葉で對へる時期ではないことが明瞭になりました。たから、諸君御承知の通り、一昨年十二月八日、ハワイ眞珠灣に於ける我が海軍の猛攻に依つ

て米國の太平洋艦隊の主力を撃破し、次でマレー沖の海戰に於て英國の太平洋艦隊の主力を撃沈し、日本が米英兩國の不正なる要求に對し、如何に衷心より憤慨を感じ、正義のために蹶起するの用意を有するかといふことを、言葉に依るにあらず、事實に於てこれを世界に明かにしたのであります。この日本の無言の答辭を見て、米英兩國は過去に於て日本を不法に壓迫したところの前非を悔悟しても、時既に遲きを痛感したであらうと思ふのであります。

三

諸君、米國大統領ルーズベルト、英國總理大臣チャーチルは、一昨年の八月、密かに太平洋上に會合して、協議の結果、八ヶ條の共同宣言を世界に向つて發したのであります。その八ヶ條の共同宣言の中心となるべき二項目には何と書いてあるか、米英兩國は世界に於て獨立を失つた民族が獨立を挽回せんとし、自己の欲せざる政府に支配される民族が自己の欲する政府を樹立せんとする要求をなす時にこれを支持し、その權利を尊重するものであるといふことを明かに致したのでございます。諸君、米英兩國は世界の各地、殊に我が亞細亞に於て

は、獨立を欲するものから獨立を奪ひ、自己の欲する政府を樹立せんとするものに、強いて欲せざる政府を強制してをる嚴然たる事實の前に立つて、平然として獨立を欲する者に獨立を與へ、自己の欲する政府を樹立せんとする者にその權利あることを承認する宣言するが如きは、實に己れを欺き人を欺くも亦甚しいと言はざるを得ません。(拍手)

諸君、かつて佛敎を以てし、人類の精神を指導し、世界文明に偉大なる貢獻をなしたる印度が、全世界の文明國の列にすら列すること能はず、その住民の生活は人間よりは獸類に近い慘憺たる生活を營むまでに墮落したのは、そもく何者の責任でありますか、諸君、御承知の通り英國が初めて印度に支配權を樹立せんとしたのは西曆一六〇〇年、東印度會社を設立したことに依つて始まるのでありますが、爾來英國は印度を侵略し、印度人の勞力を搾取し、而も印度人が起上る勇氣なきものとなるやうに印度人を墮落せしむることに全力を盡したのであります。諸君、その結果が今日印度人の生活は世界の民族の中、最も貧困なものであります。印度人の一ヶ月の収入は、英國政府の調査に依りましても平均僅かに四ルーピーです。四ルーピーは戰前の爲替相場で換算すると恰も日本の五圓に當るのであります。

す。平均収入が一ヶ月五圓でありますから、五圓以上の者もあり五圓以下の者も澤山あるのであります。この貧困な生活に悩める印度人は、生活するに家を持たず眠るに場所を持たず、停車場に眠り道路に眠り、甚だしきは家畜の小屋にはいつて眠らねばならないやうな慘憺たる者が無數でございます。而も英國は出来るだけ印度人を壓迫して起立る力を與へざることを方針にしてをるのでありますから、この慘憺たる貧民なり農民なりに尙その収入の五割六割の重税を課してをるのであります。印度人は榮養不足とならざるを得ない。印度人の平均壽命は驚くがれ僅かに二十三才でございます。英國は世界に於ける長命を以て誇つてをるのであります。平均壽命は五十五才に達します。英國人が長命であり得るのは榮養が豊富で生活が贅澤であるから、それがために長命であり得ると言はれてをります。その英國人の贅澤な生活と豊富なる榮養とは印度人の土地を略奪し印度人の勞力を搾取して、印度から獲得し得るだけの物資を獲得して、これを英國が占用して憚らざればこそ得るところの榮養であり生活でありますから、英國人の長命は事實に於て亞細亞の同胞の血肉を喰ふて得たる長命と言はなければなりません。印度人が如何に壓迫されても、人間である以上は英國に對

する反抗の感情に燃えざるを得ないのであります。この印度人の間に起り來つた反抗の感情を見た英國は、前回の世界大戰に際して、ドイツと戦はんとするに當つて、出来るだけ印度人を前線に出してドイツと戦はせて、寧ろドイツ兵に印度人を殺させた方がいゝといふ、極く慘忍な精神を持つに至つたのであります。而も印度人に向つては、戦ひ勝てば將來は必ず印度に自治を與へるといふことを約束して置いて、印度から軍隊を盛に徴發したのであります。正直な印度人は英國に欺かれてヨーロッパの戦線に軍隊派遣すること百三十四萬八、而も戦ひ始まるや英國のために猛烈に戦ひまして、十萬を越える戦死傷者を出したのでございます。英國の軍費を負担すること一億二千萬ポンド、英國の軍事公債に募集すること一億七千萬ポンド、物資を以て英國を援助すること三億ポンド、カナダよりも濠洲よりも印度の英國に與へた援助は莫大なものがあつたにも拘らず、戦ひ終つて凱旋式を行はんとするや、顔の色の白からざる印度兵の参加を拒んで、凱旋式に列することさへ許さなかつたのであります。而も印度人が公約に基いて自治を要求したるに對して、英國は何を與へたか、自治を與ふべき印度人に對してその自治を與へず、英國の與へたものは、民衆運動に依つて秩序を亂

さんとする者があつた時に、印度の政廳は裁判を経ずして印度民衆を逮捕し監禁し投獄するの自由を持つといふローラット法を以てこれに對へたのであります。自由を公約して置きたがら、自由を與へず自由を求むる民衆運動を漸壓するための特殊の法律を制定して、英國の印度に對する意志を明かにした。印度の大衆は憤慨せざるを得ない。一九一九年三月三十日を期して印度の各地に大暴動が起り來つたのであります。有名な大都會のアトメダバド、カルカッタなどを始めとして全國至る所に獨立を要求する運動が勃發し、遂に四月十五日アムツタの公園に於て二萬の大衆が集つて英國に向つて自治の公約の履行を追つたのである。英國はこの印度の大衆に何を以て應へたか、機關銃の掃射を以て應へた。一千人の死者を出し、三千人の負傷者を出し、これがために印度大衆の憤慨は火の如く燃え、さすがにマハトマ・ガンディーの如く無抵抗に依つて英國の反省を求めることを方針としてをつた者さへも、斷然厭起して、英國にはその反省を求むべき魂を求むる能はず、戦ひに依る外に印度の獨立を得ること難しと叫んで、大衆の先頭に立つて、印度は英國人の印度にあらず印度人の印度なりといふ叫びを上げたのであります。

我々は印度人にあらずとも同じく生を亞細亞に受けた兄弟として、このマハトマ・ガンヂーの叫びに對しては心から共鳴を禁じ得ないと共に、印度が英國の羈絆から解放され獨立自主の國家として、我が日本帝國と共に俱に世界の新文明に貢獻せん日を一日も速かに來らしめんため、印度の獨立に協力すること、生を亞細亞に受けた日本國民の當然の使命であると
言はねばならぬのである。(拍手)

諸君、虐げられたるものはひとり印度だけではありません。我が隣國の中華民國は、印度以上に光被したる歴史を有つてをります。中華民國が儒教を出して全人類の精神を指導をしただけではない。中華民國は哲學だけでなく科學に於ても偉大なる進歩を示したのであります。世界人類に紙を與へ紙の上に印刷することを教へ文化の普及に重大なる貢獻をなしたものは隣邦中華民國であります。世界人類に火藥を作ることを教へ、この火藥の發明に依つて封建制度を顛覆し近代國家の發達の機會を與へたのも隣邦中華民國であります。羅針盤を發明し航海業者に東西南北を明確に理解する途を教へ、遂にコロンブスをしてアメリカ大陸に接近せしめ、バスコダガマをしてアメリカ大陸に到達するを得しめたるこの偉大なる貢獻者

も亦隣邦中華民國であります。斯の如く中華民國は世界の歴史の上に燦然たる光輝を放つてをるにも拘らず、その中華民國が今日獨立國家としての存在を維持するにさへ困難を感じ、廣大なる土地を所有しながら尙世界の強國に教へられず、没落せんとする運命を辿つたのは何故であるか、實に人類の肉體を害し生命を毒する阿片を飲ましめんとして英國が現はれ來つた、その英國の武力に依つて強制した阿片のために、支那人が肉體を蝕ばれ魂を傷けられるに至つた結果が、今日の驚くべき状態に至つたのである。英國は印度に於て多量の阿片を生産し、これを輸出して莫大な利益を得んがためには、人口の最も多い國家をその販路としなければならぬといふ見解から、支那をその販路と決しまして支那に向つて多量の阿片を輸出し始めた時に、當時兩廣總督林則徐といふ青年官吏は、大いに憤慨して英國に向つて反駁を加へたのであります。英國は阿片を毒物と認め、英國人に阿片の飲用を禁じてをるではないか、その英國人に飲用を禁じてをる阿片を我が支那人に強いて飲ましめて暴利を貪らんとする行爲は天意に背くものであると彼は宣言したのであります。而して青年官吏林則徐は憤慨の餘り、英國の商人が輸入せんとした阿片二萬箱を沒收し廣東の埠頭に於てこれを

焼棄たのであります。これを見た英國は英國人の所有權を侵害するものであるといふことを口實にして、支那に對して宣戰の布告をした。これ即ち一八三九年の阿片戰爭であります。不幸にして支那はこの戰爭に敗れた。戦ひ敗れて一八四二年の南京條約で屈辱條件に甘んじて屈服しなければならなかつたのであります。その南京條約に依つて要求されたことは如何なることであつたか。香港は略奪され英國海軍の根據地となつたのであります。阿片二萬箱を燒棄たことに對しては支那は二千百萬弗の賠償金を命ぜられたのであります。支那はその賠償に應ぜざるを得なかつた。廣東、福州、厦門、寧波、上海の五つの港を開くことを強要された。その結果この五つの港を通して阿片は公然と支那の奥地にまで輸入せられ、これがために支那人の間に阿片飲用の惡癖が徹底し、支那四億の大衆の中阿片の害を受けた者は一億に達し、四分の一を冒してをると言はれる重大な打撃を支那に與へたのであります。斯の如くにして支那の獨立自主の國家たる根底を覆して支那に侵入、隨所に英國の既得權を確立して、事實に於て支配權を掌握せんとした英國は、更にそれに満足せず、更に進んで西亞細亞の諸國をも悉くその支配下に收めんとして、諸君が新聞で御覽の如く、イラン

イラクに向つて強硬に侵略を始めてをる。イラクの如きは彼のハビルジンス・バシヤが驟起して英國に反抗した廉を以て暗殺され、その志を繼いだイラニ將軍は最近英國の軍隊のために國外に放逐せられ、今やイラクの首府は英國の軍隊のために戒嚴令の狀態に置かれてをるのでございます。亞細亞に境してをるエジプトに於ては、かの勇敢なるザグルル・バシヤは前回の歐洲戰爭後、エジプトは英國人のエジプトにあらずエジプト人のエジプトなりと叫びを上げたのでありますが、直に捉へられて地中海のマルタ島に流された。彼はそのマルタ島を逃れて再び獨立の聲を上げるや、再び捉へられてアラビヤのアデンに流され、三度獨立を叫ぶや三度捉へられて印度洋のセーシェル島に流された。その志を繼いだナハス・バシヤはアフリカのベニヤに幽閉され、その後に驟起したバーゼル・バシヤはカナダに送られた。エジプトは指導者を失つたけれども、エジプト人の胸中に起り來つた獨立自主の要望は壓迫すれども消えず、英國人に對する抗爭は愈々猛烈を極めてをるのであります。今や英國の軍隊は王宮を包圍し、國王は軟禁せられて意のままに動けざる境遇に陥つてをるのであります。斯の如くに武力と資本力を利用して亞細亞を搾取し、領土を略奪して憚からざるが如き

英國の帝國主義から、我が亞細亞の大陸を開放して獨立自主の新興亞細亞を建設するにあらざれば、かつて儒教・佛教を出し、キリスト教を出し、マホメット教を出して、世界人類の中心地として光輝ある亞細亞を再び挽回する時期は永久に來らずと言はざるを得ないのであります。併しながら亞細亞を虐げつゝあるは決してひとり英國のみではありません。英國の同盟國たる米國に至つては、口には自由を唱へ言葉の上では平和を論じてをりますけれども、事實に放ては英國に勝るとも劣らざる苛酷なる強壓を有色人種の上に加へてをるのであります。殊に米國は極めて陰險な方法を以て、先づ占領せんとする土地に對しては、その土地に生活するアメリカ人を煽動して内亂を起させ、アメリカ人のゐない土地では、米國の傀儡となるが如き人物をして内亂を起させ、革命政府を樹立し、革命政府が樹立されば、米國はこの革命政府との條約に依つて、その土地を合併することに依つて、一步步領土の擴張を圖つてをるのであります。

諸君御承知の通り、米國はかつては大西洋岸に國を樹てたのでありまして、決して太平洋岸の國ではなかつたのであります。大西洋岸の東部十三州に國家を樹てた米國は、太平洋

が地味が肥沃であるために太平洋岸に出でんとする野心を懷いてをつたのみではない。太平洋の海中には多數の海軍根據地たるべき島があるので、これ等の島々を占領し、やがては世界最大の陸地である亞細亞の資源を把握せんとする烈々たる野心を持つて、一貫した領土擴張を實現しつゝあつたのであります。米國は當時太平洋岸の諸州がメキシコの領土であつたがために、先づメキシコを顛覆する必要を感じたので一八四五年、メキシコの領土のテキサスに於て生活してをるアメリカ人に軍器軍需品を供給して反亂を起させたのであります。而してアメリカ人の生命財産を保護するを名として軍隊を送つて一八四六年メキシコに向つて戦ひを宣したのである。これが有名な米墨戦争であります。不幸にしてメキシコは敗れた。而して今日太平洋岸の諸州と稱せられてをるアリゾナ州、カリフォルニア州、コロラド州、ニューメキシコ州、ネバダ州、ユタ州、テキサス州、ワイオミング州の八州を略奪して、米國は初めて太平洋岸に現はれ來つたのであります。一度太平洋岸に現はれた米國は直に一八九三年、ハワイに於ける米國人を煽動して反亂を起させ、これに軍器軍需品を供給して、カメハメハ王朝の顛覆を企てたのであります。そうしてこれは顛覆しハワイは米國に合併され

た。米國はハワイを海軍根據地として更にフィリッピン、グワム等を占領せんとしたが、不幸にしてフィリッピンには米國人の用ひるに足る者があつた。そこで米國はフィリッピンのアギナルド將軍を利用して軍器軍需品を供給して、スペイン政府に向つて獨立を宣言させたのであります。アギナルドが獨立軍を起して開戦するや、米國はフィリッピンの獨立に共鳴し、獨立を實現せしむるために援助すると稱して、兵をフィリッピンのマニラに上陸させたのであります。而してスペインの政府がもろくも退却して、アギナルト將軍は喜びの中に獨立の旗をマニラの城頭に翻へさんとするや、米國は斷乎としてアギナルド將軍の旗をマニラの城頭に掲げること禁じた。而して星條旗を以てマニラ城頭を飾つたのであります。アギナルド將軍は初志と異り、非常に憤慨して重ねて獨立旗をマニラ城頭に掲げること要求するや、米國はアギナルド將軍を逮捕してこれを首腦者たる地位から去らしめたのであります。これに憤慨したアギナルドの軍隊は米國軍隊に發砲するに至つたのでありますが、米國軍隊はアギナルド將軍の軍隊を撃退して、完全にフィリッピンを占領して最近に至るまで米國はフィリッピンを以て米國の領土と宣してをつたのであります。斯の如き不正なる手段に依

つてフィリッピンを略奪したのであります。アギナルド將軍が如何に心中悶々の情に耐えなかつたかといふことは察するに難くないのであります。

この度一度皇軍が至るや、フィリッピンの米國は退却し、フィリッピンは全土を擧げて亞細亞人である皇軍の手に歸し、日本の總理大臣は議會に於て、フィリッピンをしてフィリッピン人のフィリッピンたらしめんといふ聲明するに至つた。即ち米國の不法なる略奪は如何に巧妙に行はれても、天斯の如き存在を許さず、やがて亞細亞の土地を亞細亞に歸らしめるといふ天意をこの戦ひに於て明かにしたものと云はざるを得ないのであります（拍手）

米國はフィリッピンに對して、今日まで幾度か獨立を與へることを約束した。フィリッピンが餘りに獨立を要求するがために、米國は一九四六年に獨立を與ふべしと約束したのであります。併しながら獨立する場合には條件がある。如何なる條件か、フィリッピンが獨立すれば外國になるのだ。外國になれば外國並にフィリッピンから米國に輸入する商品に重税をかけらる。フィリッピンから米國に輸入する商品に重税をかけることになれば、フィリッピンの商品の米國に對する輸出は杜絶せざるを得ません。輸出が杜絶すれば米國に對する輸出を目的と

する産業は一樣に衰へざるを得ません。産業が衰へればその産業に税金をかけてこれをフィリッピン政府の収入としてをつたフィリッピン政府の財政は破綻せざるを得ません。獨立を要求せざれば屬國とならざるを得ません。獨立すれば財政は破綻せざるを得ません。この進退兩難の窮地にフィリッピンを陥入れ永久に米國の屬領たらしめんとしたこの不法なる米國の侵略を、今や天意に依つて根底から顛覆せしめ、日本が無條件を以てフィリッピンはフィリッピン人のフィリッピンであるといふことをフィリッピン人に代つて世界に聲明するに至つたことは、これ『天必ず正義に與す』ことを事實に依つて世界に明かにしたものと言はざるを得ないのであります。事實に於て亞細亞の民族に對して強盜殺人の犯罪を犯して、領土を略奪し、亞細亞人を擄取せんとした米國は、今やまさにその罪に依つて日本の正義の法廷から死刑の宣告を受くるに充分であると言はなければならぬのでございます。(拍手)

四

諸君、斯の如き米英兩國の帝國主義から全亞細亞を開放し獨立自主の新興亞細亞を建設し、亞細亞の廣大なる資源を亞細亞民族自身の所有に歸せしめ、亞細亞民族自身の資源の開

發に依つて、亞細亞に新なる文化を建設せしめ、亞細亞の新なる文化の建設に依つて世界文明に貢獻することが、實に日本の大東亞戰爭に際起した遠大な理想であると言はなければならぬのであります。世界に戰爭多しと雖も、侵略者から被侵略者を獨立させ擄取者から被擄取者を開放し、道義に基く新秩序を建設し、全人類の色の黒白を問はず、財産の有無を論ぜず、總て兄弟姉妹として、共存共榮をし得る眞の世界を建設せんとする目的を以て戦ひを宣したる斯の如き國は、大東亞戰爭以前世界の歴史に未だ曾て見ないと言はなければならぬのであります。(拍手)

諸君、東洋に於きましては、先程申しました如く、人類を指導するがために儒教を出し、クリスト教を出し、マホメット教を出したのでありますが、これ等の教へは夫々異つた歴史を有し異つた信條を持つてをりますけれども、これ等の教へを大觀すると、こゝに共通した指導精神を見るのでございます。共通した指導精神とは何であるか、それは大宇宙には大生命があつて、萬物はその大宇宙の大生命より現はれ出するものである。殊に人間はこの大宇宙の大生命から現はれ出たものであると共に、靈の存在であるといふ一點に至つては總ての

宗教を通じて共通した指導精神でございます。儒教は教へて曰く、人間は萬物の靈長であると申します、キリスト教は説いて曰く、人間は神の子なりと叫ぶのであります。佛教に至つてはひとり人間のみならず、山川草木悉皆佛と訓すのでございます。斯の如く大宇宙の大生命から現はれ出た人間をして、尊き靈の存在として一人々々人格の尊嚴を自覺すること要求して已ざるものが東洋共通の教へてございます。我々はこの大宇宙の大生命から現はれ出たと共に靈の存在であつて、人格の尊嚴に至つて何人もこれに敬意を表せなければならぬと存するのであります。

諸君、ここには大勢お集りになつてをりますが、見渡したところ一人として同じ顔をした人がをりません。皆どこかに他の人と變つた特色を持つて居られます。随つて顔に番號は打つて、人が見違へる心配のないやうに夫々獨特な容貌が考へられてをります。世界の人口は二十億ありますが、諸君は世界を隈なく尋ね廻つても決して諸君と同じ顔をもう一つ發見することは出来ない。諸君は實にこの世界にたゞ一つか存在しない獨特の顔をしてをられるのである。この意味に於て諸君の一人々々はよかれ悪しかれ世界無比の顔をしておいでにな

るのでございます。(笑聲) 諸君の顔は天下一品の顔でございます。その諸君の顔が世界無比の顔であり天下一品の顔であるやうに、その顔の中に包まれてをる諸君の心もまた世界無比であり天下一品であります。諸君の生活も亦世界無比であり、天下一品であります。考えてごらんさい、人に依つて好きが違ふでせう、人に依つて上手下手が違ふでせう、人に依つて考へ方が違ふでせう。人に依つて物に對する感じが違ひませう。人に依つて人生の目的が違ひませう。人に依つてその生活の方針が違ひませう。總ての人はたゞに肉體だけでなく精神に於ても獨特の個性を持つてこの世に生れ出でるのでございます。諸君の一人々々はその獨特の個性を持つて生れ出たのは決して偶然ではございません。その獨特の個性がなければ爲し遂げることの出来ない何等が尊き天命があればこそ、獨特の個性を持つてこの世に生れたものでございませう。松は松でなければ果し得ざる天命がある。梅は梅でなければ果し得ざる天命あつてこそ野に咲き出でるるのである。諸君の一人一人は世界無比・天下一品の個性を持つてこの世に生れ出たのは、その世界無比・天下一品の個性でなければ成し遂げ能はざる天命を擔ふてこの世に存在してをる争ひ難き證據であると言はなければなら

ないのであります。諸君の一人々々はその意味に於て一人として平等なる人間はありません。個性は凡て異つてゐるが、その個性に依つて獨特の天命を夫々擔つてゐる點に於て、凡ての人は人格の尊嚴に於て平等であると言はなければならぬのでございます。その一人々々の人格尊嚴を認め顔の色が白くても黒くても、その人に財産があつてもなくても、その人でなければ果し得ざる獨特の天命を擔ふてこの世に生れた尊き存在であるといふことを認識して、一人残らず世界人類に生活の安定を與へ、個性を尊重するの自由を與へ、さうしてその持つてゐるところの最高能率を發揮させ、これを指導して全人類をして世界文明に貢獻し得る新世界を建設することが即ち日本帝國の世界使命であると言はなければなりません。(拍手)

諸君、畏多くも明治維新の當時、明治天皇が降し給ふた御宸翰の中に、億兆一人たりともその所を得ざる者あらば即ち朕の罪なりと仰せられたのであります。たゞ一人の人間でもその持つて生れた、尊き使命を完うすることが出来ないやうな政治を行ふことが誤つてゐる、朕は斯の如き政治の行はることを許さないと。尊き大御心が現はれてゐるのでございま

す。今上陛下は昭和十五年九月二十七日、日・獨・伊三國同盟條約締結の日に賜つた御詔勅に何と仰せられたか、萬邦をして各々その所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむるは曠古の大業と仰せられたのでございます。即ち世界の國家は何なる弱少國家でもこれを虐げること勿れ、如何なる弱少民族と雖もこれを濫りに侵すこと勿れ、萬邦をしてその所を得しめ、同時に兆民をして世界の人間一人残らずその生活に安堵を得しめ、一人残らずその使命を完うし得るやうに、兆民をして堵に安んぜしめることが即ち曠古の大業であると仰せられたのであります。明治天皇のお言葉は國內の國民に賜つた言葉であり、今上天皇のお言葉は世界人類に對して賜ふたお言葉であるといふ點に於ては異つてをりますけれども、尊き人間の一人たりともこれを濫りに虐げ濫りに侵すことは許すべからざることであつて、最後の一人たりとも生存し天命を完うせしむることを政治の眞精神とせよと仰せられた。この大御心に於ては一貫してゐるのであります。國內の政治を行ふ者、この精神に叛くべからず、世界政策を行ふ者亦この精神を奉じて奮闘しなければならぬのでございます。今日大戦争の中に卷込まれ、生活の苦難に悩み、人生の希望を失はんとしてゐる全人類に、新なる生命

を與へ、新なる世界を知らしめんとする指導精神は、今上陛下の萬邦をして各々其の所得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしめんと仰せられたこの大御心を世界に實現することの外に全人類を安んずる大道は斷じてないと言はなければならないのであります。我々が今上陛下の大御心を世界に實現することのためには、内地の同胞であつても亦半島の同胞であつても、力のある限りこの大御心の實現に協力してこそ、大日本民族は世界の文明に貢獻し得る資格ありと言ふことが出来るのであります。諸君、私はこの偉大なる使命を自覺して全人類を更生せしめ、全世界を再建せんとする理念に基いて宣戰を布告された大東亞戰爭に對しては、ひとり日本國民だけでなく、苟も正義人道を愛する者は、一人残らず起立つて我が日本に協力することこそ當然であると言はなければならぬと思ふのであります。今この米英兩國が、世界を米英兩國の世界たらしめ、米英兩國を富ましむるがために、世界の全民族を搾取せんとするこの戰を認めてこれに勝たしむるか、世界を米英の帝國主義から開放して世界全人類の共存共榮し得る新世界たらしむるがために戦ひつゝある日本に勝利を與へるかといふことが、全人類の面前に横はつてゐる重大な問題であります。

諸君、米國の大統領ルーズベルトはこの戰爭の性質に就ては彼自ら反問して非常に良心に耻するものがあると言へまして、この戰爭に世界人類の同情を引きつけ得るやうな名前をつけようとして苦心慘憺してゐるのであります。諸君は御記憶でありませう、ルーズベルト大統領は曩に世界に向つて聲明した。今回の戰爭は民主主義對獨裁主義の戰爭であると宣言したのであります。併乍ら暫くして考へてみますと、米國では從來ソ聯邦の無産階級の獨裁政治を米國の財閥に最も不利益な政治として出来るだけ米國人をしてソ聯邦に敵對するやうな精神を養ふことに努めて來てをつたのである。而してソ聯邦を無産階級の獨裁政治を行ふ國として米國と相容れざるものとして國民に教へてをつたのであります。然るにソ聯邦と提携しなければ勝味がなくなつたので、ソ聯邦と提携しつゝ、この戦ひは民主主義對獨裁主義の戦ひであるといふ聲明をしてみると、直ちに米國の内部から異論が起つた。ソ聯は獨裁主義の國ではないか、而も無産階級の政治を行ふ國として排撃されてをつたではないか、それを同盟國として果して民主主義對獨裁主義の戦ひであると聲明することが出来るかといふ聲が國民の中から起つた。ルーズベルト大統領は周章狼敗して遽かに民主主義對獨裁主義の戦ひ

であるといふことは沈黙して口を緘して語らなくなつたのである。併し何とか名前をつけないければならぬので、大統領余程考へたと見え、而も出来るだけ有色人種の日本人と白色人種のドイツ・イタリーとを中傷離間したいといふ陰險な考から、この戦ひは白色人種對有色人種の戦ひであると改めて聲明した。これに依つて世界の有色人種と白色人種とを引離さんとした。ところがフランスと英國から抗議が出た。白色人種對有色人種の戦ひであるといふことになると、英國の植民地の住民は全部有色人種である。殊にインド人の如きは既に反亂してゐるから白色人種對有色人種の戦ひであるといふことはやめてもらひたいといふ聲が出た。そこで又大統領ルーズベルトは沈黙して口を緘して語らなくなつた。併し何とか名前をつけないければならぬ。そこで今年の九月三日の放送に於て、米國の青年に向ひ、この度の戦争は喰ふか喰はれるかの戦ひであると言つたのであります。(笑聲) 諸君、米國の大統領がこの度の戦ひが如何なるものであるかといふことを理解しつゝ、尙且つこれを口にすることを憚るならば、私が代つて米國大統領のために名をつけることが出来るのであります。今回の戦ひは疑ひもなく帝國主義國家對反帝國主義國家の戦ひであると言ふことが出来るので

あります。更にこれを具體的に言へば武力資本力を濫用して世界を侵略し世界人類を搾取して憚かざる帝國主義國家米英兩國と侵略者から被侵略者を獨立させ、搾取者から被搾取者を開放し、道義に基くところの新秩序に依り全人類が共存共榮し得る新世界を建設せんとする國際正義の信奉者日本との戦ひであると言ふことが出来るのであります。更にもつと解り易い通俗の言葉でこれを言ひ表はすならば、世界の姿を亂し世界人類の土地を略奪し資源を盡断せんとする強盜殺人犯人米英と、世界秩序を維持せんとする世界の警察官日本との戦ひであると言ふことが出来るのであります。(拍手)

五

我々は今この歴史あつて以來の重大な意義を有する戦に直面し、萬邦をして各々其の所得しめ、兆民をして悉く其の塔に安んぜしめんと仰せられた世界開放のこの戦ひのために驟起致してゐるのであります。苟も陛下の大御心を心から遵奉する心を有する大日本民族は、内地の同胞たると外地の同胞たるとを問はず打つて一丸となつて最後の勝利を目指し、共同進軍することが即ち我等のこの世に生れ出でたる聖恩の意義に徹し得る唯一の道であると言

はなければならぬのであります。

諸君、私は今回朝鮮に約十二年振りであつたのでありますが、昭和五年の前回に於ける朝鮮と昭和十七年の今回の訪問に際しての朝鮮とを見て、私は朝鮮のこの偉大なる躍進に感激を禁じ得ないものでございます。京城に到着した後、目に入るものだけでも凡てが一變してゐるのでございます。昭和五年には人口二千萬に満たなかつたものが、今日は人口二千五百萬に達してゐります。朝鮮の生産額は昭和五年は農業、林業、水産業、鑛山業、製造業併せて僅か十億圓と數へられてゐたものが、今日は五十五億圓を突破し、五倍以上の躍進を示してゐるのでございます。貿易總額に至つては昭和五年五千餘萬圓であつたのが、今日は既に二十五億圓を超過し十五倍以上の躍進を示してゐるのであります。私はこの目に見える朝鮮の異常なる躍進を見て、目に見える物資の朝鮮の斯の如き異常なる躍進を遂げ得たるは、中實に於て目に見えざる朝鮮、精神の朝鮮が異常なる躍進を成しあることの證據であると思ふものであります。(拍手)何となれば、生産に於て内地人と半島人が協力し、交通に於て内地人と半島人が協力し、生活に於て内地人と半島人が協力し、教育に於て内地人と半島

人とが心から協力するにあらざれば、決して斯の如き目に見える異常なる躍進を遂げることには出來ないのであります。この目に見える朝鮮の偉大なる躍進は事實に於て内地半島の同胞を通じて大日本民族であるといふ一大自覺が益々徹底し、天皇陛下を中心とする舉國協力體制を確立する氣運が躍進として現はれ來たりし争ひ難き證據であると言はなければならぬのであります。殊に昭和十三年御存じの志願兵制度が設立せられますや、昭和十三年は四百人の定員に對し七倍の應募者を出し、昭和十四年には同じく四百人の定員に對し三十倍の應募者を出し、昭和十五年にはその定員が四百名から三千名に引上げられたるにも拘らず、尙且つ二十八倍の應募者を出し、昭和十六年には四十人倍の應募者を出し、今度は大東亞戰爭勃發し米英撃碎、亞細亞再建の氣運が發動したるに及び、應募者は六十倍に達するといふ状態に至りましたことは、半島青年が内地と共に新興亞細亞建設の大業に向つて共同進軍をせんとする精神に燃えるに至つたことを示すものでありまして、ひとり日本の爲のみならず亞細亞の爲にこれを祝福せざるを得ないと思ふのであります。

諸君、我が内地、朝鮮とは神武天皇以後即ち素盞鳴尊の在し給ふた當時から既に交通は開

け、結婚は行はれ、同祖の習慣は初まり、互に相親睦して、その血液に於てその歴史に於ても、またその文化に於ても、自ら一大民族となつて長成しつゝあつたのであります。諸君、我が國に於ては先般總理大臣が議會に於て大東亞戦争の勝利を得たる曉には、フィリッピンをしてフィリッピン人のフィリッピンたらしめ、ビルマをしてビルマ人のビルマたらしめ、更に印度をして印度人の印度たらしめんと聲明された。その言葉を捉えて、然らば朝鮮は朝鮮人の朝鮮たらしめるとの反問する者があるといふことを承つたのであります。斯の如き疑問をなす者がありましたなれば、その人は内地人と半島人とが神代の昔から同根同祖一體の民族である事實を知らざる者の愚論であると言はなければなりません。私は内地の北陸道の出身でありますが、故久米博士は屢々私に話をされたものであります。君は北陸道の出身であるが、北陸道は越の國と言ふが、何故越の國と言ふかといふと、それは引越した者の國、即ち移民の國といふことだ。そこから來た移民の國と思ふか、それは朝鮮から來た移民である。出雲を通じて日本の沿岸に沿ふて漸次北陸に移民した移民の子孫が君等で、君等の血液には半島人の血が通つてゐる。それが數千年の皇化に潤ふて完全に日本人になつたの

であるといふことを説かれたものであります。久米博士のお話に依れば、ひとり北陸だけではなく、北九州、東海道の至る所にあつて、武藏の國には數年前まで高麗郡といふ郡があつた。山梨縣には今尚巨摩郡といふのがあつた。斯の如く地名人名に相連するものが非常に多い。随つて内地の文化は半島の文化であつて、内地人が誇りとする奈良の大佛は國中連といふ百濟人が製作したものである。我が國で佛教を最も指導し給ふた聖德太子に初めて佛教をお説き申上げたのは半島から來つた高僧慧慈である。血液を同じくし歴史を同じくし、文化を同じくしてゐるのだから、君の祖先を尋ねれば即ち半島から來た者であるといふことを久米博士は屢々私に教へられたのである。この久米博士の説を裏書きするものは他の學者の著述にも少なくないのであります。この學説を採用すると致しますれば、私が今回東京から京城に出張致したのは、これは内地から半島に出張したと言ふよりは、事實に於て半島の移民がその移住地から久々で故郷に歸つて來たといふのが正當だと思ふのであります。

斯の如く内地の同胞と半島の同胞とは實に血液を同じくし、歴史を同じくする同根同祖の一日本民族であるにも拘らず、中頃暫く別居してをりましたが、別居してゐるのでは到底成し

遂げることの出来ない偉大なる世界使命を擔當しなければならぬ時期に際會したので、天が自ら韓國合邦の氣運を促進して、一度別居してをつた日本民族は今や再び一となつて一億の總力を動員することに依つて、世界使命の實現に邁進するといふ重大なる時期に直面したと言はなければならぬのでございます。韓國併合は大日本民族をして亞細亞民族の先頭に立てて、世界改造の重任を果さしめんがために三十年前に命じて行はしめた天意に出でたるものと言つて毫も過言でないと思ふのであります。この偉大なる使命を擔つてをる大日本民族に屬してをるその一部分の半島人だけが、朝鮮は朝鮮人の朝鮮として、ビルマやフィリッピンと同様に獨立しなければならぬと言ふが如き愚論は恰も九州は九州人の九州なり、四國は四國人の四國なり、日本全國を數十に分割しなければならぬと言ふが如き愚論を繰返すと同様でありまして、私は斯の如き過ちに陥る者が、少くとも半島に一人たりとも存在するが如きことがあるならば、諸君はこれを指導しその過ちから免れしむるために全力を盡さんことを日本のためにではなく、世界人類のために諸君に祈らざるを得ないのであります。

諸君、我々は今やこの偉大なる使命を實現する爲めに、大日本一億の同胞は陛下の大御心を中心として總進軍を開始致したのであります。天と共に起ち天と共に戦ふところの日本は、開戦以來未だ一年に過ぎませんけれども、天と共に連戦連勝を續けてをるのであります。僅かに一年間の間に、顧みまれば、東は米大陸から西はアフリカ大陸まで一萬五千哩、北はソ満國境から南は濠洲の沿岸まで、南北六千哩の廣大な地域に、今や日章旗の番翻たるを見ざるなし。この間に於ける米英人の領土は今や皇軍の占領に歸したるもの百三十萬方呎に達し、我が日本はまさにこの廣大なる新に占領されたる基地に依つて、更に懸軍長驅して米英の勢力を全亞細亞より驅逐し、米國大統領をしてワシントンに於て城下の盟を誓はしめ、英首相チャーチルをして英國の首府ロンドンに於て城下の盟を誓はしめ、米英兩國をして世界の地圖より抹殺せしめんため強行進軍しなければならぬのであります。我々一億の同胞が眞に一人残らず陛下の大御心を中心として共同進軍し、持揚々々に於て、天地神明に己れを欺かず人を欺かざる誠を以て自己の技術を上げ、生産に従事するものは生産の増強に徹せしめ、消費するものは消費の節約に徹底せしめ、以て最高限度に協力致しますならば、戦ひ幾

年かゝるとも最後の勝利は我に歸するは、陽の東より出で西に入るより確實なりと言はなければならぬであります。(拍手)

私は最後に諸君に是非とも記憶して頂きたい一つの事實を申し残してこの壇を降るものである。それは如何なる事實かと申せば、日露戦争の半ばに、我が海軍に重大なる事件が起つたことに關する事實でございます。如何なる重大な事件かと申しますれば、明治三十七年の五月十三日から同じく十五日に至る三日間の出来事であります。當時我が海軍は旅順港を封鎖し、ロシア艦隊は旅順港奥深く我が海軍に壓迫され閉塞されて出て來ること能はざる状態であつたのであります。然るにロシア海軍を封鎖しつつあつた日本海軍は三十七年五月十三日から意外な椿事が續發した。軍艦吉野は春日と衝突し、吉野は沈没し春日は破損したのである。これに驚いてをると又軍艦都賀は沈没、これでは心配に堪えないと考へてをつた矢先に、當時日本が重要視してゐた六隻の戦艦の優秀な初瀬、八島の兩艦は機械水雷に觸れて爆沈したのであります。それで全軍驚いて、その爆沈された軍艦の乗組員を救済せんとして、軍艦龍田が出掛けますと、何ぞ計らん龍田も亦暗礁に乘上げたのであります。この相次

いで起り來たる凶事のために、全軍憂色に被はれ、海軍の將兵は總て如何になり行くことかと心配に堪えざるに至つたのであります。當時の海軍大臣は豪膽を以つて聞え山本權兵衛伯であります。海軍次官は曾て朝鮮總督として令名を馳せられた齋藤實伯であります。その齋藤次官がその情報を齎らして山本海軍大臣に示されますと、山本海軍大臣はその時丁度晝飯の最中でありましたが、心配の餘り食事が喉に通らなかつたと後に告白された、それ程の衝動を受けられたのであります。斯の如く全軍憂色に包まれてゐた中に、只一人平然として平常と異ることなく、旗艦三笠の艦上を悠々として散歩し、人に出會はばにこくとして雑談を交へ、事件の起り來つたことを知らざるが如き人があつた。言ふまでもなく司令長官東郷元帥である。東郷元帥たゞ一人は平然として何等動搖の色なく、餘りにその態度が落着き拂つてをりますので、全軍の將兵は、さては司令長官の胸中には何か期するところがあるに違ひない。司令長官が平然としてゐる限りは我々が心配する必要はないと考へて勇氣を取戻して再び封鎖を繼續することに決したのであります。ロシア側では遙かに觀測してをると多數の戦艦が沈没したやうであるから、やがて圍みを解いて退却するであらうと考へて居ると

更に退却せず平然として封鎖を繼續してゐるので、ロシアの方が自らを疑ふ、これは觀測の誤りであつたか、錯覺のために日本の軍艦が沈没したやうに思つたのであつたかも知れん、容易にこの封鎖を破つて出ることが出来ないと考えて、依然として旅順港の奥深く閉塞し、その機に乗じて日本海軍は港灣の奥に潜むロシアの軍艦を撃沈し、やがて來たる日本海の大海戰の勝利を確立することが出來たのであります。この東郷元帥の餘りに平然たる態度を不思議に思つて加藤寛治大將が後にこれを東郷元帥に訊ねたのであります。閣下はさうしてあの時平然としてゐることが出來ましたかと訊ねますと、東郷元帥は答へて、ロシアが亞細亞を侵略せんとするは天の許さざる不正である。日本が驟起してロシアと戰ふは天の命に依つて正義を行ふものである。天必ず正義に與す(拍手)、我が日本が最後の勝利を與へられは一點の疑ひもなかつたから必勝の信念に變りはなかつた。色々な出來事があつたといふ情報は受けなければ、必勝の信念に動搖がなかつたから別に衝動は感じなかつたと言はれたのであります。これは東郷元帥の信念であつたに相違ございません。今でも東京九段の坂下の軍人會館に掲げてある東郷元帥の額を見ると、筆太々と書いてあります。『天正義に與

す、神至誠に感ず」と書いてあります。加藤寛治大將が直接私に語り、その他にも高橋三吉海軍大將がその事實を裏書きしてその事實を私に話をされたのでありますから、この話には決して間違はないと思ひます。この天必ず我に與すといふこと、天の命を奉じて天と俱に立ち、天と俱に戰ふ者は、必ず天と俱に勝つといふこの信念を掲げて、日本國民が一億の總進軍をすることこそ、今日の日本國民の一日も速かに持たざるべからざる覺悟であると私は信ずるのであります。

諸君、米英兩國が武力と資本力とを亂用して世界を侵略し、世界をして米英のための世界たらしめ、全人類を米英の奴隸としてその勢力を搾取して、米英ひとり富まんとすることが正義でありますか、米英の暴壓から全人類を開放し、全人類が色の黒色を問はず財産の有無を論ぜず、兄弟姉妹として共存共榮し得る新世界を建設するために戰ふことが正義でありますか。

我が日本が據つて立つところの大道は、人生の眼目である萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして其の堵に安んぜしめんがために戰ふことが正義であることは一點の疑もないので

あります。天と俱に立ち天と俱に戦ふものは必ず天と俱に勝つ、最後の勝利は我が日本にあることは即ち日の東より出で西に没するよりも尙且つ確實なりと言つて一言の過ちはないと信ずるのであります。

諸君、今日は内地の同胞と半島の同胞とが別々の存在であると言ふが如き信する時ではない。否日本國民にあらざる者と雖も、苟も正義を愛する者であれば、アメリカのニグロでも來つて日本と協力せざるべからざる人類開放の戦ひである。況や同祖同根血液を同じくし文化を同じくし歴史を同じくしてをるところの内地の同胞と半島の同胞とは今こそ心から内鮮一體となつて 天皇陛下を奉じて一億の舉國協力態勢を實現し、亞細亞民族の先頭に立つて否世界人類の先頭に立つて偉大なるこの人類開放の戦争を勝ち抜き戦ひ抜き、やがて世界の歴史に新たな光を與へることが人間として最大の名譽であると言はなければならないのでありましてこの偉大なる名譽を我々が受け得る時に生きさせて呉れた天の恩寵に對して心から感謝すると共に、この機得に叛かないやうに立派に責任を充ちて、日本がその名の如く世界人類の太陽として永久に全世界民族を光被する日の速かに來らんことを心から祈り、諸君

と共に益々奮闘努力せんことを誓ひまして、私はこの講演を終り、諸君の健闘を祈つて暫くお別れする次第であります。(拍手)(京城府民館に於ける演説)

劔を握り、武勇の途へ進まれよ

陸軍大將 荒 木 貞 夫

『今日よりはかへりみなくて大君の醜の御循とて立つわれは』
今度の 聖戦に出征する學徒諸君の心境は、彼の防人と同じものである。

『死生有命不足論

鞠躬酬應酬至尊

奮躍赴難不辭死

慷慨就義日本魂』

と云ふこの詩は軍神廣瀬中佐が閉塞隊として旅順港口に赴く時作つた歌である、この詩の中に現はれて居る決意はその儘諸君の決意であるのである。

今次戦争は元の襲來以來の大戦争であるその當時佛光國師は時宗に「莫忘想」の一言を言ひ聞かせたがこの一言が遂に舉國一丸となつて彼等の大軍を撃滅し得たのである。

この一言こそ、今度の半島學生諸君に送り度い最も適切なる言葉であり、又強敵米英を粉砕する源泉となるべきである。既に深い教養を修めた半島の學徒諸君！ 如何なることあるも、勝たねばならぬこの大東亞戦争である。如何なることあるもこの聖戦を以て八紘爲宇の大御心を顯現し萬邦をして各其得所せしめる新秩序の建設を完遂せねばならぬ。

この様な戦局に至り内地の學徒諸君と共に半島の學徒諸君が光榮の軍門に馳せ参するを得る處の特別志願兵制が實施され 天皇陛下の股肱として征て立つ唯一の途が開かれ諸君は千載一遇の好機會に勇躍志願することを確認する處にして、今殊更に生死を論する必要はないと信ずる。

過日 明治神宮外苑にて出陣學徒壯行會を舉行したがその時天地を震撼する様な氣魄は正

に有爲なる我が青年學徒の決意を顯示したのであつた。我等はこの學徒に對し冷靜な態度を以て眺めることは出来なかつた。夙に、これ等の學徒はその思想傾向と勉學態度に色々と注目を受けて來た。それなのに今日の學徒の悲壯なる決意と勇躍する姿態に接しその純一無垢な發刺なる氣魄に國民は囑望の眸を大きく見開いたのだ。

一度で立上り 大君の御邊に死なむと誓へば鬼神の如き活動をするのである、これが正に日本人の精神である。

茲に於て内地學徒や朝鮮學徒が凡有る外形的事象に拘泥するなく、體はしき魂の光を發するるとき世人をして學徒を改めて眺めることにするのである。

將來は學徒諸君に由りて、世界的日本の建設が保證されて居る、戰勝と建設の兩面に於てこの世人の囑望を空しくせざらんことを頼む。

しかし一時の興奮は、根元のない花の様なものである。特に、半島學徒諸君が歴史を繙けて見るならば、そこには新羅統一時代の武將があり、或は又隋を滅ぼした、高句麗の名將もあるのが發見される、彼等の様な武將の血が滔々と今も半島學徒の心奥底に溢れ流れて居る

とすれば、今度の特別志願兵制を契機として、敵米英擊滅の爲め、慨然と立ち上るのは理論以上の當然なことである。

若し生死の分岐點に立ち、懊惱するとか、微細な學問の探究に一生擒にされ、大義に獻身するのを拒むとすれば、高句麗、百濟、新羅が持つて居た燦然たる歴史を自から否認するものとなる。ここに於て、學窓に於て學んだ其の智力と鍛鍊された體力を諸君の歴史の上に於て輝かしめ、東亞解放の大道に殉せしめるべきでなからうか。

皇軍は、道に殉する軍であり、我が國民は道に殉ずる國民である。而して我等の「學」は皇軍の道を昂揚し宣布するにあるのだ。

學徒諸君、劒を握るのも、筆を取るのも同じものである。兵農は元來一如皇國は國民皆兵であつて、昭和十九年より半島二千五百萬もこの國民皆兵の榮譽を荷ふことになる。

學にある者、又常に學を忘れてはならぬのである。

學徒諸君！ 今や決戦は最後の段階に近づいて來た。敵は總力を擧げ、殊更に挑戦して來で居る。敵學徒は我等より先んじて進出して來た。今や享樂、利己を「學」として來た彼等

と、我が道に殉ずる學徒との比を、本當に生死の間に於て見るときが來たのである。諸君は日本學徒の眞面目を全世界に示すのである。その任務は重しと雖も、多年修得したものを現はす最大の好機である。修學中に戰場に征く諸君、戰場は或る意味に於て人生の大學である。戰場は諸君に幾多の講義をするであらう、戦ひ之又學びたることを銘記せよ！この死生の巷より諸君は、最も優秀な卒業論文を體得することに間違はない。劍と筆、筆と劍、鐔鐔よりほとしる魂は一つた。劍筆一如の奉公を今や正に發揮するときた。

二千五百萬の半島同胞、否 一億國民は諸君を信頼し、刮目し諸君の力を期待して居る。進めよ、半島の親愛なる學徒諸君よ！（終）

帝國の構成分子への復古

讀書報知新聞顧問

武 藤 貞 一

日本帝國が決然起つて米英撃攘、大東亞共榮圈建設に着手したのは昭和十六年十二月八日である、眞實をいへば、これより遙かに溯ること三千年、神代において早くもその礎石は積まれてゐたのである。それが中道にして晦迷し、元來根の國として一たりし朝鮮、内地さへも離れくの關係に立ち、こゝに大東亞の紐帶は崩れ、流離顛沛の歴史が久し間アジアを埋めた。米英その他の外夷が來寇してこのアジアをいよく滅亡の淵に立たしむるに至つたのは、全くその虚隙に乗じてのことであつた。しかし、時運は漸くめぐり來つて七十年前、内地の明治維新成り、アジア攘夷戰の本格的實踐準備期に入つた。

出来得るならば七十年前において攘夷を断行せんものと當時の日本志士たちは力戦苦闘したのであるが、舞臺は日本内地に止まり、汎くアジアを糾合しこの大攘夷戦を展開せんには時期あまりに熟せず、且つまた外夷の機械文明に打克つためにはそれと拮抗し得る機械文明の吸収組成するの必要が痛感された。これぞ七十年前、日本内地のみの攘夷を思ひ止まり、所謂戎を征するためには戎衣を着るの時期を経過したゆえんである。牡丹が孤破て冬を越すやうに、過去七十年は日本の攘夷をアジアの大攘夷戦へ展開せしむるための貴重なる準備時代たつたのである。しかし、その脚底工事として強靱に行はれたものは、本来一體不二たりし『日の本』と『根の國』（日本内地と朝鮮）の復古内鮮の併合たつたのである。今より三十餘年前、賢明なる指導者によつてそのことが勇敢に實行された。この時以後、朝鮮は日本帝國を形成する一支柱となり、内鮮は一つの凝固體として大東亞諸民族の軸心たるの使命を神より付託されたのである。東亞十億の民族は互ひに兄弟であり、唇齒輔車の關係に在らねばならぬが、日本内地と朝鮮とだけは兄弟でなく夫婦である。現に肇國の遠祖、伊佐那岐、伊佐那美、兩神は御夫婦であらせられたが、その伊佐那美命は根の國（朝鮮）を治めさせられた

のである。内鮮は民族として元から一つであつて、断じて二つの間ではない。曲線をゆく歴史の繞からいくことがあつたことである。たとへば、神功皇后の三韓征伐や豊臣秀吉の朝鮮役などのことがあつたが、これには、内地の歴史において、神武天皇の御東征を始め奉り、内地間にあつても絶えず征討の事が繰返されたと同じことで、九州は天孫降臨以來日本肇國の發祥の地であるに拘らず、幾たびか皇師の征討の目標たつたことを想起すべきである。この歴史を蔑如し、半島が小さく區切られた關係に在るとき、到底存立の餘地なく、一たまりもなく外夷の勢力に壓し潰されることは地勢學的通則であり、日本内地また半島と切離されては存立の意義を失ふのである。七百年前の元寇はまづ朝鮮半島が襲はれ、次で壹岐、對馬を奪はれ、つひに敵は九州の博多灣に上陸し來つた際、これを激撃、殲滅することによつて内鮮共に救はれたのである。

大東亞共榮圈といつても、根本は日本内地五島と朝鮮半島とである。この一億民族が扇の要となつて、サツと扇面が東亞五千里の廣域に押擴げられたのであり、要がしつかりしない限り、この扇は成立たない。十億の東亞民族を外夷の桎梏より救ひ、大東亞肇造の責任に任ず

るものは、アジア廣しといへども、内鮮一億の民以外にはないことを想はなくてはならぬ。何たるそれは光榮ある任務であらうか。

もし日本内地人の中に、朝鮮同胞を新附の民と考へるものが一人でもありとすれば、それこそ天下の大馬鹿者である。朝鮮は斷じて日本の新版圖ではなくして、同根一如、神代ながらの同一民族、同胞なのである。たゞ地域的に島嶼と大陸の地續きと違つてゐたからにはかならない。同じ島嶼でありながら、本州の東北地方が可成り久し間王化に浴せざる地域として別扱いを受けた時期もある。今日、東北が日本本土の一部として融合化育されてゐるやうに、朝鮮も同様日本本土の一要素となつてゐる。

近き將來、米英撃滅戦を終り、いよく大東亞の肇造が輝かしく完成するの日は、その功は内鮮人に歸すべきであり、決して内地人のみの獨占すべきものではない。

殊に大東亞戦始まつて以來、その關係は更に緊切となつた。何より大切な戦力培養上の半島地下資源はその意義一段と重化し、更に人的資源の動員において半島の地位は斷然高められて來た。

日米決戦に對する限り、それは一億對一億三千萬人の決戦である。この決戦にみごと完勝すれば、アジアは興り、不幸敗戦すればアジアは滅亡し、再び興隆の機を失ふのである。物的戦力においては世界的侵略領土に據る敵であるだけに相當のものであるが、人的戦局においては、わづかにわれに三〇%だけ多いだけである。もし内鮮一億が一人と半人分だけの力を各自に發揮すれば勝利の榮冠は固よりわれに歸するのである。

それには半島二千五百萬の人的戦力が如何に重大意義を持つか、贅言を要せざるところである。既に敵アメリカにおいては國內六千五百萬人の人間が直接間接戦争に従事し、婦人勞力はその三割を占むるに至つた。英、ソ兩國の如きは、銃後生産戦に六割以上婦人勞力が受持つに至つてゐる。前線には十六才乃至十八才以上の男子が擧つて繰出されてゐる現況に在る。正に有史以來の凄絶苛烈なる大決闘で、われが必死であるやうに敵もまた必死である。敵米英はそのアジア侵略上の唯一の障礙物たる日本の撃滅を目指して來てをり、日本さへ亡ばせば、あとはかれらの意の儘と心得てゐる。かりに日本内地が亡んだとき、敵米英は朝鮮と合邦してその苦甘を分つなぞとは天地が引つくり返つても考へられないことである。米英

が自由を獲得したとき、アジアがどうかは、現在の印度を見れば一目瞭然、説明を要しない。これ、われ／＼内鮮人があくまで心を一にしてこの決戦に勝ち抜かねばならぬ所以である。

今昭和十九年は、朝鮮同胞にとり實に記念すべき年である。それは同胞多年の願望なりし徴兵制度が實施され、いよく朝鮮の壯丁は銃を執つて米英撃滅の第一線に忠誠を盡し得るに至つたことである。これで内鮮一列一體はいやが上にもその意義を重加し、やがては朝鮮半島が北海道や九州と同様の地位を得、外地的機構より内地的機構へ一段階を畫する素地をつくり出すものなのである。内地化への行政上の懸案でまた幾多解決されぬものは、今次決戦で豫想以上に促進されつゝある現狀に鑑み、これが解決は既に時日の問題と化してゐるものもあるやうである。内鮮兩住民に取りこんな喜ばしいことはないではないか。

決戦下の食糧問題についても、礦物資源に劣らず朝鮮の持つ地位は重要である。不幸、一昨年、昨年と兩年度にわたる米不作で、朝鮮はこの特異なる誇りを發揚できなかったのは一にかゝつて天候の關係であり、昨年の如きは却つて米不足の内地から相當數量の米を補給し

てもらふ状態を見たが、しかし、この一事くらの半島住民が心から内地の厚情に感銘した事柄はあるまい。内地は決戦下にあつていかに苦しくても、なほ朝鮮に米を送るほど朝鮮を愛し、全く家族の一員と思つてゐるのである。この感銘、この感激は、必ずや本年において人力のあらん限りを盡し、たとへ如何なる惡天候と闘つても米の増産を期し、もつて本年度こそは日本の穀倉たる役目を果すものと確信されるのである。

今や内地炭坑勞務者の〇割までは朝鮮出身者なのである。大東亞戰後戦力の機軸は朝鮮が受持ち、況んや國家至高の兵役の義務において内地と同列に飛躍した全半島人は、いよく赫耀たる希望と誇りを以てこの戦ひを戦ひ抜くの決意に燃ゆるに至つた。即ち朝鮮半島は、もはや百年前の孤立せる小弱國ではなくして、日本帝國の堂々たる構成分子として復古することにより、アジア十億の指導國民として驀進しつゝあるといふことを、個々の腦裏に銘記してもらひたいのである。大東亞の黎明は今一息だ。この秋に方々、筆者は特にこの點を力説するものである。

勝利への道への任務は一つなり

改造社長 山 本 實 彦

私と朝鮮とはさうたうの縁故があるから此際一言すれば、それは朝鮮の同胞たると否とに關らず現段階は全東亞、全アジアに同じものを課せられてゐることを思はなくてはならぬこととであります。アジア人が喰はれるか喰うかの關頭にあることを思はなくてはならぬ時であります。内地人たると朝鮮人たると中國人たるとの區別は、そこにはないのであります。此機會に大東亞が全部解放されなくては東亞人の隷屬狀態は舊に倍することとなるのです、我々は人種的優越感を把持する彼等米英の打倒に總てを捧げてゐるのです。民族的にも人種的にも平等を原則とする戦ひを戦つてゐるのです。この戦ひは賣られた喧嘩を買つたばかりで

なく歪曲されたる『あらゆる』ものを、此際になんき直す義戦であるのです。この戦ひが結局を告げるのはその目的が全的に達成された日にあるのです。十年かゝつても、百年かゝつても、その目的が達成されなかつたら戦ひは繼續するのです。われらの同胞の半ばがこの戦ひに死んでしまつても戦争は繼續するのです。われらが「アジアは一なり」と絶叫する言葉の裡に何が籠つてゐるか。もちろん、生活問題もあり、民權の問題も含まれて複雑多岐に亘るが、それより大きな問題が伏在してゐる、されど現時は戦ひに勝つことが最緊要の問題である。新占領地域經營にもわれくは彼等より文化的に高いもの、胸地の廣いものを必要とするは茲に呶々するまでもないが、勝利への道に朝鮮同胞たちをとるべき態度も「アジアは一なり」の命題のもとに汗血を結合し邁進直往するにある。個を没し、東亞を生かすにある。かく考へて見るならばこの大きな問題の前にはすべてを忘れてかからねばならないのだ。私は朝鮮の同胞にたいし特定のここに取立てて個條書き見たやうに諸種のことを要請することを欲しない、「アジアは一なり」の前にはわれわれもあなた方も任務が一つであるからである。

聖戰完勝の闘魂

朝鮮義勇隊理事長 川岸文三郎

大東亞戦争完勝の爲に半島二千五百万の同胞打つて一團となり、大陸兵站基地として、戦力増強に逞ましき躍進を續け、道義朝鮮の確立、内鮮一體化の促進、各種の指導者並に皇民の錬成、決戦生活の確立、防空、貯蓄、勤勞、愛國諸運動に優良なる實績を擧げ、戦時重要産業の振興、生産力増強、學徒特別志願兵の出陣、徴兵制度實施の準備等物心何れの方面に於ても顯著なる成果を發揮しつつあることは、内外の齎しく之を認むる所であつて、戦局の進展に伴ひ、彌々益々朝鮮の重要性、換言すれば、内地と大陸との紐帶、内鮮一體不可決の重要度を昂めつつあることは喋々を要しない。此の熾烈凄愴なる戦争の現段階に處し、半島

同胞一致團結して戦争完遂必勝を期し、決戦非常措置方策の全員戦闘配置に就き層一層人的、物的の戦力増強に勵み、敵米英撃滅に突進の闘魂を堅くせられたいのである。依つて此機會に余の最も信愛する半島同胞愛國班員各位に對し若干の希望を申述べたいと思ふ。

一、聖戰の意義透徹

大東亞戦争の本質、意義、目的、戦局、戦果等戦争に關する時局認識を明確ならしむることは戦争遂行上極めて肝要のことである。官民指導者、有識者は勿論、都市農山漁村の老幼男女洩れなく之を理解認識し、如何なる困苦缺乏にも打勝つて此の戦争には必ず勝たねばならぬ、否勝つて見せるとの信念を一層昂揚されたいのである。

二、敵の本性

敵米英は飽くなき暴虐殘忍性を有し、『日本人を殺せ』『真珠灣を忘るな』『日本恐るべし』などの標語を以て惡虐無道非人道の限りを盡して居る、此日本人中に半島人を含むことは勿論である。日本の皇道、人道主義の戦とは正に正反對の戦争指導を敵は爲しつつある。

三、敵の思想謀略排除

敵米英は悪辣な宣傳、謀略を以て思想的に相手國の戰意を粉碎すべく躍起となつて居る。蔣介石軍、中國共產黨を通しての思想謀略をも策して居る。吾等は決して彼等の謀略に乗つてはならぬ、之が爲常に防諜に努むると共に一意必勝信念を昂揚すべきである。

四、半島同胞の地位

半島同胞は忠良なる御民我れとして大東亞戰爭の完遂大東亞共榮圈の建設即ち亞細亞十億民族に各々其の所を得しむる解放運動の中核指導者たり主體たるべき榮譽と責任を有するのである。米英の壓迫擄取、非道義的支配を受けて居つた、支那人、泰人、フィリッピン人其の他南方諸民族人の如く解放さるべき客體とは斷じて本質が異なるのである。されば内鮮日本人は興亞運動の主體として指導民族としての修鍊、皇民鍊成に精進し、以て名實共に指導者たる資質を向上すべきである。

五、勝利の確信

戰局の現段階に戰爭は生やさしきものならざることを自覺し、常に泰然自若、冷靜沈着、苟も一勝一敗に喜悅興奮し、又は悲觀狼狽するが如きことがあつてはならぬ。戰爭は全

民が捨身となつて頑張り、有ゆる戦力を増強し、戦ひ抜くことに依り最後の勝利を獲得し得るのである。此の確信を以て物心共に益々戦力を發揚せば必ず勝利を得らるのであることを自覺し發奮努力されたい。

六、國民運動の徹底

半島の國民總力運動は本府の施政と表裏一體、官民一如活潑なる活動を爲しつつあることは周知の事實なるも、苛烈なる決戦下に於て半島同胞全員が聖戰完勝に突進するのは更に此の國民運動の徹底強化を圖らねばならぬ。總力聯盟の各級幹部も、全愛國班も、皆共に火の玉の一團となつて精神的にも思想的にも戰域戰場の戦力増強に邁進せられんことを切望するのである。而して此の鮮内同胞の堅き決意と團結とを滿洲、支那等に在住する半島人同胞にも反映せしめられたいのである。

(陸軍中將、朝鮮力聯盟議長)

半島民の心のありかた

京城日報社長 高 宮 太 平

70

無住心劍の流祖針谷雲は『敵の刀を受けたり避けたりしてはいかん、斷じて切り込め、受けたり避けたりするのは畢竟己が身が可愛く犠牲なしで相手だけを斃さうと言ふ卑怯未練な根生だ、そんなことでは敵は斃せぬ、自分も死ぬ、しかる後必ず敵を斃せ、敵必滅に小細工はいらぬ、眞向の一太刀あれば足る』と喝破した、或る時柳生十兵衛のところに一武者修業者が尋ねて来て『私は只今多年捜し求めてゐた仇に邂逅つた、ところが今迄仇の所在を捜すに汲々として武を鍊ることを忘れてゐたため折角仇に邂逅つたがこれを打ち斃す自信が

ない、今この場で敵必殺の極意を御傳授願ひたい』と頼み込んだ、十兵衛は眞情面に現はれた孝子の熱情にはたされて蟲のいゝ難しい願ひだとは思つたが『仇に對つたら切先で斬るな鐔で斬れ』と教へた、これは『振りかぶる太刀の下こそ地獄なれ、身を棄てゝこそ浮ぶ瀬もあれ』の柳生流の極意を別な言葉で言ひ現はしたものである、その武者修業者が立派に仇討本懷を遂げ孝子の面目を發揮したことは勿論である。

これ等劍豪が悟り切つた禪僧の如く生死を超越した高い心境にまで到達するには何十年の刻苦研鑽を要したのである、しかるに吾人は敵必滅の激しい氣魄、一死報國の崇高な姿を今次大東亞戰に於いてハワイに、マライに、ベンガル灣に、或は比島にジャワに、ソロモン海域に、北に南に東に西に、戰域の到る處にまさしくと見た、しかもそれ等忠勇の士の多くは何れも紅顔の美少年達である。

劍豪と謳はれた人々が數十年刻苦研鑽の結果漸くにして到達し得た崇高な心境にまでこれ等紅顔の美少年達を育み引上げたものはそも何か、それは君民一體の萬邦無比の我が國體の精華である、大君に歸一し奉り、生なく死なく、醜の御楯と勇奮した三千年來の祖先の血であ

71

る、私が古劍豪の、しかも半島民には餘り興味もないだらうと思はれるやうな劍豪の一挿話などを冒頭に記したのはこの挿話を記憶して貰ひたいからではない。

名實ともに内鮮一體となり『大陸前進兵站基地』としての朝鮮の性格、實力を遺憾なく發揮させる以外に大東亞完勝の途はなく、戦を勝ち抜く根幹は結局機構や物でなく、その機構や物を作り且つ動かす人であり、その人の精神であり、必勝敵必滅の信念であると言ふことを一億國民、特に半島二千五百萬の同胞に肝銘して貰ひたいからである、『心のありかた』總てのものはこゝから生れ、これの如何によつてどうにでもなるのである。

大東亞戦争は歐米諸國の戦争の如き單なる領土擴張、資源獲得のための帝國主義的戦争ではない、東亞新秩序乃至大東亞共榮圈を建設するための戦争である、大東亞の新秩序とは米英の搾取を亞細亞から驅逐排除し、欺瞞と暴虐の壓制に苦しむ亞細亞を正義と慈愛につつまれた明るく強い亞細亞たらしめることである、東亞十億の人々をして各々その所を得せしめ、その塔に安んぜしめることである、その中心主體は勿論皇國日本である。

日本が主體で、日滿支の互助連環關係が樞軸となる、この樞軸關係が鞏固に確立してゐな

ければ大東亞共榮圈も、更に一層擴大された共榮圈の建設も空論に歸する、私は今日程『内鮮一體』の眞義が清新且つ深遠なる意味に於て再確認されねばならない時はないと信ずる、單的に言ふならば今頃になつて内鮮一體など言ふことそれ自體がおかしいので、内鮮一體を強調せねばならぬ部面が今日なほ多少でもあるところに遺憾があるのである、日滿の一體一心關係は日滿支關係の更により深いところに結ばれてゐる不可分關係であり、内鮮一體は日滿不可分關係よりも更に深いところで結ばれてゐる一にして二ならざる一體そのものを意味する、これは單に内鮮の歴史的考察から來る血の關係、精神上の問題たるに止まらず經濟的なものをも意味する、朝鮮は大陸に於ける延いては大東亞に於ける日本そのものゝ姿であると言ふも過言ではないと信ずる、この『内鮮一體』の關係は朝鮮に住む内鮮人は勿論、内地であらうと滿洲であらうと大東亞の如何なる地域であらうとも日本人が完成確立せねばならぬ中心命題であり責務である。

明治卅九年二月統監府が開廳し初代統監として伊藤博文公が就任、同四十三年（皇紀二五七〇年隆熙四年）韓國併合條約の調印がなされ總督施政となつてより卅餘年、官民一體の努

力により半島産業經濟は畫期的に發展した、農業一本の原始的半島は今や農工併進の各種産業の全面的發展を見つゝある、『大陸前進兵站基地』としての半島が堅實な歩みを續けてゐることは洵に慶賀に堪へぬが悽愴苛烈言語に絶する現戰局を前にし勝ち抜くため半島に負荷されてゐる至上絶對の要請——鐵、石炭、輕金屬、稀元素礦物等々の地下資源、食糧の畫期的増産勞務供出等々の戰力増強——に遺憾なく應へるためには朝鮮在住の内鮮人は勿論日本人全體が先人のなしたよりも更に更に深刻な精神的、經濟的困難と修練に堪へ、莞爾としてこれを克服するの氣慨と覺悟を持たねばならぬ。

戰は屢次の大本營發表に明なる通り如何なる形容詞を以つてするも表現し得ざる程悽愴を極め深刻となつて來た、敵米は戰略的優位と南方資源地帶を確保した日本に徒らに時を藉せば無盡豊富の資源は着々戰力化され日本打倒の機を永久に失ひ、従つて彼等の獨善專横の世界を建設することが出來なくなる、それに國內的にも長期戰をなし得ない經濟的、政治的、思想的の種々の事情が錯綜し止むに止まれず我に短期決戰を挑むに至つたのである、彼等は二ヶ年の太平洋作戦に於いて精神力、術力に於いては到底日本に太刀打を出來ぬことを骨の

髓まで知り抜いたが彼等は壓倒的の物量を以つてすれば結局は日本を屈服し得ると確信してゐる。物量に對する彼等の信賴感乃至物量の威大さに對する威怖感に吾々の想像以上で寧ろ一種の信仰とまでなつてゐる。最近の太平洋作戦即ちタラワ、マキン、クエゼリン、ルオツト等の經驗から二倍三倍では不可能であるが十數倍の壓倒的兵力、物量を以つてすれば如何に精強無比の日本軍でも潰滅し得るとの確信と言ふかうぬばれを一層深め得るのではないかと想ふ。この傲慢ちきの赤鼻をへし折る術は戰力の増強以外にない。國家の總ゆる力を戰力増強の一點に總動員結集し、これを最高度に發揮せしめて飛行機を船を、彈丸をどしどし造りどしどし前線に送ることである。量を絶對と信仰してゐる彼等がその量を以つてしてもなほかつ日本を屈服させることが出來ぬと感じた時、日本の精神力と術力と物力との三位一體の底知れぬ威力に結局齒立たずと悟つた時、初めて敵米は、兜をぬくのである。崇高なる精神、至妙の術力を如何に彼等に示し、叩きつけても彼等には通じない。物量に對する自信を喪失せしめることが大東亞戰完勝の捷徑であり根本である。こゝに何が何でも戰力を増強して米英を撃碎するに足る飛行機を艦船を、彈藥を果又食糧を緊急増産確保せねばならぬ國

家の至上要請があるのだ。

緊迫した現戦局を直視し、これに對する國家の至上要請を前にし我々一億特に半島在住二千五百萬は各々の日常生活を反省し、心構に於いて、行動に於いて果して皇國臣民として缺くところないか、否か、成る程支那事變に於いて半島民の獻納機七十六機、志願兵應募者〇〇萬の多きに上り、大東亞戰に至るや一躍三百五十機以上を數へ、しかも我々は四月末日迄に更に二百機獻納を成し遂げたのである、一方各種重要物資の増産に或は米穀等の供出に涙ぐましい迄の協力ぶりで皇國臣民としての責務發揮に遺憾ないことは事實が最も雄辯に物語つて居る。特に全鮮を感激の坩堝と化せしめた學徒志願兵は徴兵制度施行の前奏曲として半島史我國史に畫期的の一頁を永遠に記録した。さば言へ、皇國臣民の本義に徹する點、即ち眞の日本人としての『心のありかた』については未だしの感あるは敢へて筆者のみの感懷ではあるまいと信ずる。前にも記した通り政治も經濟も、國家施策の凡てが人の『心のありかた』如何に存する、小磯總督が昨年の新年劈頭今年施策の重點を『國體の本義に透徹、道義朝鮮の確立を基幹とする皇民鍊成』に置くと言明し、爾來機會ある毎にこれを説き

躬を以つて率先垂範されてゐるのは意義極めて深遠なるものがある。半島民の皇民化が眞に徹底するか否か、その成果如何は直に大東亞戰爭完勝、大東亞共榮圈建設の如何に重大影響を及すものなることを銘記し總督の意のあるところを體しその施政に對し心からの協力と努力を惜んではならない。

皇民化とか、國體の本義に透徹するとか、いふと如何にも難しく一朝一夕には出來兼ねるかの如く考へる向もあらうが眞の日本人となることはそんなに片苦しく考へる必要もなく心の持ちやうで至極簡單なのである。曰く正しく強く生き抜く——これでよいのだ、前線將兵が一切を大君に、祖國に捧げまつて敢闘する、あの純一無雜な姿、あれが眞の日本の眞の日本人の姿なのである。今日、この際の眞の日本人としての我々の心構、責務は、刻下の至上命令である、何が何でも勝つために、戦力増強のために捨身奉皇慕進することである。飛行機を船を彈藥を食糧を『造れ送れ勝て』を言はれても飛行機工場に造船工場に或は百姓でない者に飛行機が、船が、食糧が造れないではないかと言ふ人があるかも知れない。かゝる人は我々の日常生活が直ちに兵器廠に農場に否前線に繋つてゐることを知らない人々であ

一、二、の例を示さう、全國六千萬の電燈を一日一時間早く消燈することにより一日に飛行機五十臺分のアルミ製造に要する電力が浮く、一日二時間節電することにより一日百臺分、月に飛行機三千臺分のアルミ生産用の電力が浮く、全國民が一日一勺節米すると一年に二百五十萬石が浮き南方資源卅八萬噸を運ぶ船腹が浮く、この卅八萬噸の南方資源で重爆六千九百機、戦闘機なら二萬機を造ることが出来るのである。七千萬人（内地人口概數）の中十人に一人の割で一年に一回の旅行を差控へると三百五十人乗りの客車を連絡する列車二萬本が節約出来る。これで米を運べば一列車六千俵として一億二千俵、つまり七千萬人分の食糧に比敵する、換言すれば全國一割の人間が一回の旅行を止めれば全國一ヶ年分の食糧が運べるのである。百姓でなければお米が作れぬ、造船工でなければ船が造れぬと言ふことはない。以上の例が最も雄辯に物語つてゐるやうに我々の心掛け一つで飛行機でも電力でも船でも、米でも立派に大量に作れるではないか。作れぬと言ふのは心構が出来てゐないからだ。戦争生活に徹してゐないからである。

物が足りないとか、やれ何か不自由だとか自己中心の考方はこの際一切止揚せねばならぬ。支那事變を五年もやり、今又この大戦争を戦つてゐるのである。物の不足や不自由は初

から分り切つてゐる。物量を持つ敵はガダルカナルからブーゲンビル、ブーゲンビルからニューブリタンへ、ギルバートからマーシャルへ、トラタクへ、マリアナへと遂に毒牙を皇土の一角に引つかけ虎視眈々本土侵攻を狙つてゐる。空襲は最早あるかも知れぬなどと言ふ生温いものではなく必至の情勢にある、半島民諸君、獨英の空爆戦をなんと見るか、地上のありとあらゆるものが一瞬にして灰燼に歸した英軍のハンブルグ爆撃、投下爆弾六千噸と稱する獨軍のロンドン猛爆、それ等の爆撃下に於いても飽迄の自國の必勝を確信して敵撃滅に増産戦に挺身してゐる獨英國民のあの闘魂、圖太い神経を何んと見るか、困難、苦痛をじつと耐へるところに勝利が来る。身も心も一切を大君に歸一し奉り、米英が完全に參つたと言ふまでは一切ことあげせぬこと、これが眞の日本人の姿である。

皇國臣民となること敢へて難事にあらず、戦に勝ち抜くこと又難事ではない。たゞ日本臣民としての『心のありかた』さへ間違はねば足るのである。敢へて半島二千五百萬同胞の勇奮を望む次第である。

明治大帝の聖慮を理解せられよ

貴族院議員 徳 富 蘇 峯

私は何時も考へることだが、朝鮮人や内地人は只すら 明治天皇の御聖旨を奉體し、凡てのことに當り、その鴻大な御志を奉じて進むならば、何事にも躊躇逡巡することはないと思ふ。色々な點から推して考へる時、内地と朝鮮との間に寸毫も差異があらう筈がない。既往の關係より見るも 又畏れ多い話したが 明治天皇の一視同仁の聖意より拜するもそのようなのである。

凡ゆる點に於て同一なのであり、同一であるべきだったが不幸にも中途に於て些少の事から兩者間に理想通り出来なかつたこともないのではないのではなかつた。こう云ふことは彼我に於て

明治大帝の聖慮を理解せぬ人々の誤つた考へからそうさせたものと云へる。我等は再び目を大きく開き戦局を見ると共に 明治大帝が如何なる御方であり、大帝の念願し御望みになられたことが、如何なることであつたかを拜察し、考へ方を改めて持たねばならぬと思ふ。然し今や内鮮間はお互が良き理解の下に、その心と心とが接近し往きつゝあることは私が云はぬでも承知のことである。

須らく我等は、御互が新らしい大亞細亞を創成し、その主軸とならねばならぬ。殊に今度朝鮮の學生諸君が志願して第一線に立つ様になつたことは諸君の爲め、朝鮮の爲め、眞に榮譽のことである、この様な榮譽を立處に悟り得なかつたとすれば、それは諸君を自縛するに等しいことなのである。

諸君には機會が來たのだ、諸君は若さを知れ、最高の理想と目的の爲めに、死を迄も顧み見ず突進することが出来るのが、諸君のみの持つ純情である、徒らに躊躇し懷疑することは熱血沸立つ青年の仕業とは云へない。氣魄があり事の左右を良く判斷する青年諸君は、この時こそ躍起すべきであると私は固く信ずる。

私は既に朝鮮とは格別の因縁を持つて居り、朝鮮には多くの親友を持つて居るからでか知らぬが、今度、朝鮮學生達に特別志願兵として軍門に入る機會を持つ様になつたことに對し最も愉快に考ふる者の一人である。従つて今後朝鮮青年諸君が、如何程に、勇猛果敢に皇軍の戦列に立ち奮闘するかを刮目して期待して居る。

朝鮮の諸君が特に技術に於て優秀な素質を持つて居ることは歴史上の色々な事例に見るも了解出来る、この機會に、諸君は躊躇するなく陸、海の荒鷲部隊として、航空機を操縦し、技術に長する生來の隠れた特點を遺憾なく發揮することと思ふ。東亞の仇敵鬼畜米英を波瀾荒き太平洋、山嶽も險しき大陸の各戦域に縦横無盡に撃破すると云ふことは如何程に壯大なことであろうか。諸君の中には、この様な機會に恵まれざるを寧ろ歎いた人々もあるであらう、昔の海將李舜臣を見本とし過去の歴史に燦然と光を放つ先人達の勇猛を眞似て諸君は日本の皇軍として、卓越せる猛者が數限りなく輩出することを期待するものである。

世間には、朝鮮人は文には長するが武には長せずと云ふ者も居るが、之からは諸君の誠と血を以て綴られた功勳は長へに此の地に光り大亞細亞建設に經と緯が出来てくれるものと信

する、諸君の出陣に重ね重ね榮光が有らんことを望んで已まぬ。

諸君よ、現在の凡有るものを忘れ、志を決め奮起せよ、より大なるものの爲め、征けよ、この時奮發するのが、明治天皇の大御心に奉副する所以なのである。

諸君が奮起して、勇躍決戦場に立ち武勳を樹つることに依つて以つて、明治大帝の一視同仁の大御心は、より一層光を放ち實を結ふことと信するものである。

朝鮮への感謝

一言にして申しますれば、第一朝鮮に向つて安心し、第二朝鮮に向つて感謝してゐる、是丈けのことにすぎぬのであります。

畢竟私共が朝鮮はごうだとか何とか騒ぐやうな必要を御與へにならずに、全く私共が朝鮮のことを思ふことは長崎のことを思ふが如く、福岡のことを思ふが如く九州のことを思ふが

如く、福岡のことを思ふが如く、山口縣のことを思ふが如く、東京のことを思ふが如くに思つてゐる爲に、別に何等朝鮮がどうとか斯うとか云ふやうなことを問題にせないのであります。決して是は無視してゐるんぢやない、餘りに安心した結果であると云ふことを御承知を御願したいと思ふのであります。嘗に私共は安心したばかりでなく全く感謝をしてゐる。實は私共は正直に云へば朝鮮の御方を見損なつたと思つてゐる位であります。

今度の戦争やなんかでは是ほど素直に、是程神妙に御國の爲に同心協力して頂いたと云ふことは我々内地に居つても全く是程までにも朝鮮の御方達がやつて下さつた。畏れながら若し明治天皇様が今日の如しつたらさぞ御満足遊ばされることであらうと思つて、明治神宮に向つて私共は實にこのことを感謝し申し上げてゐる次第であります。全く私共に誠と云ふものが如何に斯う云ふ時にはものを言ふかと云ふことを實例に於て教訓せられて居ります。

それで今後私共が滿洲に對する心得と支那に對する心得も、これまでの我が朝鮮の同胞に對するやうな心得をもつて、全く私なく公平なる心をもつて行きさへすれば互に融和すると云ふことは決して不可能ではないと云ふことを、しみじみ良い教訓を朝鮮の皆様から頂い

た。厚くその點に於ては感謝してゐる次第であります。どうぞこのことだけは是非御傳へを願ひたいと思ひます。

是まで日本内地はマルコポーロに依つて、黄金島と云ふことになつて、今より六、七百年前には随分騒がれたところでありますが、豈圖らんや今日は黄金島が朝鮮に移轉して、今日は黄金島は即ち朝鮮と云ふことになつた今日でも大變な金屬を掘り出しておいでになります。私が承りましたところに依れば、朝鮮の地を掘れば何處か必ず地下には金屬が埋まつてゐるんだなご、云ふ話をする御方もありますから、或は全部が金屬になつてゐるか知れませんが如何にも私共は之を心強く感じてゐる。併しながらそれよりも私共が心強く感ずることは朝鮮に於けるところの皆様方の心である。全く我々と一心同體になつておしまひになつて、内地とか朝鮮とか云ふ差別は絶對になくなつてゐる。

もう既にその徴候が見えて居りますから、是は何れ遠からず絶對になくなつてまふ。その場合に於ては徴兵問題とか、或はその他の問題など云ふことは、自然に春風が吹いて來て悉く氷が解けるやうに、自然に物事が行くべきところに行き納まるべきところに行き納まるの

はなからうかと思ふのであります。(大阪ホテルに於ける講演)

南方で健闘する朝鮮同胞を見て

前總督 南 次 郎

南方で健闘する朝鮮同胞を見て

現下半島の東亞の地域に在住する我等同胞の半島人は、約三百二十二萬人にして内百四十六萬人は滿洲に、十一萬人は蒙疆、支那及南方各地に在住し、百六十五萬人は内地に在住する。之等半島人の在住地が如何なる所であらうとも、均しくこれ 天皇陛下の赤子にして同時に、我等の同胞であり、又忠良なる皇國臣民であらねばならぬ。而して内地在住百六十五萬人の中十二萬五千人は東京府下に在住する。その内容を言ふと國民學校生並に中學校以上の學生が四萬五千人、家族隨從者約四萬人、勞務者二萬五千人、醫者、辯護士、商工業従事等概して知識階級に屬する者約六千人である。之等十二萬五千人の全部が協和會會員で、

此會員を指導する機關は東京府協和會並に府下八十餘ヶ所の支會にしてその支會の指導員が八百餘名である。即ち本日此所に會同してゐる諸君はその指導者達なのである。私は之等指導者の參會に於て親しく諸君の壯容に接するを最も欣快に思ふ。此の機會に於て所懐の一端を申述べて諸君の參考に供しよふと思ふ。

私は去年一月下旬より三月十日迄の間中支、南支、佛印、タイ國、ビルマ、マライ、スマトラ、ボルネオ、ジャバ、ボルネオ、セレベス、フィリッピン等の各地を親しく視察した。その距離は約二萬軒で、之に要した時日は四十日で、全部飛行機で飛び、各樞要地は三百乃至四百をして見たが、大東亞共榮圈内に於ける偉大な陸、海、空軍の戰果、米英の必死的反攻に對する皇軍の反撃及各地各原住民に處する施策施設幾多感激すべき事績並びに豫想以上に建設工作が順境にあることを知つたが、その内特に本日ここに集合せる協和會補導員たる半島同胞の參考として貰ひ度いことの一、二を紹介する。

目下南方各地にある半島人は三萬三千人である中、俘虜監視員は〇千〇百人、その他の者は陸海軍工事作業の勞務者又は各軍政、民政管區に於ける建設諸作業に勤勞して居る者であ

る。私は特に俘虜監視員を見たが彼等の、マライ半島、ジョホール州に於て米、英、濠洲の將官、佐官、尉官、下士官、兵卒等數萬人の監視に任じてゐる、私は半島の同胞と親しく逢つてその職務に服する状態を視察し、且つ各軍部、及民政部の人々より聞いた所を綜合すれば、半島人服務の現状は其成績頗る良好で、あらゆる方面の信任を得て居るのみならず、俘虜に對しても概ね寛嚴宜しきを得て居る様である。殊に規律、節制、言語、動作等は俘虜たる外人に範を示すの氣魄を持つて克く自制、自肅して居る事は詢に痛快であつて、其情況を在半島二千五百萬の同胞諸君に知らせたいのである。

監視員の或者は曰く『こちらに來て初めて自分等の身柄の偉大なる事を知つた』又他の或者は『自分等が半島に居つた時は米英人の如きは我等より遙かに卓越せる人格と富とを有する者であると妄信し、之を絶大に崇拜したる結果遂に完全なる親英米的たるの心持であつたが、今や實地にこゝで勤務に服して見ると、我等自身の從來の考へ方が違つて來て、我等と雖も努力と修養とに依つて彼等を指導する事が出来る自信を得るに及んで、釋然として内鮮一體の眞意義を知つた』と述懐した者がある。私は或者に對し『君等の所感を語つて見よ』

と求めた處『先づ英國人が相當に規律正しく品位も整ひ、自己の任務を確實に行ひ、之に次ぐものは米人、ごん尻が濠洲人で、濠洲人は年齢も區々まちぐで、二十歳から五十歳位迄である。久しく彼等を監督して居ると彼等の素養の程度が分る』と。

この陳述は非常に面白いと思ふ。半島の青年が無意識中に適切に米英軍人を批判し得た事である。學問をせすして實況に則して之丈の批判力を持つ様になつたのである。之は畢竟するに俘虜監視員たる職務の環境により自己修養に無意識的に進展し、且つ着意と思想とに一大飛躍を感じたものであると思ふ。或者は『自分等はこゝに日本人として彼等を保護監督することに依つて大なる反省を得た。此の任務に忠實なる爲には、もつと自己修養を徹底的にしなければならぬと思ふ』と。

之等は主なる感想であり、この事に就ては自分も非常に愉快な感を持つて視察したのである。東京で去年四月中旬臨時知事會議のありし時に 金村全北、瀬戸咸南、柳生江原、山本忠南の各知事閣下が揃つて東京世田ヶ谷區代田町の私の宅に來訪の時にジョホールに於ける俘虜監視員を視察したる前述の話をした處、或知事は『今迄自分の管内から行つた者から南方

事情等の報告等がある時は直ぐに返事もし激勵もし感謝もして居る』と云はれたのである。が是れは誠に結構な事で双方の情義上尊重すべき心構へである。私が斯様な事實を本席で述べる所以のものは補導員諸君が東京都下に於て十二萬五千人の全員を補導する意義が『ジョホール』監視員の心構へと同様の意味に於て先づ自分自身が垂範するの氣魄がなければならぬと思ふからである。

抑も補導員たる者の業務は第一皇國臣民たる國民精神の作興、第二教學の振興、第三生活の改善、第四衛生の施設等であるが、是を内地の施設と實情に順應して爲さなければならぬのである。それが爲めには先づ己れ自身がよくその方針に適合すべく率先して範を以て指導する事が緊要である。

而して最も大切な事は、内地在住の同胞が世間の一般より半島人の缺點として擧げられて居る點をよく具體的に承知して居つて、その缺點を是正し事實を以て正しく一般人に識らせしむ事が緊要である。言葉を換へて云へば、内地人が嫌がる事、厭ふ事等に就て特に留意を要するものがあると思ふ。例へば、不潔を平然として行ふとか感恩感謝の念が尠ないと

か、又は何時迄経つても國語をやる氣にならず、又務め様ともしないとか、自分一身上の要求、要望は多いが、之に對する報恩感念は薄いと云つた様な事は内鮮一體化の一つの障礙である事を深く銘心すべきである。然し凡そ世界中で半島人と内地人程よく相似た點の多くを有する所は少い、第一容貌に於て、第二その食物に於て、第三起居に於て、第四相互の挨拶、愛嬌又その着物の着方、就中言語の上に於ては名詞を頭とし、動詞之に次ぐと云ふ様な風俗、言語、衣食等類似して居る美點を助長して内地と調和すれば、極めて迅速に相一體となるは容易なる事であり、又一億一心の決戦體制下に於て急速に遂行し得ると信する、但し最も大切な事は以上の形式的の事にあらずして思想上の内鮮一體であつて半島人が眞に皇民化の徹底せる修養に努めねばならぬ。諸君は今日、諸君自身の立場に於て、各々其職務を持ち乍ら、一方に於て内鮮協和の事業に對し、熱誠に従事しつつあるは私の深く欣快とし、且つ其勞を多とし、敬意を拂ふ所であるが、内鮮一體は仲々容易の業ではなくして借すに多くの年月を以てやらねばならぬ。屈せず、倦まずに勇往邁進して、成し遂げねばならぬ。第二世、第三世の時に至れば混然一體となる事は私の堅く固く信する所である。が諸君も亦諸君

の子孫の幸福繁榮の爲め皇國臣民化に専念邁進せられんことを切望する協和會事業の振興、擴大、普及は其の第一歩である。

戦時の義務と戦後の榮光

—若き出陣學徒に餞して—

朝鮮聯盟次長 簡 牛 凡 夫

此の度の特別志願兵のことに就いては朝鮮では初めてのことであり諸君の中には驚いた人
もあろう、前途に多くの希望を描き、理想も持ち勉學にいそしんで居た學生が、其學業を中
途に抛つて今や銃を擔ひ、戦線に出る爲めに志願すると云ふからには其間色々困難な事情
があつたらうと思ふ、又、子弟の卒業する日を指折り數へて待つて居つた家庭の皆様方も、
急に學校を止して兵隊に征くと云ふので、多少躊躇した向もあつた事と思ふがこれ亦當然と
も云へる。

實に歴史的にも又は家庭的社會的にも内地の學生とは事情を異にして居るので、我等内地
人側からは、想像も出来ぬ多くの困難な事情が有つたことと思ふ。この様な困難な事情を克
服し、多數の學生が決然と志願を決意され父兄も亦之を諒解して呉れたことに對し、私は國
家の爲め朝鮮の爲め衷心より感謝して己まぬ次第である。

私は朝鮮に於て總力運動を擔當して居るが、國民總力運動と云ふのは國民の總力を集めて
之を國家の爲めに獻ける運動である。國民の總力を集め之を遺憾なく發揮すると云ふからに
は、苟且にも國民をして憂鬱な心を抱かしめたり、國民に希望を失はしめる如き事があつ
ては斷じてならないのである。

人間と云ふものは、自分がやり度くない仕事、いやな仕事には幾らやつて見ても本當の力
が出ないものである、希望に燃え自ら進んでやる時には、時間の經つのも知らず三倍五倍の
仕事をやれるものである、ここに於て朝鮮民衆の總力を國家の爲め遺憾なく發揮させるに
は『道義に依る新らしき明朗な朝鮮』を建設することが、その前提條件であると信する。

小磯總督は赴任當初から道義に依る新らしき朝鮮の建設を諸君に約束して居る。

内鮮の關係は元來一つだつたと信する、然し一千數百年の間、異なる歴史を持ち異なる運命を歩んで來た。而して日韓が一つに結ばれた後にも、世界の様々な思想的風潮に影響され兩者の關係は完全な意味での一體を成し遂げ得ない様な事情にあつた。然し、滿洲事變が起り支那事變が起り引き續き大東亞戦争が勃發するに至り、元來同じ血で連結された内鮮はここに眞の自己に目醒め力強き内鮮一體の成果を收めつつあるのである。今や非常なる勢を以て内鮮一體が促進され、朝鮮同胞の陛下に對し奉り又國家に對する忠誠心の發露は大いに内地に居る者を感激せしめつつあるのである。

しかも、志願兵諸君の優秀なる資質と、その勇武は内地にある者をして驚歎せしめたのみならず徴兵制實施に對する、沸き上る感激の衷情が、内地に於てはその儘感謝感激の心に形造られてゐるのである。

斯の如くに、諸有方面に於て、内鮮は今や差別を超え一つ心に着々と結び合されて居るのである。

而して朝鮮の新建設の爲めに總督は色々苦心されて居る、又政府も朝鮮の爲め始終力を

致して居ることを私は聞いた。機運は正に動いてゐる、即ぐにも新しい朝鮮を建設する時機が我等の目の前に迫つて居るのである。

我等は過去の色々な障碍と不愉快な記憶を棄て、現在残つて居る不愉快な問題を超へて、新らしき朝鮮の建設に『希望ある努力』を繼續して進まねばならぬ、今回の大東亞戦争は大東亞を再建する爲の戦争なのである。

東洋本來の面目を發揮して英米的なものを驅逐し、新らしき道義に基く大東亞共榮圈を建設するのがこの戦争の目的である。

大東亞を再建せんが爲めには、その指導者である『日本』の再建が先づ前提とならねばならぬ、日本の再建は進んで朝鮮の再建を意味する、朝鮮を本當に再建し朝鮮の同胞をして、勇躍陛下の御爲め忠誠を捧げ奉ると云ふ考へを持たしめず、どうして大東亞の諸民族に其の所を得せしむることが出來ようか。

今や朝鮮には大いなる勢を以て新らしき光明が齎ちされ、諸君の期待する眞個の『自由と幸福』、即ち本當の諸君の發展の途が開かれつつあると私は深く信する。而してこの朝鮮の

建設を目前に控へ幾多困難なる事情を斥け、色々な障礙を破砕して今學徒諸君が相率いて勇躍志願の舉に出で又朝鮮の父兄達ちが、皆喜んで子弟を戦線に送る。

この一事が、又新朝鮮の建設にどれ程大きな力となり、どれ程大きな側面作用を起すか、私はこの點に於て今度學徒諸君の蹶起に對し、國家の爲め朝鮮の爲め衷心より感謝して己まぬものである。

今回の大戦争は、これに依り世界各國の力の強弱が決定され、各民族の品位の高低迄もが決定さるゝ戦争なのである、この戦争に依つて強き國力が知らされ、優秀なる民族の個性を發揮するものと、その反面に於て世界より棄て去らるゝ没落する民族とに分かれたれて仕舞ふのである。

周知の如く國家を忘却し、國民各自が自己の生活を享樂することのみを、こととしてゐた佛蘭西は、獨逸の一撃に遭つて無慘にも滅亡してしまつた。

伊太利は前回の世界大戦の時には、獨逸、奧太利と同盟を結んでゐたに拘らずいよいよ緊急な場面に叛いて英佛軍に參加した。しかし信義を傷つた國に大した力があらう筈はなく、

戦争中常に英國と佛蘭西に引つられ、大した功も成し遂げずに終つた。従つて戦争が終つた後、論功行賞を行ふ段になつては、伊太利は何等の恩賞にも與り得なかつたのである。

當時之に對し、伊太利國民は大いに憤激したが、その後『ムッソリーニ』が率ゆる新らしい伊太利が起り獨逸、日本と提携して、今度の戦争に參加したのであるが、訓練なき國民は苦しい戦さには耐へ難く、遂に『パトリオ』叛逆政權に依り、米英の軍門に降つてしまつたのである。

米英の軍門に降服したことに依つて國民を戦争の苦しさの中から救出せるものと考へたが、豈圖らんや、國土は獨逸對米英の激戦場となり、國民は以前にも増して一層戦争の慘禍の中に卷込まれ、塗炭の苦しみの中に叛逆者として避けることの出来ぬ汚名を受けつゝ、永久に滅亡せんとして居るのである。

斯くて大小の國々は、今回の戦争に依り皆夫々の國力の強弱、民族性の高下を評價され決定されつゝある。

私は今回のこの戦争に、朝鮮青年諸君が赫々たる武勳を顯はしてくれることを衷心より願

つて居る。文を崇び武に缺くる如く見えて居た今迄の朝鮮の歴史を新らしく作り變へると云ふ斯の如く重大な機會は再又と來ないのである。文弱に溺れて居つた朝鮮の血を今回の戦争を機會に、東亞の天地に、否全世界に向つて昂揚して呉れることを望んで己まぬものである。

身を殺して仁をなし、義に對し勇敢で道義觀念に強いことが東洋諸民族の特長である。身を棄て、家を離れ、大義に生きるが東洋人本來の面目でなければならぬ。

自分の身を愛し、自分の家を大事がることも、皆重要なことなのではある。然し我々のこの生命、我々のこの財産と云ふものを只自分のものだと考へるならば之は大いに誤つた考へ方であると云はねばならぬ。

米英的の考へ方に依れば、生命より大切なものなく、命の次には財産である。生命と財産とが一番大事なものと考へて來た。

しかし今度の様な戦争に直面して見れば再び考へ方を直して見ねばならなくなつた。

私は、戦後の上海、南京等を視察し來たが、國家が戦争に敗れば國民の生命とか財産と

かは何等の値打もなくなつて仕舞ふのである。家は破れ財産は奪はれ、自分の身體さへ置き處なく、明日の命さへも測り知れずに、彷徨ひ歩く群れと群れ。これが自分の財産だ、これが自分の生命だと言ふて見た處が、戦争に敗けて仕舞へばそれを保障して呉れるものは何者もないのである。

我等がこの生命を保存し、自己の財産を維持し、安樂な生活を爲し得るのは一に國民の生命や財産を保護してくれる處の大きな力があるからなのである。

國家に國民を保護する力がなくなれば、國民の個人々々が私の財産、私の生命だと主張することは出来なくなる。何よりも先に我々は國家を防衛しなければならぬ。國を衛り國を強くするのでなくては、國民の生活、國民の生命は安全を到底保ち得ないのである。

我等の生活に、國家がどれ程大事であるかは、猶太民族を見れば分るのである。

猶太民族は神の選民だと昔から稱して居つた。その言葉の如く、本當に優秀な者も相當居り、數から見ても世界の到る處に生活して居る全猶太人を數へて見れば二億に近いと云はれて居る。

彼等は世界にも比類なき優秀な宗教を持ち、強く堅い信仰に生きて来た民族なのである。智能の上に於ても、其他の能力に於ても、この民族よりも優秀で、世界民族として最も優秀な条件を具備してゐるにも拘らず、幾千年間到處で迫害を受け、苦難の生活をやつて来た。今日でも猶太人と云へば、何處の國に行つても尊敬を受けて居ない。恒に排斥を食ひ壓迫を受け迫害を受けて来た。何故、そうであつたかと云へば、國家を持たず、國家の特別な保護を受けなかつたが爲めなのである。自然、資産を造つて『金力』で生きて行かねばならぬ。資産さへあれば良い、そこで物質本位で進むから、國を建てるとかゆふ永遠な考へは持つ邊がない。自己一代のみを考へ生活する様になつたから、到處で迫害を受ける爲めに只金錢のみを好み、目前の生活を享樂する様になり、その民族的性格なるものが甚だしく賤しくなり、非人道的になつて来たのである。

この様な悲惨な生活を幾千年も重ねていかねばならぬと云ふことは、つまり儼然たる國家組織、國家秩序を持たぬからである。

我等國民生活にはどうしても國家と云ふ組織、鞏固にして健全なる國家組織が必要であ

る。

然らば、國家でさへあれば如何なる國家でも良いかといへばそうではない。前回の歐洲戰爭當時、米英等強國の謀略と米英の便宜とによつて多くの獨立國が出現したが、それ等の獨立國が皆幸福な運命を歩んで来たかと云へばそうではない。一方に於て好ければ一方に於て排斥を喰ふて居る。自由もなく希望もない悲惨な運命の下に、二十年の歳月を過して来たが今回の戰爭の犠牲になるのは皆之等の弱少國家であつたのである。實に全交戰國の國民生活は皆逼迫はして居るが、直接交戰國家よりもこの戰爭の犠牲となつて居る弱少國家の國民生活は悲惨なものはないと云へる。

ここに於て朝鮮の將來の爲めには、血の繋りに従ひ日本と一つの塊りとなつて進む處に初めて、無限に發展すべき天地が開拓されると思ふ。而して諸君は本當に、陛下の大御心を奉ずる途に進むことを私は確信し度い。我々は心を同じくして戰に勝ち、又は世界新秩序建設に指導的役割を果さなくてはならぬ。戰さに勝つ力は、國民の鐵石の團結にある。國民の鐵石の團結は國家の運命に對する確

平たる國民の信念から生れて來るのである。國家の運命に對する確乎たる信念なしに盤石不動の國民の團結は決して有り得ないのである。

萬世一系の天皇を仰ぎ奉り、天壤無窮の國體を持つ、日本國家の運命を我等は確信して往かねばならぬと思ふ。

今回の大東亞戰爭は緒戰以來——今も第五回『ブーケンビル』近海航空戰の大戰果が發表になつたが——到底世界人類が信することの出來ぬ偉大な威力を發揮し、着々戰果を收めて居るのである、世界人類が想像することも出來ず、我等日本國民でさへ奇蹟だと云ふほかはないこの大きな戰果を如何にして收めることが出來たか、多年の軍の訓練、國民の勇武に依るは勿論なるも戰線に出て居る陸海軍勇士の話に依れば、只訓練とか、機械の力、國民精神力とか云ふもののみでは、この様な大戰果は絶対に收めることが出來ないと言つて居る。

今迄神を信じもせず、佛様の前に合掌したこともない者ですらも、戰線に出る様になれば、天佑神助を知る様になつたと云ふことは多くのノ々が證言する處である。

陛下より米英に對し、下し賜ふた宣戰の御詔書中に『皇祖皇宗の神靈上に在り朕は汝有素の忠誠勇武に信倚し』と仰せられた。今回の戰爭は、只精兵の忠誠勇武のみに由るのではない、その上に日本帝國を守護せらる、諸神の御力が、一身を捧げ忠誠を盡くす國民の力と一つに合體した時に到底、人間の想像も出來ぬ偉大なる國力が發現發揚されるのである。

天皇の御詔に依り人間の力と神威とが、一つに結合されるのである、ここに偉大なる皇軍の威力が發揮されるのである。

凡そ人間の生活は、大小の論なく何事でも神威と人力とが結合される時に初めて成就するのであるのである。人間の能力だけで出來るものではない、種を播いて米を收むるも人間の力と穀の中に潜んで居る自然の力、神の力が結合して稻も結實するのである。凡の工業、凡の産業も皆人間の力と神の力が結合して居るものと、知ることが我等人生に於て最も肝要なことなのである。

今度の戰爭は、只民族の感情と利害が異なるからとて起つた戰爭ではないのである。

歴史の必然性から新らしき世界、道義に基く世界を建設せんが爲め起つた戰爭であり、

にも逆ふ事の出来ない大きな歴史の流れの中に起つた不可避な戦争なのである。

何處迄も勝ち抜き、神の御旨に應へなければ日本民族の使命を完成することは出来ぬのである。

ペンを捨てて出征する學徒諸君は前線に出て外に向つては、惟神の 天皇の御秘願を宣布し、又米英の唯物的、利己的な壓迫に對しては根本的に之を排除し以て、新らしき東亞共榮圈を建設せんが爲め渾身の奉公をしてくれる様期待して已まないものである。

銃後に残る我等は、常に學生諸君の武運長久を祈りつゝ、その輝しき武勳が新聞紙上に報道されるのを期待すると共に朝鮮に残つて居つて、陛下の大御心を奉じ、暗影を拭ひ去つた、明朝なる新朝鮮を建設する爲めに、官民が一體となり内鮮が一體となつて、強い東亞建設の礎石を築き上げる事に努力せねばならぬと信ずる。

私は學兵諸君の武運を衷心より祈りつゝ父兄の方々へ感謝の意を表すると共に、新らしき朝鮮の建設は戦後に期待すると云ふべきでなしに、明日からも前線に送る手紙に「朝鮮は明朝になつた、朝鮮の天地に光明が輝いて來た」と愉快なる消息を、戦地の學兵諸君に送る様

になる様、心と心を結びお互に本當に一體となり、道義的な新朝鮮建設に、渾身の努力を盡さしむことを諸君と共に誓ひ、學兵諸君を送る餞別の辭とする次第である。

戦時食糧に身魂を投げよ

衆議院議員 吉 植 庄 亮

前世界大戦の結果を證據に出す迄もなく、今度の世界大戦の勝敗の歸結は食糧問題にあるといふ私の信念がいよいよ固くなることと思ふ、日本の軍は所謂神軍であつて負けることは絶對にある筈がない。船舶増産、これに要する資材、人的資源が如何にそろつたところでこの勞務者が腹が減つてゐるときに百の力は百には働けない。生産増強の前提はこの意味から食糧補給の充實が約束せられる。そのみでなく前線は勿論、銃後の腹が減つてゐるときに絶對の勝利は來ることはない。絶對の勝利を將來、招き來たすには、國民が食に足りること

がなくてはならない。こゝにいふ意味から食糧事情の重大化が、今迄とはすっかり様相を變へる。去年迄の食糧自給といふ問題が、日本に占めた位置と、今日の位置とは、重ねて云ふが、雲泥の相違を來すと斷言出來る。ところで今日の食糧事情はさうであるか。

戦争前八個年と戦争後今年迄八個年との米の平均收穫量を比較すると、前の八個年平均收穫量六千餘萬石に對して後の八個年平均收穫量六千二百萬石であつて、支那事變後八年にして、日本は百數十萬石の米増産を結果してゐる。こんなことは全世界中の如何なる戦争に於ても見ることの出來ない眞に驚嘆すべきことを物語つてゐる。前世界大戦で獨逸を始め佛蘭西、英國、伊太利といった國々は、開戦三年、四年にして食糧生産三割四割減を來し獨逸はそのために戦ひに勝ち乍ら敵の軍門に降つたのである。それとこれとを思ひ合せると日本がいよいよ以て、神の國豊原瑞穂之國といふ有難い國であることがはつきり分る。ところで、それでは日本の食糧事情が安心出來るのかといふと、なかくそうは參らない。

今迄日本の食糧は、米を大宗として見るときに、日本本土、朝鮮、台灣を併せて一億萬石の收穫を見て、これをこれら日本内外地の一億萬人の人が食べてゐたのである。それが朝鮮

に於ける度々の收穫減に依つてこの一億萬石の供給が脅やかされて來てゐる。近頃の實情に見ても、昭和十四年の一千四百萬石、昭和十六年の一千七百萬石、去年の一千八百萬石といつたやうな大減收となつてゐることが、これを證據立ててゐる。このことは戦争遂行の上から見て誠に容易ならぬことで、日本本土に於て生産増強を辛うじて勝ち得たところで、半島に於て米増産の戦ひに敗れるときに、ここに日本の食糧自給問題が根底から打ち揺られることになる。石に嚙りついでも半島に於ける食糧増産は勝ち抜いて敵かねばならぬといふことを私は痛切に感ずる。

二

私が大學を出て、東京で新聞記者をやつてゐた身が、大正十五年郷里に歸つて開墾をし乍ら百姓になつた。それから丁度五年目、お米の多收穫競技に千葉縣篤農家三十三人の中に混つて出陣した結果、三等賞に入選したことがある。そのときに千葉縣の農地試験場の山田技師が、貴方はまだ百姓の尋常五年生であるのに千葉縣のお米作りの權威者の中に混つてこんな成績を擧げることが出来たといふことが不思議で堪らない、一體どうしたといふのだらう

▲こう云われたことがある。そのときに私は、この多收穫競技の一切の計畫が各部の農會の技師が建ててくれたので、私達はその計畫に従つて一切を處理したのである。私はまだ素人であるから、この技師さん達の云ふ通りのことを實行したが、他の三十二人の篤農家は、自分の數十年來の體驗に頼つて、いろいろその技師達の設計の中に自己を取り入れて、自己栽培を多くして居たのである。その結果は私の多收穫競技は千葉縣に於ける農業技術者の最高峰の技術をそのまゝ實踐したが、他の篤農家達は、この最高峰の技術に、祖父さん或は父時代代の古い農法を礎とした、體驗を割り込ましたのである。その結果お百姓の尋常五年生である私の稲作りが、他の篤農家を凌加したのであると私は思つてゐるが、どうお考えですか。こういうと山田技師が成程それは氣が附かなかつた、いや眞實そうに違ひない、と云はれたことがあつた。このことは誠に大きな問題を今日に投げ掛ける。日本の農學者等の中には、日本の米作りは、もう收穫の限界に達してゐる。これ以上耕種改善に依つて増産は計ること出来ないと云ふやうなことを云つてゐる者があるが、こゝに大きな問題がある。この議論は日本の百姓は、蓋し玄人の百姓であるといふ建前に立つて始めて是認せられることになる。

が、日本の百姓は今申したやうに、形は玄人のやうであつて、その實、素人が大部分を占めてゐるのである。その證據を少しく云ふと、種を選ぶ際に、日に乾したもみ(粃)と影乾しをした粃と何れが遅しき命を持つてゐるかといふ研究、坪當り五合の種子を蒔いては不可ない、二合或は三合を蒔くのがいいのだといふことは知つてゐても更に一步進んで温床苗代で坪當り三勺か五勺蒔いた種子が、どれだけ多收穫になるかといふ點、その他田植、除草、或ひは肥料のこと萬般に亘つて本格的栽培に關して本當の知識と體驗とを持つてゐる農民が、一村の中に果して何人居るか、私はこれを疑ふ、日本内地の農民は形は玄人で居て、その實素人が多いのである。

三

日本内地の米收穫と朝鮮に於ける收穫とを比較して見よ、日本内地に於ては一段歩當り二石、朝鮮に於ては一石五斗一升餘が常態である。この收穫量から見ると朝鮮の百姓は日本内地の百姓よりも、又ずつと素人であるといふことが斷言出来る。ところが問題の分れ目である。一體朝鮮總督府當局は此の點をどう見でゐるか、又素人の百姓と見て居るか、そのどち

らであるか、この見方が今日迄の朝鮮に度々來たる兇作を招き來してゐるのではないかと私は思つてゐる。私が見る通り日本内地の農民は、多く素人であるから根本からこれを心に迄たち入つて教へ導かねばならない。そこに念願する増收が来る、こう考えるとき、日本内地にももつと米増産は来るが、百姓は皆玄人百姓である故にこれ以上教えてゆくことは困難だと見るときに、絶対に増産は來ないと同じやうに、いや、それ以上に朝鮮に於ては、この理論が當て簾る筈である。三十年、五十年、土まぶれの生活を送つて居たとして、父祖代々の農法に依るときに、今日の科學の眼から見ても、これはつづの素人農法なのである。この考へ方一つで増産、減産の二股道が分れる。少し話が嚴し過ぎるやうではあるが、戦争前八年間平均收穫量に比べて、日本の主食物、米が開戦後八年増産を來たしてゐるといふ輝かしき成果あるにも拘らず、日本が今食糧に相當困惑を來たしてゐる一環を朝鮮が擔つてゐるといふことを考ふるとき、私は敢えてこのことを立言する。私が昭和十四年朝鮮の未曾有の旱害に逢へる同時、旱害見舞に衆議院議員として渡鮮したことがあつたが、そのときに私が深く感銘して未だに忘れないことは、朝鮮農民が「ごんぐり」の實を食べるニレの皮、キキ

ヨウの根クメベリヒユク迄食べて、自分達に割り當てられた乏しき麥を供出して、この困難を切り抜けやうとして居た貴い姿であつた。この農民の貴き像を思ふとき、食糧確保が戦ひに勝つか負けるかの一切の土台を爲すといふことを深く認識せしめ、教ゆるに玄人農法を以てし、温き心を以て我が手を取る如くこれに教ゆるとき、朝鮮二千餘萬農民は、必ずや身や魂とを投げうつて、この國難打開に馳せ参するだらうことを信じて疑はない。朝鮮總督府當局のこの點に關する開眼と勇猛心とを企願する。

半島同胞と徴兵

貴族院議員 丸 山 鶴 吉

この講演會が開催されるに當り私は東京から來阪致しました。何卒時間のある限り話します故御靜肅に願ひます。

今や大東亞戦争は第貳年目に入り、日本帝國は今や大切な時にさしかゝつて居ります此の時に當り我々皇民としては覺悟を決めねばなりません。この主催團體は内鮮一體化のために過去十年間努力して居るが、今回徴兵制實施と大東亞戦争必勝感謝講演會を開催されるに當り私は國民相互が一層時局の重大性を認識すべき秋だと思ひ参つたのであります。實に東洋には十數億の人口が居りますが、今迄米英が我々東洋民族を迫害してきたのであります。我が國

は東洋永遠の平和の爲に斷乎として立ち憎い米英を東洋の天地から一掃し明朗なる東洋にする目的のため立つたのであります。

吾々は如何なる困難にあひごんな妨害に遭はされても聖戰の目的を完遂せねばなりません。畏くも十二月八日大詔を拜してより我が無敵皇軍はハワイ、マレーの各地に戰果をあげ北はアリューシャンより南は赤道の島にまで日章旗をひるがへしてゐるのであります。かかる事は世界の歴史始まつてより初めてであります。此の時に生れて日本國民と言へるのは人生のほこりであります。此の重大なる任務を一億國民はにひあひ又新らしく韓國併合以來の此の名譽ある事をわかちあふ事は光榮であります。支那事變勃發以來朝鮮同胞は兵器の獻納や國防獻金を多大に帝國政府に致した事は、國民は勿論 將兵も大いに感謝して居ります事は此處で諸君に感謝致します大東亞戰爭二年目の決戰を迎へて我等は國家の總力をあげて米英撃滅しなければならぬ大切な年であります。今までより一億國民は一層總力を結集して何事も體當りでやらねばなりません、今は銃後はありません、銃後が戰場であります。

吾々は銃後を第一線と思ひ働かねばなりません、工場で働いても第一線です。戦場の兵士

が命を捧げて戦死するやうに我々は戰場に倒れて止むの精神をもたねばなりません、それが爲には戦力増強、食糧増産、物資の増産は必要であります。刻下の大問題は増産にある事であります。半島同胞は現在内地で産業戰士として敢闘中であります。力を其の日に出すが一日延ばすかで戦力に影響があります。時局を認識して帝國の聖戰目的に一致して内鮮一體化の爲にますます努力されん事を切望します。朝鮮總督は十九年徴兵制を二十一年義務教育を実施致します。拓務省は大東亞省の管下に入り朝鮮、臺灣は從來より以上に接近し緊密なる連絡をとり得ることになりました。今日まで示した誠意を大東亞戰完遂に力をつくし二千五百萬半島同胞の力を發揮する事は内鮮一體化の實現であります。半島同胞は一層結束して皇國臣民の自覺を養ひ聖戰目的のために努力せられん事を中心より切望致します。

次に我等は内鮮一體化の實をあげる爲即ち 陛下に半島同胞を歸一するために努力をつづけて來ましたが今後も益々活躍する事と思ひます。

今夜はゆつくり話す心算でしたがあまり聴衆が多くて混雜する様に思ひますので講演を終りたいと思ひます。最後に一言申し上げたい事は私は大正八年齋藤前總督の下で警務

局長として五年間在任し大正十三年内地に歸りました。朝鮮在住は僅か五ケ年ですがとても懐かしく朝鮮同胞を親しく思つて居ります。朝鮮を去つて二十四年になりますが、私は朝鮮同胞の親しい友達であり、親しい友達は朝鮮同胞の中に澤山あります。私は今後も朝鮮同胞の親しい友達として親類つきあひを致したいと思つて居ります。又ゆつくり話す事もありませうが私は諸君の爲にあくまでも盡力致します。(大阪に於ける韓民制憲運動會にて)

歴史の大道を掴めよ

東京新聞記者 御手洗辰雄

すでに幾度か幾十度か説いたところであるが、朝鮮の青年諸君に望む第一の問題は、心を空しくして歴史を顧る事である。人間歴史の發展は、個より集團への過程である。原始草昧の頃は誰れしも一人／＼で生きて居つた。それが家族の生活となり、血族の生活となり、部落生活となり、部族生活となり、小國家をつくり、民族社會となり、近代的な國家生活から現代の國際社會へ進化したものである。この間には平和もあれば國爭もあつた。親和協力もあれば抗爭反目もあつた。近代國家を作つて後、その國家内においてさへ武力に訴へ血を流して争つた事が少なくない。支那の如きは最近までかゝる争の絶え間なく、今日も尙それを

續けてゐる有様である。朝鮮半島でも極めて近い頃まで血を洗ふ内争は絶えなかつた。世界無比と言はれる統一された日本にあつてさへ、僅に七十年前迄は全國二百六十餘藩に分れ、各自武力を蓄へて半獨立的狀態にあり、勤もすれば武力抗争をなし兼ねまじき有様であつたのである。

これを要するに人間の歴史は小より大に、個より集團への統一發展であると言ひ得る。東洋たると西洋たるとを問はず、これが歴史の眞實である。何が人類を集團せしめ、統一發展せしめるかと言へば、人文の進歩である。人間精神文化の發達と同時に科學文明の進歩があり、兩々相俟つて人間の孤立生活を許さず、集團生活を必然ならしめ、さらに人文の發達が次々へと、より高次の集團を必然とする結果に外ならぬ。アフリカ奥地の土人は今尙我々が四五千年以前に経験したと同じ生活を保つてゐる。而して彼等の文化の程度は同じく我々四五千年以前と同じ狀態である。文化の發達に比例して人類の生活様式が集團化して行く事は、明らかに自然の法則と言ふべきである。

この集團化し、統一されて行く方式が明らかに二つに分れてゐる事は又歴史の示すところ

である。第一は力をもつて壓伏し、要すれば一方を絶滅して統一するやり方であり、第二は大小強弱の別なく渾融和合して大同に歸する行き方である。時々の例外を除けば白人種のみが前者であり、我等東洋人の歴史が後者である事はこれ亦明白な事實である。西洋に於ける統一進化の歴史は絶對的な鬭争と征服であり、彼等同士の間にあつても相手を絶滅するか、壓倒的に屈服せしめる事が統一の唯一の手段であつた。従つて黒人種に對してはその鬭争絶滅手段は絶對徹底的で、彼等の目標となつた人類は盡く奴隸化されるが、絶滅されるかの外なかつた。これは西洋の歴史始つて現代に至る五十年間、一貫した嚴たる史實である。東亞の歴史にも、例へば元の如き例外がない事はないが西洋の如き絶滅的征服慾、發展手段と言ふものは殆んど見られない。我々は人類の發生が一元であるか多元であるかは知らぬが歴史を通じて見る彼我のこの根本的相違を眺める時、白人と東洋人はその發生を異にしてゐるのではないかとさへ考へるものである。生存の根本法則において、歴史の初發より異つてゐるのである。彼も我も集團化し統一される大勢は同一である、その手段に至つては天地の差がある。彼等は排他自存であり、我等は共存同榮である。彼等は惡魔の道を歩き、我等は

神の道を進んでゐる。天賦の素質に相違があるを考へるより外ないではないか。

東洋の精神の最も完全に而して圓滿に顯現されてゐるものは日本である。こゝに日本歴史を説く必要はないが、日本民族こそは東洋のあらゆる血を交へ、文化を融合してその特質を集大成してゐる。歴史以來、絶えざる發展を續けてゐるがその發展は征服にあらず、況んや排他絶滅にあらず、常に攝取不捨、大和渾一の一路を進んで來てゐる。今より凡そ二千年前に調べられた當時の上流階級の戸籍とも言ふべき新撰姓氏錄によれば、その三割強は朝鮮及び漢民族であつた。今日の上流階級にはその血統が勿論傳はつてゐるが、こゝにその痕跡があらうか。平安朝初期の勇將坂上田村麿も歸化人であつた。武藏國高麗神社の話は餘りに有名である。東京向島の白髻神社を始め關東一圓に散在する數十の白髻神社は、高麗神社の分社で、分村した高麗族がその氏神を祀つたものである。純江戸つ子の中に多數の高麗人があるのである。而も今日こゝに闘争壓伏の跡があらうか。異民族としての、高麗人の痕跡など微塵もない。これが東洋の歴史發展の姿であり、特に日本の歴史展開の眞の姿である。渾べてか一に歸し融合し、大和するのである。

この大和の發現するところ即ち八紘一字である。古來、世界を征服し統一せんとする英雄野心家は無數に現はれた。併し、武力をもつて人類を一に歸せしめんとは神を恐れず、天地の大道を知らぬ愚者と云ふの外ない。過去に失敗した如く將來も亦成功の望みは全くない。人類社會が小より大に集團化し統一化する大勢が自然の法則とするならば、その方法は東洋の歴史に従ふ外ない。科學の發達は戦争を不可能あらしめる時代が來るであらう。その最後の武器を發明したものが世界を統一するであらうと説く者がある。併し、科學の發達は無限である。最後の武器に優る武器が出現せぬと何人が保障出來やうか。所詮、力をもつては人類社會の統一和合は不可能である。これをなし得る道は天地自然の道即ち大和の精神による外はない。これは歴史の實證するところである。

朝鮮の過去及び將來如何。あらためて説くまでもない。七千萬人と二千五百萬人の渾融和合によつて、一日も速やかに歴史の本流に溶けこむにある。朝鮮自身、極めて最近まで酷烈な内争があり、日本にも二百六十餘藩があつて對立抗争して居つた。今日その痕跡がどこにあるか。これは既に歴史の彼方に溶け去つてゐる。次は内鮮の差別を同じく消滅溶融すべ

き段階である。我等は僅々半世紀足らずをもつて、すでにその七分通りを成就した。今一步である。而もこの時に方つて大東亞解放の聖戦に遭遇した。日本が東亞解放の主役であり、やがでその指導者たるべき事は嚴たる事實である。内鮮無差別に融合される事は即ち内鮮一體となつて大東亞の指導者たる事である。かつて高麗、百濟の人々が内地に移住しその子孫が何の區別もなく今日日本人として東亞の指導者となつてゐる史實をそのまゝに、一日も速やかに我等も成就しなければならぬ。すでに滿洲國や南方にはその先驅者の活動が始つてゐるではないか。

かゝる先驅者の志を繼ぎ、その跡を踏んで朝鮮をして人間歴史の本流に導き、その主導的地位を占めしむるものは現代の青年及び少年である。その責任の重大、あらためて説くには及ぶまい。再言す。心を空しくして歴史を顧みよと。(前京城日報社長)

皇國の干城となり同じ戦列へ

大本營參謀 秋 山 中 佐

諸君！半島同胞諸君、二千五百萬の、久しきに亘つて待望せられましたところの徴兵制が、愈々本日から實施せられることに相成りました。京城はもとより半島の津々浦々に至るまで湧き返るやうな感激の裡に記念の行事が執り行はれるといふことを承知致しまして私も亦久し振りに御地に參りましたものと致しまして非常なる感激を覺える次第であります。このことは實に半島同胞諸君が如何に日本人たるの道を理解し、またその道を身をもつて實行せんとする熱意に燃えて居られるかといふことの實證であります。私は本日あの多數の民衆をもつて埋められた感謝決意宣揚大會に臨みまして、青年男女諸君の歩武堂々たる分列行進を眼

のあたりに拜見し、思はず私の目頭には熱い涙が浮かんで來たのであります、私は陸軍の將校の一員としまして内地から參りました國民の一員と致しまして、この感激をうけとりましたことはなんと表現致してよいか分らぬほどの有難い、力強い心持ちに打たれたのであります、しかしながら諸君、私はこの感激の坩堝の中にをりながらも靜かに心をひそめ、また深く深く自らを顧みるべき重大なことが幾多存在するもののやうに考へるのであります。

それは何か、先づ第一に半島に對して徴兵制の實施を許させ給うた大御心に深く心を致すべきであります、抑々世界に國をなすものはその數甚だ多しと雖も、またそれらの國々に於いて徴兵制を實施し、軍隊を貯へ、それを訓練し、事ある時にはこれをして戰鬪の事に從はしめる、これは敢て異としないのであります、しかしながら世界の國々が頻々として、次々として徴兵制を布きつつあるこの状態に於きまして、我が國の兵役制度を慎重に検討致し、すなわば、その間に吾々ははたと思ひ當ることがあるやうに考へるのであります、一體各國が兵を貯へこれを訓練し、その國境に外敵の侵入を防がうとする所以のものは何を目的とするものでありませうか、これはいはずと知れた外敵に對して自國の民族の安寧を圖り、自國

内に生存する個人々々の福利を守らうとする所以であります、いはば民族ならびに個人の利害關係を守るための軍隊であります、極端にこれを申しますならば軍隊といふものは算盤勘定の上に立つものであるといふことが出來ると思ふのであります、斯くの如き利害打算の上に立つ軍隊が一度四隣の外國を壓するやうな勢ひをもつことがありましたならば、その軍隊を有する國は遠慮會釋もなく今度は積極的に國境を越えて他國の中に押し入りますして恰も強盜的手段を用ひて他國を侵略し、その利權をひきさらつて行くことにとめるのであります、これを帝國主義侵略主義と言ひます、然らば軍隊は侵略主義、帝國主義の手段であり、その手先であります、これは從來の世界の歴史が然りと答へるところのものであります。

然しながら大日本帝國の軍隊に於いてはさにあらず、我が日本の軍隊に於いては決して侵略主義にあらず、強盜的手段を用ひて他國を侵略し、他の民族を亡し他の民族を壓迫するが如き、斯くの如き軍隊に非ずといふことが斷言出來るのであります、我が軍隊は屢屢國外に出動致しまして、さうして赫々たる武勳を奏したのでありますが、そのいづれの行動も未だかつて、少くとも明治天皇の聖代以後に於きまして侵略なりと言ひ壓迫なりといふことが

出来ませうか、この點は諸君に於いては篤と慎重な考慮を拂つて戴きたいと思ふのであります、私は今回の戦争、即ち我も敵も共に必死となつて戦ひつゝあるこの戦争のさなかに、我が方の戦争目的は極めて判然として天日昭々たるものがあるに拘らず、未だにアメリカもイギリスも第一線に於いて我軍の俘虏となるところの將校も兵隊もなんのために戦ふかを知らざるものが如何に多くあるかといふことを、否殆ど敵の總てといふものはなんのために戦ふかを知らず、自國の戦争目的を知らないやうな斯くの如き低級な劣悪なる者の満ちくつてゐることを知つてゐるのであります、我が將兵が一度進む場合には猛然として至るところ撃破せざるはないのであります、一度その兵を止めるに當りましてはあの南方の廣大なる地域、或はマライ、或はスマトラ、ボルネオ、ビルマ、このやうな廣大なる地域におきまして如何なる原住民と接觸を行ひつゝあるか、我將兵が駐屯するところ南方の山も川も、初めて生々とした色を取り戻すのであります。

ここに住むところの住民達は初めて自由と安樂の顔色に立ち返るのであります、日本の兵隊さんがやつて來ると子供達が元氣になり日本の兵隊さん達が歸つて行くと子供と犬が淋し

くなる、これは純眞な土人達が歌に歌つて我將兵の純眞無垢なる且つ平和なる態度を賞め讃へたものであります、マライの住民達は申しました。

今まで我々の子供達がこんなになつたと、こんなに楽しさうに嬉しさうな顔色をしたことは自分は未だ會て見たことがない、みんな日本の兵隊さんのお蔭であります。(拍手)

さういふやうにいつてゐる、一度起ち上りますや猛然として當るところなき我皇軍將兵は、一度戦ひの鋒を休めますや至るところに純眞無垢なる子供達と遊び戯れ、また原住民を相手としてまるで自分の兄弟にも勝る次第であります、これは一體なにを示すのでありませうか、日本軍は平和を求めんがため戦ふ、戦はんがために戦ふものに非ず、破壊せんがために戦ふものにあらず、總て世界に大平和を齎さんがために戦ふところのこの大精神が將兵の人々々の、その精神の中にしみ込んでゐるからであります、これこそ私は斷言致しまするが日本の國是であります、日本の精神であります、大なる平和と書いて大和魂であります、而して、これこそ又窮極するところ畏れ多いことではありますが、我大御心の體現であらうと思ふのであります、日本の兵隊は決して取らんがために——國を取らんがために——他か

らものを取らんがために戦ふものではありません、日本は取るがために戦ふに非ず、日本が戦ふのは他に與へんがためであります。(拍手)

私は之は斷乎といひ切ることが出来ます、斯くの如き軍隊が世界の歴史創つて以來曾つて存在したでせうか、如何なる軍隊が他人のために血を流すといふことを肯んじたでせう、あの文明の度の低い、色の黒い、南方の遙に劣つた民族達のために、このやうな原住民達のために喜んで自分の命を捧げるのであります、喜んで自分の命を投げ出すのであります、之も亦私が斷言していふのであります、本當の大御心の體現である、これこそ日本のためであると信じ切つて彼等は戦ふのであります、いはば他民族のために死す、これは日本民族以外に未だ曾て斯くの如き戦ひの歴史は斯くの如き事實が現れたことがあるでませうか、私はこのことを或る時は支那の新聞記者にいひ、或る時は英米の新聞記者にいひ、斷乎としてこれを主張したのであります、日本の軍隊の強さはこゝにある、たゞ平和を目的として、そして正しき道を進む時に我等は何ものをも恐れないのであります、斯くの如き軍隊に諸君は今後は喜び勇んで參加出来るのであります、徴兵とは自分の一身を残る隅なく魂も命も、身體

も全部捧げ盡して大君に奉るのであります、その決意を持つものにして初めて軍隊の門を潜る權利があります、名譽が與へられます、私はこの立派な世界に冠たる日本の軍隊といふものが如何なる重大なる意義を持つものであるかと言ふことを皆さんに篇と理解して頂きたいと思ふのであります、否、これは日本の國是がさうであります、現在の大東亞戦争の如き決して掠奪のために行つた戦争ではありません、否、未だあらゆる戦争がさうであつたやうに今回の戦争においてもアメリカを仆してその繁榮を奪ひ、これから弗東の紙幣を多數の船に積んで日本に持つて來ようといふやうな淺ましい奪略戦では御座いません。

我々は我々の持つてゐる正義感をアメリカ人にもイギリス人にも逆に與へてやらうといふ、與へるといふところの精神に基いてこの戦争は行はれるのであります、日本の軍隊は實にこの天地公明正大の主義の上に精神の上に立つところの軍隊であります、この軍隊に召されて入るといふ以上こゝに凡ゆるものを投げ捨てなければなりません、まづあなた方が地方における金持ちの子弟であるならば又あなた方が地方における名望の家に育つたならば、その財産を捨て名譽を捨て本當に四面平等の一個の平凡なる形の一兵卒たることを考へなければ

ばなりません。この一兵卒として凡ゆるものを投げ捨て純真無垢何等求むところのない精神に立ち返つて初めて日本の軍人たることが出来るのであります。(拍手)その上に立つ日本の軍隊は即ち世界最強最鋭の軍隊といふことを申して憚らるのであります。私は今日の宣揚大會に當り熱誠溢れる青年の顔を見まして釋然として心に悟つたのであります。半島二千五百萬の胸の中には本當の日本臣民になり切りたいといふその熱意があり今日の數萬の人の顔にそれが代表されて、しつかり結んだ唇の上に表現せられてゐることを汲み取つたのであります。(拍手)兵役といふものは自分の命を捨てることであります。兵役といふものは自分の魂を捧げることであります。兵役によつて代償を求めることは出来ません。これは今後兵營の門をくぐられるあなた方、並にあなた方の後を嗣いで生れ未來永劫にこの半島から大君の御楯と出で立たれる人も胸の中にしつかり刻み込んでいたゞきたい心事であります。物を求めずまづ與へようといふ精神、これだけが世界に大平和を來たし又われわれが世界に冠たる地位を占め得る唯一の要素であります。もしわれ々の中に不純のもの即ちこの大戦争によつてわれ々が儲けるとか物質的に得るとか或はもし征服しようといふ不純な考

へがありましたならばこの戦争は負けでありまして、この戦争に勝利を得ることは勿論將來われ々は和大民族たるの資格を保つことは不可能であります。しかしながら私は上御一人天皇陛下の大御心は實に日月と共に炳乎として明らかであり絶えずその御徳を與へさせ給ふけれども何等四方の民草から求めるところのないその有難さに感泣するものであります。またこの戦争に於けるわが國の態度といふものは開戦の際の宣戰の詔勅によつて炳乎として明かでありまして、この記念すべき本日、當りここにゐる方々は自分の命を捧げて帝國の軍人たらしめるものと思ひます。何よりも大事なことは自分の凡ゆるものを捧げ盡すその精神を以て初めて帝國軍人たり得るといふことを感得していただきたいといふことであります。(拍手)私は恰度一ヶ月前に上海、南京に參りました。この上海、南京に於きまして私が一年振りに感得致しましたことは支那民衆の大部分は決してその考へ方が好轉してゐないといふことであります。本日は支那に對して治外法權を撤廢したところの極めて意義深いアジャの歴史に重大な一ページを加へた日であります。しかしながらこの治外法權を撤廢する、即ち支那に對して完全な獨立を與へる、支那の國家の尊嚴性を初めて恢復するといふや

うなかういふ大事な出来事、事實或は又これと並行して行はれた各地の租界の撤廢返還、かういふやうな大事件が一體支那の民衆に對しまして如何なる反響を與へ如何なる影響を與へたかといふことを仔細に觀察したのであります。

皆さん支那の民衆は大體に於いて駄目であります、何故であるか、支那の民衆の九割はこれはこの治外法權の撤廢や或は租界の返還といふことについて大なる關心を持ちません、彼等は口には中國の統一を叫び或は國家の尊嚴を申しますけれども彼等は決してかういふやうな大事なこと本當に腹の中に沁み込んでわかつてをりません。又日本が率先してこれを與へた所以の意義について感ずることが甚だ少いのであります。私は上海に於ける中國新聞聯合會並に出版聯合會の歡迎會に臨んで率直大膽に申しました。諸君は今回のこの事實に對して餘りに感ずることが薄いのであります。日本はこれを與へるがその代償を求めてゐるのではない、われ／＼がこの戰爭をするといふことは物を與へんがためである。またアジャの諸民族をして少くとも大東亞の諸民族をして各々そのところを得しめ生成發展の道を講ずるやうなその大理想にしたがつて國家の運命を賭して戰つてゐるのであります。治外法權の撤

廢、租界の返還の如きこれは當然のことである。敢へて異とするに足りない、諸君はこの意義を知つてゐるか、如何にこれが重大事であるかを知つてゐるか、恐らく諸君は知るまい、また租界を返還されたといふことを有難がつてはゐない、英米の財産までも中國が強くなるためにこれを與へるといふその意義について何等感得することがないではないか、なぜであるか僕はこれは諸君に代つてはつきり云はう。

それは日本が現在の戰爭において敗けるといふやうな感じをもつてゐるからではないか、日本がもし敗けるならば日本に代つてこゝに歸つて來るものは英米ではないか、又重慶である。それならば英米の財産を貰つたところで當分の間その保管料を支拂ふといふことでは間尺に合はないではないか、算盤勘定に合はないといふ感じをもつてゐるのである。しかしわれ／＼は敗けない、その所以は後で話すけれども、その前に諸君にひたいことは、諸君の注意を喚起したいことは諸君が國の父としてあがめ奉つてゐる孫文の言葉である。それは諸君もよく知つてゐる通りに『日本なくしてアジャなし』と喝破したこの一言である。現在諸君の腹の中をついたならば日本は負けてもわれ／＼は少しも損得關係はないのだといふや

うな考へを持つてゐるに違ひない。しかもこれは恐らく眞實であらう。諸君の考へとわれくの考への間には百年の距りがある。見よ、世界の凡ゆる邊陲の地域、凡ゆる片田舎に於いて起つたところのはんの僅かの事件と雖も問題と雖もこれを處理するためには一國の力を以て果して處理が出来るであらうか、之は絶対に出来ない問題であります。イギリスもアメリカもソ聯もドイツも日本もどのやうな國もこれは一國では處理出来ないやうな状態にまで世間は進んで來たのである。さういふやうに國際的問題が密接に結ばれて來たのである。諸君の考へてゐるよりも世間は百倍も小さくなつて來たのである。東洋の問題が即ち西洋の問題である。

歐洲に發生した問題も即ち東洋に於いてわれく自身に極端に響いてくる問題である。然るが故に世界は既に國家聯合の觀念にまで進歩して來たのである。多數の國家が聯合してその力によつても如何なる問題も處理出来ないといふのが、現在の國際状態である。この問題を解剖し處理出来ないならば諸君はわれくよりも百年間後すきりをしてものを考へてゐるといふことを自分は斷言出来る、日本滅びてアジャなしと孫文はいつたけれどもそれは現在

の中國の民族はひと自分の胸に應へ腹に應ずるところの言葉でなければならない、もしも日本が滅びて安閑として中國が繼續出來るといふ考へをもつならばこれこそ時代錯誤も甚だしいとはなければならない、私はかういふやうに説き進んだのであります。しかしながらなんと申しましても中國の民衆は凡てが算盤勘定であり自己主義で國際問題について解釋致しますにも必ず利己的な自分本位の形に於いて解釋するのが彼等の常套手段、傳統習慣であります。斯の如き解釋に於いては現在の大東亞戰爭の解釋は到底出來るものではありません。

私はこの本日執り行はせられました中國に於ける治外法權撤廢の問題に於きましてもこれが歴史的な畫期的な大問題であるにも拘らず中國の民衆が甚だ冷淡であるといふことに密かに憤懣の念を禁じ難いのであります。しかしして斯の如き状態に於いて大東亞が四分五裂の形に於いてこの大東亞戰爭が完遂出來るものであらうかといふことを密かに憂ふるものであります。

大東亞戰爭は決して日本と米英との戦ひではありません。大東亞十一億の民衆が凡ての運命を賭けた戦ひであります。一たびこの戦ひに於いて日本が敗者となることがあらんか再び

アジャはその尊嚴を取り戻すことは出来ないであります。再びアジャの文明興隆は出来ないのであります。堂々と西洋の文明がアジャの偶々に行き亘つてわれ／＼の精神と身は今後地球から根こそきにされ再び姿を現はすことは出来ない状態になるのであります。これは實に恐ろしい問題であります。然るが故に日本は大東亞十一億の民衆の先頭に立つてこの十一億の民心を結集しそして自ら血みごろになつて戦ひつゝある。又本日これは矢張りアジャの歴史に重大なる意義をもつ問題であります。ビルマに獨立を許されたことでもあります。ビルマの獨立を許すといふことは、これは實に重大なる問題であります。あのイギリスの桎梏の下に呻吟苦吟してゐたビルマの民衆にしかも大東亞戦争の勝敗決せざる今日、日本が出来るだけの努力をしてこの民族に獨立を與へたといふ所以のものはなんであるか、これは私がここに喋々を要しないと想ふのであります。

三

あの僅かな距りではありませんが、朝鮮海峡の距りといふものが我々の間に言葉を違へしめ我々の間に色々な習慣を違へしめ、色々な末端末尾において異つたものに致しましたけれ

ども、しかし我々が考へることは即ち諸君の考へることである、諸君の胸に信ずるところは我々の胸に信ずるところであります、世界の中に民族的な二つの間柄において、之程近い間柄があるでありますか、苦しこれを兄弟といふならば、これは兄弟といふことが出来るであります。若しこれを一體なりといふならば、本當に精神的な意味において一體なりといふことが出来るであります、我々はここに初めて大和民族を一體としたところの大日本民族の生れたことを本日のこの記念すべき日に於いて私は特にあの日台上から歩武堂々前進される青年學徒諸君の登壇の中に脈々として自分の胸中に感得したのであります（拍手）私は極めて率直大膽なことを申し上げますが、今申しましたこのことは我々兩民族の眞に一體化するといふことのために、どこまでも掘下げて行かなければならん、どこまでも慎重に考へ、而も斷乎として行はなければならんところの大事な事柄であるからであります、今やこのむすばれは本日の徴兵制に於て確立したのであります、これこそが先刻申しましたやうに、日本の軍隊は決して戦つて奪ふものに非ず、日本の軍隊は戦つて與へるところのものなり、あらゆる犠牲を一身の上に背負ひ、自分の命を無視してこれを大君の爲に捧げつくすといふ皇

軍將兵の魂の上に成立つたものが日本の軍隊である、然らば本日かたじけなくも、大御心によりまして、半島同胞諸君にこの兵役を、この光榮を許させ給ふた所以のものは、これはたしかに半島二千五百萬の同胞諸君が、我が大日本帝國のかくの如き大理想八紘一字の大精神と申しまするか日本の國が肇まつて以來かつて易らないところの、この大精神を如實に感得することが出来る、而もこれをその儘の形に於て實行する能力ありと認めさせ給つた叡慮に、もとづくものであると考へまして、畏き極みであると思ふのであります、決してこれは朝鮮の同胞諸君が銃劍術がうまいとか或は鐵砲の擔ひ方がうまいとか、さういふやうなことのために許させ給うた制度ではございません、眞に朝鮮二千五百萬同胞はこの我が肇國の大精神に参加し、この大使命を遂行するために、來たれ俱に歩まん、今や朝鮮海峡は埋め立てられた、さういふやうな有難い思召にもとづくものであるといふことを感ずるものであります、

一つの例だが某中佐の口から大本營の將校に傳へられた時には、我々は何人も聲を上げて泣いたのであります、この精神、何人が國を離れた數千里の異境に於て、命を助からうと思はぬ者がありますか、それも自分自ら抑制して、後詰になつて戰つて死んで行かうといふ決心、これが現在の日本の姿であります。(拍手)

日本は勝利と敗けるとを問はず、我々は戰ふべきに戰ひ爲すべきを爲しつゝあるといふ責任感の下に大東亞十一億の柱となつて戰ひつゝあるのが之が我々のこゝにおいでになる皆様方のみんなの現在の姿であります(拍手)さうかこの點を深く御感得になりまして、日本の武士道、日本の軍人の精神といふものを味はつて頂きたいのであります、吾軍人だけではありません、第一線の近くに參りました私が非戰闘員、これはその儘に軍人と同様であります、たとへ申しますならばガタルカナル島に米を届けるために行つてをりました小さな船の、船長二人、これは或る月夜の晩に『これから出發します』と將校に申出ました、『今から行つたところで行けば、月夜だから必ず百が百まで敵の撃滅に沈められるから思ひとまれ』と申しましたが『歸つて來ることが我々の仕事ではありません、我々は第一線に米を届けることが仕事である、しかし第一線には今日までしか米がない筈ではありませんか、第一線の兵隊さんは戰ふのが仕事である、我々は米を届けるのが仕事であるさうかやらして下さい』と無理に頼んで勇ましく出帆して行つたのであります、やはりこの二隻の船は確

實に歸つて來ないのであります、かういふやうな死生を超越して自分の運命を度外視したところ、軍國日本の眞の戦へる姿があるのであります、私は本日ここにおいてになる同胞諸君は立派な内地同胞にも決して劣るところのない軍人精神をすでにお持ちになつてゐるといふことを、あの歩武堂々たる足並と足音に感得したのであります、しかしながら諸君、軍人の道は決して我々だけではないのであります、これは本日兵役を朝鮮に施行せられたといふことは決して一部の青年達に對して徴兵制が布かれたものではありません、この光榮は二千五百萬の全朝鮮同胞の上にかけられたのであります、これは日本の國に皆兵であります、自分の息子を自分の子供を立派な軍人たらしめ、一途に御奉公の精神に副つて努力せられました結果そこに肇めて世界に冠たるところの我が日本軍隊が現はれ出るのであります、この故にこの方面に於きまして色々な地方的習慣はあるであらせう、例へば親が生きてゐる間は命を落とすとは不孝の極みであるといふ習慣があると致しまして、これをとくと日本精神の物指に當てはめて解釋致しますれば、眞の大なる孝子は眞の忠君愛國といふことに一致するのであります、忠君の極致こそ即ち大孝の極致である忠孝一本の精神に鑑みて大乗的な解決をしなければならぬのであります。

ればならぬのであります。

あなた方が眞に戦場においてになる時には本當に重大な戦局の最中の渦の中に飛込まれるのであります、あなた方の實力は日本臣民としての本當の魂はその戦場に於て遺憾なく發揮することが出来るのであります、しかし諸君、我々はこの我々の生活に於て我々の戦局に於て非常に困難なことが来ることは、この大戦争の當然の姿であり結果であると思ひますが、しかし我々の相手國であるこのアメリカに於てもすでに食ひ物に困り、また石炭に困り色々な生活に於て我々に匹敵するやうな或は我々以上に苦しい目をなめつゝあるといふこの事實に感致しますならば、最後の勝利は忍耐にある、最後の勝利は我慢する者の手にあるといふことが容易に判斷出来ると思ふのであります。

我々は朝鮮民族は眞に日本民族と一體となつて眞に大和民族、大日本民族たる現在の状態に於ては、我々は世界のあらゆる民族の上に立つものである、世界のあらゆる民族を指導する立場にある、世界のあらゆる問題は解決する力を我々の手の中に持つてゐるこの戦争の解決の暁には我々の手にある資源を開發して世界の富強國となる事が出来る、我々はビル

この精神がゆくりなく千數百年の歲月を距てまた數百里の海と山とを距て、この半島に残る限なく二千五百萬の人々の胸の中に力強く自ら自然に湧き出で、その血管にその心臓に脈を搏ち強く、その時と同じやうな感銘を與へたといふことを皆さんの眼の色に汲みとりまして私ははる／＼と東京からここに來た使命が達せられまた私のここに來ました來甲斐があつたといふことを心から喜ぶものであります（拍手）皆さん、我々は日本民族としてすでに二であります、我々に競ひ立つて大戦争に勝抜かうではありませんか（をはり）

この精神がゆくりなく千數百年の歲月を距てまた數百里の海と山とを距て、この半島に残る限なく二千五百萬の人々の胸の中に力強く自ら自然に湧き出で、その血管にその心臓に脈を搏ち強く、その時と同じやうな感銘を與へたといふことを皆さんの眼の色に汲みとりまして私ははる／＼と東京からここに來た使命が達せられまた私のここに來ました來甲斐があつたといふことを心から喜ぶものであります（拍手）皆さん、我々は日本民族としてすでに二であります、我々に競ひ立つて大戦争に勝抜かうではありませんか（をはり）

朝鮮の區別、秋毫無し

前内務大臣 水野 鍊太郎

大東亞戦争の戦局が益々苛烈を極めて居る此の時、半島の青年學徒が一齊に銃を執り國防の干城となる、特別志願兵制度が實施される様になつたことは私は關西地方旅行中に聞き非常に喜ばしく思つたのである。

この志願兵制度に従ひ、内地學生諸君と共に戦列に肩を並べる様になつた諸君、その喜びと感激に勇躍する諸君へ私は先づ大東亞戦争を齎らし來たつた本質を冷靜に考へて見よと勸告したい。そしてこの大東亞戦争、下半島學生に總動員令が下つたと云ふことは歴史の上に於て一大光輝を放ちたことを承知すべきである。要するに大東亞戦争は東洋の歴史に於て現は

れた最も大きい波動であつた、阿片戦争以來東洋を席捲した西方に對し八紘一字の聖域を奉戴した日本民族が亞細亞の諸民族を率ひこれに反抗する大史實なのである。

只、米英の勢力を東洋から驅逐するのみでなく一步進んで本國迄も撃滅せんとするものである。日清戦争は亞細亞覺醒の聖戦であり、日露戦争は西方に對する反抗の前哨戦であり、今度の大東亞戦争はその決戦である。

現代人としてひとへにこの大東亞戦争の大意義を第一に體得せなければならぬと思ふ。

この様な深遠な大東亞戦争に参加するを得るのは日本人としての榮譽の極致であり、又半島學徒として最大の光榮と言はねばならぬ、支那事變が勃發した當初、私の先輩は

『この戦争は恐らく過去の日清日露戦争で見た様な凱旋は見ることがないだらう』

と話したが、今度の戦争はこの様な意義を持つたもので、事實日本人としてはそんなに容易なことではないのである。人的のみならず國土の諸凡總力を擧げて大東亞民族の爲め戦はねばならぬこの戦争、この點を先以て半島の學生諸君も深く意識せねばならぬ、只、特別志願兵制が實施されたからこれに應募しようと云ふのでなく、大東亞戦争は聖戦だと云ふこと

を確實に認識するのが第一の問題だと思ふ。

この様な大東亞戦争に對する確乎不動なる理念を把握したとするならば、内地學徒であらうが半島學徒であらうが、この聖戰に参加し大東亞戦争の目的する處を實現するのに何等のわたかまりは無いであらう。

而して朝鮮と内地とは既に一體となつて居る點、即ち内地人でも朝鮮人でも、皆等しく帝國の施政方針に翼賛して居る點だ、しかも去年八月一日からは徵兵制が實施され、國民皆兵の途を歩む様になつたから、半島同胞亦是國家の干城として、巨歩を歩むことになつたこの事實を以てしても内鮮人の區別は秋毫もあらう筈がないのである。

特に今度の志願兵制に依り半島學生が内地の學生と共に、前線に参加し聖戰目的を達成するため挺身する様になつたことは正に内鮮一體の結實をより一層鞏固にしたもので、若き新銳の半島學兵の氣焰も大なるものありと私は確信する。

又歴史家も主張する如く朝鮮と内地は同根同祖であつて、昔より政治、經濟、文化、藝術を通じて一家を成したが、この一家の兄弟が國難に殉じようとして互に提携し忠誠を盡すことに

依り大東亞戦争は完遂になるのである。

最近朝鮮を視察し、歸郷した友人の話に依れば、今年の徵兵に對備して各自の訓練所では烈火の如き猛訓練が繼續され若い青年壯年等は米英を撃摧しようとして、誠心精勵して居ると云ふが、私は之に深く深く感激した。

この様に殉忠の赤誠を捧げる程にその素質が鍊磨されて居る以上、千載一遇のこの志願兵制にも洩れるなく蹶起することを深く信じて居り、又、内地學徒の心を心として欣喜勇躍悠久大義の生を求めることを切望する處である。

最後に一言し度いことは、元來學問は修身齊家し治國平天下せんが爲に習得するもので、銃劍を執り治國の第一線に殉する、換言するならば軍に従事するのも人生最高の修身であることを銘記して下れることを望むのである、弘道館記にも『學問と事業は阜同一』と言つたし、明治維新時代の學者は國事に奔走するのを主眼としておつたことは半島學生諸君、亦日本歴史を通じ良く知つて居ることと思ふ、半島學徒諸君よ奮起せよ、そして健闘せられよ。

大詔は炳、進軍を待つ

日韓朝鮮事務局長 倉 茂 周 藏

一 昨年五月九日に、朝鮮に徴兵制を実施するといふ公表があつたとき、内地の人たちはどんな氣持であつたか想像できる。

『朝鮮人まで兵隊になくてもいいのに、兵隊が必要なら、内地人からいくらでもとつたらよいではないか』

こんな氣持が相當強かつたことゝ思ふ。

いはゆる時期尚早論といふ類だ。

朝鮮人のお世話にまでならなくてよい。そんな苦しいときでも、そんな大きな戦争でも内

地人だけでやつて行くのだ……といふ氣持であつたことは建軍の本義といふものを知らぬ言葉だと思ふ。

もちろんこの氣持の裏には、あんな質の悪い朝鮮人を、軍隊の中に入れられてはたまつたものではないといふ偽らぬ心理が働いてゐたことも事實であつたらう。

由來、朝鮮人は、どうも内地には評判が悪い。

關東の大震災のときには、不逞鮮人などといふ恥かしい言葉が使はれたまた内地稼働の朝鮮人のなかには、随分いかゞはしいものがあつたし、あるひは、現に東京留學中の朝鮮人青年學生の中に不眞面目なものがあつたりして、こんなものが随分と朝鮮人の面を汚したものである。

だから、朝鮮人が 天皇陛下の軍隊になるといふことは、どうも感心しないことに思はれてくるのであり、そう思ふのも、無理のない話でもあつた。

しかしながら、内地人がみてゐた朝鮮人は、すべての朝鮮人ではなかつた。ほとんどの朝鮮人は、朝鮮にゐるといふことを、内地の人たちは、知つて貰はねばならない。

朝鮮が、内地の血を血とし、肉を肉とするために、そんなに努力をしてきたか、内地の手となり足となりたいたいといふことは、日韓併合以來、朝鮮の中心層の生一本のひたむきな希望であつた。もつともその間には、誤つた民族主義や、歐米崇拜主義あるひは、共產主義などを妄信する徒輩もあるにはあつたが、健全な指導者階級の意思は『日韓併合によつて、朝鮮は一擧にして偉大なる祖國を離れて朝鮮の生きる道はない』といふ堅實な理念を以て、常に大衆を指導してきた。

そして、その願望があらゆる方面に於て、一日も早く實現することを望んでゐたのである。

南總督の時代に於て、合併三十年ののち、朝鮮は、以上の如く自らの進路を自覺したのであつた。南總督が内鮮一體を統治の根本方針の一つとしたことは、内からもりあがる朝鮮のこの希望に、應へんとするものであつた。

そのためには從來の一さいを放擲して眞に朝鮮人が、日本臣民であることを前提としたのである。南總督時代は一言にして盡せば、朝鮮人の皇民化時代であつたといへるのである。

たゞ／＼この皇民化を促進したのが滿洲事變であり、支那事變であつた。

この二つの事變は、朝鮮人をして、日本國民たるの自覺をさらに／＼強めたのであつた。

内地の勇士が北支や滿洲に出征する途中、朝鮮の到るところで、しめされた、朝鮮人の好意に、びつくりし、感激したのも、このころのことである。

國防獻金や慰問袋が急速に増加し、遂には、自分らも、なぜ、直接、第一線で御奉公できないのだらうか。合併以來、朝鮮人も日本人となつたのだ。

天皇陛下は、われらの 天皇陛下である。なぜ、大君のもとに、われらも直接召されないのか。かういつた激しい希望が遂に昭和十三年二月二十二日の特別志願兵令となつて酬ひられ、半島人に對して皇國臣民としての至高至大なる國防の重責が負擔されたのである。

この第一回の志願兵募集は四百名であつたが二千九百四十六名といふ多數が志願した。

以後逐年、志願者の數は激増するばかりで、昨年の如きは、二十數萬の人たちが猛烈な競争をして、志願兵訓練所の入所を希望した状況であつた。

南總督の政治末期に於て、朝鮮人の皇民化は、一應完成せられ、客觀的狀勢の變化によつ

て、朝鮮と内地との結びつきは、もはや動かすことのできぬ程びつたりと一體化してしまつた。大陸兵站基地としての朝鮮が日本産業經濟上に占める役割はその豊富な地下資源と、豊かな勞力とに背景づけられて、大東亞共榮圈建設に重要な一翼を擔ふべき地位が明らかにされたのであり、朝鮮の大東亞的使命が、こゝに確然と基礎を置いたのである。

かうした狀勢の下にあつて、大東亞戰爭によつて、朝鮮人の心の底になほ残つてゐた米英的思想、民族共產主義は、あつさり清算されてしまつた。皇國の一環としての朝鮮の再發足が、物、心兩面に於てなされたのである。

志願兵制度によつて僅かにみたまされてゐた、愛國の至誠は、大東亞戰爭となつて、奔流の如く、朝鮮人青年の心をゆさぶり、その激しき願望は、遂に徴兵制實施となつて現はれてきたのである。

大東亞戰爭のさなかにこの徴兵制である。日本もいよく人的資源に困つたとか、植民地軍を編成しなければならなくなつたとか、米英のデマをしり目に、御民われの感激が今も朝鮮を掩ふのである。

もし兵力に困つての徴兵制であるならば、なぜ二十數萬を數へる志願兵を全部採用しないのか。朝鮮は、英國に於けるカナダやインドの如き植民地であるのだらうか。こんな愚かなことを私は説かうとは思はない。

實に帝國建軍の本義を考へれば明白なことである。合併以來一視同仁のありがたき聖慮に基く今回の徴兵制によつて、大東亞戰下、大東亞共榮圈確立の推進力として第一線參加の榮譽が與へられたのである。

朝鮮の最近十年間に於ける、内地への一體化の物凄く速度は、内地の人たちがあまり知らなかつた。従つて内地の大半の人たちは、依然、朝鮮同胞を「ヨボ」と侮蔑的に呼んでゐた。支那人を「チャンコロ」と呼ぶの類である。この誤つた對朝鮮觀と、それからもう一つは、内地に於ける朝鮮同胞の遺憾ながら不眞面目な態度とが、徴兵制なほ早しとする根本理由であつたと思ふ。

この間、大本營から派遣された新聞記者團十二三名が、朝鮮の徴兵制はどんな様子だらうかと見學にきた。そしてみな、びつくりした。優秀なる内地一流紙の一流記者諸君さへも、

最近の朝鮮の實情を掴んでゐなかつたのである。

『これはさだとは思はなかつた』

彼らの視察の結論はかうだつた。他の内地の人たちの對朝鮮認識、推して知るべしであると思ふ。

徴兵制がしかれたのは、決して早すぎたのでもなく、また決して内地の人たちが心配するものでないといふことについては、この著書ではかの人たちが、述べるだらうから、私は觸れないことにするが、この聖業に朝鮮同胞もあげて參加するのであるといふ嚴然たる現實の姿に、日本自體が、大きく生長し、すでに十年前いな一年前の尺度でもつて、大東亞を眺めることの不適當なる點だけを内地の偏狹なる人たちに指摘したい。

このごろ、朝鮮では、よくタンクとか、飛行機の玩具が賣れる。以前にはなかつたことである。朝鮮の幼童たちが、内地人の少年たちと一緒に、兵隊ごっこをして遊ぶ。好人は兵とならず、兵を蔑視した朝鮮の大きな變化である。

『お前は日本人か』

といふことが、口論の中には必ずでくくる。日本人といふことの誇りを、今日ほど、朝鮮人が持つてゐることは今までないことである。内鮮一體は、完全にできあがつた。内地の朝鮮になつてしまつた。朝鮮人は、今日では、九州人であり、東北人であり、關西人であるが如く、日本の朝鮮人である。

私は、朝鮮人を愛する。職務がらいろいろの朝鮮人と接觸してゐる。上流階級の人、労働者も、知つてゐる。そして今では、朝鮮人の性質を大體、のみこんでしまつた。その結論は、朝鮮人は愛すべきであるといふことになつた。

昨年五月九日、徴兵制の實施發表以來、まる二年間、私は朝鮮人の在り方をじつと視てきた。

彼らが、直接、壯丁を送りだす家庭は、もとよりさうでない家庭も、實に過去五年にも、十年にも匹敵する充實した二年を過したことを私は、私の目でみた。いたいけな學童から、年老ひた老婦人まで、みな一生懸命である。何に一生懸命になつてゐるのか。立派な日本人にならうと一生懸命なのである。日本人になるには、まつ國語を知らねばならない。一旦か

ういふことに決定すると、皆實に熱心に國語を學ぶ二千五百萬朝鮮人のうち、昨年春ころまでは國語を理解するもの僅か一五%といふ情けない状態であつた。それが一旦徴兵制實施と決定してからは、壯丁はもちろんのこと、六十、七十のお爺さんお婆さんまでがいろはの勉強である。

志願兵にぜひ採用して頂きたいといふ血書が私の手もとにだけでも何十通來たかわからな

い。

金屬類を供出せよといへば、ごんごん持參してくる。

朝鮮人は、自分たちが戦つてゐるのだといふ氣持ちにはなつてきてゐる。

極めて素直な、よい性質を持つてゐる指導してさへゆけば、ごんごんにでも動くたちである。

どうか内地の人たちも、今までの對朝鮮人觀を改めて、新しい目でじつとみてやつて頂きたいものと思ふ。朝鮮人のよい點がきつと發見できると思ふ。

本年からは、内地の兵營にも、最初の朝鮮人徴兵が入る。従つて内地の先輩戰友や、地方

の方々も直接あるひは、間接にこれらの新らしい弟たちと接觸されることと思ふ。ここで私は親心からみなさんに朝鮮人の性質をお傳へしておきたいと思ふ。それは、朝鮮人壯丁の一番悪いと思はれる點であるが、どうか次の點をよく指導して是正してやつて頂きたいのである。

- 1 忍耐力が足りないこと
- 2 表裏心があり嘘をいふこと
- 3 進んで難局に當る念が乏しいこと
- 4 責任觀念が足りないこと

などは、著るしい彼らの缺點であると思ふ。しかして、これは、風俗習慣の違いからくるものであつて、訓練次第では是正してゆけるものである。もちろんこれからのち、入營するまでの間に、この點は軍と總督府で適當に處置されてゐるが、風俗習慣の違い、もつと根本的には、三千年來に國體に育まれた内地人と、常に生活を脅がされてきた朝鮮人との違いから、かなり自につくと思ふ。それに言葉の無理解、およびそれからくる感情のもつれなども

きには起るかもしれない。そのときには、遠慮なく『お前はごごくが悪いから改めよ』
 はつきり指して匡正して頂きたいのである。内地人同志なら話さなくとも、自然と反省す
 る機会を待つといふ一般的な習慣があるが、朝鮮同胞に對しては、この方法はまだいけな
 い。あくまでも、悪い所は、悪いとはつきり指摘して頂くのが一番よいのである。彼らも、
 これによつて、ほんとうに日本人になれた喜びに浸つてゐるのだし、このちども内地の誰
 にも敗けないよい日本人にならうと努力をつづけてゆくに違ひないのだから、かうした忠言
 には、極めて従順であることを保證しておく。

いろいろ思ひ出すことをならべてみたが何としても、朝鮮に徴兵制が施行されたといふこ
 とは、有難き聖慮の極みであり、同時に朝鮮の喜びであり、日本の喜びであるといふ思
 ふのである。(陸軍少將、前朝鮮軍務部長)

文化と血の繋りへ

日本文學報國會 河上徹太郎

私は具體的に半島文化を論ずるには半島の過去と現在に對する智識が過りに足りないが、
 敢て現在の光輝ある聖戰第三年を迎へ一言所感を述べる機会を默過し難くこの筆を執つたの
 である。何故ならば我等が擔當する文化戰はその一翼となす今次の戰爭が斯の如く赫々たる
 戰果を擧げつゝある此際、當然に半島にある文化人も又責任と光榮と今後一層の努力に對す
 る期待を共に荷ふでおるからである。

私は文學者であるから、己の眸に映つた以外の一切の抽象的空辭は弄しないことにする。
 而して半島が現に我國に貢獻して居る最大のものは北鮮の工業力であるが、この様に一國の

工業力の幾パーセントを占むる生産額を支配する生産現象は決して偶然に地下資源とか工業上の諸條件の合致より出来たものではない、或は原因はそう云ふ様な形而下的としても結果は即ち一國文化の問題として現はれて来るのである。手近な例を擧ぐれば此等重工業に従事する優秀な労働者の文化的、厚生施設が如何なるものであつたかを考ふれば直ちに理解するを得る、それは決して二義的な文化的粉飾の問題でなしに、それが即ち半島の文化性を支配しその象徴となり、その實體に迄融化するからである、それが即ち例を擧ぐるならば資源の豊富な過去の英米植民地の状態と根本的に相違する點にして、彼等よりは顯著に遊離した文化の不自然な状態が発見されるのみである、斯の如き比較は云ふに及ばすここに於て、余が語らんとすることは例を擧ぐれば今度の徴兵制實施の如きは最も高度の文化的向上の指標と見て、この様な現象を北鮮重工業の急激なる發達と連結して見んとするものである。

この二つの顯著なる現象は直接因果關係はないであらうが、それが現在の半島に於て強い必然性を持ち發生して居ると云ふ事實こそ現在の半島文化の具體的な象徴なのである。

以上の二つの事實を私が分離して考ふるを得ない例を卑近な處から尋ねて見るならば、最

近の半島文化の飛躍的向上を物語る最適な標本として、私は一昨年と昨年東京に開かれた大東亞文藝者大會席上、朝鮮代表の毅然たる態度と確乎たる發言の如く適合するはないと思ふ。私は率直に云ふならば、この大會の外地と外國代表中に於て朝鮮代表は最も信すべく信頼したい印象を受けた。香山光郎、俞鎮午、金村龍濟、崔載瑞其他諸氏の發言は熱心と決意を持ち態度は沈痛なる人的完成を見せ、過去に於て非凡な苦闘と苦惱を経た上に到達したる信念の明朗性と強さが良く現はれて居つた。恐らくそこに現在の半島文化の光榮ある現實がある如く思はれた。

斯の様に信すべき同胞を我國民が持つて居ると云ふことはとれ程喜ばしく又は心強きことであるか分らぬものである。

私は彼等の作品が、敢て日本文壇一流の完成を見せて居るとは云はぬ、だが文學の動向は完成された作品よりも完成された文學者の出現に支配されるもので、特に今日の如く轉換期に既成の一流程力なきは無いものであるからである。私は文學の様な事象が他の文化部門にも起つて居るものと信する者にして、自己の肉體たとも云べき言語と云ふものを表現手段

しする文學が最も端的なる轉進を要するものにして確信を持つて之を敢て代表的な例として擧ぐるものである。

半島文化の現在と之に基く將來は實に洋々たるものにして、只、内地と異なる點があるとするならば私は之を半世紀遅れて、明治維新が到來したのと考へれば好いと思ふ。

そこに半島文化人の若さと潤達なる世界觀と自由なる向上と純一なる信仰が生れるであらう。

それは事實に於て諸兄が經驗して居らるゝ處た、諸兄は明治と昭和の二つの維新を一代に同時に迎へて居るに對し我等は父祖の代と二分して方つて居たと云ふ距離があつたと言へるのである。

大體に於て傳統なるものは、それが生きて居る限不可思議な生物であつて、恰も水面に影る樹影の如くいつれの瞬間に在つてもその點を規準として、虚實相稱を爲して居り、實が濃厚であれば虚も濃厚であり、實が繁茂すれば虚も繁茂するのである、而してこの場合實と云ふのは現在であり、虚と云ふのは過去を語るものである、(この點は一般の傳統文化主義者

は反對に考へておるからその論が退嬰的になるのである)傳統と云ふものは、諸兄の中に流れつゝある血を指すものである、之れを咲かせることに依り諸兄の父祖の夢をそこに實現さすを得るのである。

私が知る限り慶州石窟庵の彫像、李王職博物館の白磁と繪畫、高麗李朝初期時代の歌謠曲の旋律は大東亞のいつれの地域に於ても見出すことの出来ぬ美しく健全なる創造物であるがその精妙なる圖形を過去の虚像として、影を映す現在と、將來の健氣な文化の實體こそは正に諸兄がこれから總蹶起して着手せんとする大事業の對象であらう。(丁)

朝鮮統治と徴兵制

前學務局長 鹽原時三郎

國家が新たにその國家に加入した人民を統治し、これを指導するには色々の方法がある。或は徹底的にその本國の文化、風俗、思想に化せしめて渾然一體のものとする政策、反對にその郷土色を尊重して大局からこれを指導するのみでその他の事は自由放任にして置くやり方、また米英の如き新附の人民を徹底的に弱體化し愚かものにして出来るだけ搾取を續けるといふ方法等その他いろいろ擧げる事が出来やうが、我が皇國日本は常に新附の人民に對してはその皇道精神に基いてあたかくこれを包容し、苦しみも楽しみもともに分けつゝ進歩發達するうちに、その間に何等區別を認める事が出来ないやうに渾然たる融和を遂げ

るといふのが我が皇國の從來の方法であつた。これ等は三千年の日本歴史を見れば幾多の例を擧げ得るがこれをこゝで一々述べる事を欲しない。

朝鮮統治に就いても以上述べたと同様であつて、併合以來各總督とも各々多少特色を發揮して居つたけれども、その間に半島民衆を陛下の赤子として育み指導し、完全なる皇國臣民となるやう推し進めて來た事は間違ひなく、一點の疑ひないところである。この方法に就いても三十年間の統治の間、色々濃淡強弱の政策は勿論あつたのであるが、その主旨に於ては一貫してゐたのである。近年こゝ十年の間この指導方針が著しく濃厚になつた事は争はれぬ傾向であらう。これによつて朝鮮統治が大いに飛躍した事もまだ事實である。殊に南大將が總督の任に當られるや、朝鮮の民心指導を特に重要視してその五ヶ年間の統治に強力なる施策を加へ、又現在の總督小磯大將はこの後を引きつがれて更に一層これを強化、徹底し畫龍點睛せんとして居られる事は、我々遠くに離れて居る者から見ても極めて明らかなことで、國家のため慶賀に堪えぬところである。

かゝる統治の傾向から見て、結論ともいふべき、一つの大きな、しかも當然起つて來るべ

事柄は民衆の指導が一定の段階に達した機會に於て兵役を實現するといふ事になければならぬ。

この事については昭和十三年朝鮮に於ては先づ第一に志願兵といふ形式に於てその前途を祝福されたのである。當時この制度が發表されるや或る者は日本がいよく兵力に不足を來したので、半島人をも兵隊に引き出す、なご重慶あたりの悪宣傳をそのまゝ叫び廻つた者もないではなく、また内地方面に於ては斯の如き政策が行き過ぎであり、將來の統治に暗影を投ずるであらう。と憂へる向きもあつた様に思ふのであるが、これ等は全く意味のない、無理解な考へ方なのである。抑々日本帝國が朝鮮にこの志願兵制度を採つたのは、決して兵力の不足を補ふためのものでなく、況んや朝鮮民衆のこれに對する要求の熾烈さに押されたのでもない。即ち劍をとり統を擔つて皇國の防衛に任ずるの光榮は純正無垢なる皇國民にしてはじめて許されるところの榮譽である。苟くもこの純一無雜なる日本人に缺くる處のあるものは如何に日本が兵力に不足を來す場合が假りにあつたとしても、この榮譽は與へられるものではない、といふ事は三千年來の日本國民の固い信念である。この點に鑑み今日假令少

數のものであるにしても、朝鮮民衆に劍をとつて皇國を護れと命ぜられる所以のものは、彼等が既に純粹なる日本人としての資格があることを認められた結果に外ならない。

従つて、若し甚だ當らない言葉ではあるけれど、權利義務といふ言葉を使ひたいならば我々は兵役の義務といふよりも『兵役の權利』といふ言葉の方が、この考へ方を現はすにはむしろ適切ではないかと思ふのであり、志願兵であるか、徴兵であるかといふことは必ずしも根本的には相違を現はすものではないと思ふ。たゞその兵になる者を選定する方法の差違であつて、少數の場合は志願もよろしく、また時によつては人民の意志如何に拘はらず、政府の撰ぶべきところによつて兵隊になる者を定める、といふつまり徴兵の如き方法によるのもよいだらう……。

この志願兵制度がいよく實現するまでにはいろいろな経緯があつたのは勿論である、中央方面に於ても種々な角度、觀點から論議され、研究され次第々々に各方面に理解され遂には國家全體の意志として、この大きな制度が決定された譯であるが、この半島民衆に兵役を與へるといふ點に畫期的な制度が今後健全に維持されるためにはその前提に於て教育の普及

とその徹底とが朝鮮なるが故に殊に必要である事は論するまでもない事であつて、朝鮮總督府に於ては先づ第一に教育の徹底的改革を実施した。この教育改革は制度、形式の改革も勿論あつたが、最も重要な事は教育の精神を百八十度轉換せしめたところにあるものと信じてゐる。從來の自由主義的教育思想を一擲し、また就學希望者が多いから學校でも建てゝやれ、といふ様な墮落的態度を打ち捨て、この教育方針によつて半島民衆の徹底的皇國臣民化、換言すれば、朝鮮民衆が全部國軍の兵に適する様に思想も教養も……それは丁度鐵をルツボの中に入れて仕上げる様に實施して行くのがその眼目である。従つてこの様に目的が明瞭でも、その施策が微弱であり手の及ばず範圍が狭くては、その目的を達し得ないものであるから、一方に於て教育機關の大擴張を計り、近く實施されるであらう『義務教育』制度の基礎を作り上げ、廣汎な範圍に於て、徹底強固なる日本化教育を實施したのであるが、爾來今日まで數年間終始微動だもせず、この方針を推し進めて來た事は朝鮮が如何に猛烈な勢ひで皇國化といふ事に進んでゐるかの證據だと思ふ。

自分はその當時朝鮮に於ては教育が即ち政治だといつた事を覚えてゐるが、この民衆を教

導き皇國一員たるに相應しいものに進めて行く事が教育の目的であり、また同時に統治の目的であつた事と信じてゐるのである。

かゝる空氣と經過の下に、志願兵制度を一段と發展せしめ、いよく今年から徴兵制度が實施される事を知り當時この問題に關係した自分としては非常に嬉しく、洵に有難く思つてゐるのである。そこで、半島人は一體兵役といふ事に就いてどう考へてゐるかといふ事が内地の各方面でも色々取沙汰されてゐる處であらうと思ふが、自分の見る處では半島人はこれではじめて自分達も日本のお國を直接守る事を許される事になつた。はじめて自分達にも銃をとる事が許された。はじめて自分達は一人前のものになつた。こゝにいふ感じが濃厚であつて、決して兵になつて弾の下を潜る事を恐れたり、或ひは政府から強制的に引つ張り出される、なごと思つたり、乃至は徴兵によつてやがて參政權の如きも獲得するといふ如き野心をこれにからめて考へる必要は先づない。勿論多くの民衆の事であり、かつては悪い思想の者もあり、いろいろのデマや種々なる考へを持つた者も絶無とは言ひ兼ねるが、今日の朝鮮の大部分の民衆は決してそんなものでない。もつと純粹で素朴なもので、我等は如何にして完

全なる日本人たり得るかを念願してゐる海に受すべき民衆なのである。従つてこの問題に關しては今後とも内地側に於ても眞つ直ぐに考へ、疑はずに健かに育てあげる事が必要だと思ふし、また當然さういふ風になることと思ふ。

この兵役の問題こそは實に朝鮮統治に於ける峠を越したともいふべき、重要關門の一つを通過したものであつて、徴兵制度の實施によつて今後の朝鮮統治の前途は非常に明るく、力強いものとなる事は必然で期待される處極めて大なるものがあると信じてゐる。

(朝鮮駐在員訓練所長)

朝鮮の詩人を迎へるの辭

日本文學報國會 佐藤 春夫

アジアの命と誇とはその詩心の深さにある。東洋古來の詩心の前には歐洲の近代詩の如きは正に兒戯に類するといふ位の尊大な自負をアジアのすべての詩人達に年久しく要望してゐた自分は、詩に關する限りではギリシヤに優るとも劣ることのないアジアが、無自覺な一切の心酔の果に自らの詩心をさへ捨て、惜しまぬのを苦々しく慨はしい事としてゐる。

アジアの詩心は、しかしその生活と一緒に先づ中央アジアから、さうして支那大陸から、遂には我々の祖國からさへ順次にその傳統の姿を沒せんとし、今やこれを歴史以外のどこに求めようと心細く思はれた今日、端なくも、歐米文物の直接な侵略からいみじくも免れ得た

アジアの「開化」半島に、純粹なアジアの詩心が浮び、廢墟の如く残存してゐるのを見た事は自分にとつて近來殆ど無比の快事であつた。『乳色の雲』は彼自身半島の一時家の譯出した朝鮮の詞集である。作家凡そ四十、作品約百篇から成り大半は抒情詩である。千紫萬紅みなとりごりの趣を示しながら、おしなべて一つの似通ふ節のあるのがおもしろく有難い。こゝに一つの野の同じ時に咲き出たものとして自づからの約束を見るからである。この花東のなかに豊かに華やかな、樂しげな色合を見出たさうとする人は失望するであらう。しかしながら、さゝやかにつゞましく切々たるあはれは、さながらに霜にうつろふ一莖の野花の如く、またその根もとに枯れ聲を立てたきりぎりすの歌とも聞きなされる。そのボードレーが近代の憂愁に似て自づから非に、ハイネがうたのかなしみにあらず、寧ろ、アジア古來の暗恨幽愁の、我等が幽玄の趣に相通するものを見るであらう。

彼等が正に廢滅せんとする言葉で以てその民の最後の歌をうたひ上げたといふやうな特別な事情が、かくも我々に訴へるところが深いのであらうか、否か。もろともにあはれと思へ山ざくら花より外に知る人もなきこれ等の歌ひ手の詩情のいぢらしさを心しづかに味はつて

見ようではないか。

由來、朝鮮の民の美に對する愛のこまやかさと、その美が日常の生活と甚だ緊密に結びついてゐるのは、心ある一部の工藝美術鑑賞家によつて既に注意されたところである。我等もこの注意によつて久しくこの民敬愛すべく、親しむべしと感じた。その故に先年北京に赴くに當り、わざ／＼迂路を半島に求めて彼地を見た。あの荒涼たる山河に漂ふ一脈の雅致——思ふにこの集の編者はこれをなつかしみ『乳色の雲』と名づけたのであらうか——を見るに及んで、この自然のなかにものさびしく孕まれたこの土の民が美の由來するところを自分は深く悟つた。

思ふに高麗末期以後李朝五百年を通じて前後數紀の秕政は、本來必ずしも無能でなかつたこの民の多くを老狡な無能者たらしめながらも、勇敢なものを暗殺者に仕立て、しかもその俊敏純真なものをして詩人として生きる妙法を教へる事を忘れなかつた。既に金笠の如き優秀奔放な生活の詩人と、幾多無名の民謠詩人とが存して自分の言の有力な證人となつてくれる。政治に失敗した民が詩歌の領土に於て成功したのも亦暗示の多いのを覺える。

詩の精華を數世紀間蓄積したこの詩歌の温床が、一朝日輪を得て百花一時に花咲くの盛
觀を呈したの東洋の詩心のために極りなき祝福であつた。まことに詩神は乞食に身をやつ
した王の如く、不可思議な場所に眠ることを愛したものである。

又譬へばこれは清冽な地下水である。それが日本海を潜つて今富嶽の此方に湧出し
た。正に奇蹟である。アジアの詩心をこの清泉の一掬によつて復活させようとする深い天意
であるかも知れない。朝鮮がかういふ方法で我々に酬いようとは！

大陸の文化、中古、半島を経てわが國に入つたのは單に地理的事情からばかりではなく、
大陸から直接では終に受け容れ難いものさへ、半島の雅致に消化されて後、我等が祖先に快
適なものとなり得たのではなからうか。半島の風物は、さうして詩情、自分にとつてそぞろ
にもなつかしいものを多く覺えさせた。

自分は内地の詩人たちが、純朴素雅にしてしかも幽趣の漂渺なる半島の詩人たちのために
座席をしつらへるに吝かでないのみか、詩法に、また生活に、更に教へられるところの多か
らゝ事を希望するものである。

語を最後に敬愛する半島の詩人等に寄せよう。卿等の廢滅に歸せんとする古の言葉を卿等
が最も深く愛しようと思ふならば、宜しく敢然として日常の生活から拋棄し去つて纔に詩の
噴火口からこれを輝やかな光とともに吐くに如くはあるまい。若し夫れたゞ一人のホーム
ー、一人のゲート、一人の杜甫、一人の人麻呂が卿等の間に生れさへすれば、その詩篇のた
めに卿等の失はるべき言葉も亦、世界に研究せられて千古に生きるを妨げないであらう。

『徴兵朝鮮』を輝かせよ

海軍大將 高橋 三吉

一

私は只今紹介を受けた高橋である。今此處で半島の青少年學徒諸君の元氣潑刺たる姿に接することを嬉しく思ふ。又諸君の前に一言私の所懐を披瀝することが出來たのを幸福に思ふ。諸君も御承知の通り、大東亞戦争は、實に雄大にして凄絶な段階に入つた。茲に日獨伊樞軸三ヶ國民は一塊となつて、米英撃滅に益々總力を傾けてゐる。歐羅巴に於ては獨伊對米英蘇戰が激烈を極めてゐるがこれ又決して容易く解決さるべき戦争ではない。太平洋と東洋に於ても之と同じ目的の下に、大東亞戦争が遂行されてゐる。大東亞戦争は開戦以來御蔭威に

依り、又忠勇無雙なる前線將兵の勇戰奮闘に依つて、赫々たる戰果を収めてゐる。

一昨年十二月八日、我が海軍航空隊と特殊潜航艇はハワイ眞珠灣を襲撃して米國の太平洋主力艦隊を潰滅し、更にマライ沖に於ては、英國が『沈まざる艦艇』と誇つた太平洋主力艦を葬つたのである。その後續いて、我が海軍はジャワ沖海戰に於て米英蘭の聯合艦隊を撃滅し、一方我が陸軍の進撃はマライ、フィリッピン、ジャワ等を迅速に占領して米英蘭の東亞勢力を驅逐してしまつた。茲に敗殘の敵の殘存兵達は太平洋の孤兒濠洲に逃げ去つた。我が海軍は更に印度洋に入り、英國軍をうち破り、印度洋の半分以上を制壓するや、濠洲は英國と絶縁せざるを得ないやうになつた。濠洲は英國の屬領であるから兵器彈藥は總て英國より持つて來るし、英國は濠洲から羊毛と棉花と肉類等を持つて行かねばならなかつた。さうであつたが、この様に絶縁されては濠洲は米國に對して援助を求めざるを得なくなつた。これと同時に米國自身亦濠洲から一步たりとも退くものなら戰略上困境に陥ちる現狀に立至つた。米國は、兵力を濠洲に集中して南からの日本への反攻策を試みんとしてあらゆる手段を弄してゐる。實に濠洲は、米國に取つては生命そのもののやうな重要な存在である。軍事上

しかるのみならず、平時に於ても英國から受ける最も大きな遺産として野心を懐いてゐたのが濠洲である。そこを我が皇軍の作戦により米國と濠洲とを連絡する道はサンフランシスコからハワイを通り南西太平洋を経て濠洲に至る道以外にはないやうになつた。その通路の中段にソロモン群島がある。我が海軍は、少くない兵力を持つて、群島の中にあるガタルカナル島に上陸したのである此處で起つた戦争がかの第一次ソロモン海戦である。米國は、この戦に莫大な損害を被つたが、たうとう多くの軍隊を上陸させた。我が海軍もガタルカナル島に上陸して強大な敵とあらゆる傳染病と半年以上も不順な氣候とを斥けて、馴れない地理の障礙にも拘らず血戦を繼げた。諸君も御承知の通り、今年正月の南太平洋作戦が圓滿にその目的を達したので我が軍は他處に轉進したと大本營から發表された。我等は如何に南太平洋の作戦が難戦であつたか充分に想像出来よう。

或る人は言つてゐる。『我等がガタルカナル島だけ取れば戦争は終る。』といふ聲もあつた。又或る人は『あの島を取ることが出来なければ日米戦争の將來が危ない。』といふ聲も聞えた。併しこんな言葉はガタルカナルといふ島に餘りにも大きな期待を持つことに原因す

る間違つた考へといはねばならぬ。私はこの席ではつきり言つて置くが、ガタルカナル島を占領出来なくとも、そのために我が南太平洋作戦に何等くるひはない。

二

山本元帥が去る四月、南方で飛行機に乗り作戦を指揮中、壯烈な戦死を遂げたと發表された。この悲しい報道を受けた一億國民は、限りなく悲しみ、復讐心に齒をくひ絞つた。併し、我が海軍には、第二第三の山本元帥が後をついで出て来ることを、私はあの時國民に言つて置いた。我等は今日新しく立つた古賀司令長官を堅く信じ、前線將兵の作戦に少しも支障がないこと飽く迄信ぜねばならぬ。山本元帥は確かに頭がよく、飛行機に對する知識と技術が卓越であり、航空教育と航空行政に非凡な手腕と精神とを持つ、偉大な人物であつた。こんな聖將を失くしたといふことは、大東亞戦争のために、日本のために、ひいては世界の幸福のために誠に惜しい事である。あの昭和十六年十二月八日、ハワイ眞珠灣を強襲した作戦は、元帥自ら發案して敢行した作戦であつた。その時、私は山本でなければそんな作戦をなし得る人は稀であらうと感嘆のあまり、長官に祝辭を送つたところが長官から鄭重な回答

が來た。――海軍を攻撃した勇士達殆ど海軍兵學校一年程度の二十歳内外の青少年將兵でありました。その計畫の周到なものと、實施が大膽なものには、實に私としても頭が下ります。私は今迄部下を叱る時は近頃の若者はなつてゐないと言つて來たが、今日からは、近頃の若者はといふ言葉は使はないつもりです』といふ内容の返答であつた。之で推して見ても、長官が如何に部下を可愛いがつたか、その心情を測り知ることが出来る。

實に山本元帥の戦死は、惜しく残念なものに外ならぬが、我等が徒らに悲しむとか淋しがるのは、大國民としての態度ではない。我々は故元帥の精神を受け嗣いで、復讐して己まぬ決意を持つて奮起すべきである。第一線の將兵は山本長官の遺骨を内地に送る時、特別に用のない人以外は、全將兵皆不斷と變りなく、訓練をそのまゝ續けたといふことである。

山本元帥の英靈も、仕事を休んで見送て貰ふよりは、訓練にいそしむことを如何に喜んだことだらうか。

先程私は諸君に第二、第三の山本が我が海軍に居ると言つた。之は只安心させるためのものではな。私は茲に確實な論據があるのを述べんとする。その論據を述べようと思へば歴

史を語らねばならぬ。

三

第一次世界大戦の時、英國は、我が國の海軍に援助を求めて來た。そこで我が海軍は太平洋を守り、印度洋を護つた。英國は印度洋に五隻の驅逐艦を残したのみ、自分の本土を守るに全力を集中した。それでも足らぬので、我が國に地中海迄守つてくれと頼んで來た。我が海軍は更に地中海に出て活躍し威力を示した。この第一次大戦に於て、英國が獨逸を徹底的にやつつけることが出來た原因は色々あらうが、我が海軍の活躍が最も大きかつたのは隠せぬ事實である。

それにも拘はらず、戦争が濟んだ後、米國はワシントン會議に於て、日本の海軍力を自分の六割に縮めてやらうといふ、蟲のいい軍縮案を提議した。英國は日英同盟なんぞはもう要らぬと、弊履の如く投げ捨てた。日本國民は勿論憤慨した。併し當時の國內情勢としてはどうすることも出來なかつた。大正年代の末期に、東京灣と九州灣とに於て、軍縮條約に依り、我等は涙を吞み、齒をくみ絞りながら、第二流主力艦を我等の手で撃沈せしめたのであ

船東は船を愛する。そして船を大切にする。海軍は軍艦を海に浮ぶ城と恃み、之を以て大平洋の國家を守り、又この軍艦を家とも考へてゐる。浮ぶ城であり我が家である軍艦を、自分の手で撃ち沈める時、如何に米英を憎んだことだらう。實にその時から大東亞戦争は芽生えてゐたのである。私は先般山本元帥の葬儀に、棺側者として、葬列に従つてゐたが、その時數十萬の群衆が泣いてゐるのを見た。そして敵愾心に齒を軋り、胸の鼓動を抑へ切れぬのを見た。この葬列を見てゐない人でも、日本國民なら敵愾心に拳を唸らせたであらう。私は大正の末期に起きたあの慘劇の憤慨を今度も同じく覺えた。六對十——寡を以て衆にうち勝つことは數學上では絶対に不可能である。この不可能を可能ならしめた力は何であつたか。ワシントン軍縮會議から歸つた加藤大將は、數日後東郷元帥を訪問して軍縮會議の忿怒を報告した。我が海軍力が六對十に制限された話を聞き終つた東郷元帥は『數字には制限があるけれども訓練には制限がないだらう』といはれた。この『訓練無制限』といふ精神は、我が海軍の信念となつた。數學的に不可能なのを可能ならしめたのは『月月火水木金金』の猛烈な訓練の力であつた。その間大きな損害も二三であつたが、目的達成のためには萬難を克服して訓練を繰返した。

私はこの『訓練無制限』といふ精神を、『必勝の信念』と呼んでゐる。この『必勝の信念』の上に、我が海軍は確立されて居り。米英の前におし進んでゐる。この訓練が繰返され、必勝の信念が固まつて行く中に、聯合艦隊司令長官の後には、又新しい聯合艦隊司令長官が養成された。昭和二年の長官の後には、昭和三年の長官があり、昭和三年の長官の後には、昭和四年の長官が出た。このやうに後を嗣いで出るやうに我等の長官は養成されてゐるのである。古賀長官が若し長官の地位を退くやうになつた時には、次に出て行くべき長官は、既に決定されてゐる。第三、第四、第五の山本は幾らでも出て来る。學徒諸君の中からもその何番目かの山本長官が出るか知らない戦争は第一線將兵のみでは到底勝てるものではない。一億國民が『必勝の信念』を固くして、初めて、この戦争は勝利を得る戦争である。しからば、一億國民が『必勝の信念』を持つには、どうすればよいか。それは簡單である。『私』といふものを忘れて、自分の受持つ仕事を死守することである。

例にあげて言へば、軍艦に乗組んでゐる將兵は、皆各々の受持つ地位がある。平時でも戦時でも自分の受持つ地位は、死を以て守らねばならぬ。明治四十三年四月十五日、瀬戸内海

に族で、訓練中沈没した第六潜艦の佐久間大尉以下の諸將兵を見ても如何に、その引受けた部署を死守したか分る、自分が受持つ部署を、海軍では戦闘配置といふ。大東亞戦争に於て第一線將兵は大砲を打つ砲手といふなら、銃後國民は甲板上で戦闘作業をする配置にあるやうなものである。學徒諸君は學校で學業にこそしんで、心身を鍊磨するのが戦闘配置である。工場の職工は旋盤の前で機械を廻すのが戦闘配置である。農村の農夫は食糧増産に努めるのが戦闘配置である。このやうに國內の戦闘も、軍艦のそれと同じである。我々はこの戦闘配置を、死を以て守らねばこの戦争を勝ち抜き得ない。この『戦闘配置』を死守するといふ精神と實行とが『必勝の信念』であり『必勝の道』である。

四

最後に青年學徒諸君に一言。我が帝國海軍の覺悟を話して置かうと思ふ。私はこの間、霞ヶ浦航空隊を視察に行つたことがある。視察が済んで、航空隊司令官から聞いた話である。數ヶ月の訓練が終つて、卒業式を擧げ、その卒業式を終へ、その夜格納庫に於て、明日は第一線に飛び立つといふ壯行會を催すのである。その時皆不斷と變りなく愉快に遊んでゐ

る中に、只一人青年少尉が、淋しい表情をして、一隅に坐つてゐる。それで、壯行會が済んだ後、司令官が自分の部屋へ、その青年少尉を呼んで、『何故、愉快な壯行會に、そのやうに淋しがつてゐるのか。體の具合でも悪いのか。』と理由を訊いた。青年少尉ははつきりした聲で答へた。『私は數ヶ月の間熱心に訓練を受け、卒業後には、アメリカの飛行機を叩き壊すことばかり念願してゐたのですが、今日卒業式の時、偵察機に乗れといふ命令を受けました。偵察機に乗つては敵機を撃ち破ることは出来ません。残念であります』と言つた。司令官は青年少尉の心情を計つて、慰める言葉で、『お前は木だ年が若いから、偵察機でも何でも、経験を積んで置けば、お前が今後、航空隊司令官などの重要な地位に立つ時、役立つぢやないか』と言つた。この言葉を聞いた青年少尉、聲を高くして、『私は司令官の言はれる言葉の意味を解し得ません。司令官は私が、何時までも生きてゐると思ひますか。』と言つた。司令官はその言葉に、頭が下つたと私に言はれた。海軍將兵の覺悟はこの通りである。皆明日か明後日か再後日は、必ず米國飛行機を撃滅することを待つてゐる。従つて今日死ぬか、明日死ぬか、明後日死ぬか、それは問題ぢやない。『將來の立派な地位』

は念頭にも無い。立身出世とか、一身の榮華功名は全然知らぬ。只、敵の飛行機を撃ち落すのが彼の願である。つまり、盡忠報國の赤誠の前に、生死を超越してゐる。その青年少尉の心はとりも直さず、學徒諸君の心である。勉強して、高位高官にでもなろうといふ夢を懷く時代は過ぎ去つた。その體を持つて、その日その日自分の『戦闘配置』を死守して、奉公する人であつてこそ、偉いと尊敬される今日である。

最近朝鮮にも、海軍特別志願兵制度が實施されるやうになり、諸君も太平洋に、地中海に、海に、空に進んで、心の限り、活躍すべき途が開かれた。全朝鮮青少年諸君のため慶賀して已まない。併し、海上に於ける戦闘作業は困難な點と不自由な所が多い。だから諸君は學園に居る間、それらの困難を蹴破り奮進すべき心身を鍊磨することを希む。山本精神の繼承者諸君！山崎現の相續者諸君に、私は特に期待するところが大きいのである。

(京城運動場に於ける海軍志願兵對實施計畫演説の録)

徴兵制下の朝鮮婦人へ

女流詩人 竹内 てるよ

霜とたゞかひ雪をしのいで、嚴冬の中に咲きいづる梅花を、私は女性の花と信じております。

私たちの花は、りんぜんと霜夜の月光をあぶらるゝ梢のかたき蕾時來れば、やがて日光にひらき、ほのかに美しく香り出づるのであります。

朝鮮の婦人たち、つまりこの地方の日本女性は古來、家といふものをこよなく重んじ、その家のしきたりの中に女性は清くつよく一生を埋めて、犠牲と、忍従の靜かな生涯を、ながくおくつて來ました。

この女性たちの犠牲ある生涯は、いく多の人材を出し、すこやかに子供たちを育て、この地方に多くの仕事をさせて來つゝあつたのであります。

このたび、大東亞戰下に、半島にも徴兵制度が布かれ、女性の志もつひに光の下に花ひらく日が來たのであります。謹んで、御祝伺申し上げます。

徴兵制下の女性といへども、あなたたちにしても事新しき決意も不用のことゝ存じますが、家のしきたりとその教への下に、いく千年のながき女性の犠牲は、いま光榮の下に新しく光をおびて日本に輝くの時が來ました。

この地方の女性は、嫁して夫に死別しても二夫にまみえず、若くしてその黒髪をうずもれさせて死に到るまで家に止まる立派ならひを持たれてゐます。

徴兵制下の妻、再び母となつて、この美しきならはしは、今こそ家の母及び妻として夫とわが子を大君にさづけまつるに、げにもふさはしき生きのすがたであります。

大君の兵士は、わたくしの夫及び愛兒であると共に、まさしく日本にさづけまつれる大君の兵士なのであります。

女性の貞潔をもつて生み奉り、育て奉るにふさはしき人々でなくして何でありませう。されば今こそ半島の女性は、その獻身の生涯に、今のたびの光榮を更に光とそへ、健康と、清淨と、つよき精神をもつて兵士の母及び妻としての位をもたれるのであります。

兵士の妻及び母として、まづ、大義に生きなければなりません。大義は、日本の悠久の昔からたゞ一つ不變なるものであります。

大義に生きるといふことは、日本人にはみな出来ることでありまして、こゝに事新しくいふべきこともありません。

更に、兵士の妻及び母は、死にあつてたじろがない心を持つことが大切であります。

死にあつてたじろがない心といふものは、女性はみなその出産の日ですでに経験するのであります。いかなる痛み苦しみにも身をもつて堪えて、靜かに時の來るを持つことは、生死に對しての心がまへであります。夫又愛兒が、大君の御役に立つて死するときは、神として永遠のいのちとなり、日本を守る光となるのであります。

幸せにもえらばれて、この光榮を受けるもの世界に日本をおいて他ありませんか。あなた

たちの家への精神は、こゝに光榮をになふ日を迎へるのであります。

生死は、すべて 大君にさづけまつる男子の永久のよき妻とし母として、襟を正しくしておたがひに、迷ひなき生を生きたいものであります。

あなたの夫、あなたの子は、正義のいくさをする國に生れました。人としてこれにすぎたる幸せがありませんか。

あなたの子は、人類にはじめて火をみつけたる人のごとく、正しきたゞかひに参加するのです。女として、これにすぎたるよろこびがありませんか。

生死にあつてたじろがない心とは、日本人の生き方でありまして、戦時、平時にかへらず、女性も幼きものゝ産聲をきくときから、つよく持つてゐるものであります。

兵士の妻及び母たるものは、信念をもたなければなりません。

信念とは、自己を立派に生きとほさせることが、大君の兵士を育てる證であることを信じてをいひます。

あなたたちがすでになしてをらるゝごとく女性の自己といふものは、家に自らを埋めてそ

こから新しい芽を出し、それに花を咲かせることをいひます。世にいふ女性のみにくさやおろかしさに、甘えなまけてゐる時代はすでにすぎました。女性の重んぜらるべきはたゞその誠心誠意にあります。もしあなたにしてその誠心に表裏なかつたなら、あなたは全力をつくして、大君の兵士を育てたてまつる女性としての誇りを持つべきであります。そしてその信念に、断じてたぢろがないことであります。兵士の妻及び母たるものは、やさしく美しい心をもつてゐなくてはなりません。

やさしい心とは、よい心とはちがひます。やさしい心とは、むしろつよい心であります。愛育のこころ、花を愛するこころ、音楽を愛するこころ、ふるさとを愛するこころ、うるほをもつて子供を育てるこころをいひます。

戦地の愛兒に、やさしきうたの一つをも書ける母を、おたがひに日本の母と信じます。

いかなる涙の中にも、空の美しさを見失ふことなく、いかなる生活の苦しみや日々の雑事の中にも、地の咲く花の美しく見失ふことなきこころこそ、幼きをそだて、みくにゝさゝぐるとき、正しき愛育の日の道ではないでせうか。

半島の女性は、やさしき心をもつてふるさとを思ふよいうたを持つ人です。そのころを大きくつよく育て、こそ兵士の母や妻のあたゝかい心となるのでありませう。

兵士の母や妻は、健康を持たねばなりません。これは決戦下の生活の乏しさの中にも、健康な子供たちを育てるのに大切なことでもあります。

母體の弱きときは、大君の御役に立つ兵士をつくることは出来ません。健康は妻たり母たる日にばかりではなく、幼いときから十分に守られねばなりません。

心がやさしくあつたとしても、虐げられて無理をするやうなことがあつてはなりません。兵士の母たるの信念をもつて女性は女性のからだを守るだけの、火の前の席を家に持つてこそねばなりません。

やさしく、片隅に生きる生涯は美しくありますけれど、これに信念の加はつてこそまことのやさしさとなるのであります。胸をしつかりとし背をまつずぐにして生きねばなりません。日本の悠久のために、戦劔をとる兵士の母として、健康は、最も大切なものであります。

あなたたちは、愛兒のすつきりとした首をみましたか、たくましいその手をみましたか、その愛兒の日に、いくたび涙を流したとしても、けふのこのよろこびの涙にまざるなみだは且つてなかつたであります。

志が世に花とひらく日、私たちはみなその日のために生きてゐます。私たちはみな、ひたすらにそのために生きてゐるのすべてをかけます。

女性と生れたるの光榮は、私たちはみな兵士の母として、せめては靖國のさくら、日のなき日に散るを仰ぎ、心靜かに、よき生涯を生きたいものです。

今こそ、光榮に、いく久しかりし女性獻身のあなたたちの薔、花ひらいて香り新しき時が來たのであります。

『朝鮮と戦力』を語る

—東京の『朝日新聞』週刊朝日誌 主権—

中央協和會理事長 關屋貞三郎 外諸氏

本誌は、朝鮮及朝鮮同胞の大東亞戦下における貢獻に關聯した座談會記事の特輯した。半島及び半島人はこの戦争には無くてはならぬ役割を演じてゐるのであるが、一般内地人はそれに無關心であり過ぎるから、先づその注意を喚起したいのが、この特輯の第一の眼目。次ぎには、その認識の下にも、一般内地人は半島同胞を遇したい、といふのが第二の眼目である。

これだけの事は、常識ある者は誰でも分つてゐるはずであるが、實際は今以つて、『内鮮融和』が問題として取り上げられ勝ちな實狀である『内鮮融和』が問題になる原因が假りに雙方五分五分の責任にありとしても、内地人は兄弟として、弟妹を愛し庇ふ心持ちから、反省もし、多く譲る度量も無くてはなるまい。半島二千五百萬人の

同胞を大きく抱き、一體化することも出来ぬやうでは、大東亞の建設は目論見倒れに終らう。

同時に、半島同胞も自惚れに過ぎてはいけない。日本帝國無かりせば一日露戦争で日本が勝たなかつたら朝鮮はさうなつてゐたか。併合前と比べ朝鮮の人口が今二倍になつてゐるのは、世界無比の人口増加記録は何故か。内鮮は不可分一體の關係にあることを、頭と心で眞に了解せねば駄目だ。

【鈴木】 朝鮮がこの大東亞戦下に戦力増強の一大役割を演じてゐることは、内地に來てゐる半島人の數を見ても明白であります。また、この大戦は一面人口資源戦であるが、わが日本帝國一億一心といふその一億は半島人、台灣人を入れてのこと、これがそんなに大きな力になつてゐるか、それだけは概念的に誰でもわかつてゐますが、その他の具體的なことになると内地では燈台下暗しといふ感じですが。總督も昨年内地においでの時、各方面の人に接して、あまりに朝鮮の認識がないのに驚かれたといふことを聞いてをりますが……この大事な時機において、われわれは朝鮮および朝鮮半島同胞の受持つてゐる役割を認識する必要があると思ふのです。これは日本のために寄與してゐるからといふ理由と共に、一つの事實を

正しく認めるといふ公正の觀念からもさうある可しと思ひます。それが内鮮融和、内鮮同一といふ目的に進む上に根底的に必要なことだらうと思ひます。まづ最初に總論的に竹内さんからこの大東亞戰下に半島人の占めてゐる地位、あるひは重要物資増産に如何に朝鮮が寄與してゐるかといふことからお話し願ひたいと思ひます。

【竹内】 私ども内地で職務上朝鮮關係の仕事に日常接觸してゐるのですが、仰しやる通り國民一般の朝鮮に對する關心は、現在においては昔よりもむしろ稀薄になつてゐるやうな感じがする。併合直後、あるひは大正年代までの内地一般の人は、今日よりも朝鮮の問題について非常な關心を持つてゐられたと思ふ。これは一面己むを得ぬことで、明治時代は朝鮮半島を中心とした戰役の時代でもあつたからで、その後全體的に見て朝鮮は平穩に成長して行つただけに、國民の關心は新しい地域すなはち滿洲國、あるひはその後は支那大陸、さらに大東亞戰爭直前、ことに戰爭以來は南方を含む東亞全域にわたつたといふ點から見ても、朝鮮は國民の大きな關心の中の一部になつてしまつた。これも考へやうによつては、日本國民がそれだけ成長し、それだけ大きくなつてゐるとも考へられますが。然し時局下殊に最近の情

勢に於て朝鮮半島は帝國の國力全體の上に實に大きな役割を果してゐる。具體的に申せば第一は今一番話題になつてゐる食糧です。これは併合の當初から朝鮮半島は日本の大きな食糧の給源地であり、朝鮮農業殊に米作の發展は國民の常識になつてゐると思ふのですが、外米輸入に依存せずといふ今日の狀況においては、朝鮮の作柄は台灣から更に滿洲も入れて帝國全體の食糧自給の上に大きな關係を持つてゐるのです。實は昨年は朝鮮の作柄が相當悪く、平年二千三百萬石餘り出來るところが千九百萬石足らずしか出來なかつた。それが今日一般の食糧事情に非常な影響力を持つてゐるわけですが、食糧の問題についても朝鮮の占める地位の重要なことは申すまでもないのです。

それに續いて朝鮮の天然資源として棉花がある。これも比較的人の氣が付かないところですが、朝鮮で出來る棉花は朝鮮内の需要を充て、大半を軍需とか一般の需要に充ててゐるといふほかに朝鮮の棉花の増産は現在成功してゐる。鑛產物としては、金の生産は大東亞戰爭の始まるまで、日本の國際決済上非常に大きな役割を果してゐた。戰爭後になつては金以外の一番大きなものは鐵の鑛石であり、亜鉛とか鉛といふ特殊金屬、アルミニウム製造に不

可缺の螢石、あるいは電氣製鐵に必要な電極のもとになる黒鉛など朝鮮獨得の生産品がある。そのほかタングステン、モリブデン、特に最近問題になつてゐるジルコンとかタンタルンなどの稀有金屬の原料は朝鮮から相當出てゐるといふわけで、鑛産資源も非常に大事になつて來た。ことに鐵鑛石の如きは、近距離から出来るだけ持つて來るといふことが輸送の關係からいつても大事なことで、これも昨年來大増産計畫をやつてゐるやうな状況です。更に重要産業である鐵、輕金屬については、すでに現在相當大きな製鐵所が二ヶ所もあり、そのほかに電力資源の豊富な點から、アルミニウム、マグネシウムは昨年以來新しい増産計畫は殆んど朝鮮に集中されてゐる關係であつて、現在すでに朝鮮として帝國全體の輕金屬生産の〇〇パーセントを出してゐます。これが一兩年後には更に飛躍的な分量が朝鮮から出ることにあります。更に二千五百萬の朝鮮の勞働力といひますが、この勤勞の力が朝鮮のみならず内地のあらゆる産業に非常に大きな役割をしてゐることはいふまでもないことです。

最後に朝鮮の一番大きな役割としては、滿洲、支那大陸の重要物資を内地へ持つて來る大きな動脈になつてゐるといふこと、今まで大連なり上海なり青島なり、その他の滿洲、支那

の港から來てゐた重要物資を朝鮮の縱貫鐵道を通じて内地へ運んで來ることになつて釜山から新義州に行く鐵道はこの戰時輸送に切り替へられ、今全力をあげてこの大きな輸送を引受けてゐるのです。

【鈴木】 今お話のあつたその重要な勞働力、それは現在どの方面に最も多く供給されてゐるのですか。

【竹内】 内地へ來てゐる半島人は大正末年、ことに昭和の初頭から急激にふえて、その大多數が一般の各種産業にわたつての勤勞者として働いてゐます。特に最近では重點産業、具體的にいへば炭鑛、鐵鑛業、あるいは土建事業などの各種産業に配置するために朝鮮の中でも年齢層の若い能力の高い人達が移入されて來てゐるわけです。

【茂野】 われわれの方としては集團移入といふ言葉によつて、大量に半島勞務者を入れ始めたのは昭和十四年の秋です。その前から炭鑛の勞務者が重工業に走る傾向が著るしくなつて、勞働力不足の結果減産が豫想された。その時打つた手が半島勞務者の移入で、それ以後減産の穴を埋めて今日に及んでゐるのが半島勞務者です。だから半島勞務者は日本の出炭を

年々維持して行く上に大きな貢献をしてゐることは事實で、恐らく現在でも各種産業の中で主位を占めてゐるのは炭礦でせう。

しかしそれだけ大事な勞務給源ですが、われわれとして一番困つてゐる點は國語の問題です。つまり言葉が通じないといふ點が炭礦勞務の場合に非常に困るのです。地上勞働の明るいところだと、言葉が通じなければ手真似でも補ひうるが、あの狭い暗い、しかも非常に音のやかましいところで言葉の分らぬ者を使ふとなると、あの職場の状態からそれでさらに深刻になる。使ふ方の立場からいふと都合の悪い時は聞えない、都合の好い時には聞えると思つてしまふのです。それからわれわれの方では出来るだけ山間僻地の醇朴な者を好むが、醇朴な者は教育はない。まづ諺文の讀める者が二割五分か三割それすら讀めない者が多い。勿論國語は分らない。だからそれに對しては最短一ヶ月は軍隊的な訓練と國語の教育を施す。そして一日の中に一時間、一時半、二時間と段々と坑内に入れる時間を延ばして行つて、その間に國語を教へ軍隊的な規律に服させるといふ方法で非常な努力を重ねてやつてゐる。

しかし何んとしても計畫的な供出を期待し得るのは半島勞務者です。農村から入れようが

出席者

貴族院議員 協和會理事長 内務省管理局長 宮城縣知事 大政翼賛會 朝鮮總督府 東京事務所長 石炭統制會理事	關屋貞三郎 竹内徳治郎 丸山鶴吉 權藤嘉郎 北村輝雄 茂野吉之助
--	---

司會 朝日新聞出版局長 鈴木文四郎

朝鮮に歸るといひ出されると、これがまた實に堪らぬ惜しさが出て来る。最近協和會

われわれの方、その地方の關係、總督府の援助も仰いで定着運動をやつて、この際だから期間を延ばしてもう二年繼續して貰ひたい、いけなければ一年、半年でもといふ風にやつてゐるが、大體期限の長短はあつても七〇パーセント位は延ばしてくれてゐる。それに對してはまた定着の奨励金を出すとか、或は朝鮮の家族に對しては慰問品を送るとか、いろいろの方

法を官邊と相談してやつてをります。

どこまでも誠意

【鈴木】 留つてゐたくない、歸りたいと思はせるのは、言葉の通じない點もありませうが、内地人の半島人に對する理解の乏しい點が大きな原因ではないですか。長い間内地における半島人の指導をやつてをられる丸山さんから、半島人同胞に對する心構へといったものをお話願へませんか。

【丸山】 それは大事なことだが、また非常に難か七點ですね。結局私にいはせれば、半島の人だから何か特別の待遇をしなければならぬといふやうな考へをなくすることが一番大事だ。内地人同士だつて誠心誠意を捧げて交際することが大事なんだが、半島の人とか内地の人とかいふ區別を考へないで、どこまでも心から親切に誠意を披瀝してつき合ふといふ氣持になつて來なければならぬ。ところが實際の問題として難かしいことは、半島の人はいこれで帝國の臣民になつたといふけれども、悪くいへば一種の僻み根性がある。また内地の人は皇國臣民になつたもののまだ交りも浅いから、本當に朝鮮の人の風俗、習慣、氣持を理解し

てゐない。そこにどうしても隔りが出來がちなんです。だから半島の人はその意識にある僻み根性を早くとる。内地の人からいへば、これはわれわれと一緒になつた弟分だといふ氣持でどこまでも理解して行くやうに——なかなか一朝一夕で達するわけには行かぬが、その努力だけはどうしてもしなければならぬ。人口といひ、資源、食糧の點からいつても朝鮮はこの時局に非常に貢獻してゐる。

【鈴木】 關屋さん、この點について協和會の立場からお話願ひたいのですが……。

【關屋】 私はよく半島の人にも内地の人にもいふのですが、明治四十三年に併合して以來われわれは離れることの出來ないものになつた。それでお互が誠心誠意を以てやるべきことは速かにやる。しかし結果を必ずしも性急には待たないといふこと。ややもすれば當局者は功を急ぐのです。つまり役人などは一言にしていへば非常に無理をやるといふ感じがある。方向が間違つてをつては勿論いけないが、さうでなくでも、言葉も違ふし風俗も違ふし、好き嫌ひもあるのだから、それをすぐ右から左にとやることは出來ない。その點で人情に觸れてゐないところがあるやうに思ふ。そこで先程の國語問題でも、將來は國語で全部やらせる

ことが理想だけれども、過渡期においては内地人がある程度朝鮮語を自由に使えるのでなければ半島人勞務者は使へない。そこで中央協和會でも鑛山や土木建築の方の勞務主任の講習會をやつた時に、私も時々行つて、君達は五百人なり三百人なりの勞務者を擱んでくれ、一人や二人なら擱めるかも知れぬが、それでは能率はあがらぬ。それには君達の心持と勞務者の心持とびつたり合はなければ擱めない。その場合に君達が『お早よう』とか『御苦勞さん』位の三十や四十の朝鮮語が喋れることが必要だ。君達それを覚えてくれといつたのですが、言葉が出来ないので思ふやうに行かない。終ひには怒つたりするのではないけませんよ。

在滿半島人の心

【茂野】 今のお話に關聯してことに産業の方から見る時に注意願ひたいことは、勞務者が内地人の間にばら撒かれて入つて來た時には、非常によく同化していろいろな美談もあるのです。たとへば貝島の天の浦炭鑛には半島勞働者の建てた感謝の碑がある。これは内地人の或るお爺さんが非常によく面倒を見て、受取つて來る給金の何錢何厘まで説明して渡したといふことから非常に半島人の感謝を買つて、そのお爺さんが退職した時に金を出し合つて碑

を建てたといふ。今でも半島人の名前を彫り込んだ碑があります。ところが昭和十四年以後になると砂に水のしみるやうに微溫的に人間をふやす餘裕がなくなつた。つまり苗床のないところにざかつと大量移入しなければならぬことになつた。ここに産業方面の半島人勞務問題の難しさが出來た。今關屋さんのいはれる言葉の問題でも、數が少ければ向ふで進んで國語を習ふといふ傾向になるが、大量に入つて來るとなると朝鮮語だけで自分たちの用が足りるので、本來は國語で行くのが正當なのが、こちらも朝鮮語も使はなければならぬことになる。

【鈴木】 權藤さん、現地の立場から内地人に對する御要望はありませんか。

【權藤】 私はまだ滿洲から來たばかりで、内地のことはよく知らぬのですが、滿洲の半島人の状態、朝鮮内の半島人が現在どういふ氣持でどういふ役割を果してゐるかといふことを申し上げ、また内地に來て聞いたことを傳へたいと思ひます。半島人二千五百萬の中で一番多いのは朝鮮ですが、その次は滿洲だらうと思ひます。在滿半島人の皇國臣民的な態度は實に想像に越えるものがあります。内地よりも朝鮮よりも、滿洲に行つてゐる人が一番熱心です

その満洲の状態を簡単に申し上げますと、私は間島省に二年ばかりをつたのですが、間島省は從來思想的策源地だつた。併合以前の亡命分子がゐたり、不平分子がゐたりその後は共産黨の策源地だつたのですが、それが康徳七年、昭和十五年ごろまでに殆ど肅清された。その肅清に半島農民の協力が非常に大きかつた。共産軍がをれば農民がすぐ警察に知らせるといふ努力がされたのです。さういふ點を見ても農民までも自覺が滲透してゐるといふことが分るわけです。

そのほか私は昨年在満半島人の學徒志願の問題で方々廻つたのですが、満洲では専門學校以上に在學の者で昨年志願兵に漕つた者は一人もなかつた。率先して自分から申出た。それから各地における神社參拜とか國防獻金その他満洲では自發的に實に熱心にやつてをります。その際私が非常に胸を打たれ、自分自身の方向に對しても衝動を受けた點があります。それは新京に徴兵適齡者の懇談會があつた。出席者は適齡以前から二十歳位の青年で、殆ど中學校を出た連中でしたが、その人達のいふことを聞くと自分が恥かしくなる位に熱心なんです。その人達のいふのには、われわれはわれわれの先輩のお蔭で非常に肩身の狭い思ひをし

た。われわれは自分達の後輩に對してさういふ思ひをさせたくないといふ熱烈な氣持でしたが、それは單なる表面上のことではなく、私もそれを目撃して非常に考へさせられたのです。そのほか満洲における半島人の皇國臣民としての活動は、宣傳ではなくありのままに申して本當に内地の方が相像する以上熱心にやつてをります。

次に私が今度歸りに見聞いた朝鮮内の事情を二三申し上げますと、私の郷里は慶尙北道ですが、電氣がないのでランプをつけてゐる。そのランプも石油の配給がないので夜になると全部眞つ暗なんです。その暗闇の中で出荷しようと思つて吠を織つてゐる。あとでその吠の目を見ると實に綺麗に織られてゐるのです。米なども全部供出してお粥をすすつてゐる位なのです。から農民のこの戦争に對する協力は、内地の人が本當にそこへ行つて見なければ分らぬと思ひます。男子勞務者は今勞務給源關係で殆んど出てゐるものですから、從來働かなかつた女がモンベ姿で一生懸命やつてをります。醇朴な田舎の人間がこれだけやつてゐるのに一部インテリの人の中にチョツとした噂の飛んで來るやうな行動があつて、全部が悪いやうに誤解されてゐる向きがあるのを、一般青年層は残念がつてゐます。

内地人の心構へ

【關屋】 昔は半島の人にも非常に良い性質があつて、文化にしてもいろいろな美術品が出来た位だから相當の文化人であつたに違ひない。ところが今の人には昔のやうな高麗焼もでない。建築にしても昔は實にいゝ建築が造營されたのだが今できない。昔よりも劣つて來てゐる部分もあるのではないか。それはわれわれも引上げねばならないが、半島人自身も考へなければいけない。私も學生あたりに『君等勉強して偉い者になつてくれ』と始終いつてゐる。しかしお互ひに融和する上においては、ただ半島の人にばかり注文しても無理なんである。内地人自身の心構が肝腎なんです。千年以上昔、天智天皇時代にこちらに來た歸化人は非常に澤山ある。埼玉縣あたりに遺蹟が澤山残つてゐて、飯能の向ふに高麗神社といふのがあつたが、これは丸山君等の骨折りやわれわれも盡力して立派に御造營が出来たが、その歸化人たちも今ではまるで區別がないやうになつてゐる。さういふ昔のことを考へてみれば、こんなに近い續き合ひはないのだから、考へやうによつては割合速かに一緒になることが出来るがもしなり得ないものがあるとすればお互ひの心構へだと思ひます。

【鈴木】 桐生、足利の織物も昔の朝鮮の歸化人が始めたのだらうといふ話ですね。

【丸山】 高麗神社の祭神になつてゐる高麗王若光は非常に徳が高く、亡くなつた時に部民が集まつて祀つたといふのですが、千三百年前に千七百九十人を武藏郡に移して高麗郡を置いたといふのです。それから千三百年たつてゐるから子孫はずつと關東に擴がつてゐるわけ、それを辿つてみると面白いのは、高麗王若光は白髮肩を掩ふと書いてあるが、關東一圓にある白髭神社はやはり若光を祀つたものです。もう一つ面白いことは高麗若光の子孫が建立した寺があそこにあるが、その寺が本山で結城桐生、足利から關東一圓に四十七ヶ寺の末寺がある。

【鈴木】 昔の日本人は内地人とか外地人とかいふ區別には鷹揚だつたのですね。

【關屋】 大臣にまで用ひたのですからな。

【丸山】 系圖を見ると三位まで行つてゐるのが四人、武藏の國主になつたのが四人位ある

【鈴木】 だから半島人に偉い人が出たら閣僚の一人や二人をつてもいいのですよ。

氣持のよい環境

【鈴木】 北村さん如何ですか。長く向ふにゐられた御経験からのお話を伺ひたいのですか……。

【北村】 たゞ私が内地の人に申したいことは、内地に来てゐる半島人に對して氣持の良い生活環境を與へて欲しいといふことです。いひ換へれば今日の戦つてゐる朝鮮ないしは朝鮮人に對する認識の是正といふことになりませう。とにかく第一線で戦死して靖國神社に祀られてゐる澤山の半島同胞もをりますし、また今年からは内地人と全然同じく徴兵によつて召されて行く。あるひは先程からお話の勞務者、産業戰士としての華々しい働き振り、かういふことにもう少し眼を新たにして見ていただきたいといふことです。生活の環境は人間の氣持、性格をどのやうにも作り上げて行くことが出来るものです。それを與へて行くといふことが内地人側の共同の責務ではないかと痛感します。本當に兄弟分だといふ氣分をしみじみ出し合つて行く氣持が兩方から動いて来るならば、これこそ戰力増強のために何よりの力となるのです。

【竹内】 朝鮮のやうに最近三十年間で人口が二倍になつたといふところは世界中どこにも

ないと思ひます。要するに半島人の人口をふやしたことで生活を向上させて來たことは日本の世界に誇りうるところだらうと思ひます。先程からお互ひの理解といふことが言はれましたが、それについてこのごろの隣組といふものが、いかに相互に親しむことに役立つてゐるか、それで私の希望するところは、半島人も努めてこれに出席して、親しみを増すやうにやつて行つて貰ひたいと思ひます。

【鈴木】 どうも有難うございました。(了)

進歩する朝鮮

—小磯總督に訊く—

朝日新聞社出版局長 鈴木 文 四 郎

214

【東洋の寶庫】【鈴木】早速伺ひたいと思ひますが、現在朝鮮がどの面においてどういふ風に進んでゐるか、さらに朝鮮二千五百萬の民衆はどういふ風に戦ひに向ひつつあるか、また資源的にもどういふ働きをしてこの戦争のために役立つてゐるか、ごく大綱的にお願いします。

【小磯】まづ結論的にいひますと、朝鮮といふ土地並に民族は滿洲事變勃發以降著しく世人の認識が閑却されてゐた憾みがあつたのです然るところ少し掘り下げてこれを研究してみ

ますと、日本として大東亞戦争を勝ち抜くためにも、大東亞を建設して行くためにも、朝鮮といふものがなければ或は不可能ではないかと思はれるほど重要な性格を持つてゐるところだと思ふのです。何によつて左様なことをいふかと言へば、まづ人についてこれを見れば、まさに皇國人口一億の四分の一、二千五百萬を持つてゐる。この二千五百萬の人の動向が一億結集に直ちに偉大なる影響を及ぼすであらうことは申すまでもありません。

次に朝鮮の物的現状を観察すれば、朝鮮といふところは確殆どなすなきところであるかのやうに見られてゐたのですが、これは現在恐らく東洋における寶庫というても必ずしも過言でないほどの實質を持つてゐると思ふ。まづ食糧についていふならば、米が平年作において二千三百三十五萬石、麥および雜穀が一千六百萬石と稱せられてゐる。年の豊凶によつても差違はあるが、舊來五百萬石ないし一千萬石を内地に寄與貢獻し來つてゐる。ただ遺憾ながら昨年、一昨年は非常な旱害に直面して、昨年の如きは一昨年の旱害に基き殆ど食はずでしたが幸ひに官民一致の努力と滿洲からの雜穀の輸入と相俟つて、一人の餓死者も出さずですんだ。もつともこの移輸入額は計畫數に達しなかつたのですが、かういふ事態に鑑みて、

215

今年こそそうんと増産してやらといふので、いはゆる生産責任制といふものを設定して、米において二千六百萬石、麥及雜穀において二千萬石、合計四千六百萬石生産しようといふことになった。消費は大體三千五百萬石内外ですから、若し計畫の如く實現せしめ得るならば、今年は一ツ驚くべきほどの寄與貢獻を致したいと踏ん張つてゐるわけです。

地下資源についてこれを見れば、鐵礦石、タングステン、モリブデン、コバルト、石綿、雲母、螢石、黒鉛等のものが數へられ、これ等は日本の總産額の五割以上を占めてゐる。殊に黒鉛の如きに至つては百パーセントまで朝鮮一手で賄つてをります。電力の豊富であることは今日殆ど人口に膾炙してゐますが、この電力はすべての工業生産の基礎として今後異常なる貢獻を持ち來すであらうことは想像に難くありませんし、殊にわれわれがあなた方に報道するのを最も愉快とするところは、リシウム、ジルコン、タンタル、ベリリウム、モナザイト等の稀元素礦物です。これは今日輕金屬の熔接用、或は電波兵器の原料その他大東亞戦争を勝ち抜くためになくてはならぬものですが、これが次から次に發見せられ、その生産量また必ずしも少量にあらず就中、リシウム、ジルコン等に至つては、戦争が何年繼續して

も朝鮮一手でお賄ひできるといふほどの強味を持つてゐる。

以上のやうなわけで、人と物との両面から見ただけ進歩しつつある朝鮮は、皇國日本として斷じて閉却すべからざるものであり、これをいよいよ助長することによつて、國策遂行の上に寄與貢獻せしめねばならぬところであらうと思ひます。

【鈴木】そこで人的の方面についてですが、朝鮮にも徴兵制が布かれて陸海軍にござし徴され、或は學徒出陣のこともあり、満足の行くやうに行つてをりますか。

（秀れた頭腦）【小磯】これも結論的に申しますと豫期以上に喜ぶべき有望なる前途を持つてゐるといひ得ると思ひます。少しく細説すれば、徴兵は本年初めてですが、遺憾ながら從來義務教育制度を採用してなかつた。昭和二十一年から義務教育に移るが、現在は學齡兒童の半分が就學してゐるにすぎない。しかるところ徴兵は主として體格を重んずるから、大體國民學校を出た者が半分に、出ないものが半分、つまり何らの教養を受けてをらない者が半分出てゐるといふことになる。それでは軍隊が困るだらうといふことも考へられたので、去る昭和十七年から青年特別鍊成といふものを實施し、未だ曾て國民學校に入ることの出來な

つた青年達を集めて、一年間六百時間の教育を施して来た。幸ひに就學したいといふ憧れの學校に行つて教育を受けるんだといふ青年の喜ひと、この教育を受けて家庭に歸つた青年の言動が、著しく積極的に潑刺となつて来ることを目のあたり見る親達が喜んで子弟を送るといふ好ましき結果から、これを指導する幹部の努力と相俟つてこれが頗る良好なのです。ちやうど今が徴兵検査の最中ですが、これ等の特別錬成終了者は、例外なく徴兵官激賞の的となつてをります。随つて恐らく皇軍における優良なる分子たり得るものであらうと信ぜられます。學徒志願兵はごうだらうかと思つてゐたのですが、これ等が入營する前、短期間であつたが朝鮮において集合教育をしました。その當時における彼等の態度も頗る眞面目であり、徴兵検査場における言動また潑刺たるものあり、現に各方面に入營した者の成績を調査してみても、大體において評判がよいやうです。また勞務者として第一線方面へ出た者實に數萬を算しますが、ただ朝鮮における婦女子の教養は著しく低級にして、家庭の教養において柱石とならなければならぬこれ等の人が十分でない結果が、青年子女におよぼす影響まことに少なからざるに鑑みて、今年四月から婦女子に對しても青年特別錬成を加へることとして

今實行に着手しました。これ等が將來向上發展をしたならば、前段申述べた各種青年の教養なども更に今日以上に向上するだらうと豫期してをります。

【鈴木】半島人の頭腦は内地人に少しも劣らないといふことを伺ひます。東京へ來てゐる半島人の國民學校の成績を見ると非常に優秀ださうですし、また體格も全般的に内地人と較べてむしろ優れてゐても劣つてをらぬといふ風に學者は見てゐるさうですが、その點は如何でせうか。

【小磯】半島人は内地人に較べて體格において優秀、頭腦において秀でてゐる者も少くありません。これは私の管見かも知れませんが、半島人の頭腦は如何なる意味において秀でてゐるかといへば、むしろ記憶力といふ點において秀でてゐるのであつて、獨創とか發明的才幹においては内地人より劣るでせう。ともかくも以上申したやうな長所を持つてゐるのですから、指導如何によつては大東亞建設の尖端に躍り得る存在たらしめ得ると私は信じてゐる。

（内鮮同祖論）【鈴木】總督は内鮮同祖論の信者ださうですが、私も大東亞共榮圈の

各民族を一通り見て參つた結果、半島の諸君がわれわれと感情的にも一番接近してゐる、或は同じものではないかといふ感じがする。ですから歴史的にも地理的にも經濟的にもこれほど接近してゐる民族を若し同化出来ないやうなら、日本人は大東亞共榮圈をつくるなんてことはやめたい位に私は思つてをります。それにもかかはらず、内地人の半島人に對する考へ方は、いはば悪い方へばかり目が行つて、半島人がわれわれと最も接近したものであり、また協力、同化するべきものであることを忘れてしまつてゐるのは内地人側の缺陷の一つだらうと思ひます。精神的にも合體ができて、内地人、半島人の別なく行くことが恐らく總督の理想としてをられる所だらうと思ひますが、それについて内地人にも半島人にも一つかうありたい、かうあつたらうかといふ考へを述べていただきたいと思ひます。

【小磯】私も既往において支那及び滿洲に勤務したことはしばしばあります。最近縁があつて軍司令官並に總督として朝鮮に勤務してをりますが、半島人に接觸しての感じは、支那、滿洲において漢人及び滿人に接觸した感じとそこに著しき差違がある。どんな差違があるかといへば、半島人に接觸した場合においては内地人と接觸してゐる感じと殆ど差違がない。然

るところ、何故に嫌はれるかと言へば、一部の者において貶言を言ふ、こそ泥をやる、責任がない、忍耐力に乏しい闇をやる、恩義を知らぬ、といふことがその非難の種のやうです。内地人と同じやうな性格の持主であるのになぜそんなに悪い性格を持つてゐる者があるかと少しく研究してみると、これは畢章併合前における歴史、就中苛斂誅求的政治の殘滓であらうと思ひます。といふのは政治においては階級制度が非常に嚴格に立てられて、兩班儒生といふ搾取階級に大衆は非常な壓迫を受けた。そこで人生を營んで行く上においていはゆる刹那主義、現在主義、今日主義に墮して、嘘も方便である。僅かな物は搔拂つて來たつて見付からなければいいぢやないか等しく人から使はれるなら、さう勞力を傾倒せずにさばつてすごした方がいいといふことが習性となり來つて今日に残つてゐるものと思はれる。

然らば他の半面において、何故に内地人とそれほど性格が似てゐるかといふことは少しく民族の本質に振り返つて見なければならぬところだらうと思ひます。朝鮮の歴史は箕氏から始まつてゐるといふ説もあり檀君から始まつてゐるといふ説もあるが、その何れが眞であるか私どもは研究が足りないからよく分りませんがある史家の言つてゐる如く箕氏朝鮮の説に

至つては支那人が支那の大を天下に誇らんがために、朝鮮の開祖を支那から渡つたのだと作爲したものであるとすら言はれてゐるが、或は然らんと思はれる節もあります。翻つてわれわれは日本の古典から見ても、たとへば日本書紀の中に次のやうな文字があります。即ち『是の時に素戔鳴尊其の子五十猛神を帥ゐて、新羅國に降到りまして曾戸茂梨の處に在しますと』と書いてある。新羅の國と言つてゐるのは、日本書紀を編纂せられた當時の朝鮮の統治者が新羅であつたから新羅の國とは朝鮮といふことであらう。曾戸茂梨の曾とは朝鮮の發音で牛の謂です。戸とは助詞でありませう。茂梨とは頭のことです。即ち曾戸茂梨とは牛頭ことなんです。内地で牛頭と書いてゴツといふが、即ちわれわれは素戔鳴尊を牛頭様、牛頭妙王牛頭天王と申し上げてゐる。これによつて素戔鳴尊は朝鮮に本據を置かれ、しかも牛頭といふところにゐられたことが分ると思ふ。そこで朝鮮を探してみると牛頭山、牛頭里といふところがある。これは必ずしも一ヶ所ではないが、最も確實らしき根據は、現在の江原道の道廳所在地たる春川の北方一里に牛頭山といふ山があるが、その麓に牛頭里といふ村がある。私も二回そこに行つて見ました。また春川の北側に鳳儀山があるが、この山の上に登つて見る

と、絶頂に近頃神代文化研究者がよく言ふ巨石文化と岩倉がある。更に牛頭山の北方に行くといふと石墳がある。これは申すも畏多いことですが、御陵などに參拜すると玉石で御陵が疊んであるが、あれと同じ玉石でつくつた石墳がある。それに連續して更に日本でよく發見し得る古墳、即ちドルメンがあつて、日本の古代の形のものと同然同じものです。私は現物は見ませんが、この古墳から掘り出された古器物は日本の神代のものとして發掘されたものと同じである。ここにおいてか半島二千五百萬の原民族は紛れもなく素戔鳴尊の末孫であらうと考へられる。果してさうであるとすれば、天照大神の末孫である内地民族とまさに同根一體であるといふことは隠れもなき事實ではないかと思はれるのみならず、われわれが今日承知し得る歴史の上から見ても、その後において更に血の混合が繰返されてゐるのです。そしてわれわれの最も愉快とした注意をせねばならぬことは、素戔鳴尊の六代の孫大國主神が出雲に根據を置いて統治してゐられた時に天孫瓊瓊杵尊が降臨せられ、大國主神は國土奉還と言ひますか、國讓りをやつてをります。ところが明治四十三年の聖代に、天照大神の末孫に在します、明治天皇に對し、素戔鳴尊の末孫であるべき朝鮮が併合されたといふことは神代の

末期における神事を更に徹底的に完成的に再び繰返されたものではないかと考へさせられる。なほ一言附加へさせていただくと、素戔鳴尊といふ方をよく研究すれば、これは天照大神に非常に忠誠を擧げられた方です。といふことは天照大神の御理想をそのまま承け繼いで實行に移された方なのです。天照大神の御理想はいろいろの形において分るでせうが、大體においてあの神勅を通して拜し得る。そこで素戔鳴尊がその神勅の理念そのままを實踐、實行に移された方である以上、朝鮮民族の母體の中を流れてゐる血の中には、必ず天照大神の御理念が躍動してをらなければならぬはずだと思ひます。これは正しく天孫民族です。これをよく承知するならば、内地人が近代歴史しか調べないで、新附の半島同胞を何か一等地低いものやうに扱ひ去るその人が未だ天照大神の理念に透徹してをらぬからです。修養研鑽が足らぬのです。よろしくおほらかな心持をもつて包容し同根一體に溶け込むことが非常に望ましいことだらうと思ひます。

【統治の理想】【鈴木】先程半島人のいはゆる缺陷のお話があり、また今内地人が半島人を何か一段低いものやうに思ふものがあるといふお話があつたのですが、内鮮同化をわれわ

れの豫期するやうにもつと早く來させるのには、今お言葉のあつた内地人が優越感をもつて、自分達だけが指導者階級だ、お前達は被治者階級であると思ふ考へ方がまだ多すぎることに一つの大きな障礙をなしてゐるのではないか。これは恐らく非は兩方にあるでせうが、併合の主體は日本だつたのですから、もつと氣持を大きくして半島人をわれわれの弟妹と思ひ、俗に言へば威張つて臨むといふ態度を根本的に變へることが必要ではないかと思はれるのですが、恐らく總督もその方面にはかなり御苦心を拂はれてゐられるやうに聞いてをります。それからちやうどこの五月で御赴任になつてから二ヶ年になると伺つてをりますが、その間の一番の御苦心のあつた點をお話願ひたいと思ひます。

【小磯】私一昨年就任以降今日に至る間、朝鮮統治の施策に關してはその時に様々な形において發表もしてゐるのですが、一貫してゐる理念は、朝鮮の人口二千五百萬を一日も速かに眞の皇國民たらしめようとするにと、この皇國臣民化に向つて拍車をかけて行きつつある大衆を基調として、朝鮮における一切のものを戦力増強に寄與貢獻して行かうといふことです。随つて大した苦心もなく治績もないのですが、一切のことはその二つにかかつてゐる

といへようと思ひます。

【皇民一體化】【鈴木】如何でありませうか、半島人と内地人と皇民一體化に進まなければならず、また事實なりつつあります。既に學徒出陣があり徴兵令が布かれて、彼等は現實にこの大東亞戰爭に内地人と一緒になつて血を流しつつある。そのほか内地へ來てゐる半島人の炭礦夫の仕事だけ見ても、その位重要な部面に立つてゐるか。そこで何か内鮮一體の實を興へたらどうか。これはわれわれ朝鮮に行つたことのない者が理念的に日本のためよかれ、朝鮮のためよかれと思ふところから起る考へなんです、それに對する御感想は如何でせうか。

【小磯】私の答は少しく抽象的に失するかも知れませんが、朝鮮の統治に關する根本的理念は朝鮮併合の當初に 明治天皇の下された詔勅の中に『民衆ハ直接 朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク』と仰せられてある。爾來、歴代の總督はこの詔勅を奉じて聖旨に副ひ奉るべく、努力し來つてをつたはずなのですが、遺憾ながら大正八年に萬歲騒動が起つた。この騒動は朝鮮の獨立、民族の自決を目的としてゐたものであつたが、幸ひに大事に到

らずしてすんだ。そのすんだ時に、大正天皇から、前に申した 明治天皇の詔を更に碎いて分りやすく具體的に御示しになつたものだらうと思ふのですが、『朕 夙ニ朝鮮ノ康寧を以テ念ト爲シ其ノ民衆ヲ愛撫スルコト一視同仁 朕カ臣民トシテ秋毫ノ差異アルコトナク各其ノ所ヲ得其ノ生ニ聊シ齊シク休明ノ澤ヲ享ケシメムコトヲ期セリ』と仰せられた。この政治を本當に具現するために最後に到達すべきところはどこかと言へば、内地と全然同じ形態に移行せしめて差支へないといふ時代の到來を成べく速かに持ち來さねばならぬといふことだと思ひます。だからその時々的情勢に應じて、左様な考へを基調として適切な施策を具現することが必要であらうと思ひます。なほ今日彼ら二千五百萬の半島同胞は、權利といふやうなことは成べく口にすまい、われわれはまづ以て義務の遂行に邁進しよう、といふ風が澎湃として流れてゐる。

【内地へ要望】【鈴木】最後に内地の同胞に對する朝鮮及び朝鮮同胞を中心としての御希望を述べていたゞきたいと思ひます。

【小磯】すべて仕事をやつて行く上においては、お互ひがよく知り合ふことが必要だらう

と思ひます、随つて先程來お話ししました如く内地同胞にどうかよく朝鮮の現事態を認識して貰ひたい、これが何よりも先であると思ひます。そこで最近内鮮兩者から編成した小さな班を内地の行政協議會の範圍に一つづ派遣することに、在内地半島同胞に對する慰問激勵と併せて内地同胞に對し朝鮮の現状を紹介して認識して貰ふといふ運動に着手したのでありますから、その眞意の存するところをよく諒解せられ、特にこの種運動を後援していただきたいと思ひます。なほこれに附け加へて申上げたいことは内地において働きつゝある半島勞務者に對する溫き手を伸べていただきたいことです。舊來半島の青年は、内地に來て勞務に服したいといふので、密渡航をすまして内地に來たものですが、最近は内地の勞務場に来ることを欲しない傾向が見うけられるやうです。これは換言すれば勞務者に對する待遇、施設が悪いといふことです。感激性に富むこと全く内地人と異なる半島の同胞は、ただ徒らに物的報酬の多きは望みません。ただ暮すに足るだけの報酬と溫き手をもつて抱擁せられることを渴望してゐる。その間の消息をよく諒とせられ、勞務管理に萬全の改善を施していただきたい。しかしかく言ふ總督自らの統理してゐる朝鮮の勞務管理は甚だ良くない。これ

も無論朝鮮自體において改善をしますが、内地の皆様にお願ひすることは勞務の改善といふことです。

【鈴木】たいへん結構なお話を伺つて有難うございました。

研究論文四篇

- 一、新羅の「花郎制度」……………海軍教授 三品 彰 英
- 二、『聖地扶餘』の内鮮一體史實……………扶 餘 高 畠 卯 三 郎
- 三、素戔鳴尊半島御開發の史蹟……………春 川 宮 内 幾 太 郎
- 四、『高麗神社』と千年前の内鮮親和……………東 京 前 田 文 夫

新羅の「花郎制度」

舞鶴海軍學校教授 三 品 彰 英

花郎制度と云ふのは、欽明天皇の御代に當る新羅第二十四代眞興王の時代、今から約千四百年程前、新羅の青年戰士の鍊成機關として設けられた特異な制度である。その大體を云ふと、花郎と呼ぶ貴族出身の美少年二人を選出して、その各々を中心に青年達が集會を組織して、互に道義を練磨し、歌樂を相悦び、山野を跋涉し、青年戰士としての習練をなすと共に、將來國家樞要の地位に任ずべき人物の養成に努めたのである。一言にして云へば、當時新羅の戰時的要求に基いて制定された青年戰士鍊成機關で、新羅青年に國家が要望する精神

道義と技術とをこゝで修得せしめたのであるが、唯今日から考へて不可解に感ぜられる點は、かうした鍊成團に花郎なる美少年——特にこの少年は傳粉粧飾されてゐた——が奉戴されてゐたと云ふことである。かうした奇異な習俗は、今日の常識から解釋すると却つて間違ふのであつて、吾々はその解釋の爲に古代人のものゝ考へ方やそれに基ついた諸習俗を研究して行かねばならない。

二

花郎制度は新羅民族固有の習俗であつて、特にその民族的なる點に於て注意すべきであるが、一體かうした種類の民族文化を保持してゐた新羅民族とはどうした系統に屬するものであらうか。新羅族を民族史的に之を云へば、原始韓族の直系の後繼者であり、又後代には半島民族の主流として發展した有力民族である。即ち古今通じての半島民族の代表者である。然らば古代韓族とは何か。漢魏時代の半島の歴史を記した『後漢書』や『魏志』の東夷傳に三韓として記載されてゐるのが韓族に關する古い報告であつて、それによると當時韓族は半島南部に占居定住してゐた農耕民族で、北部の民族とは甚だしく相異した性格を持つてゐた

やうである。然らばこの韓族が半島南部を占居したのは何時頃のことか、また北方大陸から下つて來たものか、それとも南方海洋民族の渡來したものかなどはすべて今日のところ分明しない。そこで吾々は方面をかへて文化要素或は文化形態と云ふ方面から韓民族を眺めて見ると、韓民族の古代文化は日本内地及び臺灣方面の古代民族文化と甚だ近親な關係にあり、これを一括して一つの文化境域と考へてよいのである。特に日本内地の民族的古代文化と古代韓族文化とは共通であつたと云つても過言ではない。而して今ここに問題としてゐる花郎制度と云ふ一種の青年集會の源流を追求して行くと、それは日鮮共通の民族文化の内に發源するところの顯著な古代文化特質であることが分明するのである。

花郎集會の最も近い源流は『魏志』、『後書』の語る原始韓族の習俗の内に發見される。即ち原始韓族の少年達が所謂男子集會を營み、その成年入會式に苦業を行つたことが傳へられてゐる。かうした男子集會は日本内地の古代及び琉球、臺灣を始め南方諸民族の間に盛行した古代的社會習俗の一つであり、原始韓族のそれは謂はゞこの共通民族文化圏に屬してゐたのである。なほこのことゝ併せ注意し度いことは、半島の接壤してゐる北方大陸の滿蒙諸族

の間にはこの種の習俗は全く見られないと云ふことで、この意味に於ても原始韓族は文化的に日本内地と最も關係深いものであつた。

三

新羅民族がその興隆期に當つて、その民族的文化特質たる男子集會を、原始的なるものから眞興王代の新しい時代の要求に應ずる様に再組織して、その青年戰士鍊成の機能を發揮したのである。

この青年集會によりて奉戴されてゐる花郎なる美少年は、實は神靈に奉仕する神聖な一種の尸^{たまし}的な存在に外ならないのであつて、若しこれを現代風に女色男色の對象などと解するが如きは甚しい誤解と云はねばならぬ。この神聖な少年を奉戴した青年集會の行つた諸行事の内、歌舞が重要なものゝ一つであつた。古代歌舞は元來神靈に仕へる一つの作法であつたと共に、神靈の加護によつて戰陣に赴く戰士達の士氣を大いに鼓舞したのである。それから又花郎集會は山野を跋涉して聖地巡遊を行つた。これ又宗教的な行事であると共に心身の鍛錬に資する爲に外ならなかつた。それは物見遊山の類ではなくて、あらゆる困難を克服し

て心身を練磨するにあり、時にはこの遠遊の際に深く敵地にまで入り込み、爲に掠奪されなもののさへあつた。

彼等の最大の目的は護國の信念を確立するにあり、それは又一面護國の神に對する信仰でもあつた。就中この集會内にあつて青年達の尊重したことは交遊の道である。そこでは私利私慾と云ふ利己的なものは最大の惡徳として排斥せられ、小にしては戰友の爲に、大にしては國家の爲に、自己を無にするところに彼等は眞生命を見出したのである。交遊の情誼の爲に一身を顧みなかつた青年に就いて語られてゐる美談が『三國史記』や『三國遺事』などの内に傳へられてゐる。

三

花郎集會がその眞面目を發揮したのは云ふまでもなく戰陣に於てである。花郎が戰陣に活躍したのは第二十四代眞興王代から第二十九代太宗王代にかけての時代で、丁度新羅が麗濟二國と激闘を繰り返した國難的な時代であると同時に又新羅が半島を統合して行く光榮の時代でもある。この時代に活躍した花郎の一二に就いて例示しよう。

斯多含。眞興王時代の花郎であつて、家柄は眞骨で奈密王七世の孫に當る。十五六才で花郎に奉戴されたが、時恰も新羅が加羅と交戦してゐた時で、彼は貴幢裨將として従軍した。加羅國に進撃するや彼は先づ敵の城門なる旃檀梁に突入して敵服滅の契機をつくつたのであつた。師歸へるに及んで王は斯多含の功を賞し加羅人口三百を與へたところが、彼は之を受けて後すべて解放し、一も留めることがなかつた。又田を賞として賜ふところ、特に願つて不毛の地を選んだのであつた。斯多含はその集會に於て武官郎と親友であり、所謂死友と約してゐたが、その後武官郎が病死するに及び、彼はこれを痛み遂に七日の後卒した。時に斯多含は年十七才であつた。

官昌。新羅將軍『品日』の子であつて若くして花郎に推戴された。新羅が太宗大王の時唐軍と聯合して百濟と戦ひ、黃山之野に激戦した。この黃山の戦は羅濟兩國の天下分け目の戦で百濟側は階伯と云ふ勇將の指揮するところであり、新羅軍には仲々の苦戦であつた。この時官昌は馬にまたがり槍を横たへて敵中に突入し、敵數人を殺したが、衆寡敵せず捕虜にされてしまつた。そして濟將階伯の前につれられて行つたところ、階伯はその年少なるを愛

し、歎じて云ふには『新羅奇士多し 少年尙ほ此の如し、況や壯士をや、』とて、許して生還せしめた。ところが官昌は『さきに賊中に入つて將を斬り旗をあぐることの出来なかつたのは深く恨みとするところである』とて再び賊陣に突入して疾闘したが、遂に擒へられて斬首が新羅の陣まで送られて來た、父品日將軍は我兒の首を手にし、袖でその血を拭ふて云ふには『吾兒の面目生くるが如し、能く王事に死す、悔ゆるところなし』と。新羅の將兵これ見、慷慨死を決して鼓噪して進撃し、百濟軍を大敗せしめた。この役に濟將階伯は敗死し、百濟の社稷は亡びこれにより新羅の半島統一の大業はその半ばを成就することになつた。この戦役の意義が大きなだけ、その戦勝の機を作つた花郎官昌の功又絶大なりと云はねばならぬ。

右に例示するところ僅か二人の花郎の傳に過ぎないが、新羅史のこの時代はこの種花郎及びその集徒達の列傳によつて最も生彩を放つてゐる時代である。新羅の英雄、否半島二千年の歴史を通じ比肩すべき者を見ないと云ひ得る英雄金庾信も亦その少年時代には有名な花郎であつた。古來金庾信が半島同胞の等しく景慕崇拜してゐる偉人であることは今更説述の要を

見ないであらう。

五

新羅時代に示されたこの民族的な氣力とその實踐力が、その後に至つて何が故に失はれし
てしまつたのであらうか。これを一言にして云へば、日本民族と共有してゐたところの民族
文化から離れて、大陸文化特に支那の儒教主義の政治文化に盲從したのが爲である。儒教主義
の文教政策はこの種民族的な習俗とそれに伴ふ精神とを非文化的なるものとして徹底的に否
定し、これを新しい時代に適合するが如く育て上げることとなし得なかつたのである。思ふ
に中世以後の半島人士の自ら事大主義的な誇りとした誤れる小中華的な理念の内には、かう
した民族的なるのは成長する術もなく死滅してしまつたのである。

六

が幸ひ半島同胞は今日再び民族的な素質とその力を發揮するの時が來た。即ち今日半島同
胞が日本帝國國民として生れかはつたことであつて、これ彼等が明らかに中古以來捨て去つ
てしまつた民族文化の本源に立ち還つて再出發の機を與へられたことに外ならない。花郎

度に就いて云つても、新羅のそれに甚だ類するものを近世薩藩に行はれてゐた兵兒二才制度
即ち健兒之社に於て見ることが出來、實にそれは吾が近世の武士道養成機關の代表的なもの
である。又廣くこれを云ふならば、今日の日本青年の練成諸機關は、一面に於てそれに類す
る古代諸制度の精神を繼承せるものと云へよう。今日の半島青年が日本青年として内地青年
と等しく練成の道に進むことは、半島青年自身にとつても一つの復古的精神に生さること
であり、それが又内鮮共通の根源に立ち歸つて眞の日本人となる道でもある。

半島に於ける徴兵制度實施への諸準備として、朝鮮青年特別練成令が發布され、それに伴
ふ練成機關の整備とその實踐とが日と共に力強く進められてゐる。その訓育要旨は『教育ニ
關スル勅語ノ趣旨ヲ奉ジテ我が國體ノ本義ヲ闡明シ國體ノ尊嚴ナル所ヲ會得セシメ皇國ノ道
ノ修練ヲ旨トシ皇國臣民タルノ信念ヲ鞏固ナラシメンコトヲ力ムベシ』『皇軍ノ本質ヲ把握
シ兵役ノ崇高ナル責務ト光榮アル使命トヲ理解セシメ盡忠報國ノ精神ヲ涵養センコトヲ力ム
ベシ』などと示され、學術の修得、教練及び勤勞作業の勵行などがその目的達成の爲に實施
されてゐる。今日之を困難と考へ、苦痛と思ふ半島青年がありとすれば、自ら省みて古き新

羅青年に耻じねばならぬ。今日は新羅時代の様な民族内の小さい闘争に終始して居た羅者の時代ではない。八紘一字の大理想を以て世界を導きつゝある帝國國民の一員として半島青年は起上つたのである。而して今、しこの御楯たるの光榮こそ古き民族精神に生きる道である。(丁)

『聖地扶餘』の内鮮一體史實に就いて

扶餘 高 畠 卯 三 郎

扶餘の史跡と内鮮一體の史實に就いて申し上げたいと存じます。此のお話を聞いて戴きますれば内鮮一體の理念に徹し、扶餘神宮御創立の御趣旨がお判りになることと思ひます。皆様方は既に御承知であらうかと存じますが、去る昭和十四年三月初朝鮮總督府より扶餘神宮御創立の御趣意が發表されました其の中に美しい内鮮一體の史實が根幹を爲してゐることが見へてゐます。

美しい内鮮一體の史實、それは扶餘の野にも山にも千古不滅の歴史として遺つてゐる。我が國八紘一字の建國精神が歴史上、具體的に海外に顯現されたのは百濟時代に於ける大

和朝廷の御事跡が始めであらうと考へられます。丁度今から千七百年程前 神功皇后様の御代百濟が始めて我が國に貢物を獻りまして以來其の亡ぶるに至るまで四百二十年の長い間大和朝廷と百濟の關係が史上に見へてゐます。此の間朝廷に於かせられてはあらゆる保護援助を加へられまして、其の社稷を維持せしめられ、殊に是等の救援が何等利害を目的とせず、常に大義倫理に依つて爲されましたことは千載の下襟を正しうして欽仰措く能はざるものがあります。

百濟王を始め百濟の人々は朝廷の援護に對しまして感謝感激し、我が皇國の彌榮を常に全じて居た事はむべなるかなであります。

扶餘に都城を建設した頃我が國は 欽明天皇様の御代に當ります。百濟では第二十六代聖明王(又の名聖王)と言ふ王様でした。此の聖明王は感激性の強い佛教の信仰が篤いお方でありましたが、欽明天皇様の十三年十月(皇紀一二二二年)始めて我が國に佛教を傳へられたのであります。扶餘神宮御祭神の御一柱應神天皇様の十六年(皇紀九四五年)には博士王仁が百濟より儒教を傳へた、此の王仁先生と御當地と特に御關係が深く、至誠至忠の人であ

りました。河内長尾に墓があります。王仁先生のお話は後より申し上げることとして、扶餘から佛教を傳へた後此の佛教に附隨せる様々の文化が我が國に傳へられまして、飛鳥文化と爲つてゐます寺工・佛工・瓦塼工・書工等澤山參りました。

大阪の四天王寺は 推古天皇様の御代に建てられましたが、寺工は百濟より渡つてゐます。天王寺區椎寺町に金剛芳江さんと云ふ工匠さんが居られますが、百濟から來られた寺工金剛重光さんの末裔です。奈良に參りまして其の頃の寺址があります。世に飛鳥文化と稱してゐる彼の文化建設に、私の居る扶餘から澤山の百濟人が參りまして力を陳べてゐます。飛鳥文化源泉の地である扶餘からは其の頃の瓦や塼が出てゐますが、彼の親しみある布目の蓮瓣瓦が扶餘から出るものも、此の地四天王寺から出土するものも同じであります。

勿論大和、山城地方を始め全國的に出土する當時の瓦は、不可分なりし内鮮交渉の史實を立證してゐます。それは瓦ばかりでなく佛像に於いても全く同じであります。

百濟時代の王城扶蘇山から、大正八年頃と記憶しますが泗泚樓と言ふ建物を建てるべく山の頂上を地均し中偶然金銅製佛像が土中から現はれました。只今國寶となつてゐますが、此

の佛さまも東京上野の帝室博物館に藏置されてゐる飛鳥時代金銅物も同じでありまして、當時の關係も物語つてゐます。崇峻天皇元年（皇紀一二四八年）百濟から瓦博士麻奈文奴ら四人が瓦の製法を傳へました。

工藝人として佛像を造る佛工や、お寺を建てる工匠や、僧侶、畫工を始め天文・地理・曆・醫術・採藥のことを傳へた者、造園家等様々な人が参りまして或は其の始祖となり、或は改革となりて文化施設に貢獻したのであります。

扶餘又は大和地方等に遺る史跡を通じて是等の史實を回顧するとき、實に感慨深いものがあります。

欽明天皇様の六年秋九月百濟の聖明王が、天皇様の御爲に丈六の佛像を造り聖壽無窮をお禱りしたことが文獻に見へてゐます。欽明天皇九年十月、今から千三百九十年前我が國から三百七十人の將卒を御派遣されまして、扶餘に立派な城を造られたのであります。やはり文獻に由りますと其の頃の百濟に大變な饑饉がおり、此のことが上聞に達したと見へまして、欽明天皇様に於かせられては麥種一千斛を遙々御送りになられ、百濟の人々を御救ひ

されたといふことであります。斯うした朝廷の御仁愛に對しまして百濟の人々は感謝感激したのであります。

偉大なる包容力に富んでゐる日本の人々は、百濟の人達に慈愛の手を差延べられたので、我が國を慕つて澤山歸化致しました。

それ等の子供が立派な皇國臣民となりました。例へば皆様方も能く御存じのことと思ひます。垂仁天皇様の御代皇德を慕ひまして新羅の王様朴赫居世の王子天日槍が我が國に歸化した、播磨の國に始めて参りましたが後に但馬に居を移したが、種々寶物を獻上されたのであります。其の子孫から天子様に御忠義を盡された田道守が出てゐます。

百濟の王子も此方に来られ、日本の人になつたことが文獻に見へてゐます。

其の頃扶餘へ澤山日本から武將や使節、救援軍、留學生等が來てゐます。

それ等の人々が恰も自分のところに居るときの如く、何等不自由を感じなかつたのであります。つまり一家の親を爲してゐたのです。

扶餘から我が國に渡來せしばかりでなく、進んで彼の地に留學を願出る者がありました。

それは 崇峻天皇元年今から千三百五十五年前大和の國より島女豊女石女と云ふ三人の乙女が佛道修業の爲扶餘に來たのであります。此の三人は百濟から我國に使した恩奉首信と云ふ者に伴はれまして、此の地から船出し瀬戸内海から博多灣に至り香岐對馬を経て慶南河東へそれから蟾津江を遡り求禮を通りて南原に船を乗り捨てて全州、江景、扶餘と言つたコースで八重の汐路に棹し遙々憧れの地百濟に参りまして三年間佛道修業にいそしみ、大和の國に歸つて來ました。扶餘に來ましても、言葉に不自由を感じなかつたと申してゐます。

日本精神が其の頃彼の地の人に徹してゐたと思はれる事跡が非常に多い、皇室を尊び、神を敬ふ觀念が強かつたのであります。

百濟は扶餘に於て六百七十八年の永い歴史を閉ぢた、即ち今を距る千二百八十三年の古紀元二二〇年齊明天皇六年七月、百濟第三十一代義慈王二十年、唐の高宗顯慶五年強大を誇りし唐軍とこれに新羅武烈王の命を受けた金庾信軍の爲に遂に亡ぼされたのであります。敵は唐軍十三萬、新羅軍五萬合計十八萬に對し、味方僅かに十分の一にも達せぬ寡勢でありました。山東省の萊州を密かに出た高宗の部下蘇定方將軍が、水陸の兵十三萬を數多の船に分

乗せしめて黄海を仁川沖へ潮流に沿ふて参りまして、忠南と京畿道の境にある德積島に上陸し、此處で出迎へた新羅王子金法敏と密議し、百濟を攻略する計畫を樹てました。此のことを知つた百濟の王廷では色を失つたのであります。つまり大きな油斷がありました。それで防禦方法が纏まらなかつた、義慈王は將軍堦伯に五千の兵を與へて新羅兵の侵入を阻止するよう命じました。堦伯將軍が君命を受けて靜かに考へました、百濟の興亡豫斷し難し、おそらくは亡ぶならんと。それは當時國內の狀況を見るに、上下齊しく安逸遊惰に流れ、武備を怠つてゐたことが史上に見えてゐます。堦伯將軍は百濟三忠臣の一人でありまして、己が家に歸り妻子に告げて曰く、今回の戦争は百濟の興亡を決するならん。而して勝敗量り知るべからず或は亡ぶるに非ずや、若し敵軍此の土に入れば吾が妻孥歿して奴婢とならむ。其の生きて辱かしめられむよりは死して快きに如かず。と終に盡く之を殺して黃山の原（忠南連山）に参りまして三營を設けて敵新羅金庾信將軍を待つたのであります。堦伯將軍は大衆に誓ふて曰く。昔勾踐は五千人を以て吳の七十萬の衆を破れり。今日宜しく各々奮勵して勝を決し以て國恩に報すべしと。其の心情只國を思ふ念に満ち満ちてゐたのであります。此

の塔伯と云ふ將軍は花も實もある我が武士道精神を有してゐました。新羅の軍に官品と言ふ若者が居ました。父の品目と共に塔伯の軍に迫りました、父の命で此の官品が塔伯將軍の首をとり來た、其の時擒となりまして塔伯のところに連れられたのですが、塔伯將軍は胃を脱がしめて、其の年少なるに勇氣あるを愛し害を加へるに忍びず生きて還らしめました。しかし此の戦に百濟は衆寡敵せず、塔伯之れに戦死したのであります。

敵は十八萬、味方は僅かに一萬餘ですが一以て千に當り、國恩に報ゆるは此のときとばかり奮戦力闘、殆んど傷いて殞れたのであります。

七月十三日、扶餘東門に敵軍迫り、義慈王は太子隆と共に密かに熊津城に遁れた、宮廷の官女三千敵に屈するを潔とせず扶蘇山北麓絶壁より白馬江に紛々として落花の如く散つたのであります。其の場所を落花巖と呼ばれてゐますが、哀婉の史情切々胸を打つ史蹟地であります。國亂れて忠臣現ると申しますが、亡びる前に百濟には佐平成忠と言ふ忠臣あり、王様を諫めたのですが王は其の言を入れず、成忠を下獄せしめて食物を與たが食へなかつたので彼の忠臣成忠は哀れにも餓死致しました。成忠死に臨んで一書を獻つた。曰く、忠臣は死し

て君を忘れず願はくは一言して死せむ、臣時に觀變を察するに必ず兵革のことあらむ、凡そ兵を用ふる必ず審に地勢を擇み上流に處して以て敵に應ずべしと。水兵を白江（錦江）に入らしめず陸兵は炭峴（要害の地）を越へしめないことを進言したのですが、此の忠言も奸臣の爲入れられず王は城下の盟を爲し唐軍の俘となりしました。扶餘の平濟塔（今百濟塔と稱す）の碑文に依ると此の義慈王外王子重臣百姓等一萬三千五百二十名が唐の國に捕虜として連れ去られたのであります。蘇定方が扶餘を引揚げた後を守つたのが有名な劉仁願です。唐兵一萬と新羅兵七千を以て泗泚（扶餘）に留鎮しました。蘇定方引揚げしことを知つた百濟の各地には猛然として復興運動が起つたのです。先づ忠南禮山の任存城に據つた王族で鬼室福信と言ふ方が逸早く兵を擧げた。これに呼應して各地に復興の烽火が擧りました。扶餘を再び百濟のものにすべく、唐將劉仁願を攻めて扶餘を取り、保守したのは其の後間もなくのことでしたそして唐の俘虜百名餘りを伴ふて福信等が我國に渡り救を乞ふたのであります。

時は齊明天皇六年皇紀一三三〇年十月でした。彼等は切々胸を打つ王都の陷落状況と義慈王等が唐に連れ去られた状況を闕下に御奏上申上げたのですが、その言肺腑を抉ぐるが如く

でありました。しかして福信等は當時我が國に質（むかはり）となれる王（みこ）豊璋（ゆさ）を迎へて日清の復興を圖るべく豊璋の返還と救援軍の派遣方を哀訴嘆願したのでありました。

齊明天皇詔（みことのり）して曰く「帥（しゅ）を乞ひ救（すく）ひますことは古昔（いにしへ）に聞（き）けり危（あや）きを扶（たす）け絶えたるを繼（つ）ぐは自ら恒（つね）の典（のり）に著（あ）れたり百濟國（くだら）窮（きう）り來（き）と我（われ）に歸（かへ）るに本邦（ほんこく）喪亂（さうらん）びて依るところ靡（な）く告（つ）げむところもなし云々」と御仁愛深く御救援される旨（よ）宜（よろ）うせたまひ、其の年十二月二十四日難波（なにわ）に行幸軍器（ぎやうき）を備へせたまひ駿河國（しるが）に御命（みこと）じになられ軍船（いくさふね）を築造（きそ）せたまひ 仲哀天皇（なかつあへ）神功皇后（じんこうこう后）以來絶へてなかりし 天皇親征（てんかうしんせい）の儀式（ぎしき）を用（もち）させたまひ、六十八歳の御高齡（みかうりやう）且つ女性（にようせい）の御身を以て正月六日御船に御乗船遊ばされて此の地を御出發、瀬戸内海（せと）を西に向ひ三月博多灣（はくたわん）に入り大宰府（だいさいふ）に居（お）しましたが五月福岡縣朝倉郡宮野村（みやのむら）須川（すがわ）の朝倉橘廣庭宮（あさくらたちひろていみや）に入らせたまひ、此の宮を大本營（だほんえい）として百濟御救援のことに日夜御宸襟（みみづから）を惱（な）ませたまはれましたのでありますが、御救援半ばにして七月二十四日朝倉宮に於いて御崩御（みより）されましたことは御慰（なぐさ）むするだに恐懼（こゝろ）の極みであります。一昨年即ち昭和十六年は 天皇様御崩御（みより）されてより千二百八十年になります。私は扶餘神宮御祭神（みけじん）の大御代（みみろよ）に於ける御聖蹟（みせいせき）を巡り、大和から大

津の近江神宮へ、それから越前の氣比神宮等に參拜し、九州に赴き福岡市附近の遺蹟を視察したとき、福岡の木下謙太郎さんと言ふ郷土史家の御紹介で朝倉郡宮野村役場に參りまして、役場の方に案内され朝蘭山のほとりなる朝倉橘廣庭宮跡を訪れ往時を回想致しまして、洵に感慨無量（きんがいむりやう）するに忍びませんでした。

齊明天皇様の百濟御救援の御事蹟に就いては、半島の方々は特に御感激深きことゝ存じます。此の朝倉宮から約一里程離れた筑後川の上流、景色の良いところ朝倉村に惠蘇（みそ）の宿（しゆく）と言ふところがありますが、此のところに山がありまして其の山の中腹に 齊明天皇の賓宮（ひんきやう）を營（か）まれたと傳へられる場所があります。有名な 天智天皇様の御詠（みよ）じになられました、

秋の田の刈穂（かりほ）のいほのとまをあらみ

我が衣手（ころも）は露（つゆ）にぬれつつ

の御製は此のとき御詠じなされたものであると申してゐます。天智天皇様は先帝の御遺業（みよ）をつがせたまひて百濟王子豊璋（ゆさ）に妻（めかけ）すに多臣（おほみ）蔣敷（かたせき）の妹（いもうと）を以てし王位に就かせられ、兵士多數を附せられまして百濟へ御送還（みよ）されました。百濟の人々は我が國の援護（えんご）に感激したことは申す

までもありません。王の豊璋を海邊に迎へ感泣したのであります。天皇様は復興の杜石鬼
室福信に對し矢十萬雙、布一千端、糸五百斤、草二千張、綿二千斤、稻種三千斛を賜ひ、王
の豊璋には布三百端を賜ひ兵を多數派遣されて御救援されたのであります。扶餘の地下より
炭化した當時の叔、大豆、麥等が出てゐますが、我が朝廷より御下賜になつた御仁慈をお憶
びされる遺物と思ひます。

天皇様は福信に糧穀を御與へになられた以前にも五穀（米、麥、大豆、粟、稷）を通常五穀
と稱すを百濟に御送りになられ救援されてゐます。斯の如く廣大無邊なる御仁慈の程は世
界何れの國にもないのであります。當時我が國から百濟に來るよりも唐より來るほうが早か
つたのであります。

十倍に餘る敵軍を向ふに廻し、華々しい復興戰が忠南、全羅南北道を始め南鮮各地に展開
されました。

我が國からは第一次から第五次迄四萬に餘る兵が出たようです。

しかし悲しいことには百濟に内訌が起りました、一番大切な鬼室福信に對し王の豊璋は謀

反の心がある如く嫌ふて遂に慘殺したのでした、敵は得たりかしことと王の居ました周留城
を陥るべく大いに謀を計畫しました、我が軍はそういふことは知らず白村江より馬留
城援護に向はんとして利あらず多數の將士萬斛の怨を呑んで江上に散つたのであります。

周留城と申しますのは錦江の下流にあつた要害の城です、こゝを根拠として扶餘の土地
を奪取しようと百濟の人々が據りしところです。天智天皇二年九月此の周留城が陥り、百
濟の復興が覺束なくなりました。そして敵に屈することを潔とせざる百濟の人々が我が軍
の援護を受け日本に渡ることを決意し百禮城（慶南南海島に擬せらる）に在る我が派遣軍の
將領に會ひ、此のことを謀り且つ願つたのであります。彼等は如何に我が國を慕ひしかはこ
れを見てもよく御判りのことと思ひます。

其の時にこれ程我が國へ來たかと言ひますと、此の時より四五年の間に三千名餘り來てゐ
ます。その人等は 天智天皇様の在します近江の滋賀の都附近に多く住まつたのでありま
す。天皇様はこれ等歸化人に對し一視同仁の大御心を垂れさせたまひ、夫々職を御與へに
なり功多き人々には位を御下賜されたので一同感泣して忠誠をつくすことを御互に誓つて居

ります。其の時

たちはなはわの枝々^{えだえだ}がれども

王^み貫くとき同じ結^{むす}を貫く

と言ふ歌を唱つて一視同仁の御恵を謳歌したのであります。此の百濟から参りました人の中に偉いの方が居られました、彼の復興の柱石であつた鬼室福信の子集斯も一族と共に來てゐます。父福信の功績を以て小錦下（從五位下に相當する）位を賜り學職頭に任ぜられ、文教のことにいそしみ、近江の國（滋賀縣）に終りを完ふし其の墓は蒲生郡東櫻谷村小野と言ふ部落に在ります。私は去る昭和十五年五月滋賀縣を巡りました時に此の鬼室集斯のお墓に参詣し、且つ傍にあります集斯を祭神とする西宮小野神社に参拜致しまして美しき内鮮一體史を偲びました。其の時代様々な技術を持つた者が我が國へ渡つてゐます。

天智天皇四年八月^{はつしげんしや}春初と言ふ百濟歸化人に長門國へ城を築かせました、其の時憶禮福留^{おくりふりう}と四北福夫^{よきたふくお}の二人の百濟歸化人に福岡縣筑紫郡の大野城と佐賀縣三養基郡に椽（き）の城を築かせてゐます、其の後對馬に金田城、讃岐に屋島城、大和に高安城を築いてゐま

す。

昨年春私は大和の高安城を視察致しました。信貴山にケーブルで登り、生駒郡南畑村に電車で行き其處の高井さんと言ふお方の御紹介で石井義太郎さんに案内されまして此の城を探りましたが、私方に遺る百濟の城と全く同様の築城法です。勿論河内一帯に私方から來た等が相當多數居つたことは事實で、此等百濟の人々が國防上重要なことに當然従事してゐるのです。其の頃義慈王の王子で禪廣（善光とも稱す豐璋の弟）が兄の安否を氣遣ながら我が國に居たが、此の王子は攝津の住吉附近に居たようです。然し後には此の子孫は枚方に居ました。此のお方の曾孫に誠忠無二の百濟王敬福が出てゐます。今から千二百年程前の話ですが、此の敬福が陸奥守として蝦夷^{えみし}の地に皇威宣揚に努めて居た時、宮城縣の小田の郡^{こまのぐん}と言ふところから金を掘つて献上されました。我が國では此の時に始めて金を採掘したのです、時の帝^{みかど}聖武天皇様が奈良に東大寺を建立し、彼の有名な大佛様を御造りになつて居た際として非常に御歡び^{よろこ}になりました。そして此の献上された金を大佛様に御使用なされたのであります。天皇様は金を出たことを諸々の神社に奉幣しまして御奉告されたのであります、大

佛さん（毘盧舍那佛）にも御奉告されました。敬福は従五位でありましたが、其の誠忠を賞せられて従三位に叙せられたのです、即ち敬福の至誠が天に通じたのでありました。ここに就いて少々御話申上げ、歸化族として皇國に貢献した事蹟を御偲びたいと考へます。

敬福の曾祖父禪廣は百濟義慈王（扶餘の亡びし時唐の捕虜となりて彼の地に客死す）の二男として生れ兄の豊璋と共に、^{（天智天皇三年三月我が國に参りました、そして）}天智天皇の御代百濟の復興が内訌の爲挫折したので、其の儘我が國に留まりて歸化し難波の地に居たのです。禪廣は、持統天皇の御代百濟王の號を賜りました、其の子昌成、孫郎廣、曾孫禪廣となつてゐます。敬福は天平十五年四十六歳のとき陸奥となり、天平十八年上總守、同年九月再び陸奥守となつて勤務せるとき金を採取して獻つたのです。天平勝寶二年五月宮内卿に任官、同四年五月常陸の守となり、八年五月山作司、天平寶字元年六月出雲守、同三年七月伊豫守、讃岐守等を歴任し晩年南海道節度使として所管十二州、船百二十一隻、兵士一萬二千五百人、水手四千九百三十人を統率し瀬戸内海に活躍しました、これが三島水軍として名を

傳へられ百濟の阿佐太子を祭神としてゐます。

社の傍に百濟寺社がありますが、これも敬福が建てたと傳へられてゐます。

敬福は河内國交野郡（現在の枚方附近）を賜つて其處を本居としてゐました、敬福の孫にあたる俊哲は陸奥鎮守將軍として令名があつた、あの有名な坂上田村麿と共に蝦夷の地に皇威を宣揚したのです。次に先程も申上げましたが、皆様方が朝な夕な御参詣された御當地の四天王寺でありますが、此の四天王寺は今から千三百五十年ばかり前に聖德太子様の御發願で建てられたのですが、このお建てられたのですが、このお寺を建てる時百濟から金剛重光と言ふ寺工が來ました、もつとも現在の建物は當初のものとは違つてゐます、それは度々の火災で建て替つたのです。しかし金剛さんの御子孫は四天王寺の御仕事を連綿として續けて居られます。今の御當主女工匠金剛芳江さんと種々話しましたが、御主人の治一さんは昭和七年九年逝去されました、ところが茲に不思議なことがあります。それは御主人の三年忌に當る昭和九年九月二十一日のことでした、法要最中に彼の猛烈な關西地方を襲つた颱風の

爲四天王寺の塔があつと言ふ間に倒壊したのです。そこで法事どころではなく集つてゐた者一同馳けつけて不敢取善後策を講じたような次第です。

そして復興策が協議せられ、建てることに決定しましたが、誰に此の大事業を委すべきやと取沙汰されてゐました。金剛家は女當主であるし、と言つた噂がありましたが、御祖先以來の關係があり金剛家で一手に引受けて工事施行を致すことになりまして、昭和十年五月起工、天沼俊一博士の御設計と監督に由り同十五年五月立派に竣工致しました。私も此の塔の落慶式に天沼博士の御招待を受け列席の光榮に浴しましたが、其の時に金剛芳江さんにお目にかかり御祝辭を申し上げましたが女手であれ程の大工事を完全に仕上げた彼の女丈夫は歡喜に感極り嬉涙を拭はれながら御話をされました。此の四天王寺を一番始め建てたときは丁度私の居ります扶餘から我が國に始めて蓮花文瓦の製法を傳へた時代とて、お寺の境内から出る古瓦は扶餘から出るものと同じであります。寺の建築様式も扶餘から發見された百濟寺社のものと同様であります、扶餘は飛鳥文化母體の地であることは斯うした遺物の上に於いて充分考證されるのです。

私は郷里の伊豫から朝鮮扶餘に参りまして三十年になりますが、三十年前の半島と今日の半島を比較しますと隔世の感に打たれます。凡ゆる點に於いて施政の目覺しき躍進を爲してゐます、即ち一視同仁聖旨を奉戴する施政三十餘年の惠澤は、半島の産業經濟を飛躍的に發展せしめたのであります、物的民度が著しく向上せるのみでなく、精神的方面に於いても舊時の面目を一新してゐます。内地人同胞と共に一身を君國に捧ぐる機會を享有せんことを要望する者尠からず、名實共に皇國臣民として奉公の至誠を致さんとする機運澎湃として漲りつつあります。人口も千三百萬が二千五百萬となつて千二百萬を三十餘年間に増加してゐます。勤勞精神の向上としませうか、半島婦人の屋外勞働が著しく目立つてゐます、農繁期等内地の婦人と變らぬようになつた事等當局御指導の賜であります。

扶餘には扶餘神宮御造營の勤勞奉仕隊が毎年春から秋まで毎日往來し、今迄約七萬程來てゐます。私は此の人々に神宮御創立の御趣意をお話してゐますが、私共に如何にして一視同仁の御聖旨に應へ奉るべきかを常に念頭に置いて、内容の充實した精神修養に努めなければ東亞の盟主たる日本國民として光榮ある責務を果すことができません、崇高なる精神を涵養致

しませうと叫んでゐます。そして神國日本に生れた有難さを説いてゐます。神國日本に生を享けた歡喜、それは皆様もよく御判りのことと思ひます。現津神であらせらる 天皇様を上に戴き、神の御子である國民は恰も太陽を受けて草木がすすくと伸びるが如く浴き大御光を享受してゐるのです。天皇様の御徳は深厚であることは教旨勅語に御示しになつてゐる如くであります。

古い時代百濟の肖古王と言ふお方が 神功皇后様に御誓してゐます『貴國の鴻恩天地より重し何れの日何れの時にか敢て忘れまつること有らめ哉聖王上に在まして明けきこと日月の如の今臣下に在りて固きこと山岳の如し永に 西蕃と爲りて終に貳心なからまし』と我が國を貴國と云つてゐます、そして肖古王に孫の忱流王に語りて曰く『今我が通ふ海の東の貴國は是れ天の啓き給ふ所なり是を以て天恩を垂れて海の西を割きて我に賜へり是に由て國の基永に固し汝當に善く和好を脩めて土物を衆め斂めて貢奉ることを絶さずば死ると雖も何の恨かあらむ』と言つてゐます、神功皇后様の御代（皇紀九〇年）朝鮮全北の井邑郡古阜面の斗升山（一名都順山）に於いて 神功皇后の御使千熊長彦と此の肖古王及

王子の貴須が巖上に誓をしてゐます『若し草を敷きて座と爲さば恐らくは火に焼かれんことを且た木を取りて坐と爲さば恐らくは水の爲に流れんことを故磐石に居りて坐ふことは長遠く朽ちざる事を示すものなり是を以て自今以後千秋萬歳絶ゆることなく窮ることなく常に西蕃と稱ひつつ春秋に朝貢らむ』と百濟王が誓つたのであります。此の會盟以來百濟の滅亡に至るまで四百二十年の長きに涉り百濟は絶えず我が國に王子を送り、或は貢物を獻る等天皇に歸一し奉り至誠盡忠眞に（おまつりい）してゐたのであります。我が國も『まつりう』百濟に對し恒に厚く援護の手が差し伸べられ美しき内鮮一體が具現結實したのであります。勿論新羅高句麗も一齊に貢物を獻り『おまつりい』してゐました。百濟は扶餘に都を造つて以後特に交通が頻繁となり、文物の交流盛んとなつたのです。

扶餘の古墳を掘られた京都帝大の梅原教授が記してゐる如く『棺材は内地の高野槨を用ひてゐる、此の木は朝鮮に當時なかつた樹木で、内地の紀州山脈とか四國山脈、九州等にあり遙々扶餘の地へ内地から運んで作られたのであらう。斯うしたところにも深き内鮮交渉の跡が見られる』と實に扶餘の地上にも地下にも當時を偲ぶべき史料が満ちてゐます。

今回扶餘三山の一たる南嶺（その古扶餘王都ありし頃此の山に神人ましまして王都を守つたと傳へらる）の西麓に 應神天皇の御代我が國へ儒學を傳へた忠誠無二と言はれました博士王仁先生の碑が東京の王仁會（會長四宮憲章先生）で建てられることになりましたが、内鮮一體史上に燦然として輝く王仁先生の御事蹟、それは洵に美しいものがあります。

王仁博士のお墓は北河内郡管原村長尾にあり、曾て徳川五代將軍綱吉の頃徳川光圀公關西巡遊のとき草莽の中に埋もれ久しく判らなかつた此のお墓を世に顯彰されたと言はれてゐます。博士王仁は百濟の生れですが、祖父の時代に支那の山東省から半島に來てゐます。漢の高祖の後裔と傳へられ、父を王狗と申します。應神天皇様の十六年二月來朝されまして論語十卷千字文一卷を獻上皇子菟道稚郎子の師となられ、我が國儒學の祖と仰がれてゐます。

博士王仁が論語を齎したことは儒學思想の渡來を意味し、ために我が國民思想の開發されたところは大有りました。しかし忠孝と敬神崇祖とを重んずる日本精神に育ぐまれた我が國民的生活は支那よりも遙かに儒教精神を具備してゐましたので儒教に觸れてもその思想的奴隸になることはなくこれによつて道德的觀念を高め、次第にその精神を政治に活用す

るようになりました。彼の 聖德太子の十七條憲法や、大化の改革の御事業に於ける理論的根據の一部はそこに胚胎してゐると言はれます。王仁先生は此の大阪に住み 應神天皇様より 仁德天皇様を経て 履中天皇様の大御代に至る長い間御仕へしたのです。王仁先生は學問のことばかりでなく殖産方面にも大きな功績を遺されてゐます。晩年は史官となつて朝廷のお藏の記録を書く役目をしてゐます、王仁先生は論語千字文を獻つた時梅を携へたことがむかしから傳へられてゐます。

大田南畝の詩に

曾て渡る三韓海上の雲

難波の江畔清分を發す

王仁歸化せしとき携ふ何者

論語 梅花 千字文

又王仁先生が作られたと言ふ有名な歌に

難波津に咲くや此の花冬ごもり

今を春べと咲くや此の花
は梅の花と傳へられてゐます。

兎に角『王仁先生と梅』『梅と儒學』は聯携的に考へられるのです。

去る昭和八年春東京の澁澤敬三子爵が私の顯彰會に内地の著名の梅の木を澤山寄贈されました。王仁博士が百濟から携へたと言ふ梅が治皇恩に浴して皇土に繁衍し千六百五十年の後再び百濟の故地に還つたのであります。皇土に繁衍したのは梅ばかりではないでせう。

當時歸化された半島の人々何れも廣大無邊なる御仁慈に感泣しつつ繁衍されたのであります。一輪の梅花馥郁として清芍を發するが如く、内鮮一體の美しき史實又燦然として幾千載の後までも輝いてゐます。

扶餘神宮御創立の挿話と申しませうか、此の梅が不思議な御縁を取持つてゐます。

昭和十二年の早春黃海道から忠清南道へ榮轉されて着任した鄭僑源知事さんが其の年四月始め扶餘へ初巡視に見へたときのお話です。彼の澁澤さんが心を籠めて寄贈された梅が見事に蕾を持ちばつと開いた折に鄭閣下が來扶されたのです。内地では梅は二月に咲くようです

が私の居る扶餘では四月に入り蓮翹と相前後して開きます、次いで櫻とかつつじが開き、一時に百花燦爛とし咲き誇ります。

鄭知事さんの前任地黃海道には梅が少いそうですが、此の香り高い梅の花が知事さんの關心を持つたのは當然と言ひ得られるでせう。そして梅に絡まる話を聽かれ、美しい内鮮一體の史實を究められました。其の頃です、當時朝鮮軍司令官でありました現在總督さん小磯閣下が扶餘を御視察され、南總督閣下に扶餘に官幣社御創立のことに付御進言されたそうです。鄭知事さんも會議に此のことを提案されたのです。當時、總督府としても御計畫されてゐたようです。敬神家として萬人より仰がれてゐる南、小磯兩閣下や鄭知事さんの至誠が神に通じない筈はありません、昭和十四年三月官幣社御創立の儀決定し、次いで六月十五日畏き邊りより御社格官幣大社御社號扶餘神宮と仰出されました。此の日拓務大臣でありました小磯閣下は謹話を發表されました。地元扶餘や忠清南道民は各神社にて奉告祭を執行し旗行列に提灯行列に感激の坩堝と化しました、期せずして半島の各地から奉賛金を送つて來る者、勤勞奉仕を願つて來る者等當局を感動せしめた美談佳話が次々に生れました。

御祭神として御勸請申上ぐる 應神天皇様 齊明天皇様 天智天皇様 神功皇后様の大御代朝鮮の各地より歸化された人は相當ありますが、其の中でも百濟の人が一番多いようです。今から千二百二十八年前 嵯峨天皇弘仁六年勅選された新撰姓氏録を見ましても百濟系百二十氏、高句麗系四十七氏、新羅系十六氏計百八十三氏となつてゐます。其の本質となつてゐるのは京都、大阪、奈良であり、これ等の氏族がさらに地方へ繁衍しまして常陸、近江、美濃、上野、陸奥、越前、但馬、美作、出雲、播磨、備前、安藝、周防、紀伊、伊豫、阿波、豊前、薩摩等の各地にもそれ／＼本據を有したようです。

最初彼等の歸化當時風俗、習慣等其の生活には時の政府は何等の交渉もせられなかつた。姓氏の如きも故國に在りしときのまゝを稱させてゐたのでした。夫れが 孝謙天皇様の御代に歸化民の志望に依つて姓を賜ふことを許さるゝや以來續々と其の子孫から改姓の請願が出ました。其の一例は甲斐居住の百濟歸化族（攝津より天智天皇五年に移りし者）が

「吾々の祖先は兎も角、自分共は最早立派な日本人であるから日本式の姓名に改めたい」との理由で子孫百九十人一同が連署請願しました。政府は此の請願を理由ありとして許可さ

れ、それ／＼姓を賜つたので、是等の子孫は齊しく再拜して 天恩の廣大を感謝し茲に名實共に日本國民となつたことを喜びそして自ら進んで同化へと力めたのであります。

是等の人々の御子孫は相當多數であり、全國的に繁衍してゐるのであります。しかし其の子孫は現在顔を見ても、言葉を聞いても判らないのであります。もつとも家系のはつきりしてゐるのは別なお話です。半島の皆様方の御祖先と御親類に當る人は此の地にも多いことは事實であります、今や内鮮一體の極致とも言ふべき徴兵制の半島實施を目前に控へ、又昭和二十一年よりは義務教育制も實施されることになりまして名實共に皇國民として總てが内地の人と異らない義務を履行することになつたのであります。

本日の意義深き 聖旨奉戴記念大講演會に際し想を遠く扶餘神宮御祭神の大御代に致されまして美しき内鮮一體を具現せる聖地扶餘の史蹟竝に内鮮一體の史實を御靜聽下さいましたことを感謝致します。

扶餘は山紫水明の地であり、廣々と展開せる都城の外廓を繞れる白馬江の清流に配するに高からず低からずといった山又山は一大景觀であり、一幅の名畫を鑑賞すると言つた感じが

致します。古塔残礎は各所に點在し古の面影を偲ぶに充分であります。半島の方はもとより内地から朝鮮へ御旅行の際には必ず御立寄下さいまして往時を御偲びしていただきたいと思ひます。今年からは神宮御造營工事も進捗し、臺灣から参りました御用材の製材始祭式も近い内に行はれる筈です、白馬江の清流に抱かれた扶蘇山の御神域常盤木に映へる丹塗の宮柱（御本殿は白木造）は森嚴にして壯麗奇詭に絶するものがあります。

皆様皇國日本は今や千載一遇の聖戦を行つてゐる、此の機會に於いて顧て恥づるなき行を爲し、道義朝鮮を確立されまして長き御聖旨を奉戴し、完勝に鐵桶の固めを爲し、盡忠報國の精神を彌が上にも昂揚致しませう。（り）（大阪に於ける）

『高麗神社』と千年前の内鮮親和史

東京 前田 文夫

意義深い四月三日の神武天皇祭の翌日、古來内鮮一體の由緒深い埼玉縣の高麗神社境に、數百年來咲き誇る老櫻若木を、このたび朝鮮神宮へ獻納、朝鮮神宮から連翹と落葉松を高麗神社に移植することになり、既に双方選樹を終つて晴れの植樹式を待つてゐる、この高麗神社若光王を祀る高麗神社を訪ねて、今から凡そ千三百年前の盛んだつた内鮮一體の跡をふり返つて見る。

東京池袋から西北へ武蔵野電車で約二時間、高麗村は、秩父連峰の翠巒に抱かれた平和な

村だ、高麗驛を出ると先づ丈餘の將軍標が、人目を惹き、遠く飛鳥朝時代の内鮮の交はりを思はせる、川越行きのバスにゆられること約二十分、高麗神社は緑に包まれた三角山を背に清々しい齋域を展げてゐる、近時内鮮一體の畫期的な顯現とともに同社奉賛會の事業も漸く進み神域の規模極めて莊嚴雄大である大鳥居から神殿へ、神々しく淨められた參道を踏んで約一丁目、右手に今度朝鮮神宮に奉納せられる櫻の親木がある、遠く平安朝の昔から、内鮮のゆかりも深く咲き誇つた神木で、骨々たる老樹の風情にも、床しい歴史の匂ひが籠り、思ひは遠く飛鳥朝の昔、高勾麗王若光亡命のことにはせる、顧みる凡そ千三百年前、唐、新羅の聯合軍が百濟侵寇の餘勢をかつて高勾麗を侵した。

わが齊明天皇の御代である、皇極の御代以來、女帝に在す天皇を御輔佐あらせられた中大兄皇子は、百濟、高勾麗の請を容れ給ひ、勅を奉じて暴戾飽くなき唐を誅すべく援兵を遣はされた、然し時既に遅く、百濟滅亡の後をうけて、さしも東滿、北中鮮に君臨した高勾麗王國も漸次衰亡の途を辿り、わが天智天皇の七年（一二七二年前）世を代ふること二十八王、社稷を保つこと七百五年を以て寶藏王の時滅亡した、高勾麗王族若光以下遺臣はわが國の情

誼を頼り、平壤の都を後に朝鮮灣を東に向つて海路亡命の旅についた、舟は相模灣に入り、大磯に着いた、貴顯の相貌もゆたかに白髯をしごく若光を見て、里人達は恭しくこれを迎へた、そして化粧坂から花水橋に至る景勝の地に御殿を築き、その徳を慕ひつつ安住の誼みを與へた、わが朝廷の御寵遇も極めて篤く、大寶三年には從五位下に叙せられ王の姓を賜つた、やがて元正天皇の靈龜二年、優詔を賜うて駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野の七國に散居する高麗人千七百九十九人を、武藏野の一角に集め、この高麗人安住の地を高麗郡（現埼玉縣入間高麗村）と名づけ、若光王を郡長に封じた。

若光王を權現様と崇め仰いでゐた大磯の里人が、その時、つきぬ名残りに泣き伏して別れを惜んだのはいふ迄もあるまい、里人達は中峰の顛に高來神社上の宮を齋き、その麓には下の宮を建て、高麗王の靈を祀り、その祭典には次のやうな祝歌が傳へられてゐる。

抑々權現丸の由來を悉く尋ねれば、應神天皇十六の御時より、俄かに海上騒がしく、浦の者共怪しみて、遙かに沖を見てあれば、唐船急ぎ八の帆を上げ、大磯の方へ棹をとり、走り寄るよと見るうちに程なく汀に船は着き、浦の漁船漕ぎ寄せて、かの船の中よりも翁二人立

ちりて、櫓に登り聲をあげ、汝等それにてよく聞けよ、われは日本の者にあらず、諸越の高麗國の守護なるが、邪慳な國を逃れ來て、大日本に志し、汝等歸依する者なれば、大磯浦の守護となり、子孫繁昌と守るべし、あらありがたやと拜すれば、やがて漁師の船に乗り移り上らせ給ふ、御代よりも權現様を載せ奉りし船なれば、權現丸とはこれをいふなれよ、ソウリヤヤンヤイヤン

かくて若光王を御中心とする高麗郡の生活は始まつた、そして廣漠涯しなき武藏野の沃野には遠く千三百年の昔から、内鮮人相ともに手を取り合つて、田を耕し、茶を摘み合ふ親和の日が續けられたのである。

天平の末、若光王は新生の運命を異郷に求めて、武藏野の開拓に魂を打ち込む同胞の姿に、満足の微笑さへ泛べて薨去した、慈父と頼む王の死に悲嘆やるかたない高麗人達は、東の郷、西の郷から相誘うて王邸に集まり、號泣の聲は天地を動搖せしめた、敬慕せる王を神と齋さまつり、宅地の裏山に廟を建て、これを高麗明神（又は大宮明神）と稱して崇めた、これが今日の高麗神社の起源である。

又、この高麗郡ばかりでなく遠く相模、上総、常陸、下野等東國各地からその分祠を招請するもの多く、王が高麗に及んで白髭長く胸まで垂れてゐたところから、白髭神社と稱し、今になほ、東京向島の白髭神社以下、數十社を算へてゐる。

かくて高麗郡の中心は生ける若光王から神として祀る高麗神社に代り、郡民の王に對する信仰は彼等に新しい信念の生活を教へた、そしてこの地からは我國史上に顯著な足跡を残した人が數多く出た、高句麗第七世の裔、孫福徳の子背奈行文は大學助として官に仕へ、我國最初の漢詩集である『懷風藻』に二首の詩を遺し『萬葉集』にも一首の和歌を傳へてゐる、又行文の甥、高麗朝臣福信は少年の頃京に上り、聖武天皇をはじめ奉り六朝に仕へ、春宮亮、紫微少將、信濃大輔、造宮卿、武守、近江守、但馬守、彈正尹等榮位を歴任、從三位に叙せられてゐるほか、延暦四年退官の時には、畏くも恒武天皇から御杖並に御衾を賜つてゐる、そのほか、天平寶字五年遣高麗使となつた。高麗大山、翌年遣唐副使になつた高麗廣山はじめ『吾妻鏡』には頼朝上洛の際前驅を承つた高麗太郎、武藏七黨系圖には高麗五郎經家の名があり、後三條天皇の延久年間には高麗、澄、李澄、清義、希弘等勤王家として著名な

人物を輩出、鎌倉の初期には當時勢威最も優れてゐる源氏の一族と結婚、歴史上大きな活躍をしてゐる。

高麗神社の裏に高麗山聖天院がある、天平勝寶三年、往時名僧知識の譽高かつた勝樂寂するや、若光の嫡孫弘仁が勝樂の弟子聖雲とともにその遺骸を収めて寺を建て勝樂寺と號したもので現在は歡喜天を安置、五十四の末寺がある、若光王の墓は勝樂寺の門前にあり層塔式浮圖が高句麗文化の名残りを止めてゐる。

△

若光王の嫡裔は現在五十八代、高麗明津氏に至る間代々高麗神社の社掌として仕へてゐる、この生ける歴史の人當代明津氏は、興隆の歴史を秘めた老櫻の蕾を感慨深く見やりながら靜かに語り始める。

『故地に亡びた高句麗は、日本の地に神として永遠に繁榮の魂を止めたのです、思ふに、高句麗や百濟が衰亡の途を辿り始めて日本に亡命した飛鳥朝の末期から、奈良朝時代は大和民族の偉大なる抱擁力が最高度に内鮮一體を發揮した時です、前年、或る朝鮮生れ

の人で祖先が半島人であることにだけ目を感じませんか——と言つたやうな愚問を出した人があつたが、馬鹿々々しくて顔を見そやりましたネ、關東人と高麗人との因縁は史實から見決して淺くはありません、今日の關東人が上代に於ける大和民族と朝鮮民族の同化に由來すると言ふのは決して過言でなく、實に彼等こそは我々血統上の祖先の一部です、何十年かのうちに、心も形體も本當に融け合せて行く、これこそ大和民族の偉大なる抱擁力であり、民族發展の基調なのです——』

往古を偲んで内鮮一體の理念を説く明津氏の語氣は強い、故地の總鎮守朝鮮神宮へ、晴れて若木を奉獻する老櫻には注連が張られ、そして枯骨に結ぶこの注連には内鮮一體の表徴として今若木が玄海を越え、故地に咲き誇らんとする喜びが感じられる、思ひなしか、今年は特に蕾も多い、四月三日晴れて若木が南山の聖域に移植せられる頃からこの歴史の花は往昔をその儘、若木への手向けに、一入絢爛と咲き誇るであらう。

素戔鳴尊、半島御開發の史蹟

春川 宮内 幾太郎

今や忠勇無雙なる皇軍將兵の勇戦奮闘に依り東亞十億民族更生の歴史は日毎に改編せられつゝあるのである。斯の時に方り、素戔鳴尊半島御開發の史蹟を究明して、各種の現存せる史實に基き數十年來縣案の書紀の所謂曾戸茂梨之處が江原道春川邑牛頭山曾戸茂梨の埋地なることを確信すると共に、内鮮同祖の歴史的確證を中外に公表するの機運に到達せしことは國家の爲にも何よりも欣幸とする所である。

遠き神代の昔に於て、思ひ多くも我が建國の始祖、天照大神の御弟に亘らみ給ふ素戔鳴尊が、御父伊弉諾命より「汝が命は海原を知らせ」と事依さしまつられ、韓郷之島に御渡海遊

され曾戸茂梨之處に住し給ひて、半島御開發の爲に櫛風沐雨多年御盡瘁遊され給らしことは、我が國史の根幹たる古事記に「須佐之男命遂に根國(底國)に入る」と、記載せられたるを始め、日本書紀神代上卷に「素戔鳴尊帥其子五十猛命降到於新羅國居曾戸茂梨之處」と、記載せられたる古典に徴し日月の如くに明瞭にして、如何なる學者も此の史實に對しては鴻大無邊なる御聖業を喝仰せぬものは無いのである。

而して書紀の新羅國が、今より一千二百二十五年前(元正天皇養老四年)舍人親王を總裁として太安萬侶等が日本書紀を編纂したる時代に於ては半島全土を占有せし事實に因り半島全土を指すものにして、其の半島の天地には素戔鳴尊の住し給ひし曾戸茂梨之處が、必ず何れの處にか現存すべきことも異論の存せぬ所である。

然るに施政以來三十餘年を経過したる今日に於ても、尙ほ未だ其の曾戸茂梨之處が何れの地點なるやに付ては學說頗る區々にして殆ど歸結する所無く、吉田東伍博士は其の著『日韓古史斷』に於て「曾戸茂梨は韓語牛頭の義、彼の地の名山なり、我が後世の俗、素戔鳴尊を祀りて牛頭天皇と稱するは是に因る」と斷じ、文科大學教授星野恒博士は八坂社舊記上卷の

八坂郷鎮座大神の記に因りて『素戔鳴尊を牛頭天皇と稱しまつるも佛書より起るに非ず、韓地より來りしと云ふは然るも乍ら其の牛頭山を樂浪なりとせるは非なり、新羅牛頭山に屬し、もと高麗の地、其の初羅國なり』と説き。史界の權威者喜田貞吉博士も又之を肯定して、新羅牛頭山は則ち今の江原道春川にして其の牛頭山曾戸茂梨の聖地なりとし。既に文部省檢定濟地理教科書、新撰朝鮮歴史地理辭典、普通學校國史教授書の一部等にも其の曾戸茂梨の處は今の江原道春川なるべしと指摘せられ。東京帝國大學文學部教授姉崎博士も又其の著『三省堂發兌新修百科辭典』に於て『神代の史說に素戔鳴尊は御子五十猛命を伴ひ朝鮮の地（新羅國）曾戸茂梨に渡り給ふ。其の地不明なれども一説に朝鮮語にて牛を（ンジ）と呼び頭を（モリ）と呼ぶ、即ち江原道春川府にある牛頭山なるべし』と指摘せるにも拘らず、言語學者の金澤庄三郎博士は其の著『日韓同祖論』に於て、曾戸茂梨の語を蘇之保留と解し、『蘇之保留の之は助辭で之を除いた蘇保留は朝鮮史に所謂徐伐（ソバル）で、新羅國、或は新羅國都のことである』と解せられ、素戔鳴尊を新羅明神と申し奉るも其の故なりとして、曾戸茂梨の處は今の慶尙北道慶州の地と斷じ。原博士は『曾戸茂梨の原意は戸は開闢に

して、茂梨は村落の意義なり』と稱し。幣原坦博士は金澤庄三郎博士と同じく都府と解せるも、其の地域は地理的事情に基きて慶尙南道金海の西方一里十丁餘の今の熊川なるべしと説き。更に忠清南道公州說、平安北道妙高山說等諸說枚擧の遑なく、爲に半島御開發の祖神の御神靈を恐れ多くも宇宙に迷はせ奉る結果を招來せることは誠に恐懼の極みである。

元より學者は忠實に其の専門の途を究めて自己の信する所に因り其の學說を公表し、之を天下に闡明するに敢て憚る所無く、又何人の制肘をも受くるものには非ざるは言を俟たざる所なれども、事苟くも國體の淵源に關する斯の如き重大なる史蹟の見解を公表するに方りては、世論に及ぼす影響の如何に重大なるべきかを慎重考慮し尠くとも、諸說を綜合研究の上、現地に付ても其の地勢、史跡、傳説、考證等をも詳細調査究明し、發表すべきが當然である。然るに佛教渡來以來の神佛混合の我が史觀、乃至は科學萬能の歐米文化の影響に依れる我が國の學者の一部には、幽邃なる我が國體の淵源に關する神代の歴史に付ても神話の如くに説くものあり。神代文字の存在をも敢て究めず重視せず、古代の言ひ繼ぎ傳承をも殊更に輕視せむとするものあり、爲に曾戸茂梨の究明に付きても斯の如き不測の結果を招來せし

ことは甚だ遺憾千萬である。

而しながら尊嚴萬邦に比類無き我が建國の始めに於て、恐れ多くも皇祖 天照大神より天壤と共に窮り無き皇孫に傳へ給ひし三種の神器は、萬世一系の皇室に相傳はり、其の御一品の天の叢雲の劍は御弟の素戔鳴尊が出雲に於て八岐の蛇と稱する大山住の賊徒を平定して得させ給ひし寶劍を、御姉 天照大神に奉りて皇道歸一の赤誠を披瀝遊ばされ給ひしものなることは歴史に徴し明瞭である。

其の素戔鳴尊が武勇の神として、航海の神として、大八洲御經營の雄圖の一部たりし、韓郷之島に御渡海遊ばされ「遂に槌遠の根國に入り給ひ」歴代御襲名の上十七代、一千餘年の長きに亘り、農業の神としては氣候寒冷地味硃確米の原産地にてはあらざりし此の半島の天地に、南方原産の稻種を葦原中國の先住民族たりし大わたつみ族の頭領保食神より得させ給ひて移し植へ今日の穀倉の基を開き給ひ。植林の神としては杉、檜、桧、椴、樟等を始め八十餘種類の各種の樹種を移し植へ、李朝以前の鬱蒼たる半島樹海の基を樹て給ひ。惡魔除の守護神としては御自ら惡魔除の守護神なりと宣らせ給ひて、全鮮各地を御巡歴の上衆庶を御

救済遊ばされ給ひしことは各種の古典に精通せる神代學界權威者の諸説の一致せる所であり、英邁武勇の神としての御足跡は全半島津々浦々は云ふに及ばず、滿洲、蒙古、支那大陸にまでも及び給へる御事も又諸説の一致する所である。

されば素戔鳴尊十七代の御遺跡は全鮮各地は云ふに及ばず、遠く滿洲、支那大陸にまでも現存すべきは當然にして、狹義の書紀の曾戸茂梨の地域に春川、慶州、熊川等區々たる學説を固執して其の御神靈を神鎮め奉る可き施設を遷延することは不敬を重ねるのみにして臣子の道にあらざるに鑑み、玆に諸説を綜合し、現地に付きても民衆の信仰其の他を調査の上、廣義の書紀の曾戸茂梨の處は果して何れの處なるやを詳細査察検討し、地勢、交通、傳説は元より現存史跡を始めとし、太古以來の民衆の絶對的に信仰等、内鮮同祖の顯然たる史實に基き江原道春川邑牛頭山曾戸茂梨の聖地を遠き神代の昔に於ける素戔鳴尊半島御開發の遺蹟として究明公表すると同時に、斯の崇高なる歴史を通じて、内鮮一億の同胞の總てが、共に世界に冠たる天孫民族の末裔たることを、中外に公表するの機運に到達せしことは、國家の爲にも何よりも欣幸とする所である。

地名及歴史的沿岸。春川牛頭山會戸茂梨の地名歴史的沿岸を調査すれば、地名的には太古以來此の地方を牛頭、牛首、春川、朔州、光海、安陽、壽春、鳳山等と呼稱し、高麗史に『春州本鎭國、新羅善德王六年爲牛首州』とあり、太古以來の牛頭、牛首を州名に採用したるものにして其の中央に位置せる頭牛山は古來會戸茂梨と稱し、臥牛漢江に臨みて水を呑まむとせる頭部に酷似せるを以て牛頭『ソシ、モリ』と紀せられたるものなるべく、中腹の高地に日本王子の墓と紀する土墳あり。『此の土墳の雜草を窃に抜き取る時は病症平癒す。』『夜陰窃に此の土墳の雜草を抜き取る時は宿症忽ち根治す。』と傳統を有せるのみならず、此の山には貴人の住せし靈山なれば山頂に墓を設くる時は爲者忽ちに一名を喪ふ。』又は山頂に牛を牽き入る時は翌朝に至り足跡消へて痕無し』と紀する傳説あり。歴史的には古代鎭族の占據せし鎭國に屬し會戸茂梨の北方六軒餘の鉢山の麓の鎭城の遺跡を存し、後樂浪、高句麗、高麗、新羅を経て、本朝時代は江原離宮を置かれたる所なれども鎭族以外は王城の地にてはあらざりしことは歴史に徴し明瞭である。

地勢及山容。牛頭山會戸茂梨の聖地は朝鮮半島の中央にして周圍に重疊せる大連山高く闊

饒せる東西三里、南北四里の春川平野の中央に位置し、東に麟蹄川の清流あり、南に江りて昭陽江と成り。西に華川河の清河あり、北に金剛山脉の終より流る、三韓洞の溪谷あり。文流沿澤縦横に流れて瀬と成り淵と成り、山紫水明比類無き古代民族發祥の大日高見の地勢である。標高三十米餘の圓錐形の獨立せる牛頭山は其の山容、大和國の畝傍山又は三和山にも髣髴たる神奈備型の靈山にして、南方四軒の鳳儀山、西方六軒の將軍峰と共に盆地の三方に獨立相對峙して、恰も大和の三山たる天の香久山、畝傍山、耳成山と同型なる三山を構成して居るのである。

而かも、將軍峰、鳳儀山の兩山も、神國日本の靈山として神靈永久に神鎮ります大和三山を始め美作國神奈美山、伊豫國妙法寺山（一名富士山）等と共に何れも同執の神奈備型の靈山である。

内地の實例に徴するも神奈備山に奉祀せる神社は主として出雲系神々の神鎮まります神社に限られて居り、官幣大社大神々社を奉祀せる前記の三和山にも、香久山神社を奉祀せる名高き天の香久山にも、山代神社を奉祀せる出雲國の神名樋山にも、甘南備神社を奉祀せる肥

前國の春日山にも、少名彥命を奉祀せる伊豫國の妙法寺山にも、その山頂には悉く巨巖巨石の神籬や磐境が儼然して居るのであり、將軍、鳳儀兩山にも又山頂に崇高なる巨砂の神籬や磐境が儼然存在せる事實は出雲系統神々の祖神素戔鳴尊の御遺蹟として内鮮其の規を一にせる崇高なる史跡の實在に驚せざるを得ぬのである。

中にも山容富士に似て聖地牛頭山曾戸茂梨の南方に聳ゆる鳳儀山容は典型的の神奈備型にして、其の山上には古來民族逃避の爲の山城の遺蹟と紀せられたる人工的の大積石存在せしが調査の結果神籬、磐境、磯城と判明するに至りしは何よりも欣幸とする所にして、

神籬、磐境、磯城。標高八十米餘の峻嶮なる鳳儀山上の南方凡そ七合目より東方九合目を經て北方六、七合目の急坂を迂廻し、西方五合目に斷崖絶壁の上部又は中間に高さ、高きは二十餘尺、低きは四、五尺、所々に築造せられたる長方形の山石に千古の臺の附着せる十三ヶ所の石垣あり、其の石垣の袖の部分の急坂には自然の尾根を山石にて圓錐形に數十尺包み上げたる原始的積石五ヶ所存在し、一見城壁の如くなれども上部に一坪の平地も無く、望樓又は城壁の天石乃至礎石も無く、防禦的には絶對に其の必要を認めざる斷崖絶壁急坂の中腹

に曲玉型に山頂を圍繞し、背後の巨岩、山容も神體として下方に恰も土留の如くに包圍築造せる事實は、それらの地點が悉く川を隔て、南方は峻嶮なる三角山に相對し、北方は金剛山脈の終點に向ひ、東方は聖地牛頭山曾戸茂に相對し、西方は神奈備將軍峰に向へる事實と其の眺望山紫水明比類無き風光佳絶なる確域にのみ築造せられたる事實に鑑み信仰的の磯城と考察せざるを得ぬのである。

而も積石相互の間は絶壁にして通路無く、登山容易なる地點には築造の跡無く、東方聖地曾戸茂梨に面せる昭陽江畔山麓の斷崖上部に巍立せる烏帽子の如き大巨岩の下方に大石を積み重ね、土留の如き石垣を築造したる若むせる史實は後方に巍立せる巨岩を神體神籬として、下方に磐境石垣を築造したるものにして此の考察を明かに立證するに足るものである。

尙ほ其の上に磯城は内地に於ても國幣大社、高良神社を奉祀せる筑後國三井郡高良山の山頂より長蛇の如く山腹を蛇々圍繞せるものあり。北九州にも周防國にも讃岐國にもあるのである。半島各地の山城も防護の爲の山城と信仰的の山城との二種あるべきは當然にて、各地に之を存するは半島御開發の御爲に各地を御巡歴遊され給へる、素戔鳴尊十七代の絶大なる

御鴻業が全鮮各地に及び給へる證左である。

則ち鳳儀山上の如上の積石、磯城は其の山頂に儼存せる曲玉石を始めとし、千古の苔の附着せる巨岩の配列、人工的大神籬を御神體として其の祭壇に峻嶮なる道無き斷崖絶壁に、長日月と人工の限りを費し永久的大磐境を築造せる祭祀趾跡と認められ、更らに東方山頂の曾戸茂梨に面せる地點には三層三個三段の巨石文化の人工的大磐境が儼存し、邊津磐境、中津磐境、沖津磐境を築造せる崇高なる神代の大史跡であることは、大和國の三輪山上にも巨石文化の邊津磐境、中津磐境、沖津磐境等同種の史跡が現存せる事實に依りても明らかである。其の磐境を起點として聖地に面せる二百餘尺の斷崖上の突端には曲玉型に下方より上部へ向つて蜿蜒せる人工的の積石の舞臺の如き高御座が特に築造せられて居る。其の頂上に立ち至れば周圍の山嶺悉く同じ高度に見遙され、恰も雲上に位置せるが如き靈感湧き來りて、遠き昔の神代に神代に天津神なる素戔鳴尊が國津神をば神集へ、神問はしに問はし給ひ、神議りに議り給ひし半島御開發の御聖業が髣髴として拜察せられるのである。

更に物的史跡として此の山麓よりは昭和十三年國幣小社江原神社御造營の爲山地切取工事

中、堀出磐境二個を始め、高脚齋瓮祭祀土器等發掘せられたるもの現存し、高脚齋瓮は國雲國飯石神社の境内より發掘せられたる高脚齋瓮と同種同形なる事も實物寫眞に對照して明かに立證せられて居り、山頂巨石の神籬には諺文にても漢字にてもあらざる神代文字とさへ思料せられる文字まで發見せられて居るのであり、之等の史跡考證の論據は國學院大學、東洋大學教授、神祇院囑託大場磐雄氏編纂神代考古學論攻の諸説と現存史跡とを對照して敢へて誤り無きことを期したるものであることを一言附言するものである。

ドルメン及石墳。聖地曾戸茂梨の東北約三軒の麟蹄川に臨る泉田里地内には古來新族の遺跡と思料せられたる靺鞨塚（靺鞨は新の別名）又は新の彭呂將軍石合戰の積石と稱せられたる大石塚三基現存し、その地點より東北に向つて老松の繁茂せる地帯に一列に巨石文化のドルメン數十基現存したりしも今より三十四年前それらの地點に併行して牛頭水利組合の水路開鑿せられし爲、採石又は發掘せられて、現存にては其の面積四百餘坪の大石塚一基とドルメン完なるもの四基、倒壊せるもの十七基と荒涼たる畑中に存在せり。然るに發掘せられたるドルメンの地中の石棺より出土したるは土器、石器、矢の根（石製）管玉等にして鐵器

を出土せる事實無く、今より三十三年前工學博士關野氏が、古跡調査に來春し、前記四百餘坪の前記石塚を發掘せし際立會したる現江原道會議員村上九八郎氏の證言に依りても、石塚地中の石棺より出土したるは各種の石器、石製矢の根、黒石製曲玉及人骨の一部にして、一片の鐵器をも出土せざりし爲、原始時代の大古墳なることを識ると同時に其の石塚も鞋鞆塚乃至彭呂將軍の石合戦の積石にも非ずして大石墳なることを識るに至り、貂族舊俗の歴史を調査の結果、貂族は黃河ツングウス民族にして貂族、扶餘族等と共に黃河以北に於て古代文化の發達を遂げ、山東を経て朝鮮北部より遷徙し來りしも、大同江以北には朝鮮最古の豪族たる箕子の一族舊俗占據し居たりし爲、貂族は海岸を南下して江陵地方を占據し農業を營み、貂族は山間を南下して春川地方を占據し狩獵を營み、扶餘族は更に南下して扶餘地方に達せしものなれども、之等の民族は既に製鐵鍛冶の法を知り、其の牟二丈に及ぶと稱する鐵器を携帯し居たりし民族なること判明すると共に其の時代は今より凡そ四千五百餘年前、殷の付王が武王の爲に滅され、其の賢哲たりし箕子の一族が粟を食むを欲せずとて大同江以北に舊俗し來りしよりも遙かに後世に屬せること判明し、從つて鐵器を出土せざる前記のドル

メン及石墳は貂族以前の神代の史跡に屬せるものなるを、貂族の遺跡と濫稱又は誤傳せるものなることが明かに立證せられて來たのである。

それと同時に牛頭山曾戸茂梨の山麓牛頭大村にも四基のドルメン現存し、一基の巨石には損壞すれば全村滅亡すべしとの傳説あり。附近の農家の庭内なる他の一基には移動すれば病人絶へずとの傳説がある。更に南方約二軒の地點には今より二十餘年前まで面積凡そ三百餘坪の石墳一基存在せしも無心の農民に採石せられ、現在にては其の中央部長さ十間、幅二間、高さ十五、六尺殘存し、前後の農家の基礎石の大玉石は其の地中に併立しありしものなること、及地中の石棺より有史以前の土器、石器、矢の根、銅銚等出土したる事實は現地の三代の區長が口を同じくして言明證言する所である。

殊に聖地曾戸茂梨の西方約二軒の華川の清流に臨める馬山里は古來ムリンドリ（曾戸茂梨の積石）又は玉山浦と稱し、其の部落の中央には面積五百八十餘坪の千古の苔の附着せる玉石の大石墳一基現存し、周圍は「ニレ」の老木に圍繞せられて有史以來の半島の土墳とは全然異なり、母國內地の御陵式大石墳なることは一見直に明瞭にして、地元民衆の間に於て

も太古の神様なりとて畏敬せられ、如何なる場合にも採石せず、數千年來傳説によりて完全に保護せられ來りしものにして、それより南方二百米餘を隔て、老樹の林中にも、中半以上を水流に浸蝕せられ崩壊せる同種の石墳一基あり、更にそれより百米南方原始林中にも採石せられて其部のみを残せる同種の石墳が一基現存せるのみならず、此の部落には春秋に、一年以内に不淨の無きものが祭主に撰ばれて二日に亘る内地式祭祀も残つて居るのである。

貊族の遺跡。以上の史跡が此の地方の古代の先住民族たる貊族の史跡にて非ざることを明かに立證する爲には、貊族の遺跡を詳細に調査究明することも又當然の責務である。前記の如く箕子朝鮮以後に半島北部より春川地方に遷入せる貊族は春川大盆地の一隅たる北方鉢山の麓に宮闕を造營したるものにして、此の所に宮闕の存在せしと云ふ闕趾と稱する地點にも今は礎石も存在せず。城門の存在せしと云ふ門趾と稱する地點にも何等の遺跡も存在せず。僅に後方山上に外城の遺跡と稱せられたる土壁の一部と其の城下の都邑の存在せしと云ふ都地古里と稱する寒村を残せるのみにて其の地域に何等の遺跡も残存せぬ事實に徴し弱少な

る、狩獵民族たりしことは首肯せらるゝ所にして、巨石文化の大史跡を残すに足るべき家族にて非ざりしことは天嶮の大要塞の地域として征韓の後にも毛利高政が城地としたる春川盆地の中央に位置せる牛頭山に殊更に宮闕を築造せず、其の北隅に宮闕を築造したる史實に依り立證せらるゝ所であり、當時に既に牛頭山には靈地としての傳説がありしが爲には非ざるやと考察せらるゝ所である。

交通の徑路。然らば交通不便なりし遠き神代の昔に於て素戔鳴尊が如何にして、我が葦原の中國より韓郷之島の春川地方に容易に往復し給ひしか、其の交通の御徑路を詳細調査究明すれば、北九州地方又は出雲地方より天の浮橋と稱したる舟を浮べて海上に出づれば潮流の關係に因り、自然に江原道の東海岸に漂着し、嶺東山脈の峰に登りて、北は靈峰金剛山、南は秀峰雪岳山、此の間凡そ四十里の間は何所の山頂を越へて内陸に進みても、河川溪谷に沿ひて下れば山紫水明比類無き春川盆地の日高見に必ず到達することは地圖を開けば明瞭である。而も半島中央に位置せる春川盆地より東海岸への行程は僅かに歩行二日路にして、舟にて出雪地方へは又潮流の逆用に依りて容易に到達し、往復十日の旅程であり、太古日本海狹

其の地方の運命を司れる千古の石墳一基あり。麟蹄川の上流なる楊口面にはドルメンあり、麟蹄面にも石墳あり。

更らに東方海岸の高城郡梧岱面竹亭里、花浦里、次洞里内にも各々一基のドルメンあり。それらの石墳ドルメンは内地、春川兩地方の石墳乃至ドルメンと同種同型なる事實に鑑み旅中に於て身まかられし方々の墳墓と拜察され、之等の關係地方より發掘せらるゝ土器、石器も出雲地方と悉く同種同型なる事實は明かに兩地の交通の徑路を立證して餘りあるものである。

曾戸茂梨の確證。以上の史跡の其の他にも突に春川曾戸茂梨の聖地を書紀の曾戸茂梨之處として、斷定すべき史跡として最近判明せし史實は、今より一千三百餘年前『齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主再來之時新羅國牛頭山ニ座ス須佐之雄尊之神御魂ヲ齋祭來而皇國祭始々依之愛後郡賜八坂卿並八坂造之性』とある八坂社舊記上卷の記録は

日本書記齊明天皇の朝に『高麗ノ正使達佐副使伊利之等八十一人ヲ從ヘ來朝ス』とある記録に一致せるものにして、其の副使伊利之が牛頭山より齋き來りし須佐之雄尊の神御魂に奉仕せむ爲皇國に歸化し、子孫累代京都なる官幣大社八坂神社に神職を勤め、其の末裔なる須德之助氏が昭和十年四月十日『自分は半島より歸化したる伊利之使節の子孫なり』と自稱して主典を勤め居たりし事實判明せし爲、昭和十八年八月其の事實を國幣小社江原神社より官幣大社八坂神社へ公文を以て照會の結果『同氏は昭和十四年病死し、現在にては其の遺族が滋賀縣甲賀郡岩根村菩提寺に須和久と名乗り現存せり』との回答に接したる事實にして、此の人的史實は、則ち今より一千三百餘年前既に半島牛頭山に素戔鳴尊の御神靈を奉祀しありたる事實を證するに足り、其の牛頭山が春川牛頭山なりしことは、副使伊利之が皇國に歸化して須氏を創氏せし事實に依り須族の末裔たることを證するに足り、其の須族の占據せし城地が春川鉢山里なりし事實に徴すれば、當時牛頭山曾戸茂梨の聖地に既に素戔鳴尊の御神靈を奉祀しありしを高麗王朝も、須族の子孫の伊利之も現認し居たりしことを明かに立證するものにして、更に此の史實を一層明瞭に裏書すべき事實として、本府要路の高官にも須氏を知れ

るものがあるのみならず、今より三十二年前工學博士關野氏が聖地牛頭山なる三基の上墳を
発掘せる際、立會したる村上九一氏、秋野新助氏、金澤縣撰出中野代議士三氏の内、現存せ
る村上九一氏が當時土墳の一基より長方形の岩石『素戔』と刻みし石片一個出土したるを關
野博士が『素戔鳴尊の御名ならむも漢字にて刻みしものなれば古代のものにてはあらざるべ
し』と、稱して報告せざりし由證言したる事實である。

此の確證は伊利之使節が牛頭山より素戔鳴尊の御神靈を皇國に齎き來りし爲、其の後世に
於て素戔鳴尊の御神靈を神鎮め奉るべき碑文として建設したるものならむも、折損せられて
數百年以前の墳墓に埋められ居たりしものと認められ、史跡を益々明瞭に裏書するものであ
るのである。

傳説及信仰。斯の如き神秘なる史蹟の究明に方りては地方的傳説又は信仰も重大なる要素
に屬せることは論を俟たざる所にして、牛頭山曾戸茂梨の聖地には日本王子の墓あり。山頂
に墓を設くるときは爲者忽ち一名を喪ふ等の傳説を始め、ドルメン乃至石墳等にも神秘なる
各種の傳説あることは既に述べたる所であり、それらの傳説其の物は既に地方の信仰として變じ

て祖傳相傳はり風光明眉なる牛頭山上にも、鳳儀山にも、將軍峰上にも、牛島古來の通
例たる望樓堂宇の痕跡を止めず、靈地としての崇敬を有せしことは一般に高唱せらるるのみ
ならず、春川地方出身の前忠清北道知事金原邦光氏も『子供の時より畏敬せり』と言明立證
せる所である。

施政以來は昭和二年、素戔鳴尊を奉祀せる播磨國廣峰神社々掌が曾戸茂梨の遺蹟を調査の
爲渡鮮二ケ年六ケ月間全鮮各地を踏査して、春川なるへしと言明以來地元民衆の間に於ける
史蹟顯彰の發願は巷間に漲り、第四十一回帝國議會に於て時の代議士高木益太郎氏が、朝鮮
神宮に素戔鳴尊の御神靈を奉祀すへしと、建議案を提出して其の史跡は今の江原道春川にあ
りと言説を引用指摘以來益々高調の度を如へ、大正十五年四月には春川郡の事業としてパン
フレットを發行して江湖に宣傳強調し、第十一回江原道評議會、竝第二回江原道會にも、公
益に關する建議案として、素戔鳴尊遺蹟牛頭山曾戸茂梨に神社建設の議を提案し全員一致の
賛成を受け、昭和九年七月には素戔鳴尊遺蹟牛頭山淨化竝に曾戸茂梨神社建立發起人會を設
立し、江原道會議員山中友太郎氏を會長として、臣子としての敬虔なる赤誠を披瀝し、神社

建立の前提として先づ浄化に對する贊襄を求めし結果元朝鮮總督齊藤實閣下を始め、軍代總督、軍司令官、其の他内鮮朝野の貴紳顯官數百名の贊襄を博し居れども、事苟くも淵源に關する重大なる史蹟なる爲、姑息なる施設も強し得ず、而も學說區々にして本府に於ても手を染めず、其の上書紀の一節には、素戔鳴尊は『吾此處に居るを欲せず』とて、屢々往復し給ひたる内地御歸還の一部のみを、永久御歸還遊されし如くに記録せる爲に、史跡の調査も進展せず。文獻記録のみにては雲を掴むか如しとて重視せられず只僅に地元民衆の微力に依り、聖地山上二千餘坪を買収浄化の緒に著きたるのみにて今日に及べるは洵に遺憾の極みである。

然るに現朝鮮總督小磯國昭閣下御就任以來は、國體の本義明徴、道義半島確立の雄渾なる施政の方針を體し、國體の淵源に關する此の崇高なる史蹟の調査究明中、昭和十七年七月神祇院造營課長角南隆氏の來春踏査に依り、素戔鳴尊は歷代御襲名の上十七代一千餘年の長きに亘り給へる事を識るに及び調査の方針を變更し、銳意努力中同年十二月神代祭會の落成者たる神日本學會々長中山義美氏の踏査に依り、前記馬山里の巨石塚が有史以前の母國內の

御陵式大石墳にして地元民衆の傳説に依りても曾戸茂梨の史蹟に重大なる關係を有せるものなるべき事を指摘せられ、更に歸國の上同會所屬の靈媒學界權威者が御神示を仰ぎたる結果に依れば『聖地曾戸茂梨の山上には今より七千年以前より既に素戔鳴尊の御神靈を奉祀しありたること、茲に三里四方は悉く淨域にして調査に従ひ崇高なる史跡續々發見せらるべし』とし御神示ありたる旨通知に接し、恰も符節を合はせるが如くに各種の史跡發見中、昭和十八年六月國民總力朝鮮聯盟囑託三浦一郎氏の來春踏査に依り鳳儀山上の巨石文化が、天孫瓊々杵命の御遺跡として有名なる播磨國高御座山の神代の遺跡の神籬、盤境と同種同型なることを指摘せられ、同年十月初記中里義美氏の再踏査に依り、それらの神籬、盤境は飛彈國御位山、青森縣戸來村の神代の遺跡と同種同型なることを確認せらるに至り、上記の如くに幽邃なる各種の史跡を始めとし、内地と同種同型なる土器類、石器類、銅器類等、出土品をも蒐め得て、數十年來懸案の書紀の曾戸茂梨の機運に到達せることは誠に崇極まりなき御神靈の御加護に依るものにして、國家の爲にも何よりも欣幸とする所である。

内鮮同祖の歴史的確證。以上の史實に徴すれば内鮮同祖の歴史的事實は日月の如くに明瞭

い、則ち母國の同胞は皇祖 天照大神の統べさ給ひし皇民であり、半島全土の同胞は其の御弟の素戔鳴尊が統べさ給はし皇民である。共に鴻大無邊なる皇化に浴した皇民の子孫であることは人類學者も、言語學者も、土俗學者も、考古學者も、皆専門の學說に依りて認むる所である。

而も昔は通辨をも要せず言語が相通じ、意志の疎通が圖られて居つたと述べる學者もある。天孫民族傳統の絶大なる抱擁同化力は、高天原より降臨の時に於ても先住の大わだつみを始めとし大山住の民族や、襲族苗族、アイヌ族、クロンボツクル、土蜘蛛等各種の民族を統合し、まつろはぬものは討ち從へ、皇道歸一の天業を達成したる聖業と同じく半島の天地に於ても、素戔鳴尊は先住の苗族、沃沮族、ネグリート族の各種の民族を抱擁同化し給ひて、高麗や新羅の祖先と成り、漢民族の侵入をも許さず李朝の末期まで防護し續けて來たのである。此の光輝ある半島の同祖の同胞の歴史には數千年來一日の如くに互に交流歸化融合し、援兵義軍を派遣して危局を救護せし史實は殆ど收舉に遑無く、其の臣瓢公も第三代脱解千も内地より來りしことは半島の史蹟の傳へる所である。

吾等の祖先が一人にて三人宛の子を産めば、三代目には九人にして、十代目には五萬九千四十九人に成るのであり、十七代目には無量一億二千九百十四萬一百六十三人に同く血脈が頒たれて其の體内に分流する。されば神代の昔より共に生成發展した吾等一億同胞が八紘一字の大理想を宇内に顯現せむ爲に、分家が宗家に復歸して結合したとて其の間に何等の疎隔も無きことは遠き祖神の天意である。

中世宗家の戦亂に乗じて分家に浸入し、此の半島の光輝ある歴史の總てを焼却して、極度に支那化を強要せし、漢民族に迎合の時代無かりしならむには、同祖の史實は尙ほ一層明瞭なるべきは勿論にして、自己の爲には不利益なる歴史の總てを焼却せし漢民族の横暴を慨くと同時に斯の史實の調査究明公表に依り、半島同胞のみならず一億同胞悉く同祖の事實と國體の本義を深く認識して、共に相倚り相助け、至誠一貫皇國の大義に準じて、速に道義半島を建設し、神國日本の一翼としての神國半島をも顯現して、名實共に一億一心聖戰完遂に進み進んで世界の指導者たる榮譽を獲得せむことを國家の爲に要望して筆を擱かむとするものである。

昭和十九年七月十五日 印刷
昭和十九年七月二十日 發行

● 實價三圓五十錢

(附送料) 郵料二十錢

編輯者兼

白山青樹

京城府銀座區銀座二ノ九一

印刷所

每日新報社

京城府中區太平通一丁目三一

複製

配給元

日本出版配給株式會社朝鮮支店

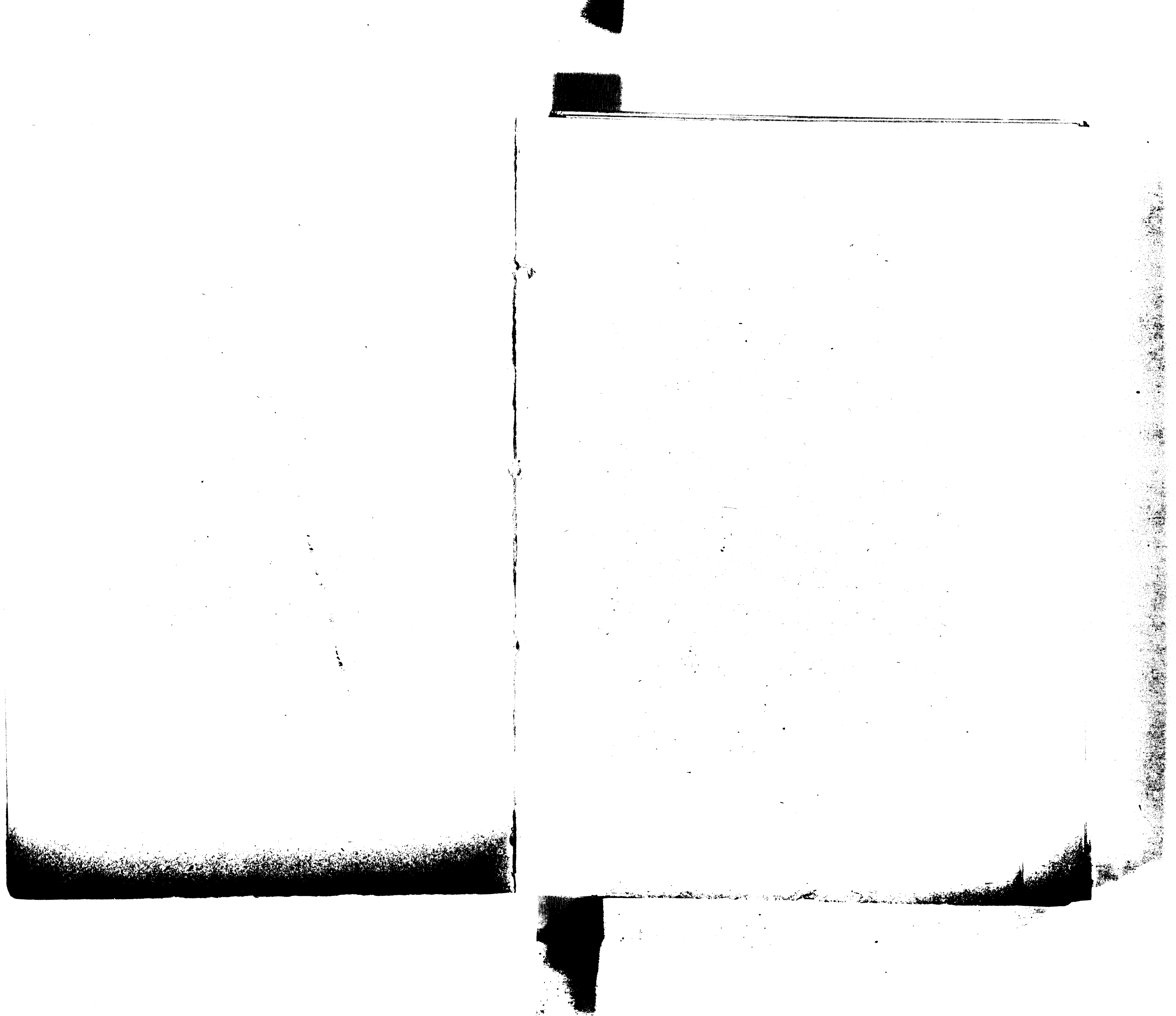
京城府西大門區和泉町二

(朝鮮同胞に告ぐ)

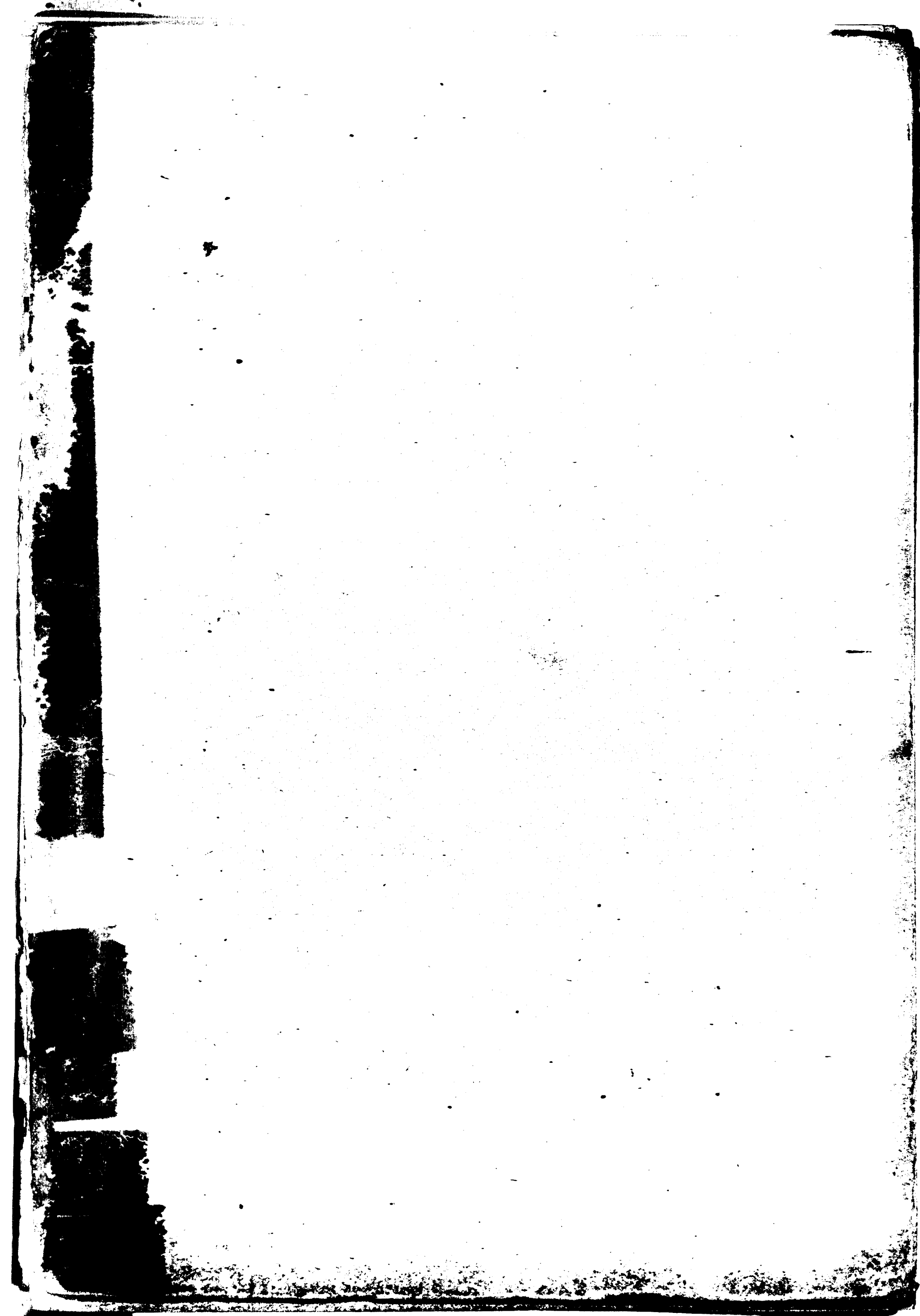
發行所

京城府銀座區銀座二丁目九十一
大東亞社

大東亞社



由度有難うございませう
近澤商店出版
京城府明治町一丁



11/5 1.4

049-10

我等の國家

新日本

朝鮮同胞の不安

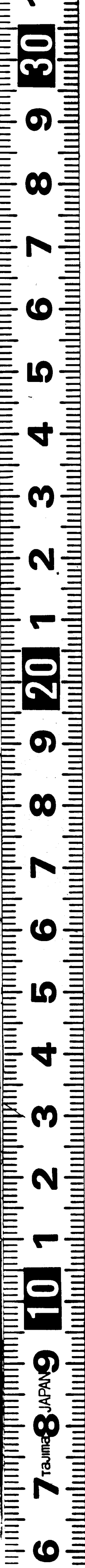
窘窮を述べて

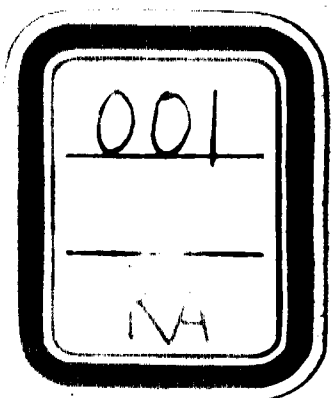
朝野諸賢に懇ふ

朴

春

琴





我等の國家 新日本

はしがき

人は誰でもその郷土を愛する、墳墓の地といふ言葉は直ちに父母に對する懐かしみを感ぜしむる、その郷土の屬する國家を愛するは自然の人情であらねばならぬ。我等朝鮮人が大日本帝國を愛することに何の不思議があらふ、この大日本帝國の國父 至尊に對し奉りて忠ならんと欲するは固より我等の分であらねばならぬ、これは實に私の信條であり、また感情の叫びでもある、然るに内地の人々——少數辱知の外——は私のかゝる單純にして條理明白なる至情に對して『それが當然である』といふ理解をもつものが少ないやうである、識者も政治家も（政治家の中に識者もたまにはある）それが社會的に

高く評價さるゝ人ほどより深く疑惑の眼を向けつゝあるやうである、私は口惜しくもあり、また心淋しくも感ずるのであるが、同時に皇國の恩澤に浴する三千年、それが忠君愛國の至情はその生存の上に、他民族の有する宗教以上の約束であるかに見ゆる迄に、皇恩國恩の高く深きに感孚せしめられたる日本民族としては、併合以來日尙淺き日鮮の關係に於て、朝鮮人中に眞に忠君愛國の念を懷く者のあるべき道理なしとし、その唱ふるところは一片の口頭語に過ぎないであらふと推察するのも一應無理ならぬことかも知れない、しかし世に識者を以て許さるゝ人々や、政治家として立つ人々は左様なことではない、何故なれば彼等の疑は、朝鮮の歴史を知らず、朝鮮民族の性情を解しないために起るものであつて、その不識と無理解とは單に私一個の問題でなく、朝鮮統治上重大なる過誤に陷るの惡因を爲しつゝあるからである。

私は所謂識者ではない、また所謂政治家でもない、故に自分の識見を江湖に問ひ、自分の存在を周知せしめやうとするが如き莫迦々々しき野心は毛頭有たないのであるが、上述の如く、私をして口惜しがらしめ、私をして淋びしがらしめつゝある識者、政治家

の朝鮮及朝鮮民族に對する不識無理解が、聽てまた如何に朝鮮及朝鮮民族を誤り、如何に國家の不利を醸しつゝあるかを記述し、その反省を求め、併せて世人の参考に資するの決して徒爾ならざるべきを信ずるものである。

朝鮮統治方針如何

民衆は適從するところを知らず

朝鮮統治には根本方針が無くてはならない、必ずやこれあるはずである、否な有るやうに世人は思つてゐる、然らば果して有るのであるか、有るならば如何なる方針であるか、未だ曾て『斯々の方針である』といふ言明を聞き得ないのである、試みに之を以て朝鮮統治の任に膺りつゝある人々に問へ、彼等は答ふるであらふ『そんなことは言はなくともわかつてゐるではないか、日韓併合に際して 明治天皇の降し給へる詔勅に、一視同仁と仰せられた、この聖旨を奉體して内鮮の融和を計り、朝鮮民衆をして繁榮を遂げしむるのが即ち朝鮮統治の根本方針である』と、そこで重ねて問へ、『御聖旨を奉體す

べきことは當然であるが、如何にして内鮮の融和を計り、朝鮮民衆の繁榮を進むべきか、政府の執りつゝある政治的様式は何であるか、問はんと欲するところは、即ちこれである、御詔勅の解釋を聞きたいといふのではない、換言すれば、所謂同化主義に依るか、自治（ホームルール）主義を採るか、政治的にいふ朝鮮統治の根本方針とは是等を指すものではないか、一視同仁も、朝鮮民衆の繁榮も、施政の精神乃至目的であつて政治様式の根本方針と觀すべきものではない、總體內鮮の融和、朝鮮民衆の繁榮を念とせざる朝鮮統治などあるべき道理がない、わかり切つたことである、然るに是等を以て根本方針とするなど、は問者を愚にするものではないか』と突詰めて見よ、彼等は答ふところを知らないであらふ、尤も現に政府の執りつゝあるところのものは、同化政策らしく見ゆる、然かも爲政當局は同化主義に依りつゝあるといふことを言明し得ない、然らば自治主義へ進むのであるかと問へば、將來は知らず、現在は爾うでない、といふ、要するにアレでもない、コレでもない、無主義、無方針である、こゝに於て民衆は適從するところを知るに苦しむ次第である。

想ふに爲政當局をして斯様に曖昧な態度を持せしむるに至りたる原因は、彼等が時代思潮とやらいふものに對する生半可な了解と、殖民政策とやらを研究したといふ似而非學者の議論に累せられてゐるのである、それは彼等が

同化なぞと、言何ぞ容易なる、と云ひたい、殊に近來朝鮮人も大分自覺して來たからね、然らば自治か、サア結局それが可いかも知れないね、英國の殖民地統治に成功したのは、そのため、佛國はアルゼリアに同化政策を布いてゐるが、孰れかといへば失敗の方だからね、

といふのでもわかる、各人の事物に對する生半可な了解と、似而非學者の妄論ほど他人を誤り、延いて世を毒するものはない、現に朝鮮統治の根本方針が、併合以來二十年を経たる今日に及んで未だ確定せず、朝鮮民衆は右すべきか、左すべきかを知らず、眞面目で穩當な思想を有つ者ほど、明日の生活に對する心構へをすることが出來ないために、その郷土に住みながら、恰も異境に流寓するの思ひを爲しつゝあるではないか、一方には例の生半可が、共產主義や民族主義（朝鮮獨立を主張するもの）に對して、恰も理解

あり同情あるもの、如き態度を示すために『職業的排日鮮人』と云ふ名辭が出来てゐる（共產主義者も民族主義者も排日を以つて先行的條件と爲し、これに依つて衣食し得るほどに跋扈せしめ、遂にこの名辭が出来たのである）遂に朝鮮統治上、癌腫にも比すべき憂患を將來に貽すに至つた、爾り而して共產主義や民族主義の擡頭には、内地に於ける似而非學者が筆により舌によりて示唆したのが與かつて力あるものであるといふことを記すべきである。

同化政策とは何ぞ

内鮮の同化は當然の歸趨のみ

爲政當局すら『異民族の同化は困難である』といふ、一體何が左様に困難なのであらうか、他は知らない、朝鮮の場合に於てはその困難なる所以を知るに苦しむ、能くいふことで『採長補短』といふ言葉があるが、これは小にしては人と人との間、大にしては民族相互の間、更に相異なる東西文明の間にすら行はるゝ同化作用の一端を言ひ表はす

ものではないか、日本人が洋服を着る、西洋婦人がハツピ・コートを着る、日本に野球が盛んである、歐米に柔道が流行る、是等は異民族の接觸に依つて自然に行はるゝ同化作用の一現象に外ならないのである、將來交通機關大いに發達し、異國異民族間の交渉益々密邇するに従つて相互の同化作用は益々盛んに行はるゝであらふ、然るに朝鮮の場合に於て同化が困難であるといふ、それは寧ろ不自然である、縦し從來は困難であつても何時かは必ず自然に還へるべきは賭易き道理ではないか、また實際從來と雖も内鮮間同化の著しき経程を認めらるゝのである、但し同化の目標が生活の様式から風俗習慣から、内地人に同化せよといふことであり、忠君愛國の誠意も今直ちに内地人同様たるべしといふに在るならばそれは求むる者の無理である、その無理解を嗤ふべきである。

私は朝鮮人の總てが私と同様であるとはいはないが、私は内地に在住すること二十餘年、内地の女と結婚し、内地人と同様の生活を營み、日本帝國の臣民として心強き日々を送つてゐる、而して私は帝都の眞中で働いてゐるが決して不法に虐げらるゝことはない、それどころではない私が『朝鮮人』であるがゆへに、無心の行爲が萬一にも

悪しざまに思ひ做され、そのために果を朝鮮人全體に及ぼしてはならぬといふ心遣ひから、細心の注意を怠らず、謙抑の態度を取ればとるほど、内地人の私に寄せらるゝ好意と同情とは一入深くなることを感謝しつゝあるのである、内地人は能く同胞の缺點を擧げて歐米人の長所に比し「だから日本人には我れながら愛憎がつきる」など、自嘲することがある、私はこれを聞く度毎に嚴肅なる教訓を垂れらるゝ心地がする、日本民族の物に拘泥しない自省と明朗なる心境に感激せしめらるゝのである、これと申すも畢竟日本國の國體がかゝる人間の美點を育成したものであらふ、私は衷心かゝる國家に生を托するの光榮と幸福とを感謝してゐる、世に四恩ありといふ、私は心からこの四恩を感佩してゐる、感謝の生活といへば何か知らず耶穌信者の言のやうに聞えるが、私の現在は實際感謝の生活を送りつゝあるのである、日本民族の忠君愛國の至誠はその國體とともに眞に世界に冠絶するものであるが、今の私に取りては些の驚異にも値しないものである、私は何等の強ゐらるゝところなしに既に日本民族と同化したのであらふと考へてゐる、人の性質はその面の異なる如くに異るといふくらゐである

から、無論私の例を以て朝鮮民族の全員に推すことは出来ないであらふが、併しながら人と人との接觸に於て、その利害の必ずしも一致せざる場合に於てすら同化作用の行はるゝことは自然の數であり、内鮮人間に於ては感情の疎隔を來たすべき種々の理由もあつて、大にしては國家のため、朝鮮民族のため、小にしては彼等自身のために、誠に憂ふべき言動を敢てする者もあるけれども、内鮮人間の同化は前にも述べし通り著しく進んでゐる、それは朝鮮に於ける内鮮人の共同生活が何んの不便も不自由もなしに營まれつゝあることを見ても解かる。

然るに爲政當局は同化は困難であるといふ、誠に訝しとよりは寧ろ奇怪千萬であると思ふ、私かに想ふに、爲政當局は『同化困難』といふ何等かの先入感に囚はれてゐるのではないか、たとへば似而非學者などの唱ふる殖民政策論にかぶれてゐるのか、然らざれば朝鮮統治の根本方針が確立しないために、朝鮮の民衆は適従するところを知らずして常に心の落着きを得ず、動もすれば自暴自棄的態度に出づる者も少くないので、これ等を以て一律に民族的感情の現はれに外ならずと爲し、さてこそ同化の困難を説く

のではあるまいか、いづれにもせよ同化困難などとは考へ違ひも亦甚だしのである、その考へ違ひこそは國家に取りて、將た朝鮮民族に取りて誠に恐るべき禍殃である、爲政當局が、施政の根本方針を確立し、同化政策の如何なる意義を有するものであるかを徹底的に周知せしめ、即ち政治的に朝鮮人をして内鮮民族間利害の一致を覺らしむると同時に、その社會生活に於て感謝の念慮を懷かしむべく努力するならば、内鮮の融和も同化も、爲政當局がこれを難んずるが如きものではないことを斷言する。

然らば内鮮兩民族の政治的利害一致とは何ぞや、以下數項に別つてこれを叙述したい。

新日本の國是

大義と大度量の顯揚

往年、故大隈侯が『新日本』と題するその機關雜誌を發行されたことがある、彼の新日本は或は『新時代に於ける日本の意義』であつたかも知れぬが、こゝに掲ぐるところ

の新日本とは『新たに大をなしたる日本』といふ意である。

日本國が東瀛の一島帝國であつた頃、既にその國體の崇高と、國民の元氣とは相當世界に認められつゝあつたけれども、日本帝國なる國號に『大』を冠することは、單に國民の雄壯なる氣魄を象徵するのみで、國土の小、人口の小、形に於ては一小國に過ぎなかつたが、日清戰役に勝ちて臺灣を支那に割取し、日露戰役に勝ちて樺太の南半を割取するとともに露國の南滿洲に於ける租借權を繼承して稍々大を成し、日韓併合に依りて愈々大陸に領土を擴め、七千萬の人口を有する一大帝國と成つた、これ等の新附の領土と、新附の國民とを併せて成れる大日本帝國を新日本と稱ふるのである。

いふ迄もなく凡て國家には國是がなくてはならない、新日本の國是は、從來國威の宣揚國利民福の増進を祈念する意味に於て、いろ／＼の言葉を以て言ひ表はされたことであるが、日本帝國が世界三大強國の一として將た東洋の盟主として、國家的大義と大度量の顯揚こそその第一義たるべきものであらう、而かも大義も大度量も時により事に應じ種々の形をとりて顯揚さるべきものであつて、こゝに將來起るであらふ諸有場合を想

定して、豫めそれ等に應ずる態度を定むることは困難である、故に常に内を整へて外に對するの用意を怠つてはならぬ、内を整ふとは、新日本七千萬民がいづれも、陛下の忠良なる臣民であり、同時に同胞互に相信し相敬し、心を一にして國家の隆昌を計り、私を挾むて敢て悖るなき狀態に置かるゝことである。

然らば新日本の現状は如何、内能く整ふてゐるであらうか、遺憾ながら未矣である、その證左は『朝鮮を見よ』の一語で十分であらう、何のために然るか、その責は政府と日鮮民族と共にこれを分たねばならない、先づ咎むべきは政府である、日韓併合以來二十年、政府は朝鮮に對して施すべき政治の眞髓を遺忘してゐる、それは國是の第一義でもあるところの大義を布き、大度量を示すことを忘れてゐることである、大義を布き大度量を示すことは人民に對する基本的教養である、これを爲さざるは基本教育を施さざるに當る、民を教へざることは、これを治めざることである、民を教ふるといへば、學校教育も固より一方法である、これは政府も力めてゐる、然しながら政府が國民に對して大義を布くことを忘れたならば、學校教育何爲るものぞ、である、故に極端にいへば

朝鮮民族は治められざるに等しき狀態にあるのである、かといへば或は無責任なる暴言を放つと爲すものもあるかも知れないが、決して言を弄するものではない、見解錯れるか、否、少しく所見を述べて大方の攷察を請ひたいのである。

抑も併合といふことは、韓國の元首が日本國の元首に、朝鮮の統治權を委讓せられたことである、當時の事情を知れる人々は記憶されるであらうが『併合』といふ言葉は、種々詮議の上で用ひられたものであると聞いてゐる、今でこそ併合といふ言葉も決して珍らしくない程の通用語になり、合併と同義語のやうになつてゐるが、それ迄は併合などといふ語は、遠き昔は知らず近代に於いては、日本國にも韓國にも用いられたことはなかつたてはあるまいか、然るに一國の元首がその主權を他國の元首に對し平和の間に委讓するといふ古今東西に前例のない事實を、如何なる文字、如何なる言語に依りて表はすべきかに就て、相當苦心研究したもので、その語源出所は知らないが終に『併合』といふことに決定したと傳へられた、それ程日韓併合は前例なき史實として今日に残つてゐるのである、然らば朝鮮の民衆はこの併合を何と見てゐたか、たとへ併合が平和の

間に行はれたとはいへ『韓國は日本に滅された』『朝鮮は日本に取られた』と考へた、それは當然のことである、而して虚心平氣であるやうに見えたものもその實同胞の、將た一身一家の將來に對して名狀し難き疑惧に脅かされつゝも、政府の宣傳、官憲の慰撫に心細き頼みを維ぎ、成行きを觀望しつゝあるのであつた、その他悲憤慷慨併合の事に當つた韓國政府者を呪咀するものあり、郷土を見棄てゝ國外に去るもの、世に傳へられてはゐないが憤死したものもあると聞いてゐる、されば平和の間に併合が行はれたことは、世界一の陸軍國と稱へられた彼の露國と戰て勝ちたる日本國の武力が、韓國民を威壓したゝめであつたといへるであらふ、既に力爭することが不可能であるとすれば、自暴自棄か、長い物に卷かれるかである、朝鮮の民衆は後者を撰むだ、斯くて日韓併合は史乘に残る一つの事實とはなつたのである、この史實に對して史家の論評は自由であるが、今の政府が、否何人も併合の是非に關して責任をもつものはないであらふ、それは解つてゐる、併しながら併合と同時に、國家的大義を朝鮮に布き、大度量を以て斯民に臨むことを忘れたゝめに、併合十年後獨立運動起り、二十年後の今日に於ては難治の民として英國の愛蘭のそれに比せらるゝが如き状態に墮せしめたる政治上の責任は、現政府と雖もこれを回避することは出来ないであらふ、然らば國家的大義とは何を指すか。

國家的大義が時處に應じて發揚さるべきであることは前に説いたが、朝鮮の場合に於ては、先づ以て政府が人民に與へたる公約を實行して毫も誤らざるを示すことである、日韓併合に當りて政府は『決して侵略したのではない、兩國の元首合意の上、統治權委讓のことが、斷行されたのである』と、中外に宣明した、朝鮮の民衆は、その宣明をそのまゝに信じはしなかつた、いひ知れぬ疑惧に囚はれるもの、憤慨に血を湧立たすもの、不安の氣が半島の山河を蔽ふたのは事實であつた、併し結局手の出しやうがない、策の施しやうがない、たゞ運命として諦むる外はなかつた、併しこれが日本民族であつたならば、手の出しやうがなくとも手を出すであらふ、否身命を投出すであらふ、決して諦めはしないであらふが、そこが民族性の相異——とよりは國體の相異、國體の相異より來れる國家觀念の相異に原因するのであつて、朝鮮民族が唯一身一家の安全をのみ念とし、義勇奉公の精神全然缺如せるものと爲すものあらば、そは大なる誤解である。

李朝五百年、太祖李成桂は咸南の地に崛起し、高麗を滅ぼし、王位に登ったが、太祖の門地特に高いといふではない（全州李氏とて今では門葉大に榮えてゐる）また兵を起して高麗王氏を攻滅すまで人民の信賴特に厚いといふのでもなかつた、高麗の末造、君王と權臣と共に佛教に耽溺し、一基の佛像を刻むために千戸の食を奪ふといふ有様で、民生疲憊の極に陥つてゐた、太祖はその弊を除くために奮起した、窮民は響應して干戈を取つた、文弱風を爲してゐた高麗朝のことであるから、官兵は弱かつた、餓えて斃れんよりは進むで鋒鏑に死せんといふ意氣込みの百姓軍は強かつた、一武人李成桂は終に高麗朝を倒して王位に登つた、恐らくは騎虎の勢こゝに至つたのではあるまいか、初めから王位を窺竄したものであるか何うか、その穿鑿は史家に委すとして兎に角、斯くして李朝は肇建された、この王朝の代謝に對して人民は如何なる感懷をもつたか、高麗朝の遺臣鄭夢周の孤忠に對して、時人は齊しく嘆稱したのであつた、君王に對する忠義の何ものたるかを知らぬのではない、とはいへ唯それだけであつた、それは王朝の代謝は、今日の言葉を藉りていへば『政權爭奪』に外ならないものであつたからである、王侯將相

豈種あらんやといふ心もちは、風雲兒、英雄漢の凡てがもつてゐたであらふ、故に李朝が高麗王朝に代つたのは、日本でいへば、平清盛が藤原氏を押へて政權を握つたやうなものである、形の上からすれば、一國の主權者となつたことゝ、單に執政となつたことを同一視することは倫を失すと云ふべきであらふが、人民の心にはより以上の響きを與へてゐない、獨り鄭夢周をして忠臣の名を擅にせしめた所以である、斯様にして上下數千年、幾度も國家主權の所在が移動して來た朝鮮に於て、人民の國家觀念が日本と異ふのは當然ではあるまいか、殊に支那の屬國としてその正朔を奉ずること久しく、表面だけでも獨立を宣言し大韓帝國と稱するに至つたのは今日から溯つても僅かに半世紀足らずである、それ迄は廷臣が君王に聞上する場合、奏といはず、啓字を用ゐた、奏字は宗主國支那の國王に對して用ゐることになつてゐた、これは固より支那に對する遠慮からであつたのであるが、斯様なことが民心に影響しない道理はない、朝鮮の人民は王が生殺與奪の權を有つものであることは知つてゐた、國內に於ける最上最大の權力者であることを知つてゐた、然かも王の上にまたより以上の大なる力があることも知つてゐた、

即ち朝鮮の王位が十全至尊のものであるとは思はなかつたものである、即ち各王朝に對する人民の感情を例ふれば、平氏から源氏、足利、織田、豊臣、徳川等諸家の覇業に對する、日本國民のそれと同様であつた、現に生存してゐる李朝の遺物たる儒生の如き、支那の中華と稱するに對し、朝鮮を以て小華と稱し、以て誇りとしたくらゐ、朝鮮の主權の所在は朝鮮民族魂の淵源ではなかつたのである、國滅びて社稷在りといふと日本民族にその意義が解るであらうか、解らぬ筈である、日本の國體、日本の民族精神には縁故のないことである、それが朝鮮に於ては能く解る、大韓帝國は滅びたが、社稷はたしかに存在し、これに對する朝鮮民族の信念も亦失はれてはゐない、それは朝鮮の社稷は朝鮮民族のそれであるからである、而して日韓併合以來政府は諸有機會に於て「併合は東洋平和のため」といふこと、「朝鮮人の繁榮福祉の爲め」といふこと、を主たる理由として掲げ、以て民心の勸解に努め來たのである、「朝鮮人の繁榮福祉のため」といふ以上「朝鮮民族の社稷尙存す」といふ觀念を放棄せよとはいへない道理である、更に政府は聲を囁らして内鮮人の共存共榮といふことを説示してゐる、これ等を稱して朝鮮民衆に

對する政府の公約といふは失當であらうか、政府が國民に對する公約を果たすことは、國家的大義を斯民に布くことである、然るに政府はこの公約の履踐を怠つてゐる、即ち一、政府併合の際宣明したところに反し朝鮮民族に對し恰も被征服國民に對する如き待遇をした。

これは武斷政治と呼ばれ、内地に於てすら非難の聲喧しく、大正八年三月勃發したる騷擾の如きも、この武斷政治に對する反感より起れるものと推斷されたくらゐて、常に武裝して民衆に對するが如き態度を持し、全く民衆の自由を奪ひ、「汝等は無教育者の集りである、汝等は世界の大勢に通じない、汝等の經濟力は低い、汝等は弱い、汝等を教化民たらしめ、幸福なる生活を営ましめてやるために政府は能ふ限り努力してゐるのであるから何事にも自我を去つて柔順であれ」といふのであつた、民衆はこれを、所謂、ためごかしの壓迫とより外了解しなかつた、たゞ已むを得ず服従してはゐたけれども、衷心の不満は頗ぶる深刻なるものがあつた、併合は朝鮮人の繁榮福祉を進むることを主

たる理由であると爲したる政府の宣明に對して、大なる疑懼を懷いてゐたとはいふものゝ、少くも李朝時代の壓制も幾分は緩和され、年中天日を拜することもなきかの如き陰慘なる彼等の生活も多少明朗にさるゝであらうといふ期待を繋げてゐたものが、韓國政府よりもより強く且つ周匝なる方法手段を以て壓迫を加へられたのであつた、而かも韓國時代に於ては、父祖累代そのことに馴れたる壓迫の手法である、これに應酬する段取りも工夫されてゐたので、こうしたものと諦むればそこにまた安易の境地もあつたのであるが、總督政治の下には絶対に逃避的安易は許されない、民衆窮乏の極は不平である、怨嗟である、『政府は虚偽を以て併合を粉飾したのだ、我等の疑懼は果して杞憂ではなかつた』と信ずることになつた。

二、政府は民情を誤解し、衣食だに満足せしむれば、彼等は即ち新政を謳歌するものと考へた。

衣食足つて禮節を知る、と先人は道破した、これはたしかに人情を掴み得て今に新らしい語である、しかし昔も今も變らぬ例外はある、それは衣食餘りありて禮節を知らざ

る者あれば、衣食足らずとも禮節を辨へたる者もあることである、殊に世態の變化甚だしき時節には、縦へ衣食足るも心の安定が失はれてゐるために、社會平和のため、人類生存のために最も必要な禮節が、反つて無用の長物であるかのやうに思はれ、時によりは人類の生存權に對する控制作用として嫌忌する者もあるくらゐである、日本の識者をして現に思想國難を唱へしめつゝあるのは畢竟これがためである、朝鮮に於ては、併合によりて國號の滅失といふことが、先づ甚大なる衝動を人心に與へて以來、政治的にも社會的にも各般の事情が非常な變化を來たした、爲政者が更始一新と稱し、改革に次ぐに改革を以てし、舊弊を打破して行く作業は、これを他の一面から見れば、民衆をして五里霧中に彷徨せしむべき一種の惡戯に過ぎなかつた、『明日は何うなるか』一切彼等には判らない、未知の異境に流寓するが如き心情、それで何うして心の安定が得られやうか、何うして恒心があり得やうぞ、朝鮮の各地に於て、不逞團の所謂軍資金が官憲の眼を掠めて容易く集められたのも所詮は『何日何うなるか』に民衆が迷つてゐるためである、かゝる實情を邈視して只管『衣食足らしむべく』産業開發を題目とし、働け稼

げと鞭撻することは心の安定せざるがために、食へども味を知らず、着れども暖を感じない民衆に取りて、果して有りがたいものであらふか、それを有りがたく感じないのは民衆が悪るいのであらふか、深憂を懷く者は『食も咽喉に通らぬ』といふが、日本でも通例の人情ではないか、況して韓國時代虐政に苛まれ、足らはぬながらも衣食を給することも出来たればこそ露命を維いて約二千萬の生靈が残つてゐる、新政以來産業の開發著しく、著々農事の改良も行はれ米麥その他山海の産物も多くなつたけれども、貧乏者の數は減じはしない、年々餓死する者もあれば凍死する者もあり、特に新政を謳歌すべき理由を、實際彼等は見出してはゐないかも知れない、然らば何うしたら可いか、民心を安定せしむるが急務である、何うしたら安定せしむることが出来るか『明日どうなる』かを知らしむることだ、施政の根本方針を確立することだ、この方針は一定不變のものである、非違は決して許されぬといふことを民衆に周知せしめ、嚴として歸向を指示することだ、民心安堵の大本はこゝに在る、併合の際政府が政府を信頼せよ、而してその堵に安んぜよと民衆を慰撫したことは、安堵せしむべき確信を以て民衆に與へたる公約

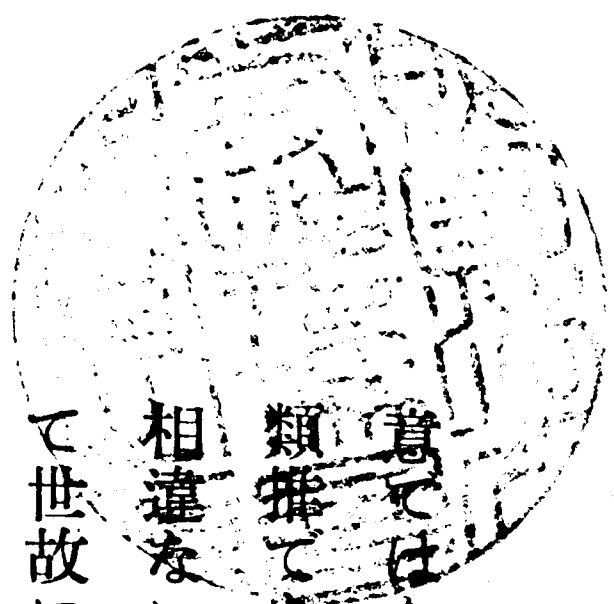
に外ならぬであらふ、繰返していふ公約を果たすことは、即ち斯民に大義を布くことである。

確信なき政治に

民衆の信頼を強ゆ

古人は、己の欲せざるところは、これを人に施す勿れ、といった、同様の義に於て、人若し自信なきところのものを偽りて善となし、これを他に勧めたとすれば、それは勿論咎むべきことである、これを大にして一國の政府が、その結果に對する確信なくして統治を行ふとすれば、それは重大なる國家的罪惡である、朝鮮統治は、かうした罪惡の連續であると斷ずるとも、決して失當の言ではないと信ずる、異存あらば試みに爲政當局に問へ『朝鮮統治の將來は如何になるべき乎』と、彼等は『サア何とも見當がつかない』と答へるであらふ、見當のつかないのが當然である、統治の根本方針が確立せず、随つて民心はその歸向に迷つてゐるのに、將來如何に成り行くべきかの見すえがつくも

のではない、想像だも及ぶ道理がない、されば政府自ら確信なき政治を行ひながら民衆に對して政府を信頼せよと強ゆるのである、國家の不安、人民の不幸これより大なるはなしといふべき現状である、或は曰く『裁判の公正は民衆の信頼に値する、農産、水産より林産、鑛産の増進その他生産の増殖は併合當時に比して殆んど隔世の感がある、殊に教育の普及今日の如くなるべきを韓國時代何人能く豫想したであらふか、要するに啓沃と誘掖と可能を盡して民度の向上を計つたのである、諸外國の植民地統治に斯の如く親切を極め、土着民の福祉を計つたためしは他にない、斯くても尙ほ朝鮮の民衆が新政の惠澤を感謝しないといふならば、民衆は果して何を求むるのであらふか、朝鮮獨立か、それは許さるべきことでない、また朝鮮人に取りても決して幸福を約束するものでないことは朝鮮の歴史がこれを證明する、それもこれも今に理解されるであらふ、時が總てを解決する』と、これは恐らく政府者も肯定するであらふところの見解である、そして一應尤もな意見である、然かも『民衆は果して何を求むるのであらふか』とは、爲政當局の申分として甚だ心細い次第ではないか、民情を察することは政治の第一義的用



意ではないか『求むるところは朝鮮の獨立に在るか』と爲すなど笑止千萬にも迂濶なる類擗である、成程獨立運動なるものも起つた、民族主義なるものも唱へられつゝあるに相違ないが、これは朝鮮統治に對する不平不満を強調するに外ならないのである、而して世故に馴れない成年者の中には眞に獨立を祈念する者もあるやうであるが、彼等は帝國政府の下に在りては到底その不平の政さるべき、不満の充さるべき見込みなしと爲すためである、一般には獨立の不可能事たることが了解されてをる、辯護士が法廷に於て刑事被告人を辯護する時、而してその無罪たるべきを主張する時、彼は果してその無罪を信ずる場合のみこれを主張するであらふか、兎もあれ朝鮮獨立の不可能事たるを知悉しつゝも獨立を叫ぶのは不平不満の昂じた結果である、泣いて自ら慰むといふことがあるが、獨立運動の如きも所詮は自ら慰藉するため泣くにもまさる悲鳴を揚ぐるのである、然らば朝鮮民衆の朝鮮統治に對する不平不満とは何か、そは主として政府が朝鮮人を遇すること、内地人との間に格段の差別をつけることから發する、或者の言の如く裁判の公正は民衆も認めてゐる、故にこれに對してのみは何等の不平もない、爲政者はこ

の事實を認めなければならぬ、眞に公正であれば民衆は故意に不平を唱ふるものではない、各種産業の發達に對しても何も不平があるわけではない、不満を感じるわけではない、總督政治の下に、内地の資本を引いてこそ斯の如き發達を遂げ得たであらうことを知らず覺らぬでもない、經濟力の増進も——たとへ經濟力などいふ言葉は一般民衆には解らなくとも——臍氣に爾う云ふ事實は知つて居る、しかしながら經濟力が如何に増進しても、産業が如何に發達しても、全人口の八割を占むる小作農は依然として困窮の生活に喘いでゐる、心無き人々は「收穫が殖えたゝめ贅澤になり困難してゐるのであらふ」と嗤ふのであるが、現に内地では豊作の爲めに農村が困つてゐるといふ思ひもよらぬ珍現象があるではないか、それも内地では好景氣の時に心がけを怠つたために近年の不景氣に一層崇られてゐる、自業自得といへる節もあるが、朝鮮の小作農など未だ曾て「心がけ一つで」などと恵まれたる境遇に置かれたることはない、總督政治の下に、その親切なる指導獎勵によつて、年々秋收も増加して來たが、各種の税金、公課金の種目が多くなるし、肥料には金がかかるし、調製の改善、包装の改良等に至るまで相當生産

費が嵩み、結局增收は同時に増支であつて、多く働くだけが損といふやうな心もちになつてゐるのである、然るに總督府は農産物が増加したから朝鮮人は感謝せよといふ、感謝しても可いとその利益は何人が収めるのか、先づそれを知りたいと考へてゐる、地主か、地主さへも收穫の増加以上に出費の増加に苦しむてゐる、されば併合以前には、地主は餘財さへあれば耕地の買増しをしたものであつたが、當今は法律に依つて嚴に所有權は保護され、韓國時代の如く正當な理由もなきに所有權を侵害さるゝやうの虞なきに拘はらず、耕地を買収する者のないのはこれがためである、偶々地方の資産家など、耕地を買収するとすれば、それは轉賣の目途ある場合、然らざれば割安の土地を買収し、値上りを待つて賣却するためであつて、子孫に傳へるためではない、大體叙上の通りである、故に總督府の發表する米作實收高の數字が如何程大きくなつても、民衆の胸には感謝の念が湧き出でないのである、それから教育の普及發達であるが總督政治の下に長足の普及發達を遂げたことは民衆も皆知つてゐる、然らば韓國若し今日に獨立國として存在したとすれば如何様の状態になつてゐるであらふかを想像して見る、矢張り相當發達

してゐるに相違ないと思ふ、無力でも又いやが應でも時勢に伴つて、時の政府が教育に力を注がなければ民衆は承知しない、而して政府が能ふ限りの努力をすればそれで得心する、韓國時代なればそれで可い、と民衆は考へるであらふ、それに引かへ既往二十年總督府が教育の普及に非常なる努力を爲せしに對して、民衆は「朝鮮の子弟に日本語を學習させるために、特に力瘤を入れるのであつて、教育のための教育ではない」と見做してゐる、感謝する理由がないと考へて居る。要するに爲政者が、朝鮮民衆の感謝に値すと爲すことゝもに對し、民衆が格別感謝の情を懷いてゐない、とよりは寧ろ反感をもつてゐる——或者の口頭のお世辭は別——ことは、朝鮮の事情を知らぬ者、民情を解しない者をして、『果して何の求むるところぞ』と首をひねらしむる所以であるが、政府が國家的大義を布くことを忘れてゐる限り産業や教育に對する總督府の努力の大なれば大なるだけ、こうした爲政當局と、迂濶者の疑惑は益々深まるばかりであらふ。

統治の根本義

内鮮民族の利害共通

日韓併合の事情は姑らく措き、中外に宣明されたる併合の趣旨は、韓國皇帝は、國歩艱難、民生の疲弊甚だしく、これを濟ふの途なきため、日本國の天皇に統治權を委囑されたのであつて、朝鮮民族の寧福を尊重するの意義が最も明瞭にされたものであつた、朝鮮民族の寧福とは政府の客觀のみによつて決定さるべきものではない、朝鮮民族の主觀に對して十分なる考察を加へられなければならぬ、朝鮮人は内地人に比して知識は乏しいが、痛さも痒さも感じない無神經ではない、故に總督府の役人から「これで汝等は幸福であるべきだ」と諭されても、催眠術をかけられて術者から暗示を與へられたやうに無心で「幸福である」と應ずる者はない、心から幸福を感じなければ、御禮は申されぬ、さればとて凡夫であるところの役人に、民衆が如何にすれば幸福を感じるか、鏡に映すやうにわかるものではない、よしわかつても民衆の好むがまゝの施爲が一々出来る

ものでもない、民衆が爲政者に對して求め得るところの幸福は、竟に客觀的のそれ以上を望むことは出来ないものであらふか、否、爲政者は眞に幸福と感ずるところのものを與へ得るのである。

朝鮮民族は内地人に比し文化は後れてゐる、知識は劣つてゐるが、上下四千年、國民としての訓練を経來つた民族である、國威揚らず、善政の惠澤を被むることの稀れてあつただけ政府に對する依頼心など、内地人ほど強くはないと思ふ、虐政に馴らされ來つた爲めに忍耐強く、また不如意に對する諦めも早い、爲政者に取つて誠に都合好き民族である、政治思想こそ劣れ、内地人に比し治め易いこと萬々であらふ、政府が——また内地人全部が——形式的待遇は兎も角、心に墻壁を設けず、口に唱ふる如く「新たに得たる同胞」として、『知識力量の劣れる弟妹』として打解けたならば、朝鮮人の胸中に何の鬱屈が萌すものぞ、總督府當局は、善いことにも、「悪いことにも『朝鮮人であるため』の割引をする、割増をする『彼の行爲は不都合であるが』朝鮮人だからといふので寛恕する『彼の行爲は立派である』」が朝鮮人だから何か爲めにするところがあるのであ

らうと、輕蔑する、朝鮮人に對しては大して感心もせざることに感に堪へざる面もちを見せたり、些細なことに怒罵を浴せたりする、それは弟妹に對する如き溫情を含むものでなく、徒らに思ひ上がりたる優越感に唆かされるか、さなくば浮薄なる打算に出づるものですらある、朝鮮人がかゝる態度を輕蔑し嫌惡するのも亦當然ではあるまいか、忠恕は結構であるが淺薄なる懸引きは戒むべきである、正を正とし邪を邪とし、善を善とし惡を惡として秋毫も假藉することなきとき民心は緊張する、民心を緊張せしむることは、彼等を幸福にすることの第一歩である、弟妹に對するの愛情を缺き、浮薄なる懸引を用ゐて民心を弛緩せしむることを以て恰も新同胞を御するの術であるかの如くに、若くは斯るを所謂殖民地統治のコツであるかの如く心得てゐるならば、それは實に國家の禍である、朝鮮民族を眞に愛するならば、即ち併合の詔書に宣ひし『一視同仁』の聖旨を奉體し、日本民族同様の幸福を授けやうとならば、朝鮮の二千萬民を日本民族に仕立てる覺悟がなければならぬ、朝鮮自治の主張者のいふことに、内地延長主義、同化政策を以て進まば、いづれは朝鮮に選舉法を布かねばならぬことになり、朝鮮から選出さる

議員數が内地選出數の三分の一を占むることになり、それ等が團結すれば議會に於けるキヤステイングヴォートを握ることになり、恐るべき國家の憂患となるであらふと、また異民族の同化は決して望み得べきことでない、殊に永い歴史を有する民族性は、他民族から同化を強ゐらるゝ時、反つて強く反撥する、朝鮮民衆の政府に對する熾烈なる反感は、從來總督府の執りたる同化政策に醗酵されたものであるともいふ、仍て英國に倣つて朝鮮民族に自治を許すがよいと云ふのだが、恐るべき國家の憂患を醸すべく豫想さるゝ狀態の下に朝鮮に選舉法を施行する愚なる政府が現はれるであらうか、實に嗤ふべき愚論である、次に朝鮮民族は決して日本の自治領たるに満足するものでない、自治は直ちに獨立への階段となる、獨立は許さないといふか、然らばたゞ鬭爭の連續が日本の朝鮮領有の唯一收穫になり畢るであらふ、論者は英國に學べといふが、英國の自治領は英國人の植民が先になつてゐる、而して英國人移民の實力が土着人に勝つてゐるといふことが、英國のドミニオン統治に成功したる實情ではないか、そのドミニオンでさへ移民の子から孫へと年代を経るに従つて本國を懷かしむ心情も薄らぎ、今では本國

とドミニオンとを繋いでゐるアングロサクソンの血も水に還へりつゝあるではないか、況んや朝鮮をやあてる、在鮮日本人僅かに四十萬（朝鮮人の百分の二強）政府の武力を別とすれば實力も遙かに朝鮮人の方が優れてゐる、その上政府に對して反感をもつてゐる、そこへ自治を許せば次は獨立へと急ぐのは當然ではないか、それを許さないとすれば武力を以つて壓へる外はない、即ち鬭爭の繼續となるは必然である、それも朝鮮民族の大多數が自治を翹望してゐるならば一應は考へて見る必要があるかも知れぬが、現在はその事がない、夢の多い青年の中には或は『朝鮮人の朝鮮』といふ言葉に酔ひ、獨立か、せめて自治でもと考える者もあるかも知れぬ、また先年或種の野心家數人者が、獨立運動の勃發を好機とし、自治運動とやらを起したこともあつた、『獨立の許されざることは民衆も今ではわかつてゐる（獨立運動は歐洲大戰の講和會議に於て米國大統領ウヰルソン氏が歐洲に於ける小民族の自決を承認すべく提唱し、チエツコ、スロバキアその他獨立國家が承認されたので、朝鮮もこの民族自決主義に均霑することが出來やうかといふので起されたもので、それが『朝鮮には許されない』ことであるとわかつてゐる

の意であるが、民衆は全然斷念したわけではないから、機會ある毎に騷擾を起すであらふ、此際自治を許せば満足する』といふ主張であつたが、政府は一顧をも與へなかつたのみならず、民衆も問題にしまなかつた、實をいふと朝鮮が一元首によつて統一されて後、立派に獨立國の體面を保つてゐた時代の歴史は、現代人には多くの感激を與へない代りに、李朝五百年、支那の屬國として頭を抑へられた呪はしき事蹟は生々しく感情に迫つて来る、ドミニオンといつても、名こそ異へ、實は屬國と相似たものであらふくらゐに考へてゐる、朝鮮自治は民衆の希望するところではない、然かも現狀に不平不満を懷きつゝあることは前記の通りである、それは名狀し難き不平不満である、それは繰返へしていふ如く郷土に住みながら恰も異境に流寓するが如き不安を伴ふものである、かかる民情を見て、これこそ同化政策に對する反感から來れるものであると速斷する者が多いけれども、これは亦誤りであることも前記の通りである、反對に同化政策の不徹底はその事の困難なるがためではない、統治の根本方針が確立しないためである、成程從來施政の方針は同化政策らしく見えはするが、總督府當局すら『朝鮮統治の根本方針は

内鮮同化の主義に據るのであるか』を質す時『然り』と答ふる者はない、自治の提唱を聞いては『結局はそれがよいかも知れぬ』といふくらゐである、而して思慮乏しき青年等から所謂排日論を聞かされて、『朝鮮人としては爾かいふのも道理である、彼れこそ朝鮮人の眞情を吐露するものだ』と同情し、遂に『職業的排日鮮人』といふ名稱すら出來たことはこれ亦前に記した通りである、甚だしきに至つては、共產主義者に對してすら相當理解あるやうの態度を示す、一圖にそれを排撃することは、時代遅れと貶さるゝことを恐るゝためであるやうだ、役人も朝鮮に在勤し、本俸の六割に相當する手當を支給されてゐると、胸中寛ぎがあつて、職務を離れて一身の名聞を冀ふやうになるのであるらふ『頭が舊い』など、評されたくないために共產主義蔓延の餘地を與へるなどは、笑つて済されることがらではない、今日全朝鮮に蔓つてゐる新幹會の如きは『頭の舊くない人々』のお蔭で大を爲し得たともいへる。

大體斯の如き事情である、施政の大様は同化政策らしく見ゆるものゝ、朝鮮統治の根本方針が確立されてをらず、即ち同化政策が統治方針として最善唯一のものと爲される

のではない、ために民心はその適従するところに迷ふのである、爲政當局或は曰ふであらふ『統治の根本方針は聲明する限りでない、しかし實際同化政策に據りつゝあることは明かではないか』と、私は敢て曰ふ『それは何うか、政策の誤りではないか』と、同化政策らしいことは誰れしも認めてゐるが、不徹底であるが故に明瞭でない、確信あつて行はるゝ施政でないために『何うか、政策に』墮する、加ふるに對照が朝鮮人であるために多寡を括つてゐる、親切を缺く嫌がある、たとへば牛肉が榮養分に富むといふのでこれを幼児にも與へる場合、成年者に比して唯分量を少くすればよいといふものではあるまい、肉を摺り潰して消化し易くして與へるか、肉汁を採つて與へるを可とすることもあるはずだ、成年者と幼児とに分量に手加減するだけで、成年者の胃袋でさへ消化し易くない焼肉などをそのまゝ、幼児に與ふことは、不親切であり不行届である、朝鮮の施政にはこれに似たる不親切不行届きがある、分量に手加減して内地人と同じ物を朝鮮人に與へるのが同化政策の本義であるとは、まさか爲政者も考へてはゐないであらふ、それは同化政策らしくは見ゆるが、少しも同化作用をなすものではない、幼児に固い牛肉

を與へ、榮養どころか胃腸を損じて榮養不良に陥らしむると同様である、朝鮮統治が斯くの如き事象を現はしてゐるのは畢竟施政の根本方針が確立してゐないからである、具體的にいへば同化政策を施行するがよいか、それとも將來自治を許す方がよいか、自治を許すことにでもなれば、今日困難なる同化政策を強調するの必要はないと、兩途かけで『程好き』ところを、やつて行かうとするからである、毎に唱へらるゝが如く、日鮮一家だの、内鮮同治だの、朝鮮は内地の延長だのといふことが眞實に政府の確信に存するものであるならば、同化政策は必ずや實行せられなければならぬものである、政府が同化政策を斷行すべく施政の根本方針を確立したならば、先づ以て諸有異論を艾除しなければならぬ、諸の異論に對して彼れにも一理がある、是れも無理ならぬ主張であるなど、如今所謂職業的排日鮮人などの存在を容してはならぬ、斯様な者の存在は朝鮮統治上甚しき害毒を流すものである、識者は夙に注意しつゝあるであらふが、たとへば彼の社會運動の如き、内地に於けるそれは、文字通りの社會運動であるが、朝鮮の場合は一種の政治運動であり、そのスローガンは反國家的意義を含み、その思想は非國民的で

ある、かゝる思想に對しては、それが如何なる方法手段によりて表面を糊塗されてあらふとも政府は斷乎として防遏すべきである、これに對して壓制だの時代錯誤だのといふ惡聲を放つものも出て來るであらふが、朝鮮の民衆は、これに依りて初めてその『行くべき途』を覺るであらふ、未だ經驗無き途を歩むとすれば多少の、否多大の疑懼を伴ふのは已むを得ないことであるが、從來既にその疑懼には馴れて居る、加之行くべき途の定らないために迷ふてゐる、この際行くべき途は好むと好まざるとに拘らず、この一筋の外は無いと極まれば、諦めがつく、諦めがつけば心が落つく、爾ういふ状態を民心の安定といふ、しかし斯様な民心安定は『諦めの安定』である、將來に希望を繋ぐ、前途に光明を望むといふが如き頼もしき安定ではない、一毛の力を加へても動搖するであらふところの心細き安定である、併しながらそれは政府の親切なる掩護さへあれば永續する、安定すれば楽しく生きやうとする心がけが生ずる、これが人間性である、そこに希望が生じ、光明が輝くことになる、而かも親切なる掩護は朝野の一致協力に俟たねばならぬ、少しもわざとらしからぬ行届いた親切であらねばならぬ、

朝鮮に於ては總督府が、農事の改良を獎勵し、殊に米作の指導獎勵には非常な努力を効し、米種の改良、收穫の増加等成績頗る見るべきものがあり、それに力を得て前年産米増殖の大計畫を立て、巨億の經費を計上して、既にこれを施實してゐることは世間周知の通りである、これがために、否なこれ迄にも各地に起されたる水利事業のために田地は改良される、旱害は免かれる、また工事の最も良く計畫された地方では水害さへも防ぐことになつて、内地の如き厄日といふものゝなき朝鮮では米作の危險殆んど有るか無きかの有様であるのは誠に結構であるが、土地の所有者は一向憚らない、理由は現前の打算に於て少しも利益がないどころか、反つて損がゆくといふのである、水利工事費年割額が——俗に水税と呼んでゐる——反當り多きは五圓少きも三圓を下らぬ、收穫が多少増しても水税に相當する增收を擧げ得る田地は多くない『論より證據、水利組合が設立さるゝといふ噂が傳つたばかりで地價が下がるではないか』と、地主等はいふ、その代り旱害は免かるゝことが出来るにより三年、五年の長期に亘りての計算なら相當利益を見ることになるであらふが、旱害はあつて見なければ打撃の程も分らず、何年目

かに旱害必至ときまつたわけでもなく、その上、三五年の後その土地が果して同一人の所有のまゝであるやら分らないといふ心もちは、極少數の大地主は知らず大多數の地主がもつて居るであらふ、それでも苟も恒産有る者が、朝鮮全體の利益のためとあるに、水利事業に反對することは出来ないの、嫌々ながら水利組合にも参加しつゝあるのであるが、かゝる事情を知るや知らずや、内地では朝鮮米の移入を制限しやうとしてゐる、制限では言葉に角が立つ、調節といふことにして、朝鮮に農業倉庫を設け、米穀に對する金融をつけて、移入制限のために朝鮮米の蒙む打撃を幾分か緩和せんとしてゐるのだが、而して若干の効果はあるであらふが、多くの期待をかけらるゝ計畫ではない、故に産米増殖の計畫が進捗すればする程、朝鮮米の値下りは免れない、かゝる原因から來る米價の下落は、直ちに土地の下落を招來するは必定である、そこで農民は考ゆるであらふ、『總督府は、熱心に獎勵、とよりは鞭撻して産米増殖のために金をかけさせ汗を流させたのに、内地では農民保護のために朝鮮米の移入を防遏しやうとする、これでは朝鮮農民の立つ瀬がない』と、而して彼等は内地官民の朝鮮人に對する差別的待遇の餘り

露骨に且つ無雜作に表示されたるに驚き、日鮮一家の親しみは、内地側の都合好き場合に限らるゝものであることを覺らしめらるゝであらふ、否既に覺つてゐるであらふ、覺つて而して自己の立場を顧み、内地人と朝鮮人との利害は到底一致し能はぬ、といふ斷案を下した時に、誰れかその誤解を匡し得べきぞ、内地の輿論が若し『米價安のためには困るのは内地の農民も朝鮮の農民も同様である、同じく日本帝國の國民であるからには喜憂を共にするは當然である、況んや内地に食糧の不足した時には朝鮮米を以て補充したこともあり、内地の人口激増の將來に備ふるために、現に朝鮮に於ては産米増殖の大計畫を施行しつゝあるではないか、然るに偶々不景氣と、引續く豊作のために米價下落したからとて朝鮮米の移入を制限することは、國家の大義之れを容さず、また内地人が朝鮮の同胞に對する情誼に悖る』とあつたならばどうであらふ、朝鮮民衆は何とこれを聞くてあらふか、日本民族の高義に感激せずにあられやうか、國家に信頼せずにあられやうか、こうした感激、こうした信頼が朝鮮民族の心情を捉らへた時、特に論さずとも彼等の胸臆には愛國の精神が芽ぐむ、『我等内鮮人の利害は一致する、喜憂は分たねばな

らぬ、かくする事によつて我等も亦内地人の如き幸榮に恵まるゝてあらふ」といふ信念をもつことになる、朝鮮民族をしてこの信念を懷かしむる事が、内鮮同化の基本條件であり、同時に同化政策の目的であらねばならぬ、朝鮮人が日本語を使ふ、朝鮮人が和服を着る、これ等も無論同化の一端である、日本語を學習すれば日本の事情を知るに便宜であり、浴衣を着るのは日本に親しむ心もあるからであらうが、前者は同化を進むる一の方法に過ぎず、後者は輕微なる同化の現はれてある、日本人が英語を學び、洋服を着るのと相異はない、こゝにいふ點は、前にも述べた通り、世界各國各民族が自然に同化して行きつゝあるのである、内鮮同化の意義、同化政策の目的は、斯様な淺薄なことではない筈だ、同一國民として、榮辱を共にし、喜憂相分つを本懷とする朝鮮民族を育て上ぐるに在るべきだ、然るに現在では朝鮮の普通學校（内地の小學校）に於て日本語を教授することさへ父兄は喜ばない、自身は日本語を解する父兄等が特にこれを厭ふ風がある、想ふに日本語を解する父兄は日本の事情に通じてゐる、たとへば朝鮮米の移入制限を行ふが如く、たゞ内地に、内地人に都合好き場合のみ内鮮一家だの、新附の同胞

だのと、親愛の態度を見し、我れに少しでも都合悪ければ、蹴退け、突退け、邪魔者扱ひにする内地人の、朝鮮に對する冷淡なる心情を察してゐるためではあるまいか、歳は豊穰、米價下落、それで農民は苦痛を訴へてゐる、而してその農民の中にも米の食へない者が多い、都會にはいふ迄もない、米價が安過ぎて困るといふに、その米を食へない者が増加して行くのは、米が多過ぎるためとばかりはいへないであらふ、農村疲弊の主因は他に在らねばならぬ、朝鮮米の移入を制限したとて、また從來の通り放置したとて、米價に格別の相違があらふか、的確な打算も立たないのに移入制限を案劃して、朝鮮二千萬民の信賴を裏切るとは何たる短見ぞ、世界の景仰する大和魂も、法律が「危難防衛」などいふことを認むる現代に於て、身を殺して仁を爲すの感激性を失つたかも知れぬ大體身を殺して仁を爲すといふことが時代錯誤かも知れぬが、何分にも現代の文化に遅れた朝鮮民族である、而して上下數世紀の長き、文字通り「無告の民」であつた朝鮮民族である、仁政に悦服し、同情に感激し易いのである、それを是非することは休めてもらひたい、理論ではない眞情である、政府も、内地人もこゝに三思の必要がある。

更に必要なるは、政府が朝鮮に對して深き注意を拂ふことである、而してその表面を直視するだけでは足らぬ、側面も裏面も知らなければならぬ、初代總督故寺内伯の朝鮮統治は、武斷政治と呼ばれ、極端なる專制振りが惡評を招いたが、故伯の行届いたる親切と、その高邁にして無私の態度には朝鮮人も畏敬してゐた、而して伯の統治に對する惡評は内地人と朝鮮人とは聊かその趣きを異にしてゐた、武斷政治など、いふ名稱は内地人の命名であつて、内地人の放つ惡評を聞いて『成程然様なものか』と考へたくらゐ、然し併合と同時に幾分かは民權も認めらるゝであらうといふ豫期の全然裏切られたのに對しては無論不平を懷いてゐたが、それよりも憲兵警察に對しては非常に惡感を懷いてゐたそれは在鮮の内地人すら思ひも及ばぬ程深刻なものであつた、その主たる原因は憲兵補助員(朝鮮人)等の傲慢と不行跡とが所在住民を憤激せしめ、延いて憲兵警察制度に對する惡感となつたのであつた、不行跡も特に婦人に關する非行は多くの場合表沙汰にもなし得ず、偶々訴へ出づる者ありても警察官憲はこれを受理しない、故に鬱憤を霽らすの途なく、怨恨は竟に總督政治に歸するに至つたといふ次第である、この事實も、人情

を深く察しなければ、一笑にだも値しないやうに思ふ人もあるであらうが、日本に於ても維新の頃、横濱の一遊女遊龜とやらが『ふるあめりかに袖は濡らさじ』とて、自殺したことが、如何に世人を感激せしめたか、明治時代までは女子の教育資料にまで引用されたではないか、婦人の貞操問題に關しては内地にもまして甚だ深き關心をもつ朝鮮人である、憲兵補助員は外國人ではないけれども、その非行のために各地に家庭悲劇が演ぜられ、然かも報復の途がない結果、總督政治を呪ふに至つたのである、些事と見て忽せにしてはならないといふ鑑戒とするに足るであらふ(序に記す)本年七月の交、一朝鮮人は内地在留の朝鮮人に對し、朝鮮に還歸することを勸むと稱し、一種の不穩文書を印刷して配布した、不合理と誣妄とを文字で綴つたやうなものであるが、恰も朝鮮人に對して反逆を勸むるかの如き感を與ふのである、内務當局は何と考へて印刷配布を許したのか、不注意か、迂濶か、例の新らしがりの結果か、それとも『朝鮮など何うなつてもよい』といふ覺悟からか、奇怪千萬である。

以上朝鮮統治の根本方針が如何に確立せられざるべからざるかに就て、而して内鮮同

化の本義に就て更にその達成の困難ならざる實情に就て一通り説述した、次に同化政策が施政の實際に於て如何なる形式を採り、如何なる内容を盛りざるべからざるかに就て、例を經濟産業政策に取り聊か私見を開陳したい。

經濟産業政策

朝鮮人本位とは何ぞ

先年朝鮮に於て産業第一主義といふことが唱へられた、故下岡忠治氏が政務總監在任中提唱せられたのであつた、主義として唱へられたのは爾うであるが、産業第一的行政が寺内總督時代から施爲されてゐたのは事實である、而してその結果は朝鮮統治の全局的觀念からすれば好成績を挙げ得たとはいへない、その理由は前に指摘した通りである併しながらいふまでもなく産業開發は必要である、民の生活を豊かにすることが、政治の第一義的要項である以上、申さば『定石』の一手である、たゞ何事を措いても先づ産業の開發といふ譯にはゆかないだけのことである、從來の産業政策は、『何事を措いても』

であつた、産業第一主義なるもの、標榜が即ちそれである、然かも産業開發が、治民の第一義的要項であることにはかりはない、十分の力を効たすべきは當然である、こゝに於て産業政策が問題になる、政府が産業の開發に斯くも努力するのは、勿論民衆の生活を豊かにせんがためであり、同時に國富を増さんが爲めである、而して民衆の生活と國富とは大體に於て前後するものでなく、一致若しくは同じ比例を以て並行するわけであるが、不幸にして朝鮮は例外に屬する、それは産業政策に植民地的施爲を採用したからである、併合以來二十年、朝鮮の富力はたしかに非常の増進を告げたるに拘らず、民衆の生活がこれに伴れて豊かにならないのはこれがためである。

植民地的施爲とは、産業開發の目標乃至先後を定むるに、内地の利益——或は便宜——を主とするの謂ひである、併合後の十年は、會計の獨立を成就するためと、關稅据置——韓國政府と諸外國間の通商條約廢棄の條件として——のために、保護政策を執つてゐるやうに見える節もあつたとはいへ、要するに内地本位の産業政策に外ならないのであつた、何をか内地本位といふ。

韓國時代、幼稚なる自給自足經濟、消費本位の產業より一步も進むてゐなかつたことは今更説明する必要もあるまい、總じて文化の後れたる國土に於ては、人口稀薄なるが通例である、然るに朝鮮は内地に比して一方里幾人といふ比率をとれば人口稀薄であるが、地力其他山海の富といふ凡ての資源に對する比率をとればその密度は反て朝鮮の方が高いかも知れない、斯様な朝鮮に於て併合勿々先づ自給自足經濟の固い殻を打壊くことに殆んど全力を盡したのであつた、それは實際に内地との取引及内地資本の活躍に便するためといふ外はない、固い殻は壊れたが胚子は未だ芽を吹く時期に達してゐなかつた、人力も地力も政府の方針と内地資本の要求に應ずることは出来なかつた、故に產業は相當に發達したが、それは政府と内地資本の壓力によりて抽出されただけのものがある、生産の増殖は内地資本の利潤に引當つれば餘すところは政府の骨折料（といへば語弊があるが地租其他諸税の加重）にも引足らないであらふ、同時に自給自足經濟の打破は急激なる移入超過を現し來つた、既往數年間、内鮮貿易は年々二十萬圓内外の移入（朝鮮側へ）超過である、その決濟は總督府特別會計に對する補給金壹千五百萬圓その他

特別補助金により辛じてバランスがとれるといふ有様である、而して其間の遺繰りは事業公債、殖産債券等を以つて凌ぎつゝあるのである、かゝる經濟狀態の下に在りて民衆が何の餘德に霑ひ得やうぞ。

例を擧げて見る、政府は朝鮮に於て棉花一億斤を生産する計畫を立て（米國種陸地棉の栽培は、保護政治時代に始られたものであるが、一億斤生産計畫は併合後に立てられたものと聞く）既にこれを遂行したのである、この計畫は日本の紡績事業が、原料全部の供給を外國に仰ぐの不利不便を緩和するためであるのはいふまでもない、然るにこれを朝鮮の生産者側に立つて見ると、初め計畫の主意が爾うであつたやうに内地の利益のためとより外は考へられないのである、何故なれば、南鮮地方では殆んど強制的に棉花の栽培を始めさせられたのであるが、その代りに雜穀作を放棄しなければならぬ苦痛は尋常でない、棉花は高く賣れる、價額の點では對抗作物の比ではない、しかし農民の生活は自家の作物を貯藏して食料に供する事によつてやうやく支へ得られるのである、昔から五反百姓といへば内地では立派な自作農を意味するものであると聞く、その五反百

姓——現實に五反の田畑を耕作するとして、收穫物全部を金に換へたならば果して、五反百姓の生活が安樂であるであらうか、收穫物の内、食料を貯藏し、餘分は賣却して日用品を購入するといふ風に、先づ「食ふ準備」を本にして初めて五反百姓といふ標準が立つのでは無か、若し全部を金に換へるとすれば、農民の勞働は至極低廉なる賃銀に過ぎない、到底立ち行くものではない、雜穀を作る土地に陸地棉を作るとすれば、農民の生活の利益を主として考慮する時、棉花の收穫が雜穀のそれよりも二倍以上の價值に上がらなければ得失相賠償得ないであらう、生産物その物の價值の増加といふ名目上の利益は、内地資本の高率を約束されたる利子及利潤として吸はれてしまふ、而して一人の困難裡に残されつゝあるのである、養蠶も總督府が手を盡しての奨励によりて、近年頗る盛んになつた、これは棉花作と異り、所謂農家の副業であつて、相當農家を露しつゝあるやうであるが、これとても内地資本に對する奉仕額が餘りに多過ぎるのである、諸多の金融機關も、資本の十中七八は内地人の出資に係り、それ等資本の運轉活潑なれば活潑なるだけ高率なる金利のために惱まされる、數へ來れば際限がない、要するに朝鮮に於ける

經濟産業政策は、内地資本の跋扈跳梁に便する爲に立てられたものゝやうである、總督府の役人が口癖のやうにいふところの「朝鮮人本位」では斷じてない、歐洲人の植民地を搾取する手法に似てゐる、これが如何程同化の障害となりつゝあるかを識者が氣が附かない道理がない、さればとて今更ら從來の政策を一擲することは困難であらう、由て幾許にてもその弊害を削減することは今日の急務である、それには種々方法もあるであらうが、何よりも先づ必要なのは内地資本の金利を引下げることである、金利は常に内地よりも高率でなければ、朝鮮に資本を誘致することが出来ないといふ事情はわかつてゐる、しかし爾ういふ事情の存在を承認することは、日韓併合の本義に悖るものである、朝鮮が日本の延長であるならば、内地人が眞實に斯様に信ずるならば、内地資本の金利を特に高率にする理由は消滅する、況んや勞銀が安く、食糧が安く、内地資本の媒介を経ざる總ての生活資料が安く、尙また事業濫興の虞れなく、從て投資に危険を感じると少かるべき朝鮮に於て、金利の高かるべき理由は一つもこれなきに於てをやである、然るにも拘らず朝鮮の金利を高率にするにあらざれば内地資本の誘致が困難であるなら

ば、政府は政治的措置を講ずべきである、東洋拓殖會社が勸業金融の名に於て行ひつゝある不動産擔保の長期貸出しさへ、低利といふのは貸す方の見方であつて、朝鮮人に取っては寧ろ高利である、貸附額は擔保物の時價の六割以内實は半額にも達しない、債務者は勿論半値で擔保流れにする考へはないのであるが、契約通り債務を償却し得る者は極少數である、即ち金利の高きに過ぐる證據である、朝鮮の資力は、朝鮮人の知力は、内地の資本を内地人同様に使ひこなすことは困難である、その内地資本の跳梁に便すべく經濟産業政策を打樹てられた爲めに、朝鮮人は内地資本のために虐げ苛まれ、生産の増殖顯著なるに拘はらず、民衆は依然として貧乏に苦しむてゐる、内地資本の暴威は實に韓國時代の貪吏に比し、勝さるとも劣らざる状態である、されば若し政府が思ひ切り救済策を講じなければ、久しからずして朝鮮民族は經濟的破滅を免がれないであらふ、經濟的破滅、想像するだに恐ろしいことである。

結 論

朝鮮統治の根本方針に關して、朝鮮民心の安定を計ることの如何に緊急事たるかに就て、更に朝鮮人の經濟生活の大要に關して、新日本の一部たる朝鮮が、如何に統治されざるべからざるか、概ね所信を説き得たと思ふ、而も尙ほ統治上、重要な事項の一つとして教育問題があるが、現在教育上、最も重大なる問題として論議されつゝあるところのものは、朝鮮統治の根本方針確立し、民心安定し、民衆の生活に特異の不安を感じしむることなきに至らば、自ら解決さるゝ問題である、現状を以て進まば、國家が教育の效果に對する期待の酬ゐらるゝ時機は、恐らく永久に到來しないであらふ、社會教育とやら、一般民衆に對する教化も亦同様である、但し化外の民とも稱すべき滿洲在留朝鮮人の教化に關しては特別に考慮する必要がある。

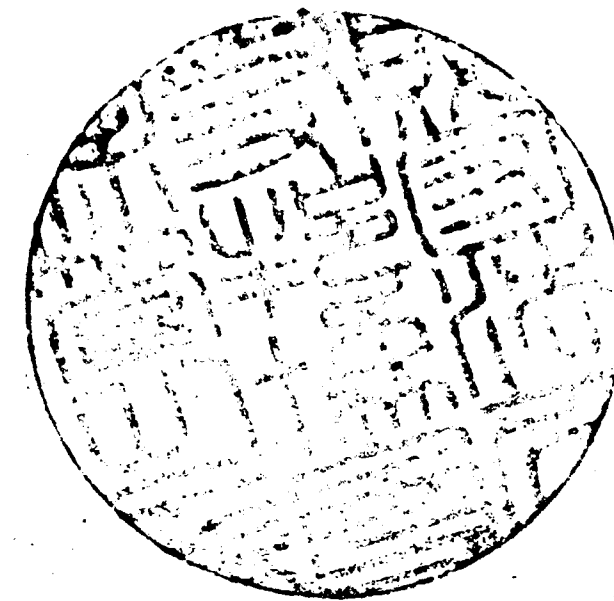
現に在滿鮮人といへば、國家の憂患を以て目せらるゝ有様である、鮮滿の國境延長三百數十里、武裝警官を以て人垣を造つてゐる、在滿鮮人の數、百數十萬、不逞の徒はその内の極めて小數に過ぎないのであるが、屢々境内の治安を脅かさるゝのである、政府の綏撫効を奏すれば國境の人垣を撤廢し得るのみではない、國內の民心に好き影響を與

ふるのみではない、實に彼等こそ日本の滿蒙に於ける經濟的發展に最も重要な役割を擔當し得るものである、日本の滿蒙に於ける特殊の權益とは、南滿鐵道の經營乃至軍隊の駐屯がその全部ではあるまい、日本の資本を以て滿蒙の資源を開發し、原料を彼に採ると同時に、我が生品の一大市場を開拓する爲に優先的機会を有つべきことを意味するものであらふ、而して投資の効果を大ならしめ、經濟的發展の基礎を鞏固にするには、投資に伴ふて國民の移住が必要である、移住民の多寡は直ちに我經濟勢力と正比例するのである、然るに日本人は滿蒙移住を好まない、何故好まいか、日本人は郷土愛が餘りに熾烈である爲に、その山川物風に、親戚故舊に別れて遠く異境に移り住むことを厭ふためであるか、或は爾うかも知れない、果して然らば北米に移住することを好むのは何ういふ理由が在るのか、勞銀が高いためか、それもあるであらふが、それよりも日本人の歐米崇拜熱が米國を天國か極樂のやうに思はせるのではないだらうか、同じ移民でも米國に移住せるよりも、朝鮮滿洲に移住せる者の中にこそ、多くの成功者があることを知らないであらうか、日本語の中に英語を、せめて單語でも交ぜなければ、時代おくれの

鈍物視される風潮、己れを虚ふして歐米に事へるが如き思想、天孫民族の胸にこうした思相の湧いた原因が解らないので、米國移住を好み、滿洲移住を厭ふ理由も亦解らないのであるが、兎に角日本人の滿洲移住は、遠き將來はいざ知らず、日に月に漸を追ふて當然擴充されざるべからざる國策の進程に伴ふ必要を充たし得べしとは、想像だも及ばぬことである、こゝに於て從來厄介物視しつゝある在滿百餘十萬の朝鮮同胞に關して、更に考慮を加ふるの必要が起るのであるが、在滿朝鮮人が我大陸發展の前線に於て、帝國政府の保護の下に、生活の根據を築くことは、即ち我經濟勢力扶植の一端であると同時に、その故國に住む同胞をして如何許り政府に對する信頼の念を増さしむるであらうか、これだけにても滿鮮國境警官の人垣は撤廢し得らるるであらふ。

惟ふに朝鮮統治は、日韓併合を道理づけたる大義に鑑み、施政の根本方針を確立し、從つて中途半端なる經濟產業政策を改善し、内地延長主義による同化政策の基本的施設として、先づ政府と、内地同胞とを信頼せしむべく、朝鮮人の實力に相應ずるといふ意味に於ける朝鮮人本位の經濟產業政策を採り、斯くて先づ民心の安定を圖り、民衆の生

活を向上せしむべく十分なる努力を致さねばならぬ、私見果して識者の認むるところとなるや否、それにしても内地の朝野は餘りに朝鮮を閑却してゐる、親切を缺く、敢て誠心を披瀝する所以である。



昭和五年十月三十日印刷

昭和五年十一月三日發行

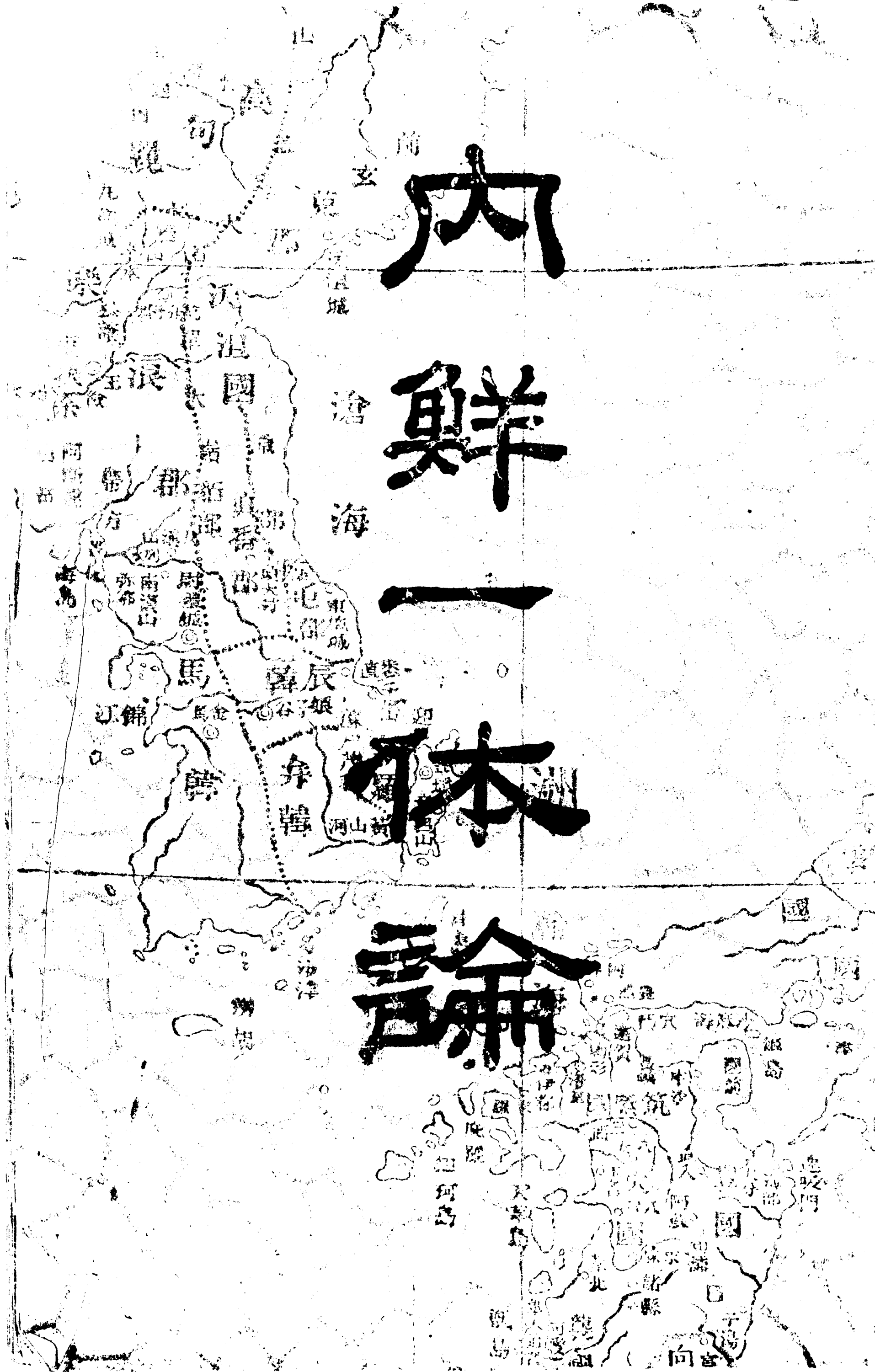
【非 賣 品】

東京府荏原郡馬込三八一二番地
著者兼 朴 春 琴
發行人 電話荏原二〇五〇

東京市京橋區木挽町二ノ十三番地
印刷人 渡 邊 正 雄

東京市京橋區木挽町二ノ十三番地
印刷者 昭 文 社 印 刷 所

發行所 朴 春 琴 事 務 所
東京麴町區内幸町一ノ三幸ビル
電話銀座(57)三二五二



230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1 2

049-11

姜 昌 基 速

大

鮮

才

民 評 社 發 行

誤

正

十二頁八行目 性格は。
九十一頁五行目 皇紀一四五七
九十二頁十三行目 前津耳の女麻施能鳥
百廿三頁二行目 軻智
百廿七頁十三行目 永春郡竹平
百五十九頁第一行全部を百五十八頁第一行目に移す

和



•




14



1

7



10

037

簾 (表・扉)

杞溪俞華柱書安東林公弘量墓銘文に攝る

表紙刷込地圖

吉田東伍博士著「日韓古史斷」より抄す

卷頭題字

朝鮮總督 南次郎閣下

德富蘇峰先生

四

内田良平先生

序 文

法學博士 小野練太郎先生

陸軍少將 木 鈞十良閣下

而

有 前 事 外 生

姜 昌 基 速

大 鮮 一 才

國 民 評 論 社 發 行

誤

正

十二頁八行目 性格は。
九十一頁五行目 皇紀一四五七
九十二頁十三行目 前津耳の女麻施能鳥
百廿三頁二行目 突遇軻智
百廿七頁十三行目 永春郡竹平洞
百五十九頁第一行全部を百五十八頁第一行目に移す

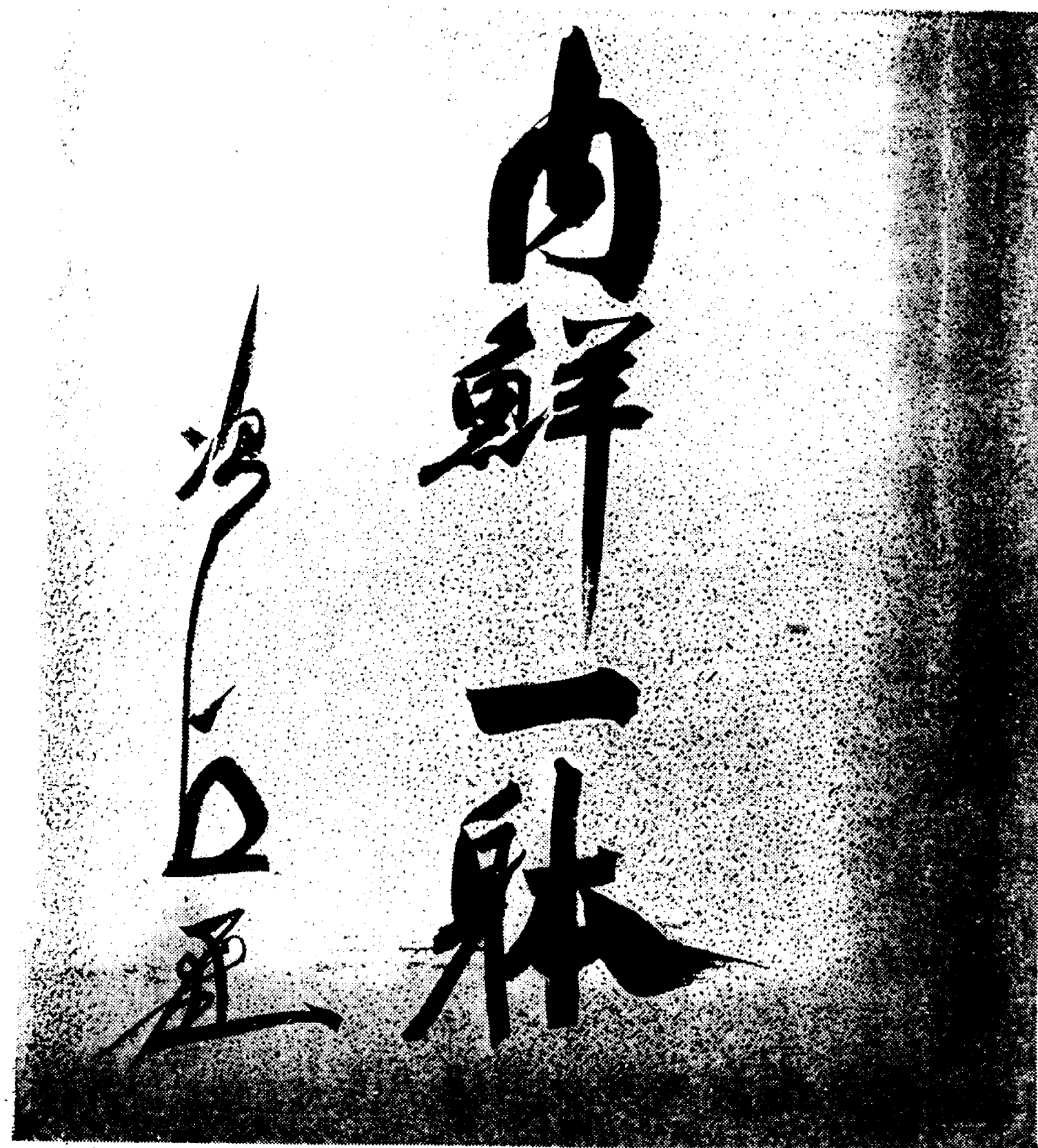
性格は、

皇紀一四七五

麻陀能鳥の女前津耳

軻遇突智

永春郡升平洞



朝鮮總督南次郎閣下題字

一視同仁是
明治天皇之
聖旨也
蘇峰三郎先生題

蘇峰三郎先生題

蘇峰三郎先生題

蘇峰三郎先生題

明治天皇

大稜威輝き渡り

邦人も大和心と

ふりにけるあり

良平

内田良平先生題字

序文

我が帝國の朝鮮に對する政策は始終一貫し、朝鮮二千萬民衆の幸福を増進して其の文化を向上せしめ、東洋平和の基礎を確保するに在るは、今更ら之を述ぶる迄もなく、内外の既に齊しく認むる所なり。日韓併合前に於ても、我が帝國は常に韓國を指導誘掖して、兩國の福利を増進し、東洋の平和を維持するに努めたるが、これが完全なる目的達成のために、遂に併合の結果を見たるものにして、併合の趣旨は、當時換發せられたる詔書に於て既に明かに宣べられたるが如く、内地朝鮮相合して一體となり、彼我の差別を撤廢して、相互全般の安寧幸福を増進するに外ならず、歴代の總督皆な聖意を體して、朝鮮の開発を圖り民衆の福利を増進し、長く治平の化を十三道に洽ねからしむるに努め、諸般の制度施設全く韓國時代の面目を一新して半島の民衆は茲に初めて光明ある政治の下に立つを得たり。尋いで大正八年八月、政府は更に時世の進運に鑑みて、總督府官制の改正を行ひ、從來の制度を釐革して益々治化の普及を圖り、朝鮮の民衆をして文明政治の惠澤に浴せしめ、其の文化の向上を見んことを期

したり。要するに、此の改革たる、併合の趣旨を發揚して時勢に順應せしめ、以て一層其の徹底を圖りたるものにして、朝鮮をして漸次内地と同一制度の下に立たしめ、終に兩者の間何等の差異なからしむるに至るを以て其の目的としたるものなり。斯くして始めて朝鮮民衆の向上發展を期するを得べく、又併合の趣旨を貫徹するを得ん。余は嘗て、大命を拜して朝鮮に赴任し、親しく其の局に當りたり。當時朝鮮文化の程度尙ほ幼稚の域を脱せず、内地と相距ること甚だ遠く、遽かに内地と雁行せしむるを得ざるを痛感せしが、爾來年を経るに従ひ、今や各般の文化的施設と開發は格段の進歩を遂げて、昔日の舊態、面目を一新せり。わが政治の惠澤は半島に洽ねく、二千萬民衆皇化に浴して悅服せるの現状まことに喜ぶべきものあり。方今帝國非常の時局下にありて、内地朝鮮相合して一體となり、緊密の和衷協同に起つべきは、帝國の地位と半島の將來に鑑みて、愈々切實なるものなくんばあらず。頃者特に内鮮一體論の論議盛んなる所以も茲に存す。この時、朝鮮學生指導の機關として、創立以來十五年の歴史を有する力行社の主幹たる姜昌基君によりて本書の著述刊行を見る、まことに所以なしとせず。本書は、博引旁證、深く内鮮親和の史實に思を潜めて、その淵源の遠くして深さを究め、こゝに皇道精神における一體發展の歴史的必然性を力説す。その熱烈至誠の文字は感嘆に値すべく、内鮮共に精讀すべき良書たるを信ずるものなり。

余、力行社理事長として著者を知ること久し。上梓にあたつて序文を需めらるゝにより、即ち、囑に應じて之を似すと云爾。

昭和十四年八月

水野鍊太郎

序 文

光明理世はわが皇道の大義也。神教彝倫はその大本也。而して、一體和衷は皇國の性相也。是を以て、乃ち稱して神國、日本といふ。

往昔鴻荒の日、太白山頭檀木の下、王儉天符三印を持してこゝに天降し、神教を設け民に教ふといふ。來り化するもの市の如く、國號之を稱するに朝鮮を以てす。蓋し、神明、光宅を義となすと。民、恒恭禮儀あり、好讓互に諍はず、即ち檀君王儉が神聖の化に原づくと傳ふ。然るに、歴史茫邈として數千載、神教陵夷して、今、昔日不成文化の體様を喪ふ。乃ち、民族同根、反始の義理に徹して國を併せ民を聚せ、一體皇國に合化して報效の一路を往く、すでに三十年を経たり。之れ、もとより民族の歸趨にして、歴史の本命たらんのみ。即ち皇道に啓明して、朝鮮の本義をこゝに更生する也。遠く、豊公、三軍を半島に進め、近く、大南洲、渡韓遠征を説くもの、兩雄の心鏡照映して、その志、共にいはゆる征韓にあらず、歐夷に構ふるの東洋の獨立也。東洋の獨立を支那に訓ふるに在り。日韓を併せて之を基立せんとするの規畫たりしな

らむのみ。内鮮一體の義すでに昭々、英雄の先見明達を示すと云ふべき乎。
わが舊知の人、姜君、この義に徹してこの理を究め、載藉旁證、よくその合體の實
を史に證して、いはゆる内鮮一體の論策を古往と今來に述べ説く。見解洽當、經世の
至情行文に澎湃するを感ず。まことに我意を得たり。即ち請に應じてこれを序に寄す
と、云爾。

昭和十四年夏八月

林 銑 十 郎

序 文

「八紘一宇」は、世にも尊き國民理想である。これを戴持し、これを具現して、近
くは國體を發揚し、進んでは天地の化育に賛與する、これ以上の意義ある國民生活を
また何處に求め得むやである。この輝かしき傳統は、今やその實現の第一歩を内鮮一
體の上に述べけやうとしてゐる。

「内鮮一體」が、時代の信條であり、爲政の指標であることは、誰しもが心得てゐ
るところであるが、それが歴史的事實であることは知る人が尠い。然しながら東方世
界に於ける精神的紐帶が、愈々切實に要求される今日、これをこのまゝに放置出來ぬ
ことは云ふまでもない。資料の蒐集、事實の闡明、而して學的方法の建立、それら
に大なる困難が感ぜらるれば、それだけ有志の士の奮發が、一般に翹望せられざるを
得なかつた。

姜君昌基は、新知の友であるが、日本精神の研究と並びに内鮮一體關係の考索に心
を潜めること多年、人の抵らざるところに抵れる點のあることは、尋常の話次にもよ

く窺はれてゐた。頃日その成果の要を撮みて一部の書となし、試刷一讀の機を與へられたが、廣搜深剔、關係事實を蒐羅し盡せる概のあるは、積年の賢勞を拜察するに十分であると共に、時代の缺典がこゝに補はれたことを悦ぶ次第である。

然しながら、單に事實を羅列して稽古の資となすが如きは、著者に於ては寧ろ第二義であつて、その眞の意圖がもつと經世的效果に存することを、われ／＼は見逃してはならぬ。即ち「恢弘大業、光宅天下」の神勅を日本書紀に拜し、「數意天下、弘益人間」の洪願を檀君古記に認め、この同源異派の一大國民理想が、全く還元合體して、その固有自然の大威神力を發現する時、人類の歴史が眞の榮光に覆はれるといふのが、著者の熱烈なる信願である。今區區たる鉛槧の勞を執られるは、實はこの源頭を疏濬して清流普潤の途をつけむとする預備行程に外ならぬのである。

惟ふに歴史を知るは過去を夢みむが爲めではない。力強い足迹を繹ね、美はしい傳統に顧み、以つて無限なる生命發展を將來に約束することこそ、歴史的國民の有する心の泉である。著者のこの著の如きは内鮮關係を究明し、われ／＼の心と心所に一大規律を與へたる點に於て、よく述史の本義を得たとすべきであらう。蠹魚半生、徒ら

に漆桶を負ふて岐路に彷徨ふ余は、著者の精魄と意氣に、殊に深く打たれるものがあるのである。

己卯抄秋

在

南

美

序 言

私はこゝに私の信念を描く。この小冊子は、わが信念の書であつて、必ずしも人に教うるの
僭越を敢てする啓蒙の書ではない。私は日本人である。たゞし朝鮮に、朝鮮人としての歴史と
傳統の中に生れた。この現實が、私の人生觀に、一抹の暗翳を搖曳して、遂に嘗ての私を混迷
と惑亂と苦惱のどん底に蹴落した。この惑亂と苦惱の、慘憺たる久しき自己闘争の間に、しか
し天啓の如く私を輝かし始めたものは、俺は現實に日本人であるといふ自覺の上に、更に完
全に日本人であるといふ歴史的現實——民族史的現實の根元的な把握であつた。かくして、内鮮
一體論が、私の人生觀として、信念の鐵城を築きあげる。此書は、さうした意味での私のさ
やかな人生觀を示す。いはゆる「内鮮一體」は、その政治的現實の基の上に、單なる融和
の概念としてのみ考へられてゐるかの如くである。しかし、少くも提唱の先覺たる、
南總督閣下の志向としては決してさうでなかつた。私も亦斷つてそれだけのものではなく、そ
れだけのものであつてはならないと思ふ。直截にいふならば、それは「神聖日本」と稱する極めて
薄弱な、しかもきはめて反動的に潜勢的な根柢の上に、わが神聖國を築かうとする、はかな
き現實肯定への「工作」でしかないからである。それは、神聖日本における建國の國是を蹂

踏するといふ意味において、祖宗への畏るべき冒瀆であると共に、この傳統の國是を國是として、世界史的使命を背負ふ現代日本への明らかなる自己冒瀆でもあらう。元來が、内鮮は一體民族としての脉々相通ずる血の系譜の中に、同一の神に祈り、同一の傳統と文化の中に、同一の生活を生活した。それは、民族學民族史的現實への追究に於いてする歸着である。が政治民族としての分裂獨立が、各己に環境的な傳統と生活と歴史を分離して、千有餘年の自からなる國家的乖離を敢てしたのである。この悲しむべき現實は、しかし、日韓合邦によつて、その宿命的な民族統一を自然發生的に遂行することによつて完全に解消された。この意味において、われらは、日韓合邦の政治的意義の根柢に、一つの宿命を見る。それは、決して單なる國家併合としての政治的意義に盡きるものではなく踴躍すべきものでもない。さういふ意味での政治的宿命ではない。血は血を呼ぶ、相倚る魂の民族的宿命である。内鮮は一體であつたといふ民族的悲愁において、併合歸一への自己實現を果たしたといふにすぎない。それが、苦悶の中に到着した私の結論であり、同時にそれが更生的な出發點であつた。徒らに過去へのみひたむきに當面することによつて未來へ背を向けることの偏頗な現實肯定は、未來へひたむきに當面することによつて過去へ背を向けることの偏頗な現實肯定ほどに、孰れも正しい現實肯定ではない。

しかも特に單なる現實維持に諦念する現實肯定の不徹底性は、決して眞摯なものへの、眞摯なわれらの要求をみたさない。過去から未來への橋だといふ意味での現在の正しい現實肯定においては、過去への回顧と未來への展望が、共に現在を貫いてゐなくてはならぬ。さうした回顧と展望の中に、現在を貫ぬく宿命の把握でなければならぬ。敢て三千年の歴史を過去に辿つて、そこに民族的宿命の根元をたづね、同時に、未來へ貫き通すものとして、これを現實に肯定する所以である。形式上、單に政治的併合として遂行された日韓合邦の根柢には、さうした宿命的な必然性と發展性があつた。併合への日本的意義と朝鮮的意義は、かくしてこの民族的宿命と發展性の中に歸一抱擁したのであることを明瞭に示す——示すものとして、その宿命の根元と發展的意義を反省するのが即ち本書述作の唯一の志向なのである。この宿命的生命的な意義への把握のみが、内鮮一體を始めて正しき未來へ貫ぬくであらうことを深く信ずるからである。それは私自身の心からなる要求として、私が到達したさうやかなる結論である。

私は本書によつて必らずしも江湖に同感を強ひないであらう。しかし同感者に抱擁して、共に内鮮一體への報效の一路を慕進したい。同志を迎へて慕進するの用意の中に、私の至誠至情を盡したいと思ふ。内鮮一體は、眞實に内鮮が一體となつての相互理解と協力の上にのみ、そ

の有終の美を濟すであらうことを深く信じて、敢てこれを内鮮の同志へおくる所以である。

昭和十四年夏

著 者

要 目

第一章 宿命の郷土…………… 一一〇

此の一章では、まづ「自己」をそのまゝの現實に讀めて、人間とは何かといふ個的存在への反省が成される。而して、生命體としての個的存在——自己が、じつは民族的自己であることの究極において、自己の郷土をその宿命の中に把握する。「人間よ、汝は何處に、何者として生れやうとも、たゞ汝のあるべき所にあれ。鎖を捨てな、鎖に結びつけ。その聯關においてのみ、そこにたゞ汝の生活と平和がある」といふヘルデルの精神において、しかし、結びつくその「鎖」を、希臘的な悲劇における不可抗の運命とは見ず、近代的な政治の運命とも見ず、端的に、その宿命自體を自己自體と見る。民族的宿命に對立するものとしての自己ではなく、それ自體を自己と見る。さうした見方においての自己の使命を、民族的自己實現において把握する。それがこの一章での概説である。

——永遠の課題——自己の意義——一點の存在——國籍の神祕——誕生の必然——交渉存在としての自己——血の象徴——血の象徴としての民族——個人の原理としての民族——宿命の倫理。

第二章 神ながらの國…………… 二一八

この意味において、私は、まづ日本人としての現實的自己の中に、私の自己の使命を感じる。自己の使命意識とは、國民的使命に對する自覺として、祖國の使命に對する自覺であり、その自己實現でなければならぬが、

然らば日本とはいかなる國であるか、如何なる歴史的民族的理念をもつか。さうした自己反省的な祖國日本への現實の認識が、この一章に展開される。

——古典日本人の自然觀人生觀——生成の思想——成ります神——産靈無窮——民族的自己——天皇の意義——主體主義——神話の中に科學は躍る——愛國心——祭政一致——祭とまつゐの意義——神ながらの道——神社の意義——天津神離天津磐境——皇道絶對政治——武士道とは何ぞ——萬葉の抒情——日本自然主義における戀愛觀——生死觀——ものいあはれ——彼岸の構成——鎌倉ルネサンス——武士道の起源的性格——一旦の義理——縣命主従の道德——楠公の武士道——もののふのみち——歴史的自己への反省的展開。

第三章 血 の 系 譜

八二—一七三

然るに、私は、朝鮮人としての日本人といふ特殊性において存在する。そこで、この一章では、専らこの特殊性においての自己を、その傳統と思想と生活において贖める。第二章が自己の現實的反省と理解であることに對して、この章では専ら歴史的自己への反省と理解が追求されることによつて、日本の朝鮮的意義乃至朝鮮の日本的意義への嚴正な把握が成される。所詮、それは、正しき現實把握への志向において成されるといふ意味での、歴史的把握として集中されるが、かくしてこの一章では、内鮮が一元に貫かれて、その民族、文化、文化のあらゆる諸様式において、すべてが一體であつたといふ現實の把握に歸結する。

——内鮮交渉の歴史——神代的様相——新羅王彦稻飯命——神功皇后——高野皇太后——大和朝廷と百濟氏——姓氏にあらはれた内鮮一體——天日矛族——百濟氏族——高句麗氏族——新羅氏族——任那氏族——加羅氏

族——漢族移住氏族——言語一體——阿婆——アミ——干——智——村・郡——城・城——村主——都留——牟禮——マル——祭神一體——朝鮮の建國神話——桓因、桓雄、桓儉——檀君——檀君說話——緋衣童子——率居神靈——仙王堂——朴赫居世——朱蒙——首露——朝鮮建國神話の性格——政治的地域一體——「古韓の王統日韓の一域を證す」——「古事記」望郷の詔——内鮮一體の歴史的徵證とその結論——血の系譜——血の樂譜。

第四章 相 寄 る 魂

一七四—一九八

朝鮮人としての特殊な立場における歴史的自己反省において、私は前章に、期せずして内鮮一體民族への炳乎たる結論に到達した。而して、千數百年にわたる政治民族としての背自然的な乖離の中に、兩民族が段々に異民族化して行く事情を語り、支那の文化的政治的影響が、朝鮮本來の姿をすつかり更へてしまつて、愈々内鮮が乖離背反して行つた——歪曲された民族生活のそれについて、この一章でその原因と事情と現實が語られる。即ち、内鮮異民族の觀念と感情は、かくして、一の民族錯覺である——民族が歴史をつくつたのではなく、歴史が民族をつくつたのであるといふ、その経緯の中に、日韓兩民族がつくられた。しかし、今や、兩民族は、見えざる同類意識の民族本能において、完全に一體自然民族としての本來に立ち復り、政治民族としての合體の中に、還元歸一した。さうした意味で、日韓合邦の政治的意義の根本に、正しきわれらの宿命を見る。民族的正義を把握する。いはゆる「内鮮一體論」は、こゝにその皮層的な政治的意義を乗り切つて、更に、民族合理の根柢において構成される。

朝鮮一體論

四

——朝鮮本來の一體義——民族的宿命の合理性——日韓合邦の意義——血は血を喚ぶ——民族的郷愁——朝鮮一體の政治的意義——愛郷心即ち愛國心——朝鮮乖離の原因——民族的相剋——政治民族的分裂——民族が歴史をつくつたのでなく歴史が民族をつくつた——民族錯覺——朝鮮の民族性——支那の影響——その原因に基づく朝鮮的變貌——變貌の正體——受難の徳——正しき自己へ——錯覺の克服——「日本の道」を往く——宿命の歌——血の協奏曲。

第五章 使命の章

一九九—二一九

朝鮮一體民族としての認識下において、われら何をなさねばならぬかの朝鮮一體への使命を描き、實踐の方法を示唆する。こゝでは、朝鮮一體への使命において、更に日本人としての使命において、われらいかにあるべきか、何を成すべきかの二重の意味を含めて、われらの使命が語られる。

いはゆる融和の概念——融和事業の不徹底——朝鮮一體政策への示唆——教育刷新——神社制度の確立——徴兵制度——冠婚葬祭の儀禮一元化——習慣習俗における生活一元化——言語の統一——戸籍法改正統一——政機構における機會均等——民族輸血——通婚——觀念の一元化へ——東亞協同體論における朝鮮的意義——全體主義（主體主義）宣揚への民族的使命と國民的使命——日本の中に朝鮮を甦る——日本の道を往く——世界的新秩序への豪壯な行進へ。

朝鮮一體論要目了

第一章 宿命の郷土

永遠の課題

人間の生活は、彼が自分を意識した瞬間から始まる。この個人的な自覺自意識の誕生が、人間を單なる一己の自然的存在たることから峻嚴に區別するのである。即ち人間の誕生は自己の誕生に始まると言へるのであるが、このことについて、トルストイがその「幼年時代」といふ彼の自傳に、いみじくも美しく嚴肅な一の思ひ出を語る。彼の回想に遺るほんのまだ赤ん坊の頃の事、彼はその廣大な後園で、青天井の下に行水させられてゐた。その時偶然、ほんとに偶然に、レオの目に眩きばかりに美しい夕焼雲が、天國の宮殿のやうに輝いて見えた。童心に映る奇しくも美はしきこの驚異を、トルストイが後に述懐するのである。——俺はこの時、始めて「自然」なるものを認識した。しかも、認識したその瞬間に、俺は一己の自我主體として「自然」を離れてしまつたのだ。この認識未前においての俺は、自然の中に没入してゐたといふ意味で、また、單に一己の「自然的存在」たるに過ぎなかつたのだと。藝術に悩み、神に悩み、人間に悩んで、頽齡八十の老軀を、遂には廣野に逃晦しやうとしたこの大天才の、嚴

肅な回想と述懐の中に、われ／＼は人間としての尤も根本的な、しかも平々凡々の身にも極めて身近く感ぜられるところの、永遠の課題を見ないだらうか。それは、人類の宿題として、じつに古往今來、哲學者を無限思索の藪に追ひこみ、宗教家を瞑想の森に走らせ、科學者を實驗と法則の研究室に閉ぢこめ、藝術家をして象牙の塔を築かしめたところの「自我とは何ぞや」、「人間とは何ぞや」といふ反省である。私は、今この冒頭において、人間の誕生は自己の誕生に始まるといつた。而して、トルストイは、その藝術的直觀の豊かにして鋭い感銘において、その誕生の經緯を描いた。しかし、その「自我」とは何か。自我の誕生に導かゝる「人間」とはそも／＼何なのであるか。

私はこゝで、その哲學を説き科學を説かない。それは、少くとも、その歴史において、つまりは「認識主體」としての自我への追求にすぎないからである。「行動の主體」としての倫理學的な考へ方においていさへも、それが哲學的（倫理哲學的）追求においてなされる限りは、最後に捉へる自我とは、遂に歴史的現實の波打際に漂轉する自我（人間）とは、およそ遠くかけ離れたものにすぎないことによつて、私はこゝで

さうした「合理の夢像」は追はない。で、私がこゝにいふ自我的人間とは、晨に味噌汁を啜り、夕にすぎ焼をつゝつき、喜怒し哀樂し、戀愛しやがて夫婦喧嘩する、向三軒兩隣の、豆腐屋大工先生事務員小僧職工等々々の、浮世巷路にチラ／＼する、現實の人間、歴史的人間、さうした行動の主體としての倫理的人間であり、その自我である。ところで、さうした行動の主體は、一般にこれを單なる「欲望の主體」と見られてゐる。この單なる「欲望の主體」を「使命の主體」たる自己反省にまで擴充することによつて、即ち「自覺の主體」たらしめる、そのやうな倫理體系の中に、自我の本義と本質を捉へやうとするのが、直截に、こゝでの私の意圖なのである。こゝでの私の意圖は、かくの如き倫理的要求に第一步を出發し、そしてその最後の到着を目ざすにすぎない。その限りにおいての「行動の主體」としての自我であり人間である。

嚴密な意味でいふならば、認識も亦一つの行動である。トルストイがいふ意味の自

然から獨立した自我が、自然に對して働きかける一の行動である。しかし、こゝで「認識の主體」といふ場合のそれは、認識するものそれ自體を主體とする見方に對して、私のいはゆる「行動の主體」「欲望の主體」においては、認識は一の方便にしかなつてゐない。それはある「行動」(生命的な營爲)のための方便の意味においてでしか把握されてゐないのである。そして、こゝではその行動(生命的營爲)が主體となる。さうした意味での欲望(生存の支持、生活充足)が主體となる。この行動的な主體意義に統一されるところの現實的な單一存在(個人)なのである。だから、私がこの本の冒頭に「人間の生活は、彼が自分を意識した瞬間から始まる」といふ命題を示す時、その人間とか自分とかいふ言葉の意味も、單にさうした直截現實な單一存在(個人)を指すものでしかないことが特に注意されねばならぬ。然らば、さうした生命統一體としての自己とは一體如何に説明されねばならないのであらうか。

これについての見方や考へ方は色々あるであらう。しかし、私はこゝで之をまづ宇宙的存在の一點と見る。といふ意味は、私といふ一己の現實的自己は、時間的に制約された一點の存在——歴史人である。悠久の昔から劫遠の未來につゞく一系の歴史的

過程の上に現前する存在の一點——一點的存在人である。私は人間としてこゝにある限り、無限に果てなく一系の血統を、祖宗の極北、人類の昔に考へることが出来るであらう、と共に、またそれを、子孫のいやはて、人類の遠い／＼未來にまで一系につながる現實、存在の窮まりなき連續において考へる。さうした存續一系の上に、過去から未來への橋、連鎖の一環として現在する自己の意義をこの身に考へる事も出来る。即ち、自己とはそのやうな時間的一點の存在であるが、同時に、これを横に空間的に考へて現前する大宇宙の中に、こゝに一塊の肉として存在する自己の一點的意義も、容易に考へることが出来るとおもふ。それは、同様に、一本の草、一塊の石にも考へることが出来る。宇宙あらゆる森羅萬象が、さうした空間的連關の中に、一己の存在的意義をみだして、その大調和の中にある。従つて、私は、あの星との親しい連關において在り、この土地と同様の連關において存在する。かくして存在する限り、たとえ一點の存在にすぎなからうとも、とにかくそこには、その一點の意義が支持せられてある。いふまでもなく、私もまた大宇宙營爲の法則の中に、その大調和と大進行における一點的意義を占めて、拔差ならぬ方程式の一項をみだしてゐるのだ。ジャ

一點の存

ン・コクトーの言葉に、私が今こゝで卓上にペンを動かしてゐる。この事が宇宙大進行の歩みの上に、何らの意義も持ちえぬと、誰が言ひ切れるかといふやうな表現があつたやうに記憶するが、この詩情豊かな西歐の詩人は、深夜のペンの音に、たとえば宇宙線のさん／＼と地球に雨ふる實驗室の音を聞くのである。かくの如くにして、あらゆる宇宙の存在は、そこに一己の意義をみだし、存在の相互關係において、宇宙法則の方程式の上に一項の意義を支持する。極めて鋭く激しい詩人の性情においては、そこに宇宙の中心をさへ感ずるであらう。佛者のいはゆる涅槃行とは、この個體を、その本質に還元して宇宙の本體に擴充せしめる——自己靈肉のふるさとへの限りなき思慕であり、さうした自己擴充と自己實現への徹底的な追求なのであつた。少くとも、この場合、そのやうにして現世に形體を消滅する個體は、かくてその永生を宇宙に甦ると信ぜられたのである。

さて、それはとにかくとしてこのやうな見方において、われ／＼は、時間と空間、歴史と現實との交叉する一點に、自己の存在を考へる。その一點の存在が、しかも縦横に密接な連關にあり決して「一點」として獨立に存在するものでない事をも容易に

肯定出来るであらう。蓋し、歴史は自己において生きてゐる。宇宙もまた自己において生きてゐる。そのやうな、交流する全生命體の中に、同じ息を息づくまた一の生命體として、自己の意義が直爾に考へられるからであつて、そこにわれらの、いはゆる「生活」の意義があり人生の意義がある。之を裏返しに表現して、自己は歴史において生き、宇宙において生きるといふことが出来るとおもふ。この自覺の上に、われらは當然自己の使命意識をよび生けずには措けない筈だ。何故ならば、存在とは意味の自己表現であり、意味の自己實現（自己擴充）が即ち自己存在の使命として解せられるからであつて、この使命への自覺が、われらに人生をよび生け生活を導く。バートランド・ラッセルが、人間は——ひとり人間のみが、その睿智と深き情操を提げて、宇宙を司宰する母なる神の意志に參するといつたのも、この使命意識における人間の自己實現を指したものに外ならない。

かくの如きものとして把握される自己は、人間社會の眞唯中に、また一己の人間として誕生する。私は、私の自己を、一定の時と、一定の場所との一つの社會關係の中に發見するのだ。時と場所とは、かくして自己の先天性である。

國籍の神

自己の誕生は、さうした時間空間の制約的な一點に成される。この一點的な制約は、われ／＼に一の偶然としてしか映らない。いはゆる誕生の偶然であつて、之をもつと平明に言ひ換へるなら、私が支那に支那人として、乃至は、イギリスにイギリス人として、或はフランスにフランス人としては生れず、特に日本の土たる朝鮮に日本人として現在に生れ落ちたといふことのその偶然である。それは、たしかに偶然といふ表現にしか値しないほどにわれらに偶然的な一事態であるかもしれない。しかし、元來が、自然そのものには、いかなる偶然もあり得ない。偶然とは、單に人間の睿知を絶し、人間知性の格律を破るといふだけの——さうした自然事爲に對する人間驚異の一面的な表現でしかないといふ意味において、所詮、單にわれ／＼に偶然だといふにすぎず、それは、それ自身の中に、内在的にまた一の必然性を背負つてゐるのだ。これを、たとえば、「偶然の必然性」として理解するならば、われ／＼は、そこに「神祕」と

誕生の必然

いふ名に尤もふさはしかるべき一の不可思議性を痛感せざるを得ないだらう。即ち、いふところの誕生の偶然の中に、さうした必然性と神祕を考へる。偶然なるが故にこそ、それが神祕なのだともいへるのではないか。かくして自己の誕生は、さうした「偶然の必然」の中に在る。時空一點の制約の上に、そこに運命の必然、生活生存のアプリオリがある。われらはこれをいはゆる「宿命」として把握するのだ。現實現前の自己への直爾な反省とは、故に、つまりはこの「宿命」への自覺を意味するのであり、従つて、私が支那に支那人としては生れず、日本に日本人として生れたといふことの誕生の必然——宿命の現實、運命の郷土の上に、まづはつきり自己を把握する。さうした時空制約の一點に、根元的な自己を把握しそこに全幅的な自己の意義を読み、その根元において、生活と人生における自己實現を展開するのだ。

この場合、このやうな運命の必然——宿命の現實に對して、敢て之に反抗し、否定し、さうした宿命の係縛から進んで自らを解放せんために、誕生の郷土をすて、異なる郷國へ歸化的な新誕生を企てるとする。或は一己の世界人として、その郷土的宿命の必然を蹂躪しやうとする。さうした「自然への反逆」は許されないでもないだらう。

しかし、この反逆の精神がどこまでその「必然性」を乗り切れるかは個人的な現實の問題であつて、敢てこゝで議論の限りではない。更にこの精神について語り、その心理について考へることは、私には徒らな思想的自瀆にすぎない。すでに、この精神は、いはゆるマルキシズムの移入に搬ばれて、嘗てわが國でも、農村と工場と大學と、到るところに氾濫した。それは、無産者と稱する——必らずしもこゝにいふ宿命的ではない筈の一の利益共同階級社會を横に、インターナショナルに結集することによつて、郷土を否定し、祖國にかみつゝ反逆の知性として搬入されたのである。しかし、その唯物主義的な逞ましき實踐精神にも拘らず、それは、彼らが勇敢にも歴史の谷に邪魔つ臭く打棄つてしまつたところの、誕生の必然——宿命の郷土といふ民族根元の大岩に、無殘にも自己をぶつつけて、他愛もなく蹟き潰れてしまつた。マルキシズムにおける反逆の精神は、かくしてそのユダヤ的な世界主義の故に、この宿命の郷土を忘れ、乃至それにかみつゝたところに破壊する。それは、即社會的であつたところに強味をもつたが、背自然的であるところに最後の破滅を招いた。このことを、だから、同じ西歐の或る哲人が、いみじくもわれらに訓へたのである——「自然は、追ひ出して

もく、後に何らかの形で、必らず復び還つて来る」と。

交渉存在
としての
自己

かくの如き意味において把握される自己は時間空間といふ二重の意味の交叉する制約下において、極めて限定的な關係的存在である。それを成立させる條件において、すでに關係的であり、そこにどのやうな孤立する「個人主義」も容れ得ない。絶對的に他者と交渉することによつてのみ存在する——一つの交渉存在である。私は前節に、時と場所とが、自己成立のアプリオリだといつた。それは、右にいふ交渉存在として始めてその現實性を充足する。即ち、人間存在は、時と場所とを通しての交渉體として始めて成立する。時間的空間的制約といふことそれ自身が、すでにこの「交渉において在る」といふことを示す以外のものではないのだ。

ところで、私はまた冒頭において、人間の生活は自分を意識する瞬間に始まるといつた。そして、その自意識の契機を成すものとしての自然について語り、トルストイ

の挿話を示した。しかし、實際においては、赤ん坊は、かくの如き自然を把握する前に、まづその母を知り、同胞を知り、父を辨へ、家族を知るのである。即ち、自然を知る前に社會を、基礎社會としての家族、血縁體を知る。この意味において、自然と同じやうに、社會もまた自己成立に必須的な一の契機となる。即ち、デュルケームやタルドなどが指摘するやうに、それは對物的な交渉體としての一面と、對人的な交渉存在としての他の一面を具有する。この社會的世界を「歴史」としての時間的世界として理解できるならば、自然的世界は空間的制約の條件形質となる。故に時空制約の一點的存在——宇宙人としてのその普遍的意義と性格は。こゝで一定の社會的存在たるの制限を受けることになるであらう。

もちろん、こゝでいふ主觀意識における家族社會——血縁體に對する對立は自然世界に對つての場合よりも極めて鈍く弱く即自我的存在世界であつて、その主客對立は、自然世界の場合の如く鋭いものではない。家族社會といはんより家族體として表現すべきほどに、自己はその中に没入してゐるのである。従つて、家族は社會意識への基礎的なものではあるが社會としては必らずしも峻嚴に把握されてはゐない。で、社會

が、自然に對する場合と同じやうな交渉存在世界として把握されるためには、血縁の關係意識が主導となり、生活上の紐帶が條件的な形式となつて、その間極めて峻別的な或る程度の薄弱柔軟性を將來するに至り始めて可能となる。つまり家族の自己分裂が氏族部族等へ擴大的に發展分散する、その過程において段々に鋭く可能性を發揮するのである。

が、こゝで大事なことは、峻嚴に、自己に對立する社會も自然も、その世界的な關係においては、あらゆる對立を超越して所詮は無限に遠く時空浩大な連續關係にあるといふことである。さうした族戚關係に在るといふ意識である。さうした意識の上にはあらはれる無限の思慕であり、心と身のふるさとへよするノスタルヂアである。ヒュムанизムの根據は極く平明にいつて、さうした人類意識の上にあり、宗教上の信仰心は、さうした世界意識宇宙意識に基礎づけられる。この個一體に出發して、時空無邊に擴がる交渉意識の上には、しかし種々なる段階の制限があり、而して、この制限を目標づけるものは、科學的、或は社會的、經濟的、政治的、文化的、思想的、宗教的、其他等々、その類概念によつて色々にあるであらう。例へばプロレタリアといふが如

き經濟的二次的な同類意識による階級社會も考へられるし、大英國米國といふが如き民主國家社會としてゝも考へられる。しかし、その尤も自然的本質的な制限は、即ち血を象徴とする族戚意識である。個一體としての「自己」を出發し、その連續において「自己」を時空の現實世界に段々に擴張して考へる。あくまでも自己存在としての統一を失はないリミットにおいて、できるだけそれを擴大して考へる。この場合、その統一意識を基礎づけるものは、例へば生命共同の意識であり、生物學的な同類意識であり、言語風俗等生活様式の同一性に基づく文化意識であるなどと、色々の視角から色々にいへるであらうが、しかし尤も根本的には「血の現實」である。蓋し、さうした連續において考へるといふこととそれが、すでに一の「生成」即ち生命的發展と交流において考へるといふこととでしかないと解せられる限りにあいて、血は尤も現實的なものとして考へられるからであつて、この場合の現實とは、じつは一つの象徴である。

左翼的唯物主義の或る科學者が、血液科學を誇らかに説いて、その「個性」を抹殺する。そして、それに對する因襲の迷信と神祕を晒ふのである。然るに、ローゼンベルグは、その迷信をことさらにとりあげて、敢て更に「血の神話」を主張する。之

血の象徴

は一體いかに解せらるべきであるか。物理學者アラデーが、一日、一つの試験管に、少しばかりの透明液を底に漂へて大學の講壇に現はれた。そして、彼は、聴講の小科學者に對つて説いたといふ——この透明の液體は、じつは慈母の兩頬に溢れた涙滴である。しかし、諸君が、之を如何に周密な科學的（化學的）方法と操作を以てしても、「母の涙」といふ固有の意義は徹頭徹尾把握出来ないであらう。出て來る答案は、結句水何程鹽分何程といふ化學式でしかない。つまり科學は、そのやうにして、絶対にその中へは這入つて行けない別の世界が外に在るといふことを十二分に理解して、その限りにあいて自らの道を進まねばならぬと。これをいはゆる意味の世界といふ。それは「科學的現實の世界」ではない。しかし、とにかく現實である。これを私はこゝで特に「象徴の世界」といふ。詩人イエーツにおいては、象徴は單なる象徴ではなくして、それがそのまゝ一の實在であつた。さうした意味での現實の上に、いふところの「血のミトス」がある。

この「血のミトス」の上に、自己生命のつながりを段々に擴大して行くその最大の極限が、時空制約の下に、一己の生活體としての現實的な制限において、一の「民族

「體」に窮まるといふことは、じつに一の常識でなければならぬ。蓋し、それは、個人生活における社會體としての尤も自然的な地盤だからであり、交流する全體生命體としての最後のな極限であつて、民族的格質といふ自然調和的な地盤の上に、傳統と文化、思想と言語、風俗と慣習、等々二次的な特徴に一致する全一體だからである。この意識極限としての民族體の上にこそ、従つて、尤も嚴密な意味の「生命共同體」が築かれる。こゝにおいて、血の神話は、即ち血の系譜として把握されるであらう。この系譜は、民族傳統の上にあり、しかも傳統以前にあるものとして、一の自然的根元であり地盤であることを示す。社會生活における統一形式——統治形態としての政治國家は、典型的に、まづこの「民族體」の上に「民族國家」として具現することに、私は尤も自然的な——自然的であるが故に尤も合理的な構成を見るのであるが、わが皇國日本においては、尤も純粹に、さうした民族國家としての生命體として、極めて自然的に發展生成し來つたところにその無比性をもつ。従つて、そこに世界史的、世界觀的意義があるのであり、いはゆる「國體」の美しさがある。近代國家的形態の中に、しかし、日本として峻嚴に區別さるべき特質をあくまでも内に堅持する、日本の強さ

優秀性は、さうした生命體としての無限に發露する國家的生命力國民的精神力の端倪すべからざる神秘力に孕まれたものである。故に、たとえば愛郷心といひ、愛國心といひ、その合理性への把握などといふ——およそ縁遠い理論家の夢想でなければならぬ。日本の力と性格は本質的に、むしろその合理を越えたところにある。直截にいつて「合理的でないもの」の中にあることを知らねばならぬ。さうした超越的神話的なものが、日本世界觀のレッテルを貼つて、イギリスにアメリカにフランスにロシアに押賣りされなくとも、それが何であらう。神話なるが故に、日本では通つても支那やフランスやアメリカや乃至ロシア、イギリスには通らぬと或る批評家が杞憂する。そして、異國の不買同盟をおそれ無理にも「合理」の重箱に入れやうとする。無駄を越えて、まさに無識を暴露するものではないか。たゞ、來るべき世界の新秩序の上に、しかしその尤も典型的な國家形態を示す——といふその點にわが國家的な使命があり、日本の世界史的意義がそこに在るのみである。

さて、私はこゝで三度くり返さう。この冒頭で、私は、人間の誕生が自己の誕生に始まることをいつた。これを裏返しに、自己の誕生は人間の誕生である。而して人間存在とは、即ちまた交渉存在であるといふ意味において、人間を生れ出づる自己は、こゝで、その最大限^{マキシム}な意義をみだして、即ち交渉存在としての民族人であることを知つた。こゝに、尤も自然的——合理的な國家構成體の基礎を見る。即ち自己は民族國家人としてその全幅的な人間的意義をみだし、生活的（人生的）意義を擴充する。かくして民族は個人の原理であり、國家はこの原理の表現形態である。従つて、民族が個人をのみこむと共に個人がまた民族をのみこむ。同様の意味において、國家が國民をのみこむと共に國民が國家をのみこむ。之れを裏返しにいふなら、個人は國家において生き、國家は個人において生きるともいへるであらう。全體主義とは、さうした一體にあることの一つの國家主義を意味するものであつて、必らずしも、單に多と一、全と個といふやうに對立的な關係において考へらるべきものではない。

私は、かくの如き意味においてこゝに個人の宿命を語つた。この宿命自體が即ち自己であるといふ意味において、この宿命を根元とするあらゆる行動は、嚴密に自己自

律の中に在る。もちろん、動かし難き自然的必然の屈伏でも諦念でもない。それは自己に對立するものとしては把握されず、それ自身が自己であるといふ建前において自己自律の外の何ものでもないのである。宿命とは、かくして自己の即自的實在である。従つて、こゝにいはいはゆる自己實現とは、宿命の自己發展にすぎない。その自己實現の上に、自己の使命があり、それは同時に國家の使命に一致抱擁すること、言を俟つまでもないと思ふ。いはゆる愛國心の根元もそこにある。國民倫理の基礎もこゝに在るのだ。マンハイムは、倫理に三つの類型を與へて、運命の倫理、心情の倫理、責任の倫理とした。運命の倫理においては、歴史的現實的なものは、人間がどうにも出來ぬ運命的なものであり、従つて、そこに在る倫理は、より高き力への服從の命令として現はれる。心情の倫理とは、さうした運命の必然に抗するものを心情の自由において認めやうとするものであつて、こゝでは、たとえば自律の倫理が想定される。次に責任の倫理は、世界を單に運命的に盲從すべきものともせず、また抽象的な心情の自由の場ともしない。未來への洞察を許しつゝ、しかもそれによつて主觀の自由を検討すべきことが主張されるのであつて、極めて現實的——現在性の倫理である。この責

任の倫理は、特に政治的倫理の上に根元的な基礎を築きあげるものであるが、私はこゝで、この三つの類型を倫理における本質的な三要素と解して、打つて一丸とすべく、いくつかに類型化して獨立さすべきものではないとおもふ。運命の必然の上に、自律の自由性が把握され、その自由性の中に倫理の現在性と未來性がある。さうした意味で、いはゆる「宿命の倫理」を解きたい。宿命の倫理とは、即ち嚴密に、自己實現の倫理である。希臘の悲劇における古代的な運命でもなく、近代的な政治の運命でもない。

私はこゝで自らへの現實的な反省において、日本人としての宿命の中に自己を自覺する。この立場において、一應祖國の外から、祖國を眺めやうと思ふ。——日本とはいかなる國ぞ。

第二章 神ながらの國

私は、前節において、限りなく時空に擴がり行く自己について語つた。同時に、その制約下において、一己の個體——一點的存在としての自己に窮まり行く宇宙について語つた。時空を一大自然と解して、自己はそれとの連續と連關において在ることを知つたのである。この考へ方こそは、わが古典日本人においての性格的なものだった。かくして、彼らは、自然——人間を圍繞する自然と、脉々息吐く鼓動と呼吸を共感する。人間は——その還元的な様相において、所詮一塊の物質にすぎない、從つて、その物質的質料の中から、形相を生れ出たものとする唯物的な科學觀においてではなく、自然そのものに人間の呼吸と鼓動を聞き、交流する生命を端的に感知する——それは古典日本人に必ずしも專賣的な思想ではない。しかしそれとの端的なつながりを信じ、あくまでもその思想的發展の中に固有の世界觀と人生觀とを身に染むところに、わが特色が存する。チェンバレンが、古代日本人について語り、かれらは自然そのものだつたが故に即ち自然を知らなかつたといふのも、這間の消息を極めて逆

説的に傳へるものであつて、じつさい、彼らはさうした自然の中に在つた。テニスンが一本の草を指さして、この一本の謎が解けるなら、即ち宇宙の謎が解けるであらう、と詠歎する。さうした自然に對立しての懷疑と思索に先ちて、わが日本人は端的にその一本の草に身にしむ息吹を共感し、交流する生命を身に體得するのである。あくまでも客觀としての見方考へ方を拒けて、すべての物の内から觸れて行く。自分との主觀的なつながりにおいてその現實性を考へて行く。「古事記」などの神典にあらはれる古代日本人の信念に従へば、自然とは、その本來的なギリシア語の語意(語原)に示される義に従つて、全く一の生成といふことを意味する以外の何ものでもなかつたことが明瞭に看取されるのであつて、生れる——生ずるといふことにおいて自然が考へられた。自然はその生々育々の様相において自分で自分を形成して行く。それが宇宙の生成である。あらゆる自然的なものは、決して創られるのではなく造るのもない。即ち歴史的世界とは、かくして自然がその生成の自己表現として表現され行く世界であつて、その自己限定の上に社會が成り立ち國家が形成される。私が前に時空制約の一點的存在といつたのも、じつはさうした自然の表現的歴史形成における秩序的

な自己限定なのであつて、民族もまた、もちろん同様である。この自己限定は、これを逆に見るとき、前にいつたやうに自己擴大の一つの極限となるのだ。さうした自己表現の中に自己を實現しつつ、世界は創造的にどこまでも動いて行く。それが世界の生命だとするなら、さうした歴史的生命の中に、また一の生命體として、その世界から生れ、その中で働き、その世界で死んで行く。それが個體としての自己の意義であつて、死も亦一の創造的過程であると考へた。この意味において、自然は生の根據であり、人間(人生)との根元的なつながりに在る。人と自然と、人生と自然と、それは、さうした相關する連續の中にある。しかもこの觀方は、希臘的に、いはゆる客觀の事態として知性的に外から見られ與へられるのではなく、そのつながりの中において、内面的な自己認識として身に感ずるのである。だから、客觀と主觀との單なる結び付きとして把握されるのではなしに、相互に生命を交流するものとして動的に感得される。即ちその根元への體驗による自己回想である。さうした相互意識において、まづ自然と結び付く。この場合、造ることゝ生れることゝの間には格段の相違があることを注意せねばならない。蓋し、たとえば舊約の神は造物主としてすべて

のものをつくるのであるが、さうして造られたものであるといふ意味においては、造物主と自然、造つたものと造られたものとの間には何らのつながりがない。全然對立的な別個の存在であることによつて、いかに舊約の神が人の父世の父として押賣りされやうとも、その間に父と子の如何なる關係もありえない、神は神、人は人としての永遠に平行する平列關係でしかないのだ。然るに、生み成す場合においては、自ら事態が違ふ。自然が人を生み、神が自然を生み成す關係では、その間に當然一のつながりがなければならず、嚴密に親と子の關係に在ることが容易に納得出来るであらう。人と自然と神と一系につながる。「古事記」の神は「成ります神」として、その生成の根元が更に無窮に遡つて回想される、と共に、成ります神からの生成として、世界盡未來の南極にまでつながり貫く。文字通りに天壤無窮ではないか。この産靈無窮の思想は、いはゆる創造神話として、舊約のそれなどとは比較にならぬほどに科學的である(補註)。蓋し創造が造ることに對して生むことであることは、生む能力を豫想しての修理固成であるからであつて、この能力の所依根元への回想はあつても必らずしもその知的把握は放棄される。例へば、夫婦相契つて子を生む、夫婦はしかし自らの

力で子を生みつくるのではない。夫婦の關係は、たゞこの能力實現の契機としてあらはれる。即ち、生み得る力に依存しての創造であり修理固成なのである。このことは、その「生む」もの、主體的根元を無盡劫初に遡り回想せしめるが、どこまでも窮まりなきものとして、その根元にはたゞ生成の力——産靈の力だけが把握される。この點むしろ極めて科學的だとさへいへるのではないか。田中晃氏が「ユダヤ的超絶神が無より天地を造り出す時、所産的自然たるその天地が、單なる客體として放置されるに對し、この客體を主體にまで翻轉したことを意味する」ものとして「古事記」の自然觀においては「かゝる能産的自然の豫想」を含むといつたのは正當であつて「この翻轉は、神が成ります神として成立の根源を回想し、神の創造が生産として根源的生産力を回想し、この根源的生産力を自然に求むるとき可能である。否、單なる自然の概念はユダヤ的世界觀における神の被造物たる客體の世界のことであつて、日本の世界觀においては、當初より、單なる自然なるものはあり得ない。そこにあるものは、根源的生産力としての能産的自然であつて、自然がすでに主體的である。この主體的自らの生産力を人格的に代表したまうものが日本國土生成の神々であつて、その生産の

大業がむすび又は修理固成となるのである」といふのもまさに正しい。かくして神々の生み給ふものは、日本民族の大宗として、單なる自然ではなく、主體としての日本國土であり、その民族であつた。「古事記」にあらはれる天地開闢國土生成の神話は、かうした日本思想を尤も直截的に物語るのである。

「天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高皇產靈神、次に神皇產靈神。此の三柱の神は並獨神成り坐して身を隠したまひき」

即ちわが造化の三神も、かくして「成りませる神」として語られる。更に、その生成の姿において語られる次の一齣に見よ、

「次に國稚く浮脂の如くしてくらげなすたゞよへる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。此の二柱の神も獨神成り坐して身を隠したまひき」

とある。即ちその生成の相において語られる神々は、「あしかびの如、萌え騰る」根元的な自然の中に、その中からその身を生れたまう。さうして「たゞよへる國を修理り固め成す」ことによつて、國土を生成し、神々と人を生む。わが建國神話は、そのや

うな大自然の中に、宇宙の大法則を法則として自然に生成したところの歴史的世界たることを示し、大自然の自己限定的表現として一の民族國家としての國體を生れ出でたことを物語る。天皇と國土と臣民と、其れが一體的な包容の下に一の國家形態に表現された事情への自己回想において物語られる。否、それだけには止まらない。この事情は、更に遠く遡り翻つて、その三つを生み給ふ神への限りなき回想において、そこに一系につながる血縁を内に把握するのだ。かくして、國土も人も神につながる。日本民族の血流として無窮につらなる。この場合、その無窮と永遠とは、その歴史的自己限定において、決して時間を越へた永遠性への觀照ではない。時間に沿うて、無窮を偲び無窮に遡る自己への思慕として了解される。即ち、民族の血縁に即する無窮への回想であるといふ意味において、それは最後に民族の大宗としてのわれ／＼の神に至つて窮まるのである。従つて、この場合の神は、ユダヤにおける創造神の如く、人間と自然をはるかに遠く超へたとろの超越神ではない。眞實に、われらが大宗としての神であらせられる。自己を生むものは、端的に自己の親であるが、この血の系譜を徹底的に辿つて劫初に窮まるところ、そこに民族の宗統としての神がまします。この産靈連續の思想こそは、わが原始日本の思想的中核を成すものであつて、日本

的世界觀の全貌が燦然としてそこに展開するのだ。儒教を入れ道教に取り佛教に攝取した日本精神の複雑多彩を極める底流に潜んで、日本的な——動くこゝろの中に動かぬたましひとして根本の性格を不斷に貫ぬくものは、即ちこの中心思想であつた。この道を道とするところに惟神の道がある。無比なる國體の精華がこゝに花さき、皇道精神の光輝がこゝに輝き、倫理を超ゆる倫理の中に皇道政治の大本が堅持された。中の道であり、和の根元であり、八紘一字の思想的根據である。

(補註) 西洋紀聞にあらはれる新井白石の基督教創造神話に對する批判は、こゝで極めて示唆ふかいものがある。彼は、ヨワン・シローテ訊問の次第を述べつゝ「凡そ其人博覽強記にして彼方多學の人と聞えて天文地理の事に至つては企及ぶべしとも覺えず——其教法を説くに至つては、一言の道にちかき所あらず、智愚たちまちに地を易へて二人の言を聞くに似たり」といふ。西人其の法を説く所荒誕淺陋、辯ずるにも足らず」として一蹴する。しかしその甚しきに至つては、一言あらざるを得ずと見え、更に續けていふ「蕃語デウスといふは、此に能造之主といふが如く、たゞ其天地萬物を創造れるものをしていふなり。天地萬物自ら成る事なし、必らずこれを造れるものありといふ説のごとき、もし其説のごとくならむには、デウスまた何ものゝ造るによりて、天地いまだあらざる時には生れぬらむ。デウスもしよく自ら生れたらむには、などか天地もまた自ら成らざらむ。又天地いまだ成らざる時、まづ善人のために天堂をつくるの説、天地もいまだ生ぜずして、斯人すでに善惡の相わかれしも心得ず——其天戒を破りしもの、罪大にして自贖ふべからず、デウスこれをあはれむがために、自ら誓ひて三千年の後にエイイスズと生れ、それに代りて其罪を贖へりといふ説のごとき、いかむぞ嬰兒の語に似たる」云々。

皇國臣民としての自己と國土と、これをそのつながりにおいて無窮に遡り、われらは遂にわれらの神に到達する。生成根元の原理にしたがつて、この大自然の中に、自分を生み成したものは、民族の大宗としてのわれらの神である。従つてわれらの自己は現實現在の民族的大綜合の中に在ると共に、またその歴史的世界、歴史的生命の中に、一系の血流に沿うて存在する。即ち、時空縦横に、互に生命を交流する血的交響樂の中に在る。さうした歴史的自己と現在の自己との綜合の上に成り立つ自己を、私はこゝで假りに民族的自己と呼ぼう。この個體的な自己(民族的自己)を綜合してその大調和の上に成り立つ今一つの大きな自己がとりも直さず、日本民族としての大自己である。

この大自己に包容統一されるところのあらゆる自己が、この大自己に朝宗する。こゝに國民としての自己限定性があるのであるが、逆に、國土を含めてこの大自己としての綜合の上に成り立たせ給ふのが天皇の御意義である。言ひかへるならば、皇國日本即天皇なのである。畏れ多いが、その尤も包括的な意味においては、天皇即ち國土であり、天皇即ち臣民である。皇土にあらざるなく、皇民にあらざるなしといふこと

は、單に天皇の御所有を示すものではなく、御所有たることを超へて、即自であるところに本義をもつ。蓋し國土と人民を含めて日本を生みたまふわれらの神が、包括的に日本國それ自體であらせられるといふ關係的な意義の下において、それと同様の御意義を持たせたまふ。しかし、その皇統の上においては、われらが神の直統を萬世一系に連綿として傳へ給ふ義において、神統祖裔の御位にあり、即ち現神であらせ給ふ。現神とは、現實に御身を人界に保たせたまふ天皇神性の表現であつて、人麿が、萬葉天皇讚歌に「神ながら神さびせず」と御形容を奉る所以であらう。無窮への自己回想的な思慕において、われら自身が直ちにわれらの神につながるといふ追憶の直接性を極めて弱いものにしてゐるのは、神からの直接の宗統——つながりを一向端的に、専ら萬世一系の皇統の上に現實に見るからであつて、こゝに臣子としての嚴格な自己限定的意義と分限がある。神聖にして犯すべからざる至尊の大義と絶對性がそこになくはならぬ。故に、天皇をたゞ單に國の御中心として拜するはまだ十分でない。御中心であらせられるといふ以上に、更に同時にその全體であらせられる。國土と人民と、そのすべてを包括して全一に天皇御即身であらせられるところに、現神としての天皇神性

の意義があるのであり、その根元的な全幅の意義があると思ふ。神が日本民族の大宗であり、日本民族それ自身であらせられるやうに、同一の根元と意義において、天皇は日本民族(國家)それ自身の表現的現實的な體起信論などいふ佛教的な意味の體相用といふ、その體であるであらせられる。それは、例へば普遍我といふが如き概念を以て表現し奉ることを必らずしも拒まないとしても、しかしさうした考へ方の頭腦の隅つこでの考へ方では完全に理解できないものである。天皇絶對義への本當の理解は、民族の一人として、その民族の血流の中で、身を以て考へねばわからない。この全人格を以てせねば本當にはわからないものである。

ナチスの民族主義、全體主義などとは根本的に雲泥の相違をもつわが國體の精華は即ちこゝに在り、民族國家としての世界に誇るべき無比性もこゝに存する。私ば之を、特に主體主義として全體主義とは區別的に殊稱したいと思ふ位であるが、その極めて特殊な民族意識と觀念に基づいて、日本帝國は全一的に即自己であり、同時に、申すまでもなく、全一的に天皇御自身の義をもつ。さうした關係においての一君萬民の意義をみだして、そこに日本全體主義即ちいふところの主體主義の大義と名分が立つと

信する。従つて、少くともわが日本人にあつての日本的な意義と性格においては、愛國心とは單に祖國へよする國民の心情乃至モラルではなしに、「大君の邊にこそ死なめ」といふ「忠君」の一途において表現される。それはたゞ一向天皇への奉仕を以て名實を盡すものであつて、結句天皇へ歸向する臣民の一心である。忠君と愛國とはかくして一の同義語となるので、それは、即ちまたわれらが祖神の社頭に額づく合掌拍手の心である。萬葉を讀むと、この心念は熱情を詞藻に溢れてまことに卷を蔽ふの感がある。

故に、之を以て考ふるなら、そこに愛國心のいかなる合理性が要求され、いかなる理論が構成されねばならないのであらうか。笑止千萬な疑なきを得ないものがある。曾て、日本主義といふ言葉をしらず、日本精神の何たるかを頓と頭腦に解しない一兵卒が、しかし如何に日本的に國難に處すべきかを知つてゐるといふ現實的なその實踐の中にこそ、日本的な當體の謎が解かれねばならぬのではないか(補註)。如何に神品を誇る「合理の利刃」でも、こゝでは頓と用を成さぬ鈍刀に下らねば俵せである。私はしかしこゝで敢て科學と合理を絶對反撥して、夢幻的自己陶醉にまで國民を誣ひ込め

やうとするのではない。私はたゞ、こゝで祖國への愛情とその根元について語つてゐるにすぎない。科學は、所詮、その極限的な意義を擴充して、生活の技術でしかない。技術としてのその受容を決して拒むものではない、といふ以上にむしろ極めて必須なものでさへありうるであらう。ゾルフ大使が、現代日本の特性について語り、科學の尖端を疾驅しつゝ同時に神話をたましひの奥深く保有してゐるところに優秀性がひそむといふ。蓋し至言であつて、さうした神話と科學との矛盾的な受容が、少しも矛盾なしに把握されてゐるところに日本的な不思議な力の特殊性がある。こゝでは、神話は宗教でも夢幻でもなく、一の歴史的な現實なのだ。その科學的性格については簡單ながらにその世界觀自然觀において展開したが、等質性原理としての科學の普遍性は、いはゆる日本的なものの中では、その尤も正しい限定において把握される。しかるに一部智識層における徹底合理主義は、この限定においてすでに一の錯覺を暴露するのだ。それは科學それ自體の本質的な限定と、志向的な限定の上に、二重に行き過ぎて、加之もその限定的な科學的合理に全宇宙を盡さうとする。その結果として非合理なものを絶對に認めず徹頭徹尾非合理をも合理の石で碎かうとする。合理の石

では、絶対に碎くことの出来ない非合理の存在と世界があることを許すまいとする。おそるべき痼疾であると共に、彼れ自らを知らないともいへるのではないか。端的にいふなら、彼らには、天皇の絶対性がどうしてもわからない。——わからないらしい。それは、前にもいつたやうに、全人格を以て考へねばわからないことを、單に頭腦の一部、その隅つこで考へやうとするからである。

愛國心の根柢に、どのやうな合理性が把握されやうとも、それは絶対に神話的な力とはなり得ぬ。單なる理論として、根本的な生命力とはなり得ないのである。知性をもつ實踐性と實踐力は、それがどれほどに深刻であつても、神話的な土壤の中に醗酵する生命的な力の前には、殆んど問題でないと思ふ。まづさうした國民的性情の上に十分に自覺的な非合理性への立場が確保されて、その上に知性が映發されねばならぬ。この立場においてのみ、始めて祖國への生活的な批判が、深い愛情と嚴肅さの中に、眞實に自己批判たるの道德的な意義を擴充するのではないか。

(補註) 私はこゝで多少若干の訂正を留保しつゝ、しかし大體肯定する立場において、クルト・ジンゲル博士の次の言葉を讀みたい。「日本人は經典や地方的傳説の魔術的物語に對しては殆んど無關心であるらしい。神

道の精神は明確な觀念ではなくして、たゞ靜かに頭を下げて手を拍ち、敬虔な氣持で神の名を誦び默禱する、單にそれだけの行爲である。西行法師は伊勢神宮に如何なる力が現はれてゐるのか知らないと言つた。アーサー・ウェーリ氏の解釋によれば、何か崇高なものが現はれ給ふといふ崇嚴な觀念すら西行は信じてゐなかつたらしい。だが、彼はかたじけなさに涙こぼるゝといふ境地は解したのである。この感情こそは日本人獨特のもので、此の國民のかゝる精神状態を最もよく表現してゐるものとして、徒然草の中に吉田兼好が書いてゐる、人々は敬虔の心がなくとも、身を以て祈つてさへおれば、自らにして敬虔の念を芽ぐむ」と。「支那人にとつては、東洋倫理の最高規準たる眞心は事物の秩序を知ることの意味するが、日本人にとつては、眞心とは、神々の世界から、純粹にして測り知られぬ感激として受け入れられることを意味する」。

「日本國民の精神は、物事を始めるや俊敏にして困難の度毎に、決して後ろを振向かず、敢然新しき運命に向つて邁進する。而かも、それでゐて、忘却を知らぬ心の裡に、彼らの民族的歴史を抱懷してゐることである。日本では、空間は無視されて顧みられない。彼らに意味のあるのは、時間と連續的に且つ自發的な變化である。雨に半分隠れた時、若しくは定まりなき光の中に現はれた景色が最も美しい」。

一九三一年から五年間、交換教授として帝大に教鞭を取つた社會學者としての「ドイツ人」の見解であることに十分の商量を忘れないでこれを読むとき、そこに大に肯けるものがあるとおもふ。

さて、私は、こゝに前節においてわが天皇の意義について考へた。この意義は、その政治的表現において極めて獨自的な形で端的に具現する。わが古代日本における政治形態は、一言にいはいゆる「祭政一致」であつたと解されてゐるが、これに對して、まづ長谷川如是閑氏の説明に聞くとする、

「實を言へば、日本は古來から決して西洋の歴史家が考へてゐるやうな、厳格な意味における祭政一致の國家形態ではなかつたのである。が恐らくわが國の祭政一致の政治形態は、有史以前に大和國家と出雲國家とが併合した時にすでに崩壊したものと見なければならぬのである。祭政一致といふ政治形態は、政治的支配者が同時に宗教的支配者であるといふことであるが、さういふ形式は、たゞに支配者のみの信仰によつて成立するものではなく、民族そのものが宗教的信仰を條件として成立してゐるものでなければならぬことはいふまでもない。それは寺院と國家とが同一物であるといふことで、民族宗教の存在による民族寺院そのものが國家であるといふ形態である。トルコ、エジプト其他中央アジア諸國の歴史においては、さういふ形態の政治が認められたことは、歴史家の教へる通りであるが、日本の歴史に於

ては、有史以前は知らず有史以後に於ては、民族寺院の唯一絶對の形式は、最早や存在してゐないのであつた。出雲國家と大和國家との合併は決して同時に民族寺院の統一ではなく、二つの寺院形態は、二つの神社の形に於て對峙してゐた。事實上、異なる民族國家の併合は可能であるが、異なる宗教の併合は絶對に不可能である。――されば、民族的寺院の併合といふが如きことが古代の民族的集團に於て成立し得る筈がない。國家は、その成立自體が多くの民族的集團の併合を條件とするものであるから、異なる民族的信仰の集團が國家的に統一されることはむろんであるが、その場合に信仰の統一の生じ得るのは、恐らくその信仰が寺院國家的統制形式にまで發達してゐないことを條件とする」云々。

この事は、全く長谷川氏の想像に止まるとするのであるが、日本の國家は、それ故に、歴史あつて以來は、既に厳格な意味における祭政一致の國家ではなかつた、といふ。そして更に續けていふのである。

「當時の日本國家は、決して同時に唯一絶對の寺院ではなかつた。天皇は決して同時に唯一絶對の寺院の首長ではなかつた。されば、佛教の渡來以後、天皇自らその外

來教の信者たることを得たのである。祭政一致の國家においては、さういふ事は絶対に不可能である。」

長さに失するかも知れぬこの引用において、われ／＼はそこに何を理解するか。つまりは、わが國における祭政一致が「西洋の歴史家が考へてゐるやうな」意味での「祭政」ではなかつたといふことである。長谷川氏は、こゝで言葉をつくして、わが國に「厳格な意味での祭政一致」がなかつたことを殊説する。而して、その「厳格な意味」とは、畢竟西洋的（異國的）な意味といふことであるらしい。いふまでもなく、さういふ意味と形のそれならば、それがわが國になかつたとしても敢て不思議ではなく耻でもない。しかし、長谷川氏のさうした主張にも拘らず、わが國には、やはりわが國の祭政一致が在つたのである。氏は「祭政一致といふ政治形態」は、政治的支配者が同時に宗教的支配者であるといふのみに止まらず、民族そのものが宗教的信仰を條件として成立する、と定義する。従つて、寺院と國家とが一致することにおいて成立し、民族寺院そのものが國家であるといふ形態において把握される。この定義的——概念性は決して誤つてはゐないであらう。しかしわが古代日本の「祭政一致」の説明として

は、根本的に一の過誤を侵してゐる。蓋し、わが祭政の中心となつた、日本の民族神は、前節日本人の古代世界觀において展開したやうに、國民國土との連續的な血縁の關係——現實性において把握されてゐた事情の下に、いはゆる外國流の（例へば「エジプトやトルコ其他中央亞細亞諸國の歴史に於て」のやうな）超越神としては考へられず、従つて、嚴密には宗教でなく宗教的な信仰としても許され難きものがあつた。故にこの場合の「祭」の意義は、また日本に固有のものであつて、いはゆる宗教上の信仰に基づく「祭」ではないのである。形式的にいふならば、「祭」は「まつろひ」であつて、神へのまごゝろからなる奉仕であり至誠奉獻を義として獻り合ふ儀禮であるが、この意義は、當體の「神」の意義に従つて格段の相違を孕む。かくして、わが國における「祭祀」の本義は、祖宗天神への身をもつてする禮であつて、宗教といはんよりも、むしろ倫理であり、そしていはゆる倫理以上のものである。人は、その「まつろひ」によつて、自己本然の神性の世界——即ち祖宗苗裔契和の世界に立ち復る。さうした「自然感」の中に把握されるところの、回想の禮である、この禮は、あくまでも、その肇國の精神に、いゝて、するといふ意味での、報本反始の政治形式を示すのであつて、い

はば、その祖宗苗裔契和の世界に立ち得ることによつて、尤も正しくこの肇國の精神、即ち、祖訓神勅の義に即しうると考へられた。いはゆる神ながらの道とは、超越神が示す「神の道」を地上に行ふといふことではなく、祖宗の道を正しく繼承するといふ義を持して、即ち天業恢弘とはいふのである、超越的な神智天啓に聞くといふが如き信仰の立場において、之を政事の上に行ふといふが如き一致の形式を示すのではなく、もちろん、わが國でも、禱りの中に神に聞くといふ天啓がその形式になかつたのではないとしても、それは嚴密に「祖宗に聞く」といつた風の極めて現實的なものでしかなくかつたのである。この意味で、祖先宗祀の大禮が、そのまゝ政事となる。「天皇自ら、その外來教の信者なり得た」問題の鍵は、じつは、長谷川氏が求めたところにはなくして、正しくむしろこゝに在るといはねばならぬ。

「日本書紀」卷一に「天地まろかれなりし時、神人ましませり」といふもの、神人天

祭とまつ
るひの意

地六合を一體として、その民族的大調和の中に、まつろひ（奉仕）の現實されたことへの回想を述べたものであり、國は國を擧げて、さうしたまつろひの中に大和した。日本固有の「和」の根元もこゝに在る。持統天皇の藤原宮御造營に奉仕した一役の民がよんだといふ歌を、われらは次の如く「萬葉集」によむことができる。

藤原の宮の役の民の作れる歌

やすみしゝわが大君、たか照らす日の御子、あらたへの藤原が上に食す國を見したまはむと、大宮はたが知らさむと、神ながら思ほすなべに、天地も寄りてあれこそ、磐走り近江の國の衣手の田上山の、眞木さく檜の嬌手を、武士の八十氏川に、玉藻なす浮べ流せれ、そを取ると騒ぐ御民も家忘れ身もたな知らに、鴨じもの水に浮き居て、わが作る日の朝廷に、知らぬ國寄り巨勢路ゆ、わが國は常世にならむ、圖負へる神しき龜も、新世と泉の川に持ち越せる眞木の嬌手を、百足らず後（のち）に作り添（そ）すらむ、勤はく見れば神ながらなし。

即ち、「神ながら思ほすなべに天地も寄りてあれこそ」とあり、天地の神祇も寄り集はせ給うて、すべての業にまつろはせたまうといふ。その感激の中に、山も川も寄り

て仕へるといふ神人協和への回想を孕んで、「勤^{いそ}はく」といふ現實の行動を規定する。そのやうにして、現在のあらゆる徳操が、この根元において考へられたのだ。そこに日本道徳の根元と、したがつて、まつろひ(祭)の根元もある。至誠奉獻のまつろひは、かくして人生の規矩となり人間萬行の基本となる。まつろひは、かくして現實に、いと、なみとして各己個人の業に映發する。大伴家持が「うつそみの八十^{やそ}伴の緒は、大君にまつろふもの」と萬葉にうたつたのもそれであつて、天皇は民のためにまつろはせ給ひ、民は天皇の御爲にまつろひ奉る。そこに忠と孝と信と義と貞のあらゆる人間大和の徳操が孕まれた。大和魂とは、この大和のすがたに自己を合體する心であり、即ち本然の自己に復る奉獻の心である。「大日本史」神祇志に「夫レ祭祀ハ政教ノ本ヅク所、敬神崇祖、孝敬ノ義、天下ニ達ス。凡百ノ制度モ亦是ニ由テ立ツ」といふ所以でなくてはならぬ。

國民倫理としてのこのまつろひは、祖神への回想において、それに奉獻する一の禮として、またその根元的な意味を充足する。祭祀とは、かくしてその日本的な意味では、必らずしも宗教上の儀禮ではなく、宗教上の信仰をそのまゝに示すものでもない

のだ。故に、この「祭」は、天皇親ら祖宗を祀らせたまふ御儀において、國の大典たることを示す。この神人契合の本然の姿に立ち復る「祭」が、いはゆる西洋流の宗教的な「神への歸依」と全然相異なるものであることのその特性の把握は、簡単なこれだけの解説でも極めて容易であらうと思はれる。この「祭」の本義において、わが「祭政」の一致が見られる。惟、神の道とは即ちこれをいふ。神との協和の生活、世界が、そのまゝ、國民の生活、世界となる。政とは、單に生活の技術ではなくして、生活そのものである。まつろひの生活即ち政であつて、政は祭によつて表現される。まつろひとは、かくしてその生活様相を示すものであつて、それが一の徳操として、倫理的規範の意義をもつのは、この生活様相を反省したものにすぎない。従つて、大和の根元的な意義もこゝに在るので、それは、單にさうした本然自然の姿を示すものであり、必らずしも規範的な威壓の中に把握され、社會的な強制の中に「かくあるべし」とする徳操的な概念として把握されたのではない。それは人がつくつた人の道なのではなく、本然自然の「神ながらの道」なのだつた。天皇の絶對政治も、こゝにその根元をもつのであつて、皇道政治の淵源と精華もこゝに存する。それは、あくまでも民族を全

神ながら
の道

一體として時空にひろがる一己の生命生活體だとする見方考へ方に徹底しなくては、絶對に理解できないところのものであるが、こうした神話的な意識、いはゆる非合理性の根元は、存外日本人の意識ふかく、今日にも尙ほ潜在するのであつて、複雑な近代の知性生活に濾過されない古典日本人の素朴性の上にのみ把持されたのではないらしい。これはほんの一つの挿話であるが、慶大精神病學教授宮城音彌氏の研究報告だとして傳へられるところによれば、精神分裂症における被害妄想症狀は、原則的に自己中心の被害妄想に終始して、世界中のトータルが悉くこの原則を支持する。然るにわが國のそれに限つて、この鐵則を破り特に家族被害の妄想症狀があらはれる。さうした病態診斷のいくつかの臨牀例を持つといふ。つまり、分裂した精神異常の中に、根づよく意識下に潜在したその血縁意識が病的發作を機轉として特に鋭く顯はれるといふ。その素朴性への浸透の故に、その故にこそ、皮層的な知性を突破してその本然が露呈するのではないかと思はれる。さうした根元意識を、こゝで家族から民族へ擴充して考へても更にわれらはそこに過當を見ない。この非合理の根元は、いかに透徹した理論家の理論を以てしても、打ち碎けないものである。さうした民族觀念が、人生生

態學における、いはゆる後天性獲得觀念として、國民的教養の中に二次的(後天的)に發達したものでしかないかどうかを詮議する必要はない。さうであつてもなくても、とにかく個人は環境を通し、環境を含み、環境を包容してそこに生命統一體としての個體の意義をもつといふそのやうな科學說さへもが可能であるほどに、國土(尤も廣義に風土其他環境的條件を悉く含めたもの)としてのと個人との關係は一體の中にある。従つて、われらのいはゆる民族意識が、必らずしも民族的幻想であり、古代人的な素朴さにおいてのみ始めて許さるべきものでもないことを思はせるのである。

さて、われらの「祭」の義は、さうした祖裔契合の境地においてする報本反始の一の禮として把握される。故に、神社の意義もまた自らに、そこに獨特なものを含まねばならぬ。長谷川氏は、出雲國家と大和國家の政治的統一は可能であつたが、それは決して民族寺院の統一ではなく、二つの國家の合流にも拘らず、二つの寺院形態は、二つの神社の形において對峙したことをいひ、事實上、異なる宗教の併合は絶對に不可

能だといふ。言葉通りの意義においてするなら、この結論も確かに正しいかも知れぬ。しかし、出雲國家の神も、大和國家の神も、わが固有の意義においては、決して全く相容れず互に「相異なる」二つの宗教神ではない。この二つの「寺院形態」——神社の對立は、決して眞實な意味における對峙ではなくして、結局は同じ血縁の系列にある、廣義の民族神として各個に解釋出来る筈のものでつた。兩國家は、その祖統を異にしても宗統を異にしない。私がこゝで後説しやうとする内鮮一體の本義における古朝鮮國家と日本國家の間における民族關係、併合の意義も實はこの一點に重要な樞機を懷くのであるが、とにかく、かくして古代日本における長谷川氏がいふところの國家併合は、即ち何らの矛盾も相剋もなしに、依然としてその「民族的寺院」の同居を同時に受容遂行したのである。元來、矛盾相剋なきものであつたが故に、即ち遂行されたのであり、そこに恐らくは、何らの不思議さをもよび生けなかつた。この「民族寺院」の意義は、斷じて佛教や基督教におけるそれと同一の形質において考へらるべきではない。わが民族神におけるかくの如き本義において、だから、佛教が容易に受容されたのである。この新思想への思想的把握において、故に、聖德太子においての如き立

場が完全容易に可能だつたのではないだらうか。長谷川氏は、天皇御親らが、佛教といふ外來教の信者たり得た自由性の中に、天皇が「唯一絶對の寺院の首長ではなかつた」ことの原因と理由を把握する。しかし、それにも拘らず、天皇はひろんわが「民族寺院」的國家の首長であらせられる。蓋し國祖大宗を祀る大祭典において皇統族長の絶對義における現人神として、天皇之を親らし給うことにより明瞭徒説を要しないからであつて、それが日本固有の祭政一致なのである。それは、蘇我物部兩氏の政治的な對立において、内實は一の政治問題として係争を發展し、引續いては遂に本地垂迹説の如き論理的作爲構成をさへ必要とするにはしたが、しかし、佛教の神乃至その思想が、必らずしもわが民族神と扞格するものではないといふ解釋意識の中に受容されたのであつて、日本原始佛教におけるその祈禱教的な一面の性格が、滔々たる俗流への浸透力をもつたのだとして、この點わが國民思想におけるその功罪が、歴史的に再検討さるべきだとは思ふのであるが、一方その大乘精神は、わが古代自然主義の上に極めて格好な發育の土壤を得て、本國の印度よりも、支那よりも、どこよりもすぐれてより莊大な精華を開花した。この點また再検討されていゝと思ふ。蓋し、當

代の智識層における佛教受容の態度と仕方は、特にすぐれて哲學的な精緻を極めるその思想體系への把握が、あくまでも思想的であつた上に、更に嚴正に日本的限定、日本性格的限定において成されたといふところに特色をもつた。それは聖德太子の佛教思想における日本佛教的構成、日本性格的把握において、尤も代表的に特徴的にあらはれるので、そこには現代の日本佛教徒にさへ、尙ほ且つ新鮮に深い示唆を含むところのものがあるのだとも思ふ。儒教の攝取においても、近代科學の受容においても、それは極めて不用意の間に、しかし極めて性格的に同様の傾向と仕方において遂行されたことを看取出來ないではない。徒らに現代の知性をうたふもの、日本當來の科學を談ずるもの、特にこの歴史的な性格の上に自己を三省すべきではないかとおもふ。

之を要するに、佛教の宗教性は、わが古神道におけるその非宗教性の故に、そして、おそらくは、古代日本人のいはゆる特性的なその包容性によつて、比較的に摩擦なく容易にその移入同居の場所を得たのだとも解せられる。この意味において、わが神社は必らずしも嚴密な意味の寺院ではないのである。つまり宗教神の表現的な機構ではなく宗教上の當體でもない。惟神の道の國家的表現が國體であり、政治的表現が皇道

政治であり、倫理的表現が和であり、社會的表現が「むすび」であることの根本において、惟神の道、そのものの端的な表現が即ち神社であるといふことが出来る。佛教における法、そのものの表現が寺院であるといふ意味においては、この表現的意義は形式的に兩者必らずしも異なるものでないものゝ如くであるが、この場合においても、しかし、その道と法とは根本的に相違する。こゝに惟神の道といふその道とは、法の如き宗教的な絶對者、超越的な實在乃至力を示すものではなく、端的に生活そのものののである。惟神とは生活の様相を示すものであつて、その根元性は、理や法や或は倫理的ないはゆる「道」の如きものではなく、單に本然の姿そのまゝの本義を示す以外の何ものでもない。神話的自然のまゝの生活の義でしかない。宣長が「古への大御世には道といふ言擧もさらになかりき」といふが如く、たゞ「ゆく道」「山路野路などの路」の外に、抽象的な法則的な道はないのが本來であつた。だから「惟神」の道といふこの道は單なる假借にすぎない。むしろむだな添附語である。結構「惟神」で通る筈のものだ。

「たゞ天津日嗣の然ましますのみならず、臣連八十伴緒にいたるまで、氏かばねを重

みして、子孫の八十續、その家々に職業をうけつがひつゝ、祖神に異らず、只一世の如くにして神代のまゝに奉仕れり」云々

と宣長がいふ。それが永遠に實現さるべき「神ながら」の様相である。かくして、この惟神の道は、まつろひの現實生活において體現されるやうに、また「祭」によつてその根本義を實現する。神社禮拜の義はこゝにあり、神社存立の根本義がこゝにあつた。即ち、神社とは、まつろひの生活の、尤も本義的な表現であり(即ち祭)表現の場所である。之を歴史的に説明するならば、「日本書紀」に、高皇產靈神が、天孫降臨の隨行、天兒屋命太玉命に宣りたまうて、

天津神籬
天津磐境

「吾は則ち天津神籬及び天津磐境を起樹て、當に吾孫の爲に齋ひ奉らん汝天兒屋命太玉命宜しく天津神籬を持ちて、葦原中ツ國に降りて、亦吾孫の爲に齋ひ奉れ」と仰せられた。これがわが神社神道の根元だといはれてゐる。即ち、神へのまつろひである。神人契和の祀りである。塵俗への奉齋大祓である。神武大帝は、
「我が皇祖の靈、天より降鑒りて、朕が躬を光助けたまへり——以て天神を郊祀りて用て大孝を申ふべきなり」

と詔して「まつろひには」を鳥見山にたてしめられた。賢所、皇靈殿、神殿への御祭祀は、天皇親ら之を執り行はせ給ふ。形式的に寺院の性質を有しながら、全然寺院と異なる神社の意義をわれらはこゝに明瞭に把握できるのである。

皇道絶對
政治

天皇は、皇祖皇宗をまつろひたまふことによつて、惟神の道を政事として行はせ給ふ。惟神の道とは、わが國體の大道であり、従つて、日本國家における本然の姿であり、その生命的營爲である。而して、それは「祭」において尤も本義的な姿を實現するのであるが、さうした意味の、日本固有の「祭政一致」の中に、天皇御親政の意義と、皇道絶對政治の本義がある。天孫降臨に際して宣らせ給うた天祖の神勅に畏み、民族宗主としての皇統一系の絶對性において祖宗一體至心至聖の御境地に惟神の道を執り行はせ給ふ。それが日本政治、皇道政治の精神である。單なる王者の徳治でもなく、ファッショの獨裁とも月鼈の相違をもつ。この惟神絶對政治の下において、臣民は神社を通して、皇祖神、祖神、民族功勞の神々の靈にまつろひ、奉公犠牲、生活報效を

通して同胞にまつろひ、國にまつろひ、天皇にまつろひ奉る。悉く絶対至誠大和の姿にわが民族本然の大義を實現し展開して行く。かくして、われ／＼の自己は、その全幅の意義を十二分にみだして實現されて行くのだ。即ち、自己は、己の全體的實現において、始めて完全なる自己實現を遂行する。こゝに日本臣民としての根本義がある。

私は今こゝに、わが惟神政治の根本義を説いた。この根本義は、わが建國以來三千年の歴史的過程の上に、段々に發達し發展し結成して今日に出來上つたものではなく、純粹に、わが肇國の精神そのものである。この精神の上に肇められたものであるといふところにいはゆる根本義の本義があり、そこにいはゆる建國の大義を存在する。だから、日本國家の意義は、いはゆる「御神勅」に窮まることを知らねばならぬ。――或るものは反撃して、私がたゞ徒らに「古義」に泥み、古代日本を説くに専らにして、三千年の歴史的な變遷を無視し、現實の日本――日本の現實を説くに、徒らにその古代相を以てするの夢幻的な復古主義者たるを以てするかもしれない。本居宣長を復古主義者の形においてする自然主義者、原始狀態そのまゝを一の「自然狀態」とする意味における復古主義者、すなはちユートピアンとする立前において、私も亦その

亞流としての哂笑の中に埒もなく葬られるのかもしれない。しかし、私はこゝで、私の信念を描く。この小冊子は、わが信念の書であつて、必らずしも人に教うるの僭越を敢てする啓蒙の書ではない。たゞしさうした信念からなくては、日本への正しさ理解は遂に不可能である。蓋し、こゝに私がその原義として古代日本に求めたところのもの、古義として古典に求めたところのものは、それを根本義とし、動かぬ日本の性格として、尙ほ且つ三千年の歴史的表現におけるあらゆる文化面に普遍的全面的に把握できるからであり、現實に貫ぬくそれを、現在に把握できるからである。三千年の歴史的過程の上には、もちろん色々な外來文化の添加攝取があり、そのための訓練的な、或は單なる摩觸的な、乃至極めて浸透的な複雑多彩を極める思想的精神的濾過に基づく國民的變貌があり、社會的變化があり、文化形態の變貌、經濟的機構の變革があつた。しかし、それら動く日本の底流を貫いて、恒に動かぬ日本の姿を見る。この本然的なものへの自己反省において、私は私の現實日本を把握する。單なる過去への回想ではない。民族夢幻的な追慕の感傷ではない。過ぎ行くものが、尙ほ且つ現在に流れて未來を貫ぬく――その永遠の様相と生命とにおいての自己反省であり根本把

握である。あくまでも現實把握の立場においてのそれが、もちろん「原始状態」への世紀の逆行を意味するものでないことは明らかであらう。「自然状態」の根元的な本義における肯定が、必ずしも決して「原始状態」への意味ない復古を意味するものでないことを俟つまでもない。自然的なもの、必ずしも原始的なものではないからであつて、それは現前現實の文化の中に、尙ほ且つはつきり把握できる筈のものだ。簡単に、自然状態即ちユートピアとは云ひ切れる筈のものでない。

さうした意味の日本自然主義の精神が、いはゆる武士道としていかに表はれてゐるかを、主として文學への一瞥において更に簡単に考へてみたい。ところで、われ／＼はわが古代の情操と思想を物語る唯一の歌集として、いはゆる「萬葉集」があることをしつてゐるが、然らばこの古典の上に、日本的なものが、いかなる文學的様相に於いて讀まれるのであらうか。元來、いはゆるわが連續觀においては、田中晃氏がいふやうに、「人間の生の根據は人間の生と連なつてゐる。人が自己と異つて自己を造つた神ではなく、自己と連つて自己を生みたる神に對するとき、その態度は情的とならざるを得ない。こゝに日本の文化は情の地盤に於てその成長の沃土を有つのである」。

武士道とは何ぞ

萬葉の抒情

而して、この沃土に華さいたものが、即ち萬葉の抒情詩だつた。で、それはさうした「上古以來の、日本精神にはぐくまれた純朴な國民が、支那及び印度の文化に接することによつて、さらに自覺と成熟の期に達した時代の國民精神をさながらに現はしたものである」、「この新興の意氣にもえる彼ら上代日本人の潑刺たる感覺、素朴な精神生活の直截眞率な直情のまゝの流露において、理智で感情を弱められることなし」に「人間性の自然」をそのまゝに二十巻をつらぬいて雄健と天真との古調を傳へたものである。従つて、長短四千五百首のうたは、悉てが切實そのものゝ表現であるが、佐々木信綱博士は、それに固有の精神として、「天皇を神とあがめ奉る思想、祖先を尊び、名譽を重んずる思想、現世主義の思想」などをあげる。記紀の歌が主として戦争と戀愛をうたふに對して、之は戀愛と自然をうたふが、しかし記紀における自然主義はそのまゝに傳へられて、あくまでも純一な態度で自然に徹する。稀に主觀的なそれがあるとしても、主觀を中心として自然を見ろといふ態度ではなしに、主觀を没して自然に融合するといふ態度が取られた。純粹な自然愛の境地であり、こゝに自然連續の民族的性格を遺した。萬葉を代表する歌人の一人として大伴旅人があり、彼の酒の讃歌

十三首は特に著聞するものであるが、それは單なる酒客のすさびではなくして、おそらくは儒佛舶來の思想に眩惑した當時横行の偽善家——理想主義者たちへ對しての抑え難き痛憤からのものだつたので、特にわが國本來の現世思想を、酒に象徵して痛憤を讃歌に託したのだらうともいはれてゐる。この逞ましき現實肯定の思想的性格は、後ちに源氏の文學において、更に遙かに下つては西鶴の町人文學的戀愛(性愛)思想において、一の傳統性をもつてあらはれた。あの比ひ稀なる源氏の文學的表現の中に、しかし、見る人によつては浮淫でしかない人生が、いかに嚴肅な現實性の肯定と止揚においてあらはれてゐるかを眞面目によむものは、次に示す萬葉のうたに、また同様の逞ましき美しき現實主義をよみとることができであらう。

(卷四) 戀死なむ後はなにせむ生ける日の爲こそ妹を見まく欲りすれ

(卷十二) 人見れば表を結びて人見ねば、下紐あけて戀ふる日ぞ多き

(卷十四) 殖竹の本さへ響み出でゝいなば何方向きてか妹が歎かむ

と共に、われ／＼は、この傳統的な思想の西鶴的表現を、更に頼阿佐夫氏の文に讀むこともできる。

「日本文學の傳統は、大まかに言つて戀愛と呼ばれる。純粹感情を缺いてゐる戀愛を要素に分析すれば、終局に性愛を豫想しないではゐられないことは云ふまでもないが、そうした、いはゞ感性的要素を一應抽象した純粹戀愛なるもの、即ち性愛を直接に具象化してゐない超感性的な相愛感情は、西歐に於ては之を取扱つた文學が少くない。西歐的な意味における戀愛小説は、幸か不幸か我が國の過去には見當らないのである。日本の物語又は小説に描かれる戀愛は、肉體的(現實の)性格を無視してゐない點に何よりの特徴がある。文學史上に名高い『源氏物語』以下の様々の戀愛小説と稱せられる作品を讀んでも、ウエルテル式戀愛やダンテのヴェアトリチエに對する戀愛に比較されるやうな蒸溜された聖なる戀愛は搜し求められない。それはあくまで性愛を前提とした戀愛、普通に情事とよばれてもよい種類の男女愛である。といつても、西歐的戀愛は日本のより高級だと斷定するのではない。また日本人の性的モラルが西歐人より未開だと斷定する材料にもならない。さうした西歐的純粹戀愛こそ、却つてキリスト教思想における倒逆された性的モラルに惡影響をうけた超現實的非社會的觀念體に過ぎないものと解されうるのである。キリスト

日本自然
主義に
おける
戀愛観

教神學における性愛に對する不合理な輕蔑感情が、藝術的表現を通して、主張されただけに止まるのであつて、實はそれ自體珍重すべき高級なモラルではない。むしろ日本人の戀愛觀の方が正しく性愛との連絡を斷たないといふ點で一層現實的であり自然的である。日本の感情の底を流れる現實主義は、戀愛現象に對してもその觀念化を許しはしなかつたとも云ひうるのである。かうした日本文學の傳統を受け、しかも勃興期の町人階級の意欲を十分に理解しただけに、西鶴にあつても戀愛は正しく性愛のことであり、戀愛生活は性愛生活即ち好色生活のことであつた」云々

即ちこの日本文學の傳統こそは、源氏を通して更に遠く萬葉以來のものであり、そして民族固有の畠にまで遡りうる本來の性格だつた。それは、いはゆる日本自然主義からの當然の歸結である。そして同時に、現世の、現實の人間感情を愛するといふわれらの今日の意識なのであり、二千年の昔から現在にまでを貫ぬく、日本的なもの、中に根元的に堅持されたわれらの「自然科学性」でさへありうる。私は前に、神話における西歐異國のそれと、日本のそれとを比較して、日本のその科學的な性格について語つた。従つて、日本においては神話と科學の相剋が矛盾なしに受容されるとい

ふ独自の國民性について語つた。それは、同時に戀愛についても同様の結論において云へるのであつて、さうした科學的現實主義の一面的性格は、いはゆる日本的な性格を古往今來三千年の民族史につらぬいて、現在にも尙ほ且つはつきり擱める筈の根本義である。日本の性格とは、かくして、その根本において皮肉にもしか極めて正當な歸結において十分に科學的なのであることを知る。

生死觀

血は命の象徴である。従つて、血の系譜の中に、いのちの連續的現實を捉へる。かくして過現未をつらぬく一系の生命現實の上に、現在の自己が、一の象徴的存在となる。この經緯はすでに繰返し反覆して説くところであるが、このことは、現在に眠び行く自己に、一つの独自のな生死觀をよび生ける。即ち、生の根元の世界（生成の根元）と、死滅の世界とは、共に現在のいのちの世界と現實的な連鎖の中にあつて、その原理（現實）を等しくする。また、過現未をつらぬく一系の現實でなければならぬ。永生の現實においてするこの日本的生死觀が、佛教の輪廻思想と甚だしく異なる所

以のものは、それが靈乃至靈的なもの、輪廻であり、その表現としての轉生であるのに對して、これは端的に「血の連續」——從つていのちの轉變として現實に把握されるところにある。現實に移らふものとしての、生命の過程の上に、端端に見る生滅の相である。生も滅も、それは現在の相においてする一の轉變にすぎないのであつて、本來の相は、たゞ永劫に生々流轉する「生命の連續」だけである。嚴正な意味では、いはゆる滅はあり得ない。滅とは、現在に對しての状態の一變化を示すものでしかない。だから、死への回避は、じつはこの「現在」をなつかしむ心においての、現在の相の轉變そのものである。移らふものであり、過ぎ行くものであるといふことそれ自体に對しての感傷にすぎず、死の恐怖がよび生ける幻滅感ではない。單なる現實消滅の悲哀感である。中世文化における陰影、平安朝以後の哀傷は、佛教の無常觀に刺戟されて、この弱さへの詠嘆が、特に意識の上に強調された結果である。常に、死に對する生の凱歌を高うたつた、光を慕ふ小兒の心に、上代文化の明朗性が把握されるならば、過ぎ行くものを憐む詠嘆に中世文化の陰影があり、この兩期の間にあつて兩つの意識を媒介するものに萬葉の抒情詩があるとする田中晃氏の見方は確かに卓見だと思ふ

いのちの
あはれ

が、以下その中世的なベィンズ、陰影の文化についての同氏の所説に聞くとしよう。「人のいのちが、其處へ滅んで行く彼方を、其處より生まれ來た淵源へ翻轉することによつて個的主體の生滅を全體的主體の無窮へ止揚する要求が起るのは自然」であるが、萬葉前期の歌人においては、このやうに、死の意識を生意識へ翻轉することができた。しかし「時代を降ると共に、この翻轉が不可能となつて、人は漸く死後の世界の哀感に浸る」やうになる、情の文化理念としての中世の「ものゝあはれ」がそこに成立する。この「ものゝあはれ」について、私はこゝに解説の餘裕をもたないが、和辻哲郎博士の説にしたがへば、限定せられたものが、限定せられざるものへ歸り行かんとする、永遠の根源への思慕でありその詠嘆であるといふ。過ぎ行く人生の内に過ぎ行かざるものゝ理念の存する限り、永遠を慕ふ無限の感情が内に藏されてゐる限り、悲哀をば畢竟は永遠への思慕の現はれとして認め得るといふ。即ち「本質的には、死へ媒介された生の意識が悲哀なのであつて、かゝる悲哀がものゝあはれの根柢である」。しかるに「過ぎ行く人生の中に、過ぎ行かざるものを求める」心は、やがて宗教的な信仰において本質的に顯現される。それは自ら彼等の希求となり、現實界と原理

を異にする超越界の構成に赴くであらう。しかし平安朝においては、人々は事實に之を構成しなかつた。記以來の黄泉國の構成はあつたが、中世におけるそれはない。それはつまりは何を意味するのであるか。

宗教的な彼岸の構成——超越界の構想は、死の超克をめざす。「それは此の世に於て死することが彼の世に於て生きることと轉換せしめられてのみ可能となる」。しかるに、さうした超越界の構造は、それが宗教的である限り、遂に超越的な世界であつて、現實の世界とは原理的に非連續の彼方の世界でしかない。従つて、そこではすべての現實的なものは否定され止揚されて、實際にはその現實性を失ふ。さうした超越世界の構造が、いはゆる日本自然主義、日本民族の歴史意識、連續觀の立場において、果して可能でありうるだらうか。言を俟つまでもないことである。だから、日本人が考へた死と死の國との概念は、いのちが現在に滅んで其處へ行くといふその世界として把握される。あくまでも現實世界との連續にあつて、あくまでも現實の國でなければならぬ。そこには決して宗教の形態と本質とが許されない。「死したものは直ちに神となるが、人間が死んで神となるのは人間と神との連續せる證左であり、しかも死し

彼岸の觀

たるものは生けるもの、祖先となる意味において神となるのである」といふ。かくして、死して神となつたものは、現實の自己の生成の根元である。「祖先は祖先の故に子孫と連續してゐる。」そこに祖先崇拜の自らなる感情的根元がある。だから、それは決して宗教的な構成を持つてはゐない。

現實のいのちが滅んで行く死は、この故に悲しむべき事實だとされる。過ぎ行くもの、移ろひ行くものへの直情において考へられる。

「過ぎ行く人生を意識しながら何故に超越界を構成しないか」といへば、其處へ過ぎ行く彼方の世界もまた此の世と連續してゐたからである。うつろふものがうつろひ行く世界は、彼らにおいては其處へうつろひ行く彼方の意識に止つて、彼方は此方と連續してゐる。そこに斷絶の一線が劃されないが故に、彼方の世界が超越性を帯びないのである。かくて、人はこの世に死んで彼岸に永生するといふ二世界の構成がないとすれば、その未來は暗い。故に彼らはこの現實をこよなく愛惜しなければならぬ。しかもこの現實はうつろひ行くものである。そこで彼らに残された道は、うつろふものはうつろふと觀じ、過ぎ行く人生を過ぎ行くが故にいとほしむ心であ

る。それこそは、とりも直さずものゝあはれではあるまいか。超越界の構成は理に屬するが故に宣長は理を排する。理を排して残る『實の情』は、過ぎゆくものをそのまゝにいとほしむが故に『ものはかなくめしき』とも呼ばれるであらう。それは原理的には、死に媒介された生の意識として、現實執着の情がその醜さを清掃しつつし、しかも猶ほ情として現實を愛しむ姿である。平安朝の繊細な神経は、こゝに人生最後の據り所を見出すと共に、世にも儼なき高度の情の文化を形成したのである。かゝる文化の形成に當つて佛教の影響がいかに強いかは云ふまでもない所であらう。けれどもそれが『ものゝあはれ』といふ情緒の性質を帯びて來る所に吾々は鋭く日本的なものを看取しなければならない。佛教の形而上學的思辨が日本的連續觀の地盤において情の文化として更生したのである。

ところでしかし、この「現實を愛しむ」心が、無常觀的な陰影の中に把握されて、記紀にあらはれるそれと極めて對蹠的な對立表現を示すことについては、佛教の思想的影響が多分に看取される。これは後にその末期、鎌倉時代に至つて殊に深刻化して對立する二つの人生觀的立場を生むのであるが、その「現實を愛しむ」詠歎の情懷がそ

のまゝ現實生活へのたくましき肯定の意志として激發するとき、鎌倉期に特有な現實肯定の一形式を顯現する。現實ははかなく移ろひゆくものであるからして、その現實の中にこそ、現實を可能の最大限において充足すべきであるとする現世主義の生活意識が展開される。それは一方に、通世的な現實回避の思想——人生觀を對立的に豫想し、結果したのであるが、この中世的現實肯定それは形質を變へて、しかしの生活意志或る意味での古代復興だつたと歴史社會の中から、新興武門階級の間に「懸命主從の道德」としての武士道が孕まれる。それは本質的には、單なる一の情誼として起源したものであるが、社會の封建的秩序化に伴つて漸く規範化するに至り、封建紳士の徳操として性格づけられる。而して、六百年にわたる社會的な生活訓練、階級的な教養、人格的陶冶、精神的鍛磨、思想涵養によつて、遂に徳川時代に至りその完成をつくすのであるが、之に尤も影響的だつたのは、儒教(宋學)と禪と王學である。即ち宋學は、之をまづ「規範」化した。規範を體系づけた。而して王學の影響は更に後世ではあるが、その熾烈な致良知の實踐精神において、深く強く之に規範力を根柢づけた。實際に、幕末諸藩の葛藤において、王學が深く一藩に浸みこんだ藩ほど宋學の藩を凌駕して強かつたとさへいはれる位、

その実践力——規範力への影響は大きかつた。ところで、禪はそれに何を寄與したか。元來、武士道とは、前にもいつたやうに、「懸命主従の道」として、根本的——本質的に、一の倫常を示す現實の規範である。而して、遂にあくまでも、一の規範たるに過ぎない。たとえそれが、懸命情誼の上に築かれたものであらうとも、現實的な規範としての根本に、遂に規範的性格を終始一貫するものである(補註)。この意味において、その規範の根柢、規範力としての根本に、何らかの人生觀、世界觀をもたない限り、極めて薄弱な實踐力をしか期待できない。規範が、規範としての全幅の意義をみだして、その規範力に完全な實踐性を期待せんがためには、單なる倫理的理念以上のもの、哲學的宗教的な根本の把握が必要である。この點において、禪宗は、その根柢に堅固な一の立場を與へた。この立場は、同時にその實踐力の根元である。

中世的な現實肯定——現世主義の下においては、その逞ましき生活意志の上に、たと一向「懸命の道」のみが彼らのすべてにあつた。それが彼らの人生觀であり、世界觀であり、哲學であり宗教だつた。従つて、その剛快な生活意識の中に、死は鴻毛よりも尙ほ且つ軽く、物の見事に超克されたのである。それは逃避者におけるが如き生

の否定による死の超克ではなくて、生への全幅的肯定による死の超克である。言ひかへるなら、死の否定^{死そのものゝ否定ではなく、死後生活の否定従つて死の恐怖の否定}による生の全幅的な肯定と支持である。この故に、現世肯定の唯一の支柱として、懸命の道が全倫理意識を蔽つてしまふ。それが人生の全的意義である。従つてこゝに、武士道としての規範性が把握され、それは「人の道」としての限定において、完全にその規範性を擴充する。

しかるに、中世から近世近代へと世紀の推移に伴ひ、封建秩序の大成と共に、社會的、身分的な階級的保障が安定するに従つて、この「懸命の意識」は段々に龜裂を生ずる。しかも、徹頭徹尾、事態は常に、しかし「懸命」を約束されてゐる。こゝにおいて、やはり尤も關心的な問題は、結局「生と死」でなければならなかつた。あらゆる武士道的徳操——規範の根本において、尤も重心的なものは、畢竟「生死の覺悟」でなければなるまい。フロイスの書簡集に、日本人が死を何んとも考へない一點に極めて不思議な感心を描いてゐるが、一死以て任ずるといふのが武士道の骨頂であり、従つてその覺悟は尤も根本的なものとされた。吉田松蔭の文にいふ、

「武士たる者は、元日より大晦日迄、日夜朝暮動靜語默、常に一死を以て心上に措て

扱其一死を又徒らに成らぬ如く持詰る、譬へば悍馬を引留て立つるが如し、而して眞に心一死を存する人に非れば、守るの一字は合點行ぬことなり」云々

武士道の
起源的性
格の義理

ところで、この生死の覺悟に、武士道的な根本の立場を保障したものが即ち禪宗のそれであつた。禪的心境の把握と精神鍛磨の中に、規範を超越した實踐力が把握される。而してその究極の境地に、武道（武士道ではない、武士道である。）の極致、武士道の技術的精神が同時に映發する。この極致に到達して、いはゆる武士道は、西歐中世の歴史にあらはれる騎士道などは比較にもならぬほどの、深さと美しさの獨特の典型を完成した。われ／＼はこゝで、外來思想としての宋學に取り王學に取り佛教に取つて、しかも、その渾然たる規範構成の中にわが國獨特のそれを築き成したところに、極めて日本的な、攝取と構成の性格を見る。かくして、一の「氣質」の構成でさへもが鮮かに成される國民的創造力の中に、極めて包容的な、しかも自由な、しかもつねに自己發展的な敢て自己反省的豊かに鷹揚な民族性を見る。

（補註）東鑑に、隨所に出現する言葉として「一旦の義理」なる怪文字がある。知行に對する一旦の義理、主從の情義といふ意味である。尙ほこの事については後説するであらう。

こゝにいふ意味でのいはゆる武士道は、かくして近世以後に發達したものである。それは、中世文化の意識の中に、自然發生的に、それとのつながりにあいて發生したものであり、この意味では、更に遡つて上代意識からの思想的なつながりにあいて、自らなる推移の間に發生したともいへるのであつて、それは或る一つの思想或は性格乃至氣質といふが如きものが、卒爾として、前後のつながりなしに偶發するものではないといふ意味において、極めてあたりまえな事であるが、ところでしかし、中世以前におけるいはゆる「ものゝふのみち」と之との關係はどうか。その氣質的性格的相違はどこにあり、何に由來するか。本來の（上代的意味にあける）日本の性格と精神の上に、之はどういふ意味をもつか。最後にこの問題について簡単に一考せねばならぬ。

南朝勤王の犬立物、北畠親房はその「神皇正統記」に「賴朝泰時の如き微（よ）つせば、皇國

の民何くにか蘇息せむ」と書いて、武家政治——幕府政治の發生と存立に對する歴史的意義を認めてゐる。頼朝の如き、存外謹嚴な尊王の人だつたとも傳へられてゐるが、この武家政治が、政治形態それ自身としては、自然發生的な社會過程において然るべき歴史必然性を背負つてゐることは冷靜に認めてもいゝとおもふ。しかし、それは、國體の大義に照らして、日本政治形態としては兎に角變態である。たとえ征夷大將軍の名においてする大權委任の政治であるとしても、實質上、變態であり權道であり、干犯でさへあり得た。さうした變態的な體制の上に六百有餘年の封建國家が構成される。この變態日本社會の封建秩序の畠から、日本獨特の武士道なるものが芽ぐまれた。それは、この變態社會秩序からの、それへの規定支柱として、直接に生み成されたものであるから、従つて、それが、必然的にこの變態性を形實の上に背負つて出て來ることは、極めて當然の成行でなければならなかつた。かくしていはゆる武士道は、まづその發生において、本質的に、必らずしも純粹には日本的ではないものとしてあらはれる。

私は前にその定義的な表現を「懸命主從の道」として語つた。それは、主從の道

として、その義理を重んずることから出發する。知行に對して、一旦の義理をつくすといふ當代の言葉は、その端的な表現であるが、いはゆる家の子郎黨の密接な關係によつて、この主從の情義といふ感情は、極めて深くはなつたが、さうした情義に深く立て籠れば立ちこもるほど、そこにいよく私情を濃くして、後には却つて禍する。とにかくさうした私情としての根本において、それからの當然の歸結として、面目を全うする名譽を重んずるといふ表情的な徳操においてまづ一義的に把握された。フランス・ザビエルが戰國時代日本武士の特質を目に見、耳に聞いて、この點に特にその一義を特記する所以であらうが、この故に、初めの武士道においては、忠義などいふことは、先づ無いものとして認めざるを得ないといふ徳富蘇峰氏の見解は、極めて妥當だと思ふ。この「一旦の義理」の感情は、後ちに宋學などの教養において、完全にその素朴性功利性を解消して、立派な倫理規範としての「義」の觀念にまで止揚されるが、とにかく起源(發生)的な形ではさうした情誼の素朴性において把握されたのであり、而かも、それが後ちに一の倫理規範にまで觀念化されることによつて、士規としての形容を止揚し得たとしても、しかし要するに、その主從倫常の徳操たるの本質

は最後まで 勤王思想によつて、主が貫かれた。 結句、その外の種々なる武士道的徳性の徳目、廉恥とか節操とか、質樸とか其他等々のそれを含めて、遂に生活の規範、一つの準繩としてのその本質において、その人爲性形式性を無視しては考へられないものである。一つの精神に目ざされた觀念型態——理想主義である。それがいかに感情——情操の分野に涵養され鍛磨されやうとも、畢竟一つの意志（倫理意識）への形成である。王學の實踐精神がその支柱を成す所以であり、禪宗的世界觀が、之に知性的な援堡を成す所以であらう。武家支配を限定的な本義とし、武家法度としてつくられた「貞永式目」において、この時、幕府は「謀叛大逆」の罪の規定に少からず困しんだ形迹があることは、すでに「古代法釋義」において有賀長雄博士が指摘するところである。蓋し朝廷との對立的な政治關係において、幕府自らが、自分で規定したこの法律に、自らを葬らねばならぬかも知れぬ重大な事態を、幕府それ自體の性質と將來に杞憂したからである。そこで、この罪の規定に限り、特に極めて曖昧な、模糊たる形式を與へてごまかすの外はなかつた。解釋の範圍と適用を特に大らかに用意して、その自由性（肆意性）を自らに留保する方法に踏み止まつたといふのである。このことは、當

時、尙ほ且つそこに、國體の大義と名分が深刻に省慮されたことを示す。この大義と名分において、この變態政治を皇道の本義に返さうとしたのが建武中興であることはすでに周知するところであるが、武家政治の尙じき、一部の有識階級を除いては、悉く大義に晦かつた。それが中興を未完了に了せた原因である。この時、一介の武弁として河内に興つた楠正成は、その武士道精神において當代のそれに甚だしく對抗的革正的なものでつた。建武中興は、鎌倉時代以後の封建變態社會の產物たる武士道を、その本來のもの、日本固有の「ものゝふのみち」へやき直すことの使命において、大楠公を河内に生んだ。大楠公は、この意味において、武士道革新への警鐘を亂打して、ものゝふのみちに殉じたのである。それは後に、この中興精神の復活と見ていゝ明治維新において、遂に完全に果されたが、封建武士道精神の歪曲面は、例へば幕末彰義隊の一舉に尤もよくあらはれる。この一舉には、同情すべき一面の心理を含む。理解せねばならぬ歴史的な事情もあらう。彼らは、必らずしも朝敵の志向と意圖にないてしたのではないことがはつきりわかる。しかし、憾むらくは、その歪曲的な武士道精神に跼蹐して、大義を亡つた。彼らが「義を彰はす」として標榜したところのその

「義」は、極めて跼蹐的なそれであつて、結局封建的武士道精神における小「義」でしかなかった。つまりは、「一旦の義」でしかなかったのである。



しかし、いはゆる武士が、封建的規範として、實際上に成し遂げた人格構成の成果は決して無視されてはならない。たとえ「主従の道」として把握されたのでしかないとしても、そうした涵養と鍛磨の中に、人格そのものが規範化された一面の倫理性は無視されてはならぬ。その規範的形式性の中に、しかし、十分に、人格はその生得的な養成を果したのである。故に、之を大義に照らすといふ、たゞそれだけの僅かな方向轉換で、それはそのまゝ立派に現代の武士道精神を形成したのである。否、それどころではない、今日のわが國民精神として代置されてさへゐるのであるが、しかし、そのいかに完成された形でも、その封建的な意義においてある限り、之を元來の「ものゝふのみち」に照考するならば、形と精神の上に相通じつゝ、しかし根元的には

そこに鋭く區別されねばならぬものがあることを拒むことは出来ない。

い
の
ふ
の
み
ち

日本武士道の本來の姿はものゝふのみちとして萬葉に尤もよくあらはれる。特に、防人の歌にそれが多いのは自然であるが、大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじといふ歌に尤も自然な發露を見る。上代武門の家として物部氏があり、物部とは、物(得物、武器)を持つて朝廷をまもることからの呼稱で、ものゝふとは物部の意味だと解せられてゐるが、物部氏は早く滅んでその精神は一族武門の家としての大伴氏に傳はつた。家持のうたは、その意味で廣く周聞する。この武士道精神の起源は遠く神代にありとし、天瓊矛を天津神から授かつて、諸冊二尊が國造りをなされた、そこに、創造的にしてしかも永遠の生命を宿す日本武德の精神が初めてあらはれるとし、神劍はこの精神の表徴だともされてゐる。それは、わが固有の武士道精神と武士道が、民族の血流の中に芽ぐまれたことを語るものであつて、萬葉によくあらはされてゐるやうに、端的に現神なる天皇への「誠」——即ち忠の一念において表現される。蓋し、それは單に國民の自らなる至情の發露であつて、廣く臣民としての至情において、武臣たると文臣たると乃至百姓たるとの何らの區別も問はないものであるが、特に直接に劍

をとつて君をまもるといふ勇武の精神の中に、その一念が凝つて武夫としての特殊な氣質と氣象を築きあげたものである。即ち、八十、伴緒の分に根柢する。あらゆる分に應ずる至情の發露として、特に武夫の至誠を劔に示すのものが、いふのみちであるが、この場合忠とは單なる漢字への假借であつて、この漢字が含む全意義を支那流にどれほど深く押し廣げて、盡すことのできない一の民族的心境であり固有の立場と精神である。それは、民族の宗統としての天皇に對する自らなる思慕の感情として、即ち武夫のまつろひの精神であり、大君の邊にこそ死なめといふ滅私の氣慨、死も尚ほ輕しとする武夫の氣質は、このまつろひの感情からの極めて自然的な發露である。絶對性に對する絶對感情として、そこではあらゆるものがすべて悉く超克される。それは民族感情に内在する良心それ自體の自然發露として、その自律性の上に把握される。さうした非合理感情(絶對感情)以外の何ものでもないのであつて、此の一點において、根本的に、後代のいはゆる武士道精神と鋭く區別される。ものいふのみちが、さうした民族の血流に根柢して、そこから自然に浸み出したものである限り、中世の「封建社會」から出て來たそれとは根柢的に違ふ。一は民族の「自然」に生れ、一は民族の「社

會」から發生する、そこに自然性と社會性との對立を明確に各己に表現して、その故に、一は自然感情としての絶對精神としてあらはれ、一は社會規範としての倫理相對性においてあらはれる。即ち、一は他律的な道德として、一は自律性を伴ふ絶對感情として、その土臺においてすでに違ふ。意志的な表現と感情的な表現と。

武家社會の成立に伴ふ道德構成は、その發生の根本に、更にその土壤的なものが豫想されるといふ意味で、上代「ものいふのみち」が後代武士道の構成に全く關係がないとは考へられない。しかし、とにかく直接の關與をもたず、各己に成立發生の事情を異にし性質を異にする、その特徴はこゝで鋭く區別して究めらるべきだと思ふ。しかも「千萬のかたきなりとも言擧げせず」とうたはれるやうに——さうした規範として後代の武士道にあらはれる色々な武士道的性格の如きも、ものいふのみちとして萬葉にうたはれるその中にすでに多彩を極めてあらはれてゐる。われ／＼はそこに、至情至誠の感情の中にも尚ほ且つ同様な形であらはれる規範的なすがたを眺めることも出来るであらう。美しきもの、眞なるもの、永遠の性である。

私はこゝで、更に前文に説いた天皇の意義を回想したい。そこで説かれた天皇と臣

民との關係乃至意義がこゝで再び回想されることによつて、今こゝに説くこの主題が即ち、ものいふ更に明瞭するであらうことを信ずるからである。それに更に一言を附加して特に注意を喚起したいのは、天皇の絶対性への臣民の思慕が、全く文字通りの思慕においてされるにも拘らず、しかしその絶対性への歸回隨順においてそこに儼然たる「君臣の義」をもつといふことである。それは、絶対至高なるもの、當然的な性格として、それが一の尊嚴性をもつといふことに基因する。従つて、この思慕は實際には仰慕として、絶対者への奉仕^{まつ}と儀禮によつて表現される。たゞこの場合でも、例えば超越神の如き、自己を全然遠く離れ切つたものへ向つての場合とは大に異り、あくまでも和の感情においてする——根柢的にはやはり一の思慕があるといふその日本的な特徴が特に注意されねばならないが。

さて、以上の簡単な解説において、私は、私の反省的な自己認識を展開した。第一

章に、「日本とはいかなる國ぞ」として自問したそれへの自答として、日本人としての現實においてする自己反省を、私はこのやうな理解において開陳する。そこでは、多くの回顧的な歴史的考察において、この現實への理解が成された。多くの場合、反省は回顧であり回想であつた。しかしこの回想と回顧の中に、私はその本質を把握する。すべて本質的なものは、その歴史的表現の中に、尤も端的にあらはれることを意識したからである。動く過程の中に、動かぬものとしてのその把握によつてのみ、その本質的なものが、尤も端的に直截に正しく把握されることを考へたからである。本質は恒に永劫をつらぬく。過去と現在と未來をかけぬけて永劫をつらぬく。蓋し、過去とは、現在を媒介としての時間的——連續的把握である。同様に、未來も亦現在を媒介としてのそれである。従つて、過現未をつらぬいて、それは渾然たる一の現實である。故に、過去をつらぬいて現實に生きる本質は、また未來への發展において、遂に一の本質である。かくして、過現未をつらぬく本質は所詮現實の本質である。——即ち、この立場からの把握こそが、國民の國家への反省、理解でなければならぬ。一の生命體としての日本國家への理解は、こうした理解を形式とする内觀、内的觀照でな

いは、絶對に不可能であることを信ずる。國家主觀への没入による内面的な觀照、そこに、日本把握への唯一の鍵がある。科學的な客觀把握では、徹頭徹尾及びもつかぬ「意味の世界」の中に、日本の正體がある。現實日本——日本の現實への理解も、だから、この意味での「日本的な把握」でなければ絶對に不可能である。日本的なものへの合理的な把握とは、かくして「母の涙」を、徹頭徹尾「化學分解」によらうとするほどに愚劣を超へて不可能な仕事である。

さて、かくして私は私の自己を、現實の日本人としての立場と精神に贖めて、その自覺の様相を、虚心坦懷にこゝに披瀝した。しかし、傳統の自己は、私を一己の朝鮮人として規定する。朝鮮人として朝鮮に生れた日本人である。そこには、自らなる朝鮮の歴史と傳統と生活と思想がある、その歴史と傳統と生活と思想の中に生れた私はこゝでさうした特殊性においての自己を、更に一應反省せねばならない。朝鮮民族とは何か、朝鮮とはいかなる國であつたか。私はこゝで、朝鮮自體のそれについて語ることを必要としない。なぜなら、主題は内鮮一體の論究を本義とするからである。従つて、問題は、日本との關係において之を説くことが要請される。このことは、内鮮一

體が、すでに結論としてこゝで豫想されてゐるかに見える。實際においての結論はたしかにさうである。しかし、少くとも次の一章においての考究は、さうした一定の結論を、絶對に豫定しない。まづ内鮮現實の事情を一應撥無した立場において、いかなる結論を當然の歸趣として生むかを全然度外視する冷徹な科學的態度においての朝鮮的自己反省を、極めて嚴正な立場で遂行したいと思つてゐる。その限りにおいて、専ら内鮮の歴史的關係と民族的事實の關係から考へる。つまり、日本の朝鮮的意義乃至朝鮮の日本的意義への嚴正な把握である。それは、所詮、正しき現實把握への志向においてされるといふ意味での、歴史的把握として集中するであらう。形式的にいふならば、第二章が、自己の現實的反省と理解であることに對して、この章では専ら歴史的的自己への反省と理解が追求される。

第三章 血の系譜

われらはこの章で、内鮮の交渉と関係を見る目的のために、特に専ら日本の古典と文献に據る。而してその劈頭に把握される所見は、遠く神代に遡つて「古事記」である。この神代卷に、素盞鳴尊が御子五十猛神を帥ひて新羅の國曾戸茂梨の地に天降居しましたと語られる事實は、すでに周知するところのものであるが、曾戸茂梨とは今の江原道春川の地だとされ、或は慶尙北道慶州だともいひ、乃至熊川、即ち忠清南道公州が想像され、或はまた黃海道海州附近だとも指摘されてゐるが、さうした細かい史蹟の詮議はこゝで見過すとして、とにかく古朝鮮の地には相違ないとされてゐる。即ち「神系帝王表」に「建速素盞鳴尊滄海原（韓國）を治む」とあるもの即ちこれである。ところで、その御子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊が素尊の御姉君天照大神の御猶子であらせられることはあまり知られてゐない。「日本書紀」卷一神代上の記載によると「既にして素盞鳴尊、天照大神の髻鬘及腕に纏かせる八坂瓊の五百箇御統を乞ひ取らし、天真名井に濯ぎ、齟然咀嚙、吹棄する氣噴の狹霧に生りませる神の號は、正哉

内鮮交渉の神代卷の様相

吾勝勝速日天忍穗耳尊とまうす」云々

とあり、またその所引の一書にいはく

「日神素盞鳴尊と中略誓約ひて曰はく、汝中略如し男を生めらば、予れ以て子と爲して天原を治しめむ中略已にして素盞鳴尊其の左の髻に纏かせる五百箇御統の瓊を含みて中略便ち男を化生す。則ち中略名づけて正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊とまをす中略其れ素盞鳴尊の生しませる兒皆已に男なり。故れ日神中略便ち其六男を取りて以て日神の子と爲して天原を治しむ」。云々と。

かくして、天照大神の御猶子天忍穗耳尊は、高皇產靈尊の女、栲幡千千姫を娶りて、天津彦彦火瓊杵尊を生れまし、天津彦彦火瓊杵尊は、大山祇神の女、豐吾田津姫を娶ひて、彦火火出見尊を生れます。彦火火出見尊は、海神の女、豐玉姫を娶りて、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊を生れまし、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊は、海神の女玉依姫（豐玉姫の妹）を娶りて、神日本磐余彦尊を生れますのであるが、この神日本磐余彦尊が即ち神武天皇であらせられるから、「神系帝王表」の系譜を溯れば、本來、内鮮一體の上に、わが皇祖の立たせたまふことが明瞭に仰がれる。

彦稻飯命

續いて同譜にあらはれる所見は、彦稻飯命新羅に王統を垂れ給ふの一事である。

「日本時代史」にいふ、

「記に『稻氷命者爲妣國而入座海原』とあり。又姓氏錄右京皇別に『新良貴、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊男、稻飯命之後也、是於新良國、即爲國主。稻飯命者、新羅國王之祖也、日本紀不見』とあれば稻飯命の新羅王を襲ひ給ひし確證なり。韓史に新羅の始祖朴赫居世を記して『漢宣帝五鳳元年、甲子四月、丙辰即位、號居世于時年十三年、國號徐耶伐（徐羅伐）三年五月與倭國結交聘』とあるこの事に吻合せり」云々

こゝに彦稻飯命とは、御母玉依姫の御子として神武大帝と御同腹の兄君にましますことは、これも神系譜に明らかなるところであるが、更に下つて、神功皇后は、開化天皇の玄孫、息長宿禰王の第三女であらせられる。しかるに息長宿禰王は新羅國の王子天之日矛第六世の孫多遲摩比多訶の女たる葛城之高額比賣命を妃として皇后を生ませられる。この新羅王子天之日矛に關しては、「古事記」に、

神功皇后

「又昔新羅國王の子有り。名は天之日矛と謂ふ。是の人參渡來りけり。參渡來りけり

る所以は、新羅國に一つの沼あり。名を阿具奴摩と謂ふ。此の沼の邊に一賤女晝寢したりき。於是日の耀虹の如其の陰上を指したるを、亦一賤夫其の狀を異しと思ひて、恒に其の女人の行を伺ひけり。故是の女人其の晝寢したりし時より姪身みて赤玉をなも生みける。爾に其の伺へる賤夫其の玉を乞ひ取りて恒に裏みて腰に著けたりき。此の人山谷間に田を營りければ、耕人等の飲食を一牛に負せて、山谷の中に入りけるに、其の國王の子天之日矛遇逢へり。爾其の人に問ひけらく、『何汝飲食を牛に負せて山谷へは入るぞ。汝必ず是の牛を殺して食ふならむ』と曰ひて、即ち其の人を捕へて獄囚に入れむとすれば、其の人答へらく、『吾牛を殺さむとには非ず。唯田人の食を送るにこそあれ』といふ。然れども猶赦さざりければ、其の腰なる玉を解きて、其の國王の子に幣しつ。故其の賤夫を赦して、其の玉を將ち來て床の邊に置けりしかば、即ち美麗き嬢子に化りぬ。仍婚して嫡妻と爲たりき。爾に其の嬢子常に種々の珍味を設けて、恒其の夫に食めき、故其の國王の子心奢りて妻を嘗れば、其の女人『凡 吾は汝の妻と爲るべき女に非ず。吾が祖の國に行なむとす』と言ひて、竊びて小船に乗りて逃遁げ渡り來て難波になも留りける。此は難波の比賣葦

曾祖神阿加流
神阿加流

於是天之日矛其の妻の遁れしことを聞きて、乃ち追ひ渡り來て、難波に到らむとす
る間に其の渡の神塞へて入りざりき。故更に還りて多遲摩國に泊てつ。即ち其の國
に留まりて多遲摩之俣尾が女、名は前津見に娶ひて生める子多遲摩母呂須久、此が
子多遲摩斐泥。次が多遲摩比那良岐。此が子多遲摩毛理。次に多遲摩比多訶。次に
清日子、三此の清日子、當摩之咩斐に娶ひて生める子酢鹿之諸男、妹菅竈由良度美。
故上に云へる多遲摩比多訶、其の姪由良度美に娶ひて生める子葛城之高額比賣命
息長帶比賣 故其の日矛の持ち渡り來つる物は玉津寶と云ひて珠二貫、又浪振比禮・浪
切比禮・風振比禮・風切比禮、又奥津鏡・邊津鏡、並せて八種なり 此は伊豆志之
とあり。此の日矛が内地渡來の時代に就いては種々の異説があつて、「書紀」には垂仁
天皇の三年(皇紀六三四)とあり。然らば新羅赫居世の代三十一年に當るが、「播磨風土
記」には、大國主命の時代とあるのを是認して、吉田東伍博士は神代にありとし、久米邦
武博士は、孝元帝の時代 皇紀四四七—五〇三、韓では哀王 に相當するといふ。上代の年代で
あるから二三の異説は免かれないけれども、しかし、天之日矛が朝鮮人であり、其の七

孫たる葛城之高額比賣命の第三女が即ち神功皇后であらせられることは明かである。

傳 系 譜

〔神功皇后御
傳記〕に據る

(九代)開化天皇——日子坐王——大筒木眞若宿禰王——迦邇電王

息長宿禰王

神功皇后

葛城高額比賣

毛理比多訶

天 日 矛——母呂須久——斐 泥——比那良岐

高野皇太
后

次に光仁天皇の皇后、高野皇太后は桓武天皇の御生母にあたらせられる。「大日本
史」后妃傳に、「諱は新笠姓は和氏、乙繼が女なり、其の先は百濟武寧王の子純陀
太子より出づ」とあり、即ち皇太后の御生家なる和氏は、百濟武寧王 百濟第二十五世王で
烈天皇三 年に當る。又「日本書紀」には、武烈天皇七年夏四月、百濟の武寧王、斯
我君を遣はし調を進む。其の時の表に曰はく、謹遣斯我奉事於朝云々と。斯我朝に
奉事して遂に子あり、法師君と云ふ。是れを倭君の祖と爲すとあり、即ち高野皇后の御

生家なる和氏やまとうじがそれである。

「共和氏やまとうじに改賜ひたる高野は、續紀の神護景雲三年八月の下に、大和の添上郡佐貫郷高野と見えたる地にて、乙繼公は和より其處へ移り住ひたりしにか。いづれにも、

其の地に由あり」云々伴信友の「蕃神考」。

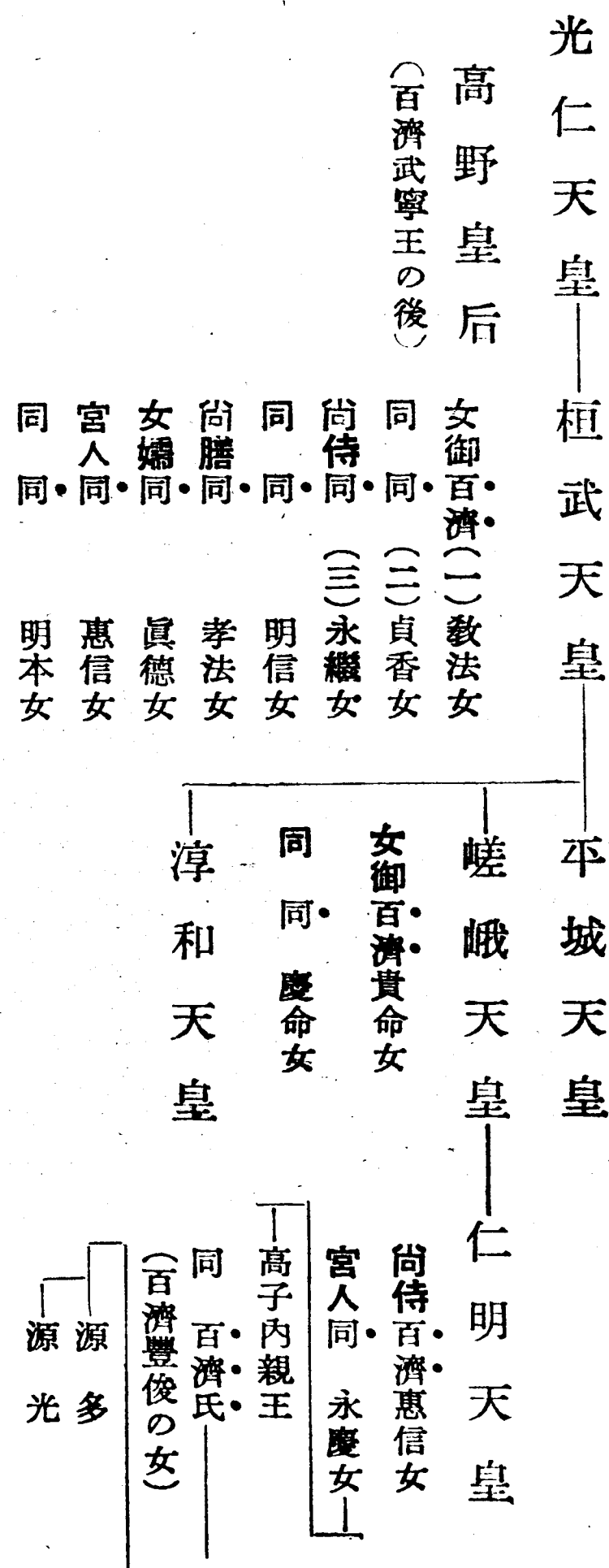
とも見え、更に「續日本紀」には「寶龜中、改姓爲高野朝臣」とあるから、即ち皇太后を高野皇太后と稱へ奉つたのであらう。なほ稽ふるに、皇太后は光仁天皇がまだ皇位に即かせられずして、皇子にましました時、早くも聘せられて寵を得、桓武帝及び早良親王等に能登内親王、酒人内親王を御生みになつたのだらうと思はれる。皇太后崩御の後、後諡して天高知日之子姫尊と申し奉る。此の諡は特に朝鮮本土に由緒が深いので、「續紀」の記載によれば「其百濟遠祖都慕王者、河伯之女、感日精所生、皇太后即其後也、因以奉諡焉」とあり、尙ほ

「延暦九年二月、百濟王玄鏡に従四位下を、百濟王仁貞に従五位上を、百濟王鏡仁に従五位下を授け、百濟王等は朕の外戚なり、擢ひきぬいて爵位を加ふ所以と詔らせられ、其の歲十二月皇太后の 一週忌 また外祖父高野朝臣、外祖母土師宿禰はしのすくねに並に正一位を賜ひ、土師氏

を改めて大枝朝臣おほえのあそみと爲すと詔らせらる。大同元年更に追尊して太皇太皇と云ふ」云々とも見え、「大日本史」にも亦た

「女御百濟教法は従四位下に叙せらる。百濟教仁は従五位上武鏡が女なり、従五位下に叙せらる、太田親王を生む。百濟貞香は従四位下教徳が女なり、従五位下に叙せらる、駿河内親王を生む。百濟永繼は正五位上飛鳥部奈止丸あすかべのなとまるが女なり、飛鳥部氏は初め藤原朝臣内麻呂に適き、眞夏・冬嗣を生めり、後ち宮に入り女孀と爲り、良峰朝臣安世を生む、従七位下を授けらる」

との記載あり。その他、百濟一門の女性で宮に入り奉事したものは少くなかつた。下つて嵯峨天皇の條にも女御百濟貴命きみみこと、鎮守府將軍百濟俊哲の女として女御とし仕え基良親王・忠良親王・基子内親王を生み、弘仁十年に従五位上に叙せられ、従四位下に進みあり。尙侍百濟慶命きょうみことは鎮守府將軍百濟俊教の女であるが、動くに禮則ありて帝甚だ貴重され、源朝臣定、源朝臣鎮を生み、従三位に進み、天長七年特に封五十戸を賜はるあり。更に百濟氏一門から三人の女性が仁明天皇に宮人として御仕へして居る。次に中山久四郎博士の表解により其の系統を示すと、



以上史實に明なるが如く、遠くは神代に於て、素盞鳴尊をはじめ奉り天つ神の往來に依つて、皇祖が和鮮一體の上に立たせ給ふばかりではなく、上古の氏族制度時代に於て、神功皇后の御母にまします葛城之高額比賣尊が朝鮮人であらせられ、開化天皇の玄孫息長宿禰王妃に迎へられて居り、中古郡縣制度時代に於ては、朝鮮人であらせられる高野皇太后が、光仁天皇の皇后に迎へられ、桓武天皇をはじめ奉り、親王並に内親王を御生みになつて居られるのであり、又桓武天皇・嵯峨天皇・仁明天皇の朝には、朝鮮の女性が多く宮人として奉事し、多くの親王及内親王を生み奉つて皇室の藩

屏を成してゐる。この事實はわれらに何を物語るであらうか。私はこゝで、その結論を急がずに後説に留保して、更に民族一體的な通婚と移住の次の如き事實を古文獻に讀んで、姓氏家譜に現はるゝ内鮮の歴史的な關係を見やうとおもふ。

姓氏にあ
はれた
内鮮一
體

こゝでは、主として「新撰姓氏錄」が取りあげられる。この本は、弘仁六年^{皇紀一四}_{五七}七月、嵯峨天皇の朝、勅を奉じて撰られ、萬多親王編して上るもの、收録の姓氏惣數一千百八十二氏に上る。この中、神別、皇別を除いて、蕃別の姓氏が三百七十三氏あるが、それを更に内譯すれば、漢が百七十九氏、百濟が百十九氏、高麗が四十八氏、新羅が十七氏、任那が十氏となる。こゝに漢とあるは、主として漢族の朝鮮歸化族で、是等は姓氏錄に載る位であるから、相當な名家ばかりだつたと考へて可い。此の外に姓氏錄に洩れた者の夥しきそれが想像されるが、民族の祖源を同一にしながら、姓氏錄に蕃別として區別されたのは、單にその出生が朝鮮であつたことの族籍的な殊稱で

あつて、必らずしも排外の意味をこめた差別ではなかつたことを、前項の叙述によつて端的に理解できるであらう。さうした全姓氏の三分の一を占める交流の中に、たとへ千數百年後の今日と雖、尙ほ且つ生命として傳はる血の永劫の姿を見ないだらうか。

これだけの史實を以てしても、内鮮一體における同胞の關係——根元的な意義を明瞭に把握できると思ふのであるが、尙ほこれについて、以下各姓氏につき、多少の説明を加へる。

天日矛族

▲天日矛族 矛をまた槍或は、多遲摩氏 多遲摩はまた田道間と
梓を以て充つ

日矛族の本系たる多遲摩氏は、神功皇后の御母公にあたらせられる高麗姫の御實家である。この姫命は、開化天皇の玄孫息長宿禰王に聘せられてその王妃となり、而して生み給へるが息長足姫であつて、仲哀天皇の皇后として冊立せられ、遂に天位を攝したまふに至り、諡して神功皇后と申すのである。

多遲摩氏とは、日矛が但馬國に留り、其國の前津耳の女麻施能鳥を娶つて但馬諸助を生んだので、但馬の國名を其儘に取つて、多遲摩を稱したのだといふ。

田道間守

多遲摩毛理 田道間守 は、忠誠の極みを盡した人で、垂仁天皇の朝、勅諡によつて常世國

へ非時香菓を求め、天皇崩御の後に齎し歸つて陵前に叫哭き死んだと傳へられるその人である 歸朝は景行帝の元年、皇紀七三一である。

多遲摩氏の第七世孫清日子、第八世孫酢賀之諸男と云ふ風に、スガを姓として居る。

▲天日槍族・五十迹手氏

日槍の子孫は諸國に繁榮したが、其の内で一異彩を放つものは、筑紫の五十迹手で

ある。「神功皇后御傳記」に、
「筑紫の伊觀縣主が祖、五十迹手といへるもの、天皇(仲哀)の幸ませりと承りて、五百枝賢木を根こじにこじ取り、船の舳艫に立て、上ツ枝に八尺瓊を掛け、中ツ枝に白銅鏡をかけ、下ツ枝に十握劔を掛けて、穴門の引島まで參迎奉りてぞ、これを献りける」。

とあり。伊觀は筑前國怡土郡、宗像郡にも怡土郷あり。天平勝寶六年怡土城を築かれたことが見えるが、「筑前風土記」に「五十迹手奏曰、高麗國意呂山自天降來、日梓之苗裔五十迹手是也」とあるもの、此の五十迹手は、其の祖先が漢と通じ、「漢倭奴國王」

なる金印を有したとて皇朝に叛いたと謂ふ其の子孫であるけれども、伊觀縣主が仲哀天皇を奉迎し奉ること、かくの如き忠誠を表して居る。此の日槍の苗族には随分名家があつて、今日に明かなものだけでも相當に多く、例へば三宅氏他系のそ橘守氏、絲井氏があり、三宅氏の枝葉には、兒島、今木、和田、中西、浮田、松崎等がある中山博士著書による

▲百濟氏族

百濟氏族はすべて百十九氏が姓氏錄に收録される。みな當代の名門であつて、殊に百濟王統の後裔も多い。

百濟氏族

和朝臣

百濟都慕王十八世の孫武寧王の後、此の和朝臣は、百濟武寧王の孫斯我君純陀太子「聖明王」の子が來朝して法師君を生み、大和國城下郡の郷、大和於保夜末止に住んだので、地名の因みを以てその氏を和と稱したものであらう伴信友の「蕃神考」この法師君の子孫に、和氏、乙繼が居て、此の乙繼の御女新笠姫が高野皇后であらせられ、光仁天皇の皇后として、桓武天皇の御母君にあたらせられる。

高野朝臣

和氏・乙繼公寶龜年間に姓を高野朝臣と改め賜ふ。

傳系譜

日笠護著「日鮮關係の史的考察と其研究」に據る

都慕王

貴須王(十六世)

○—辰孫王(應神天皇の時來朝)
蓋鹵王—武寧王—

聖明王

斯我君—法師君—和史某—高野朝臣乙繼—新笠姫

(純陀太子)

(桓武天皇外祖父)

(桓武天皇御母)

百濟ノ朝臣

百濟王三十世の孫惠王の後

百濟ノ公

百濟文淵の後

沙田ノ史

百濟人意保尼王の後

大丘ノ造

百濟速古王十二世の孫恩率高難延子の後

百濟王

百濟義慈王の後

此の百濟義慈王の子孫が來朝して、皇朝に奉事したものの中有名なものとして百濟敬福と百濟俊哲とがある。敬福は、義慈王の玄孫に當り、聖武帝の寵遇を蒙つて陸奥守となり、勝寶年中に宮内卿となり、後また外衛大將となり、刑部卿に任ぜられる等榮職に歷任した。

俊哲は、坂ノ上田村麻呂の蝦夷征討に従ひ、征夷副使となり、陸奥鎮守將軍を兼ね

る等これも亦榮職に歴任したことが「大日本史」に見える。

尙ほ此の百濟氏には、桓武天皇、嵯峨天皇、仁明天皇各世に宮人として奉事した女性も多く、從つて親王、内親王の多くの方々を御生みになつて居る。例へば

桓武天皇御世

從五位上百濟武鏡の女從五位下百濟教仁は太田親王を生み、從四位下百濟教徳の女

從五位下百濟貞香は駿河内親王を、從七位下百濟永繼は

峯朝臣安世新撰姓氏錄左京皇別
に良岑ノ朝臣とあるを生む。

嵯峨天皇御世

鎮守府將軍百濟俊哲の女從四位下百濟貴命は、基良親王、忠良親王、基子内親王を

生み、鎮守府將軍百濟教俊の女從三位百濟慶命は、源ノ朝臣定、源ノ朝臣鎮を生む。

仁明天皇御世

鎮守府將軍百濟教俊の女永慶は、宮人に奉事して高子内親王を生み、百濟豐俊の女

百濟氏は、宮下に奉事して源多、源光を生む。

義慈王の後裔は、かくの如く多くの女性が其の名を「皇胤系圖」「皇胤紹運録」等に

載せられて居るばかりでなく、百濟氏一門は特に殊遇を賜はつた。桓武天皇延暦十二

年夏五月の詔に、

「百濟王等曾て遠く皇化を慕ひ、海に航し山に梯し款を輸すること久し。其間方物を獻じ、才士を獻じ文教蔚興し儒教闡揚す。更に今日に於て盛なりと爲す。既にして新羅の虐に遇ひ乃ち族を擧げて仁に歸し、我が士庶と爲り、夙夜公に奉ず。朕其忠誠を嘉し情に深く矜愍す。百濟王の課並に租税を永く蠲除すべし」とあつて、其の殊遇を賜ふ由來の要を盡されてゐる。

傳 系 譜

中山久四郎博士の表に依る

義慈王—豐璋王—禪廣—昌成—郎虞—遠寶—慈敬

(扶餘豐餘)

元忠—玄風—勝義

孝忠—孝法女

全福—仁貞—女(左大臣冬嗣の妻)

敬福—理伯

永繼—女

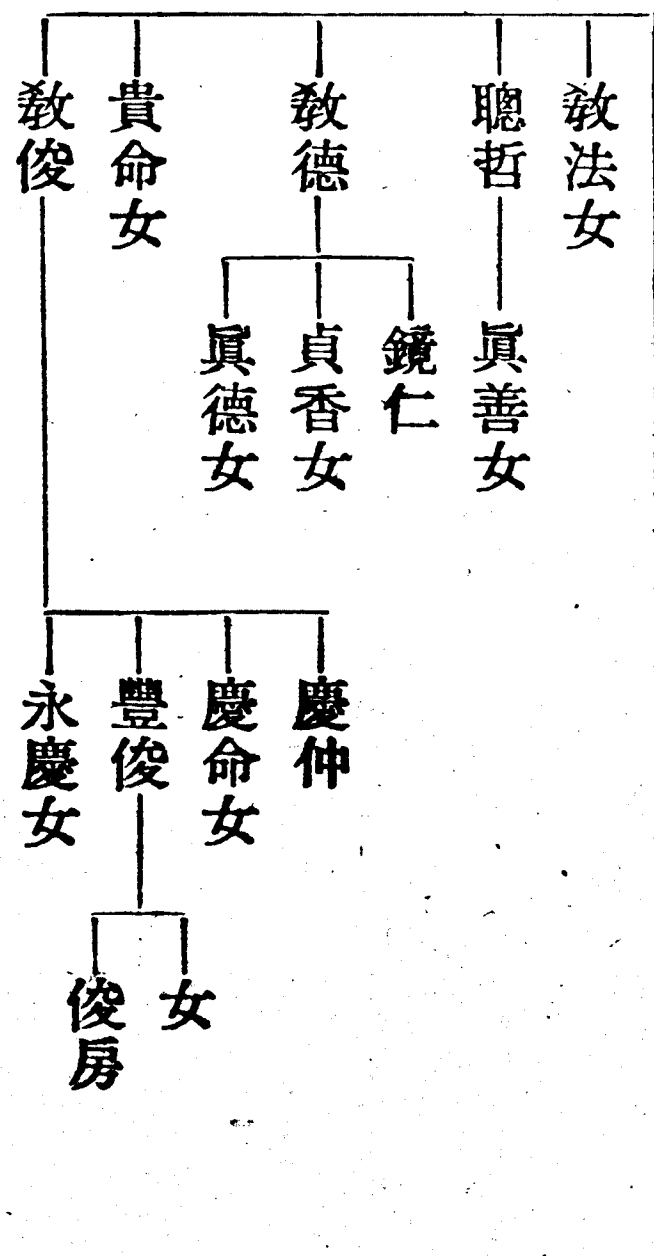
女(内大臣内麻呂妻冬嗣の母)

明信女(大納言繼繼妻繼)

俊哲

惠信女

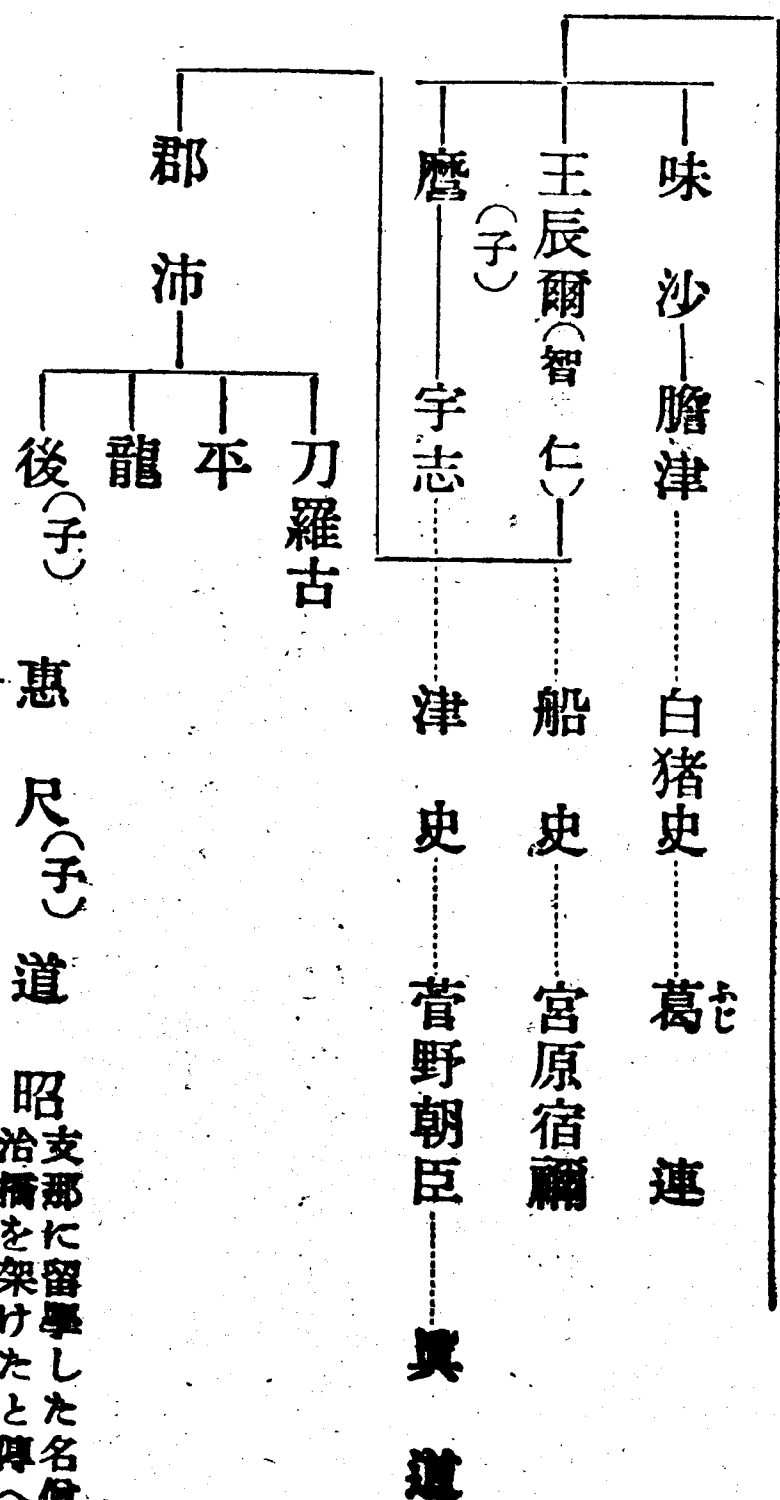
明本女



百濟都慕王十世孫貴首王の後菅野朝臣——眞道津連は、「續日本紀」を書いた史上に有名な人で、桓武天皇延暦時代から三代の天皇に奉事して、宮内大臣、大藏大臣等の高官を歴任し、國家功勞の人として傳へられる人である。貴須王は「新撰姓氏錄」には貴首王とあるのである。

傳系譜 日笠護著「日鮮關係の史的考察とその研究」の表掲による

貴須王——辰孫王——太河郎王——亥陽君——午定君
(貴須王また仇首王につくる姓氏錄には貴首王とあり)
(眞君)



三善宿禰……文學者としての清行は尤も著聞する。參議、宮内卿、播磨權守等を歴任して從四位上にいたる。其の子淨藏は、名僧として「大法師淨藏傳」に遺る。

百濟速古大王の後
三善宿禰……文學者としての清行は尤も著聞する。參議、宮内卿、播磨權守等を歴任して從四位上にいたる。其の子淨藏は、名僧として「大法師淨藏傳」に遺る。
安勅ノ連 百濟魯王昆有の後
市往ノ公 百濟明王の後
百濟ノ伎 百濟都慕王の孫德佐王の後

岡原ノ連 百濟辰斯王の子知宗の後

飛鳥戸ノ造 百濟比有王の男混伎王の後

以上、たゞ其の一班を擧げたにすぎないが、此他、史に遺聞するものは甚だ尠くない。仁徳帝の朝に奉事した酒ノ君。奈良の大佛鑄造の際技術上の殊勲をなした國中連公麻呂。繪畫に有名で其の寫す所の人物山川草木等は悉な自ら生けるが如しと云はれた百濟河成等、殆んど枚舉に遑がないが、尙ほ一二の附記を許されるならば、

多多良氏 姓氏録には任那族部に多多良公とある

多多良氏は大内氏の祖で、「姓氏録」に「多多良ノ公は御間名ノ國主爾利久牟王の後なり。欽明天皇の御世に投化して、金ノ多多利、金乎居等を獻ず。天皇之を譽め多多良公ノ姓を賜ふ」とあるもの、「大内系圖」によれば、百濟王餘璋の子琳聖太子が本朝に來つて、正恒を生み、其の正恒に多々良の姓を賜はつたのだといふ。この正恒より藤根、宗範、茂村、保盛、弘眞、眞長、貞成、盛房、弘盛を経て滿盛に至り大内介と稱した。

大内氏

大内氏は、以上の如く多々良滿盛より改めて大内と稱し、弘成、弘貞、弘家、重弘、弘幸を経て弘世に至り、周防長門石見の守護となり、其子義弘繼いで周防長門石見の外豊前和泉紀伊三國の守護を兼ね、從つて朝鮮との關係も深かつた。義弘は、驍勇絶倫和歌を好み、年齒十六にして今川貞世と筑紫を略し、前後二十餘戰遂に鎮西を平げ、子孫世々數州を領して西土に雄視した。此の義弘から、持世、教弘、政弘を経て、義興に至り周防長門豊前安藝石見山城の守護を領し、義隆嗣いで周防長門豊前筑前石見安藝備後の守護を兼ねたのであるから、その世々の勢力以て知るべきである。

右の、百濟よりの諸氏族は、専ら「新撰姓氏録」の蕃別中百濟王族の系統のみを擧げたのであるが、「姓氏録」第一帙左京皇別の左の諸氏も百濟王の裔として解されてゐる。

大原眞人 出自 諡 敏達孫百濟王也

島根眞人 大原眞人同祖、百濟王之後也

豐國眞人 大原眞人同祖

吉野ノ眞人 同

桑田ノ眞人 同

山ノ於ノ眞人 同

池ノ上ノ眞人 同

海上ノ眞人 同

清原眞人 同

良岑ノ朝臣

從四位下、良岑朝臣、安世。是皇統彌照の天皇ノ諡祖御子也。從七位下、百濟宿禰、之繼、爲女孀而供奉所生也。延暦二十一年十二月ノ二十七日特賜姓良岑朝臣、貫於左京。

要するに百濟氏族は、朝に、野に、文に、武に貢獻した處が甚だ大なる者があつて、能く融合一體となつて、其の間毫末の差別感を見ず。内鮮上古同族の幽契、自らにして然らしめたことを明察するに足ると思ふ。

▲高句麗氏族 「姓氏錄」には高麗とある

「新撰姓氏錄」には四十八氏があるけれども、これは専ら畿内に居た名門のみであるから、其の他の諸國に居たものは更に多かつたらうと想像される。例へば「續日本

高句麗氏族

紀」元正天皇の靈龜二年五月の條に「辛卯以駿河甲斐相模上總下總常陸下野七國高麗人（高句麗のこと）一千七百九十九遷于武藏國置高麗郡焉」とあつて、其の人達の

中から高麗大山が高麗使に任命され、高麗廣山は副遣唐使に任命されて居る外、高倉朝臣福信が居て聖武天皇以後の六朝に仕へ、春宮亮、紫微小弼、信部大輔、造宮卿、武藏守、近江守、但馬守、彈正尹等に歷任して居る。「續日本紀」延暦八年十月の條に

「散位從三位高倉朝臣福信薨す。福信は武藏國高麗の人なり。本姓は背奈。其祖福德は唐將李勣が平壤を拔けるに屬して國家に來歸し、武藏に居れり。福信は即福德の孫、小年のとき伯父背奈行文に隨つて都に入る。時に同輩と晩頭に石上の衢に往き、遊戲して相撲するに、巧に其力を用て能く其敵に勝つ。遂に内裏に聞え、召されて内豎所に侍せしめられ、是より名を著はす。初め右衛士の大志に任ぜられ、稍く遷つて、天平中、外從五位下を授けられ、春宮亮に任ぜらる。聖武天皇甚だ恩幸を加へたまひ、勝寶の初めに從四位紫微小弼に至り、本姓を改めて、高麗ノ朝臣を賜り、信部大輔に遷る。神護元年從三位を授かり、造宮卿を拜し、兼ねて武藏近江の守を歷任す。寶龜十年上書して言はく、臣聖化に投じてより年歲已に深し。但だ

新姓の榮たる朝臣は分に過ぐと雖、而も舊俗の號高麗未だ除かれず。伏して乞ふ、高麗を改めて以て高倉と爲さんと、詔して之を許さる。天應元年彈正尹兼武藏守に遷る。延暦四年上表して身を乞ひ、散位を以て第に歸る。薨ずる時年八十一

とあり。此の高倉福信の祖高麗氏が住んで居た武藏國高麗郡と云ふのは今の埼玉縣入間郡高麗村で、東京池袋驛から武藏野線高麗驛に下車して高麗村に至れば、そこに高麗神社が現在する。この高麗神社は元正天皇靈龜二年五月武藏國高麗郡を置くにちなんで創建されたもので、文武天皇大寶三年四月、從五位下高麗若光王が、王の姓を賜はつた高麗王若光を祀るものである。高麗王若光の五十七世戸主大記次子高麗興丸が今尚ほ生存して居り、其子高麗明津が神社の社掌となつて居るが、高麗氏系出の姓氏を示すと、大體、高麗、高麗井(駒井)、井上、新、神田、新井、丘登(岡登)本所、和田、吉川、大野、加藤、福泉、小谷野、阿部、金子、中山、武藤、芝木等である。尙ほ「日本後紀」延暦十八年十二月の條には

「信濃の國人、外從六位下卦婁眞老、後部黑足、前部黑麻呂、前部佐根人、下部奈弓麻呂、前部秋足、小縣郡の人、無位上部豐人、下部文代、高麗家繼、高麗繼楯、

前部貞麻呂、上部色布知等言す、已等の先は高麗の人なり、小治田推古天皇、飛鳥舒明天皇

二朝の時節に歸化來朝せり」云々

とあるから、高句麗の五部族後漢書高句麗傳に、凡有五族、有消奴部、絶奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部、本消奴部爲王が歸化したのであらう。此の中に左の姓を賜はつたものが所見する。

廣宗ノ連ひろむねのむらじ 弘仁二年八月紀に、山城國人正六位上高麗人東部黑麻呂に廣宗連の姓を

賜ふ

黃文ノ連きふみのむらじ 高麗國人久斯那王の後世

長背ノ連ながせのむらじ 高麗國主鄒牟王の後也、欽明天皇の御世に衆を率ひて歸化す

後部ノ王しりべのきさし 高麗長周王の後也

出水ノ連いづみのむらじ 天武紀五年の條に、後部王博河干。また寶龜七年五月紀に正六位上後部

石島等六人に姓出水連を賜ふ

高里ノ連たかさとむらじ 天平寶字五年三月紀に、高麗人後部王安成等に姓高里連を賜ふ

更に國號を氏とする者には

高麗ノ朝臣こまのあそみ 高句麗王好臺七世の孫延興王の後

狛ノ首 高麗國人安岳上王の後岳を一に

狛ノ造 高麗國主夫連王の後

大狛ノ連 高麗國諡士福弱貴王の後

狛ノ染部 高麗國須牟祈王の後、或は云ふ、大武神社の後也

又高句麗の國姓高を氏とする者には

高ノ史 高麗國人、元羅那杵王九世の孫延掣王の後也。天平十四年の「古市郷計帳」に高史加太賣の人名を載せる

高 高麗國人高金藏法名信成の後也。大寶元年八月紀に、僧信成に勅し還俗

して本姓に復せしむとあり。信成姓は高、名は金藏と見ゆ

高井ノ造 鄒牟王二十世の孫汝安祈王の後

此の高氏の中には、後部、前部の稱を合せて複式の氏を形式した者もあつて、天平寶字元年九月の紀に、高麗人後部高笠麻呂とも見え、同五年三月の紀に高麗人後部高吳野に姓を大井連を賜ひ、高麗人前部高久信に姓を福當連と賜ふ、などとあつて、高句麗族が上古に於いて如何に多く移住したかが窺はれ、從つて我國文化の精神物質兩方面

に多くの貢獻があつたことも知られるのであり、高倉福信の如く、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁、桓武の六代天皇に仕へて純忠報國の誠を盡したのも居たのである。

▲新羅氏族

新羅氏族は、「姓氏錄」に顯彰されたものは十七氏に過ぎないのであるが、「元正天皇紀」に、「美濃に七十四家を置いて廣田郡を立て」とあり、「聖武天皇紀」に武藏國の新羅人に金姓を賜ひ、新羅郡を置かれたなど見えて居るのみでなく、「姓氏家系辭書」には三十氏を數へる程であるから、相當多數の移住があつたことを思はせる。天日槍族以外の新羅族を舉ぐれば、

壹呂比氏 壹呂比氏とも書く。延暦元年四月紀に右京人少初位下壹禮比福麻呂等十

五人に姓を豐原連と賜ふと見え、「姓氏錄」に豐原連は新羅國人壹呂比麻呂の後なりとある。

海原ノ造 新羅國人進廣肆、金加志毛禮の後なり

日根ノ造 新羅國億斯富使王の後

宇奴ノ重 新羅王子金庭興の後

新羅國阿羅國王の弟伊賀津君の後

竹原ノ連

大寶三年紀に、僧降觀還俗す。本姓は金、名は財とあり。延暦二年七月

紀右京人散位從六位上金肆順に姓を海原連と賜ふと見え、神龜元年五月紀に従

六位上金宅良、金元吉に並に姓を國看連と賜ふとある

武藏の金氏

天平五年紀に、武藏國埼玉郡新羅人德師等男女五十三人に、請に依つて

金姓を賜ふ云々

陸中の金氏

「姓氏家系辭書」に曰く、「陸奥說話に、遣氣仙郡司金爲時等攻賴時、賴時

以舍弟僧退昭等令拒之」とあり、また歸降者に金爲行、金則行、金經永等見ゆ。金

氏にて新羅歸化族か。子孫金野また紺野と云ふ

山城の金城ノ史

寶龜六年七月紀に、山背國紀伊郡人從八位上金城史山守等十四人に姓

を眞城史と賜ふ

是れ、單にその一班を示したものにすぎないが、新羅三姓の一なる金氏に就いては、右の如く若干の形跡を認め得るけれど、それも「姓氏錄」には洩れてある。おそらく姓氏錄以後のことであらうと想像される。朴氏昔氏については、後世に至つてもまだ何

らの典據的な發見が出来ないが、しかし承和三年紀に朴氏といふのがあつて、姓を貞宗連と賜ふ由見えて居る。けれども其先百濟國人也とあつて新羅とはされて居ない。新羅族の割合に少いのは、或は百濟族が歴代殊遇を蒙つたのに便乗假託して、新羅族なることを隠したのではなからうかといはれてゐる漢名寛祐氏の説による

▲任那氏族

「姓氏錄」に登載された任那族は僅かに十氏に止まり、百濟の百十九氏に比すれば甚だ少數である。蓋し任那は、新羅に滅され百濟に併せられたのであるから、其の族人は惣じて百濟族として歸化したのであらう。「姓氏錄」の十氏は、

多多良ノ公

三間名國王爾利久牟王の後

道田ノ連

任那國賀室王の後一は賀羅賀羅王に依り、又賀羅室年に作る 寶龜元年五月紀に三田毘登家麻呂

等四人に姓を道田連と賜ふと見ゆ

大市ノ首

任那國人都怒賀阿羅斯等の後なり。大市と云ふは、大和國城上郡大市郷の名に負ふものであらう。「推古紀」二十年の條に、百濟人味摩之歸化す。是に於て眞野首弟子、新漢人齊文、二人文に習ひ其の舞を傳ふ。此れ今の大市首、辟田

首等の祖なりとあり。此の外に大和に大市部氏あり。出雲にも同一の氏あり。備中に大市氏あるなど皆任那族と稱せられる

辟田ノ首 任那國主都怒加阿羅志止の後

清水ノ首 同前

大伴ノ造 任那國主龍主王の孫佐利王の後

豐津ノ造 任那國人左李金の後。寶龜十一年五月紀に、攝津國豐島郡人韓人稻持等

十八人に姓を豐津造と賜ふとあり

韓人 豐津造と同祖

荒々ノ公 任那國富貴王の後

三間名ノ公 彌摩奈任那 國王牟留知王の後

▲加羅氏族

加羅ノ國主 意富加羅王牟留知王の後也

韓部氏 備前に住み、天長十三年紀に、備前國人直講博士正六位上韓部廣公に姓

を眞野宿禰と賜ふ。廣公の先は百濟の人なり云々

加羅氏族

加羅氏 美濃に住む。弘仁五年八月紀に、化來新羅人が羅布古伊等六人を美濃國に配す云々

賀良姓 河内に住む。姓氏錄に新羅國郎子王の後世云々

辛良氏 陸奥に在り。「類聚國史」に、天長元年五月巳未、新羅人辛良金貴、賀良

水白等五十四人を陸奥國に安置す云々

此の外に京師の加羅氏、信濃の辛犬甘氏、攝津の韓海部、韓白水部、武藏の辛子氏など其數も相當多いが、「姓氏錄」には只十氏を登載する。

▲百濟より漢族の移住

朝鮮から内地へ移住皇化した漢族については、「新撰姓氏錄」に百七十九氏が數へられるが、其の内、數氏を擧ぐれば

太秦公ノ宿禰 秦の始皇帝十三世孝武王の後。男功滿王足仲彥天皇 仲哀 八年來朝。

男融王 月王 譽田天皇 應神 十四年 朝鮮帶來朝。百二十七縣の百姓を率ゐて歸化。

「獻金銀玉帛等物。大鷦鷯天皇 仁德 御世以百二十七縣秦民二分置諸郡。即使養

蠶。織絹貢之、天皇、詔曰秦王所獻絲綿絹服用柔軟溫煖肌膚、賜姓波多公、秦

漢族

公酒^{おほはらせわかたけ}。大泊瀬幼武天皇^{おほはらせわかたけ} 雄略 御世、絲綿絹帛悉積如岳、天皇喜之賜號曰^{つぎ}禹都萬^{つぎ}佐^さと見ゆ

右の子孫には有名な人が多く、秦大津父は大藏掾となり、秦河勝は山城國葛野郡太^{つぎ}秦に廣隆寺を造り、秦都理は葛野に松尾神社を建て、伊侶具は伏見に稻荷神社を建て等神社に仕へて神官となつた子孫も多い。

坂^{さか}上大宿禰^{うへのおほのすくね}

後漢靈帝の後裔阿知使主は應神天皇二十年九月に其の子都加使主と共に朝鮮帶方より七姓十七縣の民を率ひて歸化した。その子孫として大宿禰の大は坂上荊田麻呂に特に付けられたものである

右の坂上大宿禰荊田麻呂の子坂^{さか}上田村麻呂^{うへたむらまろ}が例の征夷大將軍として周聞する

王 仁

漢高帝之後也。日鸞王之後、天王轉至百濟百濟久素王時聖朝遣使徵召文人久素王即以狗孫王仁貢焉とあり

即ち應神天皇十六年に阿直岐の推舉に依つて、論語千字文等を獻り、阿直岐と同様太子の傳となる。其の子孫は河内國に住して代々永く文筆の業に奉仕したのである。中山久四郎博士に依ると、「王仁が百濟から來て居て、王仁の日本の儒學、漢學に於

ける一つの重大なることは今更申すまでもないが、王仁の墓は河内國交野郡藤坂村にあつて今では北河内菅原村長尾といふ處にある。日本内地の中でも五畿内殊に河内國、和泉國、大和國、分けても河内國は朝鮮殊に百濟人の跡が最も多くある。王仁の墓は河内國の名所圖繪に出て居る。王仁の子孫が五つの氏に分れて淨野、武生、櫻野、栗栖、古志と言つてそれぞれ、是等の中から日本に大きな働きをした者が出て居て、分けても行基上人、佛教の方からも、諸方の山林原野を開拓した所の經濟方面にも、働きをして居る。行基上人は王仁の中から分れた古志氏から出て居る」とあり。

常世連^{とこよ}

燕國王公孫淵氏後で、天平十九年八月廣足及赤染高麻呂等九人に常世連の姓を賜はる。歌人として有名な赤染衛門は即ちその子孫である。

かくして神代以來、朝鮮から移住し皇化した民族は存外に多かつた。即ち、和鮮兩民族は、たとえば、民族的な根元を同じくするものではなかつたとするにしても、しかしすでに神代以來の民族交流によつて、上は皇統より、下は庶民にいたるまで、かくの如き事態において相互に血流を渾融したのである。そうしたこと以外、兩者の民族社會的——國家的交渉と交流、文化的な接觸は、少くとも桓武朝頃までの歴史の上に、

極めて遠く深く密なるものがあつたことを物語るのであつて、それは、古典日本人における一の特性——極めて包容的であつたからだといふやうな國民性にのみその原因を規定すべくあまりにも包容的、緊密的、親和的であり過ぎる。民族一體の根柢と意識の中に、文化一元、生活一體といふやうな事實の肯定的前提なしには、到底われらが今日に考へられないことであつて、さうした形での、單なる民族融合といふやうなものは、その間に異種の民族意識がある限りは、少くとも千五百年前の素朴な民族性、意識形態においては絶対に考へられないところである。でも、しかしこの根柢的な民族意識の上に極めて自由な國民的包容性を假りに肯定して、この、乗り切れる筈もない民族異種の障壁を、當時に立派に跳びこえ得たとする。それでも、上に述べたやうな民族一體交流の中に築かれる血的意識と生活性格の一元化は、この障壁——民族的障壁を、結句は結構立派に破潰しつくさないでは措かないであらう。さうした民族交流の中にそれでは「言語」はどうだつたか。生活の象徴、意思の表現形式として、この一體意識の事態の上に、尤も緊要な社會機能と立場を有する兩者の「言葉」はどうだつたのであるか。

まづ、極めて端的に考へて、以上二節における叙述を基礎とし、その民族交流實際の形態から想定するならば、兩者言語の同一性——少くとも表現の自由性が想像される。さうでなくとも、すでに夙く遠い昔に遡つて、朝鮮文化の移入は可なり廣汎深刻に行はれてゐたらしい推定において、相互影響的なその形態が十二分に肯定される。かくして、多くの言語學者、考古學者の研究の結果は、系統的に、それが同根であることを肯定し、同形であるものをさへ示すのである。まづ、ロツスの「高麗史」にいふ、「日韓古史斷」
所引

「肅慎、朝鮮、蒙古の王族は、言語その方式を同じくし、謂はゆるツラニアン語是也。今や、支那と同文と稱すと雖、その實際はポリシラブル二音以上數音をかきながら一言一語を爲すを云ふの古法を失ふなく全く漢語モノシラブルにして一言一語屈曲なしと異なりとす」云々。

更にグリフズの「朝鮮史」にいふ、
前掲
同出

「支那の言語、文字、學藝は朝鮮の教化開明の基礎を爲せりと雖尙固有の國語ありて、支那と全然、其の性質、組織を異にし、纔に相通ずる所あるのみ。本來朝鮮は日本と同じくポリシラビックにして、親密類似は、自餘の外國言語の此の二者の如く相近きはなし」云々と。

また「日韓正宗溯源」所引の考證に依れば、

「大矢透氏論文明治二十三年三月 東京人類學會雜誌『日本語と朝鮮語との類似』には兩語を比較して『(一)言葉の續き同様なり(二)言葉の形と義と相似たる多し(三)良行音を語頭に置かず(四)濁音稀なり』の四項目を挙げ、日韓兩語の同系なることが首唱され、次いで『大英王立亞細亞協會雜誌』東京駐劄英國公使館 附通譯官アストン稿には、『日鮮語の比較研究』において、『日韓語を文法及び音韻組織の兩方面より觀て相互一致の者』と論證する。而して更に、赤峰瀨一郎氏は、その『日韓言語の關係』明治二十五年 六月史海所載において『兩國の言語を比較するに、形情の類似するもの意想外に多く、第一には同音の詞多きこと。第二には句をなすに目的格にある名詞と動詞とが保つ位置の同一なること。第三には形容詞と動詞とが同一の規則に依つて變化すること。第四にはテニヲハの種類と用法とが全く同じ

きこと』等を數へこの語系論から結論して、朝鮮民族は大和民族の最近親族なりと論證する。また新井白石の東雅には『古を去ることや、遠くして、海外の人ゆきかふ事ありし此かた、夫等の語言相交はれりと見えし事ありて云々。六經の學の相傳れるより後、百濟の博士等おのゝ其の學をもて來りつかふまつる我々に絶えず。秦漢隸楷の書體を取用ひ、我國の古文廢せしに至りては、古語の如きも、或は言廢れ、或は其義隱れて、我東方の語言大さに~~遠~~ぜし事の始とこそ見えなれ云々。此の間の語ひとり漢字の音の轉ぜしのみもあらず。韓地の方言の轉ぜしも少からず。たとへば太古の時よりいひ嗣で海を呼びてアマといひしを、また韓地の方言によりてワタともいひけり。日本紀の釋訓に、海を讀てホタイといふ事の見えし即ち此なり。猶今も朝鮮東南の俗、海を呼びてバタイといふなり。今によりて古を推すに、日本紀釋にホタイと見えしは、或はホタイ或は又ワタイの字訛りてホタイとなりしも知るべからず。ポと云ひバといふ音の如きは、此國にはなき所なりければ、其の音轉じてワタとならざる事を得ず。是れみな其の音を轉じて呼びしにはあらねど、其の音の自ら轉じたりけるなり』云々。」

とあり。これら古今の學說に歸納して、したがつて、内鮮兩語が同根であらうと云ふことはすでに定論であるが、此の事實を尤も具體的に例證したものは、金澤庄三郎博士である。今其の大體を各個について摘抄する。

阿藝(あぎ)

阿藝(あぎ)

朝鮮語アギは、今日また小兒の事を云ふ。カン、アチ(狗)、ソ、ン、アチ(積)のアチは雛新兒の義。此のアチが犬の子にはカン、アチ、牛の子にはソ、ン、アチとなる。然るに國語のアキは伊裝阿藝いざあぎとして應神天皇十三年紀の御歌にあるに對し、伊裝古抒母として「古事記」明ノ宮應神天皇の段の同じき御歌にある。これと同じ句は昔の歌に多いので、「萬葉集」第一卷山上、憶良の歌にも去來子等いざこどもとある。即ち阿藝が兒等であることがわかる。

小兒の初めて語を發することをアギトフといひ「倭名抄」には「顏氏家訓」の教兒嬰孩を引いて嬰孩に阿岐度布あきとふの訓を施してゐる。「古事記」玉垣ノ宮垂仁天皇の段の阿藝登比あぎとふに對し、垂仁天皇二十二年紀に得言とあるのもそれである。要するにアキを小兒、アギトフを小兒の語と解すれば極めて平明となる。

國語にイカ、カは大の義がある。イカツチのイカは凡て偉大なることを表はす語で、世にイカツチといふのは神々の中でも最も烈しく猛けくましますによつて名づけたもので、祝詞に伊賀志御世いかしのみよとあるも大御世の意味である。「神武天皇紀」の大御歌に介彌羅毗菩茂かみらひともとある介彌羅を、「釋日本紀」に謂大薤也とあるを見るとこの介も大の義と考へられる。筆者私注・國語イカはまた薤の漢字であらはされる。いかめしいといふ形容語を誘導する。

國語イモは、昔凡ての男性において、女性をイモによつて稱へた。「仁賢天皇紀」に、「古者不言兄弟長幼、女以男稱兄、男以女稱妹」とある通りである。だから、母といふ語ももとは女性の通稱であつたに相違ない。

前妻については「古事記」神武天皇の大御歌に古那美賀那許波佐婆こなみがなこさへとある。古那美は嫡妻の義で、「倭名抄」に和名前妻古那美とあるのがそれである。「新撰字鏡」卷三小學篇に婿古那美とある婿の字は、「爾雅」に「妾謂失之嫡妻曰女君」とあるに因んで新に造られた倭字であり、コナミが嫡妻の意の古語であることが判る。即ちコナミはコヌアミの約で、このアミも女性の總稱として用ひられて居る。今日の朝鮮語でも本妻を큰아미(Kun-omi)といひ、宋孫穆が高麗語を集めた「鷄林類事」には、女子

曰漢吟^(han um)とあるから、彼地でも古くから使つた稱呼であらう。

以上ア、キ、アミは、日鮮(滿蒙)を通じて、子女の意を表はす語であることを述べ終つたが、今此の語を伊邪那伎、伊邪那美二柱の神の御名に就けて考へて見ると、眞淵も宣長も、此二神が違^{みちがは}ひ、合せむと、交に誘ひたまへることを以て、御名に負はせたもので、岐は君、美は女君の切だとし、新井白石は沫那藝・沫那美・頼那藝・頼那美など、相對した神名も那美といつたものであらうといつてゐる。

干 ^{かん} 滿蒙語の君長の稱 ^{本來、人と云ふ語から轉じたもの}

朝鮮語カンは、干、可、汗の字を以て會長を義とする。「三國遺事」に「九千者是會長」とあり。居世干は新羅國始祖で、「姓朴氏、諱赫居世、即位號居世干」とあり、箕子可汗については「新唐書」に「高麗傳云、俗多湮祠、祀靈星及日箕子可汗等神」とある。干は新羅に於て官等に用ひ、地方官にも用ひられたが、遂に一般の敬稱より賤民の稱呼となるに至つた。

朝鮮語カン(干)は(han)又は(kan)——として(今は)大の義がある。新羅で城を健牟羅と呼んだ ^{梁書「新羅傳」} のは大村の義で、新羅の地名に韓多沙縣と小多沙縣とが相對して居る。

三國史記 卷三十四 から、この韓(han)は大の義でなければならぬ。

「日本書紀」に見えて居る新羅の官名韓阿食・韓奈末 ^{天武二年紀} は、「三國史記」卷三十八の大阿食・大奈末に當り、皇極天皇元年紀の百濟大使翹岐の大を私記に渾と訓んでゐる。

記紀に、百濟を主とし、新羅、任那などの國主、國王、王をコニキシ又コキシと訓んでゐるのは、大吉士であつて、彼地の俗、宰を吉士又は吉と呼ぶ。

齊明天皇四年紀に、百濟の王后、太子をコニオルク・コニセシと訓み、「釋日本紀」に「私記曰古爾於留久、古爾世之、並百濟之語也」とあり。これもコニは大の義に相違ない。

君主の意味の語の干はもと人の義で、その人はまた大から起つてゐる。これは「漢字說文」に據ると、大は人の形に象つた文字で、「天人、地大、人亦大焉」とあり。人の字を「天地之性最貴者也」と注してある。

智(ち)

智 ^ち

チは日鮮兩語に通じて男女の尊稱に用ひられる。その變化に臣智があり、馬韓、辰

韓はいづれも、その會長梁師を臣智と稱した。「魏志」東夷傳、「馬韓、各有長帥、大者自名爲「臣智」とあり、「後漢書」東夷傳にも「辰韓諸小別邑各有渠師大者名「臣智」とある。

叱智と斯等と、わが國史では、この尊稱を任那の人蘇那曷叱知と意富加羅國王都怒我阿羅斯等の名の中に見出すことが出来る。此の兩名は同一人を別個に言傳へたもので、叱智と斯等とは即ち「魏志」以下の臣智に相當するものである。此の斯等、叱智は、加羅・新羅でも用ひて居る。繼體二十五年紀に、加羅王を阿利斯等といひ、神功皇后五年紀には、新羅使者毛麻利叱智とあり、推古天皇十九年紀には沙啄部奈末叱智などが所見する。

人名の下に智の附く例は夥しくあつて、新羅武烈王となつた金春秋を、春秋智といひ、新羅眞興王拓境碑に「沙啄七總智、碑利城軍主啄福登智、西阿郡使六等啄北只智、大舍村主牟總智、漢城軍主啄竹夫智」などと示される。

我が國ではこれと同じチといふ語を以て威力ある神靈を稱へた。「神代紀」に疾風をハヤチと訓む。夕立・夕星のチ、ツも多分同語であらう。「倭名抄」には、蛟を美都

知と訓んでゐる。神名のツチ、タチは「神代紀」に、木祖を句句迺馳、草祖を野植、火の神を突遇軻智といひ、底土命、赤土命、磐土命といふ呼稱にあらはれる。國、狹立尊、天常立神のタチもツチと同様に解すべきものであらう。

村・郡

朝鮮の古語で村をポル、pōr 又 ko-pōr とつた。pōr は平地で ko-pōr は大平地の義である。この pōr とつ語を表はすに、漢字の音訓を用ひて、沙伐 Sa-pōr、古良夫里 kora-puri、比自火 pi-chāpur など、書く。伐・夫里は字の朝鮮音、火は朝鮮訓を採つたものである。

「日本書紀」にも、これと同様、比自火、背伐、阿夫羅などの朝鮮地名が見える。

坪の字を朝鮮訓でポル、pōr と訓み、咸鏡南道の三水に天坪 (tyōn-pōr) などの例がある。これは我國で坪と訓み、土地の小區劃の名としてゐるが、此の字は「説文」に「地平也、从土平」とあるやうに、もと平地の義で、略して平ともする。「龍飛御天歌」卷五徳山洞院平の注に「大野曰平、徳山洞院在咸興府之北」とあり、「訓蒙字會」上卷に「大野曰坪、通作平」とあるのがそれで、今日も加平・咸平・定平などの地名

がある。坪と評において坪の字は、古く普通の故を以て、評の字が代用された。「梁書」新羅傳に啄評とあるのがそれである、日鮮とも上世は字義に拘はることなく、音が通ずれば自在に文字を流用するのが普通であつて、この坪・評なども更に訪・方の字で代表した。ヒヤウの約ハ、ウとなるからである。「三國史記」卷三十四に「新羅九州所管郡縣、無慮四百五十訪」とある訪、欽明天皇十三年紀に牛頭方・尼彌方とある方がそれで、此等の評・訪・方はいづれも坪と普通の故を以て、代用せられ、當時 pōr の意に用ひられたものに相違ない。

我國の古語では村をフレといふ。景行天皇四十年紀に村之無^{ふれ}長^{ひとこのみ}、邑之勿^{むろ}首^{おも}の村をフレと訓む。景行天皇十八年紀の八代の縣豐^{とよ}村の村はフレをア、いと誤つたもので、今も河内國の五十村越^{いそふりこえ}には、村をフラと訓んでゐる。

「萬葉集」第三卷に、「角障^{つぬさやふ}經^い、石村毛^{いはれも}不過^{すぎず}、泊瀨^{はつせ}山^{やま}、何時^{いづれ}毛^も將^{まさ}超^こ夜^よ者^は深^{ふか}去^け通^と都^つ」、とある、この石村はイハフレの約で村にフレの古訓のあることは明白な事實である。ところで、村の義を朝鮮語でコホル ko-pōr といつたことは、「龍飛御天歌」卷二栗村の注に cho-kafur とあるので分るが、cho は粟の訓、kafur が村の訓で、ka は大の義、

國語の郡に相當する語である。朝鮮では古く郡村をあしなへて pōr とも ko-pōr とも稱し、其の間に判然たる區劃を立てなかつたものらしく、朝鮮で pōr に用ひた評(坪)の字を「書紀」にはコホリと訓んでゐる。

國語郡の語は孝德天皇大化二年紀に、「凡^{こほり}郡^よ以^そ四十里^と爲^な大郡^と」とあるのが初めてである。(筆者)朝鮮語では現今に於いて郡をコホルと云ふ。

城・城

わが古語に城をキといふ。これは柵壁其他の防備物を以て四邊に取り圍んだ一部の地の名で、馬を放養するウマキ放牧、稻を貯積するイナギ稻城などのキがそれである。また、屍を収める棺槨をキ、大化二年紀ともヒトキ、倭名抄ともいふのは人城の義、今の柩である。

天智天皇三年紀に水城^{みづき}といふ名も見えるが水を貯へるための一構である。此の外高城、磯城といふのは、高地の城郭(タカキ)、神籬^{かみろぎ}を以て繞圍せる一郭の神城(シキ)の義である。

朝鮮の古語キ・シキは朝鮮の古地名としてもあらはれたものが少くない。

村主(す
ぐり)

百 濟 奴斯只縣 no-să-chi 新羅儒城縣
同 結已郡 kyôr-kûi 同 潔城縣
同 悅已縣 yôr-kûi 同 悅城縣
新羅 闕支郡 kuôr-ki 同 闕城郡
これ等の地名の ki, kûi, sâchi は、いづれも城の字に該當して用ひられてゐる。

村主(す
ぐり)

城と關聯して述ぶべき語に村主がある。村主とは歸化人に賜つた姓で、「倭名抄」に、伊勢國安濃郡村主郷須久利があるから、これもスクリと訓むこと明かである。

雄略天皇二年紀に身狹村主青、敏達天皇十三年紀に鞍作村主司馬達等、天武天皇八年紀に上村主光欠などが見えてゐる。新羅における村主の號は新羅眞興王柘境碑、晋州蓮池寺鐘銘 今越前敦賀常宮神社にあり などに見えてゐるが、これは「三國史記」卷四十五にある水酒村干、一利村干、利伊村干などの村干と同じで、干に酋長の義のあることは前節に述べた通りであるから、村主は村干の義譯と見ねばならぬ。

忽(こる)

忽(こる)

朝鮮古語コル忽(朝鮮音 hor)といふ語が多く高句麗の地名中に見えるが、買忽郡一云水城、水谷城縣 一云買且忽 などのやうに、忽を城の義に充てゝゐて、「魏志」高句麗傳にも「溝漚者句麗名城也」とあるから、忽が城の義の句麗語であることは疑がない。但し、百濟の地名にも伏忽郡 新羅寶城郡と改む があり、繼體天皇二十三年紀に、任那己比己利城と見えてゐるから、高句麗のみとも限られてはゐないらしい。

滿洲語コルはこの忽(hor)と同系の言で、山谷の義であり、もと谿谷の平地に多く民居を構へたから、村落の義となり、遂に城の字を充てるに至つたものであらう。朝鮮語洞の朝鮮訓は kci で、谷と巷との兩義に用ひられ、各地方の小部落には洞を名とするものが頗る多い。國語でも谷をクラといつた。「古事記」に閼淤加義神、閼御津羽神とあるクラは谷の古語である。

都留(つ
る)

坪、平の字が平野の義に用ひられることは已に前節に述べた通りであるから、これを朝鮮語野と訓讀する場合が多く、忠清北道義興郡城坪洞を Syông-tûr 永春郡竹平洞を Sung-tûr と呼ぶなどは、其一例である。繼體天皇六年紀の任那國上哆利、

下^{おろした}叻利などの叻利も多分同語であらう。

我國でも九州の地名には特に都留といふ地名が多く、原野の義に用ひられてゐる。例へば、豊後國大分郡の勝津留、大津留、肥後國玉名郡津留などであるが、この勝津留のかには大の義があるから、大津留と同一の名義であらう。香取といふ地名は下總國と近江國と兩方にあるが、下總國の香取郡は利根の大江を繞してゐる平野であるから、大野といふ名に相應しい土地である。肥前國松浦郡「古事記」末羅縣「倭名抄」松浦(萬豆良)郡亦この都留系の地名である。甲斐國都留郡は、持統天皇二年五月紀に百濟人を此地に移したとあるから、もとよりの朝鮮語であらう。

牟禮(むれ)

牟禮(マル)

今日の朝鮮語で山を moi としふが、古語は mori であつて、「龍飛御天歌」卷四の楸山に Pi-moro の注があり。濟洲島では平地に孤立せる山をマルと稱へて、旨の字を充てゝゐる「朝鮮地名考證」旨をマルと訓ずる例は朝鮮の各地方に夥しい。今其中二三を擧げて見れば、忠清北道懷仁郡西面の晚旨洞 (man-marn)、慶尙南道陝西郡栗津面の九旨洞 (kur-nōn)、慶尙北道仁同郡文良面の中旨洞 (chung-marō)、江原道蔚珍

郡下郡面の旨老洞 (manu) などがそれである。

「日本書紀」には辟支山、古沙山神功四十一年紀、谷那鐵山神功五十二年紀、居曾山欽明天皇二十三年紀など、山をムレと訓む例は夥しくある。

この山の語も、これを我國語の中に發見することが出来る。雄略天皇四年紀の大御歌に野磨等能鳴武羅能陀該、「古事記」には美延斯怒能袁牟漏賀多氣とあり。齋明天皇四年紀の大御歌に伊磨紀那屢平武例我禹杯とある鳴武羅、平武例は小山の義で、朝鮮語と同じである。伊磨紀は今來の義で、新來の韓人が其土語で山をムレと呼んだのであるといふ説も立たないではないが、この牟禮の語も九州を始め其分布の區域がかなり廣いから、強ちに三韓の來語とも定めかねる。即ち、豊後國大分郡熊牟禮山、海部郡牟禮、國崎郡於菟牟禮、球珠郡角牟禮、筑後國三井郡高牟禮、薩摩國出水郡木牟禮などはいふまでもなく「倭名抄」周防國佐波郡牟禮、郷、讃岐國三木郡武例、郷、無禮大和國葛上郡牟婁、郷、紀伊國牟婁、郡牟牟婁、郷無目などの名はいづれもこの山の語から出たものと見るべきであらう。

かうした言語考證の中に、期せずしてわれらは一體に通ずる内鮮のすがたを見る。

以上は、單にその一斑の紹介に止まるが、博士の述作「日鮮同祖論」一卷の書において、特に韓國、新羅、熊襲國、高千穗添山峯、橿原宮の各章を參考するならば、地名と神名の相通する多數枚舉に堪えぬそれを發見するであらう。而して、上古における内鮮の兩語が、いかに深い關係にあつたかをおもはせる。假りに、語根語系等における根源一體説が、言語學的に否定されとしても、當代言語の交流における表現一體の現實的な動向と事實は之を否定すべくもないと思ふ。

祭神一體

言語の一體性、表現の一致的な動向において、われらは極めて端的に、そこに風俗習慣等あらゆる文化と生活における一元性を想像することが出来る。それは、極めて自然的な、しかも當然の歸趣でなければならぬが、生活と文化におけるさうした一元性乃至傾向的な一體的事實は、生活文化の思想的・表現形態としての祭神の共通において、また直截に之を把握することが出来る。即ち、わが神社誌を追究してその祭

神に及ぶ時、神籍における多數の内鮮同籍が見られる。以下、簡單にその各説を盡さう。

▲大年御歳神社

御年皇神について「祝詞考」によれば、此の神は「式」に高市郡に御年神社、大歳神社として存するけれども、「古語拾遺」には大年御歳神と引つゞけて有るによつて、本と同神であらうといふ。しかしその神籍からすれば、大年神があつて、その子に御歳神がある。「古事記」に

「故其の大年神。神活須毘神の女、伊怒比賣に娶ひて生ませる子大國御魂神。次に韓神。次に曾富理神。次に白日神。次に聖神。又香用比賣に娶ひて生みませる子大香山戸臣神、次は御年神云々

とあり、大年神が伊怒比賣に生ませた諸の御子は、謂はゞ皆韓土の諸神であらう。即ち韓神といふのは朝鮮の古代千靈氏の祖神か、或は駕洛を體したやうにも思はれる。曾富理神は、高千穂の曾褒里の山のソ、ホリに一致して居るのであるが、金澤博士の説に依れば、曾富理とは新羅の一名徐伐で、曾戸茂梨と同じ語で、此の神が新羅即ちソ、ホリの神であることは疑がないといふ。白日神は、大陸神話の崙磔漬今に位置する神で

あらうが、神、聖神の説は濱名祖光氏に依る神の名も、多分平壤の古稱畢識耶聖りの宮の義に關係がある名ではないか以上白日

大年神は素盞鳴尊の御子として、御子御年神と共に民に樹藝を教へ稼穡に功あるの神として傳へらるゝものであるが、従つて御親神素尊が朝鮮に天降りましたる神であるから、朝鮮と關係の深いことは勿論であらう。大年神の御子奥津比賣神は民に火食を教へたまう竈神として傳へられてゐる。

▲鹿春神社

鹿春神社は、豊前國田川郡香春に在る。「豊前國風土記」に「田原鹿春須、昔者、新羅國神、自渡到來、住此川原、便名曰鹿春神」云々とあるもの即ちそれで、「靖方湖源」に

「按ずるに延喜式神名帳に、田川郡三座、辛國息長大姫大目、命神社、忍骨、命神社、豊比咩、命神社、とあり中略釋日本紀に、忍骨は忍穗根、又忍穗耳に同じとあり、蓋し古傳に、素盞鳴尊、辛國息長大姫大目命を娶り、忍穗耳尊を生み、天照大神之を子養し給ふと云ふ説あり、紀記の所傳と異りと雖、風土記及神名帳と符合せり」云々

と記述される。

▲豊比咩神社

筑後國三井郡に在り。神功皇后の御妹なる姫君一名玉姫を祀る神社である。尙ほ筑前國松浦郡平戸御厨浦の與止神社、肥前與止日女神社、共に神功皇后の御妹姫を祀る。

▲牛頭天王(須賀神社)

昔は俗に天王さまと言へば、スサノヲノミコトのことであつたが、明治維新後、神佛を分け定められてからは、天王さまは須賀神社となつた。「神代口訣」に「牛頭天王は素盞鳴尊なり。或は武塔神と號す」といふもの即ち之である。「備後國風土記」に

「北海の武塔神、南海の龍女に通ず。深津郡須佐能表能神社に在る也。牛頭天王は播磨の廣峰に祀りしを、貞觀十年僧圓如が、山城國八坂郷なる感神院に移し、同十八年藤原基經精舎を營造して祇園と名づく」とあるもの、今の京都の祇園社は是である。此の祇園社の中央に、素盞鳴尊を祀り、西殿に稻田姫、東殿に八王子を祀つて居る。

▲平野神社

京都平野神社は、古來の我國八大氏族平氏、源氏、大江氏、中原氏、清原氏、菅原氏、秋篠氏、高階氏の氏神と崇められ今は官幣大社となつてゐるが、其の主神は韓神である。然し「雍州府志」には平野の社は天満宮の西の野にあつて、祭る所四座、「第一殿を今木の社と名づけ、源氏祖神にして日本武尊なり。第二殿を久渡の社と名づけ、是れ平氏の祖神にして仲哀天皇なり。第三殿を古開の社と名づけ、高階氏の祖神にして仁徳天皇なり。第四殿を比咩の社と名づけ、大江氏の祖神にして天照大神なり」とあり。又「二十二社注式」にも此の通りあつて、只第四の比咩の神を相殿比咩に作り、別に縣神を擧げて、天照大神の子穗日命と註し、中原、清原、菅原、秋篠四姓の氏神と記してある。而して八姓の長者がそれぐ己の氏神と崇めて古來祭儀にあづかつて居る。然しながら、伴信友が爲せる精緻な考證に據れば拾芥抄、神實は韓神である。

「袋草紙」藤原清輔朝臣著によれば、平野の御歌「白壁のみこのみおやの、おほちこそ、平野の神の曾孫なりけり」は、平野の神の詠まれた歌といふことであるが、義譯すれば、光仁天皇の皇子桓武天皇の御母高野氏の祖父乙繼公の父某こそ、平野の神百濟の聖明王の曾孫乙繼公の父某であ

るの意。

伴信友曰く

「平野の歌の意、さばかり物どほくよみなせるは、その祀れる本神の韓人なるを諱むこゝろばへありて、詞を迴遷して、秘説の如くよみなせるにて、其の古しへの一つの文藻にもあらむ。一首の意旨をとりすべていふ時は、平野の神は、乙繼公の父某の曾祖父なりといへるなり。これによりて推考ふるに、其の平野の神は、百濟の純陀太子即位して聖明王と云へるに當れり中略。

聖明王より、乙繼公の父某まで四世なるを、武烈紀七年に百濟王遣シカミ斯我君進調云々、遂有子曰ハウシキミ法師君是倭君之祖也とある年歴のほどをもて推考ふるに、斯我君は聖明王が若き頃の子なるべし。さて斯我君が子法師君すなはち聖明王の曾孫に當りて、歌に平野の神の曾孫なりけれ、といへるに當れり」云々。

即ち前述の四座、今木神は、高野皇太后の生家和氏の祖神にして、和氏の祖が百濟よりイマキといふ地に住んで、其の地に祠を建て遠祖を祀り、やがて今木の神と稱して世々崇め來つたのが本である。久渡神は土師氏始祖で、土師氏は高野皇太后の母方

の家で大江氏と改めた。古開神は、桓武天皇の外曾祖父大江氏である。本姓は土師宿禰。比賣神は桓武天皇の外曾祖母毛受氏とのことである。延暦九年二月の詔に、百濟王等は朕が外戚也。宜しく朕が外祖父高野朝臣、外祖母土師宿禰に、並に正一位を追贈し、土師氏を改めて大枝朝臣と爲すべし」とあるを稽へても、平野の本神は聖明王なることは明かである。

▲新羅明神

新羅明神は、源氏の長者八幡太郎義家の舍弟新羅三郎義光によりて世に聞えて居る。舞本「烏帽子折」に

「大津のしんらへ御まゐりてありて、しんら三郎殿となのらせ給ふとうけ給はる」

とあるによつて、即ち神の所在が近江國大津だとわかる。而して、此の神の素性は「諸神根元記」に「新羅明神、素盞鳴尊也、智證大師勸請」とあり。「本朝神社考」に「新羅明神者、天安二年圓珍師泛船自唐歸、洋中忽有老翁、現船舷曰「我是新羅國之神也」とし、又「神社考詳節」に「新羅明神者、三井寺鎮守也、僧圓珍自唐還時、老翁現于船中曰、我是新羅國之神也、珍歸朝、以爲三井寺鎮守」とあるに照據して、即ち韓神な

ること明かである。

▲高麗神社

高麗神社は、武藏野國高麗郡今の埼玉縣入間郡高麗村にある。高麗王若光を主神にして高麗氏の氏神として祭られて居る。高麗王の武藏野入りは、高句麗滅亡して四十年後、今を距る一千二百年前奈良朝靈龜年間であつて當時の武藏野の原は、人口稀薄、廣漠たる野原であつたのを、高麗王若光が高句麗人一千七百九十九人を率ひて之を開拓したので、高麗明神と崇め祀り、今日に於ては縣社に昇格せしむる機運に達して居るのである。

▲白髭神社

高麗若光は其の髭髪が白かつたので、高麗明神を白髭神と稱へ奉り、高麗明神の分靈を白髭明神の名の下に各所に奉祀して、中古に於て既に二十一社の稱があり、後には更に増加して、入間郡はもとより、入間、秩父から遠く多摩郡にまで及び總數四十餘社に上つて居る。

▲高來神社

若光王が故國を去つて皇國に歸化するや、一路東海を指して、遠江灘より更に東し

て伊豆の海を過ぎ、相模灣に入つて大磯に上陸した。そして大磯村高麗の地に住んで居つたので、若光王が武藏野高麗郡に赴いた後も長く王の徳を慕ひ、中峯の巔に、高來神社、上の宮を齋き、又その麓には、下の宮を建て、高麗王の靈を祀つたのである。今も尙ほ大磯の里人に崇敬され、高來神社の祭典は古式によつて盛大に行はれて居る。

▲比賣許曾神社

大阪市東成區鶴橋町大字小橋にあつて、比賣許曾の神を祀る。此の比賣許曾の神は、赤留比賣の神であつて、新羅の王子天日矛の嫡妻である。是れに關する神話として傳へらるゝところによれば、新羅國に阿具奴摩と云ふ沼があつて、一賤女が其傍に晝寢をしてゐた時、日の耀が虹のやうに其陰上を指し、遂に懷妊して、赤玉を生んだ。一賤夫がその赤玉を乞ひ取つて腰に着けてゐたのを王子日矛が賂として沒收し、床の邊に置いたところ、一美女と化つて、王子は遂にこれを嫡妻としたが、次第に奢りの心生じて常に怒り罵つたため、其の女人は、吾は汝の如き分際の子となるべきものでない。吾れ祖之國に往くべしとて小船に乗つて竊かに遁れ、我國に渡つて灘波に着いて

神となつたと云ふ。

▲楯原神社 大阪市東成區所在

▲赤留比賣神社 大阪市東成區所在

右二社共、比賣許曾の神を祀る。

▲伊太祇曾神社

紀伊ノ國名草郡にあつて、素盞鳴尊の御子五十猛神を祀るものである。

▲辛國神社

大賀良氏の氏神であつて、氏は新羅族と稱するも、任那の大加羅の氏族で、河内に住み、志紀郡に此の社を有したのである。

▲飛鳥田神社

越中の飛鳥部氏、河内の飛鳥氏、山城の飛鳥田氏の祖神として皆百濟氏族である。

▲飛鳥戸神社

大阪府南河成郡駒ヶ谷村八幡神社にして、百濟王伎王飛鳥戸造を祀る。

▲百濟王神社

大阪府北河内郡郡山田村字百濟野に所在して、百濟王進雄命を主神に、阿佐王及び其の子孫を祀る。

▲阿自岐神社

大和近江安藝に阿直氏、山城に安勅城氏があつて皆百濟の氏族である。「神名式」の阿自岐神社は、近江國の阿直氏の神である。

▲許麻神社

大阪府中河成郡久寶寺村久寶寺に所在して、高麗國大武神王の後と稱し、高麗氏族の氏神である。

▲大狛神社

大阪府中河成郡臨上村大字巨麻に所在して大狛連の祖神である。「神名帳」に河内の大縣郡に大狛神社ありとある。

▲絲井神社

大和國城下郡に所在して、新羅族絲井氏の社である。

▲宇努神社

河内國若江郡に所在して、新羅族宇努氏の氏神を祀る。

▲御出石神社

兵庫縣出石郡室埴村大字相野村に所在して天日矛の神を祀る。

▲諸杉神社

兵庫縣出石郡出石町大字内町に所在して、多遲摩母呂須玖天日矛の子の神を祀る。

▲美麻奈比古神社

石川縣鳳至郡穴水町大字川島に所在して美麻奈比古の神を祀る。

▲鳳至比古神社

石川縣鳳至郡内に所在し、任那系の諸神を祀る。

▲敬満神社

静岡縣榛原郡初倉村大字阪本に所在して、小彥名命を祀る。

▲玉山神社

鹿児島縣日置郡下伊集院村大字苗代川に所在して、檀君及瓊々杵尊を祀る。

右の外に、韓國伊太氏神社、小彥名神社、息長大姫大目命神社、忍骨命神社、須賀

神社、沙々貴神社、耳井神社、信靈貴彦神社、松尾神社等、神代に於いての諸神を祀る神社だけでも夥しく、且つ氏神として祀る神社も到る所に多い。且つ内鮮の主神合祀の神社も可なり多いが、以上各説の神社祭神に見るに、その悉くが祖宗神としての人格神であり、そこに、この章第一節に説いた民族交流の現實的反影を示す。つまり、兩者における民族的な接衝が、いかに一体的な社會交和の中になされたかの旁證となすに足るであらう。蓋し、とにかく祭神として、それが信仰仰慕の主體になつたといふところに、深密な思想的幽契を思はせる。さうした一體の事實と意識の前提なしには、こうした彼我一體の神社構成、祭神規定は、絶対に不可能であらうことを思はせるからである。われ／＼は崔南善氏のいはゆる「不成文化論」において次の如き意味深長な一齣を読むことができる。

「日本は朝鮮に次いで一土一民の繼承的古國であるだけ宗教文化、不成文化を通しての兩國の類縁状態は特に深さを見る。今一々それを羅列するの暇を有しないが、祭禮の一隅を擧げてその全面を偲ぶこととしよう。朝鮮の古語にて祭禮を Mazi といふは、日本のマツリと同源關係に立つを想はせるものであり、日本の祭禮に於け

不成文化論

る、神輿、山車、講中の俗は新羅の龍華香徒三國史記卷四十一 高麗の萬佛香徒 東國通鑑卷六十九 高麗史卷六十九 仲冬八關儀參照、等六年及卷之二十二 仁宗九年參照の香徒の風と符節を合すが如きがあり、且つ日本の祭禮が朝鮮の大祭典たる八關儀と儀禮の種目と御祭り氣分とを同じうし、古神事に淵源したらしく思はれる現朝鮮の상수 Saugdu と形體裝飾を同じうすることなどは兩地の祭祀的同源を徴するに見逃すべからざる事柄である。

朝鮮に於ける古神道は、特に李朝以來その宗教的統一を失ひたるも、その古儀行事は多く原義を忘れられしまゝ、又變轉墮落を重ねつゝ、民俗的に別種の生命を保持するやうになつた。新羅における原花、高麗における仙家なる教團が解體されてその眷族なる仙官は口寄せ寄人となり、花郎は語り物師となり、속대장이는輕業師となり상수는歌比丘尼となる等、凡て社會的賤民劣業に墮してしまつた。而して、その奉仕團體なる香徒が、經濟的一面は契講となり、一種の互助組合若しくは細民金融機關となりたるは宜しとして、その奉仕的一面が名號と共に喪墾擔ぎに受繼がれて상수連中香徒といへば、殆んど人非人の群とされるに至りたるは實に心外といへばいへることである。今香徒の轉化は契の起原も상수의名義も忘れられてゐるが、契

はもと宗教的行事を中心とする一種の部落議會であつた三國遺事卷第一新羅始祖、卷第二新羅國記參照。これが後に、國教の成立と共に教團の中心となり、進んで國民皆教徒の古義より宗教中心の一種の自治團體の形を爲し、村里毎に若しくは職業毎に一契を有して共同生活上一切の世話をするやうになつたが、これがいはゆる契の源委で、契員同士を香徒と呼ぶのであつた。いはゞ香燈香火を共にする連中とでもいつたのだらう。而してその内には神地參詣の團體もあり、神事奉仕の部面もあり隨つてその費用の積立てと利殖の方法も出來、轉々して今日見るが如き無盡講賴母子講の原始ともなり、又單なる組合の義にもいへる様になつた。今の香徒軍——喪輿擔ぎは羅麗代における神輿擔ぎより來り、香徒都家——喪儀屋は朝鮮中葉迄も町村自治團の役場見たやうなものであつた。

「然しこゝには細かい穿鑿を止めて、祭禮に於ける最も必須事とされる祓禊——禊に就いて考察を試みれば、祓は古代神道において罪と穢とを一つにする觀念から、事前には預備的に、事後には追贖的に、身心を潔齋す淨むることによりて神に近づくやう、又遠ざかれないやうにする宗教的行事であるが、ハラヒと稱へる語義を究むる

によりてその原始的意義を尋ねべきである。日本における古來の解釋によれば、ハラヒ、ハラへはアラヒと同義にて洗ひ淨むる意ありとするが、こは行事の形相からいつて穿き違ひとまではいへないにしても、吾輩の見る所では、眞を穿つた解釋とは思はれぬのである。

朝鮮に於ける神事は、大雜把にテ Kut 풀이 Noi 풀이 Puri の三種に分けられるが、その中でも Puri は三者をひつくるめる總稱として用ひらるゝものと思はれる。풀이 Puri は逐煞のことを煞 풀이、驅邪のことを 𪛗 풀이 といひ、通常語にも撥悶のことを火 풀이、報冤のことを憤 풀이 といふ等に照して見て、追ひやる、拂ひ退ける意なるが知れ、又一方には邪神惡鬼に供物を捧ぐることを 놀이 풀이 Puri-mök-i 即ち Puri して食べさせるといふこともあるによりて、Puri に供へる、祭るの意のあるも推せられるが、その最も本義とするは、トク、ホドク、チラス、ノクの意にて結滯を融解さす、憤怒を和らぐ、憎惡を解かす、宗教的にいつて穢を去つて淨さに就き、罪を消して善に返り、禍厄を直して吉祥に近づき、惡精より逃れて善靈にかしづく等が、もとく解クといふ一原義より派生し來たものに外ならぬのである。

日本神道に於けるハラヒなるものも、もと斯くの如き性質のもので、自らの力にてアラヒサルことでもなく、又淨くなりをはるわけでもなく、禊などの方法にて身を淨むるは神へのハラヒの前提にて、その實體ではなきこと朝鮮のPuiにて知らるゝが如きものなるを思はせる。ツマリ日本のハラヒの本義を知るには、朝鮮のPuiに徴して可なるべく、ハラヒといふ稱それが既にPuiの和語形に外ならぬのは音韻上明白なことである。

Puiとハラヒとの同源關係を示してくれる一左券としてハラヒグシの兩國同形を擧げ得る。高麗史卷四十恭愍王十三年夏四月の

辛丑燃燈、觀呼旗戲於殿庭、賜布、國俗以四月八日、是釋迦生日、家々燃燈、前期數日、羣童剪紙注竿爲旗、周呼城中街里、求米布爲其費、謂之呼旗

とあると、慵齋叢話卷之二歳時名日所擧之事に

四月八日燃燈、俗言釋迦如來誕生辰也、春時兒童剪紙爲旗、剝魚皮爲鼓、爭聚爲群、巡閭巷、乞燃燈之具、名曰呼旗、至是日、家々樹竿懸燈……

とあるの呼旗は、吏道讀みに書くPuiと讀むべきもので、新羅の弗矩内が高麗に

て八關會の名を冒す様になりたる如く、古神道ハラヘグシの佛教行事に攝收轉化されたものたるや疑ひなきことである。こゝにはゆる剪紙爲旗はハラヘグシ、祓申の「細キ木ニ紙ヲ細ク切リテ付」け言海たるものであり、前に出して清會典の「五色綾各九尺、剪爲縷、三色朝鮮貢紙八十張打爲錢」であり、寧古塔志所記の「竿頭繫布片」と相通するものである。かくハラヒを通して個人的消極的原始的の神事において、朝鮮と日本とが名實共に緊密なる一致を示し、滿洲またその類縁地なるを彷彿たらしむるも、その契機は朝鮮の言ににあるのである。「不咸文化論」

第十七引用

祭祀における、かくの如き一致の中に、われらは更に、深い内鮮の關係を知ることが出來ると共に、そこに同時に、それが由來するところの神道思想の上の一體義を把握出來るであらう。崔南善氏がいふ、いはゆる「不咸文化」とは、支那文化に對立しそれを除外しての日本朝鮮を中心を含む東方圈文化の一つの古態をいふのであつて、歴史の中に系統的な面目を埋没して、バラバラに傳へられてゐるものであり、その斷片は、いはゆるシャーマニズムの名の下に、その中に含まれて原始信仰の單なる一材料とし、わづかに學者の顧盼を得るに過ぎなかつたものである。その中心思想は Park

(Parkhan 神山の義)であるが、東方文化の頂點とされる支那のそれさへもが、實は「不咸文化」を以て多分の内容とすることが究明され主張されてゐるものである。不咸文化は、その特質として神山神邑を有し、それには概ね Parkhan, Tengri 類縁の名稱が附せられた。この名稱の傳播を跡づけることによつて、その文化圏を明らかにし得るのであるが、崔南善氏によれば、その起原は遠く黒海周辺の地にあるらしく、しかしその尤も典型的な傳統の一體民族地として、朝鮮及び日本、並びに東支那の一部が擧げられる。原始時代から古代へかけての文化形態は、特に宗教を契機とし信仰を母胎とする意味において、この不咸信仰を母胎としての一の文化圏が、内鮮を一體として成り立つてゐたことを思はせるのであるが、私はこゝで、更にこの不咸文化——東亞文化の秘鍵として把握されるところの檀君について語らねばならぬ。蓋し、朝鮮の開國は、この檀君なる神人の天降にはじまるとされて、朝鮮建國神話に重要な位置を保有するからである。

檀君とは、古朝鮮傳承の建國神話において、いはゆる三神の一神として語られるもので、三神とは、桓因、桓雄、桓儉の名において呼ばれる。この桓儉が即ち檀君であるが、檀君は上元甲子十月三日に人化し、天符三印を持して太白山即ち白頭山の檀木の下に天降りした。かくして、神教をうけて百民を諭すといふ。従つて、德化全道に惠澤して、その下に隨順歸伏するもの夥しく、國人は遂にこの神人を推戴して國王となし、こゝに始めて檀君と呼び國號を檀と稱した。即ち開國の祖、檀君である。後ち檀君は西岬河伯女を娶つて太子扶婁を生んだ。その治蹟としては、彭虞に命じて山川を治めしめ、神誌をして書契を司らしめ、高矢をして田事を掌らしめた。後ち國都を平壤に移して國號を朝鮮と改むといふ。これ「神檀實記」の傳ふところであるが、尙ほ「三國遺事」によれば、熊が神雄に祈願、化して人と爲り女身となる。桓雄これと假りに化婚して檀君王儉を生むと。建國祖神の傳説として、それはどういふ形にゐてせよ、とにかくそのまゝ生れたものであることが、こゝで特に注意されねばならぬ。「古今記」以來の通念として、三神の一たる桓因は天として把握され、桓雄は神、桓儉は神人として解される。而して、神上帝としての桓雄が天としての桓因との幽契

によつてその子桓、儉を生むの経緯は、天が生成の根元として把握するゝに對して神は生成の原理となる。この根元的なものにこの原理が契機を成して始めて生成を現實にする。天は、キリスト教におけるが如き超越的な實在ではなく、創造造物の主でもなく、現實の大自然、大宇宙を媒介としての根元的な存在である。神は、この大自然生成の相を媒介概念としての、成生の原理、原理的な力である。その二つの作用的な契機の中に、桓、儉は神人として懷孕され誕生する。それが、「教名」にいはゆる「神聖之化」として白頭山上檀木の下に出現する國家創祖の大祖檀君である。かくして、古朝鮮もまた神聖の化による神國としての意識と理想において、その國家を開創する。「東事類考」に「わが東倭教を誤り指して仙教と爲す、然れども實は檀君の設教也」とあるが如く、檀君神人として神慮をこゝに描くと雖、それは國家構成の上に神教を原理とするといふ意味においての彼の設教なのであり、即ち國家原理なのであつて、必らずしも、一の神仙譚としての非現實性の上に把握されたものではないといふ、そこに特色を認めねばならぬ。私はこゝで、兎角史上に問題視される檀君の意義について、尤も簡明に、再び「不咸文化論」を披いて崔南善氏の主張に開き、そこに深い示

檀
君

唆と理解を汲まうと思ふ。文によれば、元來、百濟はその國名からして「Päikの都」を意味して居り、高句麗と夫餘とは共に夫婁の系統を引いたこととなつて居り、三韓共に天降と日生との建國神話を有し、韓には天神を奉齋する別邑の設けもあり畿には目立つほどの山嶽崇拜が行はれて、古朝鮮には、太伯山即ち白頭山を舞臺とする檀君の建國神話が傳へられてゐるのであるが、それらは、一つとして Päik 乃至 Taigär (Tengri) を以て國祖若しくは人文の濫觴としないものはない。そして、その國祖傳說にはおしなべて太陽とその抽象化された天と、人格化された Päikän-Harnöi が見えつ隠れつ根幹を爲してゐることを見るので、割合に小い部族でも、その部族の起源は Päikän にかけて説くのが常態であつて、それは随分後世の建國説話にもあらはれる。例へば高麗王氏の祖先は、虎景 史道讀みに Pomkyone なりとするが如きそれであつて、是らの中、檀、又は天と出て來るのは Tengri 白又は日は Päik にあたる寫音もしくは譯字だといふ。而して、今までの傳承における朝鮮の古代史なるものは、要するに、かくの如き宗教的神話、神話的聖典が歴史の形式に傳へられたもので、部族と時代とによりその名句の字面が如何に變らうとも、その本體は或る一の根本話型に要約さるべき性質

のものなのである。そうして、その根本精神、依據原理となつてゐるものは、太陽を事實方面とする Tengri もしくは Park である。前者の代表をなすのが古朝鮮の高祖とせらるゝ檀君であり、後者の原型をなすのが檀君の子にして夫餘の肇王とせらるゝ夫婁で、東明説話の鷄子も朱蒙説話の天帝も、赫居世説話の白馬紫卵も、閼智説話の金城白鷄も、駕洛説話の朱日青裔も、首露説話の紫綬金卵も、均しく檀君または夫婁の變形たらんのみである。かくして、崔氏の見るところでは、

「檀君とは、Tengri 或はその類語の寫音で、もと天を意味する言葉から、轉じて天を代表とする君師の稱呼となつた語に外ならぬのである。君は政治的師は宗教的の長をいふが原始意義においては兩者一體 言語學的に、かの同一の文化圏に屬すと思はれる蒙古語の Tenger が天と共に巫拜天を意味すること、人類學的に、君主と巫祝がおほむね一源一體であること

と、朝鮮の古傳承に、君主と巫祝が矢張り同一の語で呼ばれたとすることを合せ考ふれば、たとえ傳説としても、檀君なるものゝ如何に確たる根據の上に立つてゐるかゞ知られやう。況や支那の載藉にも、三韓の古俗を記して、國邑各立一人、主祭天神、名之天君とあり、朝鮮の現代語にも、尙ほ巫を Tangur, Tangur-ai 稱呼す

る地方あり、先にも記したるが如く、その變形たる Taigam が、今日までも朝鮮の民間信仰における最上神格をなし居るにおいてをやである。また宗教的な理由から來たと思はるゝが、君長の稱に天を冠せて呼ぶは、この文化圏内に於ける特色の一で、漢書に見えたる匈奴の撐犁孤屠天子より東明説話の橐離、朱蒙説話の天帝、北燕の天王、日本の天津日嗣ぎ等の觀念及事實に照して、檀君神話に歴史的反映の有るも動かされない事實である。是等の證迹を無視して檀君を後世の捏造に歸し、或は樹木崇拜の一古傳なりとし、而して抹殺の理由を支那の文獻にその傳へなきに置かうとする等實に學的不誠實なりとしなければならぬ。縱し檀君が歴史的に一臆體とするも、その宗教的方面における古き根據は、何にも動けるものでないであらう」云々前掲書第十一建國説話上の天と檀君

檀君説話における右のやうな解釋において、同氏は、之をいはゆる不成文化の中心意義を示すものとし、かくの如きの世界が、新羅史にいふ弗矩内Parkun日本にいふ神代に當るとする。後ちに新羅始祖として語られる赫居世の如きも、單に個人の名ではなく、檀君説話にいふ「光明理世」、日本神話における「光華明彩六合に照徹する」有

様をいつたもので、そのやうに、國家文物等すべての人文的出發を神にかけていひ、その神が、即ち抽象的には天、具象的には日で、高天原をその本國とするといふ意味を傳へやうとするのが、朝鮮日本並びに同文化圏内に屬する國、いはゆる不咸文化圏においての一つの性格だといふのであつて、従つて、そこに建國神話の一致相があると主張するのだ。當然の歸結的な解釋として、氏族の起原や産業分化等に屬する若干特殊の除外を離れて考へるなら、そこに一體的な歴史的様相が把握される筈だといふ。この見地は、根本的に私も亦た同意措く能はざるものである。

かうした傳説と現實の中に、われ／＼は「神人」檀君の意義と性格が、如何なる形で把握されてゐるかを極めて直截に理解できるとおもふ。それが、朝鮮祖神のすがたである。而して、その端的な姿の中に、民族神としての全的意義をはつきり擲む。

すべて、民族的英雄聖者傑人を、神格化する傳説の中に傳へるのは世界の歴史に一般であるが、しかしその「神格化」の形式と内容の中に、固有の神學、民族意識の特性を髣髴表現する。その特性を、われらは更らに、新羅の始祖朴赫居世のそれに回顧することができらる。

朴赫居世は新羅の始祖として、やはり天降つた神人である。即ち、辰韓の地に、李、鄭、孫、崔、裴、薛等の六氏祖が闕門岸上に會合して語るに、我々には上に君主を戴いて居ない。有徳の仁を求めて君主に推戴し、立國設都すべきではないかと。しかるに、高墟村長蘇伐公が、楊山の麓蘿井林間に異氣電光の如く地に垂るゝをみとめて、馳せ參じたところ、一つの卵があつたので、割つてみると、中に形儀端美を極むる嬰兒があつて、その身は光彩をはなつ。卒かに鳥獸舞ひ天地震動し日月清明に輝きわたつた。取つて養ふに、その童男英特夙成すること常でないので、「六部人以其生神異推尊之至立爲君焉」とし、都を今の慶州に奠め、王號を居西干と稱し、賀して曰く、「今天子己降」と。

次には、高勾麗の始祖朱蒙に係るそれがある。朱蒙即ち東明聖王で、その子溫祚は百濟の始祖である。これに先ち、扶餘王鮮夫婁は山川祈禱により解淵の石の下で、天寶の令胤を得、脊育し、金色蛙形なるによつて、金蛙と名づけた。鮮夫婁薨するに及んで金蛙が即位する。時に太白山の南方優渤水寧邊で、柳花と云ふ河伯之女に逢つた。「云々柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言、夫帝解慕漱(金蛙)。誘我於能神

山下鴨綠邊室中。私之而往不返。父母責我無媒而從人。遂謫居于此。金蛙異之。幽閉於室中。爲日光所照。引身避之。日影又逐而照之。因而有孕。生一卵。云々有「一兒破殼而出」三國史記と。かくして卵から生れた兒が即ち朱蒙である。卵の時に、金蛙はこれを犬に與ふるも食せず、路上に棄つれば牛馬これを避け、野に棄つれば鳥獸これを覆ひ、長ずるに及んで弓矢を自作して、よく射、技能秀拔、そこで「其長子帶素金蛙之長男言於王曰、朱蒙非人所生、其爲人也勇、若不早圖恐有後患」と。しかし神才烈々、遂に高勾麗の始祖となつた。

次いで語られるそれは、伽耶國伽洛の始祖首露である。これも黄金卵から生れた神人として傳へられる。卵化して童子となるや、その容貌甚だ貴偉にして、庶民これに拜顔するや、偉勢に恐懼して、拜賀百拜、畏縮せざるを得なかつたといふ。長じて十餘歳、すでに長軀九尺、殷の天乙に及び、顔は漢の高祖に、兩眼は虞の舜帝に髣髴す。そこで萬民推薦して君となし、國稱を大駕洛加耶と稱した。尙その卵化するまでの經緯を述べれば、はじめ、この地に國號及び君臣の稱なく、九人の酋長と七萬五千人の百姓が、田地を耕作して生活してゐた。しかるに、或る時、北龜旨と云ふとこ

ろに、殊常聲氣あつて、衆民を呼喚するので、衆、聲に應じて集り往けば、杳として形も陰もなく、而して只聲あり、云く「人はゐるか」と。酋長等答へて言ふ、「在り」。又言ふ、「此所は何處ぞ」。答へて言ふ、「此所は龜旨也」又言ふ、「此處は皇天我に命ぜし地也」と。そこで皆んなは神祖期待の中に歡喜蹈舞して待つと、果して言の如く一條の繩が天から下つて、その端の導くところに、紅幅裏金合子があつた。これを開くに、中に黄金の卵があつたのだといふ。

尙ほこの朱蒙については、夢登于天の傳説として「東事類考」に次の如く物語られる——扶餘の相臣阿蘭弗が、夢に天に登つた。しかるに、天帝が云く、吾が子孫、まさに爾舊郡に國を建つるあらむと。王鮮慕漱、果して柳花に遇ひて朱蒙を生み、高勾麗の始祖となる、云々。

以上縷述の資料から直接にわれらが受取るものは何であるか。神仙譚的な後來の思想の中に、外教からの影響をよもはせるやうな形の超越的な宗教的片影が見えない

れてゐるその一の特長が、まづ注意されねばならぬ。傳説の神は、つねに、人間が神になつたか、或は神が人間になつたかのいづれかにおいて把握する、「人間神」である。さうした意味で、傑人は必らず神格化される。この事は、嚴密な宗教的純粹性において把握された神ではないことを理解させる。つまりは、それらのすべてが、民族神としての意識の上に、祖先崇拜教に見るやうな、同型同質の觀念形態を見る。こゝにその現實性——現實的な性格における皇國のそれと思想的に一元的であることが了解されないだらうか。こゝですべてのいはゆる「國祖」は、みんな神格化されて「神人」として把握されてゐるが、しかし、何れにしてもそれは悉く、人間神として考へられ、人間として把握されてゐる。朝鮮の國祖檀君において、それは尤も代表的に、典型的な形で示されてゐる。同時に、それが悉く「國祖」「建國の始祖」として語られてゐるところに特色をもつ。彼らは、天地創造の神は持たない。天として語られてゐる桓因でさへもが、超越的な創造神ではない。それはすでに前に指摘説明したが、かくして、こゝでも、神は生れるものである。生れるものとしての表象が「卵生の神人」によつて語られる。日本の神話は、いはゆる創造神話、自然神話をもたないといはれ

朝鮮建國
神話の性
格

ではないにも拘らず、その本來の姿において、神がつねに人間との連續において語られてゐる。そして端的に劈頭まづ「建國神話」に出發する。そのやうに、こゝでも、神話らしい神話の體形をなすことなく、極めて素朴單純なそれの中に、まづ建國神話が語られ、それらの展開としての國家が主題として、その隨神の理想が規定要求される。國家は、神の道の展開乃至發揮として考へられるが故に、従つて、その始祖主權者は、必然的につねに「神人」でなければならぬこととなる。國家とは、隨神の道の體系として方法としての現實的な表現形態だからである。少くとも、さうした根本的な要請の中に把握される。かうした國民思想、民族意識の中に、われらは端的に、直截に、いはゆる内鮮一體の歴史的な様相と本質的な性格を見ないだらうか。あらゆる原始民族が、各己にその神話を持つてゐる。そして、その構成の内容において、互に相似する一の普遍性がある。故に、この相似を以て直に民族の族籍關係を即斷することはできない。しかしより多く、その民族親近性は、神話構成の性格にあらはれる。内鮮神話の構成における本質的な一の形、神もまた生るゝものとするの本質的な共通性の上に、相通じた民族意識の一元性が把握されないだらうか。

かくして、いはゆる「不咸信仰」に一致を示す内鮮の人文的な一體の様相を、われらはこゝに明確に把握するのであるが、その尤も純粹な意義が何千年かの歴史をつらぬいて、尙ほわが日本にのみ、その人文的な理想として傳へられてゐること、それは「光明理世」のそのまゝの意義をいはゆる皇道の精神に照耀して、その民族的生活、國家的形態と本質の上に「神ながらの國」としての大本義を堅持してゐるその點に、皇國の、世にもめでたき意義を認めると共に、そこに重大なる内鮮一體の契機を捉むのである。いふまでもなく、日本への一體において、即ち朝鮮が、さうした朝鮮本來の姿に立ち復りうることは明々白々の結論であるが、同時に、光明理世の民族的理想を進んでわれらが八紘一宇の使命として、——世界への光被に一體行進の歩調を合せ、る所以でもあるからである。

神代において素尊を始め奉り、五十猛命、少名毘古那神、稻飯命、または天の日矛

族等の朝鮮民族諸神が、内鮮を通じて來往せられた以來の歴史的事情において、或は言語、文化一般にわたつての右の如き一致一體の事實に基いて、内鮮の一域的な古代様相、民族一元の生活を直截に瞭解できるのであるが、さうした内鮮の交渉は、少くとも桓武朝頃までは、極めて親密な形で、玄海灘の荒波を完全に克服した形があつた。航海技術の極めて未發達な不便と困難を一體何が克服したのであるかは最早や徒説の必要がないかの如くである。ところで、われ／＼は、その觀察の視野を變へて、更に政治的な角度からの歴史地理的内鮮關係に一瞥したいとおもふ。しかし、これについては殆んど資料がない。内鮮の歴史にあらはれた限りの時代範圍では、兩國はもはや各々に獨立した政治關係において、朝鮮半島と日本列島とは必ずしも一域ではないのである。現存の韓史自身が、高麗、新羅、百濟三國以下に明確であつて、それ以前についてははつきりしてゐない。桓武朝で、日韓同種であることの史書を悉く焼かれたといふ。しかし、桓武朝迄の交和的な史實に照し、併せて叙上各節に見る、存外に緊密なりし一體の事實に考へて見るだけでも、遠くそれに遡つて、内鮮が完全に一域であつた昔を想像できる。民族學的にいつて、内地と朝鮮の基幹種族は、一體的にモン

ゴリアン中の最も優秀なツングース系だといはれてゐる。相互に幾つかの血を混血しながら、しかしその混血の主流は、内鮮を一體に、即ちツングースの血であるとされてゐる。さうした同祖同根の一體民族が、同一の文化を通じて綴語に造語に思想に風俗に慣習に、あらゆる生活態型において、共に相通するものがあつたとして、それは凡そ何らの不思議でもないが、われらはこれら根元的な事實から想像して、半島と列島とを一域とする一體民族の社會、全一政治社會を肯定できないだらうか。約千二百年前頃からの内鮮關係は、漸くにしてその親密な交渉性を失つてしまひ、疎遠と乖離の裡に相互に分離獨立してしまつた。その事情については次章に考へるとして、とにかくそれを更に遠く本來の姿に回想すれば、地域的——從つて政治的にも一體ではなかつたかといふことに肯定的な推斷が許されるやうにもふ。私は、その人類學考古學的成果と業績に大に期待するものであるが、こゝでは、濱名寛祐氏がその著「日韓正宗溯源」に、世にも得難かるべき稀觀の資料として示したところの「神頌叙傳」を原文のまゝに摘抄して、「古韓の王統日韓の一域を證す」る經緯を參考したいとおもふ。

「神頌叙傳」原文

「蓋、辰者古國、上代悠遠也。傳曰、神祖之後有辰沍謨率氏。本與東表阿斯牟須氏爲一。辰沍謨率氏有子。伯之裔爲日馬辰沍氏、叔之裔爲干靈辰沍氏。干靈岐爲干來二千、隔海而望。干靈又分爲高令云。

然有今不可得攷焉。其最顯者爲安冕辰沍氏本出東表牟須氏與殷爲姻。讓國於賁彌辰沍氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄、其先入朔巫達、擊退之。淮委氏沃委氏竝列藩嶺東爲辰守郭。潘耶又觀兵亞府閭以掣漢」

同 譯 文

「蓋し辰は古國、上代悠遠なり。傳に曰く、神祖の後に辰沍謨率氏あり。本と東表の阿斯牟須氏と一たり。辰沍謨率氏子あり。伯の裔を日馬辰沍氏と爲し伯は叔の裔也、叔の裔を干靈辰沍氏と爲す沃は干靈岐也、干靈岐れて干來と爲り、二千海を隔て、望む韓半島の干と山東半島の干と、海を隔て聲息相通ぜるを云ふ。干來又分れて高令と爲ると云ふ。然れども今得て攷ふ可からざるものあり。其最も顯かなる安冕辰沍氏と爲す。本と東表の牟須氏に出で、殷と姻たり。國を賁彌辰沍氏に讓る。賁彌氏立つて未だ日あらず、漢寇方に薄り、其の先、朔巫達に入る。撃つて之を退く。淮委氏沃委氏族沃委氏族竝に藩を嶺東に列ね、辰の爲に郭を

守る。潘耶^{パンヤ}兵を^{ちやう}府閭^{しやう}に觀し、以つて漢を掣す」

濱名氏これをさらに考證して次の如くいふ。

「本章は日韓の最古が一にして二ならざることを判じ得られる實に珍らしい奇特のものである。韓は古國なるべく、其の上代は悠遠なるべしとは豫てさう思ふ所であつたが、それを示すべき何の文獻もなかつたところ、今本章に見れば上代に辰^{しん}伝^{でん}謨^も率^{すう}氏^しといふのがあつて東表の阿斯^{あす}牟^む須^す氏^しと本と一であることが知れた。東表の阿斯牟須氏は前に顯^{けん}于^よ東^{とう}冥^{めい}者^{しや}爲^な阿斯牟須氏と見えてゐて、我が神話の神^{かみ}産^{うぶ}靈^{りやう}・高^{たか}産^{うぶ}靈^{りやう}のムス^{むす}がそれであらうとは、其の章に考證し置いた所なるが、今また本章の謨^も率^{すう}・牟^む須^すと相待つて、俱にそれが日韓の共同姓稱なりと知れ、日韓が此の共同姓稱の下に嘗て一域の同族なりしを確信し得るに至つた。我が國學の先覺は、出雲神話に由つて日韓の上古一域なりしを推想せしが、韓^{かん}郷^{きやう}にも亦古昔同一傳説の存在して其の祖を語り居たことが分つた」云々。

と、而して同氏は更らに辰の五王統に就いて次の如く詳述する。

「本章に従へば、韓には謨^も率^{すう}氏^し・日^{にち}馬^ま氏^し・干^{かん}靈^{りやう}・安^{あん}曇^{どん}氏^し・貫^{くわん}彌^み氏^しの五王統ありしを

知る。高麗、百濟、新羅は其の最後王統の末に起つた分列對峙である。現存韓史は只この三國以下の事のみを記したので、其の以前のことは全然載せて居らぬ。幸に本頌叙に賴り、右五王統のあつたことが分りはしたが、其の最古の謨^も率^{すう}氏^しといふのは、韓土に於ける如何なる地位に立つて如何なる傳説の源泉を成せるものか知るに由なきを遺憾とす。日馬氏も又そうであるが、其の日馬^{にちま}は高^{たか}天^{てん}使^し鷄^けに起因する庭名蓋^{こまや}瑪^ま耶^やに泉源を有する名なるべしとは推想される。蓋しこれには必らず幾多の話が添ふてゐたことであらう。その高^{たか}天^{てん}使^し鷄^けが日^{にち}孫^{そん}を載せて來たのは東海からであれば、日^{にち}馬^ま氏^してう姓稱の上にも日韓の上古が一域であつたことを證明して居るものとされやう。されば日韓の正宗を尋ねて其源に溯れば日^{にち}馬^ま氏^しあり、謨^も率^{すう}氏^しあつて、祖を同じうし神話を同じうして居た或る時代に必然到達すべきである。日^{にち}馬^ま氏^しが幾代續いたか考へやうがないが、韓國を後世長くコ^こマ^まの稱の遺つてゐるのに見て更によくそれが判る。

日^{にち}馬^ま氏^しを續^{つづ}い^だ干^{かん}靈^{りやう}氏^しは、神話の辰^{しん}伝^{でん}固^こ朗^{らう}・韃^た珂^か洛^{らく}・河^か洛^{らく}等に淵源する名なるべく、而してこの干^{かん}靈^{りやう}氏族の岐れた者が支那山東省の古代民族干^{かん}來^{らい}なりとは、嘗て何

人の推想にも浮ばぬ珍傳なるが、事實は必らずさうであらうと思ふ。又この山東の干來氏から直隸の高令氏を生じ、高令氏の領土内に高夷・孤竹・令支等種々の國名を生じたのも亦必らずさうあらうと信ずる。但し、さう信ずるのは、古韓の上代にさういふ持説のあつたことを信ずるのである。之を日孫西征して支那の古五原の關いたといふ神話に考へると、神話とこの持説の間に、共通意氣の經緯されてゐたことが想はれる。而して韓をカラと呼び傳へたるは其の古の干靈氏を偲ぶ民の心の遺芳が、水名山名にまで薰を留めたものと思ふ。

干靈氏を繼げる安冕氏は、日孫の名阿珉美に淵源して居るのであらう、即ち安冕は阿珉と同義で天の義なるべく、其の家系は日馬、干靈二氏にも優つて最も古き源泉を神話に有してゐたとされる。我が忌師氏大伴氏等の祖が又神話の中にアメを稱したるに見ればおのづから其の揆の一なるが知れるではないか。加ふるに安冕氏を以て本と東表の牟須氏に出づと爲せるに至つては、我が神話の産靈神が、韓の安冕氏の祖神であつて、亦我が國の祖神でもあり、日韓一域にして共に祖を同ふする所以のものが、此處にも證明される次第である。中略安冕氏より國を譲り受けた賁彌氏も

矢張り辰沅姓であつて、最古よりの一貫汎稱を有する者なれば、其の國讓は支那の革命と同じからず、神統一系の上の禪讓であつたらう。我國史には光を弟知古に譲つたものとしてゐる。父母を同じうする連枝の兄弟であつたか否やは分らねど、氏族關係が兄弟の親しきに在つたことは推想される」云々。

尙ほ「古事記」天孫降臨の條に回想する

「故、其の天忍日命、天津久米命、於是笠沙之御前に眞來通りて詔りたまはく、此處は韓國に向ひて朝日の直射す國、夕日の日照る國なり。故、此地ぞ甚吉き地と詔りたまひて……」云々

われらはこゝに、讀みやうによつては切實な「望郷」の心をさへ感じないだらうか。とにかく文飾に見ても、その深い地域的な關係が想望される。

以上列記するいくつかの民族的な側面において、われらはそこに、期せずして内鮮

内鮮は完
てある一體

一體の本質を見た。すべてこれらは、その歴史的な回想において語られたが、しかし少くとも、歴史的には、われら内鮮を一體として、一元的な文化と生活の中にあり、根本的に一體民族としての現実の中にあつたといふことが理解される。同文同種をうたはれつゝ、じつは現實に同體民族ではないし、過去においてもさうではなかつたといふ關係においての日支の如き淺い關係ではない——極めて密接な族籍の關係にある内鮮一體の現實を、少くとも歴史と民族的現實の上に把握することができ。勿論、現在においては、立派に内鮮は事實上の一體を爲してゐるが、その純粹な意義——單なる政治的意義ではない民族的意義についてはこれを後章に説くとして、こゝでは兩者の民族性、即ち、傳統の中にある朝鮮人と内地人の現實的な民情民性について觀察する。現在兩者のそれについて其の間果していかなる異同を孕んでゐるか。民情民性における本質的な一元の性格が、果してそこに觀察出来るか、どうか。

私は、この一點に遺憾ながら悲觀的に停頓せざるを得ない。極く大まかに云ふなら、内鮮兩民族は、性格的に尤も親和性を有する。そこに、或る本質的な一致性を肯定できないではないし、且つ、その民族的な格質において、學問的には之を同系とする

る外はない儼然たる事實の上に、一體民族は十二分の確率において肯定されるにも拘らず、しかし細かく觀察するならば、そこにあまりにも遠くかけ離れた民性を見るのである。

この乖離的な民性民情の事實はいかに説明さるべきであるか。之を説明するためには、まづ内鮮民における性格性情への認識的な説明を前提とするが、それは後章に述べるからこゝでは省略するとして、朝鮮民人においての性格的な短所を一纏めに寄せ集め、同時に長所を一山に積みかさねて之が性格圖を眺める時、われ／＼は奇怪にも、それが内地人によりもむしろ多く支那人に近似してゐることの事實に驚くのである。民族の根元を異にする兩者のかくの如き結果は、いかに説明さるべきであらうか。

おもふに、内鮮はその政治民族的分離と疎遠を始めてから千年以上の長きにわたる。この千數百年間の民族的分裂の事實は、決して輕々に商量されてはならない。同じ内地の各地方においてさへ、そこに自然環境的な、或は社會環境的な相異による地方性、郷土氣質は免れがたいものである。然るに、内鮮は、そこに千餘年の自然的社會的乖離の中にあつた。そして、各己に獨特の傳統と生活を築きあげた。この間

に、その民性民情における独自のものを培ひ遂げたといふことに何の不思議があらうか。例へば政治的な分離でも、尙ほ且つそこに、社會的な文化的な密接の交渉と交流とが續けられてゐる限りは、元來が同根であるといふ民族的現實において、必らずしも甚だしき乖離を果さぬであらう。それは、生活接觸の深さと淺さに従つて程度を異にする。この場合の、社會的文化的接觸の後天性の相互影響の力は決して淺く弱いものではあるまい。

四千年もの前、インド人としての釋尊の祖先たちは、靈鷲山の彼方、オクスム河の源のほとりから、現在の印度地方へ移住した。この民族移住に先つて「インドイラン」と呼ばれるところの一の時代があつた。イランとは即ちペルシャの故名であるが、それは勿論有史以前のこと、當時、印度人とイラン人とは同族として同一の地域に同一の言葉を使ひその信仰を同じくしてゐた。ところでそれから更に古く遡ると史家によつて「印度ヨーロッパ」とよばれる一の時代がある。その頃では、後年印度人—波斯人—希臘人—羅馬人—チウトン人—ケルト人及びスラブ人と岐れて、いろ／＼に呼ばれるに至つた民族が、皆な同一の言語と文學と宗教とを有つてゐた。即ち中央アジア

高原地帯における原始アーリアの搖籃から、ヨーロッパとアジアの大部分とに住むやうになつた人々が、引き續いて起つた「七度の移住」によつて、各地方へ分裂分布したのである。これらの移住の中、最初の二つは、一つは東南へ向つて印度の方へ、他の一つは西南の方ペルシャへ向つた。中央アジア大山脈の兩側に岐れて、各々そこに定住した後、これら兩方の人民が、互にそのやうな縁者であること——曾ては故郷を同じくしてゐたものであることの民族的族籍關係を全く忘れてしまつた。そして、印度の吠陀はペルシアのアヴェスタについて何も知らず、アヴェスタはヒマラヤ山脈の彼方、印度における出來事を一つも書き誌してゐない。幾百年かを経るに従つて、これら兩民族において、彼らの信仰も生活も漸く變つてしまつた。印度では一元的、厭世的、思辨的に——この苦しい現實からの解脱を求めた。そして、遂に、唯一の永久的實在は宇宙の靈たる梵のみであること、人間の限りある靈魂は、朝に夕を知らない儚いもので、究極に於て梵に没入するものであることを知つて始めて解脱を得べしとした。然るに、ペルシアの宗教は、二元的、樂天的、現實的、非哲學的であるが、しかし非常に道德的、精神的であつて、卓れた「人間生活」の「形式」を示してゐる。

即ち、このやうにして、原始アリアンの宗教は二つに岐れた。この岐れた二つの信仰は、印度西部における溫和な氣候、豊かな地味が、勢ひ住民の關心をして生活餘剩的に沈思と默想の風を醸し、その結果として、後年佛陀によつて非難されたあのやうな特質が信仰の上にあらはれた。と同時に、天然の恩恵に浴することの少いため、自然勤勉でなければならず、默考の遑もなく、従つてイランにおいての宗教は、生活を生活し抜くこと、勤勉と救済との關係を極めて重大視するに至つた。——かうした思想史を民族變遷の現實の上に讀むものは、人間の性情性格、思想と信仰に壓倒的な影響示導の力をもつ、自然的社會的環境の後天性を今更の如く驚かざるを得ないであらう。特にその地域的な影響を切に俾ばせる。そのやうに、地を接壤した支那の強力な政治的武權的社會力文化力に千餘年の深い影響を蒙つた朝鮮人が、海を隔てゝ漸くに分離獨立した日本との疎遠において、同根民族的なものを漸くに失ひ、日本的なものよりも支那的なものを現實に今日に遺すに至つた傾向は極めて自然であり當然だと思はれる。日本と疎隔した千數百年の間、朝鮮は常に北方漢民族の接壤的な壓迫と侵略を免れなかつた。その脅威下に暴露されたのである。しかも支那は、禮儀の國と

しての文教に弱め、事大思想を深く民心に布植して、民族興隆獨立奮起の根元を、巧みに朝鮮から去勢したのである。かくして愈々朝鮮は日本を隔離した。一方東海に獨立して、列島の中に鎖國的な獨特の文化と思想と、氣象と性格を築きあげた日本人が、その中に朝鮮的なものを今日に遺してゐないとしても、それも決して不思議ではない。たとえ昔多分のそれを持つてゐたとしても、その創造的な包容と攝取の中に完全に消化されて、すべてが日本的に止揚されてしまつた。

しかし、この意味での現實的な乖離は、すでに今漸く解消されんとしつゝある。合邦以來の民族的抱擁によつて、兩者はその本來において今、一體への還元に進まんとしつゝある。千有餘年の傳統を、その歪曲性において清算し、合理性において保有し、日本的なものゝ發展の中へ合體することにより、朝鮮人としてのわれらが國民的生甲斐を見出さうとする、われらの民族的國民的意義がこゝに見出されて、内鮮一體還元歸一への要求が潮の如く高まり行かんとしてゐる。その未來的な發展性の中に内鮮一體の本義をひそめて、われらが國民行進曲を高らかに鳴りひびく。民族の歌だ、血の協奏曲だ。かくして血の系譜は即ち血の樂譜たることを示しつゝある。

第四章 相寄る魂

歴史は訓
える

前章において、私は、朝鮮人としての、特殊な個性の立場における歴史的自己への同想的な反省を成した。而して、そのいろ／＼な角度からの、いろ／＼な考察と回顧において、本来の自己が、現實に日本人であるが如く、歴史的にも嘗ては同族同籍のそれであつたことの現實に歸着した。歴史は教える、内鮮は、本来が一體だつたのであると。而して、歴史は更に訓へる、合邦による内鮮一體の政治的必然は、遂にかくしてこの歴史からの必然であり、民族的必然であり、宿命の必然であると。互に交流する血のノスタルヂアだ。相倚る魂の抱擁であり、血が血を喚ぶ民族同根の本然である。日韓合邦の政治的形式は、この必然性の自然的表現であり、表現的形式にすぎなかつた。私は、朝鮮人としての誕生と傳統の中に、しかし現實に日本國民であることの合理性を、この歴史的自然的事實の必然性の上に把握する。日本國民であることの政治的必然の根元に、この民族的宿命を痛感する。それは單なる政治的必然の宿命ではない。この自然的歴史的合理性、民族的必然性がその政治性を規定する宿命である。

る。政治が宿命を規定するのではない。宿命が政治を規定するのである。さういふ人間的な宿命であつて、決して社會的な宿命ではない。さうした宿命の下に現實の自己を反省し自覺する。この自覺が、日本人とし日本國民としての私の現實的な自己認識である。一切の行動と、行動の規範だけでなく、私の人生觀世界觀がこゝにその第一歩を發足する。

宿命の合

私は、朝鮮人として、朝鮮的な傳統の千數百年にわたる長い歴史を過去に背負つてゐる。しかし、その本来の意味と形において、この千數百年の民族分離的な獨立の歴史が、じつは歪曲されたそれであり、自然に背馳する千有餘年の過去であつたことを知つたのである。その本来が歸一すべきものであつたことの民族的現實の上に、だから合邦一體の現在の様相が正しく合理的に把握される。さうした意味での現實肯定の上に、千有餘年の歪曲された歴史的現實が清算され是正されてゐる現在を一身一念の熱意を以て謳歌したい。今日の内鮮一體は、宿命を超へて、むしろ一の合理である。否、宿命なるが故に合理なのだ。こゝに、眞實なる内鮮一體の本義がある。内鮮一體は、その眞實な表現では、即ち民族一體なのであつて、さうした儼然たる事實の上に

築かれた政治一體なのである。千何百年の歸らぬ過去に遡つて、私は、私の今日の運命を物語るのではない。今日の運命の正しい姿をそこに把握するのだ。單なる復古ではなく、還元でもなく、歸一でもなく、千何百年を過去に跳んで、そこに直ちに現實を連ねることによつて、その正しい民族的コース、生活の本質をつかむのだ。千何百年かの分裂分離の歪曲を是正することによつて、現實の生活の正しいコースを把握する。それはまた、その形においてのみ、始めて、正しい未來への發展が期待されることを信ずるからである。内鮮一體は、單なる過去への幻影ではない、單なる現在肯定としての諦念に描かるゝものでもない。さうした意味での政治的支柱、倫理概念でもない。たゞ一向に、過去と現在と未來を貫くその現實性の上に、現實的に把握される場所の民族的本質なのである。この本質からの當然の歸趨反映としての内鮮一體への政治と倫理が、政治上、倫理以上の政治乃至倫理として展開される。かくして、そこに始めて、新たな民族の知性と民族的理性が與へられるであらう。内鮮一體とは、さうした「相倚る魂」の民族の心である。血のミトスではない、血のノスタルヂアだ。

この本義における内鮮一體は、廣く一般に透徹してゐないかの如くである。内鮮一體論が廣く人にうたはれるやうになつたのは、極く最近のことであるが、しかし觸目聽耳のすべてのそれが、日韓合邦への政治的意義づけにおいて、運命的な現實肯定でしかない。運命的な現實への條件肯定たるに止まる。従つて、その一義的な志向が専ら政治的な一途にある限り、その道義性をどれほどマキシマムに擴充しても、所詮、政治である——政治でしかないといふ志向の本質において、民族一體の信念に結びつけることは出来ないだらう。せいゝゝ運命的な自己諦念である。井伊亞夫氏が三木清氏の愛國心を批判的に語つて、敗北者の心理のみが、愛國心を愛郷心にすりかへるといふ。即ち「國土をもたぬ人民」「國土を亡つた人民」の心からなる愛郷心が、力の原則の下に打ちひしがれて、漸くに見出す更生守生の心が愛國心になるといふ。さうした原則の愛國心もが、或はヨーロッパの文化の隅にあるのであらう。しかし、少くとも内鮮の關係においては、一體の心は、むしろこの愛郷心(民族的郷愁)の當然の結果であつて、この「力の原則」からの歸結ではない。私は、この書の第二章に、わが帝國の意義を語つた。さうした神聖國家の上に、そのやうに俗流の「政治」型態を

構想する、或は、さうした「神聖之化」を、單なる「政治」にまで引き下ろす、その事自身が、この無比なる國體と使命の上に、一の自己冒瀆でなくて何であらう。少くともその國民を、諦念といふが如き弱體の上に、しかも、反動的に潛勢的でさへありうる、さうした運命の下に押しつけて、そこにわが神聖國家を築かうとする、およそ神國としての自己撞着であり自己冒瀆をつくすものではないか。「吾れ必らず鋒刃の威を假らず、座ながらにして天下を平げむ」と仰せたまふ神武大帝宏洪の聖意に照らして、さういふ解釋は、明らかなる冒瀆でなければならぬ。この故に、いはゆる内鮮一體の宣明は、さうした現實の論理政治工作の上に本義をもつのではない。乃至運命の倫理の上に基礎づけられるでもない。日韓合邦の政治的意義は、單なる政治、倫理以上のものとして、その民族宿命的な正義の歸結であり、歸結としての政治的な表現にすぎなかつた。合邦その事の上にこの宿命が現實的に結實したことを示す以外の何ものでもないのである。しかも、合邦以來すでに卅年、今更なぜ内鮮一體が叫ばれねばならぬのであるか。單に日支事變を契機としての非常時體制下における總動員の緊張と警醒にすぎないのであるか。

合邦以來三十年、内鮮の間には多くの不調和と相剋的な摩擦を免れなかつた。しかも現在に、尙ほ且つそのやうな摩擦の心理の暗翳を否認できないのが卒直正直な認識である。それは一體なぜであるか。内鮮は、さうした民族的宿命の上に先天的に結ばれつゝ、しかもなぜ乖離したのであるか。せねばならなかつたのであるか。現に乖離の暗翳を搖曳するのであるか。最近における殊更なる内鮮一體の叫は、さうした非常警鐘であるといふ以上に、特別にそれを叫ばねばならぬ非融合の現實に多分に理由づけられてゐる。それが偽らぬ直截な觀察であらう。さうした抜き難き非融合の觀念、背反乖離の感情は、一體どこに潜むのであるか。

「民族は生存競争の單位である。むろん現在では、國家もしくはブロックが生存競争の共同單位として強固であるが、それでも、若し同一國家内に異民族が併存する場合、動々もすれば民族の異同は國家内對立を惹起する原因となる。チエツコはか

くしてその一部を獨逸に割かねばならぬやうになつた。蓋し、民族は國家成立以前の生存單位としてその由來が遠く且つ深いためである」高木友三郎教授「民族の摩擦依存整理時代」

われ／＼は、日韓合邦以來の内鮮における反撥摩擦乖離騷擾の事例を現實に見て、それがいかなる思想と背景的な勢力の使唆使策に起り、いかなる運動の形をとつて成されたのであらうとも、結局は、そのすべてが、つまりは民族的反撥摩擦といふ心理と感情の上に、それを切札として成されたといふあまりにも明らかな事實に回顧觀察して、こゝに高木氏によつて示された民族的通則が極めて當然のことのやうに、同様にそのまゝ適用できるかの如く妄想する。そして、まさしくそれはその通りに正しいのであらう。すなはち、これを極めて卑近に、日常茶飯的な巷間の社交社會に見る。われらは、内鮮兩者の個人的な接觸においてさへ、優越と卑屈との怪しからぬ暗翳の裡に、さうした民族的な傾向における摩擦の心理を見追することが出来ない。しかし、それは單に、例へば合併者と被合併者、征服者と被征服者、優者と劣者、乃至一般的文化規準——民度の優劣などといふさうした社會的な條件においてする、極めて皮相淺膚な心の動きからだけではなく、更に根強く民族的な意識の摩擦、反撥的

な暗翳としての根本的なものをそこに十分に觀察出來るからであつて、畢竟、兩者に怪しからぬ暗翳をおとすものは、丁度日支の間の、支那のそれに見るが如き、さうした異民族感の根づよい心理感情にあることが容易に考へられるのであつて、あらゆる社會的——表現的な事情と條件を撥無して、根本的に、兩者が相互に異民族感を懷き合ふところにその暗翳が漂蕩する。

「概言して、民族は、思想習慣言語風俗は固より、生理的肉體的特徴すらも異つてゐる」高木氏
前掲論文

といふ。内鮮兩者のそれを對考して、之が、嘗ては一體の中に在つた——おそらくは、殆んど完全な一致の上にあつたといふことは、前第三章の歴史的回顧において私が縷説するところである。しかし、現實のそれにおいては、必らずしもさうでない。遺憾ながら、或る程度においては、高木氏のこの引用を兩者に肯定せざるを得ないものがある。之がまづ端的に、兩者を異民族感に誘導する。假令嘗てのそれが完全に一致の中にあつたとしても、千何百年かの分離の中に、そこに各己獨自の生活と傳統を築き成した結果として、この異民族性は止むを得ぬ當然自然の、しかし悲しむべき乖

離であり現實であるが、しかも、さうした異民族性を、完全に乗り切つたものにおいていさへ、尙ほ且つ依然として相互にこの暗翳を免れ得ないところのものは一體何なのであらうか。われらが日常の人的接衝、常識的交流における個人的な心の動きは、ちよつとした皮層の、極めて他愛もないことに、しかし極めて鋭く神経的であり小兒病的であることは之を免れえないのであるが、しかもそれが存外深刻に心理的な盤根錯節となる。この感性的な根據から、それが發展しては遂に偏狹と乖離の救ひがたき心理的泥溝に陥る——それはひとり内鮮兩者の間にのみ絶對固着する傾向ではないのであつて、現實に同種同族としての内地人同士の間にもさへ容易に見出しうる場所の人間的な暗翳でしかないのであるにも拘らず、特に鋭く内鮮兩者の間に刺戟する所以のものは、一體何なのであらうか。いふまでもなく、それはやはり根本的に、兩者は民族を異にするといふ底流の意識に阻まれての結果でなくてはならない。その結果からの極めて末梢神経的な刺戟の、しかし深刻な心理にまで喰ひこんだ固陋の意識でなければならぬ。然らばこの異民族感の根據は、事實上奈邊にあるか。内鮮一體論の實踐と實現の上に、徹頭徹尾禍根を成すこの障礙を、われらはいづくに求めていづくに芟

除せねばならぬか。

いふまでもなく、この障礙の根本は、まづ第一に内鮮が、本來的には一體の民族であるといふことに對しての相互の無智にある。異民族感の根本に横はる異民族の觀念謬想である。千有餘年の時代を隔てゝの民族的忘却であり、この忘却に基づく民族錯覺である。従つて、この錯覺がはつきり是正されない限り、この觀念意識は徹頭徹尾抜き難きものであり、内鮮一體は根本的には實現を不可能にする。この障礙に抜本の是正を加ふることなしにするあらゆる内鮮一體論とその工作は、單に皮相の治療處置として絶對に肉深く病根を遺すであらう。即ち、この立前においてしない單なる政治工作としての不徹底性、薄弱性、無意義性はそこに在るのであつて、せいゝ極めて弱體の、政治的支柱倫理的補強の意義しか持ちえないものとなる。しかも、この抜本の是正なしにするあらゆる政治的倫理的工作は、その工作性のみが鋭く對手に反映刺戟して、まかり間違ふと、とんでもない逆効果、反動をさへ杞憂できないでもない。内鮮一體論の根本に、單なる政治性を極力拒けやうとする私の志向はじつにこゝに在る。單なる融和事業が、殆んど實績を根本の上に期待できない理由もそこにある。故

に、まづ根本的に、内鮮を併せて單一民族に一致するといふその現實認識を以て根本的な是正をせねばならない。内鮮一體をまづその歴史的把握によつて根本づけ必然づけねばならぬ。さうした歴史的把握の上に、民族的還元歸一の宿命が把握され、この民族的宿命の上にこそ、われらの使命があり、正義が存することの自覺が孕まれねばならぬ。そこに運命の屈伏でも協同でもない、眞實な宿命の抱擁としての内鮮一體が具現する。即ち、眞實な意味と形で内鮮一體論は、この意味で、民族的忘却と錯覺の千有餘年の是正から始まらねばならぬ。ところで私は、本書第三章において、すでに、この民族的忘却に適當な是正を果たしたと信ずる。そこで次ぎに、この千數百年來の結果の「錯覺」について語らう。——絶対に異民族ではない筈の内鮮は、なぜどういふ經緯において異民族化したか。異民族的に乖離したか。

民族が歴史をつくつたのではなく、歴史が民族をつくつた。さうした經緯において

歴史が民
族をつ
つた

日韓の兩民族がつけられた。近代の民族學者が教へるのである。民族の見方に三様の體型が許される。それが自然發生的——血族體であるといふ意味で、その限りのものを自然民族といふことが出来るならば、之に對して、一定の文化形態に結ぶ民族の協同體、それは一元自然民族たると多元民族のそれたるを問はない、たゞ共通の文化圏において存するといふだけの特殊な見方においての民族體として、之を文化民族といふことができる。例へば、自然民族的にいふならば、必ずしも一體民族ではないが、しかし、その言語や習慣や思想や生活形態において同一文化系統に集結される民族體である。而してその第三は、之もやはり同様の規劃形態において、一定の政治意識と現實において集結される民族協同體を政治民族として考へることも可能となる。この場合、その政治民族は、純一なる一元自然民族であることも許されるし、さうでない多元自然民族であることも許される。要するに、その協同體意識の上に、統一的な政治的個體的獨立意識を明確にもつといふところに、特徴的なモチーフを把握して考へる時、そこに政治民族が成り立つのであるが、それは一定の政治圏を成すといふ意味で、一元自然民族の中で、更にいくつかの政治民族が分裂的に獨立することをも決し

て拒むものではない。ところで、同祖同根の一元的な民族として内鮮を分離せしめたものはじつにこの政治民族としての獨立分裂なのであるが、従つて、王朝初期桓武天皇頃までの内鮮關係が、今から回顧すれば不思議にさへ思へる程に親密だつたことは、相互に同祖同根の單一自然民族であり、それからの政治民族としての二義的な分岐でしかないといふ根本の事實に基づくのであつて、接壤する漢民族の勢力的な威力を、常に地域的に直接に蒙りつゝ、一葦帶水とはいつても、玄海の荒波に隔てられて漸くにして交渉を薄弱にした古朝鮮は、同胞の國日本のその自然民族的歴史關係と由緒を遠くへ押しやり、海の彼方に忘却してしまつたのである。そして、その政治民族としての獨立意識の中に漸く疎遠した。と共に、日本はまた日本としての政治民族的な獨立意識の中に、海の彼方へその同胞の國を——同胞の國としての古朝鮮の意義を忘れてしまつた。さうした自然的分離と忘却の中に、その政治民族的意識のみが鋭く成長し、東亞における政治經濟上の種々なる事態が、この意識の發展と成長に愈々拍車をかけると共に、嘗ては同一の神に祈り同様の風俗と習慣の中に息吐き、同じやうな思想と性格と感情を懷いて、同一の言語に同一の生活を生活したところの内鮮が、自

然環境的社會環境的に段々に乖離し始めた。いはゆる朝鮮民族と日本民族とが、さうした歴史の中につくられたのである。而して遂に、互にかみ合ふ状態にありとする獨自の民族意識を相互にいよく鋭くして、このやうな政治民族以前における民族の單一關係、切つても切れぬ筈の本質的な族戚關係をきれいさつぱり忘れてしまつた。それからとにかく千年以上の世代を隔てる。この間にはしばしば兩者に背馳的な事態をも生じた。例へば、いはゆる神功皇后の三韓遠征である。豊太閤のそれである。西郷南洲の征韓論である。さうした劍戟の事さへ起つた——起り得たのである。南洲のそれは、ヨーロッパに對する大亞細亞主義へのそのためであり、豊太閤の場合にあつてさへさうした意味の、しかし彼の野望に出づる大經綸のための第一歩であつたのである。豊太閤の眞意は、朝鮮征討ではなく支那計略だつたといはれてゐる神功皇后の場合は、漢民族の勢力下にあやつられて、態度常なきそれへの彈劾として、實は支那に對つての劍戟だつたといふ意味で、直接にはゆる朝鮮侵略のための起兵ではなかつた、と思ふのであるが、しかしとにかくさうした劍戟にも及んだのである。今にして見ると、曹植が七步詩にいはゆる煮豆燃豆箕、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急なるの感がないでもない。が、こ

した政治民族としての對立的な葛藤の關係は、嘗ては實際に、政治民族としても尙ほ且つ協和と協同の親密の關係にあつたにも拘らず、一に支那の勢力的な摩觸と刺戟によつて結果づけられたのだといふ意味しか持つてゐない限りにおいて、決して本質的なものではなかつた。本當の意味からいふなら、日支の民族葛藤が、朝鮮に仇花を咲いた、衝撃の火花を散らしたといふだけにすぎない。内鮮の隔離については、支那がたしかに重大な被告人だ。けれども、さうした事態は、時代の推移と共に事毎に兩者を離間した。當然の成行において、この二つの政治民族群が、そこに異民族としての妄像を幻覺し、異種としての摩擦的な感情を醸成し、この幻覺の上に錯覺して相互に反撥するに至つたとして、それは不思議でもなく無理でもない。しかも、此間における文化規準の懸隔が、怪しからぬ競争的な偏執を孕んだとしても、それも極めて當然であり、合邦がその本義において理解されない限り、そこに帝國主義的侵略の幻影を贖めて、征服被征服の妄想を過斷し、一方は卑屈に、一方は優越を感じて、相互に白眼視したことも、また止むを得ぬ自然的な歸趨だつた。そこへ大戰後の複雑な思想、共產主義的攪亂の魔の手が、私かに／＼猿臂を伸ばして、この反目の狀勢に、いよく／＼

亂離の波瀾をあげたのである。内鮮乖離の現象形態は、さうした社會事情と民族思想的幻想の上に花さいた、これも一の仇花である。

さて、われ／＼はこゝで、内鮮兩者における異民族感が、じつは自然民族としてのそれではなく、政治民族としての背自然的な對立の中に孕まれたものであることを知つた。錯覺の根本が、實際にはその民族的二義性への相互固執にあり、それでしかなかつたことを明かにした。この意義において、政治的な併合の形式をとらざるを得なかつた日韓合併に對して、しかしその故に、そこに征伐と侵略との帝國主義をしか贖めなかつたことの極めて自然的な事態と結果を、今更ながらにわれ／＼は悲しまねばならぬ。嘗ては一元的なすがたにおいて、しかし、その現實の上に各々の政治形態を獨立にきづきあげた二つの民族群が、その個性的な政治民族體を解消止揚して、舊態自然の民族的一體結合に復歸した契機を、いはゆる日韓合邦の政治的表現の中に認め、そこに極めて自然的な運命、民族的郷愁と抱擁の宿命を把握することは、それこそ單なる政治以上倫理以上の歴史的必然として、尤も合理的な現實的歸結を示すのではないだらうか。この意義を闡明することによつて、われ／＼は始めてその錯覺に抜

本の是正を果たすことが出来やう。



われらが一體民族への歴史的現實的回顧と認識によつて、そこに千數百年來錯覺の根柢に、拔本の是正を果たしうることを語つた私は、しかし、それでも尙ほ且つ、そこに現實に残る民族乖離の事實を否定出来ない。この民族的錯覺の根柢に、拂拭してしまはねばならぬ何ものか、この外にまだ遺留するのであるか。この乖離を根柢づけてゐる何ものか、まだ外に残存するのであらうか。そこに、現實的に、いはゆる民族性の問題がある。私は前述して朝鮮的な性格——民族性、氣質の中に、日本のものよりも支那的なものが多分にあることの奇怪な觀察について一言した。その支那的なものとは一體何であるか。それは、何に由來してどこに潜むのであるか。この内鮮乖離の様相——表現性について考へて見なくてはならぬ。相互の異民族がこの錯覺の根本であるならば、異民族としての表現形態、異民族化した民性民情の問題は、その二

民族性系

義性において、この異民族感への現實的な心理的支柱となつて愈々これを尖鋭にした事情をはつきり看取することが出来る。この現實的な異民族化——異民族としての現實構成と觀念構成については、こゝでもまたわれ／＼は、千數百年の分離的な背反の上に、その原因を把握せねばならぬ。要するに、それは、千何百年かの時間的な畠の中に自然に培ひ育てられた成果なのであり、又成果でしかないのである。

元來民族共同社會における「地域」の意義は、單に要素的なものだといふに止まり、自然條件的現實としては必らずしも中心的本質的なものではない。

「民族が一定の地域内に居住する事は事實であるが、それが民族の本質であらうか。民族意識の發生はその國土に對する限りなき愛着を一つの原因としてゐる。血と土といふ語はこゝから生れるのである。人類は地上を離れては生活し得ない。故に、それは生活と不可分の關係にある。しかし自然は自然現象であるが、民族は歴史的な社會現象である。この兩者の關聯には生命的な關聯はない。日本の如く、北は千島の寒帶から南は沖繩の亞熱帶にまで延びた自然現象の異なる條件下において、同一民族の生活はこの地域で保持されてゐるのである。地理的條件は民族形態

の本質ではないと言へよう。大山脈によつて切斷された地理的條件下にも一民族は形成されるし、大きな平原にも數民族がそれ／＼割據してゐるところもある。それは世界の現實が我々に示すところである」云々

前掲
論文

といふ。飛驒の山奥に住んでも、薩摩の南海に住んでも、日本民族人たることには變りがない、といふ意味で、地域それ自體の地理的條件が、必らずしも民族構成の絶對本質を成すものでないことはその通りである。で、それは、一定の民族生活體の中に、その生活要素として這入りこむことにより、「生命的な關聯」をもつ。したがつて、民族とは、さうした意味での「土地」を含むことによつて、現實的な統一——社會的統一を形造る生活組織體である。この限りにあいて、「地域」はその地理的條件よりも社會的條件を條件として「民族」の中へ這入りこむのである。故に、朝鮮と日本との政治民族的分離がもしなかつたとするなら、玄海の波濤がどんなに高からうとも、對馬洋の流れが如何に激しからうとも、千數百年の星霜を今日に貫いて、一體的な生活の中に、よく一致的な民情民性を現實に保ち得たであらう。精々その郷土性だけの特色を示す位の程度にすぎまい。朝鮮における支那的な影響の深さは、だから、その接壤

といふ地域的な關係を第一義とするものではない。接壤してゐることの上に、更により密接な政治的社會的文化的接觸の故である。生活的な一體と統一の傾向の中に共存したといふことの中にある。しかも反對にその日本との乖離は、地域的に離れてゐることの上に、更に民族生活體としてのその分離の故である。この場合、地理的な意味でのその「地域隔絶」は、あまり過重に評價されなくともいふと思ふ。従つて、朝鮮の現實に、日本的なものが尠くむしろ支那的なものがより多いといふ事の原因も、またつまりは政治民族としての兩者の分離の中に求めらるべきことを至當とする。即ち、要言して、地域的な隔絶よりも、生活的な分離において隔絶してしまつたといふ極めて平凡な結論に歸結する。生活の様式様相が、國民性格を規定した。さうだ——支那式の生活の様相と様式が、より深く影響的に、朝鮮の現實を構成したのだ。然らば、その朝鮮の現實の中に、いかなる影響的な支那を見出すのであらうか。

その尤も影響的なものは儒學の思想である。この思想の影響は、ひとり朝鮮だけでなく、わが日本にも壓倒的なものであるが、御本尊の支那では、夙くにその精神を亡つて形骸化した。——それは、家族主義の上に尤もよくあらはれること村上知行氏が指

朝鮮に於ける支那的なもの

摘するが、東日昭和十四年六月「支那人」の項参照如くであつて、例へば「孝經」の精神における「孝」の徳の如き、すつかり形骸化してゐるのに對して、その精神はわが日本で尤もよく醇化された。しかるに、朝鮮への影響においては、その影響の仕方が極めて形式的でしかない。始めから形骸化したまゝの姿で影響し受容されたのか、もしくは朝鮮自體が之を支那流に形骸化してしまつたのか、それは判らないけれども、しかしとにかく現實は極めて形式的である。さうした形で、そこに多分に支那風に通ずるものが看取される。形式的な面子を徒らに守るとか、禮文に流れて實踐躬行の活動に鈍いとか、虛名を貪る結果が、甚しきは虚偽と粉飾に徹底偏流するの傾向に在り、禮の宗家としての支那への敬仰が、禮文の模倣から事大思想を生むに至つた傾向等、みな宋學の影響であつて、高麗朝では姓譜の天降姓土姓を擧げて支那の聖賢姓に投化せしめたことさへある。地名、山名、樓閣の名稱に至つても、支那のものをそのまゝ襲用するなど、悉く支那への受容の結果であり、支那からの影響であつた。悠長にして樂天、無關心にして忘却の性に富み感激に鈍いなどといはれてゐる現實の性格も、悉く之れ大陸のもので強靱な意力と忍耐我慢忍従の特性は、支那の壓迫による歪曲された訓練の結果でし

かない。いはゞ受難の得(徳)性である。さうした史的な壓迫下に訓練されながら、不思議に大同團結の一致的な氣質に乏しいのは不審の感がないではないが、あまりに峻烈な壓迫下においては、さういふ團結の餘裕もあらず、ひたすらに一身一家の個人主義に一向自己を守るの風潮を孕んだとしても自然であらう。つまりは、支那が、朝鮮から朝鮮的なものを、生活の根本と全面にわたつて奪ひ棄て、しまつた。そして、じつに極めて周到に、支那化撫化したのだと考へざるを得ない。日本と岐れた以來千數百年の傳統と生活は、かくして朝鮮を朝鮮的な固有のものから去勢虚脱してしまつたのである。だから、朝鮮の現實に考へて、その族籍——民族的族籍を支那に即して考へることの謬想にすぎないが如く、又日本との異民族的觀念感情が、同様の錯覺であることを瞭解できるであらう。この去勢虚脱の中に歪曲的に築かれたものを、自己の本來とし妄想するところに、内鮮乖離の民族的錯覺が芽ぐむ。現實のすがたにおいて、その民族性格を必らずしも一致しないといふその事實が、内鮮異民族感の支柱となつてその根本を確實づける。しかし、朝鮮人が現在現實に、本來自分のものと思ひこんでゐるものは、存外自己本來のものではないのかも知れぬ。傳統千數百年の間に

すつかり、支那から仕入れたものかも知れないのである。この點十二分の反省を促し
たくおもふ。しかし、とにかく民族史的一體の由來が忘却され、その性格の根元を知
らぬものにとつては、さうした内鮮異民族の觀念と感情は、一方誠に無理ではない悲
しむべき自然の歸結であることを思はせる。蓋し、中世以降近世近代にわたる内鮮
は、はつきり獨立體政治民族としての對立の關係にあつたからである。そこに鋭く對
立する二つの「民族」と「民族意識」が錯覺された。かくして、嘗ては一體民族とし
ての一元的な生活の中に在つた内鮮は、現實に性格的にまで乖離した。しかし、さう
した一元的な生活態の中にあつた曾ての民性の上に、今日の如き内鮮の乖離的なもの
を相互に把持してゐたとは絶対に考へられない。しかも、じつに不思議なやうな當然
として、朝鮮の歴史的な本來の性格が、さういふ民族的隔離の間にも、うまく日本に
そのまゝ保有されて、日本的な止揚の中に、傳統的な醇化を果たして今日に現在する
といふことは、われ／＼朝鮮人にとつての僥倖でさへあるのではないかと思ふ。朝鮮
は自ら棄てた自己傳統の遺玉を今日の日本に拾ふのである。拾ふことによつて、自ら
を立派に取り復す。千數百年を一跳びに、本來自己の姿に立ち反つて、しかし百練鍛

磨の新しい様相において現在に取り復す。朝鮮人としての内鮮一體への使命的な意義
は、その一事にだけでも盡せると思ふ。——結句この民族錯覺への是正は、この故に
その千數百年の歴史と傳統と生活と思想を、敢然一舉に揚棄することによつてのみ果
たしうる。歪曲されたそれを卒直に棄てることは、即ち正しき自己を取り復すこと
だ。正しき自己を取り復すことは、この千數百年の歪曲を一ぺんに跳び切つて、即ち
内鮮一體への還元において日本の中へ本來の朝鮮を止揚更生することではなければなら
ぬ。潔き自決の揚棄である。さうした朝鮮更生の一本道をひたすらにたゞ「日本の道」
に往く。それはもちろん日本の征服ではない。従つて朝鮮の屈伏でもない。血が血を
喚ぶ民族の心である。同胞相擁く、宿命の歌だ。相倚る魂の協奏樂だ。われらが民族
の歌でなくてはならぬ。

「山海經」に古朝鮮の姿を描いて「好讓不爭」とあり、「漢書」に亦「其民終不相盜無門

戸之閉婦人貞信不淫」と「三國志」の筆者は「行者相逢皆住讓路」「潔清自喜」といふ。曾て「君子之國」「大人之市」ともいはれた。高麗顯宗の朝には、大藏經六千五百卷を集成し、十七萬枚の經板を彫鑿大成して、それは今日に尙ほ稀觀を稱せられる。程朱の學理を集成完行して、儒宗の名を今日に傳ふる退溪李滉の輝かしき業績、世界最古の發明をうたはるゝ銅鑄活字の製作、龜甲船今日の潜水艇、飛車今日の飛行機の創見等々、學問に工藝に發明に思想に、古朝鮮の文化必らずしも謳ふべきものを持つてゐないわけではない。この輝かしき傳統の誇りの中に、またわれらが遺珠を拾つてわれら生けるしるしありと、朝鮮の更生——日本的更生を、秀嶺富士の山嶺に、世界に向つて絶叫するのだ。かくして、われらが使命の世紀は、輝やかしき東海東モの天を曉けわたる。

第五章 使命の章

私は、内鮮一體民族としての歴史と自然に回顧して、そこでは自然が一體だつたのみでなく、自然發生的な姿において、その社會が、また一體の中にあり、従つて生活が一元であつたといふ事情を知つた。而して、さうした同根一體の民族體が、政治民族として相互に分離した結果の社會的な乖離の姿を描いた。この社會的現實と自然的現實との乖離が即ち内鮮千數百年の様相である。この歪曲的な乖離に對し、民族自然的に自らなる是正を自らに遂行して、一體政治民族としての併合により、自然民族的一體還元を成し遂げたのが日韓合邦の意義である。従つて、合邦の本義は、前章末尾にくり返し説くが如く、朝鮮の屈伏ではなく日本の征服でもない。而して、朝鮮の日本への歸一は、右のやうな意味での自己復興であり、自己回復であり、本來的なものへの自己還元である。それは、朝鮮の自己更生以外の何ものでもない。日本へ歸一することにより、日本の傳統へ自己を浸透させることにより、本來の自己が甦る。「日本の道」を行くことによつてのみ、そこに朝鮮の道が在る。朝鮮本來の道は、即ち「日

本の道」なのである。そのためには、潔き自決の揚棄が必要であることを述べた。歪曲された——自己本来の意義を亡つた、千數百年であるならば、これを敢然一舉に揚棄してしまふ民族的な卒直の勇氣が必要なのではないか。それを棄て切ることによつてのみ、正しき自己を回復する。この正しき自己奪回の中に、始めて、すべての錯覺が是正され、あらゆる現實の歪曲が清算される。

しかし、それは實際の問題として、いふに易く、考ふるに容易に、行ふに甚だ難い。少くとも、千數百年の傳習の力は、却々に根強く民族人の心に錯節盤根して、一舉に卒直には抜き難い。そこに、内鮮一體への技術が構想され實行されねばならぬ。しかし、吳々も、この政治的社會的文化的なあらゆる技術は、この根本精神に映發されたものでなくてはならぬ。この根本精神の擴充的技術としてのみ、始めて「内鮮一體工作」の直實妥當な本義をみたす。技術が最後の精神であつてはならぬ。この精神の擴充によつてのみ、始めて技術が技術として生きるであらう。われらが使命は、あらゆる場合に、あらゆる意義をみだして、この一體精神へ邁進直往するに在る。——あらゆる日本のものの中に、われらが朝鮮を生かせ。

現在いはゆる融和事業融和政策が、比較的活潑な効果を現實に期待できないのは、遺憾ながらこの根本精神の缺如に原因する。で、まづこの精神の一般的普及と解明が、尤も根本的であることはいふまでもないが、しかし、私はこゝで單なる民族的な夢を語り、夢を與へるのではない。實際生活の上に、堅實な一體の思想と生活を築かうとするのだ。その意味での政策に對して、その實際的な示唆を大略次のやうな項目において考へる。

一にいはく教育制度の刷新である。之については、英斷的な學制改革が行はれて着々實現されつゝあることは喜ばしいが、義務教育制までにはまだ／＼相當長い年月を待たねばならぬやうである。教育は、直接的に國民陶冶の機關であるから、充分に教育勅語の聖旨を體して、併せて特に大正天皇御詔勅の本義に副ひたい。

次は神社制度の確立である。朝鮮同胞には神社に對する認識が不充分なため、却つ

て神聖を冒瀆する様な行動が見受けられる。我國の神社存立は遠く高皇產靈神の御神勅に由つた神ながらの道の表現なのである。宮中にかせられても、賢所、皇靈殿、神殿を奉建せられて天皇御親ら御祭祀を執り行はせ給ふのであり、祭祀は政治の最も重要なものとして擧はせられると拜するのであるから、國民としては當然各村々に神社を奉建して祭祀を行ふと共に參拜する心構を持たなければならない。故にこの制度を朝鮮にも確立し、朝鮮同胞をして神社の本義を徹底せしめ、各面邑民をして自ら進み、好んで奉建し、祭祀を行ふべく誘導すべきだと思ふのである。これは單に敬神崇祖の念を厚くするばかりでなく、國體の觀念を厚くし、皇室の尊嚴と神聖なることを自覺せしめ、國民道德を知得し、國民信仰を一にして、天皇を中心に、真心からの歸一を計る上にも重大なる意義を有するのみならず、朝鮮同胞の福祉と子孫の繁榮を謀る上にも重要な行事であると思ふ。

第三には徴兵制度である。今日の國防は必ずしも武器力軍人の力にのみ限られるのではなく、國民擧つての總和力に依つてなされて居るのではあるけれども、國民としての自覺を促し、本分を悟り、奉公の念を強め、個人を確固不拔な軍人精神にまで養正

することが肝要である。又天皇に對し奉り滅私盡忠の精神を養ふ上に於ても、朝鮮青年悉くが兵役の義務を負ふべきである。志願兵制度が設けられ、毎年四五百名の軍隊教育を受けられるやうになつた事は喜ばしいことではあるが、是又大英斷的に朝鮮にも急速に兵役の義務を負はせる兵役制度を敷くことである。何にも疑懼の念を懷く必要もなければ、言語習慣を顧慮する必要もないのである。軍隊に入れて教育すれば、總て本來の姿に立ち歸らす事が出来ると思ふのである。青年訓練所を設けて小學出の青年は悉く國民訓練をなさしむべきであり、軍隊教育を普及すべきであると思ふ。そこで始めて、國民的情緒が生じ精神的國民團結が圖られ、直に内鮮を一體に具現化すると信ずる。

第四には、冠婚葬祭の儀禮であるが、是は長い間の習慣として一朝一夕に變へられるものではない。儀式の式制は已むを得ないことにしても、朝鮮の習慣を尊重して作つた儀禮準則は實行するやう誘導し、今までの繁多な行事を成るべく省く様にした。理想としては、此の儀禮までも國家儀式に習ひ國民的に統一されることを願ふのである。

第五には、習慣の改良であるが、衣食住の改良は内地に於ても生活改善同盟を作つて國民服の制定を叫び、住宅の改良を計りつゝあるが、長い間の習慣として、なか／＼聲のみ高く實施はされないものである。しかし何れにしても、朝鮮の持つて居る習慣は、現代的に改良されなければ國民的意氣を損耗しはしないかと思はれる。是等の改良に就いては、只抽象的に改良しなければならぬとの示唆に止めて、其の具體的方策に就いては、それ／＼の専門家の研究に期待したいと思ふ。

第六には、言語の統一である。言語は意思表示の方辨として自然發生したもので、時代が變ると共に段々と變つて行くものであるが、是れを人爲的に急速に變へることは難事である。然しながら國民用語として教育の力に依つて變へることは、そう難事でもないと思ふ。内地に於いては、今日完全に標準語に統一されて居るのを見ても、國民教育が普及されるならば朝鮮同胞に於ても國語で充分に國民たるの使命を果すことが出来るものと信ずるものである。然し方言としては永く残るであらうと思ふのであるが、方言として残るからと云つて國民的情緒を損ふものとは考へられない。さうした形で地方色郷土性はどこにでもある。どこにでもありながら、完全な國語的統

一の中にある。然し内地に於ける方言も段々標準語化の傾向にあるから、朝鮮全體に國語が普及されたならば、方言も段々標準的に統一されて行くのではないかと考へられる。此の意味に於ても小學校の義務教育制度は速かに實施されることを望むものである。朝鮮同胞は朝鮮語の廢止を惜むのであるが、是れは祖先傳來の用語であつたがために愛惜の念を持つことは道理であつて咎めることは出来ない。が、現在我々が使用して居る言葉其のものが、幾變遷を繰返したかを考へると同時に、今日に於いて我々の文化水準を高めるに於て、何れだけの役割をして居るかを考へる必要もあるのである。又今日に於ける民族感に打たれて過去に於ける内鮮同族であつたことを忘れてはならないし、將來に於ける民族發展を考へなければならないのである。此の意味に於て現在我々が重大轉期に立つて居ることを痛感すると同時に卒直に決斷して眞の内鮮一體に協力すべきであると考へる。

第七には、戶籍上の統一である。同じ國民として戶籍上の統一がはかられて居なければ、戶籍面に於ける民族的異別を残すことになるのであるが、近代に於て内鮮同胞間に結婚するのが盛んに行はれて居るから、朝鮮同胞の中には、内地同胞の名字を使

用するものが増えて來て居る。しかるに習慣上妻の姓を夫の姓に變へずに其の儘存置してあることは矢張り國民的情緒に合致しないのである。又婿入養子にしても同姓の他人より養子を縁組するよりか自分の血統を受けた娘に婿を持たせて婿の姓を變へて自分の姓にするやうにすれば内地と同様になる譯で、此の婿入養子の制度が又有利である様に思はれるのである。變姓變名にしても國民の希望に依り、朝鮮地方に限つて期限を定めてから届けさせてもよくはないかと考へられるのである。何れにしても民族的色彩の濃厚なものは段々と改善して往つた方が國民融和上緊要なことであると思ふ。新聞紙の報ずるところによれば、總督府はいよくこの戸籍法改正に乗り出して近く實施されるといふ。

次に起る問題は參政機構の統一である。人間社會は政治社會である。政治は天皇御親ら執り行はせられることであるが、其の天業に翼賛し奉ることは、國民としての義務である。多くの人は參政權と云ふのであるが、私は必らずしも參政權と云ひたくない。只五箇條の御誓文にある「萬機公論に決すべし」と仰せられた其の公論の決する所に參加して、國民の公論を傳へ、正しく決する様に努むるため、内鮮一致して、其

の公論を決する所へ參加させて貰ふことである。即ち國會議院に朝鮮同胞が推薦した議員を朝鮮より送つて天業翼賛の義務を果すべきだと思ふ。貴族院にせよ、衆議院にせよ、其の各々定員を定めて朝鮮地方のために朝鮮同胞の公論を國會に反映しなければ、眞の内鮮一體は實現されないことを信ずる。若し此の機構の統一が一年遅れればそれだけ、内鮮一體の實現が遅れるものと信じてよい。けだし、朝鮮同胞の生活は朝鮮同胞がより善く知つて居り、朝鮮地方の事情は、最も多く住んで居る朝鮮同胞がより善く知つて居るからである。のみならず、天業を翼賛することに依つて國家により多く報公し、より多く盡すことになるからであり、名譽に滿悦を感じ、地位の向上に滿足を感ずる。さうした光明を、わが朝鮮にも與へらるべきだとおもふ。

國民は政府を信賴する、故に政府の聲明に依つて國民は安心し、政府の施政に協力する。故に國民は、政府の聲明を期待し、聲明に依つて國家に對する報公の道を明かにし、邁進することが出来るのである。同じやうに、朝鮮同胞も政府が内鮮一體を標榜した以上、其の實行方法に於ける聲明が必要である。從來は天皇の聖旨を奉戴し、一視同仁の大幟の下に、朝鮮同胞に内鮮融和を呼び掛けて來たのであつたが、其の實

行方法に就いて朝鮮同胞に満足を與へられなかつたことを顧みる時、今回も内鮮一體の掛け聲だけでは、朝鮮同胞は安心出来ない筈である。成程其の一端として、學制改革の實行を見、志願兵制度は實施され、神社參拜は勵行され、朝鮮の教化團體は内地の中央團體に合流されて、着々と其の實現に邁進することは認めるのである。又朝鮮同胞としては、今度の事變に對する正確な認識を持ち、國家體制に順應すると共に愛國の赤誠は現はれて、數年前に比べれば其の動向の急轉回は、愈々政府をして内鮮一體の實現に邁進する所の力と自信とを持たしむるに至つた。政府と國民が此所まで歩み寄つた以上、百尺竿頭一步を進めて、更に内鮮一體への認識を深め新東亞建設への世界史的使命に向つて協力の一路を邁進すべきではなからうか。この場合特に朝鮮政治の明朗化が主張されなくてはならぬ。それは、内鮮一體への技術的な核心である。一體精神直自の表現である。

伊地知進氏が、その「興亞的混血論」において、いはゆる日滿一體論の政治主義を衝いていふ、

「色々な人によつて日滿一體論や日滿不可分論や一徳一心的論議が盡されてゐる。それらの人々の意圖を綜合すると、結論として日滿は離るべからず、一體のものであり、兄弟か夫婦の如きものであると云ふ事になる。然し、そんなバンフレットや看板やスローガンが林のやうに並んだとて何にならう。そんな聲や文字だけで日滿論が片付くならば、全く世話はない事柄である。然し實際の日滿關係は、そんな言葉や遊戲や頭腦の外にあると言つてよろしい。本當の不可分となすためには、日滿は肉體的に結合すべきである。本當に別れられない間柄となすためには、日滿は結婚すべきである。これこそは、言葉や觀念的理論以上である。十年間言葉の戀愛を續けた男女を引裂くには力も何もいらぬ。わけもない事である。が、一言の言葉はかばさね、唯一夜を契りたる男女は、これを引裂くことは出来ぬ。寧ろ死がある位である。戀愛の場合に於て、性關係に於て、肉體は遂に言葉に優ること、はるかに強く、又高い。私は、日滿關係をそこまで進めなければ嘘だと思つてゐる」云々

かくして、「日本書紀」や「古事記」をよむものは、われ／＼の祖先たる大和民族が、我々の科學以上の混血と民族輸血が、すでに立派に實行されてゐたことの上に、その優秀性を把握したことについて回顧する。さうした民族輸血の機能と效果について、小泉丹氏がまた更にいふのである。

「自然の要約による人種的形質の變化といふものは、決して過大に評判さるべきものではなく、人種部族の系統並びに區劃の不分明には混血が主要な原因になつてゐるのだ」「原始種族を想ふ」云々と。

この意味において、内鮮はその一體のためにじつさいまづ結婚せねばならない。それは、日滿一體よりもより自然であり、自然的な結合であることが前數章の記述によつて、明確に肯定されるであらう。實際に、肉の一體に出發することの力強さ、根強さは、伊地知氏の解説をまつまでもないことだが、しかし、この通婚のためには、まづ前提的に、觀念の一元化——従つて生活の一元化が尤も必要である。結婚も戀愛も、その性格上、乖離した男女二人の間には絶對に不可能だからである。肉の一體の力強さはわかるが、そのためにはまづ、たましいが一體になる條件を必要としないだらう

生活一元化

かゝる生活が接觸する條件を必要としないだらうか。従つて、内鮮一體は「物質的現實に立脚するよりも、その觀念生活一元化への方向をとることが客觀的に要請される」「國民文化運動の朝鮮的性格」といふ韓相建氏の至當の見解に聞くべきである。故に「朝鮮民衆は、信仰言語藝術習慣風俗にいたるまでの、あらゆる日本の生活様相をマスターする」前掲論文とによつて、まづその民族に抱擁せねばならない。さうした情意的なもの、觀念形態の中に、内鮮一體の要請と計畫は、始めてその所を得るであらう。

今や東亞協同體論の狼烟があげられて、日滿一體論さへ唱道される。この時、内鮮一體の今更な叫喚はじつさい間抜けの感じがなくもないのである。しかし問題は、今更それが叫ばねばならぬ事實の上にあるのであつて、間抜けは一體論そのものではなく、必らずしも一體にはなり切つてゐない内鮮の關係、事實そのものなのである。私はそれを悲しまねばならぬ。いはゆる「東亞協同體」の理論にいふ

「民族の本質は、歴史的なものであり、民族共同社会の基礎は、その生活その生産の歴史的發展の条件によつて決定される。故に、民族国家との協同體の基礎もまた、民族共同體の場合と同様、その生活共同體、生産共同體の歴史的な段階における客観的な諸条件によつて決定される事となる。こゝに東亞協同體の本質が儼存する筈である。故に東亞協同體建設の意慾は、それは日支兩民族の民族的本能のそのまゝの發展でなければならない。

今日の東亞民族を取りまく歴史的な諸条件とは次の如きものである。日本民族（後進資本主義國）の發展の障害となりつゝあるものは、先進資本主義國の國際資本秩序と、國家を階級的分裂に導かんとする國際共產主義の秩序である。支那の民族國家（共產共同體）としての自立を妨げてゐるものは、個人主義的國際資本による帝國主義的特殊權益であり植民地機構である。また階級的分化によつて支配を得んとする國際共產黨である。

この歴史的段階において、これ等の基礎的諸条件から、民族國家の性格は規定される事となる。この兩國の發展の障害となりつゝある二つの世界秩序を、兩國の圈内に開放して、より發展的な新しき秩序を建設する事が、兩民族の民族的本能の自己追求として、こゝに東亞協同體の建設として追求されてくるのである。故に、それは兩國の單なる政治政策の一致ではなく、民族我の追求と言ふ基本的本能的な要求なのである。

東亞協同體の紐帶は、こゝに至つて極めて明白となる。それは今日の歴史的な諸条件によつて必然的に生れざるを得なかつた次代の新しき世界觀を共通に持つ、民族全體社會と民族全體社會との相互發展のための協同なのである。それは新しき世界觀による結合なのである。新しき世界觀から生れる政治と經濟と技術と文化の協同であり、結合と發展なのである。一切はそこから出發しなければならない。故に一部の地域（領土）や一個の權益等の問題ではないのである。日支事件による兩民族の燃焼によつて、支那は、國際資本國際共產黨の力に依存する過去の性格を、日本は國際資本秩序の中にあつて支那にのぞまんとする舊き性格を、共に拂拭して、新しき世界觀による民族的結合を完成せねばならぬのである。そして、そこに新しき民族主義の發展的時代構造は作られるのである」

「東亞協同體の理論」

かくして新しき時代構造の建設を目ざす、いはゆる民族協同體論における、東亞協同體としての日本全體社會と支那民族全體社會とは、この理論把握と實踐において互に結合し相互に發展する。だから、それは蠟山政道氏がいふやうに、文字通りの善隣自衛にあり協同の民族自立であるが、従つてそれがどれほど高次の道義性を充たさうとも、結局は、協同體としての儼然たる事實の上に、さうした政治性を絶対に跳び越え得ない性質のものである。いはゞ新しき國際主義の秩序でしかない。尤も、前掲論文の末尾に、(新しき民族主義の發展的時代構造は)「それは歴史の諸條件が規定する一つの必然で」あつて「排他的なる人種論的民族主義とは異り、眞の發展的なる民族文化はそこに初めて築かれる」といふのではあるが、さうした狹隘な民族主義と個人主義に對立する意味で、之は全體主義なのであり、全體主義は更に高度の全體への融合と純化とを生命的發展として有つが故に、民族主義は征服と侵略ではなく「空間の擴大協同」を完成し得るとする。ところで、しかし、その限りにあいてやはり一の國際的な性格を持つのである。それについては、識者の間に色々な議論があつて、一方もはや政治的に全面的な實踐過程に這入りつゝ、一方理論家たちの間では、その理論構成

理論基礎づけは、種々の喧嘩を極めつゝ、單なる民族妥協性を指摘するものがあれば、他方には之を非難して、その日本精神的日本民族の指導性格を主張してやまぬものがあるなど、相當に騒はがしい。ところで、何れにしても、この新秩序への政治力の負擔者として、日本民族がその指導的な立場と役前の上にあることはいふまでもないが、支那が果してこの歴史的な意圖を、どこまで健全にうけ入れて、どこまで強靱に協同できるかといふその民族性、民族本能の上に實際上の問題が潜む。つまりこの新秩序への根本規定は、その實現の可能性が一にかゝつて、支那の民族意識、民族本能の健全性にあるといふことができるのである。

おもふに、從來日支は同種同文の國として極めて簡單にその親和性と親和力が前提されてゐた。そして、兩者における乖離の事實は、「民族」本能の根本に原因をもつでなく、單に「政治」の表層にあるとしか考へられてゐなかつたらしい。少くともさうした傾向にあってはしか商量されてゐなかつた。排日閉鎖的な固有の民族主義でさへ、單にこの政治的な志向を標榜するだけの旗幟はたじろしとしか考へられてゐなかつたのである。日支國際間の乖離の原因を、單に、一に英國の援護にあり、ソ聯の懷柔にあり、

等々との結託にありとする見方は、偏狹な側面觀にすぎないので、それは、事情と事態によつては日本とさへ容易に結託しうる可能性、蓋然性を示すところの、彼の「弱體」の故でしかない。東亞の空間から、英國佛國の資本主義的帝國主義の結晶たるあらゆる權益を拂拭して植民地機構の拔本是正を遂行する、それは明朗東亞の新秩序建設の上に、尤も直截な當面の問題たるには相違ない、それは單に日本の意慾だといふだけでなしに、世界史的必至の表現である。しかしそれだけで日支の問題が直ちに完全解決するのではないのである。これが遂行完成の結果として、おそらくは、支那の事大意識は、彼の弱體の故に、日本への協同を約束するであらう。しかし、單に協同するといふだけで東亞協體論の實踐追求は果されてゐない。そこで、百尺竿頭一步を進めて、再びおそらくは、支那は遂に東亞協同體理論における根本把握を日本と共に實行完成するの意慾を示すだらう。この場合の、支那民族における民族的本能の健全性を、徹頭徹尾、私は必らずしも疑ふものではない。しかし、根本的には、依然としてそこに相互に固有の「民族」が残る。かくして、協同體としての民族體を、どれほど高く深く廣く擴充しえても、遂に依然としてそこに残される固有の「民族」の上に、

われらは一の宿命を、民族的宿命を見ないだらうか。結句、夫婦にはなり得ても親子同胞にはなり得ない關係にあるといふ、さうした民族的宿命の中に在ることが感じられないだらうか。かくして、民族は、その性格として、開放の上に一の限度をもち、溝渠を隔てる。さうした民族個人主義を、中なる全體主義の理念に従つて、より高次の民族全體主義へ止揚し發展する——世界史的民族協同體新秩序への規定と要請の前途について、私はこゝで何もいふ必要はない。しかし、さうした全體的融合と純化と生命的發展の中にも、民族それ自體がもつ一面の性格としての閉鎖性は根強くそこに一の國際性を支持してやまないだらう現實を、私はどこまでも追及固執する。それは過去において嘗て一體たらず、従つて未來の發展性の上に一體たりえぬ現實の宿命を示すものであつて、民族主義——民族全體主義の政治悲劇的な性格の要素がそこに潜む。けれども私は、こゝで「協同體論」を主題とするのではないから、この問題をこれ以上には追及しない。私はたゞ、之を内鮮一體論への旁證として引張り出したにすぎないのである。蓋し、内鮮一體においてのそれは、こゝに全體社會協同體としての日支の關係の如き關係においてあるのではなく、その民族的宿命は、完全に一體の中

協同體論
における
義理的意

に抱擁する。内鮮一體の本義は、それが單に、地域運命的であり、從つて政治的道義的であるといふ以上に、更に深く現實的に本質的に、民族包容的な宿命の中に結合するに在る。東亞を一體とする協同體理論を、どれほどマキシマムに擴充しても、それでは絶対に整除し切れない意義と本質の上にあるのであつて、その不可分の内鮮の關係は、文字通りの一體的存在として、同胞の宿命の中にある。日本にとつて支那は遂に支那でしかない、しかし朝鮮は、遂に朝鮮でしかないとは云ひ切れないのである。それは單に、現實に一體であるといふことの上にこの意義をもつのではなく、民族的本質——現實の上にはつきり確保されたところの民族的正義なのであつて、もちろん單なる協同に結託されるものではない。だから、そこにこそ、即ちわれらの國民的道義が把握されねばならないのであつて、それは政治以上モラル以上のものなるが故に、即ち政治なのでありモラルなのである。

聖戰に民衆を奮起せしむる

だが、この民族協同體論、東亞協同體新秩序への日本の行進は、まさに日本精神による世界史的な使命の豪壯なる展開である。宣言である。いはゆる八紘一字の皇道精神に、皇國は今、東亞の民族覺めよと聖戰を戦ひつゝある。佛陀本生談の良心と熱情をそのまゝに、今わが日本は、自分の腕に火をつけて、燃ゆるその兩腕を高く捧げて民族覺めよと世界の闇を圍ひつゝある。「聖戰に、民一億の體當り」とうたふ。まさに身を以ての皇道の發揮である。輝く世紀の、天業恢弘の使命と實踐に參じて、われらもまたこの聖業への場所と役割を與へられてゐる。われらがこの使命に起つは、われらも亦た東亞の一角に一民族を成すといふ地域運命的な存在たるによるのではない。民族を超えて、皇國の使命に協同翼賛するのもない。自らの民族的宿命の上に、使命の正義を痛感するにすぎない。この宿命への朝鮮的自覺とは、その反始的な生命への現實的な更生を意味する。日本的な生命横溢の中に甦る自己を贖めて、そこに、自己の正義と使命を身に染む。「日本」の中に「朝鮮」を甦るのだ。かくして、われらもまた、世界新秩序への豪壯な建設へ——「日本の道」をたゞひたに往く。

内鮮一體論了

昭和十四年十一月六日 印刷
昭和十四年十一月十日 發行

【定價金壹圓五拾錢】

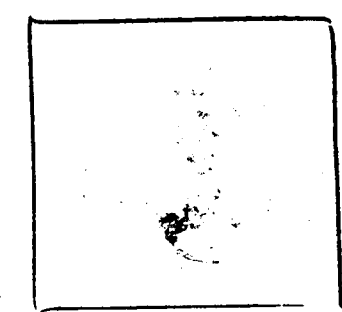
著 者 姜 昌 基

東京市芝區琴平町三七喜多ビル

發行人 小林 五 郎

東京市豐島區池袋二ノ九二四

印刷人 片 岡 務

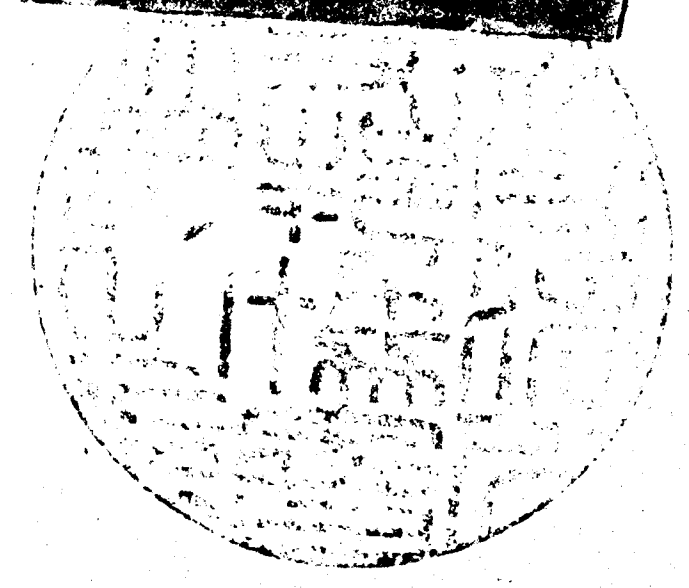


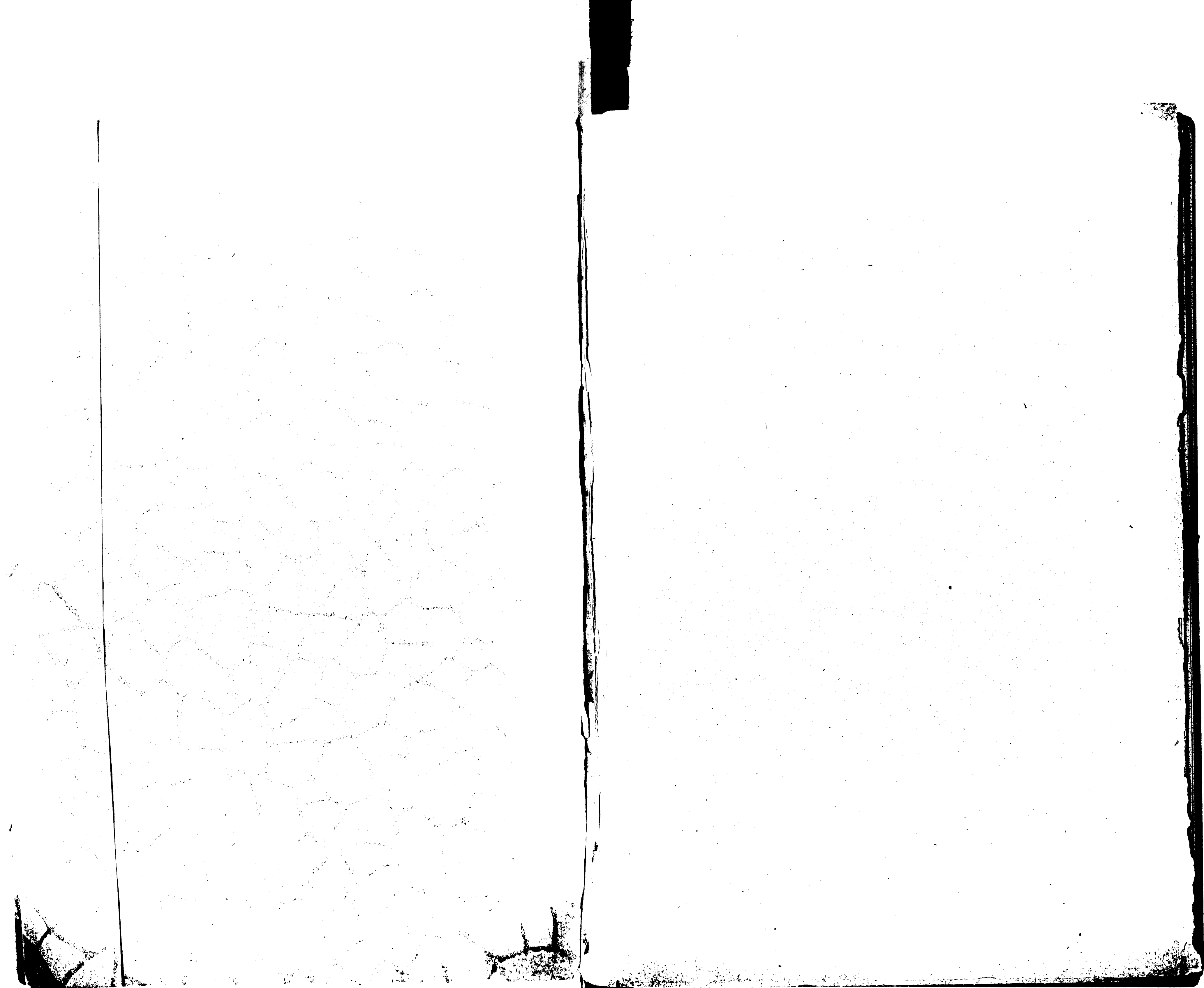
內 鮮 一 體 論

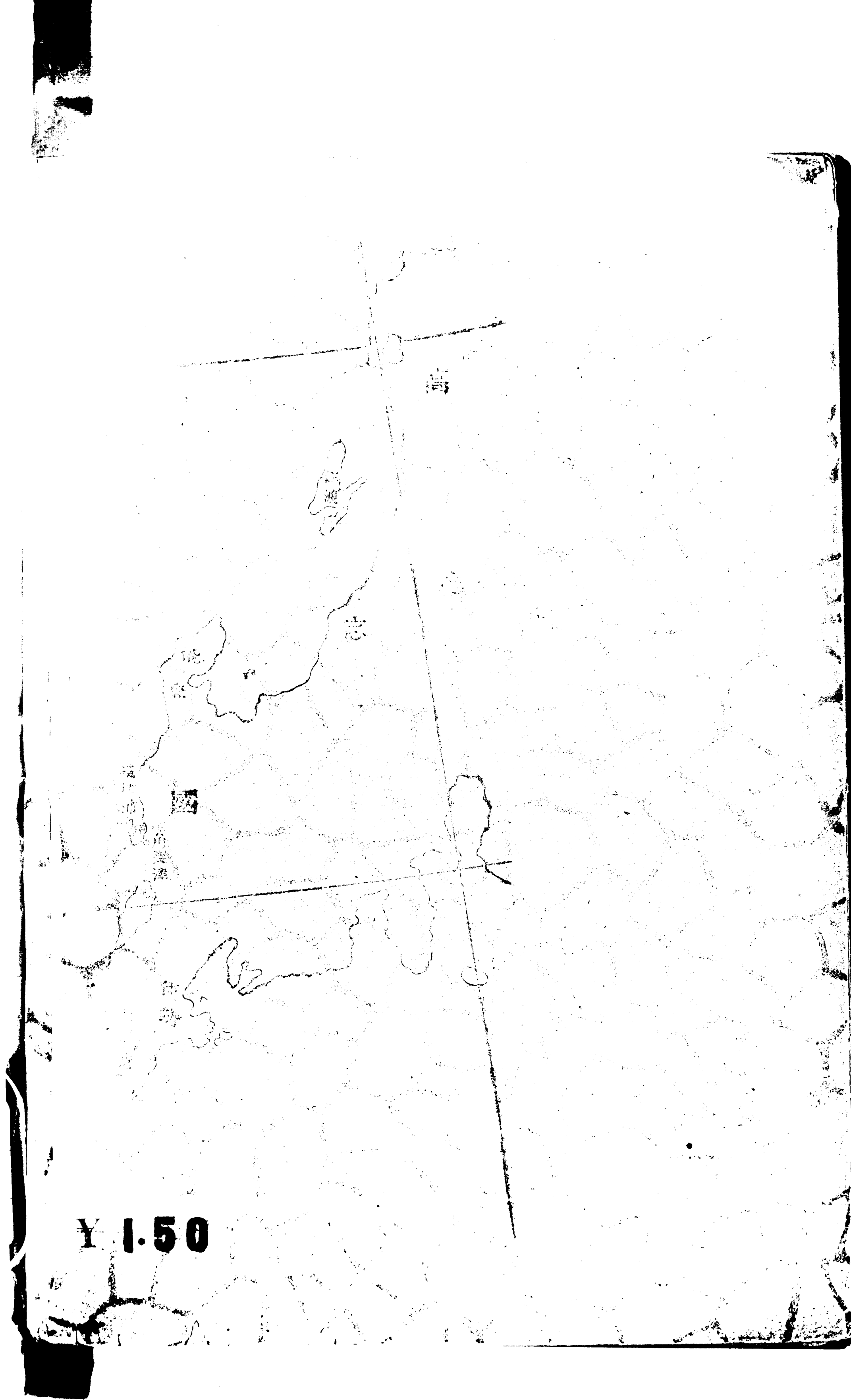
東京市芝區琴平町三七 喜多ビル

發 行 所 國 民 評 論 社

電話芝(43)一六二五番
振替東京七三三五四番







Y 1.50

049-24



大正十年三月

情報彙纂 第四

朝鮮評論(KOREA REVIEW)
布哇米國新聞刊行物及通信
記事摘要

朝鮮情報委員會



情報彙纂 第一

朝鮮統治ニ關スル外國人ノ批評

同 第二

朝鮮評論(Korea Review)記事摘要
布哇國民報及獨逸新聞記事摘要

同 第三

朝鮮評論(Korea Review)記事摘要
米國著書及獨逸新聞記事摘要

目次

第一 朝鮮評論

一九二〇年十二月號

一頁

第二 布哇新聞

(一) 國民報

一九

(二) 韓美報

二八

第三 米國新聞

(一) 「華盛頓ヘラルド」

三一

(二) 「紐育タイムズ」

三二

第四 米國刊行物

(一) 在米朝鮮同情者協會ノ目的位置及役員

三四

(二) 在米印度獨立同情者協會ノ目的位置及役員

三六

第五 英米通信

(一) 在米鮮人活動ノ形式.....	三八
(二) 在米鮮人ノ活動機關.....	三九
(三) 朝鮮問題ト英國.....	四一

朝鮮評論布哇米國新聞刊行物及通信記事摘要

(情報彙纂 第四)

第一 朝鮮評論(KOREA REVIEW)

第二卷第十冊一九二〇年十二月號記事摘要

一 朝鮮人ノ祈禱

上帝ニ對シ正義公道ノ發揮ニ依リ自由獨立ノ境涯ニ達セムコトヲ祈求セルモノナリ。

二 開書

一九二〇年十一月二十二日付米國歸化朝鮮人「フイリツプ・ゼイソン」(本誌主筆)ノ名義ヲ以テ米國次期大統領「ウオーレン・デー・ハーデック」氏ニ宛テタルモノニシテ其ノ要領左ノ如シ。

(一) 朝鮮問題ハ國際問題ナリ

朝鮮問題ハ曾テ韓國ト諸外國トノ間ニ締結セシ條約ノ性質ニ依リ儼乎タル國際的性質ヲ帶フ。是等ノ諸條約ハ關係列國直接ノ發動、殊ニ韓國ノ發意ニ依リ確實ニ取消サレタルコトナク、單ニ日本カ擅ニ我等ノ中

間ニ入リテ其ノ效力ノ消滅ヲ宣言セシニ過キス。故ニ朝鮮又ハ關係列國ニ於テ是等條約上ノ義務ノ履行ヲ停止スヘキヤ否ハ直接列國ニ關係スル國際の問題ニ外ナラス。例セハ米韓修好通商條約ノ如キモ最惠國條款ヲ包含セルニ拘ラス、訂約ノ當事者タラサル日本カ其ノ無効ヲ宣言シテ、米國商人ニ差別待遇ヲ與フルニ至リタルモノニシテ、其ノ他列國トノ條約亦此ノ例ニ漏レス、是レ皆國際問題トシテ效力存否ノ決定ヲ待ツヘキモノナリトス。

(二)是等諸條約ハ當初朝鮮ニ締結ヲ強ヒラレタルモノナレハ關係列國ノ道義上ノ義務殊ニ重シ

朝鮮ハ秀吉ノ征伐ニ懲リテ絕對鎖國ノ政策ヲ執リ、四百年間ノ平和ヲ樂ムヲ得タルカ故ニ開國ノ當初痛ク之ヲ忌避シ、獨佛其ノ他ト兵力ヲ以テ抗爭スルヲ辭セサリシナリ。其ノ後米國ノ勸誘ト外交手段トニ因リ遂ニ修好通商條約ヲ締結シ、諸外國之ニ微フニ至リタリト雖、其ノ本意ニ非サリシハ明ナリ。故ニ關係列國ハ少クトモ第三國ノ強壓排除ヲ援助スル條約上ノ義務ヲ否ムヲ得サルモノナリ。

(三)日本以外ノ關係列國ハ一九〇五年(明治三十八年)迄其ノ義務ヲ全ウセリ

一九〇五年迄ハ關係列國カ朝鮮ノ利益保護ノ爲居中調停ヲ試ミシ事例多ク、米國ハ日清間ノ馬關條約ニ依リ支那ノ朝鮮ニ對スル宗主權ノ要求ヲ否認シ、露國ハ一八九八年(明治三十一年)日本ノ朝鮮強壓ヲ抑止シ、其ノ他ハ又囑々ヲ要セス。然ルニ一九〇五年(明治三十八年)以來此ノ種ノ援助ハ、日本ノ奸策陰謀ニ因リ、全ク其ノ跡ヲ絶チタリ。故ニ裏面ノ真相現實ニ曝露セラレ、日本ノ不信及外交的醜汚、世界ニ明白ト

ナラハ、關係列國ハ、一九〇五年以前ニ於ケルカ如ク、其ノ條約上ノ責任ヲ果スヲ以テ其ノ義務ト思惟スルニ至ルヘシト信ス。

(四)日本ノ世界欺瞞

日本ハ一九〇五年(明治三十八年)其ノ朝鮮保護權ハ朝鮮人民及王室ノ承認セル所ナリト世界ニ告ケタルモ、其ノ虛偽ナルハ朝鮮人カ日本人ト心理、道念、氣質、種族、殊ニ體質スラモ異ニシ、數百年來日本ヲ傳統的讐敵ト做シ、近ク一八八四年(明治十七年)ニ於テ日本代表者ノ駐紮ヲ嫌忌憤慨シ、日本公使館ニ火ヲ放チテ公使以下ヲ驅逐シ、朝鮮王室ニ在リテモ日本ノ不信、王妃ノ虐殺、一八九八年(明治三十一年)ニ於ケル日本兵ノ王宮襲撃、玉體ノ危難、首相農相及藏相ノ慘殺、其ノ後ニ於ケル讓位強迫、李太王ノ幽閉、其ノ他新王ノ庸弱暗愚ナルヲ奇貨トシテ意ノ儘ニ諸種ノ命令ヲ發セシメタル等ノ恨ヲ忘ルルニ暇ナク、殊ニ前王カ日本ノ保護ニ對スル抗議ノ親翰ヲ「ヘーグ」平和會議及米國政府其ノ他ニ送付シタル等ノ事實アルニ徴シテ之ヲ知ルヘシ。

(五)日本ノ壓迫

吾人ハ事實ノ細叙ヲ避ケ單ニ朝鮮ニ於ケル日本ノ暴虐ノ殆ト信スヘカラサル程極端ナルヲ記スルニ止ムヘシ。

一九一三年(大正二年)以降一九二〇年(大正九年)ニ至ル七年間ニ於テ日本ハ六十一萬六千八百三十九名

ノ朝鮮人ヲ有罪トシタリ。其ノ内政治犯ナラサル者ハ僅ニ百分ノ五アルニ過キス。而モ正式ノ審理ヲ經スシテ犯罪即決ニ附セラレタル者四十萬人ニ及ヒ、被檢舉者ニシテ無罪ト爲レルハ二千五百人中僅ニ一人アルノ割合ナリ。又右被處斷者中男女及少年少女ノ別ナク管刑ニ處セラレタル者二十七萬八千八百八十七人ニシテ一人平均九十ノ答ヲ加ヘラレ、管刑ノ結果死ニ至リタル者數千人アリ。朝鮮獨立騷擾事件發生後滿一箇年間ニ於テ消極的示威運動鎮定ノ爲日本警察官及兵士ニ殺害セラレタル者七千六百四十五人、傷害セラレタル者四萬五千五百六十二人ニ及ヘリ。或時ノ如キ日本人ハ五十四人ノ朝鮮人ヲ其ノ不平ヲ聽取スルト稱シテ警察署ノ構内ニ誘拐招致シ置キ、門戸ヲ閉鎖シテ一故意ニ之ヲ銃殺シタリ。又他ノ場合ニハ朝鮮人ヲ教會堂ニ集合セシメ、戸ニ錠ヲ施シテ之ニ火ヲ放チ、脱出セムトスル者ハ無慘ニモ皆之ヲ銃殺シタルコトアリ。其ノ他類似ノ事例枚舉ニ遑アララス。又以テ殘虐、不正義、壓制等ノ暴狀ヲ推知スルニ足ルヘシ。經濟上ノ壓迫亦之ニ遜ラス。朝鮮ノ農業地ハ詐欺、奸計、壓迫又ハ強力ノ手段ニ依リ、今ヤ實際上總テ東洋拓殖會社ノ所有又ハ管理ニ歸シ、鐵道及電信電話線ハ其ノ擴張改良費ヲ國債ノ一部トシテ勝手ニ朝鮮ニ課シタルニ拘ラス、一文ノ賠償ヲモ朝鮮ニ與ヘスシテ之ヲ取上ケ、日本人漁業者及商業者ニハ優先ノ權利ヲ與ヘ、警察力ニ依リテ之ヲ保護シ、外國貿易ハ全部日本人ノ手ニ歸シ、石炭鑛、水道、製鹽等ノ事業ハ皆日本政府ノ管理ニ屬セシメラレタリ。

(六)日本ノ改善ト其ノ經費負擔者

日本ハ朝鮮ニ於ケル水道、交通施設ノ改善ヲ誇示シ之カ爲六千七百萬弗ヲ費消セリト云フモ、此ノ金額ハ果シテ日本カ之ヲ負擔シタリシヤ。是等改善施設ノ皆大陸征服ノ軍事的目的ニ出ツルモノナル事實ヲ暫ク措クトスルモ、吾人ハ尙日本カ今日朝鮮ニ負ハシメ居レル國債額五千四百萬弗、及從來平準以上ニ超過シテ租稅ヲ徵收シタルモノ六千四百萬弗、此ノ合計一億一千八百萬弗、即チ日本ノ所謂改善費ニ殆ト二倍スル此ノ金額ノ費途如何ヲ問ハサルヘカラス。朝鮮ハ日本ノ占領以前國債ナルモノナク、其ノ平準徵稅年額ハ四百萬弗ニ過キサリシナリ。

日本ハ又所謂「智的窒息」ノ政策ヲ行ヒ、日本人ノ學校ハ多キモ朝鮮人ノ學校ハ乏シク、朝鮮人ノ初等普通教育ノ課程ハ三年ニ限ラレ、此レ以上ノ教育ヲ許サル者ハ僅少ノ選拔者ニ過キス。新聞ハ發行ヲ禁セラレ、文化向上ノ手段一トシテ緊迫ヲ受ケサルモノナキナリ。斯ノ如クニシテ朝鮮人ノ寧ロ自滅ヲ願フニ何ノ不思議カアラム。朝鮮ハ東洋ニ於ケル隨一ノ基督教國ナリ。而モ尙世界基督教國ノ十分ナル積極的援助ヲ受ケサルハ痛歎ニ堪ヘサル所ナリ。

(七)日本ハ自稱保護者ニ過キス而モ其ノ信義ヲ蹂躪セリ

日本ノ軍事の朝鮮占領ノ根據ハ朝鮮ノ獨立及其ノ領土保全ヲ保證セル一九〇四年(明治三十七年)二月ノ日韓議定書ニ在リ。日本ハ當初保護者トシテ被保護者ノ財産及身柄ヲ占有シ其ノ管理ヲ受託スルノ形式ヲ執リタルニ過キサリシモ、其ノ後絶エテ駐屯軍隊ヲ撤退セサルノミナラス、受託ノ財産ヲ私シテ自家ノ用

ニ供シタリ。而シテ被保護者ノ身柄ノ成行如何ト問ハハ、世界ハ「日本ハ夫レヲ絞殺シツツアリ」ト答フルノ外ナカラム。

(八) 結論

以上列舉セル所ハ蓋シ歴史上最大ノ國際的罪惡ナリ。米國ノ之ニ處スルノ途ニアリ。其ノ一ハ米國ノ義務ニ屬シ、他ハ其ノ權能ニ繫レリ。而シテ兩者共ニ日本ト國交斷絶ノ危險ヲ帶ヒサルモノナリトス。即チ(一)米國ハ米韓條約ノ義務ニ依リ日本ノ朝鮮強壓ニ對シテ日本ニ抗議ヲ提起シ、極力居中調停シテ朝鮮カ日本ノ爲ニ受ケタル損害ヲ賠償セシムルニ在リ(二)米國ハ一面其ノ當然ノ權利ニ依リ日本ニ對スル朝鮮共和國ノ交戰權ヲ承認シ、事情若シ許セハ、之ニ次キテ朝鮮共和國自體ノ全承認ヲ爲スヘキナリ。交戰權承認ノ戰爭原因タラサルハ十分ナル論據アリ。米國カ「チエツコ・スロヴァキア」ヲ承認セシカ如キ其ノ一例ナリ。一九一八年九月米國カ獨逸ニ對スル該國ノ交戰權ヲ承認セシ時ノ如キ、同國國民議會ハ皆外國ニ流寓セルモノニテ、一人トシテ自國ニ在住シ居リシ者ナク、又國民議會ハ自國ニ寸土ヲモ領有セザリシナリ。然レトモ該民族ハ此ノ國民議會ヲ組織選舉シテ其ノ假政府タル任務ヲ執ラシメタリシナリ。米國ハ此ノ事實ヲ認メテ「チエツコ・スロヴァキア」ノ交戰權ヲ承認シ、次テ同年十一月同國ノ全承認ヲ爲セシニ非スヤ。朝鮮共和國假政府亦全民ノ百分ノ九十五ノ贊助後援ト舊王室ノ合式的承認トヲ得テ正當ニ成立シ、其ノ憲法ハ米國憲法ト同様ノ方針ニ依リテ制定セラレタルモノニ外ナラス。況ヤ自治四千年ニ及ヘル一ノ

民族カ自治ノ繼續ヲ主張シ自治政府ノ樹立ヲ企圖スルハ其ノ當然ノ權利ナルニ於テヤ云々。

(備考) 「フイリツプ・セーソン」ハ今チ距ル約三十七年前ヨリ米國ニ渡航歸化シ同國ニ於テ醫學博士ノ學位ヲ得タリト稱シ現ニ在

米國費府朝鮮情報局長兼「朝鮮評論」主筆タル元朝鮮人(本名徐載弼)ニシテ、其ノ言フ所ニ據レハ彼ハ渡米前日本ニ留

學シ、渡米後ハ「ゲョーザ・ワシントン」大學ニ入りテ醫學ヲ修メ後同校講師タリシコトアリ、又在米中一時歸韓シテ改

進黨ノ一領袖ト爲リ又四年間舊政府ノ顧問ニ任セラレ前皇帝ノ信任ヲ得タルコトアリ。米國歸化後已ニ三十年ヲ經タリト

云フ

三 英國ニ於ケル朝鮮同情者

十月二十六日英國下院議事堂内(委員室)ニ於テ一ノ會合催サレ、席上大不列顛朝鮮同情者協會(The League of the Friends of Korea in Great Britain)ノ組織成立シタリ。會議ノ模様左ノ如シ。(情報彙纂第二第七頁第九項參照)

下院議員「サー・ロバート・ニューマン」氏議長席ニ就キ開會ノ辭ヲ述ヘテ曰ク「吾人ハ今朝鮮カ自由ト正義トヲ獲得セムトスル奮闘ニ對シ援助ヲ與フルノ方法ヲ考究スルノ目的ヲ以テ茲ニ集會ヲ催セリ。吾人ハ頗ル困難ナル地位ニ在リ。何トナレバ此ノ全問題ハ日英關係ト深ク相錯綜シ、日本ハ戰時中聯合國ノ一員タリシノミナラス、今現ニ英國ノ同盟國ナレバナリ。吾人ハ又之ト同時ニ吾人ノ世界ニ對スル義務ヲ盡ササルヘカラス。我カ英國民ハ日韓併合ノ承認者ナルカ故ニ吾人ハ一種特異ノ地位ニ立ツ者ナリ。吾人ハ

日本ニ對シ敵意ヲ挾ムモノニ非ス。吾人ノ求ムル所ハ吾人カ國民トシテ享有スル自由ト正義トヲ出來得ル限リ朝鮮人ヲシテ享受セシメムトスルニ外ナラス。英國民ハ常ニ解放、自由及正義ノ爲ニ儼然トシテ立ツ者ナレハナリ云々」

次ニ「エフ・エー・マッケンジー」氏（日露戰役當時來鮮セシ英國「デーリー・メール」ノ從軍記者ニシテ「朝鮮ノ悲劇」ノ著者）ハ議長ノ指名ニ依リ該協會組織ノ理由トシテ先ツ一九〇四年（明治三十七年）以後今日ニ至ル朝鮮ノ事情ヲ述ヘタル後扱テ曰ク「大不列顛朝鮮同情者協會組織ノ理由ハ朝鮮ノ現狀カ我等基督教徒ノ同情、我等ノ博愛心及愛國の義務ノ觀念ニ要請スル所アルカ爲ナリ。吾人ノ動機ハ政治上ノ目的、又ハ排日的精神ニ出ツルモノニアラス。吾人ノ主張ニシテ貫徹セハ、當ニ朝鮮ノミナラス、結局日本ヲモリスル所アルヘシ。他國殊ニ同盟國ノ内政ニ干涉スルハ特別異常ノ事情アルニアラサレハ、是認スルコトヲ得サル特別異常ノ事件ナリ。然レトモ朝鮮問題ハ斯ノ如キ異常特別ノ事情ヲ存スルモノナリト予ハ主張ス。一九〇四年（明治三十七年）日本ノ朝鮮管制ノ當初白人ハ事實上皆日本ニ同情シ、潛ニ其ノ施政改善ヲ信シタリシニ、數月ナラスシテ事全ク吾人ノ豫期ニ反シ、日本ノ壓制ハ舊政ヨリモ遙ニ甚シキモノアルヲ示シタリキ」

氏ハ更ニ日本移民ノ無制限流入、阿片「モルヒネ」販賣者及醜業媒介者ノ入鮮、日本施政當初ノ暴虐、不正、朝鮮國民ヲ墮落セシメ之ヲ奴隸的民族タラシメムトスルノ計畫等ニ關シ述ヘタル後更ニ語ヲ進メテ曰

ク「日本ノ根本的失敗ハ其ノ同化政策ニ在リ。之カ爲朝鮮人ハ土地ハ日本移民ニ與ヘラレ、朝鮮人ハ延テ滿洲ニ驅逐セラレタル者百萬人ヲ超エ、日本語ハ法廷ノ用語ト爲リ、天然ノ資財ハ横奪セラレ、言論集會ノ自由ハ消滅シ、警察政治ハ至上權ヲ有シ、審理ナクシテ往々死ニ至ラシムルハ笞刑法行ハレタリ。自由ヲ撲滅セムトスル日本人ノ決心ハ一轉シテ基督教會排斥運動トナリ、之カ爲寺內總督暗殺陰謀事件ノ悲劇ヲ演出シ、無辜者拷問ノ慘事ヲ惹起セリ。斯ノ如キ嚴酷ナル壓制政治ハ朝鮮人民ヲシテ從來類例ナキ程ニ一致結束セシメタリ。彼等ハ「ウイールソン」大統領カ國際聯盟ノ力ニ依リ小弱國民ノ爲公正ヲ保持スヘシトノ宣言ニ動かサレテ奮起シ、世界史上最モ著明ニシテ壯烈ナル抗議ノ一タル——平和的大抗議ヲ提起シタリ。然ルニ日本ハ暴虐ヲ以テ之ヲ壓倒シ、其ノ同盟國タル英國政府スラ遂ニ再三鎮壓手段及政治犯囚ノ拷問ニ關シ日本ニ緊切ナル提言ヲ爲スノ已ムナキニ至レリ。朝鮮獨立運動者處遇ニ對スル世界ノ抗議ハ日本政府ヲシテ總督ノ更迭ヲ行ハシメタリ。予（マッケンジー）ハ齋藤新總督及水野新政務總監ノ改革進歩ノ誠意ヲ疑ハスト雖此ノ日本ノ大機關ハ二氏ニ取リテハ餘リニ強キニ過キ、新施政ノ下ニ於テスラ拷問、虐待、暴虐尙殘存セリ」云々ト説キテ多クノ實例ヲ舉ケ、最後ニ日本人タル朝鮮改革者ノ權能ヲ強メ、且日本帝國政府ヲシテ峻烈ナル朝鮮政治ヲ緩和改善セシムル爲、會員ノ一致協力セムコトヲ熱望セリ。

次ニ「ダブリユー・レウエリン・ウイリヤムス」氏起テテ簡單ニ朝鮮同情者協會ハ教會、講演、新聞、議會等有テユル手段ニ依リ朝鮮現狀ノ詳細ヲ英國國民ニ提示シ極力朝鮮人ノ不幸ノ救治ヲ助成セムトスルモノナ

ル旨ヲ述ヘタリ。

浸禮派ノ老功ナル説教者タル「ジョン・クリフフォード」博士（神學博士）ハ左ノ如キ第一決議案ヲ提出セリ。

英國朝鮮同情者協會ハ左ノ目的ヲ以テ之ヲ設立ス

（a）朝鮮ニ於ケル——社會的、政治的、經濟的、宗教的ノ——現在ノ狀態ニ關スル正確詳細ナル情報ヲ宣傳スルコト

（b）朝鮮人民ノ爲正義、自由ノ享有ヲ助成スルコト

（c）朝鮮基督教徒ノ信教上ノ自由ヲ保護スルコト

（d）朝鮮ニ於ケル寡婦、孤兒及政治的及宗教的迫害ノ犠牲者ニ對シ援助ヲ與フルコト

博士ハ説明シテ曰ク『本會ノ設立ハ朝鮮ノ政治ニ干涉スルモノナリト憂慮スル者アリシモ我カ英國民カ從來常ニ他國ノ自由ヲ助成シタル傳統的精神ニ顧ミ更ニ本席上聽取シタル朝鮮ノ慘狀ヲ思フトキハ英國人カ朝鮮民族ノ爲一臂ノ力ヲ盡サムトスルモ怪ムヘキニ非ス。朝鮮人ハ其ノ權利ノ爲ニ戦ヒツツアリ。彼等ハ人トシテ又市民トシテノ權利ヲ騙取サレツツアリ。日本ハ朝鮮人ヲ併呑シ且之ヲ奴隸トナシツツアリ。我等ハ全力ヲ盡シテ其ノ奴隸狀態ノ解放ニ努メサルヘカラス。我カ英國ニ於テハ朝鮮問題ニ關シ通信ヲ抑止スルノ傾向アリト聞ク。我等ハ之カ排除ノ爲ニ戦ハサルヘカラス。予ハ思フ我等ノ本務ハ政府ニ交渉シ

テ朝鮮人民ノ狀態ニ關スル事實ノ開示ヲ求メ且政府ニ勸説シテ日本ノ行動ハ世界ノ良心ニ悖戾スルモノナルコト並其ノ行動ヲ改善スルノ必要アルコトヲ日本政府ニ覺醒セシムルノ措置ヲ執ラシムルニ在リ云云』

下院議員陸軍中佐「テイ・エー・チ・バリー」氏ハ決議案ニ賛成シテ曰ク『此ノ舉ハ朝鮮ノ政治ニ干涉スルモノナルヤ疑ナシ。然レトモ吾人ノ爲サムトスル所ハ一ノ機關ヲ創設シテ此ノ不幸ナル邦土ニ正義ヲ齎サムトスルニ在リ。今ヤ輿論ノ勢力ノ強盛ナル世界史上未タ曾テ有ラサル所ナリ。吾人カ本協會ヲ設立スル所以ノモノハ實ニ此ノ輿論ヲ刺戟シテ朝鮮ニ自由ト正義トヲ來タサムトスルノ趣旨ニ外ナラス云々』

「フイリッブ・スノーデン」夫人ハ朝鮮人ノ主張ニ同情シ且現時英國ニ於ケル難關ノ一ハ戰後人心漸ク冷淡トナリ不正惡虐ノ報道ニモ容易ニ衝動ヲ感セサルニ在リ。然レトモ此ノ心理狀態ハ再ヒ舊ニ復スルニ至ルヘシト曰ヘリ。

次ニ下院議員「エー・ライル・サミュエル」氏ハ起テ曰ク『日本ハ我等ノ同盟國ナリ。然レトモ予ハ英國カ彼カ如キ陋劣國ト同盟セサルヲ得サリシハ不運ナリト思惟ス。前ニ提言セラレタル政府ニ所要事實ノ提供ヲ求ムルノ議ハ妙案ナリト雖、之レ以上ノ援助ヲ求ムルハ政治ノ實際上不可能ナルヘシ。予ハ思フ吾人ノ努ムヘキハ宣傳ニ在リト。朝鮮ノ事態英國全般ニ周知セラルレハ、人民遂ニ憤慨シテ日英貿易ニ影響ヲ及ホスヘシ。是レ日本ヲ動ス唯一ノ方法ナリ。蓋シ日本ノ良心ヲ覺醒セシムルニハ、日貨排斥若クハ之ト類似ノ手段ニ依ルノ外ナクハナリ云々』

斯クテ本決議案ハ滿場一致ヲ以テ通過シタリ。

萬國福音宣傳聯盟書記「エー・エム・グッチ」氏ハ曰ク「我等ハ極ノ兩面ヲ見サルヘカラス。我等ハ本會ノ將來ニ希望ヲ囑スルト同時ニ前途ニ横ハレル危險ヲ念頭ニ置カサルヘカラス。我等ノ日本ニ關スル言議ニシテ世ニ公ニセラルレハ、日本ニ一ノ運動起リ、朝鮮ニ於ケル宗教上ノ自由ヲ杜絶シ、軍國的制度ヲ再現スルコトアルヘケレハナリ云々」

「ライル・サミュエル」氏ハ之ニ應シテ曰ク「日本ニシテ「グッチ」氏ノ言フカ如キ行動ニ出テナハ、是レ隨劣ノ極ナリ。自家ニ有害ナルヲ感知スルニ非サレハ其ノ惡事ヲ中止セサルカ如キ國民程陋劣ナルモノハ之レアラサレハナリ云々」

「チエム・バーウエル」聖路加教會監督「ゼー・エー・ダグラス」氏ハ左ノ役員選任ノ動議ヲ提出シ、且曰ク「吾人ノ求ムル所ハ日本ノ良心ヲ感動セシムルニ在リ。吾人ハ宣傳ニ依リテ輿論ヲ喚起シ、英國公衆ノ良心ヲ衝動シ得ヘシト」。

會長「サー・ロバート・ニューマン」(下院議員)

名譽書記「ダブリユー・レウエリン・ウイリヤムス」

名譽會計「ダブリユー・ヒスロップ」(倫敦英佛協會名譽書記)

委員 陸軍中佐「ジョン・ウオード」(下院議員) 陸軍中佐「タイー・エチー・バリー」(下院議員)

「ゼー・エフ・グリーン」 「スコット・リゼット」博士 「ゼー・エー・ダグラス」

「エフ・エー・マッケンジー」 牧師「バーナード・スネル」

「ダブリユー・レウエリン・ウイリヤムス」氏ハ曰ク「朝鮮ニ關スル情報ハ國際聯盟ニモ之ヲ通報スルノ手段ヲ講シツアリ。之ニ關シ吾人ノ困難トスル所ハ、日本カ我カ同盟國タル關係上、諸新聞カ吾人ノ反對側ニ立チ、隨テ吾人カ新聞ヲ操縱シ得サルニ在リ。吾人若シ朝鮮ヲシテ國際聯盟ニ參加スルノ權利ヲ享受セシムルコトヲ得ハ、此ノ事亦必スシモ成リ難キニ非ス云々」

「ジョン・クリフフォード」博士ハ曰ク「朝鮮ハ目下ノ處此ノ種ノ權利ヲ有セス。吾人ノ爲ササルヘカラサルハ朝鮮ノ爲其ノ種類ニ屬スル何等カノ權利ヲ確立スルニ在リ」

黃氏(朝鮮人)曰ク「國際聯盟協會(The League of Nations Union)ハ一週間前「ミラン」ニ於テ會議ヲ開ケリ。予ハ代表者ノ一人ナルモ、自身出席スル能ハサリシニ由リ、一友人ヲ派遣シタリ。彼ハ朝鮮國際聯盟協會(The Korean League of Nations Union)ノ立案セル決議案ヲ提出シ、議長之ヲ朗讀セシニ、日本代表者ハ之ヲ遮キリテ「朝鮮ニシテ發議スヘキコトアラハ、開ハ必ス予ヲ通ジテ提言セラレサルヘカラス」ト言ヒタリ。此ノ件ニ付テハ此レ以上聞ク所ナシト」。

「エフ・エー・マッケンジー」氏ハ黃氏ヲ會衆ニ紹介シテ曰ク「氏ハ朝鮮民族ノ公認歐洲駐在代表者ニシテ、戰時中米軍參加ノ一軍人トシテ歐洲ニ來リ、休戰後本國民ノ急ヲ聞キ、米國當局ニ除隊ノ許可ヲ求め、爾

來概ネ巴里ニ在リテ朝鮮ノ爲盡瘁セリ。氏ハ歐洲外交家ニ朝鮮ノ主張ヲ宣明シ、毎月朝鮮ニ關スル佛語雜誌ヲ發行シツツアリ。要スルニ氏ハ代表官トシテ未タ列國ノ承認ヲ得サレトモ、實質上朝鮮人民ノ公使、代表者、代辯者タルヲ失ハサル者ナリ云々」

黃氏ハ拍手ヲ以テ迎ヘラレ更ニ演說シテ曰ク『予ハ茲ニ我カ國民感謝ノ意ヲ諸士ニ致ス。諸士カ自由民タル有ラユル權利ヲ享有スルニ反シ、我等ハ辛苦シ且奴隸ノ境遇ニ在リ。我等ハ何等ノ自由ヲモ有セス、信教上ノ自由モナク、良心ノ自由モナク、基本的人權スラナキナリ。我等カ諸士ノ許ニ來レルハ此ノ國ノ民主政治ノ發祥地タルヲ知ルカ爲ナリ。英國ハ終始全世界被壓民族ノ光明トシテ立テリ。諸士カ世界大戰ノ爲最大ノ犠牲ヲ拂ヘルハ何ノ爲ナルカ。文化救済ノ爲ニ非スヤ。朝鮮ト英國トハ一八八三年（明治十六年）英韓條約締結以來常ニ深厚ナル友好關係ヲ持續セリ。予ハ茲ニ諸士カ友國ノ獨立ヲ助成セラレムコトヲ求メサルヲ得ス。予ハ朝鮮カ既往十五年間ニ於ケルカ如キ狀態ニ何時迄モ甘ンスヘシトハ信セス。貴國カ今日ノ如キ自由ノ幸運ヲ開キシニモ數百年ノ歲月ヲ要セシニ非スヤ。我等ハ曾テ一小隱遯王國トシテ近代文明ト全ク絶縁セシカ爲、現代強國ト拮抗スルノ力ナク、且公正ナル機會ヲモ有セサリシト雖、我等ハ既ニ我等ノ教訓ヲ實感シタルカ故ニ、諸士ノ援助ヲ得ハ其ノ地位ヲ改善スルニ至ルヤ必セリ。朝鮮現時ノ慘狀ハ「マツケンジー」氏ノ語ル所ノ如シ。今ヤ朝鮮ハ軍國主義ト壓制政治トノ爲ニ壓壞セラレタリト雖、其ノ歴史ハ遠ク四千二百年ノ古ニ遡ルヘク、諸外國スラ一時文化ト教育トヲ朝鮮ニ求メタルコトアリ。朝

鮮ハ貧弱ナル小國ナリト雖尙其ノ國ヲ愛スルニ千萬ノ民人ヲ有ス。予ハ茲ニ諸士ニ對シ貴國ノ誠意アル同情ヲ感謝ス云々」

本會合ニ缺席陳謝ノ書面ヲ送リタル者左ノ如シ。

「アール・ホートン」博士、「スコット・リゼット」博士、「ジョウエツト」博士、奴隸解放先住民族保護協會書記「トラヴァース・バックストン」氏、國際仲裁協會會員「エフ・マヂソン」氏、日曜學校聯合會員「クレ・ボナー」牧師、福音自由教會全國大會員「テイ・ナインチンゲール」牧師、蘇格蘭總會所屬聯合自由教會員「サー・ロバート・シムツン」氏、「アール・シー・ギリー」牧師等

最後ニ本誌記者ハ個人的ニ得タル情報トシテ右報告ニ附記シ、叙上參會者ノ外英國著名ノ主導的人物ニシテ此ノ朝鮮同情ノ運動ニ對シ深厚ナル同情ヲ表シ、將來其ノ進歩ニ力ヲ盡スヘキコトヲ約シタルモ、彼等カ官職ヲ有スル關係上、其ノ姓名ヲ本協會名簿ニ列スルコトヲ便トセサル者數十人アリト曰ヘリ。

（備考）本記事會合者中「ジョン・クリッフォード」博士及「スノーデン」夫人ハ他國ニ於ケル壓迫ニ對シ常ニ熱烈ナル同情ヲ寄ス

ル者トシテ著名ナル者ナリ。

四 日本ノ基督教征伐

日本ハ九州ニ於テ又朝鮮人ノ暗殺陰謀ヲ發見シタリト號シ、爆彈ヲ所持シ居タリトテ朝鮮人ヲ捕縛シ、尙某基督教學校ニ於ケル長老派總會ノ開會ニ際シ一ノ秘密結社ヲ發見シタリト稱シテ之ニ解散ヲ命シ、其

ノ會員ヲ逮捕シタリトノ報道ヲ掲ケ、更ニ之ヲ評シテ、基督教徒ハ、多分米國宣教師モ其ニ、怖ロシキ日本ノ監獄及野蠻ナル拷問ノ苦患ヲ嘗メ居ルナルヘシ。日本ノ打撃ヲ加フルハ常ニ基督教ナリ。山東割讓ノ如キ亦此ノ脚色ノ一齣ニ過キス。若シ朝鮮ノ解放ニシテ成就セラルレハ、世界ニ對スル日本ノ脅威ハ大ニ減少スヘシ。而シテ是亦黃禍ノ害毒ヲ滅スル所以ナルヘシ。斯クテ此ノ方策ハ、一舉シテ一國民ノ自治ヲ回復シ、支那ニ自主ノ權ヲ與ヘ、久シク苦惱セル基督教ノ信仰ニ對スル日本ノ襲撃ヲ挫折セシムヘシ云々ト曰ヘリ。

五 次期大統領ニ對スル米民ノ期待

一九二〇年十一月九日付「ハーディング」氏宛在華府米國農會連白書ヲ掲タ。同書ハ「ハ」氏就任後直ニ(一)對獨逸平和克復(二)對獨逸條約締結(三)國際會議ヲ招集シテ公正ナル國際法典ヲ編成シ、列國間又ハ一國ト其ノ隸屬又ハ被壓民族トノ間ノ爭議ニシテ關係當事者間直接ノ會商ニ依リ平和的ニ解決スル見込ナク延テ累テ國際的平和若ハ列國間ノ善意ノ諒解ニ及ホスノ虞アルモノヲ調停スヘキ國際仲裁庭並國際法及國際正義ノ最高法院ヲ設置スルコト(四)永久の世界平和ヲ保障シ、漸次軍備撤廢ヲ實現シ且從屬悲慘ノ國民又ハ被壓民族カ公正ナル處理ト適當ナル被害報償トヲ訴求シ得ヘキ國際裁判所設置ノ途ヲ開クノカアル世界の機關即チ世界平和保全協會トモ稱スヘキモノヲ設置セムコト等ヲ慫慂セリ。

六 「ハースマン」事件

「ジャパン・アドヴァンタイザー」紙ヨリ米國議員團京訪問及基督教青年會ニ於ケル「ハースマン」事件ニ關スル記事ヲ轉載ス。

七 朝鮮人ノ爲ノ「クリスマス」義捐金ノ勸奨

在上海朝鮮人學校一校及在「ホノルル」朝鮮人基督教學院二校建築費ノ義捐ヲ勸奨セルモノナリ。

八 費府朝鮮同情者協會

本會ハ十二月二日月次例會ヲ開キ、東洋ヨリ恰モ歸米セル世界日報學校大會代表者牧師「モーリス・サムソン」博士(費府ノ人)一場ノ朝鮮視察談ヲ試ミタリ。氏ノ言フ所ニ據リテ判斷スルニ、氏カ短時日ノ在鮮中ニモ、日本官吏ノ米國人ニ對スル傲慢ナル態度及朝鮮人ニ對スル殘酷不正ノ處遇ニ因リ、氏カ米人基督教者タル熱血ハ強度ノ昂奮ヲ感セサルヲ得ザリシモノノ如シ。當日博士ハ本會執行委員ニ、「トーマス・エル・ホッヂ」氏ハ當務書記ニ選ハレタリ云々。

九 自由ナル朝鮮

「アール・ケイ・ホワシ」(朝鮮人黃)氏ノ主宰セル在巴里朝鮮情報局ハ、「自由ナル朝鮮」(La Corée Libre)ト題スル佛語月刊雜誌ヲ發行シ來レルカ、同誌ハ佛蘭西及白耳義ニ廣ク頒布セラレ、其ノ記事ハ佛國新聞其ノ他ノ定期刊行物ニ轉載セラルルモノ尠カラス。

黃氏ハ曩ニ米國遠征軍(對獨逸)ニ參加シ休戰後名譽アル除隊ノ特典ヲ受ケタリ。氏ハ英佛語ニ通スル

學者ニシテ熱烈ナル愛國者ナリ。(本冊子第二十頁第二行參照)

十 朝鮮ヨリノ書翰(書中ノ地名人名一切故ラニ削除シアリ)

先ツ「エキスプレス」便ニ依ル發信ノ機會到來セシニ付一書ヲ呈ス云々ト冒頭シ、最近ノ實話トシテ、何某ノ叔母某ハ婦人會ニ於テ説教中止ヲ命セラレ、之ヲ拒絕セシ爲幾回トナク打擲セラレ、今尙監獄ニ拘禁サレ居レトモ其ノ理由ヲ知ルニ由ナシ。何人ニテモ犯罪ノ嫌疑ヲ受ケ又ハ有罪ト認メラルトキハ、警察ハ平氣ニ其ノ人身柄ヲ自由ニス。一基督教徒ノ如キ意外ニモ突然捕縛セラレ、其ノ理由ヲ詰問セシモ、何等ノ説明ヲモ與ヘラレス。又一學生ハ大韓青年會員ナリトノ嫌疑ヲ受ケテ捕縛セラレ、訊問ノ際之ヲ否認セシニ、果テハ該會員ノ姓名ヲ列舉セヨト迫マラレ、警官ハ再三彼カ殆ト窒息スルマテ彼ノ頭ヲ水中ニ押入レテ拷問シタリ。又某博士ノ青年助手ハ獨立新聞ヲ讀ミタリト他ノ數名ノ者ト共ニ逮捕セラレタリ。警官等ハ某博士ニ例ハ如ク毆打ヲ加ヘ幾度モ其ノ鼻孔ニ水ヲ注入シテ遂ニ絶息セシメ、翌早朝醫師ヲ招キテ漸ク蘇生セシメタリ。答刑ハ廢セラレタルモ豫審ニテハ尙打撲ノ手段ノ用キラルコトアリ。予ハ四五日前ニ毆打セラレタル中央教會ノ一會員ヲ見タリ。彼ハ例ハ如ク鐵ノ手械ヲ箝メラレ、腕ハ肉ハ裂ケ破レタリ。日本ハ朝鮮人ヲ其ノ所有物ノ如ク考ヘ居レリ。日本ノ迫害ハ特ニ基督教徒ノ信仰ニ向フモノナリトハ一般ノ感想ナリ。日本人カ躍氣ニナリツツアルハ眞實ニテ、鮮人射撃ノ行ハルルコトスラアリ。爆發前警官ニ發見セラレタル地雷ノ中ニハ官憲自身ノ埋設シタルモノモアリト信セラル。米國議員團ヲ歡

迎セムトセシ牧師長老等ハ警察署ニ檢束セラレ、一團ニ二十二人許モ詰メ込マレ、牧師等ハ爲ニ大病ニ罹レリ云々ト記セリ。

十一 學生欄

露國勞農政府ノ承認ヲ「殺戮ト握手」スルヨリモ惡シト唱フル政治家ニシテ、朝鮮ニ於テ「ボルシエグイキ」ニモ勝ル屠殺、殘虐、野蠻ノ記録ヲ有スル日本ト握手セムトスルモノアルハ、奇怪ナル差別待遇ニ非スヤ。

世界ノ基督教民ハ、是迄、事、日本ノ内政ニ關ストノ理由ヲ以テ、朝鮮ニ於ケル基督教徒虐待ニ對スル抗議ヲ差控ヘタルカ、今ヤ日本カ彈着地方即チ國外ニ於テ朝鮮人基督教徒ニ對シ組織的迫害ヲ加ヘ居レルニモ拘ラス、依然トシテ無關心ナル態度ヲ以テ之ヲ看過セリ、世界ハ全ク人道及基督教の同情ノ精神ヲ失ヘルモノナルカ云々。

第二 布哇新聞

(一) 國民報記事摘要

本紙ハ布哇在留排日鮮人中李承晚ノ系統ニ屬スル一派ノ每週數回不定期ニ發行スル諺文新聞ナリ

一 歐洲ニ於ケル我カ外交活動 (一九二〇年十二月二十九日號及一九二二年一月一日號)

巴里ニ駐在スル我カ代表者團書記黃起璜ノ公文ト朝鮮ノ爲極力盡力セル英國ノ友人「マッケンジー」氏(朝鮮ノ悲劇ノ著者)ノ報告トニ據レハ、這間黃氏ハ英京倫敦ニ渡リ「マ」氏ト協同シ、十月二十六日午後四時倫敦英國社會黨下院議員室内ニ於テ韓國親友會組織セラレタリ。其ノ狀況左ノ如シ。

諸君ノ知ラルル如ク我々カ今日此處ニ會合ヲ催シタルハ、自由ト正義ノ爲、韓國ヲ援助セムトスルニ在リ。此ノ事ヲ爲スニ當リ我々ノ地位ノ困難ナルハ、日本ヲ對手トスルニ在リ。且日本ハ我同盟國ナルカ爲ナリ。乍併我等ハ世界ニ對スル我等ノ義務ヲ果ササルヘカラス。我等ハ日本ノ韓國併合ヲ承認セリ。我等ハ日本ニ對シ敵意ヲ表スル者ニアラス。我等ハ自己ノ受クル自由ト正義トヲ韓國國民モ共ニ享受スヘキモノト信スト。

主席「ニウメン」氏(英國下院議員)ハ「マッケンジー」氏ヲ會員ニ紹介シ、同氏ニ會ノ趣旨ヲ説明セシメタリ。「マ」氏曰ク

我々カ英國ニ於テ韓國親友會ヲ組織セムトスルハ他ニアラス。是レ即チ我カ基督教の同情ト我人道及愛國の責任トノ使命ナリ。如此會ヲ下院議員室ニ於テ組織スルハ極メテ緊要ナル事ナリ。乍併此ノ親友會ハ別ニ政治的意味ヲ含ムモノニアラス。又排日思想ヲ宣傳セムトスルモノニアラス。只韓國ニ於ケル悲惨ナル事情ヲ天下ニ紹介スルニアリテ、其ノ結果ハ韓國ノミヲ利スルニアラスシテ、日本ヲモ大ニ警醒セシム

ルニ在リ。千九百四年日本ニ於テ韓國ノ保護權ヲ獲得セシ際、我等ノ日本ニ同意セルハ日本カ韓國ノ腐敗セル政府ヲ改良シ、遍ク國民ニ幸福ヲ與フルコトヲ信セシヲ以テナリ。然ルニ數月ナラスシテ我等ノ信用ハ裏切ラレタリ。這ハ昔時ノ野蠻時代ニ行ハレタル無道ナル帝國主義ニ基ケルカ爲ナリ。日本施政ノ根本的大失策ハ韓國内ニ施カムトスル同化政策ナリ。且韓國内地ニ日本ノ移民政策ヲ施ス爲數百萬ノ韓國良民ヲ滿洲地方ニ放逐シ、法廷ニ於テ日本語ヲ使用シ、言論集合ニ於ケル國民ノ自由ヲ壓迫シ、笞刑ヲ施シ、無辜ノ良民ニ裁判ノ宣告ナクシテ獄死スルノ惡刑ヲ施シ、日本ハ韓國ノ自由ヲ絶對的ニ撲滅セムトシテ基督教會ヲ迫害シ始メタリ。彼ハ隱謀事件ニ依リ無罪ノ基督教徒ヲ捕ヘテ瀕死ノ惡刑ヲ施セリ。斯ル無道不義ナル日本ノ管轄下ニ於テモ韓國人民ハ無前ノ覺醒ト團結ヲ爲セリ。然ルニ時恰モ米國大統領「ウイilson」氏主唱ノ下ニ世界ノ聯盟會組織セラレ、小弱國ノ爲人道ト正義ヲ呼號セルニ應シ、韓國民ハ一齊ニ日本ノ政府ニ對シ、反抗ヲ表示シテ起リ。這ハ有史以來嘗テ無キ平和的拒意ナリキ。如此文明的行動ニ對シ日本ハ益野蠻的手段ノ鎮壓ヲ用キタルヲ以テ、我カ英國政府ハ日本ノ我カ同盟國タルニモ拘ラス、韓國愛國者ヲ無數ニ捕縛シ惡刑ヲ施セルニ對シ日本政府ニ再三抗議ヲ提出セリ。千九百十九年韓國ニ於テ起レル獨立運動ヲ鎮壓セル日本ノ手段ニ對シ世界の抗議ノ起レル結果、日本政府ハ長谷川總督ヲ交迭シテ齋藤總督ニ替ヘ諸般ノ施政ヲ改良スヘシト稱セルモ空言ニシテ却テ監獄ニ於テ惡刑ヲ施サルコト甚シ。故ニ我等ハ日本政事家ヲシテ韓國施政ニ關シ暴逆ナル手段ヲ眞ニ改正セシメムコトニ努力セムトス。

「マッケンジー」氏ノ演説ヲ畢リタル後、過去數箇月間我等ノ宣傳事業ヲ援助セル、倫敦ニ於テ有力ナル新聞記者「レウエリン・ウイリアムス」氏ハ宣傳方法ニ付簡單ニ説話セリ。(情報彙纂第二第七頁第九項參照)

我等ハ此ノ會ヲ組織シ之ヲ進捗セシムルハ宣傳ニ在リ。各教會ニ於テ講演ヲ催シ、新聞紙上ニ韓國ニ於テ發生セル真相ヲ紹介シ、英國民ノ公憤ヲ起サシムルニ在リト。

次テ「ジョン・クリップフォード」神學博士(「バプチスト」派ノ大立者)ハ左ノ決議案ヲ提出セリ。

一、韓國事情ニ關シ社會的、政治的、經濟的、宗教的狀態ヲ詳細調査スルコト

二、大韓民族ノ自由ト正義ヲ保障スルコトニ盡力スルコト

三、大韓基督教徒ノ自由ヲ保護スルコト

四、大韓ニ於テ政治又ハ宗教ノ關係ニ依リ慘殺セラレタル者ノ寡婦孤兒ヲ救済スルコト

右決議案ハ「クリップフォード」博士ノ説明後、陸軍中佐「バリー」氏(下院議員)ノ動議ニ依リ滿場一致ヲ以テ可決シ、「ダグラス」牧師ヨリ左記諸氏ニ會務委任方ノ動議提出アリ決定セリ。

會長 サー・ロバート・ニウメン(下院議員)

名譽書記 レウエリン・ウイリアムス(新聞記者)

會計 ダブリユー・ヒスロプ

委員 陸軍中佐ジョン・ウオード(下院議員)

同 陸軍中佐ゼー・エーチ・バリー(下院議員) エフ・エー・マッケンジー

同 ゼー・エフ・グリーン バーナード・スネル ゼー・エー・ダグラス スコット・リッゼット

次ニ「マッケンジー」氏ハ黃氏ヲ紹介シ、黃氏ハ起テ簡單ニ演説セルカ、其ノ要領ニ曰ク

英國ハ自由ノ誕生地ナリ。英國人ガ自由ノ爲ニ事ヲ爲スハ其ノ祖先ノ遺傳ナリ。我等韓國人カ今日此ノ席ニ於テ英國ノ親友ト會合スルコトヲ得タルハ欣幸トシ感謝スル所ナリ。諸君ハ國家的自由ヲ享ケ我カ民族ハ國家的奴隸トナレリ。我等カ來リテ諸君ニ訴フル所アルハ、貴國カ民主主義ノ發生地ナルカ爲ナリ。英國カ今回ノ大戰亂ニ生命ト財産ノ大ナル犧牲ヲ拂ヒタルハ如何ナル理由ナリヤ。即チ世界ノ文明ヲ保全セムトスルニアラスヤ。一千八百八十三年貴國ト韓國ト條約ヲ締結シテヨリ以來兩國ノ間ハ國交上極メテ圓滿ナル關係ヲ持續セリ。英國ノ親友タル諸君、韓國ノ復興ニ力ヲ貸サレムコトヲ希望ス。余ハ確信ス。十五年前ノ韓國ハ永遠ニ保持シ能ハサリシナリ。過去ニ於テ我等ノ政治ハ我等ノ過ニ依リテ腐敗シタリ。然レトモ英國カ今日ノ自由ヲ享クルニハ永キ歲月ヲ費シタルニ非スヤ。我カ韓國ハ世界ノ情勢ニ暗キ國トシテ現代ノ文明ニ後レタリト雖、尙四千年ノ歴史ヲ有スル二千萬民ノ團結的國民ノ精神ハ、遂ニ自由ト正義ヲ以テ世界列國ノ一員トナルヘシ云々。

(以下ハ一九二一年一月二十九日及二月五日號掲載記事ニシテ前項記事ト多少重複スル所アレト對照參考ノ爲掲載ス)

其ノ後「ニウメン」氏ハ「マッケンジー」氏ヲシテ本會ノ目的ヲ説明セシメタリ。「マ」氏ハ其ノ演説中

一九〇四年（明治三十七年）ヨリ今日ニ至ル迄韓國カ日本ノ治下ニ於テ受ケタル處遇ノ大要ヲ述ヘ、左ノ如ク説明セリ。

我々カ今日午後、韓國ノ親友會ヲ大英國ニ組織セルハ、頃者ノ韓國狀況カ紳士ノ同情ト人道ノ正義及我等ノ愛國心ノ義務トヲ刺戟シテ之ヲ然ラシメタノテアル。

韓國親友會ヲ英國下院內ニ設立スルハ、緊要ナル事ヲナル。之ハ政治的方面ヨリ排日思想ヲ高唱セシムルノテハナイ。我等ハ我等ノ望ム所ヲ宣言シ、而シテ之カ成功ノ曉ニハ獨リ韓國ノ幸福ナルノミヲハナク、併セテ日本ノ幸福ヲアル。

韓國ノ内政ニ干涉シ又ハ特ニ同盟國ノ内政ニ干涉スルハ、特別ノ場合ニ限り行ハルヘキモノテアルカ、韓國ハ現ニ此ノ如キ特別ノ場合ニ在ルノテアル。

一九〇四年日本カ初メテ韓國ニ勢力ヲ伸ヘタ際、一般ノ白人等ハ韓國ニ對シテ同情ヲ表シタ。我等ノ信スル所ニ據レハ、韓國ハ當ニ其ノ政府ヲ改革シ、總テノ不公平ヲ掃蕩シ、人民ノ生活ヲシテ公平ナラシムヘキテアツタ。然ルニ我等ノ期待ハ裏切ラレタ。ソシテ我等ヲ驚愕セシメ、驚愕ノ結果我等ヲ怒ラシメ、我等ヲシテ惡感情ヲ懷カシメタ。开ハ我等カ其ノ事情ヲ知タカラテアル。即チ舊政治ヨリモ寧ろ惡キノミナラス專制政治ヲ繼續シテ益甚シイカラテアル。一九〇四年以來日本人ハ移民ヲ始メ娼妓、阿片商其ノ他不良ノ徒ヲ移植シ始メタルコトカ第一ノ施政テアツタ。次テ奸惡ナル計策ヲ用キテ韓國ヲ強奪シ、

韓人ヲ奴隸ニシタ。這ハ日本政府ノ爲ス所ニシテ、韓國ノ疆土ハ日本ノ植民地トナリ、韓人百萬ヲ滿洲ニ放逐シ、裁判ハ日本語ニ依テ行ハレ、天然の產物ハ日人ニ獨占セラレ、言論出版ノ自由ト個人ノ自由ハ剝奪セラレ、警察權ハ濫用セラレ、笞刑ヲ用ウル爲裁判前ニ死スル者多ク、教會ヲ撲滅セムトシテ無罪ノ者ニ惡刑ヲ施シタ。此ノ惡刑ハ韓人ヲシテ相結束シテ一團トナラシメタ。韓人等カ此ノ運動ヲ始メタノハ「ウイルソン」大統領カ國際聯盟會ハ世界ノ小弱國ヲ保護スト云フタカラテアル。日本ノ爲シタ所ノ無道ハ大英國ニ影響ヲ及ホシタ。英國ハ日本ノ同盟國ナルカ故ニ、如此政治上ノ關係ニ依リ捕ヘラレタル所ノ人民ニ惡刑ヲ施ス事ニ對シテハ攻撃スヘキテアル。一九一九年韓人カ獨立運動ヲ始メタカラ、全世界ハ日本ヲ攻撃シタ。日本ハ武斷政治ヲ行フ所ノ寺內總督（原文ノ儘）ヲ召還シ齋藤ヲシテ之ニ代ラシメタ。日本カ如此變革ヲ行フタコトハ感謝スヘク賀スヘキコトヲアル。併シ齋藤總督モ惡刑虐待無道ヲ行フタ。我等ノ爲スヘキコトハ我等カ合同シテ日本ヲシテ韓國ニ自由ヲ與ヘシムルコトヲアル云々。次ナ「ダブリユー・エル・ウイリアムス」氏ハ我カ會ニ於テ可決セラレタルモノニ對シテハ再言ノ必要ナキモ、我等ノ爲スヘキコトハ、韓國ノ狀況ヲ擧ケテ各教會、演說會、新聞、雜誌國會ニ建言スルニ在リト曰ヘリ。

次ニ「ジョーン・クリップフォード」博士ノ建議アリ。要項左ノ如シ。

一、韓國ノ社會、政治、經濟、宗教ニ關シ宣傳スルコト

二、韓人ノ爲公平ト自由ヲ回復セシムルコト

三、韓國基督教信徒ヲ保護スルコト

四、政治及教會ノ壓迫ニ依リ寡婦トナレル者及孤兒ヲ保護スルコト

博士ハ之ニ對シ「右ノ事項ハ中佐「ジョン・ウオード」氏ノ提出セラレタルモノナルモ同氏不意ノ爲メ自己ヨリ提出スルコトナレリト」附言シ且曰ク

我等ハ韓人ノ苦楚ノ爲ニ事ヲ爲ササルヘカラス。我等ハ韓人ノ經過セル事件ニ對シ考慮セサルヘカラス。我等ハ韓國内ノ友ヲ救護セサルヘカラス。我等ノ憂慮スル所ハ韓國ノ政治ニ干涉スルニ在リ。然レトモ我カ國ノ歴史ニ鑑ミルニ、我カ民族ハ古來隣國ヲ援助シ來レリ。依テ我等ハ隣國ノ自由ノ爲、斷乎トシテ事ヲ爲ササルヘカラス。我等ハ從來束縛セラレタル者ヲ救援セムトセリ。英人ノ韓人ヲ援助スルニ對シ何等ノ異議ヲ挾ム者ナカルヘキヲ信ス。我等ハ確信ス「マッケンジー」氏ノ齎セル報道ヲ公表スルニ於テハ、之ヲ聞ク者驚異シ且怒リテ善後ノ事ヲ爲スヘキヲ。斯クテ韓人ヲシテ虐待ヲ免カレシムルコトヲ得ヘシ。韓人ハ義ノ爲ニ戰ヘリ。彼等ハ人タルノ待遇、國民タル待遇ヲ享クル能ハス。日本ハ韓人ノ膏血ヲ搾リ同時ニ韓人ヲ奴隸トセリ。我等ノ爲スヘキ所ハ何等カノ方法ニ依リ韓人ヲ奴隸ノ境遇ヨリ免レシムルニ在リ。自分ノ知レル所ニ據レハ、韓國内ニ於ケル壓迫甚シキヲ以テ、我等ハ此ノ壓迫ヲ取去ルカ爲ニ戰ハサルヘカラス。余ハ此ノ提出事項ニ同意シ併セテ諸君ノ同意ヲ請ヒ、且重ネテ新ニ組織

セラレタル此ノ團體ノ重大ナルモノナルコトヲ主張ス。

二 大韓獨立正式承認案提出（一九二一年二月五日號）

「エストニア」共和國労働黨代表「マドナー」氏ハ韓國獨立ノ承認ヲ要求スル建議案ヲ正式ニ自國國會ニ提出セリ。

三 米國國會議員ノ同情（一九二一年一月一日號）

「ミソリー」州選出上院議員トシテ當選シタル「セルチン・ビー・スヒンス」氏ノ在華府朝鮮歐米委員會宛來信

本員ニ對スル當選祝賀ノ電報領收セリ。余ハ貴國ノ光復事業ニ對シ滿腔ノ同情ヲ有シ、出來得ル限り盡スヘキヲ以テ、將來通信アラムコトヲ希望ス。

「イリノイス」州選出下院議員トシテ當選シタル「ウイリアム・イー・メイソン」氏ノ同上部宛來信

本員ニ對スル貴祝賀ヲ謝ス。余ハ華盛頓ニ歸着後、貴國民族ノ光明正大ナル大意ニ對シ能ク限りノ援助ヲ爲スヘシ、特ニ以前未決トナレル韓國獨立承認案ニ對シ、再度國會ニ提出方周旋スヘシ、新ナル共和黨ノ施政ハ世界ノ小弱國ヲ見棄テサルヘキコトト信ス。

貴光復大業ニ對シ深キ同情ヲ表ス。

(二) 韓美報記事摘要

本紙ハ布哇在留排日鮮人中過激主義ヲ奉スル一派ノ每週數回發行スル謄文新聞ニシテ前掲國民報ニ對立セ

ルモノナリ

大韓民國臨時政府檄文 (一九二二年一月十九日號)

大韓民國臨時政府員一同ハ露領在住百萬同胞ニ告ク

諸君ハ大韓人ノ血ヲ受ケタル大韓國民ナルヲ以テ當ニ國ヲ愛スルノ堅キ心アルヘシ。己ニ大韓ヲ愛スルノ堅キ精神アリ。必スヤ大韓ノ讎敵ニ對シ之ヲ憎ムノ情アルヘシ。大韓ノ敵トハ誰ゾヤ。彼レ日本ナリ。三百年前八年間ノ長歲月ニ互リ三百萬ノ同胞ヲ虐殺シ、貴キ我カ文明ト財産ヲ破壊シタルモノハ日本ナリ。十年前五千年來我等ノ血ヲ以テ守リ來リタル國家ヲ亡シ、二千萬ノ民族ヲ奴隸ト爲シ、多クノ愛國者及有識者ヲ虐殺シタル讎ハ日本ナリ。昨年三月ヨリ今日迄無道ナル銃劒ヲ以テ我等ノ父母、兄弟姉妹ヲ虐殺セラルモノハ日本ナリ。思フテ此處ニ至ラハ、大韓ノ山川草木禽獸ニ至ルマテ何レノ時カ之カ血ヲ潑リ、上ハ以テ祖先ノ冤ヲ洗キ、下ハ以テ子孫ノ辱ヲ免レシメムトシテ胸ヲ打チ齒ヲ嚙マサラムヤ。況ヤ人ニ於テオヤ。大韓人ニシテコノ怨極リナキ讎ニ對シ我カ皮膚ヲ削ラムトスルノ考ヘナキモノハ人ト謂フヘケムヤ。況ヤ本國ニ於テ我等ノ愛スル兄弟姉妹等カ大韓獨立ノ爲ニ血ヲ流シ、有ラユル苦楚ヲ舐ムルノ秋ニ

當リ。何人ヲ問ハス讎ト親シミ敵ニ屬セムトスル者アラハ之ヲ人ト謂フケムヤ。唯二千萬ノ怨怒ハ此ノ如キ凶惡ナル逆賊ノ爲ニ熱シ、義人ノ手ニセル劒ハ此ノ如キ義理ヲ辨セサル輩ノ胸ニ逼ラム。特ニ露領五十萬ノ同胞ハ從前ヨリ愛國心強ク國ノ讎ヲ報スルノ決心堅キヲ以テ矜リトシテ今日迄十餘年間光榮アル歴史ヲ有シ、我等ニ非サレハ誰カ祖國ヲ回復センヤ。トハ露領五十萬同胞ノ晝夜唱ヘ來レル所ナリ。然ルニ悲ムヘシ、思ハサリキ、此ノ如キ露領同胞中ヨリ讎ニ親シミ敵ノ勢力ヲ憑藉シテ我等ノ獨立運動ヲ妨害セムトハ、誰カ夢ニタモ之ヲ思ハンヤ。浦鹽新韓村ニ敵ノ勢力ニ據ル民團組織セラレ、某々處ニ於テハ敵ノ軍隊ノ保護ヲ請ヒ、某々ハ敵ニ服從ヲ盟ヘリトノコトヲ聞クニ至リテハ、胸塞リ血涙ヲ禁セムト欲スルモ得ス。殊ニ露領五十萬ノ同胞ハ五十年來露領ニ衣食シ其ノ保護ヲ受ケ且露國革命ニ於テ國人同様ニ待遇シ、我等ノ獨立運動ヲ自己ノ事ノ如クニシ、力ヲ盡シテ我等ヲ援助セムトスルニ拘ラスハ、此ノ如キ恩人ノ恩ヲ謝スルコトヲ知ラス、却テ恩人ノ敵タル日本ニ據ラムトスルカ如キハ人ト謂フヘケムヤ。露人ノ過去現在ニ於テ我等ヲ愛シ且同情セルハ、實ニ我等ノ國ヲ失ヒ、死ストモ故國ヲ回復セムト決心セラル人民タルヲ知レルニ依ル。故ニ我等ヲ尊敬シ且愛セルナリ。然ルニ我等ニシテ彼ノ國ニ對スル義理及恩人ニ對スル義理ヲ辨セサル卑劣ノ民族タルヲ知ルニ於テハ、彼等ハ既ニ我等ヲ蹴リ排斥セルナラム。嗚呼。同胞等何ノ顔色アリテ神ニ對シ露人ニ對セム。且露人ニ對スル諸君ノ可憎態度ヲ示スニ於テハ、露人ノ胸中忿怒ヲ生セシメ、全世界ノ人類ヲシテ我等ヲ唾棄セシムヘシ。我等大韓民族ハ此ノ如ク義理ヲ知ラサル者

ナラムヤ。我等ハ祖先ノ國ト恩人ニ對シテ流セル血ヲ傳フル者ナリ。故ニ同胞ハ胸中ニ於テ悔ヒサルヘカラ
ス。勿論此ノ如ク義理ヲ忘レ敵ニ附クノ行爲ハ露領同胞全部ノ意志ニ非スシテ、少數不良ノ輩ノ行爲ナリ。
露敵ノ勢力ニ忍レテ懷キ、多數ノ順良ナル同胞ハ默セルモ、五十萬ノ勇壯ナル同胞ハ伊藤ヲ殺シ、李完用ヲ
刺シ、齋藤ノ車ニ爆彈ヲ投シタル勇士ノ同族タル光輝アル名譽ヲ汚シ、萬古ノ大事業タル獨立運動ヲ妨害
スルマテ、此等ノ輩ヲ棄テ置クハ、即チ露領五十萬同胞全體ノ責任ナリト謂フヘシ。蓋シ數個ノ惡類、
國ト恩人ニ對スル大ナル義理ヲ棄テ國ト恩人ノ讎ノ大トナリ、全露領五十萬同胞之カ爲皆汚名ヲ被リ、從
テ大韓二千萬ノ國民共ニ其ノ羞辱ヲ受ク。既ニ此ノ事ヲ知レル世界ノ人類ハ「嗚呼亡國ノ人民ナリ。韓國
人ハ國ヲ知ラス、恩人ヲ知ラサル義理ナキ民ナリ」ト嗤笑詛呪スルノ聲聞ユ。

我等ノ露領同胞ノ義理ニ信賴シ、其ノ勇氣ヲ信シ、不義ヲ見賣國賊ヲ見ルノ時我身ヲ亡ホスモ之ヲ懲罰ス
ルニアラサレハ堪ヘサルノ氣慨ヲ信シ。五千年來ノ國ノ恩惠ト五十年來ノ露國ノ恩惠ヲ深ク記憶シ、熱血
ヲ以テ之ヲ報セサレハ止マサルノ勇氣ヲ信セムトス。玆ニ我等カ愛シ且深ク信スル露領五十萬同胞ニ厚キ
情誠ヲ傾ケテ此ノ書ヲ送ル。義氣アル大韓ノ同胞奮發シ義氣ヲ發スヘシ。

大韓民國二年十二月一日

國務總理	李東輝	內務總長	李東寧
外務總長	申翼熙		
代理次長			

法務總長	申圭植	軍務總長	盧伯麟
財務總長	李始榮	學務總長	金圭植
勞働局總辦	安昌鎬	交通總長	南亨祐

第三 米國新聞

(一)「華盛頓ヘラルド」記事摘要

一九二〇年一月二十日號

日本人ノ愛國者務問「火ノ金網ニ包ミテ

「セヴァランス」病院長「エヴキソン」博士ト同道最近「ホノルル」ニ到着シタル朝鮮人學生金載德
(二十歲)ハ、朝鮮獨立運動ニ參加シタル爲、五回逮捕セラレ、毎回務問ヲ受ケタリトテ、其ノ身體ヲ露ハ
シテ、呵責ノ痕跡ヲ示シ、日本憲兵ノ蠻行ニ付怖ロシキ物語ヲ爲シ、且曰ク「日本人ハ近代科學ノ新發明
ヲ中世紀的務問ニ應用シ、毛布狀ニ編ミ上ケタル鐵條網ニ電流ヲ通シテ之ヲ熱シ務問ノ具ニ供スルコトア
リ。務問ハ屢他ノ囚人、又ハ時トシテ婦人ノ面前ニ於テ行ハレ、且極メテ怖ロシク且卑猥ナル呵責ノ方法

ヲ用キ、出來得ル限リ傍觀者ヲ恐嚇セムト努メ居レリ。

「自分モ前述ノ如キ毛布狀鐵條網ニテ腕ヲ焼カレ、又鍵ニテ卷キタル竹製ノ鞭ニテ打タレタルコトアリ。又第五回目ニ投獄セラレタル時ノ如キ、六箇月半ニ亙リ一回ノ審問モナシニ監禁セラレ居タリ。我等朝鮮人カ自由ヲ獲得スル迄ニハ、尙多クノ身命ヲ犠牲トスル場合屢之レ有ルヘケレトモ、我等ハ全世界ノ基督教徒カ日本ヲ強制シテ我等ニ自由ヲ與ヘシムル日ノ必ス來ルヘキヲ信ス」云々

當時布哇旅行中ナリシ朝鮮假共和政府大統領李承晚博士ハ、金ヲ引見シ、暗涙ヲ浮ヘツツ彼ノ肩ヲ撫シテ「神ハ全能ナリ。日本ハ日本タルニ過キス」ト語リタリト云フ。

(二)「紐育タイムズ」記事摘要

一九二〇年十二月六日號

英領印度ノ獨立運動

獨逸政府カ亞細亞諸民族ノ獨立承認ニ同意シタル場合ニハ、印度、愛蘭、埃及、メソポタミアノ革命黨ハ露國勞農政府ト同盟シテ、英帝國ノ破壞ヲ試ムヘシトノ説、昨日(一九二〇年十二月五日)當紐育市「マツカルビン・ホテル」ニ於テ開催セラレタル印度獨立同情者協會(The Friends of Freedom for India)ノ大會ニ於テ力説セラレタリ。當日ノ會合者ハ印度人、愛蘭獨立同情者協會其ノ他愛蘭關係諸協會ノ代表者

勞働組合員ノ急進主義者等ヲ主トシ、總員無慮三百名ニ達シ、席上「印度革命團ト愛蘭革命團トハ既ニ同盟ノ状態ニ入レリ」トノ一言ハ大喝采ヲ博シタリ。

印度獨立同情者協會ノ專務書記「タラクナス・ダス」氏ハ革命運動ノ爲印度ヨリ追放セラレ、自ラ米國市民ト稱スル志士ナルガ、氏ハ演説シテ曰ク「革命印度ハ勞農露國ト同盟セムコトヲ期ス。全世界ノ希望ハ繋リテ勞農露國ニ在リ。今日英國ノ帝國主義ニ對スル眞實ノ勁敵ハ勞農露國ナリ。我等被壓諸民族ハ、悉ク勞農露國ト提携シテ、英國ニ對スル神聖同盟ヲ形成スヘキナリ。獨逸ハ未タ曾テ印度ノ敵タリシコトナシ。彼若シ露國ノ如キ外交政策ヲ採用セハ、吾人亦獨逸ト提携スルヲ辭セス。吾人ハ日本ト言ハス、獨逸ト言ハス、苟モ英國ト反對ノ位置ニ立ツモノナラハ、世界何レノ邦國トモ、友好關係ヲ結フニ躊躇セス。排英政策ノ存スル所即チ吾人ノ在ル所ナレハナリ。吾人ハ既ニ多クノ國民ト同盟關係ニ入レリ。其ノ内革命ノ爲最モ勇敢ニ奮闘セルヲ愛蘭ト爲ス。愛蘭戰勝ノ日ハ英帝國崩壊ノ時ナリ。印度亦之ト共ニ其ノ獨立ヲ贏チ得ヘシ。印度ニ於ケル「シン・フエン」的運動ハ既ニ開始セラレタレハナリ。

『由來米國ハ東洋民族ニ損害ヲ加ヘス、常ニ自由ノ保持ヲ以テ其ノ傳統の方針ト爲セリ。故ニ吾人ハ米國カ、數億ノ民人ヲ隸屬トスル英國ト協同スルコトナキヲ信ス。英米ノ協同ハ早晚米國カ英國ノ爲ニ戰ハサルヲ得サルニ至ルヘキヲ意味スレハナリ云々』

印度獨立同情者協會ノ國民的組織者タル「サイレンドラ・ギヨース」氏ハ次ニ「印度ノ獨立運動」ニ關シ

演説シテ、英國ハ強力ヲ以テ印度ヨリ排斥セラルヘシト豫言シ、且曰ク『我等印度人ハ必要ノ場合五千萬ノ常備軍ヲ編成スルコト容易ナリ。加フルニ豊富ナル天然資源ノ有ルアリテ、祖國獨立ノ用ニ供シ得ヘシ云々』

在米勞農露國大使館商務官「ホーヴィッチ」博士ハ「レニン」ノ言ヲ引用シテ、今日二億五千萬ノ民カ十二億五千萬ノ民人ヲ從屬ノ地位ニ置ケルハ、全世界ニ於ケル紛争ノ真因ナリト斷シ、且曰ク「印度ノ獨立ハ白色人種ノ司配的勢力ヲ危ウスヘシトノ叫ニハ同感ノ意ヲ表スル能ハス云々」

次ニ印度ノ稅政ヲ指摘シ、米國公衆ニ報告ノ爲五名ノ印度實情調査委員ヲ選定シ、米國元老院外交委員會ニ陳情聴取ヲ請願シ、米國ニ於ケル政治的印度亡命者ノ檢舉ニ對シ抗議スル等ノ事項ヲ具シタル決議文可決セラレタリ云々。（編者附言尙紐育邦字新聞ノ報道ニ據レハ、同日夜ノ同會主催ノ演説會ニ於テハ米國元老院議員「ノリス」氏モ一場ノ演説ヲ試ミ朝鮮人其ノ他ノ革命團體モ之ニ參加シテ盛況ヲ極メ、大英國ト「ロイド・デヨーデ」「ウイルソン」等ヲ罵倒シ、散會ノ際ニハ勞農露西亞ノ萬歲ヲ三唱シタリト云フ）

（本冊子第三十六頁第二項參照）

第四 米國刊行物

（一） 在米朝鮮同情者協會ノ目的位置及役員

米國ニ於ケル朝鮮同情者協會ノ發行ニ係ル英文印刷物ニ據リ同會ノ目的並同會本部ノ位置及役員ヲ示セハ左ノ如シ。

目的

- （一） 朝鮮ノ實情ヲ宣傳シテ米國公衆ニ周知セシメ且朝鮮民族ノ福利ヲ圖ルコト
- （二） 朝鮮人基督教徒ノ信教自由ヲ保護スルコト
- （三） 従前朝鮮人ノ受ケタル虐待ノ再演ヲ防止スルコト
- （四） 朝鮮ニ於ケル寡婦、孤兒、及無告ノ窮民ヲ救助スルコト
- （五） 米鮮兩人民間ノ友誼的及通商の關係ヲ扶殖進善スルコト
- （六） 朝鮮獨立ノ爲ニ輿論ヲ喚起統一スルコト

位置

華府「ウッドワード・ビルディング」七三二號

中央執行委員

總裁 海軍提督「ジョン・シー・ワットソン」（米國海軍豫備役）

副總裁 元老院議員「デヨーデ・ダブリユー・ノリス」（「ネブラスカ」州選出）

同 「デヨーデ・ダブリユー・スターン」（米國農會委員）

專務書記 「エス・エー・ベック」（二十年間ノ朝鮮同情者）譯者曰ク元在京城大米聖書公會主任ニシ

ヲ大正八年中引揚ケ歸國セシ「エス・エー・ベック」(韓名白瑞巖氏ト同一人ナラムカ)

會計 「アール・エー・チ・ブラット」(「メツロポリタン」印刷會社員)

理事 李承晚博士(華府在住)

同 「フリッヅ・ゼイソン」博士(費府在住)(米國歸化朝鮮人徐載弼)

同 「ダグラス・ブットナム・バーティ」夫人(華府在住)

(二) 在米印度獨立同情者協會ノ目的位置及役員

米國ニ於ケル印度獨立同情者協會ノ發行ニ係ル英文印刷物ニ據リ同會ノ目的並同會本部ノ位置及役員ヲ

示セハ左ノ如シ。

目的

(一) 印度人タル政治的亡命者ノ爲米國ニ於ケル避難ノ權利ヲ支持スルコト

(二) 印度獨立ノ主張ヲ發表スルコト

位置 紐育市東第十五街七番地

役員

總裁 「ロバート・モース・ロウエット」教授

副總裁 「ダッドレー・フィールド・マローン」

專務書記 「タラカナス・ダス」(印度人、前々項記事ニ見ユ)

總務書記 「アグネス・スネッドレー」

「エス・エヌ・ギョース」(印度人、前々項記事ニ見ユ)

會計 「ジャートルード・ビー・ケリー」

印度ニユース通信擔當者 「バサンダ・クーマー・ロイ」

法律顧問 「ギルバート・イー・ロー」

同 「フランク・ビー・ウォルシュ」

執行委員

前記役員ノ兼任スル外駐米勞農露國商務官「アイザーク・エー・ホールグキツチ」「アブラハム・レフコヴ井ツチ」「ローチャ・エヌ・ボールドウ井ン」「ジヨセフィン・ビー・ペンネット」
牧師「ジョン・エー・チ・ツレー」「ジョン・デイー・ムーア」等

國民議會

「トスガン・ベンネット」(「コンネツチカット」州「ハートフォード」居住)、「フランツ・ボアス」教授(紐育居住)、「ダフルユー・イー・ビー・ツボイス」博士(同上)、其ノ他紐育、「ブルックリン」、市俄古、桑港、華府、「シャートル」(「バルチモア」等ノ居住者二十五名

印度顧問部

「タラタナス・ダス」(紐育居住)、「エス・エヌ・ギョース」(同上)、「ビー・ケー・ロイ」(同上)、其ノ外紐育、桑港、「ロシアンゼルス」、「ルイジニア」州「ニュー・オーレアンズ」、加州「ホルトヴヰル」、同「カルサ」、同「フレズノ」、同「ウヰロウス」等居住ノ印度人十一名

第五 英米通信

本記事ハ本府ニ到達セル英米通信ノ一節ヲ摘録シタルモノナリ

(一) 在米鮮人活動ノ形式 (一九二〇年十二月十四日紐育發信)

(前略)在米鮮人ノ活動ハ萬事在米愛蘭人ノ物真似ヲ爲シ、漸ク其後ヲ追ヒツアルコトハ、最早動カスヘカラザル事實ニ有之、情報局 (Information Bureau) ヲ朝鮮同情者協會 (League of the Friends of Korea) ノ設立ノ如キ全ク愛蘭人ト同様ノ機關ト組織トニ依ルモノニ外ナラス。又最近ニ至リテハ本月五日 (大正九年十二月) 又々印度人ノ獨立運動モ是等ト同様ノ形式ニテ紐育ニ於テ中々盛大ナル發會式ヲ舉ケ申候。斯様ノ次第ニテ所謂「壓迫民族」ハ漸次聯合的組織ヲ以テ世界的大運動ヲ試ミムトスル傾向相見エ申候。而シテ之カ牛耳ヲ執ルモノハ、一ニ在米愛蘭人ニシテ、其ノ援助者ハ米國人ニ外ナラサルハ、申迄モ無之

候云々。

(二) 在米鮮人ノ活動機關 (一九二〇年十月二十日華府發信)

米國東部ニ於ケル朝鮮人ノ活動機關トシテハ華府ニ於ケル朝鮮共和國最高委員會 (The High Commission of the Republic of Korea) 及費府ニ於ケル朝鮮情報局 (The Bureau of Information for the Republic of Korea) ノ二箇ニシテ、最高委員會ニハ大統領博士李承晩、議長金奎植、大統領秘書林 (B.C. Lynn) 委員部書記李 (Wm. Y. Lee) 法律顧問「フレッド・エー・ドルフ」 (Fred A. Dolph) (米人辯護士) アリ。其ノ他「海外駐在委員會」ヲ設ケ議長金奎植其ノ委員長ヲ兼ネツツアリ。二名ノ「タイピスト」ヲ雇傭シテ常ニ多忙ヲシク執務シ居レリ。(情報彙纂第二頁第一項及第九頁末項參照)

在費府情報局ニテハ主事博士「フィリップ・ゼイソン」 (Dr. Philip Jaisohn) (朝鮮人) トテ、元韓國皇帝顧問トカ、米國醫學博士トカ稱スル者、專ラ其ノ任ヲ當リ、更ニ同局ヨリ朝鮮評論 (The Korea Review) ヲ毎月刊行シ、其ノ主筆ヲ兼ヌ。同誌ハ專ラ米人其ノ他ノ外國人ニ對シ所謂日本ノ惡政ヲ知ラシメムトスル宣傳雜誌ニシテ、朝鮮同情者協會 (The League of the Friends of Korea) ナルモノヲ白人間ニ組織シ、其ノ會員ニハ無代配付シ居レリ。協會費ハ一箇年一弗ニシテ、同雜誌ヲ要求スル特別會員ハ會費一箇年二弗ト定メ居レリ。而シテ茲ニ注意スヘキハ該協會ノ各地支部會長ニ相當知名ノ士ヲ見受クルコトナリ。目下

米國ヲ通シテ十七箇ノ支部アリ。其ノ所在地及會長左ノ如シ。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| アライヤンス (オハヨ州) | タイ・ゼー・ブライソン博士 |
| アン・アーハー (ミシガン州) | ダブリユー・シー・ルーファス博士 |
| ボストン (マサチューセッツ州) | エル・エー・チ・マリーリン博士 |
| 市俄古 (イリノイス州) | 元老院議員ゼー・ゼー・バーブーア |
| コラムバス (オハヨ州) | ウィリヤム・ホーストン博士 |
| フィンンドレー (オハヨ州) | ダブリユー・ダブリユー・ガイヤー博士 |
| フォストリヤ (オハヨ州) | エフ・ユー・ウィルバー博士 |
| カンサス市 (ミズリー州) | グラント・エー・ロビンス博士 |
| リマ (オハヨ州) | 牧師タイ・オール・ハミルトン |
| マンスフィールド (オハヨ州) | アール・イー・テューロス博士 |
| ニューバーグ (オレゴン州) | シー・イー・ギブソン博士 |
| 紐育市 | シー・ゼー・スミス博士 |
| 費府 | フロイド・ダブリユー・トムキンス博士 |
| リーデング (ペンシルヴェニア州) | フランク・エス・リヴィングッド |

桑 港

ティッフィン (オハヨ州)

エル・エー・マッカフィー博士

エー・シー・シューマン博士

華盛頓市

海軍提督ゼー・シー・ワットソン

右ノ内華府支部會長ハ嘗テ一八七一年ヨリ一八七三年迄横濱ニ常泊補供艦長トシテ在任セシコトアリシ者ナリ。

朝鮮同情者協會ノ會員數ハ、彼等ノ報スル所ニ依レハ、一萬人以上ニテ、會員所在地ハ全米各州ヲ始メ支那、日本、朝鮮、英、佛、露ナリト稱シ居レルモ、他ノ方面ヨリ得タル情報ニ依レハ、三千位ニテ内一千ニハ朝鮮評論誌ヲ無代贈呈シツツアルモノノ如シ。(本冊子第十七頁第五行及第三十四頁末行參照) 同誌ハ在桑港韓

國國民協會發行ノ「大韓民報」ノ韓文新聞ニ對スル在米鮮人ノ唯一ノ英字月刊雜誌ナリ。叙上華費兩府ノ二機關ニヨリテ大抵毎月何等カノ小冊子ヲ刊行シテ種種宣傳ニ努ムルモ、昨今ノ狀態ヲ見ルニ、彼等ノ主張ハ從來單ニ宗教家方面ニ道德的援助ノミヲ要求スルニ在リシニ、最近ニ至リテハ、盛ニ朝鮮ニ於テ鑛山其ノ他未發展ノ産業有望ナル旨ヲ吹聴シテ、米國事業家ニ對シ、東洋殊ニ朝鮮ノ企業熱ヲ煽フルカ如キ態度ニ出テ、以テ事業家方面ノ物質的援助ヲ哀願シツツアリ。若シ我ニ彼等ノ宣傳ニ對應スルノ要アリトセハ、此ノ點ハ最モ注意ヲ拂フヘキモノナルヘシ云々。

(三) 朝鮮問題ト英國 (一九二一年一月二十日倫敦發信)

英國ニ於ケル極東研究熱ハ、大戰終了ト共ニ俄ニ起リ來リ、支那方面ノ研究ト同時ニ、朝鮮問題ノ研究ニ對シ漸ク興味ヲ覺エ、政治家ト云ハス、實業家ト云ハス、一般國民ノ舉ツテ注目ヲ拂フノ傾向アリ。此ノ時ニ際シ、昨年仲夏例ノ「エフ・ユー・マッケンジー」(本冊子第八頁第四行參照)米國、加那陀ニ於ケル排日宣傳ヲ打切り、突如トシテ英國ニ現ハレ、爾來所謂朝鮮問題ニ關スル言論俄ニ諸種ノ紙上ニ現ハレテ、全ク如上ノ傾向ト投合シ、「マッケンジー」自身スラ、一時ハ當初ノ豫想以上ノ反響ヲ齎ラシタルニ驚キタルモノノ如クニ察セラレタリ。(情報彙纂第二、第七頁第九項參照)

之カ爲彼ノ英國朝鮮同情者協會(The League of the English Friends of Korea)ノ如キモ、樂樂ト設立セラレシ由ナリ。該協會會員連ノ系統ハ、多クハ自由黨、労働黨ニ屬スル下院議員ニシテ、平素彼等ノ抱懷セル自由急進ノ主義主張ニ巧ニ迎合シテ其ノ會員ニ誘導シタルモノノ如クニ考ヘラル。

兎モ角同協會カ既ニ英國議院内ニ於テ發會式ヲ舉ケシ一事(本冊子第七頁第三項參照)ニ依リテ見ルモ、唯單ナル好事家ノ閑事ト輕々ニ看過スヘカラサルモノアリ。

「マッケンジー」カ昨秋全英各地ノ新聞雜誌ニ對シ、其ノ著書「朝鮮ノ獨立運動」(Korea's Fight for Freedom)ハ、無代頒布ヲ大行的ニ行ヒ、所謂同業ノ誼ヲ以テ同情的新刊紹介ヲ掲載セシメ、巧ニ排日の宣傳ヲ行ヒシカ如キハ、頗ル效果アリシモノノ如ク、之ニ對シ彼ノ誤謬ヲ指摘セシ者ハ、僅ニ「ブランド」(Brand)氏(編者附言氏ハ本年二月八日支那北京方面ヨリ京城ニ入り十日内地ニ向ヒタル倫敦「タイム

ス」通信員「ゼー・オー・ビー・ブランド」ノコトナラムカ)一人ノミニテ、他ハ全英各地中央地方ヲ舉ゲテ、悉ク彼ノ著述ヲ裏書セシ模様ナリ。

斯ノ如ク英國内一般ノ輿論ト傾向トカ、頗ル興味ヲ以テ極東ノ記事ヲ歡迎スルノ情勢アルヲ以テ、自然英國ノ新進記者界ニハ、東洋視察ノ希望ヲ抱ク者多ク、隨テ自ラ「東洋事情精通家」タル專門的地位ヲ獲得セムコトニ腐心スル者モ多有之ヤニ聞キ及ヘリ。現ニ昨年末カ本年一月初カニ日本到着ノ筈ナル「マシエスター・ガーデヤン」社ノ記者「ハミルトン」(Hamilton)氏等ノ今回ノ東洋視察ノ如キハ、全ク此ノ意味ニ外ナラサル由ナリ。同新聞ハ最モ急進的ナル「リベラリスト」ノ主張ヲ支持シ、其ノ爲恰モ「アスキス」卿ノ機關紙視セラレ居リ、現内閣ニ反對シテ、愛蘭獨立ニハ寧ロ好意ヲ示シ居レリ。同紙ハ昨秋頃數次朝鮮問題ヲ論評シ、屢排日の記事ヲ掲ゲシ由ニテ、同紙ノ系統ヨリ見レハ、自然朝鮮人ニ同情スルモ無理カラスと思ハル。

前記協會ノ外當英國ニ於テ團體的ニ會合シテ朝鮮問題ヲ論議セムト試ミシモノハ(一)原始種族保護會(二)宗教團體ノ會合位ノモノニシテ、一般ニ米國ニ比シテハ全ク同日ノ談ニアラス。未タ何等憂慮スル程ノ程度ニアラスト推斷セラル。

宗教團體ニ對スル活動ハ「朝鮮ノ復興」ノ著書「ジョーゼフ・ダブリュー・グレイヴス」(Joseph W. Graves)ナル者(情報彙纂第三第十六頁參照)倫敦ニ居テ構エ「國際社會奉仕會」(International Social

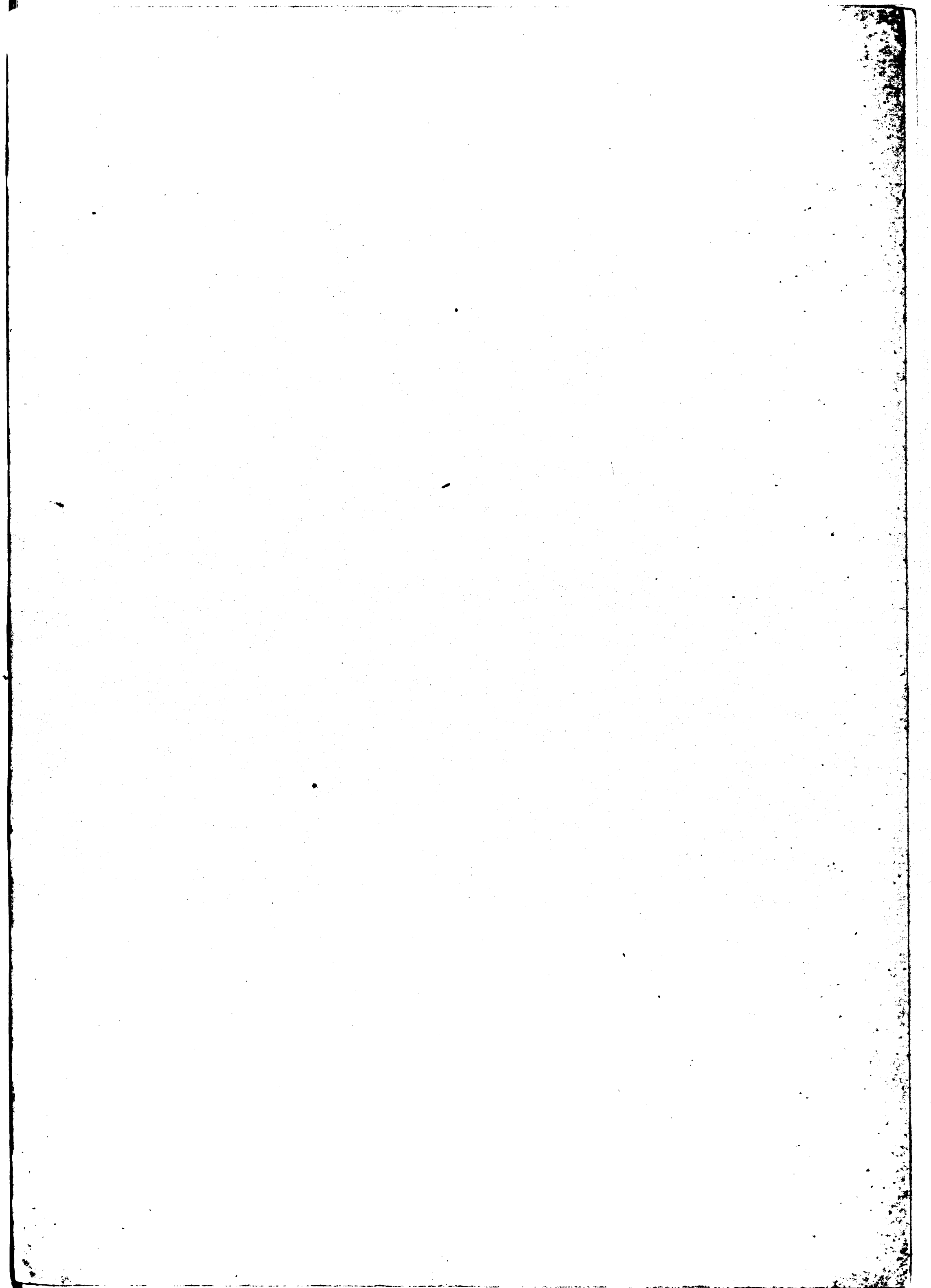
Service Society) ナル名稱ノ下ニ宗教團體ト聯絡ヲ取り、専ラ排日宣傳ニ努メ、朝鮮内ニ於ケル基督教壓迫ヲ誇張シ居ルモノ如シ。而シテ宗教團體側ニ於テハ、傳道費寄附募集ノ口實トシテ、日本ノ虐政ヲ匡正スル爲ニ基督教化スルノ必要アリトテ、東洋傳道ノ急務ヲ説キツツアリトノコトナルモ、果シテ幾許ノ信憑ヲ措クヘキカハ尙疑問ナリトス。

從來英國議會ニ於テモ、議員中ヨリ朝鮮問題ニ關スル質問ヲ提起セムトスルモノ再々ニ及ヘル由ナルモ其ノ都度英國政府ハ日英國交上ニ至大ノ影響ヲ及ホスヘシトノ意味ヲ以テ、質問者ト事前ニ協議シテ公然ノ問題ト爲ササル由ナリ。尙聞込ミタル所ニ依ルモ、英國政府カ先ツ朝鮮總督府ニ對シ、同情的態度ヲ保持シ居レルヲ察知シ得ヘシ。

斯ノ如ク英國ノ輿論カ、大體ニ於テ、未タ米國ノソレノ如ク、惡化シ居ラサルコトハ、自明ノ事實ナリ。一方日本側ノ宣傳上ヨリ之ヲ見レハ、目下ハ寧ロ最モ適當ノ時機ニテ、極力宣傳ニ努力スヘキ好機ナラム。

事前ニ於テ真相ヲ宣傳スルコトハ、事後ニ辯明スルニ比シ、勞少クシテ效果多クレハナリ。

【畢】



110 #10

發行所

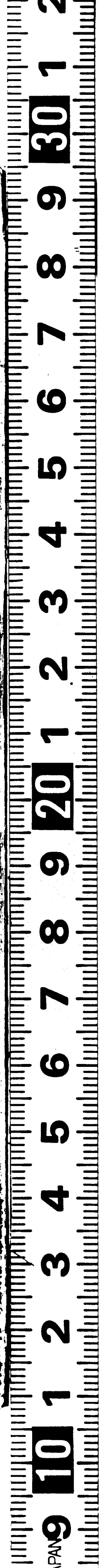
民衆時論社

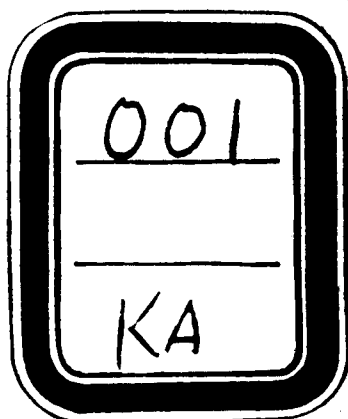
白衣同胞에게告함

町田 耘民 著



049-32



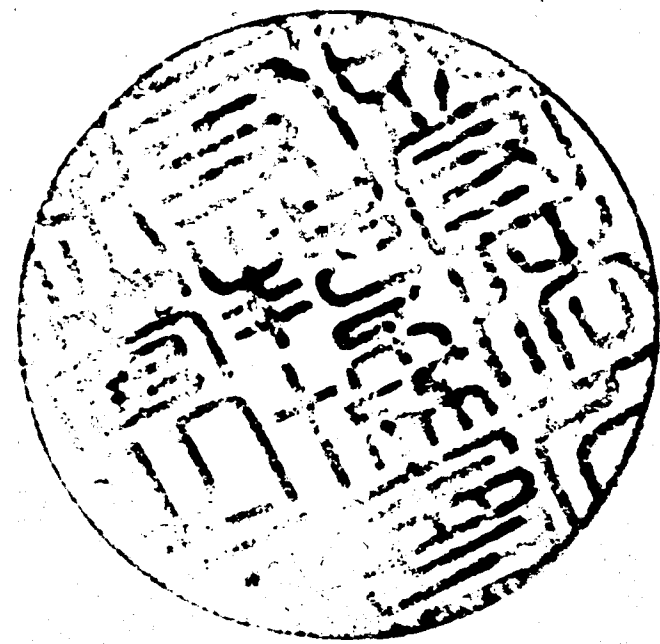


町田 耘民 著

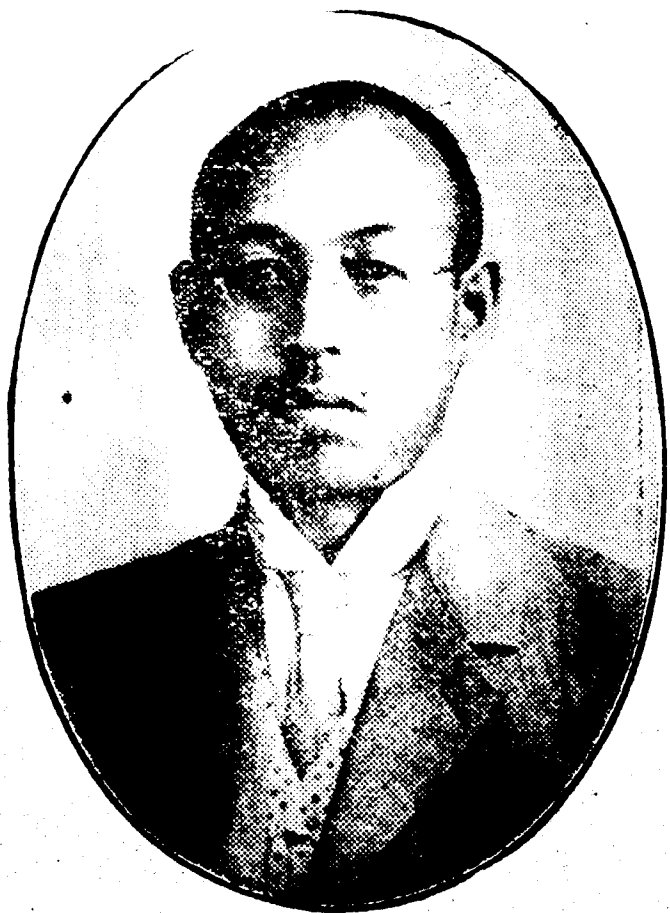
白衣同胞에게 告함

發行所

民衆時論社



緒言



나를判斷하여주시기를願하는것입니다。萬若諸君의生覺이를엿거든卽時곳치지안이하면안될것이며萬若余가말하는것이를넘이잇고、虛僞가잇다하면念慮마시고質問하시고敎示하여주심을바랍니다。

내가只今本文을쓰는대對하여먼저筆者가잇다한者인것을일너들이여筆者의身分을明

緒

言

此一文은『現代朝鮮人の缺陷』에對하여、내가本바를忌憚엄시그대로써서、내가더욱親愛하는朝鮮人兄弟諸君에게말하고자하는것인즉아못조록諸君은그리알으시고眞實하게이어주시기를바라는것입니다。그리고내가말하는것이를너엿나或은諸君의生覺이를엿

白히 하여들이지안이하면안이 되겟다고生覺함으로、玆에筆者의略歷을附記합니다。

余는明治四十一年(隆熙二年)來鮮爾來一管의筆으로써出世하여、新聞記者도 되고著述者도 되고、私塾을設立하여鮮人教育에從事한일도잇섯고現在에는大正十四年二月以來『民衆時論』이라는政治雜誌를主催하여朝鮮統治에關한評論을主宰하고잇습니다。

余가既往二十年間筆을놓치안코何時던지京城에잇습으로、其間伊藤 曾禰兩統監寺內 長谷川 齋藤三總督의統治를보고今에또山梨總督의統治를보고잇습으로、多少間朝鮮을觀察한一人이라고自負하고잇스나그러나余가이갓치多年職業的으로朝鮮을觀察하여도아즉『참된朝鮮』을알엇다고는生覺지못합니다。 이것은、아마、朝鮮人自體로도몰으는것이안인가함이다。日本人에게『참된日本은무엇이나』고물으면거기對하여明確히、斷定的으로對答하는者가果然幾人이나잇슬가民族性과思想은퍼難解하고또複雜하여서그것을單一하게容易하게볼라고하는것이誤解이니、卽몰으는것

이正體고、難解로보이는것이正解에近함이나안인가生覺합니다。余는自己의性癖은阿諛迎合을조와하지아니하고、是非를論하는데에는權力도金力도무서워하지안이하고恒常爲政者에게方策을넌이고注意를促하며、改善을要望하기에努力하여、적이社會를爲하여裨益하였다고밧으나、이것은決코나의誇張이안이고、定評이잇는것이고事實입니다。余는如斯한一布衣고如斯한마음을가지고、또如斯한職業에잇는者인故로、決코官憲의走狗가되여서曲筆도안코、또他人의依賴함에달아서虛僞를書하는것같은것은안입니다。

어디까지던지公正한春秋筆法으로操觚의天職에盡力할라고生覺하고잇습니다。故로諸君도아모조록그런맘으로、猜疑의맘을버리고、感情을버려서더욱公平한눈으로此文을잘읽어주시기를바라는바입니다。 다음에또하나말삼하여두어야할것은、余가이冊子를私費로印刷하는것은相當히經濟的苦痛이엇지만은、다시더一層困難한것은出版한此冊子를여러諸君에게頒布하는方法이엇습니다。郵便을付送한다하여도各

位의姓名을올리고집재頒布할야면은郡廳이나、面事務所나、或은學校、金融組合갓
후、多數한人士들하고直接關係가有한機關을通하야頒布하지안으면안되겟기에、自
然이冊子는或處에서는學校로서配付하는지도올오고、잇던地方에서는面事務所或은
金融組合에서配付하야늘일는지도올오지만은配布하는대가何處이든지決코그곳의機
關冊子도안이고宣傳도안인것을諒解하시기를바랍니다。

民衆時論社長 町 田 耘 民

目 次

一、社會問題와余의意見	一
總督政治와不景氣說……失業者……落伍者의離散……流離鮮人의生活狀態	
二、日鮮併合의理由와我觀	八
併合의原因論과結果論……日本의對鮮方針과其事實	
三、法律思想과公德心……我觀	一〇
鮮人의騷擾性……非文化行爲……詐欺와盜癖……公德心觀	
四、資本主義說과余의意見	一五
日本의投資와利益說……產米増殖과鐵道網……搾取와併吞說……資本化	
와獨占說……物質文明과民衆生活	
五、獨立運動과共產主義宣傳觀	二五
在外鮮人의反抗……日本의威力과對策……憂國과同胞愛……共產主義	
와結果觀……併合과國是……獨立의利害觀	

二、社會問題와 余의 意見

總督政治와 不景氣說……失業者……

落伍者의 離散……流離鮮人의 生活狀態



鮮人은 말하기를, 總督政治가 조치 못하기 때문에 朝鮮은 時勢不振으로 일이 업서지고, 失業者、徒食者、落伍者가續出하여 먹을 수가 없다. 그結果로는 多年間居住한 情다운故 鄉을 버리고, 山中에 들어가 火田民이 되는者도 있고, 國境을 넘어가 南北滿洲露領에 가서 安住地를求할야고하는者도續出하고, 日本内地에도 年々히多數의 勞働者가 가는 것이니 萬若 總督府가 이것을等閑히 하여 두면多數의 窮民은 終末에 全部 朝鮮에서 逃走하지 않으면 안될 것이라, 그런고로當局에서는 速히 對策을講하여 鮮人에게 生活의 安定을 주어야 이 傾向을防止하여 주었스면, 하고있다.

余는此에對하여如此히生覺하고있다

多數의 鮮人 諸君이 生活難에 苦痛으로 지내는 것은 事實이다。

世上에 不景氣인 所 隨으로 失業者、徒食者、落伍者가 續出하여、그 結果로 情다운 故鄉을 離리고 各地에 流離放浪하는 것도 亦事實이지만 流離함이 困憊의 結果이고、困憊은 不景氣의 結果라도、不景氣가 다만 批政의 結果라고 볼 수는 없다、이 不景氣의 起原의 重要한 理由는 左와 如하다。

先年 歐羅巴大戰이 起어난 時에 戰爭國은 어느 나라든 戰爭에 沒頭하여 生産工業、商業貿易等을 停아 停음이 업서서、自國에서 使用하는 物資도 外國에서 買치 안이 變안이 되고 又 只今까지 戰爭國에서 物資를 買入하고 있던 各國에서도 中立國에서 買入치 안으면 안이 되는 故로 中立國의 時勢는 大變하여 良好하여 지고、亞米利加 其他 日本 등에서 돈을 만히 모았지만、一朝 戰爭이 起나자 그 反動으로 各國이 儉約하여、自國에서 使用하는 物資는 亦 自國에서 製造를 始作하며、外國貿易도 漸々 復活하는 變에、一時 時勢가 良好하였든 中立國은 漸次로 平素의 狀態에 復來치 안이 하 變안이 起된 것이다。이것을 時勢不振이라고 하지만은 實生覺하면 正當한 것이요 一時 時勢가 조왔든 것이 問題이다。그런 故로

朝鮮의 時勢不振함은 決코 朝鮮뿐만 時勢不振이 안이다、日本內地도 不振함이고、亦 諸外國도 不振함이니 決코 總督政治에 罪는 안일 것이다。

朝鮮은 失業者가 많다고 하지만은、失業者가 많은은 朝鮮뿐만은 안이다、內地에도 失業者는 만이 있다。大正十四年十月一日의 國勢調査에 依하면 內地에 重要한 都市에서는 倭給生活者、勞働者 二百三十五萬五千九百六十八人中、失業者가 十萬五千五百九十五인이 있겠지만、其後에 時勢不振함이 甚하게 되었으므로 現在의 失業者數는 다시 一層 더 하리라고 生覺된다。

鮮人 落伍者는 生活難에 苦悶되어 故鄉을 떠나 四方으로 漂泊하는 것은 事實인데、現在 日本內地에는 三四十萬人、山中에 逃入하여 火田民이 된者가 百十六萬人、南北滿洲露領等에도 百萬人이 나 있다고 말하지만、鮮人側의 말하는 바에 依하면 南北滿洲에 百十八萬人、露領에 九十七萬人이라고 말한다。그리고 이 사람들은 飢餓에 苦고 있느냐 하면、반듯이 安住의 地를 얻은 者는 안이고 그 中에는 도로 生活難으로 苦心하여 結局은 다시 朝鮮으로 돌아오는 者도 있고、도라올 旅費도 없서서 死線에서 彷徨하고 있는 者도 있다。조

곰더仔細히 말하면、内地에 간者는 大概思想이 惡化하여 惡한 일만 하는 故로 使用할 곳이 없고 山에 들어가 火田 生活을 하는 者는 國家에 山林을 버리게 함으로 여러 가지 取締을 받고 滿洲露領에 간者는 國際條約을 無視하고 何處에든지 들어가 기예문에 각금 쫓겨나고、或은 不毛之地에 居住하여 全히 人生이라 하는 樂을 맛볼 수 업시、馬賊과 官憲에 虐待를 받어 언제든지 不安하게 歲月을 보내는 것이다。

鮮人은 元來 늘고 먹는 것을 조와하는 人種이라、空然히 늘고 지내는 사람은 네로 부터 만으나 近來에는 다시 더 많은 것이다。試驗的으로 官公吏의 內鮮人就職數를 調査하여 보면、總督府所屬官署、道地方費支辨의 職員、府郡島學校費支辨의 職員、學校組合學校職員의 內鮮人別은(昭和元年度)

内地人 三萬六千十四人 俸給四千七萬八千四百五十三圓

朝鮮人 二萬一千八百九十二人 俸給一千百五十五萬一千七百七圓

이외에 面長面職員이 一萬五千五百三十一인이 잇스나 이것은 全部朝鮮人으로 보와도 關係없다고 生覺한다。

前記의 表로 보면은、

一、朝鮮人인 職員은 内地人의 六割

一、朝鮮人의 俸給은 内地人의 二割九分

一、人口의 就職步合은、内地人人口十二人二分마다 一人

鮮人은 八百五十人마다 一人

一、俸給은 内地人 一人 當年額一千百十二圓 鮮人은 五百二十七圓

民間의 就職者 比例는 알 수 업스나亦是 이와 같은 比例라고 生覺한다。그러면 鮮人의 職業範圍는 大端히 좁은데 알아서 收入도 적고、生活難에 苦心한다고 生覺되지만、就職率이 적은 것은 무슨 까닭일까、内地人이 差別待遇를 하기 때문일까、職業이 업는 까닭일까、나는 이問題에 對하여 이가지 生覺하는 것이다。먼저 內鮮人의 智識程度로부터 生覺하지 않으면 안 되겠다。現在 内地人은 大學專門學校를 卒業한 者라도 就職處가 업서서 만이 아니고 잇는대、鮮人에 그런 高等教育을 받은 사람이 얼마나 잇슬까。사람을 쓰는 곳에서는 될 수 잇는대로 俸給이 싸고 勤勞한 사람을 쓸 나고 하는 故로 多數의 申込者를 選擇하면 合格者

는內地人에만키때문에自然內地人이만이就職하게되는것이다。然이나그中에는事情과差別이絶體로입다고는못한다。그런일도각금있는模樣이나、大體에對하여內鮮人은敎育에서、智識에서、經驗에서內地人이鮮人보다도一日之長이있는것은否定치못하겠다고生覺한다。萬若諸君이內地人과同等의就職率을얻으라고하면、더工夫를해야向上하여名實共に內地人과同樣인實質을具備치안으면안이된다。또勞働者가『일이있다』하고노는것도異常하게生覺된다。眞實로朝鮮에일이있는것인가、일이없는朝鮮에每年무슨사람으로十萬人的支那人勞働者가出働하여야을것인가、彼等苦力은工業、土木建築、農業、雜役에누코될사이업도록일이있지안이한가。

彼等은往復旅費를支拂하고、월한賃金으로아침부터저녁까지힘껏眞實하게親切하게表裏업시일을하고賃金에對한不平도업시、도라갈때에는다相當한貯金을가지고가는대、彼等은그러케일을하여도本國에있는것보다는大端히便하고金を돈다고말한다。여기反對로鮮人勞働者는不親切하고勤勉한態度가업시、監督者가잇스면일을하지만업스면일은하지안코、아침에는늦게오고午後에일죽고만두고그동안에도될수있는대

로怠惰함으로일에分量이적고賃金이받는데다또각금賃金을을내달라고要求를하여듯지안으면同盟休業을하고、事業을妨害하고、이와갓치여러가지惡風을具備하고잇손주起業者는될수있는대로鮮人勞働者를使用치안케되는것이다。엇던請負人의말에依한즉、支那人勞働者를使用하면工事を싸게맞출수도잇겠지만、鮮人勞働者를使役하면損害를본다고말한다。이러하면鮮人勞働者에게일이있는것은當然하고、일이없는것이안이라使役치안는것이다。鮮人에게失業者가만코徒食者가만은것은一般에이런傾向이잇지나안은가한다。要컨대鮮人諸君은모든方面으로生存競爭에敗하고잇는것이다。

內地人이當한不振의打擊은鮮人의幾百倍인지몰으나、그래도山中에逃入하여火田民이되는사람도업고、다苦痛을참고잇는것이안인가、그러면鮮人은조고마한不振에도견디지못하고即時故鄉을脫出하든지山中에들어가든지、國外에漂流하든지하는것은너무나意氣가업는게안인가、이것은畢竟平素에마음을잘먹지못한사닭이다。사람이一生間에는種々에天災와災難을맞나는것은定한것인故로平素에될수있는대로儉約하

야蓄財하야不意에災難이들아오면그돈으로免치안으면안되는것이다。鮮人에는그런조흔마음을먹은사람은別로입다。그런故로困難한것이當然하다。

總督府는諸君의生活安定에對하야種々考慮하고있는模樣이나、그것보다도먼저自己가自己를救할方針을生覺하지안으면안될것이다。我等內地人의눈으로보면鮮人諸君은모든點에對하야自覺이不足하다고生覺한다。

二、日韓併合의理由와我觀

併合의原因論과結果論……

日本の對鮮方針과其事實

鮮人이말하되、日韓合併은朝鮮民族의幸福을爲하야된것인데合併以來로漸々生活의脅威에虐待를맞는다。이래서는舊韓國時代가훨씬낫다고말한다。

이不平은조혀一般이다말한다고보와도조라고生覺한다。獨立運動은實로此等에思想으로부터일어난民衆運動이나果然鮮人諸君이말하는바와갇홀가。

나는여기對하야이러케生覺한다

日韓併合의理由는決코朝鮮人의幸福만을爲하야된것은안이다。併合의直接理由는그外에다음의두가지라고生覺한다。

一、日本國防을爲하야

二、東洋平和를爲하야

卽韓國이他國의領土가되면日本이危險한사태에併合한것이다。또韓國이他國에蹂躪되면은、利害關係가있는나라와나라가衝突되는것은日清日露戰爭이잇서든것으로도잘알것다。

戰爭이일어나면自然東洋의平和를요란케함으로將來에그런일이업도록併合한것이다그리하야併合한結果日本の統治下에서文化의普及이되면그結果는朝鮮民族이幸福이된다는意味로幸福은結果論이다。이것은決코나의說이안이고併合의趣旨인줄로生覺한다。

그러면朝鮮統治는朝鮮의形便에依하야出發한것이안이고、日本の形便에依하야出發

한것이 고살아서 그統治方針은 日本의形便에서割出될것이나그러나政府는決코自國의形便만生覺하여殖民地를等閑히하는것은안이다。只今殖民論으로말하면殖民地에教育을普及하면獨立思想을刺戟하는故로될수있는대로教育을안이하느것이조라고말을듯고있지만은我政府는決코그런것은안이고、普通教育은近히一面一校式이되게되고高等普通學校、各種專門學校大學같은教育을만이하야智育과精神教育의여러學問을開放하고있다。또다른殖民地中에는本國의搾取機關으로取扱되어있는곳이만있스나、我國政府는併合以來昭和三年度까지補助金과公債로五億二千二百八十一萬圓을들이고있다。此等의事實을考慮한즉朝鮮民族은만이感謝하지안이하면안될일이라고生覺한다。

三、法律思想과公德心……我觀

鮮人の騷擾性……非文化行爲……

詐欺와盜竊……公德心觀

鮮人諸君中에는、각금늘낼만한亂暴과慘忍한行爲를하는사람이있고、또詐欺竊盜가만코、또公德心이적은사람이만은모양이다。

여기對한나의意見은

먼저日本内地에있는鮮人으로말하면彼等은大概炭坑夫、土工人夫같은것을하고있스나、이런職業者는内地人이라도無學文盲이니時々로亂暴을하여一般의排斥을받는故로、其中에言語도不通하고、事情도몰르는鮮人이들어가면만은虐待를받을것이고、그結果정々惡化하여惡事를하는것이갇다。内地新聞에는每日彼等의惡事가써여잇스나이에비슷한事實은鮮内에서도각금있다。더구나내가늘낼것은地方民이時々로附和雷同하여群衆的亂暴을行하는것이요、巡查를毆打하고、官公署에殺倒하여暴行을한다는法律을無視하는傾向이屢々하잇스나、日本은法治國이라法律로禁하는行爲는絶對로許치안는것이다。法治國이란것은法律이든지完全하게되어서무엇이든지法律에基礎를잡아여가는것을말하는것이다。그런故로巡查를毆打하면그것은巡查의職務

를妨害하고 그職務를毆打한 것이 된다。警察署에서는 直時多數한 警官을 派遣하여 暴行者를 逮捕하고、萬若 暴徒가 優勢하면 軍隊가 出動하여서라도 반드시 犯人을 捕縛한다。그리하여 그結果는 一人의 巡查를 毆打하고 百人이 處罰을 當하게 되는 것이다。또 詐欺와 竊盜를 하는 者는 妙하게 하면 決코 몰을 것이라고 生覺하고 하는 것 같으나、只今 犯罪搜查學으로 生覺하면 大概 알 게 될 것이다。惡한 일을 하는 者가 漸々 巧妙히 되기 때문에 그것을 搜查하는 方法도 非常히 進歩되었다。指紋法이라 하는 犯人의 손이 단 器物에서 指先의 손금을 見出하여야 이것은 누구라고 하는 方法이 있고 其外種々の科學的 調査에 依하여 調査하면 大概 아는 것이다。萬一 犯人이 逃走하면 全國의 警察署에 手配하는 것도 實로 妙하게 되어잇는 즉 어 되서든 지 捕獲하는 것이다。文明人은 아모리 분하여도多數가 集合하여 官公署를 襲擊하는 일은 絶對로 안된 것이다。

萬若 左편에 안된 일이 잇거든 그것은 警察署에 告하든지、或은 裁判所에 告訴하든지、或은 行政官廳에 出願하든지하면 大概 일은 解決되는 것이다。사람을 困難케 하는 者는 警察에서 잡혀 裁判所로 보내어 罪를 定하고、刑務所에 들어 改心케 하지만은 이것은 國家가 被

害者를 代身하여 갚아주는 것이다。또 金錢을 借用하여 還付치 않는 者에 債權者가 訴訟하면 裁判所에서는 債務者를 呼出하여 兩便에 善惡을 調査하여서 돈을 갚게 한다。이것은 國家가 人民의 權利를 保護하고 義務를 正하게 하는 것이다。또 官廳에 税金을 納入치 않으면 財産差押을 하는 것은 國家가 人民의 義務를 正하게 하는 것이다。日本은 完全한 法律國이라 現在에는 人民으로 부터 天皇陛下에 請願할 길도 되어잇는 즉 決코 一時의 分함에 저서 暴力을 쓴 것을 쓰는 것은 안된 것이다。

昨年에 나는 京城의 兩刑務所를 視察하였는데、惡行을 하는 사람은 實로 못생겼다고 痛感하였다。그것은 치운 때라도 불도 쏘일 수 업고 아침부터 밤까지 만이 일을 하고 談話도 할 수 업고、밤에는 二間씩 되는 좁은 방에 十二三人이나 나더서 몸을 웅지기도 못하고、몇 해를 苦役하고잇스면 世上에서는 全히 別인 게 되어 돌아보는 者도 업서 지고 겨우 出獄하여도 사람이 相對로 하여 주지 안코、衣食에 困難하여 다시 惡한 일을 하고 刑務所에도 돌아오는 것을 들었스나、사람도 이러케 되면 箱子에 년 법과 사자와 갓혀서 조곰도 人間味가 업서 저 벌이고 實로 可憐한 者이다。

또 鮮人의 下層者는, 往々 竊盜와 詐欺性이 잇는 것도, 만이 남에게 실어하여서, 나중에 是全部의 同胞까지도 惡人이라고 보게 되는 것이다. 이것은 특히 都會地에 만은 일이지 만, 都會地의 內地人은 鮮人의 行商人은, 大概가 도적과 詐欺처럼 生覺하고 잇다. 조금 이라도 정신을 차리지 않으면 무엇이든 지가 저가고, 販賣物도 欺詐가 만다. 外面에는 조흐나 內容이 남부던지, 數量이 不足되던지, 偽造物이던지 하여, 조금도 信用이 안된다 이리하면, 內地人이 실어할 것이지만, 鮮人諸君도 恒常이런 被害가 잇스리라고 生覺한다.

또 公德心이 적은 鮮人諸君도 만다. 公德心이란 社會公衆에 對한 德義心이다. 獨逸어는 곳에서는 道路兩側에 林檎나무를 심어 노으나, 사람들은 決코 그 果實을 써지 안코, 兒孩들이라도 떨어진 林檎을 줍지 안는다는 말을 들었지만, 이것은 훌륭한 公德心의 發達이다 汽車를 타고 他人이 座席이 업서서 困難을 당하는데, 自己는 二人分의 座席을 取하고 잇는 것도, 公德心이 업는 사람이다. 街路樹를 엇거나 公園에 花草를 엇는 것도, 道路에 糞을 밟이는 것도 公德心이 업는 사람이다. 甚한 사람은 아모 곳에도 糞尿를 누어 公衆衛生

을 발하고, 사람에게不快한 觀念을 주는 것도 罪惡이다. 朝鮮은 由來에 儒敎國으로 여러 是은 德義의 언덕한 것은 잘 알고 잇슬 것이다. 論語에 『德不孤必有隣』이라고 잇고, 또 易에 『君子敬以直內義以方外, 敬義立而德不孤』라고 잇다. 要컨대 이런 사람들이 同胞中에多數히 存在하면 其國民은 決코 優良人種이 안이고, 또 高等民族은 안이다. 此等은 敎育이 업는 結果라 할 것이다.

我等同胞는 서로 注意하고 또 他人을 警戒하여, 이런 惡한 習慣과 惡癖을 矯正치 안으면 안 되겠다.

四、資本主義說과 余의 意見

日本の投資와 利益說……産米增殖과 鐵道網……採取와 併合說……

資本化와 獨立說……物質文明과 民衆生活

鮮人이 말하되, 日本人이 朝鮮開發을爲하야 莫大한 資金을 投하얏다고 하나, 其利益은 大

體가 取하는 것인가, 다 日本人이 取하는 제안이나, 今般產米增殖을 하는 데 三億四千萬圓을 投하고, 鐵道網을 作成하는 데 三億二千萬圓을 投하여도 其利益은 全部 日本人의 收得이 되는 것이다. 可憐한 鮮人은 米를 作하여 粟을 食하고 勞力은 搾取된다. 幼稚한 朝鮮農村經濟界에 偉大한 勢力이 있는 外來資本이 들어와서 自由競爭이 되는 故로 貧弱한 農民은 漸次로 併呑되야 敗北한다. 資本家는 이 威力있는 武器로써 鮮人의 土地家屋을 買收하고, 山林을 經營하고, 未墾地干瀉地를 開拓하고, 貿易業을 獨占하고, 交通事業을 일으키고, 金融機關을 일으키고, 投機事業을 일으키고, 有利有望한 事業은 모두 獨占하여 벌인다. 大正十四年度에 十萬二千町步 荒蕪地의 貸付를 받은 것도 內地人이다. 四千有餘의 高利貸業者와 典當舖는 鮮人의 經濟的弱點을 利用하여 權利를 讓渡시켜 所有權을 奪取하고, 나중에 是破滅의 구렁에 떨어지는 것이다. 또 交通이 便利하고 其土地가 繁華하여지면 鮮人은 더욱 그곳에 못있게 되어 漸次로 窮僻한 곳으로 驅逐되지만 하면 안이 된다. 進歩한 政治에 支配를 받고 또 物質文明이 盛榮되면, 朝鮮人은 加速度로 生活이 破壤되는 것이다. 그러면 眞實로 物質文明의 惠澤을 받는 者는 그러면 幾人이나 있느냐고 말한다.

이에 對하여 나는 諸君에게 一言을 할 必要가 있다고 生覺하는 것이다

營利會社는 別問題로 하고, 日本政府가 朝鮮開發에 對하여 大資金을 들인 것은 事實이다. 個人이 利盆을 目的으로 하지만 政府의 施設에는 그런 일은 없다. 먼저 日本政府가 併合以來 朝鮮開發에 用에 使用한 重要한 經費를 들면 左와 如하다.

鐵道 官設 千四百三十三哩

私設 五百六十六哩 合計 一千九百九十九哩, 여기들은 金額은 三億七千七百五十八萬八千圓(昭和元年度 現在)

土木 道路、港灣、橋梁、河川의 改修를 하고, 道路는 一、二、三等 道路를 四千里를 만들었다.

教育費 六千三百三十九萬圓
衛生費 二千八百八十五萬圓

資本主義說과 余의 意見

警務費 二億五百十三萬圓

軍事費 二億五千三百九十五萬圓(以上昭和二年度)

右中鐵道만은收入이 있어서도其利益은다시鐵道敷設에使用하고改良改修에使用한다。 또私設鐵道에는巨額の補助金을주는故로決코利益이되지는안는다。 其他土木、敎育 衛生、警務、軍事費에利益이있을理가업다。 이런利益이업는事業을政府는何故로하 는것이나、그것은朝鮮의開發과人民의幸福을增進케함이다。 舊韓國時代를보시오、 鐵道도입고自動車와牛馬車가通할道路도적어서여러분은옷을벗고河川을건넌일도있 겠지요、멀지안은길을數日걸니여步行한일도있겠지요、電信、電話、電氣도적고、 人民의生命財産을保護할만한警察도、裁判所도、軍隊도不完全하였지만、只수에는 여러가지로行政設備과文化設備가되어人民의幸福은잇더케向上되였는지몰으겟다。 그러나排日思想者는이러케된일을感謝치안코韓國政府가今日까지存續하여도이만한 일은된다고하는지도몰으지만、그것은決코못된다。 엇지그러나하면朝鮮의經費는軍 事費를陸軍省에서補助하여도덕을不足되는것이다。 卽併合以來昭和三年度까지歲入

總額二十一億五百十五萬二千七百二十二圓인데、그中日本政府에서五億二千二百八 十一萬八千四百四十六圓補助를받은것은그만치不足되는것이다。 故로併合以來今日 까지軍事費와此五億餘圓을加하면日本政府와同様の統治를行하는대는朝鮮서나온 金額外에七億七千六百七十六萬九千七百四圓의補充을하지안으면안되는것이다。 그 러하면舊韓國政府의 힘으로는도저히今日과같은朝鮮을造成하기는困難하리라고生覺 한다。 人民에幸福은善良한政治下에잇는것이다。 아모리衣食에滿足하더라도惡政下 에는못잇을것이다。 나는現在朝鮮統治를完全한善政이라고生覺지안으나、近々將來 에잇서서民衆을幸福스럽게할善政의道程이라고認定하는것이다。 內地人이種々の會社와組合을組織하여少數의人員으로大事業을經營하고잇는것을見 할진대、너무조할것간치生覺하는지도몰으나事實은決코그럴뿐만도안이다。 既往內 地人이얼마나投財하고또거기에싸라서얼마나利益이잇섯는지는調査方法이업스나내 가아는範圍에서는損을본實例는만코利益을본實例는거의들을어서、여러사람들은朝 鮮의事業에投財하는것을두려워하고잇는것이다。

事業은 모도 사람이 돈을 쓰는 것이 아니고, 돈이 사람을 쓰는 것이다. 資金의 裏面에는 많은 出資者가 있어서 事業을 經營하고 있는 것이다. 事業은 內地人이 經營한다고 利益이 있는 것은 안이다. 有望한 事業이면 누구가 하던지 利益이 있는 것이니, 鮮人 諸君은 他人의 事業을 羨望치 말고 諸君도 大奮發하여 有利有望의 事業을 經營하고 自己의 經濟的 運命을 打開치 안으면 안될 것이다. 今昭和元年度의 內鮮人 出資額을 보면 如左하다.

主히 內地人의 出資한 會社 一億四千八百八十四萬九千四百四十圓

主히 朝鮮人의 出資한 會社 二千二百五十八萬一千四百五十九圓

內鮮人 共同出資會社 三千六百八十一萬九千三百五十圓

이 出資額을 보면 內地人을 主體로 한 經營事業이 었더케 되고, 알아서 其 利益이 많은 것은 當然치 안으면 안될 것이다. 또 大概 大事業을 하려면 智識과 經驗을 要求하고 더구나 學問上으로 하는 事業은 더욱 優秀한 技術者라도 往々 失敗하는 일을 生覺하면, 現代 朝鮮人에게 그러한 優秀한 技術者도 적어서, 아모리 하야도 先進者되는 內地人의 힘에 依하지 안으면 안될 경우가 많은 것이다. 昔時의 朝鮮 水利灌溉事業의 跡을 보면 狀狀 旱渴을 맨든 곳

이만으나, 學問上으로 보면 그것만으로는 完全히 耕作지 못하는 故로, 今日에는 큰 貯水池를 만들고, 防波의 設備을 하는 것은 一層 優秀한 技術과 經驗을 要하는 것이다. 또 產米 增殖事業과 鐵道網等을 誹謗하는 것은 참으로 非國民的인 말이고, 社會의 發達과 同胞의 幸福을 저주하는 不逞의 사람들이다. 中央政府가 朝鮮을 爲하야 이런 大資本을 覬하는 것은 眞實로 고마운 일이 안일가, 資本을 들이여 天與의 富源을 開發하는 것이 무엇에 對하여 惡한 것이 될가, 事業이 興하면 勞働者는 일이 있고 收入이 있스면 必需品을 買入하는 故로 物資도 賣出되고, 物資가 賣出되면 商人도 發旺하고, 工場도 繁盛되야 그 利益은 全社會에 分布되는 것이다. 그런대 鮮人은 米를 作하고 粟을 먹지 안으면 못된다는가, 或은 勞力을 使하긴 다는가 하고 이 事業을 마치 前王城이나 지을새와 同樣으로 賦役이나 식이는 것처럼 하거나, 或은 土地와 耕作物을 沒收나 하는 것까지 말하나, 그것은 大端히 틀리는 것이다. 이 事業에 行하는 대무엇에 對하여 粟을 먹지 안으면 안될가, 日本은 憲法에 依하야 個人의 財產所有를 認定하는 나라고 露西亞와는 달이다.

自己가 가진 財產을 理由없이 沒收되는 일은 決코 없다. 배앗길 일은 업지만은 事實은 諸君

의 말과反對로 鮮人은 自進하여 팔리는 것이다。一地方에 內地人 資本家라도 들어오면 全히 競爭하여 販賣하는 것이다。보는데 說아 彼等의 懇願의 依하여 買受하는 사람은 彼等を 救濟하는 것이라고, 반듯이 虐待한다고 볼 수는 없다。土地의 所有者는 以外에 各多數者의 利益으로 하여야 一部의 土地를 無理하게 買受하는 일도 잇스나, 그것은 그 所有權者가 多數者의 利益을 無視하는 無自覺에서 일어나는 것이다。故로 自己의 畝에서 성긴 쌀은 全部 自己의 것이 確實한 일인 則 全部 먹던지, 全部를 賣들어 使用하여도 조금도 關係업는 것이다。쌀을 팔고 조를 먹으라는 法律은 決코 업지만은, 農民이 쌀을 팔고 조를 먹는 것은 自己經濟를 爲함이다。

또 事業을 始作한다 하여도 勞働者에게는 正當한 賃金을 支拂하겠지요, 賦役이 안인 以上에는 賃金이 적어서 일을 하지 않는 것이다。그러면 大體어 데다가 勞力을 賣앗기는 事實이 잇슬가, 이 事業이 始作되면은 自進하여 使役하여 달나는 사람이 얼마나 많은 지물은 다。全部의 쌀을 日本에 가져 간다 하지만, 그것은 農民이 팔기 때문에 商人이 買受하여 第一價格이 만은 곳에 팔뿐이다。諸君이 팔지 아니하면 사는 사람도 업고, 商人은 日本에 보내는

것보다 米國에 파는 것이 利益되면 米國에 팔는지도 물을 것이다。日本 內地에 파는 것이 第一利益이 되면 內地에 팔것뿐이다。또 鐵道網을 저주하는 것도 世界에 貴한 일이다。交通이 便利하게 되고, 土地가 繁華하게 되는 것이 무엇으로 하여 惡할 것일가, 政府는 社會民衆의 幸福을 爲하여 莫大한 資金을 投入하여 損이 되는 事業을 興起하는 데 그것을 저주하는 것은 非國民이고 同胞의 敵이다。一部分에 人事가 落伍하여도 國家를 爲하여 社會를 爲하여 多數民衆의 利益이면 조를 짓지 안일가, 世界에 歷史잇슨 以來 鐵道를 敷設하여 달나는 要求는 얼마든지 잇섯지만, 이런 矛盾한 抗議가 일어 난 것은 들은 일이고, 아마 朝鮮은 이라고 生覺한다。鮮人 諸君은 農村의 疲弊를 全部 內地人의 所爲처럼 말하나 너무나 輕妄의 말이다。朝鮮에서 現在 耕作 地面積中의 內鮮人 所有耕地는

堡 二百八十八萬四千三十二町二反

畝 百五十八萬五千七百三町五反

外에 火田 十五萬二千七百六十町(昭和元年度)

此에 對하여 大正十三年末의 內鮮人 所有面積은

內地人所有 六十一萬三千三百九十三町步

朝鮮人所有 三百九十一萬五千三百八十六町步

이것을當時의內鮮人農業者人口、卽內地人三萬八千二百七十二人、鮮人一千四百三十四萬三千二百六十二人에比較하여보면、內地人의所有面積은一人當十五町八反步朝鮮人은二反七畝가되어差가만으나 이것은일마나內地人이巨額의資金을投하였는지를立證하는것이다。

內地資本이들어오면生存競爭이甚하여지는것은事實이지만、內地人이라고起業의特權이잇슬理由는없다。여러가지境遇에그것은資本이事業을하는것은前述한바와갓다鐵道事業、金融事業、投機事業도또한그리하지만、內地人에게貿易의獨占權等이잇슬理由는없는것이다。그러나以上の各事業이株式組織일것갓으면그出資는內鮮人無差別로누구든지가出資하여도利益은平等하게分配되는것은確實하다。이中에서金融機關等은鮮人經營의것도만이있다。漢城、韓一、海東、北鮮商業、東萊、大邱、慶一湖西、湖南의諸銀行은모다鮮人株主를中心으로하고經營하고잇는것이다。또全鮮五

百四十九箇所에金融組合의出資金六百八十六萬一千圓도그大部分은鮮人의出資이고無數의典當舖는全部鮮人의經營이다。그리하면經濟的搾取를全部內地人의罪라고하는것은誣妄의말이다。

社會의進歩向上은아모리하여도어느程度의資金이들지안으면되지안는것이다。그러닛가資本이드는것은찰아리조와할것이다。日本國民은다平等權을가지고잇는故로自己의資本으로마음대로競爭하는것을制止할수는없다。生存競爭을하는것은社會發達의原則이여써、國家의大局으로보면大端히조흔것인즉諸君도아못조록지々안로독奮鬪努力하기를바란다。

五、獨立運動과共產主義宣傳觀

在外鮮人의反抗……日本의威力과對策……憂國과同胞愛

共產主義와結果觀……併合과國運……獨立의利害觀

獨立運動과共產主義宣傳

獨立運動과共產主義宣傳觀

日韓併合後、日本에 不滿을 품은 사람들은、國外에 亡命하였으나、其後大正八年의 萬歲騷擾後排日思想을 가진 不逞의 무리는、南北滿洲、露領、北京、上海、布哇、米國等에 逃出하여 上海에 假政府를 設立하고、對岸地方에 種々の 結社를 하여 鮮內의 武力侵入을 企하고、各금을 다서 國境을 騷擾케 하였지만、只今은 到底히 成功의 希望이 없어서、이번에는 露國共產黨과 聯合하여 朝鮮民族의 赤化를 計劃하고 있는 것이다.

本問題에 對한 나의 意見은

나는 不肖하나 憂國者의 一人이 되어 從來이 問題에 當할 때 마다 말 못되는 惻情을 感하는 것이다.

그것은 多數의 運動者는 職業的이라 도 그中에는 眞實한 憂國者도 있겠고、또 志士도 있겠다고 生覺하는 것이다. 그런데、그런 사람들은 誤達의 生覺을 이르기여、언제까지든지 日本帝國에 反抗하는 것은 참으로 憂國者의 할 바는 안이라고 生覺하는 게라、親히 그사람들과 面對하여 實意를 交換하여 보고 싶다고 生覺하여 나의 主宰하는 『民衆時論』

誌上에서 大正十四年九月과十一月의 二回에 亘하여 『會見要望』의 記事를 掲載하여 그것을 南北滿洲、海參威、北京、上海의 各團體首領에게 送付하였으나、遺憾하지만은아 모도 會見을 希望하는 者는 없었다. 나는 이러한 運動者에게 對하여는 만이 同情을 寄하는 者이나、諸君이 몸을 다하여 百年繼續한다 하더라도何等에 效果가 업을 것을 生覺하면可憐함을 견디지 못하겠다. 너대가 家畜을 쏘는 것처럼 각 國境을 侵入하여 官公署를 襲擊하고、官民을 殺傷하고、或은 放火掠奪捉去軍資金의 強要等 여러 가지 暴虐을 하여도、그런 쓸데 없는 일로、日本國이 動搖할 것은 안이다. 假令 國境의 警察官이 全滅하여도帝國의 全威力으로 보면 아모 痛痒도 업고、日本은 目下 陸軍이 十六箇師團、海軍이 七十萬噸二百二隻의 軍艦을 가진、世界의 強大國이다. 現在 滿洲에서 二十一箇團體의 看板下에 있는 사람들이 아모리 努力하더라도何等의 效果도 업을 것은 自明한 理由이다. 더구나 日本政府는 諸君等의 行動을 取締하느라고 大正十四年中 露國과 協約하고、또 奉天省과 特別協約을 한 일은 諸君等이 아는 것이다. 國際間에는 犯人引渡條約이란 것이 있스나、先年 日本이 露支兩國과 締結한 協約은 그것보다 더 一層有効한 犯人引渡條約인가 보다.

그런고로此條約締結後발서引渡된者도잇고引渡될運命에잇는者도잇다한다。그러치 만志士는元來몸을바치여同胞를爲하야盡力하는것이本分인즉、그런區々한死生等은 敢히들아보지안을는지도모르나、내가願하는바는其覺悟를眞實한同胞愛에使用하야 주기를바라는바이다。鮮內居住의同胞가極度の生活困難에싸져잇는것을알면、諸君 은무엇때문에彼等에게經濟的自覺과勤勉力行을獎勵치안는것인가、一身의生活도못 할만한經濟的破滅에陷하고잇는同胞에精神的運動을强要하는것은無理한것이다。諸 君의意思가하나도民衆에게歡迎받지못하는것은諸君의言行不一致함과民衆의智識이 進歩된證據이다。諸君도只今은到底히獨立의不可能한것을깨닫고共產主義를宣傳하 고잇스나、이것은더一層同胞愛에奮馳한行動이다。엇제그러나하면私有財産制度의 撤廢된露國이다시私有財産을認定코자하고、個人資本의橫暴을憤怒한革命이지금은 國家資本主義에變하야、國民을虐待하고自由를求한革命은도로혀自由를拘束치안으 면안되게되엇다。露國의實驗에依하야도共產制度는國民에게幸福을주지못하는것은 解得한今日에그런일을同胞에게强誘하는諸君은決코同胞愛에對한行動이라고는認定

치못할것이다。

日本에는國家生存을妨害하는思想을處罰한다。『治安維持法』이라는法律이有하야、 國體의變革을目的으로한結社를組織하든지、或은結社의役員과指導者가되는者는死 刑又是無期懲役이되며、又私有財産制度를否認하는事를目的으로하는者는十年以下 의懲役又是禁錮에處하기로되엇다。此法律은朝鮮에도適用되야잇는故로外來思想에 惑하야共產主義等を提唱하던直時重한刑罰에處하는것이다。

또諸君이日本을咀呪하는것은併合에不滿을가진것이겠지만日韓併合은日本の自衛上 으로出發한國是고、日本帝國이存在하는以上은、이것을廢止할것은絶對로안될것이 다萬一에不逞運動이漸々甚盛하야지면國力을다하야彈壓을加할뿐이다。時々로官廳 會社等に爆彈을던져서、全國運動과갓치맨들고、外國에同情을잇을야고하나希望을 걸엇든太平洋會議에서도朝鮮問題에對하야는一言도입시켰스나、그것은當然한일이다 日本의朝鮮統治가、人道上的罪惡이라든가、或은列國의平和를紊亂케한다든가하면 은別問題이지만은될수잇는대로힘을다하야開發에努力하고、民衆의幸福이될만한여

리가지施設을하고있는故로實情을본外國人들은意外에感을품고돌아간모양이다。他國의內政干涉과容喙等은容易하게할수없는일이다。殖民地의原住民族이新政을조와하지안코、또는反抗하는것은어디든지實例가있서서들은것은안이다。

米國의比律賓、英國의印度、南阿弗利加等은더욱著名한것이지만、獨立의利害는별안간斷定치못하는일이다。

假令朝鮮이獨立을하면엇지될가、列國中에介在한以上에는第一에軍備의必要가有하는데、隣國에日本과같은軍備의充實한國家가있는以上은日本에備할만치의軍備는꼭하지안이하면안될것이다。然이나日本의現在軍事費는大正十一年으로同十四年度까지에十九億八千二百萬圓、卽一年平均四億九千五百三萬圓式支出하고있으나、이것에對하여朝鮮이果然遜色없는軍備가될것일가、朝鮮의總豫算은昭和二年度에겨우二億一千萬圓인데、그金額도全部朝鮮서낼수가없서서、每年不足額몇千萬圓을內地에서補助를받고있는形便이다。이朝鮮이軍備를整頓하고各國에大使公使領事를派遣하고社會의進歩와民衆의福祉增進의施設을할수있슬가、그것이못되면亦是舊韓國과같

다。치列國에서侵蝕받고나중에는東洋의平和를害하고日本の國家存立을危險하게할것이다。

國家의名譽上으로生覺하면他國에併合되는것이恥辱이지만、民衆의幸福으로生覺하면반듯이不利益은안이다。排日感情을가진諸君은만이覺醒하지안으면안이될것이다諸君은時勢를들은사람들이다。諸君이아모리셔들어도이併合을回復할수는絶對로못될것이라고覺醒하지안이하면안이된다。

獨立運動과共產運動을하는것은참된同胞愛에立脚한憂國의士가取할길이안이다。諸君中의一部에不逞漢이있는것도不拘하고政府는在滿鮮人에게까지保護를주어年々數十萬圓을投하여文敎衛生의施設을하고있는것을生覺하면만은感謝를할것이다。나는同情에눈물로써諸君의改悟를勸하고다시同胞의經濟的救濟에努力하심을切望치안이지못한다。(끝)

昭和三年八月六日印刷
昭和三年八月九日發行

定價 金拾五錢
郵稅 貳錢

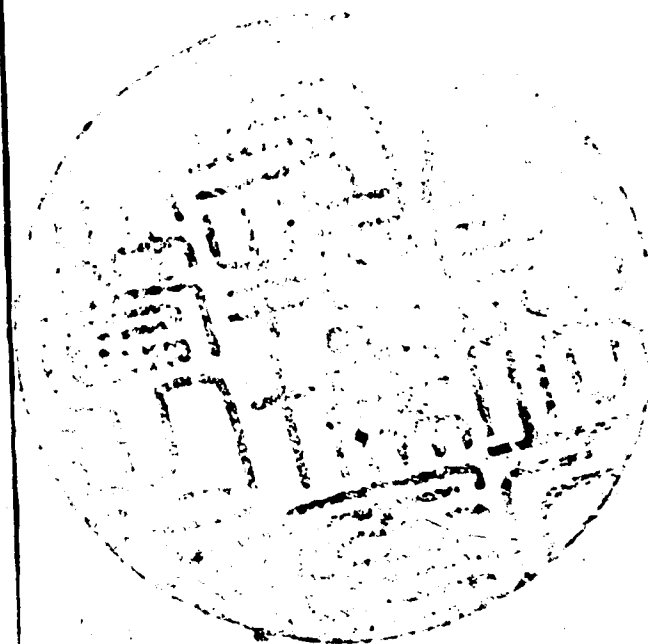
不許複製

著者 町田 長作
京城府吉野町二丁目九一番地

印刷者 天野 三
京城旭町二丁目十番地

京城印刷所

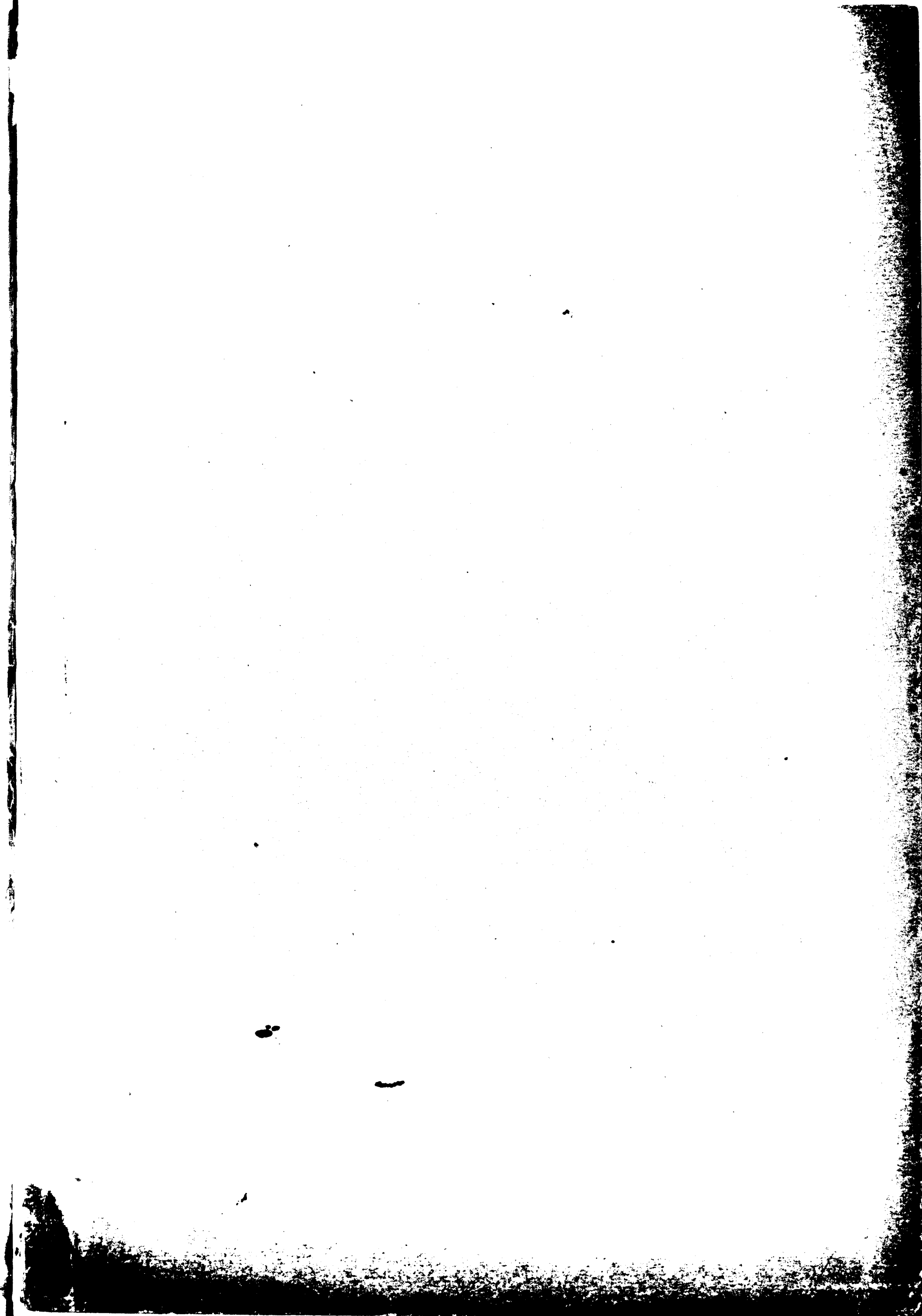
發行所 民衆時論社
京城府吉野町二丁目九一番地



様

日 月

購読會員
資料委員



興亞團體聯合會

創立經過報告書

日韓・友邦
061
5
協 会

061-5



興亞團體聯合會創立經過報告

目次

宣 言	發會式寫真
第一 創立ノ經過	一
第二 創立總會	七
第三 發 會 式	二二
鈴木理事長ノ經過報告	二三
近衛會長ノ挨拶	二六
顧問松井大將ノ挨拶	一九
來賓代表阿部總理大臣ノ祝辭	二〇
附錄第一 興亞團體聯合會規約	二三
附錄第二 興亞團體聯合會加盟團體一覽表	二五
附錄第三 興亞團體聯合會役員名簿	二七
附錄第四 興亞團體聯合會職制	三三
附錄第五 興亞團體聯合會事務施行細則	三三



會 長 換 授

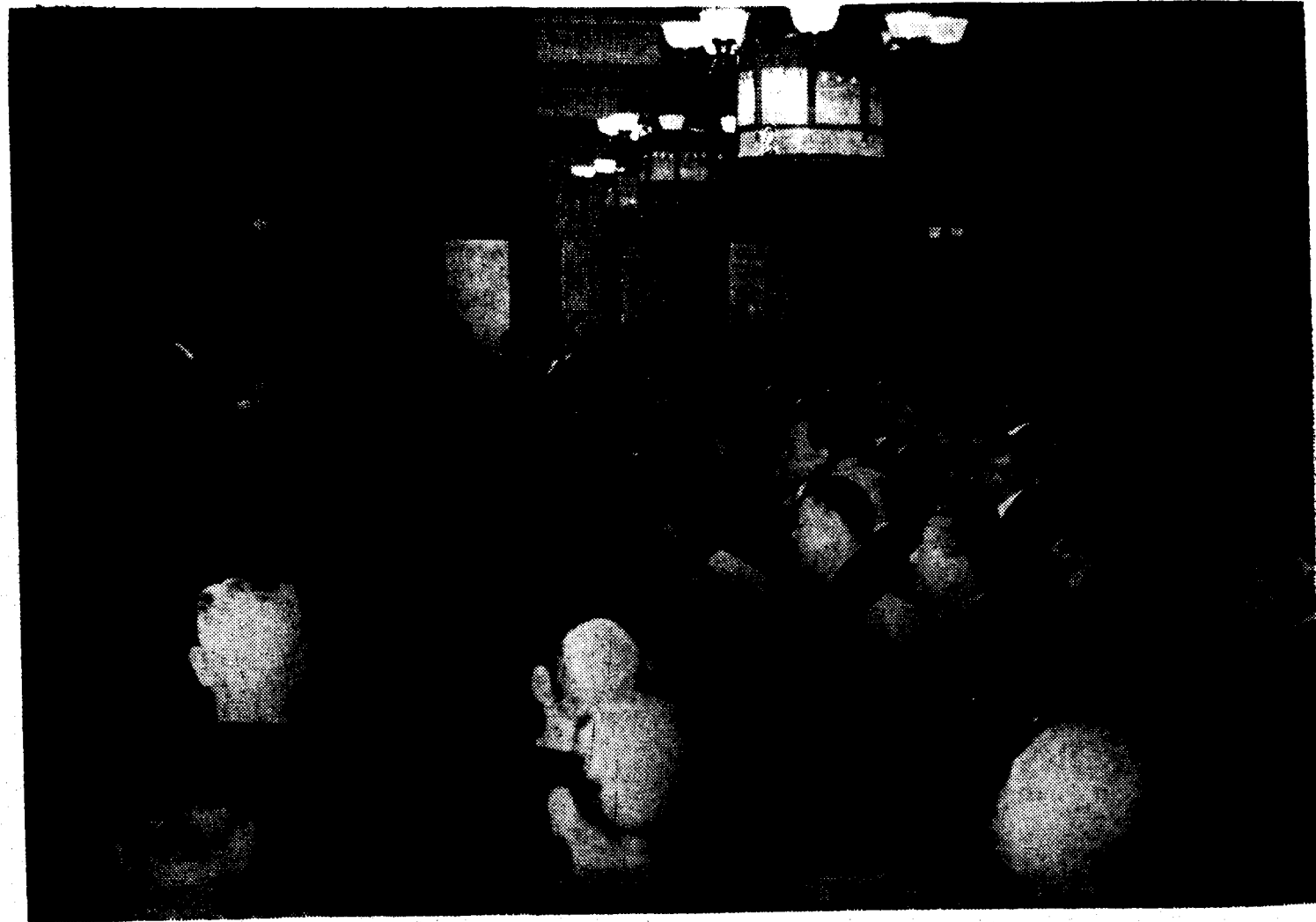
宣 言

世界の變局に際し、東亞新秩序建設の意義洵に深く、業たる廣大なり。わが醫國の大義に則り、民族の生命力を以て一貫不退の行を進めざるべからず。

今や聖戰三年、皇軍の威徳四方に輝き、建設の業その緒につく、此の時に方り、興亞團體聯合會の結成成り茲にその發會式を舉ぐ。志すところは一に、聖旨を奉じ、興亞先覺諸賢の志行を繼ぎ、相倚り相助け其律動を活潑にし、依て以て大業建設の實踐を強化せんとするに存す。誠に志願大にして道遠し。同人互に相勵まし先憂後樂、千障萬難は排し、切々其行を共にせん事を期す。

昭和十四年十一月二十九日

興亞團體聯合會



松井顧問挨拶



阿部總大理臣祝辭

第一 創立ノ經過

今次支那事變發生以來我國各種民間團體ガ聖戰ノ目的達成ニ協力シ夫々奮闘中ナルコトハ誠ニ感謝ノ至リナルモ今後ノ建設ニ思ヒヲ致ス時、全般の態勢ニ於テ將又其行動ニ於テ總力ノ發揮ニ遺憾ナシトスル能ハザルモノアリ。

籲ツテ顧ルニ帝國内外ノ事態ハ極メテ重大ニシテ眞ニ大和民族ノ聰明ヲ絞リ國家ノ總力ヲ擧ゲテ一途ノ行動ニ出ズルノ要愈々切ナルモノアリ。曩ニ興亞院ヲ創設セラレタル亦コノ國家的要請ニ基ヅクモノト拜察セラル。

茲ニ於テ民間特ニ對支關係團體ニ於テモ各團體ノ連絡調整ヲ圖リ其ノ活動ノ方途ヲ一ナラシメ且事ニヨリテハ諸團體ガ一體の行動ニ出テ以テ其ノ總力ノ發揮ニ遺憾ナキヲ期スルノ必要ナルヲ痛感セラレ爲ニ先ヅ支那問題ヲ主要事業對象トスル團體相集リ東亞新秩序ノ建設ヲ指標トスル新ナル協力態勢ヲ結成スルノ要ヲ認メ之カ斡旋ヲ興亞院ニ依頼スルコトニ有志ノ意見ノ一致ヲ見タリ。

依ツテ興亞院ニ於テハ昭和十四年六月二十一日偕行社ニ於テ主ナル對支團體ノ役員ノ參集ヲ求メ懇談會ヲ開催セリ、當日出席者ノ氏名左ノ如シ。(敬稱略)

興亞院側

興亞院總務長官	柳川平助
同 政務部長	鈴木貞一
同 經濟部長	日高信六郎
同 文化部長	松村 肅
同 技術部長	宮本武之輔
同 政務部第二課長	鹽澤清宣
同 經濟部第一課長	毛利英於菟
同 文化部第一課長	辻 誠
同 第二課長	多湖實夫
同 第三課長	林 安
同 事務官	島津久大
同 調查官	都 甲 徠
同	眞方 勳

民間團體側

(團體名イロハ順)

同 同	細谷喜三
同 同	鈴木琢二
日本放送協會	頼母木眞六
日 華 學 會	赤間信義
同	砂田實
日 華 實 業 協 會	秋山昱禧
東 亞 同 文 會	阿部信行
同	一宮房治郎
同	宇治田直義
東朝東亞問題調查會	大西齊
同	太田宇之助
東日東亞調查會	中保與三

(以上十五名)

(四) 本會規約ノ起草ハ興亞院ニ於テ各團體ノ意見ヲ取り纏メテ決定セラレタキコト。
(五) 次回ハ七月下旬頃ニ創立總會ノ開催ノ運ビトスルコト竝各團體ノ過去ノ業績及現状、將來ニ關スル意見等ヲ參考迄ニ興亞院ニ提出スルコト。

茲ニ於テ興亞院ニ於テハ右懇談會ノ申合竝ニ決議ニ依リ、興亞團體聯合會規約案ヲ作成シ一應曩ニ偕行社ニ於ケル懇談會ニ出席セシ團體ニ送付シ意見ヲ徴シ興亞團體聯合會規約案(附錄第一)ヲ得タリ。然ルニ種々ノ都合生ゼシ爲メニ一時創立業務ノ遷延等ノコトアリシモ、十一月ニ至リ創立總會開催ノ運トナリシヲ以テ同月七日日比谷三信ビル東洋軒ニ於テ興亞團體聯合會ニ加盟ヲ賛成スル團體ニ將來右聯合會ノ理事及幹事豫定者ノ推薦竝出席ヲ求メ創立總會ヲ開クコト、セリ。

第二 創立總會

昭和十四年十一月七日午後四時半ヨリ日比谷三信ビル内東洋軒ニ於テ興亞團體聯合會ノ創立總會ヲ開催ス。

當日ノ出席團體竝列席者ノ氏名左ノ如シ。(敬稱略)

興亞院側

興亞院總務長官	柳川平助
同 政務部長	鈴木貞一
同 經濟部長	日高信六郎
同 文化部長	松村 肱
同 技術部長	宮本武之輔
同 政務部第二課長	鹽澤清宣
同 文化部第一課長	辻 誠
同 第二課長	多湖實夫

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
文化第三課長	調查官	事務官	同	同	技師	秘書官			
林	眞方	島津久大	小澤太郎	小關紹夫	本多靜雄	江藤夏雄			

(以上十五名)

民間團體側 (團體名イロハ順)

日本放送協會	日華學會	同	日華實業協會	同
中郷孝之助	赤間信義	砂田實	秋山昱禰	青木福平

東亞同文會	同	東日東亞調查會	同	讀賣東亞研究會	東洋婦人教育會	同	東洋協會	東亞振興會	同	同	同	同	同	同	同	大日本回教協會
一宮房治郎	宇治田直義	高田元三郎	中保與作	村田孜郎	清藤秋子	高尾公子	山上	松江豐壽	中村英彦	田邊文四郎	藤井愼二	古野伊之助	横田實	匣瑳胤次		

大東文化協會	成田千里
同	藤澤親雄
大亞細亞協會	下中彌三郎
同	中谷武世
北支那協會	高木富五郎
支那研究協會	木村増太郎
同	田代
善隣協會	大島
	豐衛

(以上二十八名)

右創立總會ニ於テ柳川興亞院總務長官座長トナリ六月二十一日偕行社ニ於ケル懇談會以後ノ經過ヲ報告シ、次デ興亞團體聯合會規約案(附錄第二)ノ審議ニ入り滿場一致、原案通り之ヲ可決シ、爾後本總會並其後ニ於テ左記事項ノ決定ヲ見茲ニ興亞團體聯合會ハ全ク成立スルニ至レリ。

(一) 構成團體ノ指定

興亞院ニ於テハ規約第五條ニヨル構成團體ヲ差當リ十一月七日ノ創立總會出席團體(附錄第二)ニ指定ス。

(二) 會長副會長ノ推薦並就任

會長並副會長ハ規約第七條ニヨリ十一月七日ノ創立總會ニ於テ會長ニ公爵近衛文麿ヲ、副會長ニ興亞院總務長官柳川平助ヲ夫々推薦セル處、柳川長官ハ創立總會ノ席上ニ於テ直チニ、近衛公爵ハ十一月九日共ニ之ガ就任ヲ快諾セラル。

(三) 顧問並役員ノ決定

顧問並役員ニ關シテハ豫メ各位並各團體ノ意嚮ヲ徴シ規約ノ手續ヲ履ミ十一月十五日乃至同二十五日ノ間ニ興亞團體聯合會役員名簿(附錄第三)ノ如ク會長ヨリ夫々推薦乃至委囑ヲ行ヒ其ノ承諾ヲ得タリ。

第三發會式

昭和十四年十一月二十九日左記次第ニ依リ東京會館ニ於テ興亞團體聯合會發會式ヲ舉行ス。

興亞團體聯合會發會式並披露會次第

一、發會式

一、開始時刻 十一月二十九日午後五時

二、式場 東京會館

三、式次第

開會ノ辭	皇居遙拜	默禱	經過報告	會長挨拶	顧問挨拶
------	------	----	------	------	------

來賓祝辭	宣言決議	閉會ノ辭
------	------	------

一、披露會

一、開始時刻 十一月二十九日發會式終了後

二、會場 東京會館

定刻午後五時總理大臣阿部信行閣下ハシメ内外ノ貴顯約二百名臨席參會ス、理事長鈴木貞一ノ司會ニヨリ式次第ニ則リ先ツ皇居ニ對シ奉リ遙拜、東亞新秩序建設ノ爲殫レタル先輩ノ英靈ニ對シ一分間ノ默禱ヲ捧ゲ次テ別稿ノ如ク理事長ノ本會成立ノ經過報告、近衛會長ノ挨拶、顧問松井大將ノ挨拶、來賓代表阿部總理大臣ノ祝辭アリタリ。

次テ曩ニ十二月七日、創立總會ニ於テ委任セラレタル宣言案ノ決議ニ入り別稿ノ如キ宣言案ヲ本會常任理事ニ宮房次郎氏朗讀滿場一致可決中外ニ宣言スルコトトシ午後六時二十分式ヲ閉シ別席ニ於テ披露會ヲ開催シ盛會裡ニ午後八時終了セリ。

鈴木理事長ノ經過報告

私カラ此ノ會ノ成立ニ到リマシタ經過ヲ簡單ニ申上ゲマス。

御承知ノ様ニ今回ノ事變ハ新東亞ノ建設ト戰爭、此ノ二ツヲ同時ニ實行ヲシテオリマスル次第デアリマスルガ、我國ノ進ンデ行ク前途ニ、色々ノ問題ガ發生致シテ參リマシテ、眞ニ舉國一體ノ行ヲ進メナクチャナラス、斯ウ云フ事ガ國家ノ必然ノ情勢トナツテ參リマシタ。

從ツテ從來支那問題ニ關係ヲシテオリマシタ各團體モ互ニ手ヲ携ヘ協力ヲ致シマシテ一途ノ方針ニ出デナクテハナラス、斯ウ云フ様ナ事が段々有志ノ間ニ話ガ進メラレマシテ、遂ニ本年ノ六月ニ至リマシテ是等ノ者ガ相會シマシテ、如何ニシテ、從來各々傳統ノ歴史ヲ有シ、非常ナル活動ヲシテ來タ所ノ各團體ヲ、新タナル姿勢ニ於テ結合シテ行クカト云フ事ヲ研究ヲ致サレマシタ結果、茲ニ一ツノ結成體ヲ造ル事ガ望マシイト云フ事ニナリマシテ、御手許ニ差上ゲテアリマス書キ物ニアリマス様ニ六月二十一日ニ次ノ様ナ事が參加サレ懇談ヲサレタ方ノ間ニ決議ヲサレタノデアリマス。

(一) 我が國民間ノ有力ナル對支團體ハ現下帝國内外ノ情勢ニ應ジ東亞新秩序ノ建設ニ付テハ其ノ總力ヲ最モ有效ニ發揮スル爲ニ新タニ一團體ヲ結成スルノ要アル事。

(二) 右團體ノ名稱ハ興亞團體聯合會ト爲ス事。

(三) 興亞團體聯合會ノ職能ハ左ノ二ト爲ス事。

(イ) 我國民間ノ有力ナル對支團體ノ連絡協調ヲ圖リ、各加盟團體ヲシテ東亞新秩序建設ノ爲メ政治、

經濟、文化ノ各部門ニ互リ各々其ノ特色ヲ發揮シテ我が對支國策ニ寄與セシムル事。

(ロ) 本會自體ヲ以テ我が對支國策ノ遂行ニ協力スル事。

尙本會規約ノ起草ハ興亞院ニ於テ各團體ノ意見ヲ取纏メテ決定セラレタキ事。
斯ウ云フ様ナ事が議決セラレマシタノデアリマスガ、此ノ決議ニ基キマシテ興亞院ニ於テハ關係ヲ持タル各團體カラ御意見ヲ徵シ、一ツノ規約ヲ作り仕事ヲ進メテ參リマシタガ、本年ノ十一月ニ至リ漸ク其ノ議ガ纏マリマシテ、茲ニ本日ノ會ヲ開クコトニナツタノデアリマス。十一月ノ會議ノ時ニハ大體次ノヨウナ事が決定シタノデアリマス。

(一) 興亞院ニ於テ各團體ノ意見ヲ徵シテ決メマシタ規約ヲ滿場一致ヲ以テ可決致サレマシタ。

(二) サウシテ此ノ規約ニ基キマシテ會長、副會長ノ推薦ヲ行ヒマシタガ、其ノ際ニ會長ハ公爵近衛文麿閣下、副會長ニハ興亞院ノ總務長官柳川平助閣下、此ノ御二方ヲ推薦ヲ致シマシテソレゾレ御承諾ヲ得タノデアリマス。

(三) 次イデ此ノ規約ニ基キマシテ顧問及役員ノ御方ヲ夫々會長カラ委嘱ヲサレマシタガ是レ亦各閣下並各位皆サンノ御承諾ヲ戴キマシテ、今日茲ニ御集マリヲ戴イテ會ヲ開ク段取ニ到ツタ次第デアリマス。

甚ダ簡單デアリマスガ會ノ成立致シマシタ經過ヲ御報告申上ゲマス。

近衛會長ノ挨拶

閣下竝ニ各位

茲ニ興亞團體聯合會ノ發會式ヲ舉行スルニ當リ一言御挨拶ヲ申上ゲタイト存ジマス。
關係各團體ニ於カレマシテハ夫々古キ歴史ヲ有シ、明治大正以來祖國ノ興隆ト東亞保全ノ爲メ名譽アル活動ヲ續ケテ來ラレタノデアリマス。

然ルニ今次事變ノ發展ニ伴ヒマシテ、内外ノ時勢ニ應ジ、是等ノ諸團體ガ一途ノ方針ニ活動ヲ致ス事ガ國家ノ爲ニ必要トナツテ參ツタノデアリマス。其ノ結果此ノ度興亞團體聯合會ガ結成創立サル、コト、ナリマシテ、不肖其ノ會長ニ御推薦ヲ辱ウ致シマシタコトハ誠ニ光榮ト存ズル次第デアリマス。今後各位ノ御協力ト御支援ヲ得マシテ其ノ任ヲ果シタク存ズルノデアリマス。

尙又本日ノ此ノ發會式ニ際シ閣下並ニ各位公私極メテ御多端ノ折ニモ拘リマセズ、斯ク多數御來會ヲ賜ハリマシタ事ハ本會ノ衷心ヨリ感謝スル所デアリマス。

昨今支那ニ於ケル建設ノ運動ガ漸ク軌道ニ乘リマスルト、時ヲ同ジウシテ歐洲ニ再ビ動亂ノ勃發ヲ見ルニ至ツタノデアリマス。其ノ間ノ諸々ノ現象ハ表面複雑怪奇ヲ極メツ、アルノデアリマスルガ、其ノ根底ヲ流レテオリマスルモノハ、頽廢セル舊秩序ニ代ツテ、人類發達ノ現狀ニ相應シキ世界的新秩序ノ生レントスル苦悶ニ外ナラヌモノト思フノデアリマス。

然ラバ今日ノ世界ハ之ヲ意識スルト否トニ拘ラズ、事實ニ於キマシテ、滿洲國建國以來ノ我が日本ノ行動ノ正當性ト、其ノ終極ノ勝利ヲ確信シツ、アルモノニ外ナラヌト存ズルノデアリマス。

事變發生以來過去ニ於テ我々ハ非常ナル犠牲ヲ拂ツタノデアリマスルガ、前途尙ホ幾多ノ艱難ヲ覺悟シナケレバナリマセス。然シ乍ラ根本ニ於テハ、今日こそ日本ハ自己ノ行動ト將來トニ對シ確信ヲ持ツテヨイシ、又持タネバナラス時期ニアルト思フノデアリマス。

何トナレバ此ノ世界の過渡期ニ際シ、今日何レノ國ト雖モ眞ニ自信ヲ持テル國ハナイト思フノデアリマス。今若シ茲ニ一ツノ實力アル國家ガアリ、ソレガ眞ノ人類的基础ニ立ツテ確乎不拔ノ道義的計畫ヲ確立シ、本末ヲ誤ルコトナク、ソレニ向ツテ情熱ヲ以テ邁進シマシタナラバ、世界ハ早晚之ヲ標準トスル新シキ秩序ヲ組織セザルヲ得ナイ事情ニアルノデアリマス。

申ス迄モナク今次ノ聖戰ノ目的ハ舊來ノ禍根タル支那ノ植民地化ヲ排除シ、其ノ赤化ヲ防止シ、日滿支三國ガ互助連環ノ下ニ東亞ノ新秩序ヲ建設スルニアルノデアリマス。勿論其ノ聖業貫徹ノ前途ハ容易デハゴザイマセヌ。一方ニハ依然トシテ外來的保守勢力ノ間隙ニ乗セントスルモノアリ、支那國民其ノモノ、中ニ宿レル迷ヒモ亦深ク且ツ大ナルモノガアルノデアリマス。日本ハ此ノ不逞ナル勢力ニ備フル爲ニハ大ナル實力ヲ蓄ヘルト共ニ、彼ノ支那國民ノ迷ヒヲ啓キ導ク爲ニハ、更ニ大ナル啓蒙ノ

力ヲ發揮スル必要ガアルノデアリマス。是ハ究極スルトコロ上、聖旨ノアル所ヲ奉戴シ、我が悠久ナル建國ノ精神ニ則リ、日本國家ノ全生命力ヨリ湧キ出ヅル所ノ不退轉ノ國民的運動、國民的行、其ノモノニ依ツテ推進セラル、外ナキモノデアルト思フノデアリマス。

茲ニ於キマシテ今日最モ問題ニナリマスルモノハ、大陸ニ於ケル當面ノ諸々ノ現象其ノモノニ非ズシテ、寧ろ是等一切ノモノヲシテ、常ニ聖戰本來ノ目的ニ歸一シ綜合セシメテ、以テ生レントスル同志の新支那ノ發展ヲ鼓舞スル爲ニ、我々自身ノ自覺ト認識トヲ不斷ニ新タニスルト同時ニ、此ノ認識ノ下ニ總ユル組織ヲ活潑ニ躍動スル點ニ存スルノデアリマス。斯ノ如キ事情ノ下ニ今回本聯合會ガ生レタノデアアルノデアリマス。

本會ノ目的ハ、規約ニモ明記シテアリマスル通り、我國民間ノ對支團體ノ密接ナル連絡協調ヲ圖リ、又事柄ニ依リマシテハ是等團體ガ一體トナリマシテ、東亞新秩序ノ建設ニ翼賛寄與セントスルニアルノデアリマシテ、其ノ使命タルヤ誠ニ重大、其ノ事業タルヤ頗ル廣汎多岐ニ互ルト申サナケレバナリマセス。而シテ此ノ興亞ノ事業タルヤ獨リ對支團體ノ連絡協調ノミヲ以テ之ヲ能クスベキデハナイノデアリマス。更ニ進ンデハ官廳ハ素ヨリ民間ニ於キマシテモ國內諸團體、國際諸團體、竝ニ關係隣邦ノ諸團體等ト互ニ協力シ、其ノ志行ヲ一ニシテ初メテ其ノ眞果ヲ結ビ得ルト信ズルノデアリマス。本會ノ志ス處ハ國家内外一切ノ團體ト和協提携致シテ、以ツテ東亞新秩序建設ニ邁進セントスルニ存ス

ルノデアリマス。

願クバ各位ニ於カレマシテハ本會ノ此ノ目的達成ニ對シマシテハ何カト御指導、御後援ヲ賜ハラシコトヲ御願ヒ致ス次第デアリマス。誠ニ燕辭デアリマスガ、本會創立ノ趣旨ト希望トヲ述ベマシテ、併セテ會長就任ノ御挨拶ヲ申上ゲマス。終リニ臨ンデ閣下竝ニ各位ニ對シテ深甚ナル感謝ノ意ヲ表スル次第デアリマス。

顧問 松井大將ノ挨拶

私共ハ支那關係ノ各團體ヨリ出デ、御推薦ニ依リマシテ顧問ノ地位ヲ瀆スコトニナリマシタノデ、僭越ナガラ一同ニ代リマシテ一言御挨拶ヲ申述べタイト存ジマス。

興亞團體聯合會ノ結成ニ當リマシテ私共不肖ノ身ヲ以チマシテ顧問ニ推薦セラレ、茲ニ御挨拶ヲ述ブル機會ヲ得マシタ事ハ私ノ大イニ欣幸トスル所デアリマス。

惟フニ東亞新秩序建設ノ意義ハ誠ニ重大デアリマシテ、聖戰ノ目的ハ一ニ懸ツテ此處ニ在ルト思フノデアリマス。

億兆一心、官民一途舉國の團結ヲ以テ初メテ此ノ大業ニ當リ得ル事ト思フノデアリマス。茲ニ興亞團體聯合會ノ結成ヲ見マシタ事ハ此ノ大業遂行ノ上ニ一大推進力ヲ加ヘタモノデアリマシテ、誠ニ御

同慶ニ堪ヘナイ次第アリマス。此ノ團體ガ愈々結成ヲ見マシタ上ハ單ニ加盟團體ノ協調聯携ヲ圖ルト云フ様ナ事ニ止ラズ、互ニ打ツテ一丸トナツテ、眞ニ新東亞建設ノ主體ノ勢力トシテ興亞ノ大業ニ邁進シナケレバナラスト期待シテ止マナイ次第アリマス。

而シテ斯クスル事ガ實ニ又幾多興亞先覺ノ志ヲ今日ニ活カス所以デモアリ、事變以來今日迄聖戰ノ爲ニ没セラレマシタ貴キ犠牲ニ對シテ、我々國民ノ義務ノ一端デアルト信ズルノデアリマス。一言以上ヲ以テ御挨拶ニ代ヘタ次第デアリマス。

來賓代表 阿部總理大臣ノ祝辭

茲ニ興亞團體聯合會發會式ヲ舉行セラル、ニ當リ、一言所懷ヲ述ブル機會ヲ得マシタ事ハ、私ノ最モ光榮且ツ欣幸トスル所デゴザイマス。

改メテ言フ迄モナク我國當面第一ノ目的トスル所ハ支那事變ノ處理ニアリマス。

今ヤ有ラユル階層ヲ擧ゲテ是ガ完遂ニ其ノ全力ヲ傾ケテオルノデアリマスガ、從來各種ノ對支團體ガ組成セラレ、久シイ間新東亞ノ興隆發展ニ甚大ノ寄與貢獻ヲセラレテキタ事ニ對シマシテハ、今更ナガラ感謝ノ念ヲ新タニセザルヲ得ナイノデゴザイマス。

幸ニシテ是等諸團ノ貴イ努力ガ物心ニツ作ラニ偉大ナル效果ヲ擧ゲ今日事變ノ完遂上ニ表トナリ裏ト

ナツテ、深甚ナル協力ヲ與ヘラレツ、アル事ハ特ニ申ス迄モナイ所デアリマス。

然ルニ此ノ度は等ノ有力ナル諸團體ガ新タニ其ノ協調連絡ヲ圖ランガ爲ニ興亞團體聯合會ヲ組成セラレ、各加盟團體ヲシテ政治、經濟、文化ノ各方面ニ亘リ、各々其ノ特色ヲ發揮シツ、東亞新秩序ニ寄與セラル、ト共ニ、聯合會自體ヲ以テシテモ、亦我が對支國策ノ遂行ニ協力ヲセラレルコトニ至リマシタ事ハ誠ニ會心ニ堪ヘナイ次第デゴザイマス。而シテ其ノ後ノ活躍ニ對シマシテハ素ヨリ私共滿腔ノ期待ヲカケテオルノデゴザイマス。ドウカ各加盟團體及ビ本聯合會ガ今後トモ各々其ノ所期ノ目的ヲ貫徹具現セシメルガ爲ニ協力一致シ、勇往邁進セラレム事ヲ此ノ機會ニ御祈リ申上ゲル次第デゴザイマス。

附錄第一

興亞團體聯合會規約

- 第一條 本會ハ興亞團體聯合會ト稱ス
- 第二條 本會ノ事務所ハ差當リ之ヲ興亞院内ニ置ク
- 第三條 本會ハ我國民間ノ有力ナル對支團體ノ協調連絡ヲ圖リ各加盟團體ヲシテ政治、經濟、文化ノ各部門ニ互リ各々其ノ特色ヲ發揮シテ東亞新秩序建設ニ寄與セシムルト共ニ本會自體ヲ以テ我對支國策ノ遂行ニ協力スルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲左ノ事項ヲ行フ
- 一、加盟團體相互ノ連絡協調及其ノ活動ノ助成促進
- 二、本會自體ヲ以テ行フ事業ノ具體的案劃竝ニ之ガ實施
- 三、其ノ他前各項ノ目的ヲ達成スル爲必要ナル事項
- 第五條 本會々員ハ興亞院ノ指定スル對支團體ヲ以テ構成ス
- 第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 一名

- | | |
|-----|----------------|
| 副會長 | 一名 |
| 理事長 | 一名 |
| 理事 | 若干名 內數名ヲ常任理事トス |
| 幹事 | 若干名 內數名ヲ常任幹事トス |
- 會長、副會長、理事長、理事並幹事ノ任期ハ三年トス但シ再任ヲ妨ゲズ
- 第七條 會長及副會長ハ理事會ニ於テ之ヲ推薦ス但シ創立當初ニ於テハ創立委員會ニ於テ推薦ス
- 會長ハ本會ヲ總理ス
- 副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス
- 第八條 本會ニ顧問ヲ置クコトヲ得
- 第九條 理事長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス
- 理事長ハ會長ノ命ヲ受ケ會務ヲ掌理ス
- 理事長事故アルトキハ會長ノ指命シタル理事其ノ職務ヲ代理ス
- 第十條 理事ハ興亞院各部々長並ニ加盟團體代表各一名宛ヲ以テ之ニ充ツ
- 理事ハ會長之ヲ委囑ス
- 會長ハ理事ノ中ヨリ常任理事若干名ヲ委囑シ會務ヲ擔當處理セシム

第十一條 幹事ハ興亞院ノ官吏並ニ加盟團體ヨリ各一名宛實務ニ携ハリツ、アル者ヨリ會長之ヲ委嘱ス

會長ハ幹事ノ中ヨリ常任幹事若干名ヲ委嘱シ常務ヲ處理セシム

第十二條 理事會及幹事會ハ會長之ヲ招集ス

理事會ハ本會ニ關スル重要事項ヲ審議處理ス

幹事會ハ理事會ノ命ヲ受ケ本會ニ關スル重要事務ヲ案劃シ理事會ニ提出ス

第十三條 常任理事及常任幹事ハ本會事務ニ關シ隨時興亞院及興亞委員會ト連絡スルモノトス但シ其ノ協調連絡事項ニ付テハ隨時理事會及幹事會ニ報告スベシ

第十四條 本會ノ事務ヲ處理スル爲本會ニ必要ナル職員ヲ置ク

職員ノ任免ハ會長之ヲ行フ

本會ノ職制並事務施行細則ハ別ニ之ヲ定ム

第十五條 本會所要ノ經費ハ寄附金其他ニ依リ支辨スルモノトス

附錄第二

興亞團體聯合會加盟團體一覽表

(イロハ順)

團體名	代表者	事務所	電話
日本放送協會	小森七郎	麹町、内幸、二ノ二	銀座57七七五
日華實業協會	兒玉謙次	麹町、丸ノ内三丁目 (東七號館内)	九段33一〇六一・四〇四八 九ノ内23二七四六
東亞同文會	近衛文麿	麹町、霞ヶ關	銀座57〇五四八・二二九〇 二六五六
東亞問題調查會(東朝)	緒方竹虎	麹町、有樂町(東朝内)	九ノ内23〇一三一〇一三八
東亞調查會(東日)	徳富猪一郎	麹町、有樂町(東日内)	九ノ内23〇三二一〇三三一
東亞研究會(讀賣)	高橋雄豺	京橋、銀座西三ノ一(讀賣内)	京橋56一一一一・一一二〇
東洋婦人教育會	松平信子	神田、一ツ橋通帝國教育會館内	九段33四一五五
東洋協會	水野鍊太郎	麹町、内幸、一ノ三(大阪ビル内)	銀座57四〇三九
東亞振興會	井上一次	麹町、霞ヶ關三ノ一	銀座57六四八〇
同仁會	會公爵近衛文麿	神田、神保町二ノ一〇	九段33二〇三〇

同盟東亞研究會	古野伊之助	京橋、銀座西七ノ一（同盟通信社内）	銀座571二一六一・六一六一
大日本回教協會	林銑十郎	麹町、麹町一ノ八ノ五	九段(33)二二〇七
大東文化協會	伯爵松平賴壽	麹町、富士見一ノ七ノ一五	九段(33)二〇九三・二三八七
大亞細亞協會	松井石根	麹町、內幸、大阪ビル六六二號	銀座571五一八一・五一八九
北支那協會	芳澤謙吉	麹町、丸ノ內仲五號館	丸ノ內(23)一〇四五
支那研究協會	木村増太郎	麹町、內山下町一ノ一（日本產業協會內）	銀座571三二五一・二四五六
善隣協會	會公爵一條實孝	淀橋、西大久保四ノ一七〇	四谷(55)二二八三

附錄第三

興亞團體聯合會役員名簿（イロハ順）

會長	公爵近衛文磨	林銑十郎
副會長	柳川平助	坂西利八郎
顧問		德富猪一郎
		芳澤謙吉
	伯爵松平賴壽	松井石根
	阿部信行	水野鍊太郎
理事長	鈴木貞一（興亞院）	

常任理事

一宮房治郎（東亞同文會）

尾崎敬義（東洋協會）

田邊文四郎（同仁會）

成田千里（大東文化協會）

松村謙（興亞院）

下中彌三郎（大亞細亞協會）

理事

大西齊（東朝、東亞問題調查會）

大島豐（善隣協會）

高橋雄豺（讀賣、東亞研究會）

高田元三郎（東日、東亞調查會）

高木陸郎（北支那協會）

匝瑳胤次（大日本回教協會）

松江豐壽（東亞振興會）

松本重治（同盟東亞研究會）

秋山・昱禧（日華實業協會）

常任幹事

赤間信義（日華學會）

木村増太郎（支那研究協會）

清藤秋子（東洋婦人教育會）

宮本武之輔（興亞院）

日高信六郎（興亞院）

關正雄（日本放送協會）

辻誠（興亞院）

中谷武世（大亞細亞協會）

宇治田直義（東亞同文會）

山上昶（東洋協會）

眞方勳（興亞院）

藤澤親雄（大東文化協會）

藤井愼二（同仁會）

鹽澤清宣（興亞院）

毛里英於菟（興亞院）

幹

事

石川 信吾 (興亞院)
波多野 乾一 (興亞院)
林 安 (興亞院)
本多 靜雄 (興亞院)
知識 眞治 (東朝、東亞問題調查會)
横田 實 (同盟東亞研究會)
高尾 公子 (東洋婦人教育會)
多湖 實夫 (興亞院)
高木 富五郎 (北支那協會)
田代 衛 (支那研究會)
中保 興作 (東日、東亞調查會)
中村 英彦 (東亞振興會)
中郷 孝之助 (日本放送協會)
長野 朗 (興亞院)
村田 孜郎 (讀賣、東亞研究會)

青木 福平 (日華實業協會)
齊藤 貢 (善隣協會)
宮村 三郎 (大日本回教協會)
砂田 實 (日華學會)

興亞團體聯合會職制

第一條 本會ハ日常ノ事務ヲ處理セシムル爲メ常任理事及常任幹事ノ外左ノ職員ヲ置ク

主 事

主 事 補

書 記

書 記 補

前項各職員ノ外必要ニ應ジ雇員ヲ置クコトヲ得

第二條 職員中主事ハ會長之ヲ任免シ其ノ他ノ職員ハ理事長之ヲ任免ス

第三條 主事ハ理事長ノ命ヲ受ケ庶務ヲ處理ス

第四條 主事補及其ノ他ノ職員ハ上職ノ命ヲ受ケ事務ニ服ス

第五條 職員ノ給與ニ關シテハ別ニ定ムルトコロニ依ル

興亞團體聯合會事務施行細則

第一章 處 務 規 程

第一條 本會ノ事務ハ理事長ノ指揮ニ依リ之ヲ處理ス、特ニ重要ナル事項ハソノ種類ニ依リ常任理事會又ハ常任幹事會ニ附シ會長副會長ノ決裁ヲ經ルモノトス

第二條 本會ニ到達スル文書ハソノ件名、番號、差出者等ヲ簿冊ニ登録シ親展書ナルトキハ封緘ノ儘之ヲ記名者ニ配付スベシ

現金其ノ他有價證券ヲ授受シタルトキハ特ニ金額種類ヲ簿冊ニ記載シ其ノ授受ヲ明ニスベシ

第三條 決裁濟ノ文書ニシテ發送ヲ要スルモノハ淨書校訂鈐印及契印ヲ爲シ之ヲ施行シ然ル後簿冊ニ其ノ要領ヲ記入スベシ

第四條 本會ヨリ發スル文書ハ理事長名ヲ用フルヲ例トシ事件ノ種類及輕重ニ從ヒ會長名、又ハ會名ヲ以テ之ヲ發ス

發受文書ノ整理ニ付テハ「興聯發第 號」又ハ「興聯收第 號」ノ記號ヲ用ヒ整理スルモノトス
第五條 處分濟ノ文書ハ類別整理ノ上編冊保存スベシ、但シ相當ノ時期ヲ經過シ保存ノ要ナキニ至リタルトキハ經同ノ上之ヲ廢棄スルコトヲ得

第六條 左ノ文書ハ第一種トシテ永久保存トス

理事會決議錄、閣省及官廳ノ令達並ニ官廳ヘノ伺上申其ノ他特ニ重要ナル書類

第七條 左ノ文書ハ第二種トシテ十年保存トス

收入簿、支出簿及證憑書類、前條ニ屬セザル會議錄並特ニ必要ト認メタルモノ

第八條 本會ハ毎年度本會事業成績書ヲ作製ス

第二章 會計 規程

第一節 總 則

第九條 本會ノ財務ニ關シテハ別ニ定ムルモノヲ除ク外本規程ニ依ル

第十條 寄附金、資産ヨリ生スル收入、並ニ補助金其ノ他ノ收入ヲ以テ歲入トシ、一切ノ經費ヲ以テ

歲出トス

第十一條 會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第十二條 本規程ニ定ムルモノヲ除ク外本會ノ會計ニ關シテハ國ノ會計ニ關スル規程ヲ準用ス

第二節 豫 算

第十三條 歲入歲出ノ豫算ハ款項目ニ區分スベシ

第十四條 經費ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ使用シ又ハ各款ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ズ、各項

ノ金額ヲ流用セントスルトキハ理事長ノ決裁ヲ經ベシ

第十五條 豫算ハ理事會ノ議決ヲ經ベシ豫算各款ニ涉ル流用並豫算ノ更正モ又同ジ

第三節 出 納

第十六條 收入支出ハ總テ理事長又ハソノ委任ヲ受ケタル常任理事又ハ常任幹事ノ決裁ヲ經テ之ヲ執行スルモノトス

第十七條 金錢有價證券及物品ノ出納事務ヲ取扱フ職員ハソノ出納ノ責ニ任ズルモノトス

第十八條 歲入歲出内譯簿及豫算差引簿、物品出納簿ヲ備ヘ之ニ登記スルモノトス各簿ノ様式ハ別ニ之ヲ定ム

第四節 決 算

第十九條 毎月ノ收支決算ハ翌月中ニ整理シ調書ヲ作成シ理事長ニ報告スベシ

第二十條 毎年五月末日ヲ以テ前年度ノ出納ヲ閉鎖シ六月末日迄ニ決算ヲ報告スベシ

第二十一條 決算ハ理事會ノ承認ヲ經ベシ

第二十二條 本規則ニ據リ難キモノアルトキハ特ニソノ規程ヲ設クルコトヲ得

附 則

第二十三條 本細則ハ昭和十四年十二月十八日より施行ス

昭和十五年一月十一日印刷
昭和十五年一月十五日發行

東京市麴町區隼町 興亞院內

發行所 **興亞團體聯合會**

電話九段 (33) 四二〇〇—四二〇九

代表電話 四二〇二—四二〇九

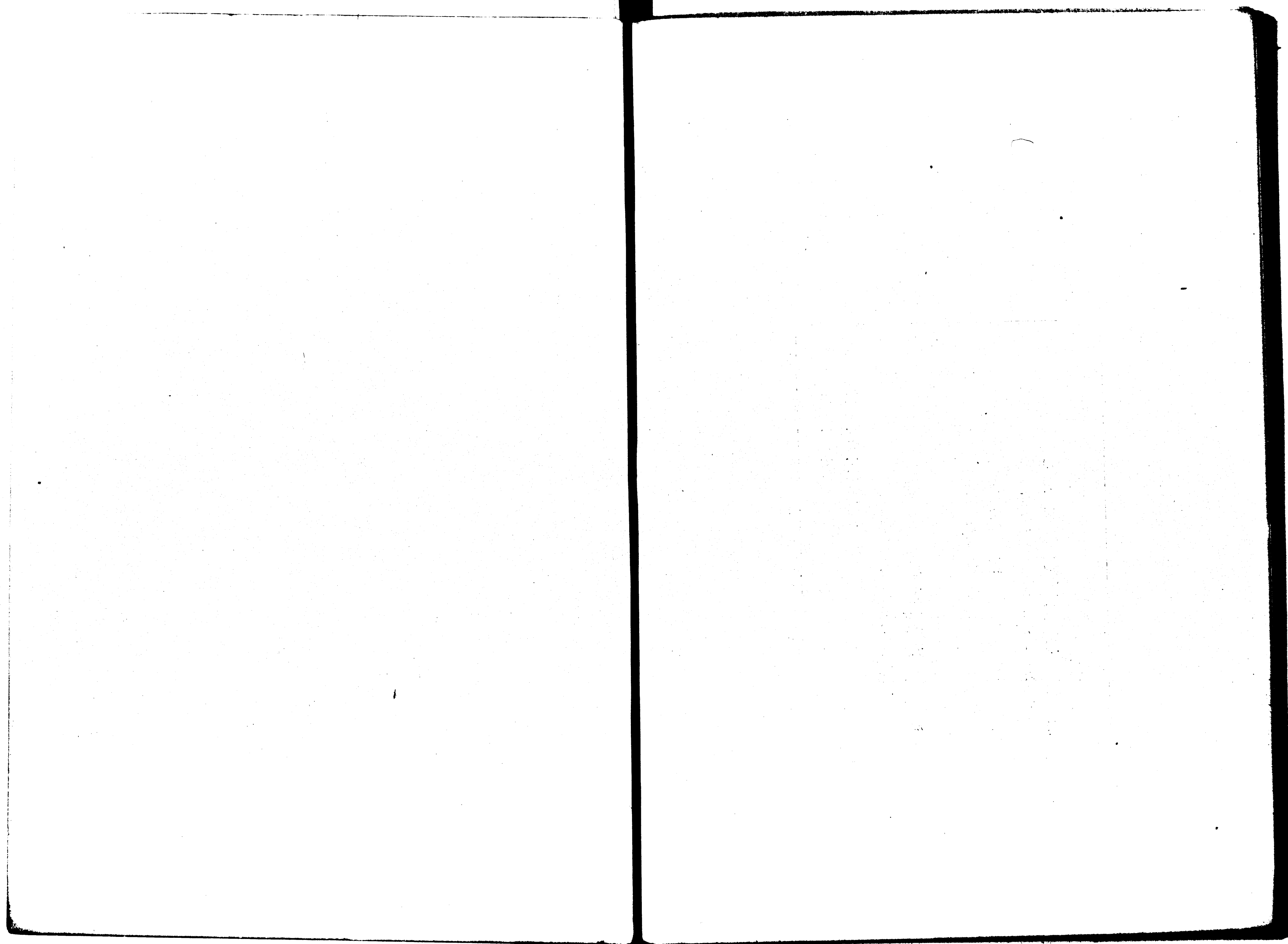
東京市京橋區湊町二丁目十六番地

印刷者 篠倉政一

東京市京橋區湊町二丁目十六番地

印刷所 第一印刷所

電話京橋 (56) 三〇六五—三〇六六



062-2

朝鮮資料第三輯

朝鮮青年部全國大會夕議錄

在日本朝鮮人聯盟中總本部

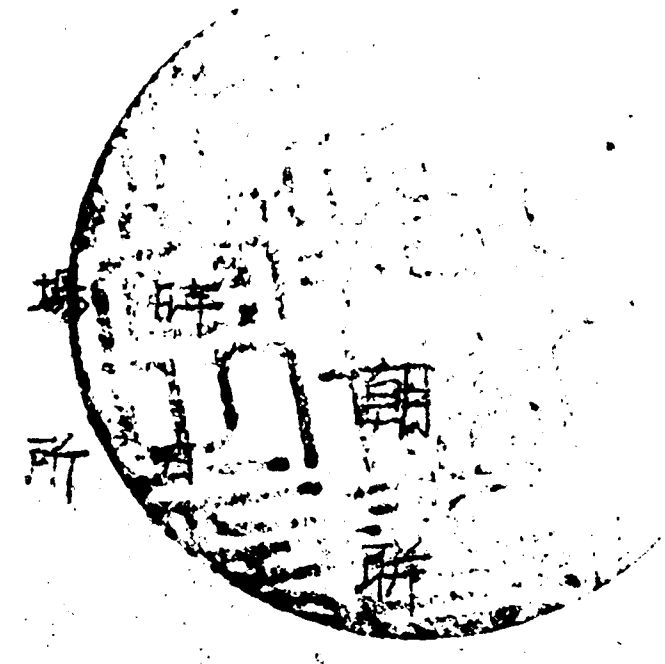


發刊의 말

山時全國大會를 마치고 朝鮮의 活動은 日한층 活潑하게 展
 開되고 있으나 出版物을 發行하는데 여러가지로 不充分한點
 많아서 活動報告가 二저지게되는것은 諸賢에 對하여
 尤우 未妥하다고 生覺하는바 이다
 朝鮮聯邦報告第三輯으로 朝鮮青年部全國大會의 議錄을 發刊
 하오니 資料의 編輯되는 次로 今後는 順序에 從기 各部의 活動報
 告를 出版하러 하오니 諸賢의 期待를 바라는 이다.

一九四六年三月二十日

文化部 白



青年部全國大會々議錄

一九四六年二月二十日 二十一日 午前十時
 第一日 京橋區公會堂

序二日

夫立講堂

自主獨立을 約束한는 祖國再建第一年을 마지하여 불같은
 情熱과 旺盛한 用志를 가지고 새로운 朝鮮建設에 獻身的 努力
 을 하는 青年들이 現役階에 있어서 그의 使命을 明確히 認識하고
 그 重大한 任務을 遂行키 爲하야 우리 朝鮮青年部에서는 今後에
 全國大會를 開催하리라

316.821
74

大會順序

第一日

京橋區公會堂

一 開會

一 因誤揭揚

一 解放運動犧牲者對社感謝外朝鮮完全自主獨立之祈願計之

七 默禱

一 開會 終

一 大會執行部選舉

一 議長

又 書記

3 趙方議梁審查委員

4 代表費資格審查委員

5 進行係

一 祝 辭

1 中華民國青年代表

2 日本青年代表

3 朝鮮青年代表

4 各文化團體

第二日

一 報告

1 國際情勢報告

天安講堂

一人

三人

一人

三人

- 2 本國情勢報告
- 3 總本部經過報告
- 一 計 議
- 1 一般的活動方針
- 2 三外會議決議川岡社件
- 3 青年運動統一川岡社件
- 4 留日國際青年大會開催要請川岡社件
- 5 春季大運動會開催要請川岡社件
- 6 地方代表提出議案
- 7 其他
- 一 行 一 處 鑑 賞

- 一 所 合 評
- 一 萬 歲 三 響

宣

言

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

人類社會의 發展過程에 나타난 帝國主義의 進展은 그 自体에
內包된 矛盾이 漸次 露骨化하며 極端으로 尖銳化하며 結局에
있어 그 運命은 慘酷한 崩壞와 破裂에 歸着되는 것이다.
今日 우리 目前에 殘存한 戰後의 現實은 天正倏然의 現象이 아니라
그 史上必然의 結果라 할 수 있다. 人民의 絶對多數를 抑壓과 掠
奪과 虛偽와 欺瞞으로 하여 自己權力下에 永遠히 支配하려고
軍隊와 警察과 憲法과 虐殺과 投獄等으로 殘忍暴虐한 手
段으로 하여 自己를 防衛하려고 하는 世界의 狀况은 天皇制軍閥主

義는 이 狀况에서 帝國主義體制의 沒落過程에 發生出現되는
一種의 畸型의 產物이었다.

이 畸型의 存在는 決코 長久한 生命을 못가지고 刹那的 存在임을
그 史는 明確히 證明한 것이다. 如上한 世界史的 客觀的 情勢
下에 行解散된 우리 民族에 完全自主獨立을 宣示設法한 史
的 任務가 賦課되어 있다. 이 任務를 遂行하는 過程에 있어
第一線에서 自己를 勇敢하게 가장 活潑하게 가장 精力을 다
하여 奮鬥努力한 그는 우리 青年이 아니고 누구인가?
우리 青年은 그 第一線戰鬪部隊이며 突擊隊이며 工兵隊인
을 高聲大喊으로 宣言한다. 우리 青年은 正義와 自由를
尊重한다.

불같은熱情과旺盛한精力의所持者이다。独自の創造性과勇敢한突進力을 가진者이다。 이것은우리靑年만이 가진唯一한 자랑이며威力이다。 우리靑年이한거름踴躍하는때 우리靑年이한瞬間 停滯하는때 이社會는엇지된 것인가를想像해보라!

우리는祖國再建의 큰안건이다。在日本우리靑年은그의一環이다。 새로운民主主義에立脚한完全自主獨立을建設하기爲해서 는 또는그建設의恒久的安全保障을爲해서 는 우리는무엇을 할가? 大시금 軍閥主義의殘滓가아저도 吾界의毒藥에남아있어 最後에發應으로 蠢動하고 있다는것을懸視할수없는것이며 아저도 우리民族가아저도 우리가부

르듯民族叛逆者 帝國主義者 親日分子들이蠢動하여 反民主主義的인모든策動과陰謀外暴力行爲를하고있는것이 다。 이것을우리靑年은 最後에一片까지라도 남김없이掃蕩한使命을가졌다。 이것은苦難은南爭을意味 掃蕩하는때에 어떤 우리靑年의使命은遂行되나? 우리가아아는正當의路線 우리는이軌道에서 우리靑年의 高唱하는 勇敢스럽게 前進하자! 實踐하자! 祖國建設의勇敢한 戰鬪部隊를 奮起하는 우리靑年은 自己自己를 自己의責任에對應正當訓練하자!

朝鮮完全自主獨立萬歲!
民族叛逆者를除外한 民族統一萬歲萬歲!

青年同盟會義青年團籌備處
日本朝鮮人聯盟青年部全國大會開幕！
右 宜 宣 哲

青年部行動綱領

- 一 予以封建的帝國主義 殘存勢力是徹底打倒
- 一 予以一切民族叛逆的行動是撲滅
- 一 予以進步的民主主義是宣傳
- 一 予以在日本朝鮮青年運動以統一戰線是期
- 一 予以祖國以完全自主獨立而努力

會議經過

青年大會代表員

參加原本部 三七

不參加原本部 一

(原籍 廣東 青島 山東
岩手 佐賀 鹿兒島 高知
德島 北海道)

全代表員數

四四九名

出席代表員數

二九九名

缺席代表員數

一五〇名

出席代表員數過半數至因計本大會正式成立。

開幕前부터 全場 다
다 끝은 靑年들이
다 叫호하는 聲이 滿ちた

會場全面叫는

- 一、朝鮮完全自主獨立萬歲
一、民主主義民族統一戰線萬歲
一、世界民主主義青年團結萬歲
一、在日朝鮮青年亡國朝鮮青年部隊下立
一、民族統一戰線是妨害計亡暴行行動是排擊計亡
一、國家金顯負担上主義務教育制是實施計亡
一、日本帝國主義引殘滓勢力外民族叛逆者盡徹底打撲滅計亡
- 算餘本部以 八五 一七 〇 一 海永到四八五 中 吃 愛知果

- 12 -

에 서 전 머 지 고 는 人 民 失 和 國 死 守
에 步 調 을 마 추 자 L 만 , 스 로 | 간 “ 이 左 右 所 歷 川 谷 以 來
年 의 夙 志 를 一 層 더 宣 揚 하 려 다

[吾 界 民 主 義 統 一 戰 線]

대한민국의 독립을 위하여 고국에 대한 애국심을 발휘하여

다 음 中 央 總 務 部 青 年 部 長 韓 德 鍊 氏 引 開 全 緯 氏 以 上 復 大 會 執 行

다 음 파 같 히 運 任 到 矣 也

議長

韓德錄君

2.
副議長

李相一君

- 13 -

書記局

崔錫根

柳大雄

崔肝均

金信敏

具會文

4 地方議案審查委員

各県本部一名 式

5 代表員資格審査委員

金信敏

玉末守

6 進行係

東京東部代表員一任 朴自珍 耿

五〇名 以當任 駐

이대신 泰川 渠代表員의 緊急勸議에 依하여 現在 本國에서 眞實
한 朝鮮建設을 爲하야 하는 朝鮮青年을 爲하야 熱烈하게 싸우고

있는 呂運亨 朴憲永 兩氏 及 지난 날에 있어서 朝鮮解放을 爲하

야 싸워 온 閔東의 立場이』라는 俗稱을 얻고 아랍어 白色으로

因히 光手에 因하야 至今은 不具者가 되 來賓金任容氏를 本大會名

譽記長으로 推戴하자는 意見에 滿場一致로 可決

會場을 震動하는 拍手의 歡迎裡에 金任容氏名譽記長의 紹介로 中央

總本部委員長 尹履氏 登壇

過去三十六年 동안 殘虐한 日本帝國主義者의 壓制 밑에서 壯아는

言論 集會 彈壓史를 回顧할 때 오늘날의 集會은 마치며 나갔든 家族이

한 방에 모여 들은 것 같습니 다

오늘의 集會은 青年의 熱情과 誠意로써 民族과 國家를 爲

하야 壓迫과 擧壓의 中心地이 되는데 東京에서 露은 路線을 찾

물러고討論하게 되었음은 참으로意義깊은일이라고 봅니다
現在靑年의情勢를冷靜히살피볼때문에과려하여 내任務를안으로
내나아갈것을잘못잡은靑年이本國에도 또이東京에도있다는
것은참으로遺憾입니다 이뜻에처하여서도 좋은成果를얻기
바랍니다

總本部를代表하여 前記와같은人事가있는後會順히做하여祝
辭에붙이겠습니다

그리고日本靑年共產同盟代表 岩崎 親氏에대해서—지—列傳(A)

東京本部代表員의緊急動議에做하여

—中央人民委員會

—全國靑年總同盟

—全國婦女總同盟

—全國農民組合總聯盟

—朝鮮労働組合全國評議會

—人民黨

—朝鮮共產黨

—韓國民主黨 (警告)

—聯合軍最高司令部

이러한大會名義로 “한시—지”를보내자는意見이滿場一致可決
되나

大阪本部靑年部長李丙謫 民衆新聞社劉宗煥兩氏의「信託統

等以祝辭

一 朝鮮労働組合海員同盟青年部代表 安仁教氏의 말씀이시

二 日本社会党青年部 沢村 一 氏

前議長 沢村 俊氏 南浩榮氏 東京本部 曹善俊氏 河村 本

愛氏 等의 金銀問題 青年部 之 主의 主張 政治問題의 解決 小의

主張 宣言 起草 文을 朗讀 計 與 計

一 世界民主主義 旗幟 萬歲

一 朝鮮完全自主 獨立 萬歲

一 朝鮮青年部 全國大會 萬歲

是 各々 三唱 計 且 議長의 宣言을 依 計 昨 大會 第一 日 是 閉幕 되 與 計

第二日

神 田 共立講堂

議長 開會 是 宣言 計 昨 「國旗의 對 社 願禮」

「解放運動 先覺者」의 對 社 感謝 計 朝鮮完全自主 獨立을 祈願

하는 默想」을 終 後 午 時 起 青年部의 主의 主張 「獨立의 必 然」을

全 員 合 唱 計 且 大會 議事 日程이 次 計

議長의 紹介 至 中央 總本部 副委員長 金正洪氏 登壇 次 各 部 長 氏

人事가 次 計

不 及 의 車 輪을 推 進 計 且 創造 計 是 것은 青年部의 主의 主張 宇宙의 眞

理를 探索 하는 故 也 青年部의 主의 主張 朝鮮 青年의 必 然 民族과

國家의 發展 主의 主張 計 一 國의 興亡 盛衰는 二 人 之 手에 在 乎 青年의

壯如 何 哉 計

維新社二所及青年戰術的青年、勇敢的青年은 그 나라의 자
 랑이며 그 민족의 보배입니다. 이 것이進步的民主主義에立脚
 한民族統一戰線을母體로한新朝鮮建設이라는 커다란任務를雙
 肩하여지고 있는우리朝鮮青年은 世界青年의 한사람으로서 넓은
 度量과寬容性을가지고 나아가지 않으면 안되는覺悟하는바라
 니다. 다음에 崔鎬服君의國際情勢報告(金報 揭載済)이다.
 李錫寅君의祖國情勢報告(正式報告書刊行)가改定後 神奈
 川縣代表員의緊急動議會에서今日成將軍의感謝 및 이 지를
 보내기로滿場一致로可決した後 및 이 지起草委員에서成된
 全國婦女總同盟에 보내는 및 이 지
 마司令部에 보내는 및 이 지

- 22 -

全國農民組合總聯盟에 보내는 것이지
朝鮮共產黨에 보내는 것이지
韓國民主黨에 보내는 것이지
全國青年總同盟에 보내는 것이지
朝鮮共產黨에 보내는 것이지
朝鮮勞動組合全國評議會에 보내는 것이지
人民黨에 보내는 것이지
다들李忠福君의中央總本部經邊報告對今後朝鮮發展의 歷史性을強調한後 人民新聞社의 것이지 朝鮮日報의 것이지
討議事項이 들어간順序대로

從來의 新朝鮮建設

計正漠然히表現 瞬時言辭을清

算하고 世界民主의義勢力이承認하는人民大衆의政治的 經

濟的 社會的 文化的 基本要求을實現케하는眞正民主

의義國家建設이站立한이되있고 原案의至精場二致可決

二 三 相會議의決議의要件

日本帝國主義의殘存勢力의對定的殘滓가아지고 日本의對朝鮮

總自自己能力의對 對은다朝鮮은一個의殖民地位의變遷을

以濃厚한力을 認識한三國이우리民族의最大의害毒인 日本

의帝國主義殘滓勢力을徹底히清除하고 朝鮮으로對한各站列

民主의義國家建設의援助力을對한世界民主의義國의成立을一

貫到底의五項을成하고있다三相會議의進步性을明確히靜靜히把

握하고世界民主의義路線에우리의巨步를옮기다五原案의五項을

畫

食

二時十五分再開

三 青年運動統一問題件

少數는多數의意에從從하는民主의義原則에對한親日派外民

族友近者를除外하고 眞實히團結力을培養하고있다

同時에地方에서는青年의善舉에積極的의努力하기로可決하였다

이문제에對한 青年의警告文을가지고 그외反省을促하고그

支涉員七名을출발케하였다

四 留日國際青年大會開催提議에對한件

世界民主主義青年運動의 潮流外提攜을 同時에 世界弱小民族의 青年과 什은 全을 爲하여 世界平和實現의 進歩를 爲하는 意味로 하여 大會開議를 提唱키로 原案可決

그리고 實施方法上 中央總本部 青年部에 一任

五、春期大運動會開催要請의 附件

原案可決 實施方法 中央總本部 青年部에 一任

地方本部 提出議案

一、青年部 機關紙 附刊의 附件

東京——群馬——

名稱은 「朝鮮青年」으로 하고 敎養向上自由思想普及과 讀書機關의 算을 綜合하여 月刊雜誌形式으로 附刊키로 可決

實施方法

中央總本部 青年部에 一任

二、青年의 緊急技術敎育의 附件

山口

祖國의 産業技術發展에 緊急한 것은 우리들의 技術이다 技術獲得은 青年의 要望이며 中央總本部 青年部에 任하는 이에 背棄되지 않도록 提議하기로 可決

具體的案과 實施方法은 中央總本部 青年部에 一任이며 連青에 關한 交涉員이 對하여 各과 各의 報告가 있었다

우리의 警告文을 全面的으로 否定하고 連青은 如何故事態에 이르더라도 各가지 獨自의 運動計劃이 對하여 朝鮮青年部를 解散하여 連青의 合流計劃과는 鐵面皮의 果斷이 效를 辨하였다

이에 대하여 우리朝鮮青年은勇敢壯志를展開하기로盟誓하고
萬歲를三唱한後 이意義 깊은大會의幕을捲어냈다

以上

外部團體에서바는 "엣세이지" — 四
外部團體에서바는 "엣세이지" — 八

中央人民委員會에보내는 "엣세이지"

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

朝鮮三千萬同胞의 總意로組織된中央人民委員會에 在日本

朝鮮青年數十萬의 이름으로 "엣세이지"를보내게됨을우리는

무엇보다 기뻐하는바이다

朝鮮共和國主義의 存在壓迫과 拷問과 虐殺과

投獄에도不徇하고 壓迫된人民의利益을爲하야 그自由와

權利를爲하야百折不屈의強鐵같은意志와信念으로 싸우시는

여러분께옵서 日本帝國主義가 朝鮮에서물러가게될때

그들을 파野合하여 그부스러기를 주어먹는親日派와民族叛逆者를은
맞이自己네들만이唯一한民衆의指導者然하고 또한新
外來勢力과結托하여既得權日本帝國主義時代을維持하
고伸張할라고 가진惡劣한策動을함에於하여 그者들의頭上에
鐵鞭을나리고오직우리三千萬民衆의基本的要求를實現할수없
는그리고國際的으로正直한政治路線을明確히認識把握하여
우리가指示하신여러분께 우리는滿腔의敬意를表하니이다。
여러분에게는우리는 여러분께우선明示하신 政治路線을
함의제안이가여 우려했거나아갈여고 그은握手와決意를보입
니다。民衆의意思를無視하고民衆의要求를외면하고오직自己네들
의私利私慾에狂奔하고있는親日派와民族叛逆者들은國內에

中央人民委員會 여러분 !!
 여러분의 閣下가 決議한 것을 容易하게 하고
 우리는 實現까지 하도록 하겠습니다

그러나 過去에 如何한 困難이 있어도 우승으로 싸우는 것같이
앞으로 決死의 士로 鬥爭하는 것을 우리는 믿습니다.

그리고 우리는 이 땅에서 우리의 使命이 끝나면 吾祖國에 돌아
가서 이리저리를 돌아볼 것을 約束합니다.

朝鮮完全自主獨立萬歲!

中央人民委員會萬歲!

全國青年總同盟이 보네는 멧세! 저

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

祖國에서 싸우고 處는兄弟들이여! 우리는在日本數十萬

青年를代表하자 兄弟들이여! 멧세! 저를 보네는 것은 無

上의榮光으로 생각하는바이다.

우리는日本帝國主義의植民地政策에抗議하여 靖國

父母이나 族長에게 日本旁觀市場에서 或은苦學하고

或은富하게되자 二重三重의迫害를 받으면서도 오로지

眞實한 自由와 人權을 빼앗기 爲하자 平時나 戰

時에 勇猛하고 平穩히 싸우고 있다. 그리고 天皇制日本의

軍隊가 世界民主主義陣營의 陣門에 無條件으로 屈服하자

우리는 三千万民衆의 完全한 解放과 祖國朝鮮의 完全한 復

讐를 爲하자 在日本朝鮮青年의 戰鬪的意志와 決死的 熱

誠을 朝鮮青年部의 旗號 아래로 集結하고 있다.

그러나 祖國에서 싸우고 있는兄弟들은 우리들보다 더 艱

危險한試驗과 困難한戰爭을 展望하고 있는 것을 確信하고 있다. 그것도 東洋民族이 이 世界의 征服을 占平한 日本帝國主義가 敗戰을 앞두고 朝鮮의 經濟的 文化的 自己施設을 다—破壞하고 있는 事實, 主帝國主義의 野合과 自己民族 中間에 爭鬪着한 農民 一般 勤勞大衆을 壓迫하고는 親日派와 民族叛道者들이 左右하고 所謂 愛國主義者도 假裝하고 政治的 投機事業을 始作하고 眞正한 民族統一을 妨害하고 있는 事實을 아는 民族의 計。 그렇지만 吾兄弟들이 戰力을 더하고 昂揚된 것이요 試練을 受殘한 覺悟에 一層의 主의 精神이 있다. 尙早은 祖國建設의 破石이 되고 獨立國朝鮮의 干城이 屹然하는 時 進步의 이고 戰勝의 이

— 34 —

우리 청년이다. 兄弟들이여! 이 新軍大社使命을 履行하기 爲하야 海内海外에 散居한 青年의 結束을 緊密히 하도 同時에 同志의 立場에서 一致하여 努力하라.

全國婦女總同盟

一九四六年一月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

親善하는 全國婦女 總同盟・會員諸姉妹의
干渉在日本朝鮮人聯盟青年部 全國大會는 茲에 本大會의 決議
를 全日本의 是는 數十萬青年을 代表하여 貴同盟에
對하여 力을 竭하는 是는 無限의 榮光으로 生覺하는 바이다。

우리는改國에 갈다오신特派員의 報告에 의하야 貴國에
 余日의朝鮮이있어民族의 完全解放을爲하야 祖國의
 自主獨立建設을爲하야 一千五百萬 朝鮮婦女의完全解放
 을爲하야 第一線에서 晝夜로猛烈히 奮發히 사
 누고 있는가를 滿腔의好意와 熱狂의拍手로써 듣고 感謝
 한바이다。過去의朝鮮女性은工야匠主 社會最下層의 奴隷
 生活以上으로 悲慘한狀態에 處는것이였다 文化 經濟
 政治 이모든것이 婦女만은 例外的存在로 認識한것
 이 何事의自由로 權利로 賦與하지않았다。오직屈服과順從만
 을强要하였다 그러나 明日의朝鮮은이不合理하고 矛盾點
 은 社會組織을決코 그대도 相違하지는아니된다

萬一全人口의半數를占有한婦女의意思를 無視하고 要求는
 容赦치않은 社會制度라면 그대우리가 부르짖는 眞正한
 民主主義的建設이안있었다
 親愛하는姊妹들이여!

우리民族이建設한自主獨立國家는 眞正한民主主義로써 男
 女平等의基礎위에 立脚한것이아니된다。同時에 이建設에
 는民族叛逆者帝國主義的 親日分子는 一片이라 堪用한
 것은 全然치아니하고우리는日本青年은부르짖는다 바라건대
 改國에서 健闘하는姊妹들이여 우리는 當이丁史가規定한
 路線에서 奮發히 싸워나아가자! 우리는 이異國에서
 千千萬萬民族을壓迫하고 擄取하고 虐殺하고 殺戮한日

本軍... 殘滓를 掃蕩하리라 今日 朝鮮이 必要로 하는
모든 準備을 하고 있다. 우리에게 賦課된 青年의 使命을 遂
行키 爲하야!
最後의 諸姊妹들이 健在健壯을 바라는바이다.

全國農民組合總聯盟이 보내는 "렛서"이다.

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

過去를 돌아볼때에 우리나라農民의 境遇는 너무나 寒心하게 되고
그 生活은 참으로 悲慘하였다. 二億三萬의 搾取와 壓迫 밑에서
오늘까지 죽지 않고 살아온 것이 可謂奇蹟이라 할 수 있겠다.

지난十余年間의 統計를 분석하여 보자. 年々 六百萬石乃至八百
萬石의 우리農民의 피압으로 剝奪은 日本으로 가져갈 때에 朝
鮮에서 食料實收을 잃고 남은 곡식이 겨우 日本에서 一
년에 每入 平均을 消費가 一石四斗乃至一石一斗二斗이었는데
朝鮮사람은 不過四斗三升이었는데 그 얼마나 充足한 것을 充分利
고 그날 / 을 눈물로 삼아왔는가를 平父보다도 雄辯으로
証明하는 것이 아니냐.

朝鮮農民의 旺盛한 勤勞精神과 勞動力은 吾國에서 너무나 廣
民에게 比하야도 뒤떨어지는 事實이며 五斗乃至一斗은 土價로 나
受得으나 어는 나라 土地보다도 肥沃치 못하고 불수는 穀을
짓는다. 그런데 우리農民은 飢饉饉工에서 彷徨하지

한편으로는日本帝國主義強盜政策이 土地와 肥料와 資金과 科學技術을全部强奪한뿐만 아니라 日本帝國主義와 結託하여 그庇護下에서 自己의利益만을 擁護하여는 親日派資本家와 地主等民族叛逆者들의 暴壓로 高利貸金과 封建的小作料로 農民의全膏血을吮吸하여가며 朝鮮農村은 世界第一의 荒蕪地가 되어버린 것이다.
우리靑年의 피눈 이를생각할때에 痛憤의熱情이 끓어오르며 우리강토다시 이러한 慘酷한境遇에 빠지는 일을포함하여 再建의全心全力を써祖國의建設에바치고자하는바이며 再建되는祖國은반드시 民主主義民族統一戰線의基硯이될 政

府라야만이 우리앞에놓여있는모든課題를遂行할수있다고 確證하며 在內在外全同胞가 한 덩어리가되야 이를爲하야 싸우기를要望하야마지않는바이다.

朝鮮의解放은 農民의解放으로서完成되며 農民의解放은 土地問題를徹底히 解決하여야만達成될수있다.

그럼으로祖國再建의大史的實踐에獻身的으로 꾸준히活動하야고있는全農民兄弟姉妹의政見에對하야無限한 感謝를들리며 一層奮闘을切望하는바이다.

끝

朝鮮 勞働組合全國評議會에 보내는 "메시지"

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

敬愛하는 동료들이여! 우리日本川居留하는全青年을 朝鮮
駐在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會는 祖國建設의 前衛隊
이요 人類解放戰線의 尖兵이신 朝鮮勞働組合全國評議會 동
무들에게 메시지를 올리게 되었을 無上의 榮光으로
기노바합니다.

敬愛하는 동료들이시여!

저無知惡毒한 日本帝國主義의 侵略으로困하여 우리의
祖國을 빼앗기고 살권없이 농민의勞働市場으로 팔려온

우리들의 過去를 回顧하면 구아만는 파누물이나오며
생가편리고 이가잡리는바입니다 지난여 1년은 구만두
고라도 농민외最後殘忍이었던 第二次世界戰爭이 開始된
後로 우리들의 동료들의 구아만는 농민의 毒牙에 물려
넘어졌습니까?

強制募集 徵用 高勞報國隊等의 名目으로 우리들의 형남
과동생들이 얼마나 피를 흘렸습니까?

或은 논에서 풀을 뜯다가 농민의 지대를 짓고 나무를 하
가 농민밭에 잡에서 잡을 자다가 甚至於 結營式場 葬
事지내는 끝에서까지 墳히에서 山을 고 물살은 工場에서
석어가는 쿠마밭 한여이리로 겨우 毒舌을 保存하여가며

신도 못하고. 맨날로놈들의. 폭독한. 해수면에서. 퍼러지는
爆彈을. 이리저리. 피하다가. 우리들의. 解放의날을. 연마
나. 기다렸습니까?

그러나. 이때에도. 우리들의. 피를. 빼고. 우리들의. 살을
조르며. 朝鮮사람이. 많. 잊었던것을. 우리는. 잘압니다.
거평하. 朝鮮사람이. 많. 잊었던것을. 우리는. 잘압니다.
들이. 잊었다는것을. 우리는. 잘압니다. 우리들을. 죽을. 전로
指針하러. 그놈들이. 또다시. 新朝鮮建設의. 指針者가
되었다는. 그目的이. 어디있는.가를. 우리는. 잘압니다.
우리日本에. 있는. 青年들은. 이러한. 民族叛逆者와. 親日派
들의. 挑戰에. 決死的으로. 싸울.것을. 맹세하는.바입니다. 解放

戰線의. 指針階級인. 勞働者들의. 總集結體인. 全評의. 活動
과. 斗争을. 말리서. 事發하는. 同時에. 머. 지않은. 將來에. 우리
를. 故國의. 優秀한. 勞働者로서. 戰線에. 參加할.것을. 맹세
합니다.

新朝鮮建設以前衛勞働者萬歲!、 朝鮮人民共和國萬歲!、
朝鮮勞働組合全國評議會만세!

人民黨에 보내는. 메세지

一九四六年. 二月. 二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

敬愛하는. 人民黨諸兄들아!!

在日本全朝鮮青年의總意를代表한本大會는新朝鮮建設에糧食을忘却하고晝夜勇闘하는諸兄들에게“맛세이지”를올리게된이날을無限한榮光과기쁨으로生寔하는바입니다。

尸史의必然性으로써第二次世界大戰이軍用“攻守”陣營의敗北으로終結되며나라를잃은우리朝鮮民族에게도自由解放의光明이放射하기始作하였읍니다。

過去半世紀間의言語道斷한우리民族의屈辱史는여기에다시거듭하지않습니다。

自主獨立과完全解放이우리에게約束되었다할지라도우리에게約束되었다할지라도우리와의외靈魂을賣賤함기여私慾을滿足하기려는親日派들과“愛國”이라는言辭를無責任

하네먼지여우리三千萬民族을또다시또다지같은資本家大地主의奴隸로變하며말야고人面獸心의民族及逆者들을다시古蘇生치못하게徹底히撲滅치안하면우리의完全獨立은願像도물할것입니다

이러한怪物이蠢動하는現實界에서우리三千萬民族을참으로사랑하고참다를幸福을위하야起人的으로前爭하는諸兄들대最大의敬意와感謝를表하나이다

親愛하는人民黨諸兄

諸兄들이理想貫徹의堅은前途多難하며遙遠하다할지라도正義의立脚하여進歩의民主主義朝鮮의完成을期하는諸兄들이實踐力에는반드시아름다운結實이있을것입니다

다

海外에 있는朝鮮青年의一部은 우리로서도全力을 다하여諸兄들
의勸이로인하여健全한祖國建設에猛進할것을固히誓言한다
民主主義民族統一戰線萬歲!

人民黨萬歲!

朝鮮共產黨에 보내는 "뜻서"지

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟青年部全國大會

在日本朝鮮青年全國大會는 數十萬의 在留青年을 代表하
야 우리三千萬民族을爲하여 가장犧牲的으로 싸워주는

朝鮮共產黨에게 "뜻서"지"를 보내게된것은 無上의榮光
으로 生榮하나이다. 우리들은 따뜻한 三千里江山에
살고있는것이 異域땅 日本勞働市場에 팔리나와서 나라
의恥辱을 당하고 배고픈 苦難을 가감이지지도록 骨수히
싸워야만 했습니다.

長久한 半世紀동안 朝鮮民族을掠奪하는 海賊같은日本帝國
國主義者는 聯合軍에 屈服하고 "뜻당" 宣言에依하여
우리民族에게 自由와 獨立과 解放의約束되었지만지라도
새로운 支配者와 結伴하여過去의日本帝國主義者의 代表
하여 우리民族을掠奪하려는 民族叛逆者 親日派 資本主
義者들이 跳梁하고 있는事實을 우리들도 確證하고있습니다

다.

이러한 자들이 민주主義外 朝鮮獨立을 云々하는 美名의 看板을 걸어 아무런 價値도 大衆은 總對로 그 에 속지. 踏을 것이라 우리들도 總對로 그 외 欺瞞에 속지 踏을 것을 斷言하나이다.

同時에 우리들은 過去數十年동안 所暴虐한 日本帝國主義 者의 鐵鎚아래 殘虐無道한 惡刑을 當하되서 三 五 連年은 우리民族의 利益과 幸福을 爲하야 사위온 朝鮮共產黨과 그偉大한 指導者諸氏에 對하야 滿腔의 敬意를 表하는 同時에 日本에 在留하는 우리靑年들도 同志들과 協力하야 우리朝鮮의 完全自主獨立과 三千万民族의 完全解放과

— 50 —

進步의 民主主義 朝鮮建設에 戰闘하는 一部隊이 된 것을

盟誓하나이다.

最後로 吾等은 外 僑胞을 아울러 바라나이다.

朝鮮民族完全解放萬歲!

朝鮮共產黨萬歲!

朝鮮完全自主獨立萬歲!

韓國民主黨에 對한 警告文

一九四六年二月二十日

在日本朝鮮人聯盟靑年部全國大會

에서 是일, 是처에서 韓國民主黨이라는 看板을 掛아 立

朝鮮의 完全 獨立과 民主의 義 朝鮮을 建設 하겠다는 努力은 感謝 한다 이다. 그러나 何 處 是 哭 이 否 耶 그 獨立을 完成 하 고 그 民主의 義를 實施 하려 하는 否 耶
여러 點은 朝鮮의 獨立을 云々 하 唯 日本 帝國主義와 殘虐 勢力과 結託 하 軍政과 人民과 的 事 이 離 間 하 中傷 하고 있 지 않 가 民主의 義를 云々 하 唯 國內의 二 三 勞働者와 農民의 政黨인 共產黨을 反對 하 國 體의 二 三 進步의 民主의 義 國家인 生 財 忌 避 하고 있는 가
여러 點은 이 三 十 萬 人 民의 總 意를 代表 하 或 立 民 人 民 共和國과 對 立 하고 海外에 서 도 金 九 氏 一 派와 握 手 하 民族의 分裂을 策 하 人 民의 意志를 無 視 하는 것은

明白히 交 動 이 至 二 三 意 味 하 民族 叛 逆 者 이 라 하 지 않 을 수 있 다

우 리 는 日本에 對 하 帝國主義 勢力과 直接 對 抗 하 在 留 同胞의 利益을 爲 하 決 死 的 으로 싸 우 고 있 는 在 日 本 朝鮮人 聯 盟 青年 部 全 國 大 會의 名義로 嚴 肅히 韓 國 民 主 義와 友 善 性과 非 民主의 義 性을 天 下에 暴露 하 二 三 猛 省을 警 告 하 二 三

MESSAGE

To His Excellency General Douglas MacArthur.

Your Excellency, We, the 400 representatives of 300,000 Korean people living in Japan ~~heretofore~~ express our gratitude that your Excellency, the Supreme Commander for the Allied Occupation Forces has won victory in the Pacific War for democracy and elimination of all imperialistic and feudalistic barriers in order to rescue the oppressed and appreciate for your administration over Japan and other areas concerned and in establishing democratic trend in the Orient.

The Japanese bureaucracy is enjoying the democracy all the time but is striving to maintain their position

and privileges and is making conventional discrimination against Koreans in the fields such as justice procedure, economic activity and of freedom of residence.

In Korea, the problem pertaining to the North is degree of latitude is not yet solved and general financial and political chaos by those persons who have had close connection with the Japanese imperialism are still continuing their activities against Koreans in general. And we have, under such a situation, no way to find any occupation to work. When we return home to engage in productive works.

We complain against the Democratic Party of Korea!

(Hankook Mingtang) who are in reality not democratic but incidentally wish to establish a real democratic government thereby to make our thirty million people happier and live a more stabilized life, who had been suffering under the Japanese imperialism for more than thirty years.

We hereby ask for your special consideration and extension concerning above problems.

Wishing you Excellency's health and welfare.

Tokyo, February 20th, 1948.

YOUNGMEN'S MEETING OF THE
LEAGUE OF KOREANS RESIDING IN JAPAN

외부에서 받은 메시지

朝鮮靑年大會에 보내는 메시지

朝鮮靑年大會에 보내는 메시지
朝鮮靑年大會에 보내는 메시지
보내게 된 것은 영광으로 생감하는 바이다. 그리고 朝鮮靑年으로서
서 이와 같은 한가리에 모혀서 각자가 가지고 있는理想과抱負를
서로 나누어 교환하는機會를 가지게 된 것도 實로意義있는 일이라
고 본다. 사랑하는靑年들이여! 이러한榮光과 이러한意
義를 八月十五日前에期待하고 있는사람이果然 누구인가?
아! 새로운祖國을建設하려는意氣와 熱情에 끓는靑年들이여!
諸君들은 저! 日本帝國主義의暴虐하 植民地政策앞에서

모든 자유는拘束을 받고 青年의 特權은 상실되지 못하고 있다
世界의 眞理를 알고 저하는 諸君에게 그들이 가르킨 것은 無
意味한 忠告의 口의 眞民精神이 있고 조선 青年으로서 이 世
界에 보히려고 하는 諸君에게 그들은 半島出身이 아니라
그들로써 民族性을 模倣함이 지났든가 그뿐 아니라 7 8 에
급주리고 있는 青年에게 준 것은 소르르 強制徵用과 低廉한 賃金이
있고 自由를 부르짖는 青年에게 준 것은 다만 檢束과 刑罰과 刑
罰의 殺傷에 지나지 못하였다 그러나 朝鮮 青年의 精神은 決코 消
滅되지 않았고 朝鮮 青年의 意氣는 沮喪되지 않았다 日本帝國
主義의 征服되어 있던 時代에도 最後의 瞬間까지라도 眞正의
侵略戰爭에 反對하고 帝國主義日本의 打倒를 부르짖는 者는 進歩

的 朝鮮 青年이 있고 朝鮮이 解放된 오늘날에 있어서 祖國의 完全
自主獨立과 世界의 가장 進歩的 民主主義國家로서의 新朝鮮
을 建設하라고 싸우는 者도 亦是 進歩的 朝鮮 青年이다 青年들이
여기 그 精神을 繼承해야 더욱 더 굳게 하고 그 意氣는 本바
다 어디까지든지 高揚하라 今日부터 世界는 青年 諸君의 治舞
臺이다 踴躍하라 하든더욱 하든더욱 踴躍하라 그러지 않으면
도변서 뒤떨어진 祖國 朝鮮의 經濟와 文化를 世界 先進國의 水準
을 뛰어넘어가야만 가능한 朝鮮 青年의 眞價는 비로서 全世界
에 나타나리라 사랑하는 朝鮮 青年들아 世界는 只今 進歩的 民
主主義의 마라톤을 하고 있다 만주 獨逸 伯林에서 舉行한 國
際 "올림피아"大會에서 長距離 "마라톤" 競走의 第一先算

으로 드러온 사람은 누구였는가. 그리고僅少한差로 第三等으로 드러온者は 누구였는가? 朝鮮의進歩的治勢的青年이며 諸君들은 다 1 같이 孫君과 南君의精進을가지고있을 것이다. 自覺하라 奮起하라 1. 그리하여 諸君이 이미 出版한 世界進歩的民主主義實現競爭에 名譽의 月桂冠을 獲得하는 날까지는 七類八起의精神으로 싸우고 또 싸워야 한다

사랑하는 青年들이여 1. 沈着한態度와 熱烈한研究心을가지라. 그리하여 進歩的民主主義란 무엇인가를알기爲하여 社會科學을研究하여 機械文明의 原理와 技術을배우기爲하여 自然科學에趣味을가지라. 時代는科學萬能의時代이다. 그러므로 發明과 發見을爲主하는科學技術의領域에있어서도 朝鮮青年

은 世界의 支配者"이 되지않고 변하여 패자이다. 끝으로 사랑 하는 우리의 青年은 理論과 實踐의一致點에그性格을두어야 한다. 는것을特히力說하면 諸君의 健闘를祝하는바이다.

一九四六年二月二十日

朝鮮民衆新聞社

祝 辭

弱小民族解放을爲한第二次世界大戰은聯合國의壓倒的勝利에
依하여드디어日本帝國主義는敗滅하고朝鮮三千里江山坊々
谷々에서解放의무령한鐘소리가물리여三千万同胞는이러저다
씩々하게도우리靑年들은正當한路線에서勤勞大衆을봉호하
는政府樹立에이바지하여완성되었다

本國에勤勞大衆은부르짖고있다
“살과나무를保障하여주는政府를樹立하라”親愛하는靑
年동무들이여어리들들미여本國에一部政治家를보라。
最高指導者라고自認하는李承晚博士는歸國以後無條件民族

統一을主唱하여其後이무슨成果를보았는가國民이絶對期待
를하얏든臨時政府金九主席은무엇을하얏는가”

八一五解放以後半一年이지났으나이와같은一介의政治부로
“카”의조랑보로잡이얏다本國에있어서는아주政府의樹
立을보지못하고混沌한狀態에있는이때海外에게인同胞의中
堅인靑年들이러동무들게서今日씩々하게도全國靑年大會를開
催하게되었으니이얼마나반가운일이아닐까。

國家過渡期인現在靑年大會를開催하는意義는자못重大하여아
를러靑年들이러동무들의責任이一層더加重하였음은느낄때本
國에있는우리海員同盟靑年部로서는今日大會의成果의兩手를
높이드러感祝하야마지않는바이다오늘在日靑年들이러동무

들이 活動을 目前에 붙매 本國에서 일하는 諸君의 期待에 이그러
지나 않도록 青年동맹들의 活動이 本國에 미치는 影響은 크다
고 본다.

青年동맹들이여 오늘이 意義 깊은 青年大會를 契機로 앞길에
서로는 情熱을 가지고 一層더奮發하여 主권을 確히 하고 統緒를
끝마친다

西紀一九四六年二月二十日

朝鮮労働組合全國評議會

朝鮮海員同盟青年部

メッセーヂ

本日此処に親愛なる隣邦の青年諸君が 自由なる結集をな
されたことに対し、衷心より御祝ひの言葉を述べんとする
ものであります。

古来 吾々の祖先と、諸君の祖先とは、素朴なる友情のき
づなの上に立ち、共にアジアの東端に在せる隣人愛を携
え、その文化を交流し來つたものであります。然るに近年
に至り、吾が日本を今日の悲惨なる状態に叩き落した所の
その同じ軍閥、官僚どもは、諸君の上に帝國主義的權威を
築き、恰も君臨する王者の如き、狂態を呈するに至り、

此処に美しき友情のきづなは絶えて、呪はるゝ者との関係に陥り、斯くて今日の境況に直面するに至つたのであります。

然し乍ら諸君、諸君の怒み、且呪ふた所のものは、吾等も亦能く骨髓に徹したものであります。今や諸君がその若き力と情熱とを打ち込んで輝しき独立国家朝鮮の建設に邁進せられつゝあるが如くに、吾等日本の青年も、亦、混乱と飢荒の中から起ち上り、虚偽と覆滅なき新生日本創造の爲に、民主と義革命を闘ひつゝあります。

吾等青年の明日は極めて輝しきものありとは雖も、諸君の道も、将来に多くの障礙は立ち塞つて居ります。之を打破し撃滅して進む時、そこには、君等も、僕等も同じ境況にみけ

る。新なる朝鮮と、日本を見るのであります。吾等は断じまして、スクラムを組んで帝国主義的、諸々の陰謀と闘はなければならぬ。

可憐國の労働者よ、団結せよ。』との金言は、今や可憐國の青年よ、団結せよ。』の言葉に成長せらるべきであると思ひます。時に民族解放の爲に最小必要を有つた国々の青年は、深き友愛のきづなの上に燃ゆるが如き剛魂をもつて、団結すべきであります。微力ではありますが、人民解放を我々の若き手に依つて闘ひつゝある。日本の青年として出来得る限り、諸君の光榮ある独立国家建設に對して、協力せんことを誓ふものであります。而して諸君も亦吾等の革命進行に對し心からなる

御援助を期待するものであります。

甚だ簡單ではありますが一言以て御挨拶にかへ諸君の今後
に於ける活潑なる運動を御祈り致します。

昭和二十一年二月二十日

日本社会党 青年部

メッセージ

ここにかくも盛大な 朝鮮人聯盟青年部大会を開催されたこ
とに對して日本青年共産同盟は衷心より お祝ひ申し上げます
又上未曾有の惨禍たる第二次世界大戦の終結と共に
日本帝國主義の滅亡の中から 輝ける新興民主主義の国 東
亞に於ける 最初の人民國家 独立の朝鮮が生長しつゝあ
ります。思へば一八九四年 当時既に軍國主義的 侵略主義
的性格を明白に露呈しはじめた 天皇制日本の國家権力
は最初の侵略戦争の手を朝鮮にのばしはじめたのであります
朝鮮の民衆は 日本帝國主義の最初の犠牲者として、即ち

第一に天皇政府の暴慢の野心的目的物として、又新たに日本の支配権力の一部を占め始めた。日本資本家、大資本家の開拓市場として、原料市場として、更に又植民地の低廉なる賃金、労働力の豊富なプールとして日本帝国主義の實體を身をもたせしめられたのであります。

日本の軍隊は最初に朝鮮に進出した。同時に又、朝鮮民族こそ、最初に日本の支配権力の暴虐を味はつたのであります。そして又、その故に、朝鮮民族にも、日本の帝国主義に対する最初の闘争に起ち上つたのであります。以来実に半世紀の間一瞬も止まらなかつた。朝鮮独立、民族解放のための英雄的な努力と戦争とが朝鮮の内部に於て、又國外に於て、或

いは日本内地に於て幾千幾万の無数の人々によつて続けられたことを我々はよく知つて居ます。

今や、世界の民主主義勢力の、結集された力、聯合軍の強大な力によつて、ファシズムドイツと帝国主義の日本は打倒された。

日本の軍隊は消滅した。日本の警察力はなくなつた。軍事的、警察的、天皇制政府の圧力は朝鮮より取り除かれた。やこに見よ、朝鮮民族の半世紀にわたつて蓄えられた力が、急激な勢を以て成長しつゝあるではありませんか。

独立の朝鮮は、今や、朝鮮民族の自からの力によつて、急速に成長しつゝある。独立の朝鮮は世界でも最も進歩する民主

主たる義的な、東亞の先進国として生長しつつある。本日のかゝる盛大な集会も又かゝる事實のあらはれてなくでなくでなくでありますか。この時に當つて我々日本の青年は朝鮮の青年諸君に申し上げなければなりません。過去半世紀にわたつて、朝鮮民族を弾圧したうは日本つ、権力であり、日本の天皇制であつた事は事實であり、明白であつたとしても、それが、我々日本人民からその責任を取り除くものでは決してありません。日本人のすべては、朝鮮民族の半世紀の苦しみに対して責任があります。

事實に於て日本の青年は日本軍隊として朝鮮を征服したのであり、朝鮮の民衆を虐げました。

朝鮮の青年諸君！

我々は半世紀の間君達を苦しめ君達を虐げてきました。

我々は朝鮮の諸君におはぶしななければなりません。

日本民族は朝鮮民族に対して謝罪しなければなりません。

ですが、こゝで言ふ一片の口頭の謝罪が果して本当のおわびになるのでしょうか。

朝鮮の諸君！

君達を苦しめてきた、日本帝國主義、血に飢えた、反動的天皇制政府は依然として、日本民衆の上に存在してゐるのであ

ります

このやうな天皇制の下に日本の人民が朝鮮の人民に新罪する

ことを許されませうか

このやうな天皇制の下にあつて日本人の狭小な民族的偏見

を打ち直すことが出来ませうか

天皇制の反動教育は依然としてこの機能を果たしてゐるので

あります。我々は朝鮮の諸君に対する責任を支拂ふためにもど

うしても現在の天皇制權力を打倒しなければならぬのであ

ります

先に私は日本帝国主義の最初の犠牲者は朝鮮人民であると

申し上げました。ですから諸君！朝鮮へ侵出する以前に既に

日本の天皇制は一切の手緩を以て日本の民衆を惨たんとする
奴隷的状态にまで追ひこんでゐるのであります

ア史に於てその鉄の如き法則が存在してゐるそれはなにか国内に於て專制と暴圧の政府は国外に對
して侵略戦争をはじめ近代帝國主義の特長であります

ナチス、ドイツ、シカゴ、フランス、イタリア、レガリ、更に

日本帝國主義こそ、その最もいい例を示してゐるのではあり
ませうか

日本民族をして朝鮮の民衆を、全東亞の民衆を壓伏せんと試
みさせた。天皇制權力は同時に又日本の人民に於て絶

對にゆるすことの出来な存在であります

しかもその財源——地金——官條的天皇制のカイライたる現在

の日本政府は依然として日本の民衆に弾圧を加へようとする

だけである。日本の民主主義勢力を圧伏しようとするだけでなく当然彼政府の責任を以て果すべき在日朝鮮人に対する生活保護、帰国促進に何等の見るべき誠意を示さないのであります。今回ツシテハラ内閣のとれるモラトリアム政策は、一体何を示してゐるのでありませうか。

インフレ低止、物価安定を目的とするとは言ふべからず、資本家階級には大きな又ケ孔を残しておき、生産に対しては、何等打つべき手を打たず、實は、労働大衆の犠牲によつて、我々民衆の飢餓によつて政府を糊塗せんとする、反動的態度四一拜に

これが、労働組合運動の債上げ闘争、生産管理を全面的に圧殺してしまはうとする。

我々民衆に対する眞何からの挑戦的、挑発的、政策であります。す、一体従来、の失業者、小商人、数百万をかぞへる失業者はどのうなるのでしようか。モラトリアムによつて最も打撃をうけるのはこの小さなブローカーたちとであり、しかも、その復讐が、又ハ生活の保護は何もないのであります。

これは当面の問題でもあり、又根本的な問題であります。我々は数百万の失業者をいかにすべきかの問題の前に立つてゐる。

朝鮮人諸君も、当面の生活の問題につき當つてゐる。

諸君 問題は非常にはっきりしてゐる 即ち
「中世紀にわたつて 朝鮮民族と 日本の民衆を暴圧し 搾
取してきた 天皇制権力は 未だに存在し しかも 現在も
尚 日本の民衆と 在日朝鮮人に暴慢なる 攻撃を行つてゐ
る

我々は我々の故力の二に立つ大衆的抗争により 現在の政府
を打倒し我々の生活をかちとらなければならぬ
我々の生活を脅かし 我々を飢えさせようとする敵は同一で
はなつてしまふか
ともあれ 偉大なる世紀が開けようとしてゐる
民主主義と平和の新らしい世紀が 明けようとしてゐる

朝鮮民族は輝かしい 独立国家の再建に着手してゐる
日本の人民は 人民の生活をかちとるための戦争に赴きよつ
た 東アジアには 進歩と平和と民主主義の偉大なる
旗がまき起つてゐる 洋々たる未来 しかもその未来こそ
青年のものである

青年こそ 新しき世紀の先頭に立つてゐる

朝鮮の青年諸君！ 君達はこのやうにすばらしく前進し
てゐる 日本の青年も又 今後諸君に劣らず 前進するので
ありませう 共に互提携し協力して 新しき時代をかちとり
うではありませんか、簡單ではありませんが祝辭にかへます
一九四六年二月十日

青年共産同盟

メツセルダ

親愛ナル朝鮮ノ青年男女諸君 諸君ハ永イ間 日本帝國主義
ニツテ起テノ彈圧被取ヲ受ケテ来タ 更ニ戰爭中ハ大猶同
様ニ前線ニ鉤山ニ或ハ工場ニ無理矢張取込マレ 幾多ノ青年
ヲ死ト飢エニ陥シ入レタ。コノ暴虐無類ノ天皇制支配ノ一大
支極タル軍府ハ「聯合軍ニヨツテ粉砕サレ日本ノ人民ノ民主
主義解放ヘノ途カ開カレルト夫ニ朝鮮民族ノ独立ガ決定サレ
タ。

親愛ナル朝鮮ノ青年諸君 日本ノ遅レタ人民ノ一部ニハ未ダ
朝鮮民族ニ對シテ偏見ヲ抱イテ居リ ソノタメ朝鮮ノ諸君ニ

不満ト反感ヲ抱カシメテ居ルコトヲ吾々ハヨク知ツテ居ル
賢明ナル諸君ヨリ コノ誤レル日本ノ人民態度ハ日本帝國主
義者ノ排外思想暨其ノ影響デアリ 斯ジテ日本ノ人民ノ本質デハ
ナイ。天皇ヲ先頭トスル軍國官僚ト地主財閥ノ反動支配ハ日
本ノ人民ト朝鮮民族ノ共同ノ敵デアル シカモコノ共通ノ敵
ハ未ダ支配者ノ位置ニ居据ツテ居ル コノ天皇制反動勢力ガ
完全ニ打倒サレナイナラバ 朝鮮ノ独立ニ對シテモ 一大支
障ヲ来タスモノデアル コノ共通ノ敵ニ對スル闘争ニ反帝國
主義民族革命ノ熱意ニ燃エル朝鮮青年ノ参加ヲ日本ノ人民ハ
絶大ナル期待ヲ抱イテ居ル

親愛ナル朝鮮ノ青年諸君 今マ朝鮮ニ於ケル 帝國主義ノ種

ソノ手先共ハ一掃サレ自由ナリ獨立朝鮮が樹立セ
至ツタ。諸君未末ハ輝カシキモノデアル。諸君等ノ
ヲ以テ一切ノ反動勢力ヲ粉碎スルト夫ニ諸君ノ向學
ノ工業 農業ノ飛表ノタメニ矢クベカラザルモノア
ト 勉學が諸君ノ任務デアル在日本朝鮮人聯盟青年
大会萬歲!!

萬歲!!

年二月二十日

人民新聞社

文化部出版案内

一 初等國語読本 上巻

近刊

中巻

下巻

一 朝鮮の歴史 上巻

下巻

一 朝鮮の朝鮮地理

一 理科読本

一 算術読本 上巻

中巻

一 算術・読本 下巻 近刊

一 唱歌集

一 四國教本

一 公民教本

雜誌 朝鮮文化創刊号

資料集

一 朝鮮青年總同盟大会之議錄 三〇〇

二 全國農民組合總聯盟大会之議錄 三〇〇

三 全國婦女總同盟大会 三〇〇

四 人民共和國中央人民委員會 三〇〇

五 朝鮮労働組合全國評議會大会錄 七〇〇

大全農附錄

七三一運動略史 二〇〇

朝鮮資料集

一 本國特派員報告 (日誌) 五〇〇

二 (情勢報告) 二〇〇

敵材

朝鮮工業 下巻 九〇〇

在日本朝鮮人聯盟中央總本部

文化部 白

